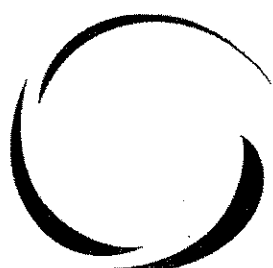

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

藤波孝生 (元内閣官房長官)

オーラル・ヒストリー



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

C.O.E.オーラル・研究プロジェクト 藤波孝生 オーラルヒストリー

目次

藤波孝生 略歴	6
【第1回】	9
伊勢の和菓子屋に生まれる	11
少年時代、野球部に所属	12
俳人として	13
早大の雄弁会に入る	15
大学での勉学	17
帰郷して和菓子屋を継ぐ	19
夫人のこと	21
青年団から県会議員へ	22
浜地文平について	23
衆議院選へ初出馬	25
国会議員となる	27
「拓世会」の人々	28
森清派について	29
文教族として	30
竹下登について	31
【第2回】	33
小学校時代の先生	35
高校の野球部で	36
早大で影響を受けた人々	37
「嫁の基準」	38

小泉大志命のこと	38
神道政治連盟について	39
科学技術政務次官に就任	40
本会議進行係を務める	43
自民党水産部会との関わり	44
文教族としての経験	45
奥野誠亮氏について	46
「神風館」二十世宗匠となる	47
大平正芳のこと	49
政治工学研究所の座長となる	50
榎枝元文氏について	52
文部大臣永井道雄のことなど	52
【第3回】	55
私学助成について	57
文教族について	59
学校主任制度について	61
新自由クラブ結成	63
中曽根氏と河野氏	65
新生クラブについて	66
河野洋平氏との関係	68
新生協議会の運営について	69
福田内閣のころ	71
派閥と選挙資金	72
「ふじなみレポート」について	73
検察の押収物	75
漁港整備に関与	76
純粹の支持者	77
支持団体のこと	79

【第4回】

ロッキード事件について 81

三木内閣から福田内閣へ 83

社会党との関係 84

新生クラブ発足 85

自民党の近代化 86

党員拡大について 88

派閥と各議員の関係 89

新生クラブの「改革案」、朝食会のことなど 91

記者との関係 94

後援会や県連、県会議員との関係 95

議員の人材 97

戦後体制見直しの柱 99

臨教審と四六答申 100

海部文部大臣のことなど 101

福田内閣の政策など 102

福田と大平をめぐって 103

政調副会長に就任 105

..... 107

【第5回】

新生クラブの意義、党内の序列 109

大平、福田との関係 111

牛尾治朗について 112

大平内閣の政策研究会と新生クラブ 113

政調会と政調審議会 115

北方領土問題等外交問題との関わり 117

新生クラブの訪中団 119

大平内閣期の政局と新生クラブのメンバー 120

..... 122

新しい文化創造と地方 124

四十日抗争のころ 126

中曽根派内部の動き 129

労働大臣に就任 131

労働省関係の人々 132

【第6回】

労働界との接点 135

前大臣からの引継 137

労働関係の与野党議員 139

ジャーナリストとの関係 140

高齢者問題への取組み 142

自民党と労働組合 143

大平内閣不信任案成立 146

鈴木内閣の成立、党副幹事長に就任 148

伊東外務大臣の辞任 151

憲法、靖国神社のことなど 152

アメリカ訪問の目的 154

中曽根内閣へむけて、田中角栄との関係 155

..... 159

【第7回】

政策研究院発足時のこと 161

行政改革について 163

官僚主義の今昔 165

義務教育制度廃止論 167

瀬島龍三氏らとの関係 168

中曽根内閣成立に尽力 169

中曽根内閣の組閣 172

官房副長官に就任 174

アメリカとの関係修復	176
中川一郎の死	179
訪韓の事情、安岡正篤氏のこと	181
外務省と中曽根内閣	182
首相訪米の随行者	184

【第8回】

牛肉・オレンジ問題	189
「文化と教育に関する懇談会」について	190
懇談会、審議会のこと	193
二階堂進、規制緩和等について	196
ロッキード事件、田中角栄氏の裁判	197
日米防衛協力について	199
土光敏夫と行革審、国鉄改革	200
ASEAN訪問	202
ウイリアムズバーグ・サミット	203
中曽根・石橋論争、施政方針演説について	206
各国首脳の訪日	208
解散、総選挙	210
中曽根氏統投、組閣へ	211

【第9回】

中曽根内閣と岸信介、田中六助	217
第二次中曽根内閣の組閣	218
官房長官の職務	219
官房機密費	222
調整役としての官房長官	224
靖国神社参拝と懇談会	226
第二次中曽根内閣の三大改革目標	229

経済問題への対処	231
日中関係、中曽根氏と中国首脳の関係など	233
全斗煥大統領の来日と日韓関係	234
社会党幹部らとの関係	237
自民・民社連立の動きと二階堂氏擁立問題	239

【第10回】

官房長官と国会運営	243
中曽根氏総裁再選、竹下・金丸両氏との関係	246
反中曽根派と党の長老たち	249
第二次中曽根改造内閣の人事	250
宮内庁改革を考える	251
創政会について	254
衆議院議長に坂田道太氏が就任	256
加藤紘一氏のこと	259
日米関係について、アメリカとの人脈	260
松永信雄氏の駐米大使就任、国鉄改革等	261
防衛費1%問題など	263

【第11回】

青年団の思想と政治哲学	267
「政敵」について	270
世代交代の空気	271
内閣官房のメンバー	273
売上税と防衛費問題	274
国対委員長に就任	276
自民党における国対委員長	279
チェルネンコの氏、中曽根氏がゴルバチョフ氏との会談	281
中曽根氏の外交姿勢	273

官房長官と外交 285
 貿易摩擦対策、対外経済推進本部の設置 286

【第12回】

議員バッジについて 291
 教育、三公社改革 292
 「長寿社会」対策 295
 靖国神社公式参拝への道程 296
 三木派との関係 298
 官房長官と危機管理 299
 防衛費問題への関与 300
 記念式典の開催 302
 官房長官の交代 305
 昭和六十一年衆参同日選挙 306
 選挙区、定数は正問題 308
 新自由クラブ解党 311
 皇室問題懇話会の会長に就任 312

【第13回】

政界引退後、地盤の継承について 315
 売上税問題 318
 消費税導入反対運動 320
 新派閥の発足 323
 中曽根総理の後継に竹下氏が指名される 324
 中曽根派事務総長に就任 326
 事務総長の役割 327
 中曽根派の後継、派閥と選挙 329
 安全保障調査会会長となる 332
 防衛費増額に尽力 333

リクルート事件のこと 335

【第14回】

リクルート事件の公判 341
 ニューカレドニアへ行く 343
 判決確定後の決意 345
 政治家としての四十年を振り返って ①政治生活「一回り」 347
 政治家としての四十年を振り返って ②小泉太志命と浜地文平 350
 政治家としての四十年を振り返って ③新聞記者との座談会 351
 政治家としての四十年を振り返って ④政治生活に悔いなし 352
 資料編 355
 あとがき 374

藤波孝生（ふじなみ たかお）略歴

生年月日 昭和七（一九三二）年十二月三日
学 歴 昭和三十（一九五五）年早稲田大学第一商学部卒業
本籍地 三重県伊勢市
併 号 藤波孝堂

昭和 七年二月 三重県伊勢市にて誕生
昭和二〇年 四月 宇治山田中学に入学、宇治山田高校へ進学する
昭和二六年 四月 早稲田大学第一商学部入学
昭和三〇年 三月 早稲田大学第一商学部卒業
昭和三〇年 四月 有限会社藤屋窓月堂専務取締役就任
昭和三六年 九月 自由民主党入党
昭和三七年 伊勢市青年会議所副理事長に就任
昭和三八年 四月 三重県県議会議員となる
昭和四二年 一月 第三一回衆議院議員に初当選（三重二区）、森清派に所属する
昭和四二年二月 自由民主党文教局教育部長に就任
昭和四四年 二月 自由民主党水産部会副部長に就任
昭和四四年二月 衆議院議員第二回目の当選
昭和四七年 七月 科学技術政務次官に就任（昭和四七年二月二二日）
昭和四七年二月 衆議院議員第三回の当選
昭和四八年 一月 自由民主党総務に就任
昭和四八年 神風館二十世宗匠となる
昭和四八年二月 文部政務次官に就任（昭和四九年一月二五日）
昭和四八年二月 「政治工学研究所」に参加
昭和五〇年 一月 自由民主党政調・文教部会長
昭和五一年二月 衆議院選挙で第四回目の当選

昭和五十一年一月二月 新生協議会代表に就任
 昭和五十二年 三月 「入試改善に関する小委員会」委員長に就任
 昭和五十二年 八月 「新生クラブ」座長に就任
 昭和五十三年 一月 自由民主党国民運動本部長代理に就任
 昭和五十三年 四月 自由民主党三重県連会長に就任（昭和五十五年二月）
 昭和五十三年一月二月 自由民主党政調副会長に就任
 昭和五十四年 六月 中国訪問（新生クラブ訪中団団長として）譚震林全人代副議長らと会談
 昭和五十四年一〇月 衆議院議員に第五回目の当選
 昭和五十四年十一月 労働大臣に就任する（昭和五十五年七月）
 昭和五十五年 六月 衆議院議員に第六回目の当選
 昭和五十五年 七月 自由民主党副幹事長に就任
 昭和五十五年一〇月 「憲法を考える昭和の会」座長に就任
 昭和五十六年 三月 「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」副会長就任
 昭和五十六年一月 自由民主党高齢化社会対策議員連盟副会長に就任
 昭和五十七年 四月 自由民主党総務に就任
 昭和五十七年 四月 自由民主党三重県連会長に就任
 昭和五十八年一月二月 衆議院議員に第七回目の当選
 昭和五十八年一月二月 内閣官房長官に就任（昭和六〇年一月二月）
 昭和五十八年一月二月 国会対策委員長に就任
 昭和六〇年一月二月 衆議院議員に第八回目の当選
 昭和六〇年一月二月 皇室問題懇話会会長に就任
 昭和六一年 七月 中曽根派事務総長に就任
 昭和六二年 五月 自由民主党安全保障調査会長に就任
 昭和六二年一月 自由民主党安全保障調査会長に就任
 昭和六二年一月 自由民主党安全保障調査会長に就任
 昭和六三年 七月 コロンブス五〇〇年記念委員会会長に就任
 昭和六三年 九月 衆院税制特別委員会理事に就任
 平成元年 五月 受託取賄罪の疑いで在宅起訴（リクルート事件）、自由民主党離党
 平成二年 二月 衆議院議員に第九回目の当選

平成 三年一〇月
 平成 五年 七月
 平成 六年 九月
 平成 八年 五月
 平成 八年一〇月
 平成 八年十一月
 平成 九年 三月
 平成 九年 四月
 平成 一一年一〇月
 平成 一二年 六月
 平成 一三年一〇月
 平成 一五年 七月

衆議院議員在職二五年の表彰をうける

衆議院議員選挙落選

無罪判決をうける

自由民主党に復党

衆議院議員に復帰、第一〇回目の当選

自由民主党総務に就任（平成九年四月）

東京高裁が有罪判決を出す

弁護団が東京高裁控訴審判決を不服として最高裁に上告

最高裁は上告を棄却し、有罪が確定、自由民主党離党

衆議院議員に第一一回目の当選

島嶼議員連盟会長に就任

政界引退を表明する

《主要著書》

『教育の周辺』（雪書房 一九七六年）

『人間の味―藤波労政の記録』（日刊労働通信社 一九八〇年）

『神路山』（句集 角川書店 一九八〇年）

『議事堂の朝』（角川書店 一九八二年）

『五十鈴川』（句集 角川書店 一九九三年）

『山河抄』（句集 ふらんす堂 一九九九年）

『藤の花』（東京美術 二〇〇二年）

『伊勢路』（句集 ふらんす堂 二〇〇三年）

《主要関連文献》

『浜地文平先生を偲ぶ』（浜地文平先生を偲ぶ会編 皇學館大学出版 一九八七年）

『小泉大先生を偲んで』（藤波孝生、小泉美隆編 角川書店 一九九〇年）

『政治と鎮魂』（橋本茂著 心泉社 二〇〇一年 藤波氏の伝記）

藤波孝生 オーラルヒストリー

第1回

日時：2002年10月7日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

記録者：丹羽清隆

■伊勢の和菓子屋に生まれる

伊藤 今日、お生まれになったところから、中央政界にお出になる前の時代のことを、ざっとお話しただけだと思っております。一回で済むかどうかわかりませんが、先生のバックグラウンドをきちんと伺っておきたいと思しますので、よろしくお願いいたします。

藤波 はい。

伊藤 先生は昭和七「一九三二」年のお生まれだそうで、私も昭和七年でございます。先生は十二月でございますね。私は十月ですから、私のほうがちょっと年上だということに――（笑い）。お生まれは伊勢市だということですが、お宅はお菓子屋さんでいらっしゃいますか。

藤波 代々、伊勢神宮の神主をやっていたんです。明治の初めから社家の制度がなくなりましたものから、それで菓子屋を始めた。

伊藤 伊勢神宮の神主だったんですか。

藤波 はい。

伊藤 なぜなくなったんですか。

藤波 廃仏毀釈の時になくなりましたでしょう。

伊藤 そうですか、それでお菓子屋を始められたんですね。

藤波 そうです。菓子屋で神宮で使う菓子をみんなやっていた、茶菓子を。

伊藤 ではお菓子屋さんとしては、伊勢で大きいお菓子屋さんということになるんですか。

藤波 そうですね。

伊藤 それは神宮に納めたり、一般に売ったりということですか。

藤波 そうです。

伊藤 士族の商法ではないですが、神主さんの商法でうまくいったわけですね。

藤波 うまくいったかどうか、あまりわからんけどな。「赤福」というのがありますね。あれが大きいんですよ。

伊藤 あの方が大きいんですか。

藤波 だいぶ大きい。あれが大きいものだから、わしが一生饅頭屋をやっているのも大きくならんと思ったのが、政治に入った一つの理由だ（一同笑い）。

伊藤 ご長男として生まれられたわけでしょう。

藤波 そうです。

伊藤 じゃあお父様としては、跡継ぎと――。

藤波 完全に跡継ぎですね。

伊藤 途中まで、たしか跡継ぎになっていきますね。

藤波 それで神戸大学を受けて、早稲田大学を受けた。そのころにおやじと約束をした、「帰ってきて饅頭屋をやるから、早稲田にやってくれ」と。国立の神戸大学は完全に駄目だったんです。数学ができないんだ。いやなんだ。

伊藤 嫌いなんですか。

藤波 嫌いなんだ。数学は全然駄目なんだ。だから、完全に落ちた。もっとも、前日に泊まった家が、志摩から行って神戸で大工の棟梁

をやっている人のところなんだ。「坊、試験場見てこい、あした試験やから、試験場を見に行こう」といって、神戸大学を見に行っただけけれど、前祝いをやろうといっって一杯やったのが運の尽きだ。

帰ってきたら、ばあさん、その棟梁の家内は怒っていた。棟梁と私はいい気分になって、前日に酒を飲んでた。これで完全に駄目になった。それで早稲田に行かなければしょうがないと思って、おやじに「帰ってきて間違いなく商売をやるから、早稲田にやってくれ」

という約束をして、それで卒業後帰ってきたんですね。だから、海部俊樹が河野金昇さんの秘書をやっているし、渡部恒三は大学院に行くし、雄弁会の仲間もそれぞれな道を選んだけれど、私は家に帰る。嫁さんが決まっているから、「その嫁さんに義理を立てるのか？」と人は言っただけで、「いや、家に帰る」と言って、家に帰った。

伊藤 嫁さんが決まっているというのはどういう意味ですか。

藤波 嫁さんが決まっていたんです。

伊藤 まだ結婚はしていなかったんですね。

藤波 結婚はしていなかった。

伊藤 婚約者がいたわけですか。

藤波 いたわけ。

伊藤 それは親が決めたんですか。

藤波 いや、自分で決めた。

伊藤 それは伊勢ですか、東京ですか。

藤波 伊勢で。

伊藤 やるなあ（笑い）。

藤波 こんなことを話しておいていいんですか。

伊藤 いいんです。

■少年時代、野球部に所属

伊藤 当時は国民学校でしたよね。戦争ですから、僕は疎開したりしてひどい目に遭ったんですが、先生の場合、伊勢はどうだったんですか。

藤波 きつかったですね。伊勢だから、戦争の協力がきつかった。いまで言う右翼の団体が酒の樽持ってやってきて、それに五十鈴川

の水を一杯入れて満州へ送ったというような時代でしたね。戦後で言うと、戦後初めて伊勢神宮の宇治橋を車が渡った。それは進駐軍のジープが渡ったんだね。「アメリカはけしからん、何するものぞ」といって、戦後も戦争中のような気分で作っていました。けれども、完全にお詣りする人がなくなると、閑古鳥が鳴いておりました。家の前に空豆を干して、やっていたからね。芋を干したり。

伊藤 戦争がだんだんひどくなって、お菓子屋の材料が集まらないんじゃないですか。

藤波 いや、明野の陸軍飛行学校の指定商売人だった。

伊藤 そこに納品するわけですか。

藤波 そう、そう。

伊藤 そうすると材料も向こうからくれるわけですか。

藤波 向こうからもらえる。

伊藤 それじゃあ、お腹が減るといふことはない。

藤波 そうですね。

伊藤 それはいい商売だった（笑い）。戦争が終わったときがたしか中学——。

藤波 一年生。

伊藤 中学はどんな具合でしたか。

藤波 中学は宇治山田中学といって、中山伊知郎とか神川彦松の出身校ですね。学者にはわりあいいいのがいた。政治家はいなかったな。

伊藤 先生は、勉強はどうでしたか。お好きでしたか。

藤波 中ぐらいですね。

伊藤 中学で、ですか。

藤波 ええ。小学校の時は、全部自慢できたんです。

伊藤 「甲」ですか。あのころは甲乙丙丁じゃなかったですか。

藤波 甲乙丙丁ですね。甲ですね。母親がしっかりしていたから、

市長賞とかいろいろなものももらったけれど、六年間の皆勤賞というのがあった、それが一番いい、人間はそうあるべきだと言って。

伊藤 じゃあ健康児ですね。

藤波 健康優良児だ。母親がしっかりしていたからよかったんでしょ。うな。物を言いにくくて「いいま、話す行為がづらい」。私は親譲りの糖尿病でして。

伊藤 親譲りなんですか。

藤波 親譲りなんです。国会対策委員長の際に、それがバツと出ましてね。物を食って、動かずにいた。それで選挙になれば、中曽根内閣で恩義になった人がたくさんいますからね。だからいっぺんもお札に回らなければいかんと思って。そのころはバケツに一杯ずつ水を飲んでた。糖尿が出たんですな。結局、自分の選挙をやるのは最後の一日だけで、あとは家内がやってくれた。家内も病気になるって、肝臓を悪くして入院しましたよ。

伊藤 旧制中学に入られて、それがやがて高校になるわけでしょう。入試がないわけですね。

藤波 そうです。

伊藤 私もそうでしたけれど。

藤波 ああ、いいですね。

伊藤 六年一貫みたいな形でした。

藤波 そうですね。学制とか男女共学とか、そんなことに喧しかったんだ、名古屋の進駐軍は。校舎が焼けたこともあって、六年間で八回校舎が替わったんです。

伊藤 それでも同じ学校なんですか。

藤波 同じ学校なんです。孟母三遷というけれど、八遷なんだ。大変なものだ。

伊藤 それで野球か何かをやっておられたんですね。

藤波 野球もやっていましたね。

伊藤 それは好きだったんですね。

藤波 好きだった。

伊藤 ポジションは何ですか。

藤波 キャッチャーの補欠。ずっと補欠。しょうがないんで、自分が下手だから選手になれないんですね。それでいいんですよ。ボン、ボンとキャッチャーをやって受けてばかりいるから、女の子がたまに練習場にやって来ても、顔が見えないんだ。

伊藤 みんなこっち「キャッチャーの後ろ」から見ているから（笑い）。

藤波 それからマスクをかぶっているから。だから、「私を」見た話はなかったな。ほかの人はあってもね。

伊藤 それでさっきのお話のように早稲田に行かれたんですね。早稲田は何学部ですか。

藤波 商学部。

伊藤 やっぱり親の跡を継ぐという意味ですか。

藤波 そうです。

私は中村草田男の「蟾蜍ひまがえる 長子家去る 由もなし」という句をずっとやってきた政治家ですな。これから伊藤先生のところに行くけれど、何か思い出して、政治家と一つでも関係つけてつながっているものがあるかと思ったら、結局、「長子家去る由もなし」をずっと来たのが、いまのなれの果てですな。そう思うね。

■ 俳人として

伊藤 いま俳句のことをおっしゃいましたが、若いころから俳句は好きだったんですね。

藤波 好きだった。そういう世界だったんですね。

伊藤 それは高校ぐらいからですか、もっと前からですか。

藤波 もっと前、中学のころから。私の父の藤波清市は号を窓月と称していた。伊勢には、荒木田守武という四百年前の俳句の元祖がおった。松尾芭蕉が三重県というけれど、あんなのは若造なんです。三百年ぐらいいしか歴史がない。四百年前、室町時代、神宮の神主をしていた荒木田守武というのがあって、それが俳句の元祖になってこんにちに至っているんです。それを敬慕する神風館という俳句の系統があつて、そのころ何十人か集まって俳句をやっていたんでしょ。うな。その歴史がちょうど三百年なんだ。おやじがその十九世で、私が二十世。

伊藤 宗匠ですか。

藤波 宗匠です。それを一番、自分の誇りにしておるんですね。よくあちこちに行つて、田舎の宿屋に行くと、ここは十代目とか十五代目とか言うわ。ああ、すんません、私は二十代です。それを言つておくともう一枚座布団を持つてくるということになっているんだ。四元義隆という人がね――。

伊藤 あの右翼の方ですね。

藤波 右翼の。面白い人で、中曽根さんに座禅をやれといつて勧めた人で、中曽根さんの座禅というのは四元義隆の言うままにやったんだ。

細川「護照」さんが熊本の知事をしているときに、「藤波君、来いよ」といって、京都の建仁寺という寺に行つたら、熊本から細川さんが来ていた。東京から私と四元さんが行つて、建仁寺の管長に話をして座禅を組んだことがあるんですね。そんな機会がよくあつた。

竹田益州というのが管長で、私と、今度防衛庁の事務次官をやめた佐藤謙いうのがおった。読売新聞の社長の娘婿で、それが私の鞆を持っていったときも、しばらく管長と話をし、ひょこっと頭を

上げるんだけど、まだ向こうが頭を下げていたので、こちらもまた頭を下げる。向こうはなかなか上げてこない。横を見ていると、佐藤謙がときどき頭を上げるんだ。相手が下げているものでまた下げる。そんなことがありましたね。なんでかという、その管長は九十五歳ぐらいで亡くなつたけれど、「私は国東半島の出身で、五軒か六軒の檀家しかない寺の坊主に生まれてこんにちに至っている。しかし政治家では大分県の県会議員が一番えらいと思つている。それでもなかなか自分の寺まで来てくれるような人はいない。官房長官というのをやったような人をお迎えするのはえらいことだと思つて、なかなか頭が上がらん」と言つている。そんなことがありましたな。あれは佐藤謙にとつてもいい勉強になつたと思つた。

考えてみたら、四元さんはそれを見て来いということだつたんだ。「中曽根のお供をするんだつたら、そこに行け」ということだつたと思つたんですね。「じゃじゃ馬の下で働くんだつたら、そこに行け」ということだつたんだ。いい勉強になつたな。

伊藤 句会のようなものには、ずっと参加されていたわけですか。

藤波 おやじは句会を馬鹿にしておつたね。「風流の心というのが大事なので、寄つて集まつて、どうのこうのというのは大したことない」という話だつた。中学一年生か二年生の時に、鈴木幸寿さんという国語の先生がおつて、その人が全校から俳句を募集をして、それが天地人の「天」になつたんです。それで病みつきになつたんですな。なんという句だつたかな。「日溜まりに 電車待つなり 寒の菊」というのがそのときの句で、断然「天」で、一位だつた。

子供の教育というのをおだてないといかんのかな。まあ、いい才能があるなど言うておだてるのが教育だというのはよく聞くけれど、自分に見れば俳句の「天」がそうだつたな。一生俳句に親しんできた。

四元さんの話をもう一つすると、「京都や奈良に行つても半分外

国やけれど、伊勢に来ると全部一〇〇%日本だ」ということをよく言ったね。考えてみたらそうだね。京都や奈良は仏教が入って来てからの町ですから、半分中国だね。あるいは半分朝鮮半島。伊勢の場合は本当に一〇〇%日本だということをよく四元さんが言った。名言だね。伊勢のことを話すの一番の名言だと思ってるけれどね。

伊藤 俳句の場合、発表する場があるわけですか、雑誌とか――。

藤波 年に一回、守武顕彰会というのがあった。その会長は私がやっていて、少なくともおやじの代や私の代では代表で、年に一回ずつ守武忌という忌日がありますから、それに集まってきて、お祀りをして、俳句会をやる。

伊藤 それも天地人ですか。

藤波 天地人の方式ですけど、九月十五日に決めてやってるんです。朝十時からお祀りをして、昼の十二時半から俳句大会をやる。百二十〜百三十人集まってくるんです。

伊藤 それは全国からですか。

藤波 全国から。「献詠句」といって、お祀りに一句ずつ献じていくんだ。それは撰者も含めて集まってくるんです。

伊藤 撰者はどうなってるんですか。

藤波 撰者は、顕彰会の世話人会をやって、世話人が決める。私は会長だから、その撰者の一人に入ってるんです。

伊藤 お父様がもともとは会長なんですか。

藤波 おやじは十九代の会長をしていた。おやじが亡くなってから私が会長をしている。それは別に藤波家だから二十代になったのではなく、そのときに俳句をやる者がみんな推挙して決めた。だから十九代と二十代が身内から出たというのは、私が初めてなんです。その時代の一番いい俳句を作るのが、第何代と決めて決まっています。「立机」というんですね。昭和四十八年に私は立机したんです。

有馬 藤波先生は、俳句で師と仰ぐ方はいらっしゃるんですか。

藤波 それは、私が文部政務次官をしてるときだ。いろいろな話になるけれど、大蔵大臣が水田三喜男で、文部政務次官は藤波孝堂で、その二人が政界では俳句をやるということになって、山口誓子とか水原秋桜子とか有名な人が全部そのどちらかに来て、俳句文学館というのをつくることになって、新宿の百人町につくったんです。文部政務次官のときに一所懸命つくったのが、いまに至ったんだけれど、そのときにみんな揃って来たんです。このうちの誰か一人の子分になろうと思ったけれど、みんなが来たので、「もうあかんわ。田舎俳人を通すよ」ということを、みんなの前で宣言した。角川源義が委員長で、富安風生とか大野林火とか、有名な俳人がみんな来た。来ないのはモグリだと言いたいぐらいだ。誰か一人の弟子になっただけだけれど、そのころは、三十四歳で国会議員になったから四十歳ぐらいだね。惜しいことに、「一生田舎俳人で行くか」と言ったこといまでも覚えてるけれどね。惜しいことをしたな。

伊藤 俳人というのは、俳人だけで食べていけるものですか。

藤波 食っていくのはごく少数ですね。山口誓子なんかでも、最後の頃は朝日新聞の撰者だとかいろいろなことをいっていたけれど。大阪に住んでいたものだから、日本一の俳人だけれど、新幹線の中で俳句の撰をしていたな。これはえらい仕事やな、と思った。食べていけませんね。

伊藤 それは政治家の方がいいですね(笑い)。

藤波 いや、普通でいけばいいはずなんだけれど、これもなかなか食っていきませんね。

■早大の雄弁会に入る

伊藤 早稲田に入られて商学部はわかりますが、雄弁会にお入りに

なったわけでしょう。もともと雄弁ということには何か関心があったわけですか。

藤波 私が一年生のときはどうっていいことはないけれど、二年生のときに入るといふ話になったんだ。大隈講堂で、緒方竹虎が「中野正剛論」をやったんです。それはどこの主催かと思った。新入生の勧誘でいろいろなことをやるから、その中のひとつがそれをやっていた。ああいい話やな、こういう早稲田の友情というのはいないな、と思ったら、それは早稲田の雄弁会が主催していた。それで、これはいい会だから、これに入るといって入ったんです。弁論は関係ないんですな。

伊藤 そうですか。でも入ったら弁論の訓練はやらされるわけでしょう。

藤波 甘泉園かんせんえんという庭が早稲田にそばにあって、そこで大きな声を張り上げて演説の練習をやるんです。甘泉園はいまでもありますが、そこで練習をやったんだ。夏になると合宿をやって、合宿でまた練習をするわけです。そこで、政策の研究なんかもやって、勉強もするわけです。西伊豆のお寺でやったり、先輩の宮澤胤勇という人が運輸大臣をしておって、長野の諏訪の山の中間の尼寺で合宿したりしました。尼寺の婆さんが六十幾つ、七十ぐらいいったんだ。それでも誰がやって来るか、というのを見ておったけれどね。それで面白い連中だったけれど、やらなかったな、あれは。

伊藤 仲間はどんな人たちですか。

藤波 仲間はね、いま副議長をしている渡部恒三とか。

伊藤 同年ですか。

藤波 同年です。それから名古屋の日本碍子の横井国重。名古屋で金集めの大将で、国民協会の事務局長か何かで金集めをやっていた。それから私の弟分の森下圭吾、これは伊勢から行って、泰道繊維という繊維会社の重役か何かで行った。早く死んだ。それから、読売

新聞にずっといた小田富士夫とか、民社系の労働組合で働いていた池畑英雄という福島県出身の男とか、みんなおりましたね。

伊藤 先輩はどうですか。

藤波 先輩は、そのときは宮澤胤勇さんを頼りにして、尼寺で合宿させてもらった。その後、私が国會議員になって長野に行ったときに諏訪で宮澤さんの家内を訪ねたら、路地の一番奥の小さな家で、ご主人の位牌を守っているという話だった。菓子買うて行って、「あのときの学生です」といって礼を言ったことを覚えていなければ、政治家というのはなかなか大変だな、という気がしたね。普通ではなかなか務まらない、という気がしたな。

伊藤 よく雄弁会というと竹下さんの名前が出てくるじゃないですか。

藤波 自分で売り込んだ分もあったね。

伊藤 本当はそうじゃないという説もあるんですね。

藤波 あるんだ。だけどまあ、雄弁会というところの妙なところで、ワーワー言っていると、それでいいんだな。

伊藤 そんなものですか(笑)。雄弁会だと、選挙の時に頼まれたりしませんか。

藤波 する。時子山常三郎というのがおって、早稲田の総長をした。第二政経の学部長をしていて、ずっと雄弁会の顧問をして、厄介かけてきたな。小島静馬参議院議員で、いまは岐阜の山奥に引っ込んでおるけれどね。海部俊樹とか演説のうまいのがおるね。

伊藤 海部さんも同じぐらいですか。

藤波 海部は一つ上。ある年、何年生の時だったか、渡部恒三が幹事長で、私と海部俊樹が副幹事長だった。三年生かな、海部俊樹が四年生だ。それから私が後期の幹事長をやって、そのときに海部さんは卒業していったな。

伊藤 先生のあとの幹事長は誰ですか。

藤波 私のあとは小田富士夫だと思うな。

伊藤 幹事長は実際に取り仕切るわけでしょう。

藤波 取り仕切るわけだな。「幹事長選挙の総会をやりませう」と言うのと、ザーツと人数が増えるんだけれど。

伊藤 何か政界みたいじゃないですか(笑い)。

藤波 そう、まったく同じだよな。

有馬 ふだんは、ある場所にたむろしているわけですか。

藤波 部室がありました。汚い部室でね。新聞紙が放つてあるような。文学部の地下にあって、そこにたむろしておるんだ。

有馬 藤波先生は、演説そのものは。

藤波 聞いた方がいいくらいだ。政治家にはね、上から下を向いて自分の意見を言う政治家と、人の意見を聞いて、その意見の中から新しいものをつくり出してくるというか、拾い出してくる政治家と、二つあるな。私はあとのほうだ。

伊藤 じゃあ前のほうは誰だろうな。

藤波 例えば海部俊樹とか。

伊藤 まあ、そうなんでしょうね。

藤波 その代わり演説はうまかったな。海部さんはどこへ行っても優勝カップを取ってきたね。「海部の前に海部なし、海部のあとに海部なし」というのは、時子山常三郎が言った言葉だね。

■大学での勉学

伊藤 やっぱりそうなんですか。海部さんは大変自慢なさっていましたけれど。それで昭和三十年に早稲田に卒業をなさるんですが、大学での勉強のほうはどうでしたか。

藤波 俳句やっていたくらいだから、大したことはないな。一年生の

時に、帆足理一郎という倫理学の先生が一学期の試験をやって、「今日は模範答案を読む」という。だいたい七百人くらい、商学部的一年生が一緒だった。七百人の中の模範答案ってどんなものかなと思って聞いておいたら、聞いたことがあると思ったら、私の答案を読んでいるんだ。大したことないな、みんな、と思った。それですっかり学問というものを馬鹿にしたんだ。

帆足理一郎というのはおやじでも知っているくらいだ。田舎で、「おれは早稲田に行きたかった。おまえ、早稲田の倫理学を聴いたのか」といって、「聴いたと答えたら」「ああけっこうなこっちゃ」と言っておやじが喜んでおったな。それくらい有名な人だった。

佐野学とか。佐野学なんか転向して、経済原論だ。倫理学は帆足理一郎。帆足理一郎の模範答案にはまいったな。

伊藤 大変な名譽じゃないですか。

藤波 名譽だけど、大したことない、と思ったな。

伊藤 では適当な成績で卒業なさったということですね。

藤波 そうですね。そうだけれど、三年生の終わり頃になって数えてみたら、どうみても単位が足らんだ。これは困ったな、と思った。それは、例えば貿易論の先生がおった。商学部だから貿易論なんかがある。それは初めから授業をやるわけだ。初めの時間ぐらいは、だいたい自分がこんにち早稲田大学の商学部の教授になって、ここに立っているかという話ぐらいいいだろうと思うといっして、こんなやつの話、最後までよう聞いておらんといっして出て来たんだね。試験ができないで単位が足りなくなったのではなしに、自分で切っちゃったんだ。それがもう、いっぱいいっぱいのところまで来ていた。危ないな、と思った。どう考えても、どれだけとって足りないんだ。

それで四年生の時に、昼働きながら勉強するのが早稲田大学生だ。それで、昼と夜と二単位ぐらい余計に取らすのが早稲田大学の姿だ、

馬鹿なことがあるかといって、ストライキを構えてやるか、というところまで行って、それが通っちゃったんですよ。通ったものだから卒業できた。普通の単位を取らせるだけだったら、足りなかったんです。それはきつかったな。

サトウといったかな、三重県の津の出身で国文学の先生だったな。

「私は」試験の前日に花札を打っておって、ついウトウトとしたら時間が過ぎていて、試験が受けられなくなった。「実は私は国語が大好きなだけけど、試験を受けることはできませんでした」といって、中村屋のカステラを持って行ったら、「持って帰っていけ、おれはそんなのはいやだ」という。「そんなこと言わんと」と言ったんだけれど、あの先生はなかなか言うことをきかんで、ついに0点さ。馬鹿な話だ。試験ぐらい、もう一回追試を受けさせればいいんだ。カステラを持っていったのに（一同笑い）。

伊藤 自分の家のお菓子を持っていったほうがいいでしょう（笑い）。とりあえず、ぎりぎりですか。

藤波 ぎりぎりだ。そんなことがあった。

佐道 親しくされた先生とかはいらっしゃらなかったんですか。

藤波 先生は、そんな親しくは――。雄弁会をやっていたし、それから学生委員会をやっていた。

伊藤 なんですか、学生委員会って。

藤波 自治会。そのときの委員長が楠田實だ。私は委員だ。「楠田氏には」国会議員になってからずいぶん助けてもらったけれどね。

それで「楠田氏は」、「自分は鹿児島から立候補する」と言っていて、

「私は」「俺は絶対反対だ、やめろ、やめろ、馬鹿なこと」と言った。「文藝春秋や学者や文化人を連れて行って話をする会で、ようけ人が来てくれる」という。「それは講演会だからきてくれるので、政治とは違うんだ」「おれの立候補に反対するのは安岡正篤さんと藤波孝生と二人だ」と楠田さんは言ったけれどね。いまでも言ってい

るけれどね。

学生自治会で三年生の時かな、ストライキを決議した。早稲田の商学部でストライキなんてやったらいかんと思って、前晩に決議したことを、「実は決議したんだけれど」といって学部長を訪ねようということになった。大雨の日に、あれは研究室だったんだろうな。女の家じゃないと思うけれどね。伊地知純正という英語商業学の先生の家を、夜中に探し歩いて訪ねていった。そうしたら「よう来た、よう来た。ウイスキー飲め、前祝いや」と言っていて――。次の日にバリケードを築こうと思っただけで学校に行ったら、休校の看板がかかっておった。前日にわかったものだからね。向こうの方が上だよ。

それは宮澤喜一の家内の親だ。英語商業学で英語の先生だ。娘が日本女子大に行っておって、英語の弁論の代表でアメリカに行くのに船で一緒になったと言っていて、宮澤喜一と一緒に来たんだ。宮澤喜一に言うたことがある、「わたしは宮澤派ではついになくて、中曾根派で来たけれど、宮澤夫人派だ。一宿一飯の恩義がある。あのときのウイスキーはうまかった」という話をした。大雨が降ってきて、びしょびしょになった。大学の先生もえらいな。えらいよ。

伊藤 その学生委員は選挙ですか。

藤波 選挙だ。選挙で演説して、当選した者がなるんだ。

伊藤 じゃあやっぱり演説したんですね。

藤波 そのときは演説したな。読売広告の社長をしていた黒木とか。死んだけれどね、早く。いろいろな話をするけれど、私と森喜朗と小淵恵三と、みんな黒木がお祝いをやってくれた。黒木が宮崎へ新築したと言っていて、新築祝いに行ったらゴルフをして帰ってこよう、飛行機の切符を取ろうと、日を決めて手帳を出して、行けなかつたんだ、黒木は病気でね。かわいそうに。人間というのはそういうものだ。けっこう面白かったですけれどね。

伊藤 大学時代ですか。

藤波 大学時代。けっこう面白かった。単位のことを心配しなければね。単位は心配した。危ない、危ない。

伊藤 下宿されていたんですか。

藤波 下宿した。初めに行ったときに、チッキで送るわな。私の友達の下馬の田中さんという家に下宿しておる、私の浜村正という明治大学の友人がいたので、そこを目当てにチッキを送った。その大先輩が大沼「淳」さんといって、いま私学協会の会長をしている。新宿の文化女子大学の学長だ。そのまま仮住まいだと思って行った。

そうしたら、おふくろが知り合いだった人が板橋にいて、板橋を訪ねてそこに下宿したいと言ったら、おれのところで飯を食えという事になった。小さな家だ。どこに住むんだといったら、前が空いているという。それで前の宮崎「武」という家に下宿させてもらって、飯はその佐々木「正廣」という家で食べた。

そうしたら学生がみんな寄ってきて、十人ぐらい来た。藤波さんがおるといので、いっぺん行って来いよというんだ。いっぺん行って来いよというのは、飯食いに行くとか、そんなことだな。私のおふくろが仙台へ旅行して、急に飛び込んで来て、いっぺん下宿のおばさんに礼を言おうと思ったという。来て押入を空けたら、布団も質に入れていて、ないし、一升瓶だけずっと並んでいたという有名な話があるんだね。十人ぐらい集まってきた。その家とその近所だ。タイの日本人村みたいなものをつくったんだ。伊勢村だ。東京へ来ると頼って来るわけだ。酒を飲まなきゃいかんね、次々と。もう質屋に入れるものもなくなった。そんなことをしていたな。

伊藤 家から送金してもらっていたわけでしょう。

藤波 もらっていた。それは自分の分だからな。人の分は入っていないわ（一同笑い）。

伊藤 そこにずっと卒業までいたんですか。

藤波 いた。例えば夜になると、夜学に行っておるものもあって、

十時ぐらいになったら帰ってくるわな。十時ぐらいに焼酎屋で集まって、みんなで焼酎を飲むんだけど、金がないものだから、グツと焼酎をコップで飲んでおいて、ぐるっと走って回ってきて、一番遅いやつが払うということにしていた。それから帰ってきて、花札を始めたなり、麻雀をやったりね。

伊藤 遊びは花札とか麻雀ですか。

藤波 そうです。

伊藤 囲碁や何かはどうですか。

藤波 囲碁はつまらん。

■帰郷して和菓子屋を継ぐ

伊藤 とにかく、そういうことで無事に商学部を卒業なさって、伊勢にお帰りになった。それで本当にお菓子屋さんを継がれたわけですか。

藤波 継いだ。このあいだ、おやじの顔を思い出して、おれが国会議員をやっているあいだにおやじのことをいっぺんちゃんとしておかなければいかんなどと思って、数えてみたら、おやじが生まれてから今年がちょうど百年なんだ。そんなものだな。六十六歳で死んでいますから。生きていたら百歳。今年の十月二十七日におやじの百年と、三つ違いだったおふくろの九十七年のお祭りをやって、飯を食ってもらおうということにしたんだね。そのときに、神風館の十九世と二十世のことを書いたものを準備したので、それを送ります。ちょっと面白い。

伊藤 では和菓子屋の若旦那になったということですか。

藤波 そうです。若旦那というとかっこいいけれど、おが屑を風呂屋と取り合いして、こちらでもらった分だけリヤカーで持ってくる

わけだ。饅頭の餡を炊くの。

伊藤 あれを炊くにはおが屑が要るんですか。

藤波 いまはみんなバーナーだけれど、あのころはそれが一番安かったんだ。

伊藤 じゃあけっこう労働もなさったわけですか。

藤波 やった、やった。だから労働大臣になったときに、おれは労働者の出身だと言った（一同笑い）。喜んだよ、みんな。

伊藤 でも家業だけやっていたわけではないでしょう。

藤波 そうそう。まず小学校の同窓会みたいなものをやり始めた。

七、八人で、いろいろなことを議論していた。そのときの議論が一番いま引いているような気がするな。その連中は十月二十七日に招待して、よくお礼を言おうと思っっているんだ。そこが中心になって、例えば消防団の分団長をやるとか、菓子屋だから菓子屋の青年部の会長をやるとか、青年会議所を伊勢につくる出発のときに一番若い会員であったり、伊勢市の連合青年団長をやったり、神社関係の青年部の会長をやったり――。

伊藤 神社関係の青年部というのは何ですか。

藤波 あるんです。氏子青年会というのがあって、三重県の会長をやった。猿田彦神社というのがあって、その神社の宇治土公という神主さんが三重県の青年神職の会長をやっていたものだから、ついでにやろうということで、三重県の氏子青年会の会長をやって活動するとか、いろいろなことをやった。「青年」と名のつくものは何でもやった。高等学校の同窓会の会長もやったし。

伊藤 なんとなく竹下さんみたいな感じですね。

藤波 そうそう。「蟾蜍 長子家去る 由もなし」だ。県会議員から出て来たものはみなそうだ。「長子家去る由もなし」だ。例えば、先生方みたいに学者になるのも政治家になる道だし、役人になるのも政治家になる道だ。それと同じように、県会議員からなるという

のは、だいたい「長子家去る由もなし」だ。おやじを納得させながら、政治をやって、土地のみんながワイワイ言うので、といって政治家になってくるということだから、竹下さんの歩んだ道はようわかるんだ。

伊藤 藤波先生はお父さんも政治をやっておられたんじゃないですか。

藤波 ちょっとね。選挙をやった次の日に、「もう、いやだ」と言っていたけれど、それでも伊勢市の副議長をやっていた。

伊藤 市議会の、ですか。

藤波 市議会。市議会の副議長をやったのが最後だったな。あとは文化財の調査委員なんかをやった。それは好きだったんだな、自分が。郷里の小学校とかやるのが好きだった。私は二人兄弟で、弟が商売のほうは引き継いでやってくれたんですけどね。これは私よりちょっと頭がよかったもので、早稲田の政経に入って、政経を出て日新製鋼の呉の工場におったんです。それで「私が」衆議院をやるかということになって、おやじと話をしておくと、先祖は饅頭屋をしておったということだけは残しておく方がいいな、ということになった。利休饅頭というんですが、「利休饅頭」という金看板をついてきて置いておこう。それを降ろしたときでも、先祖が饅頭屋をやったということをわかるようにしておこうということで、いよいよ県会に出るかということになったときに、おやじと話をしておくと、看板屋に行っって看板をつくって、看板を上げた。

それで弟に電話して、「衆議院に出ることになった。これは自分でやるうとは思わんけれど、ひとがやれやれ言うので、行くことにする」。そう言わんといかん。それで「饅頭屋の看板降ろすからな」と言ったら、「兄貴、ちょっと待て。家内と相談してみる」「何を相談するのや」と言ったら、相談して、「おれは大きなところに入りすぎた。もっと小さなところに入ればよかったんだけど、大きな

ところに入りすぎて、どう考えても社長になれん。帰って行って饅頭屋をやったらすぐに社長になれるか。「なる、なる」。

そのことも、年度の神風館の本には書いてあるんですけどね。この弟のおかげだということ。「家内と相談してみるわ」というので、家内と相談した結果、帰ってきて饅頭屋をやるということになったもので、帰って来て饅頭屋をしたんです。一生だ。かわいそうに。私の応援をしながら、一生饅頭屋だ。あれは棒に振ったよなものだ。かわいそうだ。

■夫人のこと

伊藤 そういえば、さっき結婚する人が決まっているとご自分のことをおっしゃってましたね。伊勢の方ですか。

藤波 そうです。あれは伊勢の信用金庫という金融機関があって、その専務理事をしておるのが東大を出て、「長子家去る由もなし」で家庭で商売をしていたんだけど、金融機関の専務理事をやってきました。その娘なんだ。「おれのところに来るか」と言ったら、「いく」というので、それでまあ、わりあい早く決まってるね。

伊藤 「来るか」というのは、どういうことですか（笑い）。なんで知り合ったわけですか。

藤波 なんて知り合った、ということはないですな。

伊藤 近所なんですか。

藤波 いや、近所ではない。百五銀行という銀行があって、その窓口におったんですね。筋向橋という支店におった。大きな金を持っていて、小さな金に替えに行ったのをよく覚えてるな。しょっちゅうな。それで意識づけておいて。

伊藤 そうですね。藤波先生が気に入って。

藤波 惜しいことした。かわいそう。そのことは、昨日の昼か、野中広務の一代記をテレビでやっていただけで、「家内には政治家になるということは言わなかった」というけれど、そんなことを言う馬鹿者はおらんわな。

伊藤 そんなものですか。

藤波 そんなものです。

伊藤 それじゃあ、奥様は、社長夫人だと。

藤波 そう、中小企業のね。そう思っていたと思うんだけど。

伊藤 じゃあ県会に出るときも、別に相談せずに、ですか。いちおう相談ぐらいはしたでしょう。

藤波 相談ぐらいはした。もう既成事実ができているから仕方なかったんだ。第一回目の衆議院選挙をやったときに、病気になって肝臓をやった。第一回目で真面目だったし、そのころは。そのころも（笑い）。日本語は難しいな（一同笑い）。東京から伊勢に夜遅くに帰ったんですよ。向こうを六時ぐらに乗って、十時ぐらいにこっちに着く。そういう生活をやって、十日ぐらいやっているあいだに治っていたな。

伊藤 肝臓を悪くするというのは、やっぱり過労ですか。

藤波 完全に過労ですね。二回目の過労の時は、私が糖尿が出たというときで、応援して歩いて。官房副長官のときだ、選挙で家内も倒れて、今度官房長官になるといって、そんなコースだということがわかっていたから、文部省に相談したら、文部省は東京医科歯科に行けというんです。医科歯科に行けば、じきに治るといいます。

じゃあ行こうかといったら、東京医科歯科に行ったら、学長と院長の二人を前に置いて、「すまんけど、わしは今度官房長官になるかもわからん。だいたい外国から来るやつはみんな家内を連れてやってくる。宮内庁が心配するといかんで、なるべく早く治して出してくれ」と言った。そうしたら半年かかったんですよ。「馬鹿、一ヶ月

以内に治すといったのに、そんな馬鹿なこと」、「これはいよいよ国立大学やめてもらわなければしょうがないね。患者の言うことを聞かんのだから。

「早う出してやる、奥さんは早く出しましょう」と、えらいね、学長と院長と口を合わせて言ったね。だから仕方なしに預けたんです。やっと半年で、非常に喜んだよ。アメリカでもどこでもみな夫人同伴だからね。受けるほうも夫人同伴でないといかんし。それが二回目だった。

もう自分が病気であることを忘れておったよ。リクルートのおかげだね。仕事しとったら、こんなわけにいかんからね。あのゴルフでゴルフで優勝カップくれるというので、優勝カップもらって、みんなによるしくなると、だいたい家内が持って帰ってくるということになっていたんだな。今日は行かないから、おれが出したのに、とっても仕方ない、夜のことほしかたない。家内が持って帰ってくるというようなことだ。テニスをやったり、いまは社交ダンスみたいなことをやっておるわ。ゴルフもね。

伊藤 じゃあもうすっかり治られたということですね。

藤波 すっかり治って、もう忘れてるんだな。

伊藤 忘れてるぐらいなら、本当に治っているんですよ（笑い）。藤波 私が糖尿病になって、「東京医科歯科にまた行くか」と言ったら、文部省は「いまは医科歯科はいかん」と言うんです。「なんでや」と言ったら、「看護婦から洩れる」と言う。「どこがいいんや」と言ったら、「順天堂がいい」と言うので、それで順天堂に行って、看護婦さんに世話になったんだ。あのころ東京医科歯科はよかったんだけどね。有名な医者がいんだな。

伊藤 ずっと後の話ですが、糖尿だということが病気としてわかったのはいつですか。

藤波 一番最初に出たのは、国会対策委員長のときだな。

■青年団から県会議員へ

伊藤 そうですか。それじゃあ話を戻しますが、伊勢市の青年会議所の副理事長になられて、ということもいろいろおやりになったんですね。

藤波 昭和三十七年だ。

伊藤 それで、県議に出ろということは、そういう仲間内で――。

藤波 定員が一名増えることになったんだ。伊勢市から三人が四人になった。そうすると、若い者から出そうということになった。古い町だけれど、一番新しい若いところからだそうということになって、それでみんながやいやいや言うものだからやることになった、ということですね。

伊藤 でも、いつかやろうとは思っておられたんでしょう。

藤波 思っていたね。

伊藤 県議会の場合は、政党をはっきりさせないで出るわけですか。

藤波 いや、自民党だね。

伊藤 自民党の公認ですか。

藤波 そう、公認。小久保久吉とか、西島吉好夫とか、自民党の先輩でも議長をやったような連中で、相当強かった。その二人にだけは挨拶をせねばいかんと思って、饅頭を三十里奮発して、片手にさげて行った。その家の玄関の前を十回ぐらい往ったり来たりして、やっと飛び込んで、おらなければいいのにな、と思いつながら入ったけれど、ちゃんとおるわな。それで挨拶をした。それは悔しい思いだね。それから衆議院も含めて、先輩というのは強いなと思ったのは、町の公民館や公会堂や、そういうところはなかなか貸してもらえんのだ。だから、寺だとか神社の社務所とか、そういうところば

かりで演説をした。強いな、と思った。

伊藤 先生の支持者はどういう人たちなんですか。

藤波 いま考えてみると、年代だね。

伊藤 青年、ということですか。

藤波 当時の青年。年代の仲間だね。

伊藤 さっきお話になった、連合青年団とか、氏子の青年会とか、同窓会もあるでしょうね。それから青年会議所、消防団、だいたいそういうところの若手ですか。

藤波 そうそう。それで県会をやった。県会は最高点で当選したんだ。

伊藤 定員は四ですか。

藤波 四です。

伊藤 自民党の候補者は何人いたんですか。

藤波 三人。

伊藤 じゃあ、もう一人は何ですか。

藤波 社会党系だね。

伊藤 社会党もいたわけですか。

藤波 いた。

伊藤 それで社会党も当選したんですか。

藤波 一人した。

伊藤 じゃあ自民党の中の戦いといっても、定員の中ですね。

藤波 そうそう。

伊藤 でも一番戦わなければならないのは自民党ですね。

藤波 そうですね。

伊藤 社会党の基盤を食うのはなかなか大変だろうから。

藤波 そうそう。

伊藤 じゃあ、そんなに激烈な選挙というわけではないんですね。

藤波 いや、きつかったね。最高点で当選した。

伊藤 最高点というのはすごいじゃないですか。

藤波 いや、ものはずみだね。若いものだから、はずみがついたんですね。

伊藤 先生はずっと後になってから一度落選されますが、このときからずっと、選挙は落選なしでしょう。

藤波 そう。選挙で落選するものだとは思っていなかった。続けてやっている者はみなそうですよ（一同笑い）。

伊藤 それで三重の県議会議員になられて、議員は何年ぐらいやっていたんですか。昭和三十八年からですね。

藤波 三年八ヶ月。四年になる前に衆議院の選挙があって、そのときに浜地文平という私の仕えておった先生が辞めることになった。

七十歳で勲一等をもらって辞めることになった。大臣はやらなかったんですね。

■浜地文平について

伊藤 浜地文平というのはどういう方ですか。

藤波 古武士の代表みたいな人で、農林水産委員長をしていて、本会議をやっていたら、「農林水産委員長、浜地文平君」と議長が言うので、これはおれのことを言うところなと思って、えらいことだと思って聞いておいたら、「代理理事誰々」といって、それが委員会の報告をしたので、やっと安心をした、というような人だった。行くと、河野一郎と稲葉修と浜地文平と三人が、一万円ずつ賭けて碁をやっているわけだ。そうすると、だいたいそれぞれ鬼門があって、あいつとやるときは負けるということになっておって、一ヶ所にとどまらんで、一万円がぐるぐる回ることになっている（一同笑い）。よく建設省の分室にいた。河野一郎がおるところにね。

伊藤 それは、浜地さんを訪ねて、ですか。

藤波 そうそう。

伊藤 浜地さんは河野派だったわけですか。

藤波 そうそう。池田「勇人」と河野が仲が悪くなって、軽井沢にみな集まれとあって、河野さんが触れを回した。そのときに「浜地氏は」足が痛風で痛んで動けなくて、「わしは行けんけれど、しかし自重せよ」という手紙を書いて、河野一郎に送った。

それがぐるぐる回って私の手元にあったもので、河野洋平君が新自由クラブをつくるといって私のところに来たときに、その手紙を見せて、「かつて浜地文平さんは河野一郎さんにこういう手紙を出したという縁があるけれど、ぐるっと一回りすると、こういうことだな」といった。そういうことがあったな。

伊藤 これは面白い（笑い）。それは河野新党をつくろうというときの話ですね。ああ、そうですね。三重の県会議員としては、どういう活躍をなさったわけですか。

藤波 青年ですね。全国で、教育委員会を横において、青年問題というとだいたい警察がやっていたんだな。それを全部の役所でやることにしようということにした。そんなことを言ったり提案したりして、政府は青少年対策本部というのを総理府につくった。三重県はその走りをやったんです。

伊藤 当時はまだ青年団がさかんなころでしょう。いまは地方に青年がいませんけれど、その当時は地方に青年がごろごろいたと思いますね。

藤波 竹下登が日本青年館の館長になったのかな、竹下登の意義というものを言ったんですね。そのときはまた背後のことを言うんだけれど、「みんなの意見を尊重して、決めたらみんなで作るといのが青年団だ。竹下はそれをやってきたんだ。着実にやってきた。それがほかの政治家と全然違うところだ。それをやってきたので、竹下時代をつくれたんだ」という話をした。「日本の民主主義には

大きな意味があったのではないか」と言った。そう思うね。

伊藤 青年団時代から竹下さんを知っていましたか。

藤波 知らん。知っているように言うのはようけおるけれど、わしは知らん。

伊藤 県会議員だって、一年生ではあまり何もできないでしょう。

藤波 できないけれど、自民党で八人だったかな、新人ばかりがやって、服部光良という三重県の農協の中央会長をしておるのが幹事で、ポストを取るかという交渉に行つて、そのときに、「藤波君、君は将来中央に出て行く男だから、農林水産委員長をもらってきたら、やれ」といって、私が初めて役所の水産のところを回る足がかりができたので、ありがたかったけれど、そういうのは、先輩はみな守ってくれたね。ありがたいことだった。

伊藤 藤波先生ご自身も、じきに中央に行こうかという気構えだったんですか。

藤波 いや、自分で思ったというほど生意気ではないんだけど、そういう空気ができていたんだな、自然にね。

伊藤 県会議員は四年足らずですが、これは一期ですか。

藤波 一期です。

伊藤 途中で選挙はなくて？

藤波 なくて、三年八ヶ月。一期にはちょっと足りないんだ。

伊藤 そうですか。でも自民党の中では一番の後輩ですね。後がないわけですから。三重県はだいたい自民党が強いところですね。

藤波 そうそう、かなり強いね。こうやって「いま」私が無所属でも、自民党だと疑う者は一人もいないな。私は来年十月までであるんです、執行猶予が。だからできるだけゆっくり行こうと思つているんだけど。いま私の小選挙区で、十二人の県議会議員のうち九人が自民党なんです。それだけ強いんだな。

■衆議院選へ初出馬

藤波 それで、国会の選挙をやることになった。そのときは客観的に非常に弱かったんだけど、小泉太志命という人が磯部町におって、道場を組んでおった。道場で剣を振っておったんです。この人は昭和天皇を守り抜くということに徹してきた人で、一日に三万三千回真剣を振るんだ。えらいですよ。

佐道 一日中、振っていなければなりませんね。

藤波 そうそう、それで最後には物を言わなくなるんです。誰にも会いたくないといってね。私はその人に指導を受けました。私の友人山路啓雄が道場をつくるのに努力して、そこへ入っておった。それは不思議なことで、昭和四十二年の衆議院選挙の直前、やっている最中だな、頭の上の黒雲がザーッとかかってどうにもならんな、と思って道場に入った。しかし道場から出てくるときには、パーッとその霧が晴れて、これで当選できるな、と思ったことがあるな。その人の横に行って、「君は必ず当選するから、当選して行ったら、本会議場で深呼吸している。直に天皇陛下の側へ行って仕事をすることになる。深呼吸だけしてくれ。それで帰ってきたらまた来いよ」という優しい人だった。青森の出身の人で、今泉定助の門下生をしばらくやって、できる人だった。

伊藤 その道場で、先生ご自身も剣道をやられたわけですか。

藤波 やらない。わからない。

伊藤 お手伝いをしただけですか。

藤波 そうそう。わからないね。

伊藤 衆議院の、三重二区というのは、定数がいくつですか。

藤波 四人。

伊藤 このときはもちろん自民党の公認候補ですか。

藤波 なれないんだ。最後までなれないんだ。最初の四十二年の時は全部で七人立候補したのかな。私のほかに、県会の先輩の岩下かねという人と、民社系で一人、それから社会党の系統で一人。これが見んな強いんだ。それで田村「元」、野呂「恭一」、角屋堅次郎というのが強いんだ。

伊藤 それは自民党ですか。

藤波 角屋は社会党、自民党は田村、野呂が断然強い。その三人のほかに、新人が四人ぐらい立候補した。先輩はみな私より強いんです。負けそうだけれど、やるとかやらないとかということとは考えたことがなかったね。やるのが決まっていたから、やろうと。

伊藤 公認というのは県連で申請するんですか。

藤波 そうそう。

伊藤 県連で公認を受けられなかったということですか。

藤波 初めの頃はね。岩下かね中心に動いていたから。斎藤昇さんが県連会長で、これはいかんと思って東京に出て、田中角栄さんとか福田赳夫さんとかに話をして、やっと最後の頃に公認が決まったのかな。

伊藤 最終的には公認が取れたんですね。

藤波 取れた。

伊藤 選挙当日は、自由民主党公認候補だったわけですね。

藤波 そうそう。

伊藤 じゃあ、自民党の公認候補は何人いたわけですか。

藤波 四人。

伊藤 定数いっぱいですか。

藤波 定数いっぱい。

伊藤 誰かが落ちることになるわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 それは公認したくなかったでしょうね（笑い）。

藤波 なかっただろうね。あいつはいやな顔をしてね。それはもともと佐藤派だったから。岩下かねも佐藤派で出ているわけだ。いやな顔をしたよ。

有馬 東京に公認を頼みに行ったというお話でしたが、そういう人脈は、そのころはどういうふうに来ていたわけですか。

藤波 浜地文平。

伊藤 浜地さんは、さっきおっしゃったように河野派でしょう。そうすると河野派に行くわけですか。

藤波 行くわけだ。根本龍太郎なんていうのがいてね。田中さんのところも福田さんのところも行ったのは、根本さんの紹介だったな。河野一郎が前の年に亡くなってしまった。四十一年七月七日に亡くなったんだ。二つに割れるわけです。森清、園田直、そこに根本龍太郎、重政誠などがいて、もう片方が中曽根さんの方だ。中曽根さんの方には行かなかった。

理由ははっきりしているんだ。両方が争っているんで、どちらにしようかといって、浜地さんと一緒に挨拶に行った。そうしたら森清は「俺は何の力もないけれど、俺と一緒にやろう」と言った。中曽根康弘のところにも行ったら、「君は俺と一緒にやらなければ落選するぞ」と、こう言ったんだ（一同笑い）。だから森清のところに行くのが決まったんだ。本当に辛かったんですよ。官房長官になったときは、みんないやがったはずだよ。あんなやつが、生意気な、一人しかおらんような顔をして官房長官をやるのかとって怒ったはずだ。渡辺美智雄にしても宇野宗佑にしても、みな怒ったはずだよ。わかるわ。

伊藤 森清派というのは数が少ないでしょう。

藤波 数が少ない。だけれども、森清さんは伊勢に応援に来て、街頭演説をやってくださいといったら、街頭の辻々で話していたね。

丁寧だったよ。

伊藤 それは最初の選挙の時ですか。

藤波 最初の選挙の時。中曽根さんだったら、ああは行かん。

伊藤 森派というのは五、六人ぐらいのものでしょうか。

藤波 そうですね。

伊藤 それで本当に小さい派閥を成していたわけですね。

藤波 成していたわけですね。

伊藤 それで結局公認を取ったわけですが、公認料はもらったわけですね。

藤波 公認料はもらったと思うんだけど。私の小学校の、いま後援会長をしている山中隆雄君という人物がいるんだ。これがもらいに行ったようなことを書いてるんだ、「俺は行けというのでもらに行っただけだけど、佐藤さんの顔も、田中角栄幹事長の顔も知らんし、困った。でも公認料をもらって帰ってきた」と。そうなんだ。

伊藤 派閥の親方からも、少しは資金援助があるんでしょう。

藤波 そうですね。

伊藤 そういふのは、ご自分ではなくて、会計責任者が全部やるんですか。

藤波 そうですね。

伊藤 選挙というのはお金がかかるものではないでしょうか。

藤波 かかるなあ。

伊藤 自分でも持ち出さなければならぬでしょう。それはないですか、饅頭屋からの持ち出しは。

藤波 饅頭屋の金では足らん。

伊藤 駄目ですか（笑い）。

藤波 県会議員の時に、毎日のように饅頭を売った金をポケットに入れて持っていたけれど、足らなかったな。饅頭屋ぐらいでは。

伊藤 下手をすると饅頭屋がつぶれちゃうんじゃないですか（笑い）。

でも財政的な支援者が地元にもあったわけですか。

藤波 いや、ない。財政的に応援するというような習慣のないところだったな。尾崎罌堂、浜地文平だからな。あれが習慣なんだ。冷たいな。だから、こいつらが金を持ってこなければ総理大臣にはなかなか簡単にはなれんな、と思っていたから、リクルートになったときに、気持ちはわりあいさっぱりしたね。

佐道 そもそもは浜地文平さんとは、どうしてそういう密接な関係になったんですか。

藤波 浜地文平というのは、度会郡南島町の出身で、私のおやじも南島町で生まれて、島田という姓だったのが、藤波の家に子供がなかったもので、小さいときに藤波のところに養子に来て大きくなった、という経緯があるんだ。だからもともと南島とは縁があるんだね。

伊藤 それでお父様がお知り合いだったんですか。

藤波 おやじは早くから知り合っていた。

■国会議員となる

伊藤 最初に国会に行かれると、本当に一年生議員ですね。どういう行動をしたらいいか、あまりよくわからないんじゃないですか。

藤波 友達がいたからな。河野洋平とか佐藤文生とか、いまの塩川正十郎とか。

伊藤 塩川さんも一緒ですか。

藤波 一緒です。公明党が初めて出た年です。

伊藤 そういう人たちとは、そこで初めて会ったわけでしょう。昔からの知り合いは国会の中にいないじゃないですか。

藤波 ええ、そうですね。みんなそんなものだろう。だんだん覚えていくんだろうな。

佐道 雄弁会の関係で先輩の方がいろいろと教えてくれるとか、そういうことはないんですか。

藤波 直接にはなかったね。知ってはあったけれどね。政治的な関係というのは、国会議員になってから始まるんだろうね。

伊藤 国会議員になってからですか。

藤波 ええ。そういうこともあるな。

伊藤 森派の人たちがいろいろ教えてくれるわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 どなたが一番一所懸命やってくれたんですか。

藤波 上では藤尾正行。ちょっと上だね。無愛想だったけれど、例えば政務次官の人事の時に、副幹事長の竹下登に電話をするわけだ。竹下は政務次官担当副幹事長だ。「おい、竹下君。俺のところの藤波が政務次官になってもいいんだ、ならしてやってよ」と言って頼んだ。そんな頼み方はないと思うんだけど、そんな物の言い方で頼むんだ。「ああ、そうか」といって、向こうもわかったようにやっていたな。科学技術政務次官、文部政務次官。

伊藤 最初に当選したときは、佐藤内閣ですね。森派は森さんも入閣していないでしょう。

藤波 選挙の時は総務長官。沖縄問題をやっていた。

伊藤 じゃあ一応は主流派の中に――。

藤波 いた、ということになっているわけだ。園田直とか。

伊藤 この森派は、このあとどうなるんですか。

藤波 三月、その年に死んで、園田直が会長になる。

伊藤 今度は園田派になるわけですか。

藤波 園田派になるわけだ。完全に福田好みになっていくんだ。角福戦争の昭和四十七年には完全に福田のほうに組み入れられるわけだ。

伊藤 福田派のほうに入って行くわけですか。

藤波 その中でも私の選挙区は、浜地文平以来の縁があって、河野

一郎との関係は言うけれど、福田赳夫との関係は全くないんだ。そういうわけで、何かやるときは、河野の縁で中曽根になるんだ。中曽根に頼るといのが、自分としては一番筋が通るように思うので、「そうさせてもらえんか」と園田直に言うわけだ。それは三回目目の選挙の時ですね。それで園田直の秘書が私の選挙区にやってきて、金を持ってうろろろするんだ。「これを受け取れ」と言う。「そんなのはいらん、受け取るわけにはいかん」といって、一回無派閥で選挙をやって、選挙が終わってからまた園田直のところに行って、「すまんけれど、わしは当選してきたけれど、認めてくれ」と言うわけだ。そうしたら園田は私の目の前で中曽根さんに電話して、「中曽根君、すまんけれど、藤波を預かってくれ」と言うわけだ。「それならそうしようか」と。なかなか難しいんだ、派閥は。

もっともそのときには、中曽根さんが通産大臣兼科学技術庁長官できておって、私は科学技術庁の政務次官だった。「すまんけれど、俺は通産省が忙しいから通産省に行くから、科学技術庁のことは藤波に相談してくれ」と言って、中曽根さんは役所に来ないわけだ。来ないからやるわけだけれど、こっちは科学技術のことはわからんしな。困ったよ。何かアメリカで、ニクソンかな、原子力のことを話すのに、「すまんけれど、これだけ頼んでくれ」といって、事務次官の言うのをそのまま受け売りして、田中総理大臣に言ったことを覚えてる。さっぱりわからなかった。でもまあ、思い出としては、やらせてもらって面白かったよ。行って来いというので、福井県で中川平太夫が知事をしておって、そこに行って頼んだ。それも原子力発電所のことだった。

伊藤 国会に当選されると、どこかの委員会に配属されるわけですか。藤波 入る。

伊藤 どこに入るんですか。藤波 文教にはいる。

有馬 先生はそういう意味では文教族ということになりますね。それはご自身も関心がおありになったんですね。

藤波 あった。関心というより何より、全部、私の選挙区の田村元さんが取り仕切っていたんだ。建設省に行っても田村さんがどう思うかによって決まるし、農林省に行っても決まるし、水産庁に行っても決まる。どこに行ってもそうなんだ。文部省だけは、田村さんは苦手だったんだ。それで、しかたない、空いているのは文部省しかないから、ついつい一所懸命やったんだ。文部省だけだよ、藤波さんはどう言っているかって、政策の行方を決めるときに、国会議員の名前を出して通るんだからね。通るのは文部省だけだった。このあいだ演説会で私は言ったんだけど、「文教をやってきて、文部省のいままでの仕事はみな自分でまとめたつもりでいるけれど、田村さんに礼を言わなければいかな。全部ふさがっていたんだから」（一同笑い）。このあいだ、そういう話をしたんだ。大笑いだった。

■「拓世会」の人々

伊藤 同期で当選した人でグループを作っておられるでしょう。

藤波 新生クラブ。

伊藤 いや、「拓世会」とかいいうんじゃないですか。

藤波 ああ、つくっている。

伊藤 これは誰が音頭取りですか。

藤波 それは大したことがない。同じように当選してきた者が集まっているだけのことだ。いまは誰がやっているのかな。続けて当選した者がやっている。

伊藤 これは続けているんですか。

藤波 いまでもやっている。

伊藤 同期会ですね。

藤波 同期会、自民党の中だ。

伊藤 自民党だけですか。

藤波 そうそう。自民党だけ。

伊藤 これは派閥とは全然関係ないんですね。

藤波 関係ない。

伊藤 ただ、同好会みたいなものですか。

藤波 そうそう。

伊藤 でもいろいろ便利は便利でしょう。

藤波 いろいろ便利ですね。

伊藤 情報もあるでしょうし。その中で一番親しいのはどなたですか。

藤波 みんなですね。

伊藤 河野洋平さんとか、山口敏夫さんもそうですね。

藤波 そうそう。

伊藤 これで新自由クラブの話になるんですね。

藤波 そうそう。

伊藤 あと、加藤六月さんとか武藤嘉文さん、塩谷一夫、佐藤文生、坂本三十次。この中で一番政治的に縁があった人は誰ですか。

藤波 河野洋平かな、やっぱり。

伊藤 文教族。

藤波 文教族。惜しいことをした。人間の評価ということは、政治の世界ではね、学校の先生もそうだけれど、それでも「白い巨塔」みたいな話がよくある。河野洋平と木部佳昭を比較すると、木部佳昭のほうが上だと中曽根さんは思っていたんだ。木部佳昭というのは河野一郎の秘書で、年中、暇があってもなくても、一軒ずつ訪ねて歩いていた人だ。選挙は強い。野田毅と山崎拓を見て、山崎拓のほうが上だと、中曽根さんは思ったんじゃないかな。つまらん話だよ。そのぐらい違う。

伊藤 ちょっと待ってください。いま先生は無所属ですが、自民党の派閥ではどこに属しておられるんですか。

藤波 派閥では、前官待遇でいくから来い、というものだから、江藤「隆美」君や亀井静香のところに行って、武藤嘉文と一緒に顧問ということではいるわけだ。

伊藤 中曽根さんの方じゃないんですか。

藤波 中曽根さんのところなんだ。中曽根さんはもう、じっと見ていると、みな馬鹿にしているな。もういいのに、と思ったけれど。あのことはね。

伊藤 じゃあ、派閥の親分を馬鹿にしているんですか。

藤波 いまは派閥の最高顧問だ。

伊藤 でも実際はオーナーみたいなものでしょう。

藤波 そうそう、オーナーだな。

佐道 先生は山崎さんのところではないわけですね。

藤波 山崎は抜けていったんだ。

伊藤 そっちにはついていかなかった。

藤波 ついて行かない。

伊藤 じゃあ、いまのところ中曽根さんのところにいるわけですか。

藤波 中曽根さんのところにいることにせんと面倒くさいものだから、説明するのが。私の場合ね。中曽根さんに逆らうのかとか、いろいろなことを言うから、面倒くさいわ。いちいちね。ときどき顔を出せば、それでいいことだから。そういうことにしているわけだよ。

■森清派について

伊藤 森派も定期的に会合をやっていたわけですか。

藤波 やっていた。

伊藤 毎週とか、毎月とか。

藤波 毎週やっていた。

伊藤 事務所はどこにあったんですか。

藤波 あれは今までいとうとどこかな。建設省の分所のところだったな。あの一角だ。

伊藤 霞ヶ関ですか。

藤波 霞ヶ関だね。よう食ったのを覚えている。カツ丼を食って、鰻丼を食って、蕎麦でも食べるかといって、三つも四つも食った。

園田直、根本龍太郎とか、白浜仁吉とか中川俊思とか、みんないたんだね。

伊藤 森さんの代貸しみたいな人は誰なんですか。

藤波 園田直。

伊藤 それで派閥を継承することになるんですね。森さんというのはどういう人でしたか。

藤波 いい人だったな。明るくて。

伊藤 あれは森コンツェルンの一族でしょう。

藤波 仲間ですね。中曽根さんにはないものを持っていたな。いい人だった。

伊藤 森さんは何が専門でしたか、というのも変ですが。

藤波 人柄専門だな。いい人だった。

伊藤 人柄ですか。族としてはどこにあったんですか。

藤波 どこにあったのかな。まあ経済だろうな。

伊藤 ご自身が経営者でもあったんですか。

藤波 いや、経営者はやってない。純粹に政治家だな。園田直もいい人だった。世の中ではいろいろ言うけれど、いい人だった。

伊藤 どういう点がよかったですか。

藤波 私が官房長官になったときに、そのときはもう「園田氏は」車椅子で、最後の時だった。「俺は福田さんにも言いたいことがいっ

ばいある」という。何か派閥をおまえに継承させるとか、そんなことを言ったんでしょうな。「福田さんにも言いたいことがいっぱいある。中曽根康弘にも言いたいことがいっぱいある。だけれども、世の中がおまえを官房長官にしたことによって、俺は何も言わんで死んでいく」といって、手を握って帰ってきたら、じきに死んだな。

だから政治家というのは、何を言うかよりも何を言わないかが問題だな。それは先生、たくさん聞き出してくださいよ。何を言わないかが問題だ。それは時代が変わっちゃうと、時代を踏み越えて行きますからね。だけれども、園田直なんか何を言いたいかということも、もうちょっと聞けばよかったですなとも思いますがね。

伊藤 園田直さんとは、どれぐらい年齢差がありますか。

藤波 ずいぶん上だよ。親子ぐらいだ。よく連れて行ってもらった、熊本に。選挙区だからね。選挙区によく連れて行ってもらった。

伊藤 連れて行ってもらったといっても、選挙の時に応援にも行かなければ駄目でしょう。

藤波 そうそう。いい人やったね。

■文教族として

有馬 衆議院に出られて、文教委員会に最初に入られてから、これは自分がやっていくことだとか、こういうことならやれるとか、そういう感覚はどうやってつくっていくものですか。

藤波 自然にできるんだな。鈴木宗男が外務省であれだけの発言力を持つには、ずいぶん詰めた努力があったと思うよ。私の場合、文部省は西岡武夫と藤波孝生だ。その代わり、何でもやったけれどね。

伊藤 河野洋平さんも文教族でしょう。

藤波 文教族だけれど、河野君の場合は、だんだん政治の世界に没

入っていくわけだな、突っ込んでいくわけだ。私や西岡は、文教で文部省に残っているから。そういう部分があったな。

伊藤 政治に突っ込んでいくということは、つまり将来の総裁を目指していくということですか。

藤波 そうそう。

伊藤 先生の先輩の文教族という誰がいるわけですか。

藤波 あまりいないね。

小池 坂田道太さんとか、竹内「黎一」さんとか。

藤波 坂田はね。

伊藤 坂田さんとの接点はありましたか。

藤波 あった。坂田さんは、地元の前市長選挙の応援にも行ったことがあるな。

有馬 そうすると、藤波・西岡でやりたいようにやれたんですか。

藤波 そうそう。

伊藤 やりたいようにやれるまでには相当時間がかかったわけでしょう。

藤波 かかったね。やりたいようにやる者があるほうが便利なんだね。役所にとっても便利だし、大蔵省も便利だ。私に、「こんな予算でもういいですか」といって、主計が必ず最後の挨拶に来るとかね。ほかの何をやっていてもね。官房長官の頃でも、文部省の予算、文教予算は「これでいいですか」といって、最後まで言ってきたな。そんなものだよ。

伊藤 最初、国会に入ったときに文教委員会に属して、自民党の中でも文教部に属するんですか。

藤波 属するわけだ。文教部に属して、文教のほうをやる。例えば京都の知事選挙の時に、組織委員長の竹下登と文教科長の藤波とで、大本山や大きな神社に二人でお詣りに行くわけだ。ちゃんとお布施を包んで。それぐらい、ふだんから努力しないと駄目だな。文

教のことならあいつらに聞け、ということにならんと駄目だ。

■竹下登について

伊藤 さっきからよく竹下さんのことが出て来ますけれど。

藤波 好きだった。青年団の出身で、好きだった。

伊藤 国会では竹下さんの方が先輩ですか。

藤波 大先輩。組織委員長と文教科長の違いぐらい違う。

伊藤 年齢的にも違うんですね。

藤波 違う。

伊藤 でも好きなタイプの政治家なんですか。

藤波 そうですね。ずっと先に行って申し訳ないけれど、中曽根さんが辞めるときに、竹下登か安倍晋太郎か、どちらかということになった。安倍さんが癌で終わったことを思うと、安倍さんにしてあげばよかったけれど、私は竹下派だったね。中曽根さんの周りには飯島清とか四元義隆とか、全部安倍晋太郎だったな。私にいまでも新聞記者十人ぐらいがついているのは、だいたい論説委員クラスになっっているんだけれど、その連中はそのときのこと、中曽根の後には安倍か竹下かということで、それぞれの政治部の会議があって、夜の夜中に「全部安倍だという、だけど藤波はまだ安倍だと言っていない。だから安倍と打つのはちょっと待て」といって、もう一日、二日待たせたという、その苦しみを乗り越えてきたものだから、いま一緒にいるんだ。結局、竹下だった。久米宏に至っては、「いま出ました。宇野さんが中曽根さんの書いたものを持って、党本部に帰っております。帰っております。たぶん安倍と書いてあるはずですよ。安倍です、安倍です。開けました、安倍です。あっ、竹下でした」(一笑)。

全部安倍だったんだな。そやけども、本当かどうかわからんけれど、国際的に世界に羽ばたいて、うちの中をまとめたものがあると思っただら、もっと世の中は変わっていたな。あれが安倍だったら、もっと世の中は変わっていたな。

伊藤 でも先生は竹下さんのほうがいいなと思っておられたんです。

藤波 思ってた。

伊藤 それで、中曽根さんもそう思ったわけですね。

藤波 思っただね。

伊藤 そこは一致したわけじゃないですか。

藤波 それは一致したけれど、こっちはそこへ持っていくのに、一致させようと思っただけだ。例えばね、中曽根康弘というのは夜の夜中だったら機嫌がいいんだ。朝は機嫌が悪い。だから竹下登を夜の十時に総理公邸に入れるとか。その代わり、朝八時にもう一人の大蔵大臣――。

小池 宮澤喜一さんですか。

藤波 そう、宮澤さんを八時に入れて、十時に安倍さんを入れた。それはできるわけだ。そこまではできる。そういうことはあるな。

またあいつに騙されたと思っただけか。そういうことはあるな。

伊藤 そうですか。竹下びいきなんですか。

佐道 竹下さんとは、先生が初当選された最初のころからおつき合いが始まったわけですか。

藤波 そうですね。そんなに深くなかったけれど、尊敬していたね。

伊藤 竹下さんは、入ってくる新人の教育係だと自分で言っていましたけれど、そんな感じなんですか。

藤波 そうだね。

伊藤 新人が入ってくると親切に、食堂はここで、とか。

武田 案内係ですね。

伊藤 そういうことを一所懸命やっただけか言っていましたけれど。

あの人は人に好かれる人なんですよ。

藤波 そうですね。

伊藤 比較的、敵が少ない。藤波先生も、あまり敵が多くないんじゃないですか。

藤波 それはみんなの意見を聴いている方だからな。

伊藤 同じ手法なんですね。

藤波 そう、手法は青年団方式だ。

伊藤 だから中曽根さんみたいにワッと引っ張っていくというやり方じゃないんですね。

藤波 ない、ない。小泉純一郎もそうだ。大統領だといっておだてられて、オオウマになっているけれど、あれは間違っただけ。あんなのじゃ駄目だ。何人かで事を決めればいいんだ。国の方向をね。するとみんな落ち着くんぞ。自分一人で決めるようなことを言っていて、周りが言うほど、反対のことをやるという。このあいだの「内閣改造」人事でも、なるべく言うな、放っとけという、ちょっと「交替する閣僚の」人数が多くなる。もう、いまや党内の空気は、放っとけ放っとけだよ。

伊藤 反対もできませんね。

藤波 反対も出ないけれど、そのうち出るから。

伊藤 一応人気がありますからね。

藤波 やっていることは滅茶苦茶だ。

伊藤 先生、だいたい二時間ですので、お疲れだと思えますので、これぐらいでやめておきます。今度は議員としてのご活躍をある程度詳しく伺いたいと思いますので、よろしく願います。今日は本当にありがとうございました。

一同 ありがとうございます。

藤波孝生 オーラルヒストリー

第2回

日時：2002年11月12日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

平松 大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■ 小学校時代の先生

伊藤 いま入院中なんですか。

藤波 そうです。抜けてきました。

伊藤 病院からいらっしやっただんですか。

平松 ええ、そうです。

伊藤 それは申し訳ありません。

藤波 いいえ。よかったら、このあいだまとめてもらったものに追加をすることを先にやらせてください。「黄緑色の表紙の小冊子

「神風館」を配布」

伊藤 先生は「俳号が」孝堂というんですね。

藤波 そうです。政治の世界より俳句の世界のほうが有名になった。

伊藤 いや、政治の世界のほうが有名でしょう。藤波先生の名前を言ってみてわからない人はモグリですよ。

藤波 いやいや、順天堂の若い看護婦に「今日は一時に行って、五時に帰ってくる」と言ったら、「会社ですか」という。だから「おう、会社だ、会社だ」と言ったら、「入院して留守にしているから心配なので行くんですか」と言うから、「そうだ、いっぺん会社の様子を見てくる」と言いましたよ。若い看護婦はみなそうだ。いいねえ。

伊藤 どういう人かと思ってるのかな。

藤波 いいよ。こういう会社かな、と思ってるんだらう(笑い)。

伊藤 じゃあ先生、この前のことに追加なさることを先にお話しくださいますか。

藤波 小さい頃の一番の思い出は、森永大将のこと。全国の菓子屋をずっと回っていた。森永のキャラメルだ。体の大きな二メートル

二〇センチぐらいある大男に兵隊の服を着せて、森永大将とっていた。それを馬車に乗せて、ずっと町を回るんです。それがときどきやって来るので、それが思い出になっている。森永大将、森永大将と聞いていた。

伊藤 それは森永の宣伝ですか。

藤波 そうですね。いまでいう宣伝ですか。非常に懐かしい。大きな体の人で、まだ生きているのかな、もう亡くなられたかな。

伊藤 ああ、人形じゃなくて人なんですか。

藤波 人です。

武田 二メートル二〇というと、すごく大きいですね。

藤波 大きい。それに軍隊の帽子をかぶせて、森永大将といった。

伊藤 この話は僕は初めて聞いたな。

藤波 田舎だと子供がみな集まってくるし、喜んでね。それが非常に懐かしいということが一つ。

伊藤 それは子供の頃ですか。

藤波 子供の頃です。それから国民学校、宇治山田市立進修国民学校のこと。一年生の担任は河崎孝子という女の先生。情熱的で九十を越えてもお生きて、歌を歌いかけたならマイクを離さないというので有名な人だった。去年か一昨年、亡くなりました。何回も手紙を寄越して、返事を書く、「返事を寄越すな」という。なんで返事がいかんのかというと、「えらい人を飾りにしてまた大きな顔をしている」といって、ここの看護婦が怒るから、手紙を寄越すな、返事はいらん」といって、へたな短歌を詠んで書いて送ってくれたな。

二年生、三年生は永岡きくという女の先生。これは年をとって、一人で外国に旅行に行く。なんで行くんですか、といったら、ぼけないために行くんだという。ぼけ防止だ。いまでも元気で、娘婿が鉄工所をやっておりますが、一人で旅行をしています。

四年生、五年生の担任は藪野先生、それから村木繁三先生だった。

これは結核で、早く亡くなりました。この人は戦争反対だな。非常に合理主義の人で、よく宿直の晩なんか遊びに出かけていくと、非常に合理的な話をしてくれた。当時の校長さんは仲上彰一という人で、よく職員会議の場でたてついておったのを覚えている。

六年生は枘田綱郎という人が担任で、「おまえらの言うことは、わかっちゃうるか、わかっちゃういねえか、わかっちゃういねえ」というのが合言葉、子供らに親しみを込めて言うセリフでした。そういう先生でした。「わかっちゃうるか、わかっちゃういねえか、わかっちゃういねえ」、わかっちゃういねえや。途中で転任していきまして、村木繁三という人がまた来ました。最後は、召集で軍隊に行っていましたけれど、帰ってきて卒業式のオルガンを弾いた。ポロポロ泣きながらオルガンを弾いていたのを覚えていますよ。

伊藤 よく小学校の先生の名前まで覚えておられますね。僕はすっかり忘れている。

藤波 いやいや。それで先生が休むと来てくれる先生が代行でいて、住田正郎という先生がおった。その時間になると、チルチル、ミチルの「青い鳥」をやってよとみんなが頼んで、「青い鳥」の話をしてくれた。私がリクルートでやつつけられて、世の中が大騒ぎしているときに、一軒ずつ訪ねて、住田先生を訪ねたら、「それでええ、それでええ。人に迷惑をかけるよりも、人に迷惑をかけてもらった方がいいんだ」と言っておったな、えらい先生でした。亡くなりました。

福田岩次郎とか、西井昌子とか、いろいろな先生がおられた。みんな積極的な、心の温かい、いい先生だった。

六年生のときに如雪園というところで相撲の大会があって、進修「小学校」は優勝したんだ。弱いと思っていたら優勝したというので、みんな喜んだ。中村純一というのが校長さんでしたが、涙を出して喜んでおったのを覚えております。夏みかんを賞品にもらいま

した。それと帳面を一冊ぐらいもらったかな。私がお先鋒で、中堅は田村文夫というので、一生市役所において、早く亡くなった。大将の森田耕作も亡くなった。三人で二勝すれば上にあがれるトーナメントで、私は二回勝ったかな。まあ優勝したのでよかったと思います。

■高校の野球部で

藤波 それから「宇治山田高校の」野球の思い出をちょっと言います。久保田雅也というのがキャプテンで、細貝二郎というのが野球部長だった。ときどき野球部長がストライキをやって、出て来ない。「おまえらの言うことは馬鹿げとるんで、おれは行かん」といって、先生がストライキをして、野球部の練習に出て来ないんだ。それをまた、みんなが「おまえが行って連れて来い」というので、そのころのいろいろな話をした。高等学校の一年生のときだな。

「細貝先生、お茶、お茶と言うけれど、お茶を振る舞うのが好きな人はいいけれど、嫌いな人でもお茶をやらなければいけませんか」と言ったら、「人生の終わる頃になったらおまえもわかるようになる。もうちょっと辛抱して、嫌いな人を好きになるように努力せい」ということでした。それがお茶の心。

それから野球部で合宿があって、練習して練習して、足が棒のようになつて、合宿から帰ってくるのに、ごろんと大きな道にひっくり返って寝て、明るいお月さんを眺めたのをいまでも覚えてます。そういう苦しい野球部の思い出があったればこそ、野球部の懐かしい思い出が次々と蘇ってくるような気がします。非常にきつかった。

■早大で影響を受けた人々

藤波 それから早稲田に行ってから、このあいだもお話したように、早稲田大学雄弁会と、早稲田大学商学部学生会と、早大南勢会の三つが大きな団体でした。南勢というのは、南伊勢のことです。

雄弁会では、いろいろ発声練習もやったし、政策の勉強もしましたけれど、先輩の話を聞くというのが、早稲田の三朝庵といったか、蕎麦屋の二階で先輩の話を聞くのが一番楽しかった。石田博英とか浅沼稻次郎とか、三宅正一とか中村高一とか、そういう先輩が来て、みんな本音で話をしてくれました。「相手が」学生ですからね。非常に感銘を受けたことを覚えております。池田「勇人」さんが、浅沼さんが日比谷で亡くなったとき、「ヌマは演説百姓よ」と呼びかけて甲辞を読んだけれど、まさに演説百姓の感じがありました。よかったです。

それからちょっと変わったところでは、東洋哲学の福井康順というのがあった。康順さんは例えば、「おまえらは中国がなんで共産党の天下になったか知っているか」という。貧しいからとか、戦争に飽きていたとか、いろいろな話を学生はするんですが、「おまえらは馬鹿者じゃ。そんなことを言うところからいかんのだ。共産軍が強かったから共産党の天下になったんじゃ。非常にはっきりしておる。共産軍が強かった。それを覚えておけよ」と言っていた。最後は京都の清水寺の門跡か何かになった。いっぺん訪ねればと言っていて、よう行かなんだ。残念ですな。

※福井康順（明治三十一年〜平成三年）：三十三間堂本坊妙法院門跡
門主、天台宗大僧正、早稲田大学名誉教授、大正大学名誉教授。昭和四十七年から五十年までは大正大学学長を務めている。最終回を

参照。

それから南勢会は、三人の先生がおった。一人は上井磯吉といって、早稲田大学の文学部か教育学部の教授になっていた。この先生は非常に思いやりのある先生で、一人ひとりを大事に育ててくれた。私が卒業して、伊勢に帰ってきて饅頭屋をやっているときに、上井先生が、「小汀利得さんがそのとき岡三証券の経済講演会に行くから、君はいっぺん会え」という手紙をくれたので、てくてく会いに行った。そうしたら、「上井さんからよく聞いておる」と言っていて、小汀利得さんが話してくれたことがある。第一は伊勢弁をやるな、標準語でやれ。そうでないと一生、田舎の政治家で終わってしまうぞ、ということでした。第二は、人の世話を一所懸命やれ、とにかく一所懸命やらなければいかん、ということ。第三は、人が金を取りに来たらやれ、金をけちけちしているようなことじゃいかん、金を取りに来る者は目的があって来るので、そういう者には金かと言って、金をやれ。以上三つを覚えてくれた。それは一生、非常に勉強になったと思います。

二番目は小西彦太郎といって、大蔵省で公認会計士の試験委員をしてやった。早く公認会計士の試験を受けたので、われわれ学生はしょっちゅう中野にある小西さんの家を訪ねて、そこで飯を食ったり、ウイスキーを飲んだりしておった。それは三重県から行っておる者が面倒を見てもらって、食べさせてもらった。実によく面倒を見られたと思います。

それから鈴木憲男という人がもう一人で、この人は時事新報の政治部長をやった。その後、鈴木「俊二」東京都知事の特別秘書になってやっていました。最後の頃に私学に非常に熱心で、私学の父兄の会の副会長か何かをやっていた。私が私学振興助成法をやっておったので、一緒に講演に歩いた。一つ覚えておるが、城下鯉しんがけいを大分県知事に食わせてもらって、うまかったな。あちこち行って、やっ

ばり私学は弱い。なんで弱いかというと、県庁の中で知事部局がいたい私学のことを扱っているんだけど、知事に睨まれるのでなかなか集まりにくいんや、という話だったな。私学というのはもっと強くなければいかん。それは日本の民主主義と大きな関係があるなということ、そのときに思った。そのときに鈴木さんは非常に熱心に、最後の人生の締め括りをやってくれたと思うな。そんな人が早大南勢会という場を使って、私どもと関係の深い生き方をしてくれたと思います。

■「嫁の基準」

藤波 それから別の話になりますが、私が家内とつき合っているとき、親にいったん家に連れてくるっていうと、おやじとおふくろが見てくれたんです。あとで、「どうや」とおやじに言うたら、おやじは「尻の大きな、ええ娘や」と言ったんです。それが藤波の嫁になった理由なんです。初めて言うんですけど、本人は知らないんだ。たぶん顔だと思っているだろうけれど、おやじは「尻の大きな、ええ娘や」と言った。

それで、ああそうかなと思って、自分の息子は日本航空の課長をしておるんですが、日本航空における女の子と一緒にいると、私のところに来た。ちょうど官房長官をしているときだった。見たら尻が大きいので、「ええ娘やのう、尻の大きなええ娘やのう」と言って、おやじが言ったそのままの言葉を直伝でやりました。

このあいだ、小倉遊亀さんの展覧会を見に行ったら、あの人の絵は、尻がないんですな。非常にきれいな絵が描いてあるけれど、遊亀さんの絵には尻がない。なぜかという、生活感覚がないんだ。尻が大きい小さいかというのは生活なんだ。だから考えてみると、

生活というか、どっしりして地に足をつけて歩いているような人が、藤波の家伝やな。顔より尻だ（一同笑い）。そういうことをどこかで書いておこうと思った。もうじき死ぬでな、わしは。死んだら、おやじはあんなことを言うとしたら、息子がその次の代の嫁さんを決めるときに参考にすればいい。

「追加分として話すことをメモした紙を見て」「嫁の基準」と書いてあるな。新婚旅行に行ったときのことをちょっと書いておこう。新婚旅行は大原美術館に行って、見て、それで岡山に泊まった。それから「かめ福」といったかな、厳島神社の前に「かめ福」というのがあるんだ。そこに泊まったが、大きな部屋だった。

それからいまの山口県の温泉——。そこに泊まって、それから別府の温泉巡りをして、「亀の井」か、一番いいホテルに泊まって、それで帰ってきた。それが新婚旅行だった。旅行公社に頼んで、大原美術館にいったん行きたい、行きたいと思っていて、そのときに夢を果たしたな。改良主義者だね。

■小泉太志命の「J」

藤波 それから最後にもう一つ。小泉太志命というのは、まとめてもらったものに書いてあるように、八戸に生まれて、あちこちで修行して、伊勢に落ち着いて、昭和三十年代から三十年間門外不出の行をとって、一日三万三千回の剣を振って、天皇を守った。日本の国と昭和天皇を守った。たとえば昭和天皇がアメリカに出かける。

そのときは、外国だから、日本の軍隊、警察がどれだけ行っても守れるものではない。ピストルでパンと撃てば終わりだからな。そのときに一所懸命になって剣を振って、天皇を守るわけですね。そうすると日本のあちこちで、今度は誰が一所懸命振っておるな、誰が

守っておるなということがわかるぐらい、何人かの人が日本で守っておったという話が、いまでもある。あれはなんと言ったかな、議員会館にある……。

平松 葦津さんですね。

藤波 小泉さんが、神社新報に陣取った葦津^{あしつゆ}珍彦^{ちんげん}にいったん会いたというものだから、私は葦津さんに話をして連れて行った。何の話をしたか知らんけれど、出て来たときに私は、「小泉さんというのはわしは知っておるようで知らないけれど、どのぐらい強いのか」と「葦津さんに」聞いたら、「宮本武蔵と佐々木小次郎が両方からかかっていっても、いまの小泉さんには負けるだろうな」と言った。一日三万三千回振ると、そんなことになるかという気がした。

昭和天皇が亡くなって、あとしばらく後始末をして、後を追いかけて八十歳で亡くなった。亡くなる前に、「日本はどうせにっちもさっちも行かないようになる。にっちもさっちも行かなくなったら、そのときに藤波の出番がある」と言って亡くなった。それを聞いておった連中がようけおるもので、いまでも、「日本はにっちもさっちも行かないようになる、そうしたら藤波の出番がもう一回あるぞ」と言っておるんだけれどな。ないと思うな、出番は。自分でないと思ってるから間違いないけれど、小泉さんはそう言ったな。以上、終わりです。

伊藤 じゃあやっぱり日本を守るために元気を回復されないといかんですね。

藤波 いかんな。

■ 神道政治連盟について

伊藤 では少し先に進みましょうか。この先のほうはあまりよくわ

からないんですね。初当選の一期生だと、あまりいろいろ活躍はできないですね。

藤波 そうですね。行こうといって、河野洋平、佐藤文生、菅波茂、そのへんと藤波孝生と連れだって旅行に行ったのが、懐かしい思い出かな。外国へ。石川「達男」というのが河野さんの下におった。伊藤 外国というのはどこですか。

藤波 あのとときはヨーロッパだね。

伊藤 それは何か名目があって行ったんですか。

藤波 勉強するといって行ったんだね。勉強するのに、どこからか金をもらったという覚えはないな。自分で出して行ったね。わりあいつましかったね、あのころは。

伊藤 何を視察するんですか。

藤波 いろいろあるな。飛行機に乗っておって、パーンと天井に頭を打ちつけて、下へ落ちたりしたこともあったな。

伊藤 エアポケットか何かに入ったんですか。

藤波 入ったんですね。「南無妙法蓮華教」と「南無阿弥陀」と「南無観世音大菩薩」と三つ言うてみて、「南無観世音大菩薩」が一番効きそうな感じがした(一同笑い)。

伊藤 何か一期生の頃に、靖国神社法案と関わったわけですか。最初に出したとき「昭和四十四年六月」、これは誰が中心になっておやりになったんですか。

藤波 誰が中心だったんだらうなあ。

伊藤 覚えありませんか。でもこれはなかなか難航する法案ですよ。ね。

藤波 そうそう。

伊藤 それと、神道政治連盟をスタートさせる「昭和四十四年十一月」ということは関係があるんですか。

藤波 あるんだらうな。神道政治連盟は上杉一枝という人が岐阜県

の神社庁長なんかやっておった。いま息子が皇學館大學の理事長をやっているかな。長崎の諏訪神社におる。おやしさんは岐阜におった。その人の話を聞いとると、本当に口から火が出て来るかと思うぐらい熱心な人だった。その熱意にほだされて、伊勢神宮の傍から出て来た藤波孝生が神道政治連盟議員懇談会の幹事役をやるわけだ。日本は神の国であるということを通じてやるわけだ。

伊藤 その神の国とさっきの南無阿彌陀仏はどういう関係になるんですか(笑い)。

藤波 神仏混淆だ。

伊藤 神道政治連盟というのは、かなり大きな団体なんですか。

藤波 各県で一名ずつ出ないといかんぞ、と私が言った。だけれど、選挙になると神社会がみんな推薦するわけだ。どの神社にも崇敬者がおって、その崇敬者が誰かを応援しているという関係なので、みんなが推薦してしまうので弱くなるんですね。本当に五人か六人の熱心な連中を叩き上げて鍛えることが大事だといって、私はそう言うて来たんだ。いまでも神道政治連盟というのはあります。

伊藤 これは選挙のときはかなり強いんですか。

藤波 強いですなあ。

伊藤 やはり神社関係者がほとんどですか。

藤波 神社関係者がほとんど。神社関係者の集いが神道政治連盟で、その国会議員懇談会というのがあって、国会議員懇談会が神道政治連盟の応援を受けてやってくるわけだ。

伊藤 それが靖国神社法案なんかもやるわけですね。

藤波 ええ。一番最後のときは、即位の礼、大嘗祭、あのへんで結実するわけだ。

伊藤 でも選挙のときには、いまおっしゃったように、たくさんの人を推薦するわけですか。

藤波 そうです。どうしてもそうなるんですな。

伊藤 やっぱり政治家としては、そういうところの推薦を受けたいものです。

藤波 そうです。受けたい。

伊藤 でも日本の中で言えば、仏教の政治勢力のほうが強いんじゃないですか。

藤波 仏教というか新興宗教が強い。古手の仏教はいかな。みんな一緒で、浄土真宗とか浄土宗とか日蓮宗とか、あのへんはまたやればいいんだけどな。一時、反創価学会でやりかけたんですけどな。いまは公明党が与党になったので、できないな。日本会議というのがある。日本会議がもって力を出して、神道政治連盟なんかやろうとしたことをやるといいんですな。

伊藤 でも日本会議というのはずいぶん頑張っているんじゃないですか。

藤波 頑張っているけれどね。会長は麻生太郎。最高裁の長官をやった三好なんとか「三好達」というのがいま会長かな。

伊藤 先生は日本会議とは関係なさっているんですか。

藤波 いまのこの時期になってからはやらんね。

伊藤 前はいかがですか。

藤波 前は、出発の頃ですな。

■ 科学技術政務次官に就任

伊藤 昭和四十四年「十二月」に、先生にとって第二回目の選挙がありました。これはまた楽勝だったんですか。

藤波 そうですね。四番目で楽勝。

伊藤 トップから四位になったわけですか。

藤波 いや、衆議院は第一回目のときも四番目。県会のときは最高

点。

伊藤 そうですか。衆議院は二回目も四番目なんですか。

藤波 二回目も四番目だったんだ。

伊藤 じゃあ危ないじゃないですか。

藤波 いやいや、四番目なら大丈夫なんだ。

伊藤 だんだん選挙をやっていくうちに、地盤は強くなるものですか。

藤波 そうですね、知名度ですね。山中貞則さんが総理府の総務長官で、公害対策の特別委員長を兼任しているときに、公害立法というのがあった。昭和何年だろうな。そのときに、山中さんに質問したのを覚えている。そうしたら「いまこの時点で、君とこういう議論をすることを記録にとどめることは余の本懐とするところである」と山中さんが言った。四日市の公害問題がぼつぼつ問題になってきた頃ですね。

武田 四十四年ですかね。

藤波 四十四、五年だね。

伊藤 二期目になると、だいたい政務次官が回ってくるんですか。

藤波 そうです、ぼつぼつ回ってくる。

伊藤 先生が一番最初におなりになったのは――。

藤波 科学技術。

伊藤 科学技術「庁の政務次官」ですね。これは「昭和四十七年七月の」田中内閣ですね。

藤波 ええ。初めは文部政務次官と思ったんだけど、加藤六月かな、誰かが運輸政務次官が飛び込んできたもので、パッと横にはみ出したんだな。それで科学技術の政務次官になった「加藤六月が運輸政務次官、内海英男が文部政務次官」。

伊藤 初めは運輸だったんですか。

藤波 文部だったはずなのに、パッと横に科学技術に行けという。

一番下の政務次官だな。

伊藤 あれも序列があるわけですか。

武田 文部政務次官は高いんですか。

藤波 だいぶ高いな。「科学技術は」庁だからな。

伊藤 この政務次官というのは、誰がどうやって決めるんですか。

藤波 総理大臣と担当の副幹事長だな。私の頃は竹下「登」だったね。

伊藤 竹下さんが副幹事長ですか。

藤波 そう。筆頭副幹事長だったな。

伊藤 そうすると先生は、このときはまだ森「清」派ですか。

藤波 そう、この前まともしてもらったのに書いてあるように、森派で、藤尾正行さんが、藤波君の面倒はおれが見るといって、園田「直」さんと相談して、それで竹下に電話した。「おれのところの藤波がやる頃になってきたで。頼んだよ」と言うんだな。

伊藤 いちおう政務次官のポストというのは、各派に配分されるわけでしょう。

藤波 誰がやるか。そのころ私に農林とか建設といってもそれは無理だから、党内のいろいろな様子も見て、どこかの政務次官にした方がいいなということ、人とポストを睨みながら、派閥を見ながら、決めていくんだらうね。

伊藤 政務次官というのは勉強ですか。

藤波 いやいや、勉強じゃない。

伊藤 実務ですか。

藤波 実務です。

伊藤 よく、政務次官というのは盲腸みたいなもので、と言うじゃないですか。

藤波 盲腸じゃないよ。われわれは盲腸じゃないという申し合わせをするんだな。どう見るかだな。役所ですよ、役所。一般がどう見

るかということよりも、役所がどう見るかによって政務次官の値打ちが決まるな。

伊藤 科技厅というのは、先生はあまり関係のない省庁でしょう。

藤波 そう、いままではね。

伊藤 そうするとかなり勉強しないとしょうがないですね。

藤波 それはしょうがない。シートピアとかね。シートピアというのは海に潜って行って、海の底の探検をやるという研究ですね。そんなことをやったな。勉強したよ。俳句の句集に載っているわ、『神路山』に。俳句のことしか覚えておらん。

佐道 そのときの大臣、科学技術庁長官は誰でいらっしたんですか。

藤波 中曽根康弘。通産大臣と兼任だ。「おれはもう通産省に行くから、君らみな藤波君に話をしろ」と言った。だから「私は」大臣待遇の政務次官だった。そういう意味ではわりあい良かったんですよ。

伊藤 じゃあ、この時期以前に中曽根さんと縁があったんですか。

藤波 それは、それで縁ができたんだ。

伊藤 中曽根さんという人は科学技術に非常に関心がある人でしょう。

藤波 そうそう。事務次官と電話でやっていたんじゃないか。役所には来なかった。「藤波君に任す、政務次官に任す」と言った。

伊藤 政務次官には事務次官がいろいろ報告したりするわけですか。

藤波 そうそう。事務次官と政務次官。私の前の科学技術庁の政務次官は栗山「ひで」という女の人だった。事故を起こして、辛かったんだ。私は政務次官になったときに、科学技術庁の政務次官室に神棚をつくって祀ったんだ。そうしたら事故はなかった。やっぱり伊勢神宮が守ってくれたんだなと思った。

伊藤 事故というのは、科学技術関係の事故ですか。

藤波 そう、実験の事故。土砂の土が崩れてきて亡くなったんだな。

その次に文部省に行って、同じように文部省の政務次官室に祀ろうとしたら、「ちょっと待ってくれ」と言ったのが井内慶次郎とか、参議院議員になった柳川「寛治」だ。井内が官房長で、柳川が総務課長か。「ちょっと待ってください、政務次官」というから、「なぜだ」と言ったら、「ここはいかんのや」という。「なんでいかんのや」

科学技術庁ではいいものを、心を扱う文部省が神棚を祀るのはよくないというのはどういうわけだ」と言って怒った。「いや、だからいかんのや。公明党の先生でも来たたら大変です」と言う。次の日になつたら三越から届け物ですというんだ。三越なんていう百貨店からおれのところに届け物というのはおかしいなと思ったが、持ってきた。木のロッカーを持って来た（一同笑い）。「この中にどうぞ祀ってください」という。しょうがないので、ロッカーの中に入れてお祀りしたのを覚えておるな。

有馬 科学技術庁のときは文句が出なかったんですか。

藤波 出ない、どこからも出なかった。

佐道 科学技術庁には公明党の方は行かなかったんじゃないですか（笑い）。

藤波 四十二年、私らの最初に当選した年から、竹入「義勝」とか矢野「絢也」とか、公明党が初めて出て来たんですね。

伊藤 科学技術庁の事務次官は梅沢「邦臣」さんという方ですね。

藤波 はい。まだ生きとるがな。懐かしい。

伊藤 よく話しましたか。

藤波 よく話した。そのあと私が文部省の政務次官におるとき、いまの法務大臣の亭主は誰だ。

小池 森山欽司ですね。

藤波 森山さんが科学技術庁の長官になって、アカ狩りと称してみんなクビにしたんですね。それで帰りに、隣だから文部省に寄って

くるわけだ、「クビになりました」と言っただけ。「そうか、おまえクビになったのか」と言ったが、みんなそれぞれ山を下って行ったな、かわいそうに。大旋風が吹き荒れたな。

伊藤 本当にアカなんですか。

藤波 いやあ、アカじゃないよ。

武田 組合が強かったんですね。

藤波 どうかなあ。

■本会議進行係を務める

伊藤 田中内閣で選挙がありました。「昭和四十七年十二月」、先生は三回目の当選をなさいますが、また四位ですか。

藤波 四位だろうな。政務次官になって大丈夫と思って選挙をやったら、そのとき田村元が労働大臣をやったんだ。向こうの方が大臣祝儀になっているんだ。こっちは政務次官祝儀だから、票が取れなくて、四番目だった。

伊藤 しかし安定して四位というのはいいですね。

藤波 いいですよ。落ちないんだもの。落ちないからいいわ。

伊藤 この第三回目の当選からかなり経ってから文部政務次官になれるんですね。三回目の当選のときに第二次田中内閣ができて、その文部政務次官は河野洋平さんになるんですね。先生は無役になっちゃうんですね。

藤波 無役だな。いっぺんは。

伊藤 そういうときは党の役職か何かがあるんですね。

藤波 あるな、そのときじゃないかな、「議長」という本会議の進行係をやったな。

小池 呼び出しというものですか。

藤波 呼び出した。

伊藤 あれはなんという職なんですか。

藤波 進行係。「議長」という。

伊藤 進行係をやるということは――。

藤波 名前を知られるな。与党にも野党にも名前を知られる。それでいいんだね。

伊藤 進行係をするとあとで出世すると言われていますが、そうなんですか。

藤波 進行係をやると、いままでやった先輩がみんなやって来て、「気をつけるよ」と言うから、「何ですか」と聞いたら、「夕べ何杯酒飲んだか、「議長」と言うてるあいだにわかるんだ。酒を飲んだかどうか、一発やったかどうか、みんなわかる。気をつけるよ」という。それを何人も言うてるんです。初めの先輩は酒の話。その次の先輩は女の話。その次の先輩は博打の話をする。順番に来る。そんなこと言ったら、進行係をやっているあいだ中は、神さんみたいなものでなければいかん。

伊藤 進行係は一人だけですか。

藤波 一人だけです。

伊藤 じゃあ注目が集まりますね。

藤波 いいですねえ。その代わり、選挙区へは帰れないですね。本会議がありそうだと待っていていなければいかんから、それは大変ですよ。それで徹夜国会なんかよくやりましたからね、沖繩国会とか。徹夜国会とかやるとえらかったですな、進行は頼みますよと事務局が言ってくるけれど、それはえらかったな、辛抱が。東京に残る辛抱、本会議場に座り込んで頑張る辛抱、その辛抱で鍛えられるんだな。

伊藤 声も大きくなければいかんわけですね。

藤波 声も大きくなければいかん。「議長」という。

伊藤 弁論部で鍛えられましたか。

藤波 そうですね。

伊藤 それは誰の指揮下にあるわけですか。

藤波 議長でしょうな。一番楽しいのは、内閣不信任案を出すときだね。当時は成田知己だ。成田知己君以下何名提出、内閣不信任案を議題とし、直ちに審議に入ること望みます」という、このときの気持ちのいいこと。パッと集まるんだ。

伊藤 そういう進行係の人事は、誰がやるんですか。

藤波 副幹事長だ。筆頭副幹事長だ。党の執行部の中心だ。

伊藤 副幹事長は一人だけですか。

藤波 筆頭はね。

伊藤 たくさんいるわけですね。

藤波 たくさんいる。各派閥から出て来ておる。筆頭が一人で、あれは幹事長代理みたいなものだ。「第二次田中内閣発足当時の副幹事長：(筆頭) 竹下登・渡海元三郎・斎藤邦吉・毛利松平・大森久司」。

■自民党水産部会との関わり

伊藤 先生は党の役員というのは、初めの頃はなしですか。

藤波 ないね。ああ、水産副部長をやっていた。田口長治郎という人が部長で、私は副部長をやっていた。それは衆議院に当選した一回生のときだ。

伊藤 水産ですか。

藤波 水産です。浜地文平が日本かつおまぐろの会長をやっていたからね。その縁故だ。それで日本水産会とか、水産庁とか、そういうところの若い連中に集まってもらって、マリンプランという海の

政策をつくった。それは有名で、いま何カイリですか。それに全部書いてあるんだ。わりに早かったんだね。

伊藤 それは法律ですか。

藤波 いや、政策の提言。北海道に行ったら、北海道中の漁業組合の代表が集まってきて、「先生、ご挨拶を」というから、「おれが何を言うんだ、専門家に」と言ったら、「まあやってください」というので、知ったような顔をしてマリンプランの話をした。

「何か好きなものがありますか」と言うから、「せっかく函館に来たんだから、函館のイカを食いたい」といったらバケツに何杯も持って来てね。あれは一生のうちに食べたうまいもの三つのうちの一つだ。函館のイカ、あれはうまかった。

伊藤 三重県にも海がありますね。

藤波 でも、イカはあんなにないな。やっぱり函館だな。

伊藤 伊勢はすぐ真珠になっちゃうから。

藤波 佐藤孝行なんていうのは、あの程度だな、イカだな。

伊藤 藤波先生と海はあまり関係なさそうな気がするけれど。

藤波 政策研究をやったんだ、一年生のときに。水産でもああいうことをやるというね。政策というのはどういうものか、意味がわかって、いいですよ。

伊藤 それは党の部会ですね。

藤波 党の部会、政調の部会。ああいうのも、三重県から行って、党の水産の担当をしていたのがあって、中に入ってくれて、苦労してまとめたな。

伊藤 政調会の部会というのは、その部会担当の事務局員がいるんですか。

藤波 いるんです。

伊藤 それは自民党の職員として。

藤波 そうそう。

武田 それは水産に詳しい方なんですか。
藤波 そうです、その人はね。

伊藤 そういう職員を抱えているわけですね。

藤波 政務調査会で抱えているわけだ。農林の党員の中でも、農林大臣みたいに威張っていたからな。

伊藤 党の職員が、ですか。

藤波 党の職員だ。

伊藤 そういう人で、議員になる人もいるんですか。

藤波 議員をやっておるより面白いだろうな、議員を使っている方が。

■文教族としての経験

伊藤 あと、党の政調会の部会には、ほかのところに加わりましたか。文教は――。

藤波 田中角栄さんが、昭和四十五年か六年か、都市政策調査会をつくった。日本列島改造論をつくったところだ。あの会は皆出席だったな。えらいものだと思って、毎回出たな。あいつに食らいつけ、と思った。それは非常に勉強になったな。

武田 あれは政調にぶら下がっている特別委員会ですか。

藤波 特別委員会です。

伊藤 先生は文教が中心でしょうけれど、かなり幅広く政策の勉強をされたんですか。

藤波 勉強はしたね。文部政務次官の時に、いろいろ考えてみて、毎晩五時半ぐらいになると、初中局や大学局や、各課の係長ぐらいの若い連中を政務次官室に連れてきて、ウィスキーでご馳走した。「政務次官バー」といっていたな。毎晩やったよ。それでいろいろ

なことを聞いた。みんな一所懸命やっているなという気がしたな。ああいうことをやるのは、いまはおらんわね。実際に若い連中は一所懸命になって勉強するからね。

伊藤 そういうものは吸収できるわけですね。

藤波 できる。その連中の励みにもなる。藤原「清：文部政務次官

付主任」君というのが担当で、最後は豊橋の技術科学大学の事務局

長かな。私立大学の事務局もやったな。

伊藤 担当というのは何の担当ですか。

小池 政務次官の担当ということですか。

藤波 政務次官を担当したんだ。

伊藤 そういう人がいるんですか。

藤波 政務次官の秘書だな。

伊藤 それは専任で秘書についているわけですか。

藤波 そうです。夕方、飯を食いながら話をすると、いい加減なことではなしに、本当のものになると思う。別に役人に威張るわけではない。鈴木宗男とは違うな。文教はずっと西岡「武夫」なんかやっていたから、非常に強かったな。文部大臣が来て、ああ、あれは文部大臣かといって、実際の文部大臣は西岡とか藤波とか、別なところにおるといって、実際の文部大臣は西岡とか藤波とか、別なところにおるといって、私の中の文教部会長は西岡武夫で、ゆとりのある教育をやるうといって、文教政策を立案して、私の政務次官の頃にだいたつくったのかな。

奥野誠亮が文部大臣で、これは日教組をやっつけるという。今村「武俊」という初中局長が省議をやっていると、奥野誠亮文部大臣が「今村君、君はもう辞めたまえ。日教組をやっつけることをようせんようなことではしょうがない、局長は務まらん」と言う。そうすると私が後ろにいて、袖を引っ張って、「大臣が辞めろ」というと本当に辞めなければならぬので、言うな」といった。そんなことが何回もあったな。奥野誠亮という人は、それは熱心だったね。

伊藤 奥野さんはそうだろうな。文部政務次官は前任者は河野さんですね。

藤波 そうだ。河野さんが、文部省から離れていくわけだな。天下取りを目指して行くわけだ。「文部省は」西岡武夫と藤波孝生だったな。

伊藤 文教族としては、文部省の予算要求をさうとう応援するわけですか。

藤波 応援するわけだ。予算の時期になると、政務次官室に陣取って、差し入れもあるし、うまいものを食ってやるわけだな、夜中に。

伊藤 大蔵との折衝の場合にも側面からやるんですか。

藤波 やる。どんどんやる。大蔵省の文部担当の主計官は青木「英世」とかいろいろおったが、いろいろあって、みんな楽しい連中だったな。

伊藤 担当の主査ですか。

藤波 主計官の主査だね。

伊藤 あの人たちはよく勉強しているんでしょう。

藤波 あれも勉強しているな。役所の連中をやつつけるわけだからね。局長や部長、課長をね。だから勉強しているわ。

武田 先生のお仕事は、そういう方に、こういう事業をやりたいので予算をつけてくれということですか。

藤波 つけてくれという。

武田 そうすると先生も勉強されないとはいけませんね。

藤波 それはそうだ。私が文部省の政務次官のときに立案して、実際に実行したのはそのあとだ。文教部会長を四年やったからね。だから大臣なんか誰がやってもいいんだよ、格好だけだ。そんなのどうでもいいや、誰でもいいやということだ。それでいま、ゆとりのある教育で学力が下がるとかいろいろなことを言っているけれど、あれはおかしいな。あのころに案を立てたんだ。「知徳体」という

けれど、「知徳体」と言っているあいだは駄目だ、「体徳知」で行け。少なくとも「徳体知」で行け。「知」は一番後だ、というのがあの頃の話だった。やっぱり時代だね。

武田 先生が政務次官のときですか。

藤波 それを言い出した。それで部会長になってからやったんだ。私学振興もその一つだし、各県に大学をつくるというのも一つだ。医科大学とか教員養成大学とかをつくった。

■奥野誠亮氏について

伊藤 さっき奥野さんの名前が出て来ましたが、奥野さんが大臣だったのは、先生が政務次官の時ですか。

藤波 そうです。

伊藤 奥野さんはどうですか。

藤波 まあ、内務省の後藤田正晴と奥野誠亮の二人に仕えたんだから、藤波は相当なものだよ。「後藤田、奥野は」旧内務省の双壁だ。伊藤 文部大臣としての奥野さんはどうでしたか。

藤波 よかったね。気持ちよかったね。とっちゃん坊やみたいなところがあつたけれどね。事務次官が木田「宏」に行つたから東宮大夫をやったなんとか「安嶋弥」というのが管理局長で、「私学振興で、いまから労働省に喧嘩に行く」と言うんだ。「何だ」と言つたら、「私学のことで行きますから、政務次官、すまんけれど行つてください」と言うものだから、「おお、行こう、行こう」と言つて、大雪の日だったが、労働省に行つた。文部省から代表で来ましたといつて、管理局長と二人で行つた。

迎へに出たのが橋本龍太郎と大野明だ。向こうにもいるわけだな。二人が来て、いろいろ話をしているうちに、向こうの方が話の筋が

通っているんだ。これはいかんと思って、よく考えてみた。応対している局長が、福岡県で参議院議員になったなとか「遠藤政夫・職業安定局長」いうのがあって、橋本と大野明が両脇におるわけだ。「おれは文部省を代表してきているのに、貴様は上着を脱いでおれに物を言っているとは何事であるか。けしからんじゃないか」と言っていて怒ったさ。怒らなければしょうがないので、怒ったね。話を聞くとなるほど、向こうの方が筋が通っているの、これはいかんと思っただ。

帰ってきたら、井内官房長が文部省の玄関において、「ご苦労さんでした。大臣に物を言いに行ってください」といって、明治神宮の前のところの家があって、大雪の中、井内官房長も、管理局長も藤波もみんな一緒に夜中に行った。そうしたら奥野誠亮が夫婦で出て、コーヒーを入れて出してくれたんだけど、「どうぞ」と言わへんのやな。家内も出すだけだ。ああいうときは、上役のところなので、「どうぞ」と言われなかったら手が出せないな。飲まんと帰ってきたな（一同笑い）。そのときは、これが内務省だなと思っただ。そういうものだね、すごいよ。「どうぞ」と言わへんもの。そんなことばかり覚えておるわ。私学の経営者が保険に入るかどうかという、そんな話だな。

平松 私学職員の共済関係の法律だと思います。

藤波 橋本龍太郎があのとときにおってな、ばかやろう。政治家というのは、そういう面白い話があるね。

伊藤 橋本さんという人は、非常に論理的な、筋の通る話をする方でしょう。なかなか相手にするのは大変ですね。

藤波 大変だ。自分だけ人気があるような顔をしているんだから。伊藤 橋本さんはたぶん、自己認識と外から見るのと全然違うんだらうと思いますね。文部政務次官になられたとき「昭和四十八年十一月」は、官房長官が二階堂「進」さん。二階堂さんにはあまり接

触はありませんでしたか。

藤波 ない。

伊藤 ずっと上の方、という感じですか。

藤波 ずっと上の方だ。

伊藤 通産は中曽根さんですが、中曽根さんとは。

藤波 あまり関係ないな。政務次官になったら、もう奥野誠亮だけだ。

佐道 奥野さんは大臣としてちゃんと役所に通って来られましたか。

藤波 いた、いた。

佐道 それは中曽根さんとは違うわけですね。

藤波 そうだ。

伊藤 奥野さんは真面目なもの。

藤波 謹厳実直だ。

伊藤 しかしあのそばにいるのは大変だと思いますけれどね。

藤波 大変ですね。袖を引っ張りながら、だよ。

■「神風館」二十世宗匠となる

伊藤 今日お配りいただいた「神風館」の二十世宗匠になるのは、ちょうどこのころなんですね。

藤波 そう、そのころだね。

伊藤 この前のお話だと、親子で継承するのは初めてだとおっしゃいましたね。いろいろな家が宗匠になるわけですか。

藤波 そうです。歴代も「冊子『神風館』」に書いてあります。

伊藤 親子で連続というのは珍しいことですか。

藤波 初めてだね。

伊藤 いまも先生は宗匠をなさっているわけですか。

藤波 やっています。

伊藤 任期はないのですか。

藤波 ないですな。やあ、やあと書いていけばいいんだ。

武田 先生は代議士になられてからもずっと俳句を作られていたわけですか。

藤波 そうですね。だいたい代議士のときは、政治のことを書いた。

山中隆雄君というのが「冊子『神風館』」にうまいことを書いているな。

伊藤 これはどういう人ですか。

藤波 小学校の友達です。

伊藤 いつかは二十一世になるわけですね。

藤波 そうですね。誰がなるか。そのときにみんな集まって相談するんでしょう。

武田 俳句を作るというのは、伊勢に帰られて発表されたりするということでしょうか。

藤波 どこで、ということはないな。ところ構わずだ。

伊藤 議場の中でもつくりますか。

藤波 つくりません。

伊藤 何かにメモしておくわけですか。

藤波 はい。メモはあちこちにしてしまうのでいかなのだけれどね。メモを残しておくと思うけれど、残らないな。どこかに行っちゃう。

伊藤 メモしておかないと忘れるものですか。

藤波 思い出しますね。このあいだ、『季題別「現代」俳句選集』とかいうのが、俳人協会から出て、おれのがたぶんあると思うから、

見てみるかといって、半日ぐらいかかって家内が一所懸命見ておた。あった、あったと言って、一句あったという。

天降り来て 山鳩啼けり 森たけき

という句が一句あった。そうか、そんな句を作ったかなと思った。一所懸命になってつくって、俳人協会から言うてきて出したんだらうけれど、一句だけ載っている。

伊藤 ご自分の句集もつくられるわけですか。

藤波 ああ、句集を持って来ますかな。『神路山』『五十鈴川』という句集をつくった。小さなフランス装版だ。

伊藤 そういう句集は、ふつうの出版ではないんでしょう。自費出版でやって、仲間というか知り合いに配るものですか。

藤波 そうですね。

伊藤 配れば、また人からもらうということになるわけですね。

藤波 なるわけですね。

伊藤 この前のお話だと、師匠はいないということですが、弟子はどうですか。

藤波 師匠的な友人が鷹羽狩行たかばしりまぎょうといって、俳人協会の会長をしている。親しくしていて、「藤波さん、三冊目は『伊勢湾』という句集をつくれ。『神路山』『五十鈴川』をやって、『伊勢湾』をつくると、山と川と海でちょうどいい」という。『伊勢湾』をつくれとい

たのは、私が句を終わらせて人生をやめようということになると思うので、「元氣を出して、長続きせえよ」という意味で『伊勢湾』

と言ったと思うんだ。来年の夏に『伊勢湾』をつくります。十月まであるからね。十一月ぐらいに俳句の句集のパーティだ。

伊藤 政治の再出発ですか。

藤波 再出発というか、もう最後になるか、というところだな。俳句だけは、それだけでも出しておかなければいかん。それでおやじ

のことをまとめようと思って書いたんだ。おやじのことが主です。あと、弟のことですね。

有馬 俳句は、政治が忙しいときもできるものですか。

藤波 できます。自分で一番面白いのは、中曾根さんが再選される

かどうかというときに、

群蜻蛉 進むも退くも ままならず

という句を作った。山中君がそれ「冊子『神風館』」にも書いていけるけれど、これは面白い。「進むも退くも ままならず」。どうなるかと思っておると、金丸「信」さんが、中曾根君にマイナスはないんだから、やらせたらどうだと言うわけだ。それで決まるわけ。あのときは全部二階堂だったな。鈴木善幸を初めとして、竹入も民社党の佐々木「良作」も。危ない、危ない。

私は、山中湖に別荘があるんですよ。山荘だ。これは赤坂の「大野」という料理屋の女将さんが持っておる山荘で、それを官房副長官のときに、竹下が「おまえ、家内が病気になる」と言うから、「病気や」と言った。「家内の病気は辛いでう。選挙区に置いておいてもいかんし、東京もいかん。夏は涼しいところにやるのがいいぞ」と言うので、「どこや？」と言ったら、山中湖だ。山中湖に出物があるので、それはいい。「大野」の婆さんに言って、それを分けてもらうた。その分、あとで竹下は金をくれたけれどね。山荘の分を。私は一銭も出しておらん。

その横に金丸信の山荘があるんだ。それは自衛隊のOBが夫婦で守をしていた。「その自衛隊のOBのところに行って、金丸さんの分と一緒にわしのところの山荘も見てな、と言って来いよ」と竹下が言うもので、「ああ、そうするわ」と言って、家内を連れて行った。それは病気だから家内の名義にしてある。それで「すまないけれど、頼む」と言った。それがよかったんだ。金丸さんという人は。自分のところのそばに山荘をとって、藤波はおれのことを本当に思っているな、という気がしたんだ。住まいを先生のところに移すということだからね。いまの若い者はそんなことはないけれど、昔の人はそう思うな。それと一緒に、金丸信という人は、藤波孝生を本当に信じてくれたんじゃないかな。面白いもので、直接には一

言も言わない。おそらく自衛隊のOBが言っているに違いない。

伊藤 そういうことは竹下さんが考えるんですね。

藤波 ありがたいな。「そういうのは金丸が喜ぶからな」と言ったな。わかっていたんだらうな。

伊藤 竹下さんというのは、そういうふういろいろな世話をする人なんですな。

藤波 そうです。

伊藤 いままでのお話の中で一番たくさん出て来た人名が竹下さんですからね。自分の派閥の人じゃないのに。

■大平正芳のこと

藤波 大平「正芳」という人は面白い人だったな。一番最初に、劇団四季の浅利慶太と牛尾治朗がやって来て、「大平が飯を食いたい」と言っているけれど、どうか」と言うから、「行く、行く」といって、飯を食うことにした。行ったところ、あれはいい女だったけれど、大平さんの二号だな。それで、すごいと思った。初めての男と飯を食うのに、二号のところを飯を食うというのはえらいものだと思ったな。えらいものだ。

伊藤 藤波さんでは考えられませんか。

藤波 労働省に「大臣で」行くとき、総理官邸の部屋で「大平が」、「君は文部省だと思ってここに来ただらう」と言う。「はあ」と言った。残っているのは、私と谷垣のおやじ「専一」の二人だけだ。

「文部省だと思ってきました」「すまんけどな、君は文部省だったから、文部省の藤波というのがおったな、ということにしかならん、終わってしまふ。労働省に行け。労働省に行って勉強しろ。これから半分ずつの世の中になる。働く者の仲間の意見を聴くというのは大事な

ことだ、行って来い」「ああ、労働大臣ですか」「労働大臣だ」。

労働省はさっき言った、橋本と大野明と喧嘩しに行ったときに思っただけで、あとは全然知らん。労働省って何をするとおるかと思っただ。それでもそのおかげで、官房長官や国対委員長が務まったんだね。大平という人はえらい人だったと思うわ。谷垣が文部大臣だ。巡り合わせだね。

伊藤 それはだいぶ後のことになりますね。

武田 第二次大平内閣ですね。

伊藤 大平さんとはその前から多少接触があったんですか。

藤波 いや、大したことないな。

佐道 その大平さんの食事の誘いというのは何かきっかけがあったんですか。

藤波 あったんでしょね。「あの若いのは誰だ」「藤波だ」ということになったんでしょね。

伊藤 文部政務次官のときの事務次官が村山松雄さんという方ですね。官房長が、さっきおっしゃった井内さんですが、この人たちのことはいろいろとご記憶はありますか。

藤波 村山というのは、最後に文化財の保護委員会の事務局長をやっておって、「御木曳き」を文化財に指定しようと思っただけのことがある。そのときに頼みに行ったのが村山だった。

伊藤 何を文化財にするんですか。

藤波 「御木曳き」。

平松 伊勢神宮の式年遷宮の行事で、木を、川を曳いたり、町で曳いたりする行事があるんです。

伊藤 あまり聞かない言葉ですね。井内さんというの方は、いかにもお役人という感じの方ですか。

藤波 そうですね。ミスター文部省だな。

■政治工学研究所の座長となる

武田 そのころ、河野洋平さんとか西岡さんとは教育問題について話し合われたんですか。

藤波 政治工学研究所というものだ。

伊藤 それは文部政務次官になったすぐ後、できたんですね。その年のうち「昭和四十八年十二月」ですね。この政治工学研究所というのは、青嵐会に対してつくったんですか。

藤波 そんな認識はなかったけれど、河野君を中心にしてやっていたことと、私が座長になって、河野洋平が代表というのか、会長というのか。

伊藤 会長と座長は違うんですか。

藤波 違うな。

伊藤 会長はシンボルですか。

藤波 そうです。座長はまとめ役だ。

伊藤 じゃあ実際の中心という感じですね。

藤波 いや、河野だ。

伊藤 河野さんが中心ですか。

有馬 この政治工学研究所という政策集団の名前そのものが、自民党の政策集団としては当時非常に新しく聞こえたと思うんですが、こういう名前は河野さんの趣味ですか。

藤波 青嵐会というのは、いつ出発しているんだろう。

伊藤 この同じ年の、ちょっと前ですね。

藤波 向こうも名前を一所懸命考えて、こちら名前も考えていた。向こうは石原慎太郎が考えたんだ。こちら名前も青嵐会しかないな、と思ったんだ。政治の集団で、青年、若い者が集まって、山の

上から吹き下ろしてくる風で青嵐会。向こうが青嵐会というのを早くつけたというか、同じころだな。向こうが青嵐会だということだ。おかしいな、おれは青嵐会だと思ってるのに、おかしいな、と思っただけけれど、まあいいやということだ、「青嵐会と思っただけでやめた」と河野君に言っ、政治工学研究所になった。「こうなったら、何かわけのわからん名前がいいぞ」と言った（一同笑い）。それで政治工学研究所というのは、わからんからいいんだ。何かわけのわからん名前にしようといった。

伊藤 政治工学というのはい体何ですか（笑い）。

藤波 わからないんだよ。

伊藤 これは議員さんだけの集団ですか。

藤波 そうです。議員だけです。

伊藤 何人ぐらい集まったんですか。

藤波 二十人ぐらいはいたろうな。

伊藤 だいたい若い人たちですか。

藤波 そうです。当選回数も同じぐらい。

伊藤 なんとなく、あとで新自由クラブになる人が多いですね。

藤波 多いです。そこから「新自由クラブが」分かれたんだね。それが何人か新聞記者の仲間とか一緒にあって相談するわけだ。どうやってやるか。そのときに、毎日新聞の岩見「隆夫」とか、読売の田村「祐造」とか、ああいうのがみんなおったんじゃないかな。

それで葉梨「信行」が藤本孝雄を呼んできて、あれはどうだということだ。藤本と話したら、その連中の中から、話が外に出ちゃったんだね。新聞記者を中に入れて危ないんだ。待っとれ、ということだ。待っているのはいいんだけど、ほかの社が聞いたときに黙っていないわけだ。だから危ないんだ。それで、新自由クラブが発売していることになったんだ。そのあと、伊勢で講演会があって、早くから講演の予定をしておいたものだから、河野洋平、稲葉修、

秦野章、藤波孝生。そのときに壇の上で河野洋平が泣いて、稲葉修が「政治家というのは絶対に涙を出したらいかん」と言ってたしなめたのを覚えてるな。えらい空気だった、そのころは。ぎりぎりの。

伊藤 それは新自由クラブができる頃の話ですか。

藤波 そう。反田中だな。

武田 政治工学研究所をつくったときには、何か特別な目的があったんですか。

藤波 河野洋平を世に出すことになるだろう、というような気持ちだったね。少なくとも私の気持ちはそうだったね。

伊藤 それは派閥の芽ですね。

武田 先生が呼びかけ人なんですか。

藤波 いや、河野洋平だ。

伊藤 これはよくハト派だと言われますが、藤波先生は自分でハト派だと思われませんか。

藤波 思う。

伊藤 ああ、そうですか。いままでの話を伺っていると、あまりハト派的じゃないな、と思っ、ていたんですが。

藤波 絶対にブッシュの路線とは反対なものね。小泉「純一郎」は絶対に追隨しちゃいかんよ、間違っても。日本は平和国家だから。

「私は」後藤田よりずっと左だ（一同笑い）。

佐道 それはずいぶん左ですね（笑い）。

伊藤 もう社会党に近いんじゃないですか（笑い）。

藤波 社会党よりもっと左だよ。

伊藤 どうもよくわからんですね。

藤波 わからんな、政治家というのは。

■ 榎枝元文氏について

伊藤 いままでお話を伺っていて、ハト派だとはあまり思わなかったんですが。さっきヨーロッパに行かれたというのは、このころですね。

藤波 その前だろう。

伊藤 年譜によるとこのころジュネーブに出かけておられますが、それとは別なんですか。

藤波 青年対策の特別委員会で行ったな、二回目にジュネーブに行ったときは。違うかな。

有馬 ILOと書いてありますね。

藤波 ILOは文部政務次官のときだ。

有馬 ヨーロッパは、それが二度目ですか。

藤波 七月十四日のパリ祭に行ったのはいつだったかな。

伊藤 ジュネーブに行かれたのは「昭和四十九年」六月八日になっていますね。

武田 朝日新聞で調べたものです。

藤波 ILOには、森喜朗と松永光と、文部省の事務次官をやった、早く死んだなんとかいうのと私と四人で行ったんだな。日教組の榎枝「元文」。それは田中内閣、文部政務次官のときだ。

小池 八四条問題ですね。

藤波 それは榎枝に反対しに行ったわけだ。

伊藤 榎枝さんとは直接ぶつかったことがありますか。

藤波 ある、ある。「榎枝は」日教組の委員長をしたし、総評の議長をやった。私がリクルートでやつつけられて、どうにもならなくなっただけから、一番親しくなったのが富塚三夫だ。榎枝が電話をかけ

てきて、「藤波さん、おれはいま中小企業の貿易の仕事をしているんだ」という。その財団の理事長か何かをやっているんだな。「三重県のあるところの説明会をやることにしたら、あんたのためになるか」と言うので、「おれのところは小さい商売人はようけあるけれど、外国と商売やるような商売人はおらんで、四日市に行こう」と言った。それで三重県の商工労働部長を紹介して、四日市でやったら、四日市の人が喜んでね。「ここは藤波さんの選挙区か」と言うから、「違う、四日市は違うよ。おれは三重県で紹介したというだけでいいから」と言ったことがあった。だから、ああいう連中は情が厚いんだ。

伊藤 やっぱり社会党なんだ（笑い）。どうも信じ難いけれど。それまでは日教組対文部省で対立していたわけでしょう。

藤波 対立していたけれど、意味はわかっていたからな。何が問題かという意味がわかっているから、いいんだろうな。それでも覚えているけれど、奥野誠亮と榎枝が初めて会談することになって、そのときに社会党の山口「鶴男」とおれと二人で相談して、段取りしたんだ。奥野誠亮が「やれ、やれと言うのでやることにするけれど、なんと言ったらいいか、何かさっぱりわけがわからん」と言ってきたもので、「馬鹿なことを言うな、布団の中に入ったら、ちゃんと封緘ぐらい頭の横の枕元に置いてやるんだ」と言ったのを覚えておるな。「ああそうか」と言って、それで会談したというので、よかったですといったな。中味が問題じゃないんだよ。わかっているんだよ。

■ 文部大臣永井道雄のことなど

伊藤 さて、文部政務次官を四十九年にお辞めになって、その後三木内閣ができて、文部大臣が永井道雄さんになる。

藤波 そうだ、馬鹿者だ。

伊藤 同じハト派じゃないですか（笑い）。

藤波 あれはわけのわからんハト派だ。三木武夫がなぜ知っているかといったら、三木武夫の孫と、大臣の孫が一緒だったんですね。それだけのことだ。つまらんじゃないか。

小池 先生にとっても意外な人事でしたか。

藤波 そうですねえ。文部大臣がえらいと思っていなかったからな。

伊藤 誰でもいいということですね。

藤波 そういうことだろうな。

伊藤 しかし大臣が替われれば、ちょっとは影響があるでしょう。

藤波 様子はね。

伊藤 しかも総理が三木さんだから。

藤波 幹事長は中曽根康弘だ。

佐道 そもそも三木さんが総理になられたということ自体は、どういふふうに受け止められましたか。

藤波 椎名裁定でしょう。まあいいんじゃないか、という感じだったな。いろいろありましたけれど、だけど「三木さんは」頑固でね。いまの小泉と一緒に、輪を広げて、みんなの意見をまとめなければ駄目だ。そう思うな。

武田 先生はこのころは何派なんですか。

藤波 中曽根派じゃないかな。

武田 それはきっかけはあったんですか。

伊藤 もともと河野派だから、ということですか。

藤波 そうそう。角福戦争で、園田さんが福田派のほうに行くので、そのときに私は残って、中曽根派に行くわけだ。中曽根康弘という人は、人物の鑑定眼のない人ですからね。例えば、河野洋平よりも河野一郎の秘書だった（平松 木部佳昭）、木部佳昭のほうが上だとか、それから野田毅よりも山崎拓のほうが上だとか、錯覚するん

です。ひとこと言わないとわからないんですね。人物の鑑定眼がない。よく見ないということが一つと、初めての時に緊張する。カーッと構えちゃうんだ。そういう癖があるな。中曽根さんという人は書生なんですよ。面白い人なんだけれど、書生なんだ。

グラハムという社主、ワシントンポストかな。朝食会に私は一緒に行って、不沈空母発言というのがあった。あれはたしかに和氣藹々と話しているんだ。だけれども総理大臣としてアメリカに行って初めてのことだから、緊張するわけですね。だからああいう発言になるんだな。通訳が間違ったみたいなことになっているけれど、通訳が間違ったといっても通訳だからな。通訳にかぶせるのはよくないよ。「どうっていうことはない、朝飯を食っただけだ」と言ったが、新聞記者はみんな廊下において、「どうだった、どうだった、副長官」という。「普通に飯を食った」といったら、「おかしいな、ワシントンポストを見たらみんな載っているよ」というんだ。新聞記者がたたくさん集まって、「不沈空母と言ったろう」と言う。「いや、そんなことは言わんよ」と言っているとぼけておいたら、やっぱり言ったんだね。初めてのことで、緊張しちゃうんだ。

伊藤 中曽根派に入っているけど、中曽根さんとの関係というのはそんなに緊密じゃないわけですか。

藤波 ああ（ニヤリと微笑む）。面白いなあ。中曽根さんもそう言っているだろう、「あの野郎、何を言った」といって。

伊藤 中曽根さんは逆に言えば包容力があるんですか。

藤波 包容力というか、包容力とはまた違うんだな。

伊藤 でもあの中曽根派にはいろいろな人がいるじゃないですか。

藤波 そうね。侍部屋みたいに、いっぱいいるわな。乞食をしてい

るみたいなおもてるし、人を斬って帰ってきたような者もおもてる。伊藤 そうですか（笑い）。では次回文部政務次官が終わって、三木内閣ができて、私学助成法の話のところから話してください。

一同 どもありがとうございます。お疲れさまでした。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第3回

日時：2002年12月10日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

平松 大輔（藤波孝生秘書）

記録者：丹羽清隆

■私学助成について

伊藤 前回、三木内閣の文部大臣に永井道雄さんがなられたところで、先生は、馬鹿者だとおっしゃいましたけれど、あれはどういう意味ですか。

藤波 永井さんは国連大学をつくったんだな。そういう意味では立派なものだったと思うけれど。あれは三木内閣でしょう。三木さんが知っているというだけで、大臣にしたんじゃないかな。そう思うなあ。

伊藤 いままで、文教関係ではあまり関係がなかったんですか。

藤波 ない、ない。

伊藤 全然なしですか。じゃあ、永井文部大臣になってびっくりされたわけですか。

藤波 びっくりした。

伊藤 永井さんという人は、あまり好きじゃないんですか。

藤波 好きじゃないねえ。何故だろうな。体が合わんのだな、肉体的に合わんのだ。肉体的に嫌いということだな。

伊藤 気が合わないというような感じですか。

藤波 そうそう。朝日だから嫌いだ、ということじゃないんだ。朝日でも、いい人はいい。富森勲とみもりなんているのは、私は朝日でも大好きだったな。永井さんは、いかな。

伊藤 三木内閣になったところで私学助成の問題が出てくるということですが、私学助成の問題はこのとき始まったわけではなくて、前からあったわけですね。

藤波 あった。

伊藤 この私学助成という考え方はどうなんですか。これは憲法の

問題とも関わってくるわけですね。

藤波 日本の大事な文教政策の三つか四つのうちの一つだな。高等教育の充実、私学の振興、初等教育の充実・刷新。前から、私学で学生生徒を預かってきたけれど、ほとんど助成の対象になっていない。だからみんな苦勞してやっているわけだ。何か思いきって、文教族が教育の対象として私学を選んで、私学こそ大事だということを外内にアピールしようと思っていたんだ。それがずっと続いて、いまに至っているんだな。

伊藤 議員になられた頃から、そういう問題は起こっていたわけですか。

藤波 意識としてはね、頭の中で。

伊藤 とにかく法律まで行く、と。

藤波 初めからそんなことは思っていなかった。だんだんそうなったんだな。

伊藤 でも、国が直接私学に助成することは、憲法の禁止するところですね。

藤波 憲法はしょうがないな、やれ、やれ、というので行ったんだな。

伊藤 文部省の中はどうだったんですか。

藤波 文部省の中はどうだったんだろうな。それまでは私学に冷たかったからな。冷たかったと思うよ。各都道府県と一緒だ。都道府県も冷たかった。私学の先生は一所懸命だったからな。

伊藤 私学の先生たちの団体が、かなりそれをプッシュしたわけですね。

藤波 そんな話は聞いていないな。坂田道太「が文部大臣をやったの」はいつですかね、永井さんの前かな。

武田 前ですね。

藤波 坂田さんの時に決めたんだな。上智大学の私学の会長、大泉

「孝」さんの頃に言つて、ローマ法王のそばに行ったのは（武田

「ヨゼフ・」ピタウさん）、ピタウさんのときに決めたんだね。坂田、ピタウ、私と、三人で、いまでも覚えているけれど、東京プリンスホテルの部屋で話をして、「よし、やろう」と言つて腹をくくつたのを覚えてる。ピタウとの話は、非常に大事な会議だったな。三人で話した。

伊藤 文部省の中には、誰か推進する人がいなければまずいわけでしょう。

藤波 坂田道太文部大臣はそうだったが、坂田さんの下で誰がやったんだらうな。

伊藤 役人の人がついていなければ——。

藤波 そうですねえ。専修学校「全国専修学校各種学校総連合会」は大沼淳が会長だった。いまは私学「日本私立大学協会」の会長をしている。リクルートで、大沼さんも江副「浩正」に株を分けてもらつて、やつつけられた。私学中心できたものだから。安嶋弥でもないな。

伊藤 文部省の中で、ですね。

藤波 みんなちよつとずつだな。役人の誰かがものすごく熱心だったという覚えはあまりないな。西岡武夫は熱心だった。それから松永光、森喜朗。みんな早稲田だ。文部省はあのころは文教が占拠したんだな。あとは、石橋一弥とか、自民党から出て三重県知事をやって、いま辞めることになった北川「正恭」、これはずっと後輩だな。文部政務次官をやつた。みんなちよつとずつだね。誰か、役人でこれは私学派というのは、そんなにおらなかつたな。

伊藤 だけど法案は、役人がつくるわけでしょう。

藤波 そう。やるということになつて、やろうとなつたときには、役所で文句を言う者はおらんですね。さあやろう、ということになつたんだな。反対したのは大蔵省だ。

伊藤 それは反対するでしょうね。

藤波 大平だ。それから大蔵省の主計官がおつた。衆議院を通過して参議院に行つて、参議院で私が質問したり答弁したりするのに、その主計官が「やめる」といって袖を引つ張つたからな。大平は何回も電話をかけてきて、「やめる」と言う、「将来、五千億からの金がかかるから、五千億も国の金を食うような私学の助成をすることはしない。将来のある君のような若い者がそんなことをしては駄目だ」といって電話をかけてきた。「いや、将来があるかないか、そんなことは知らないけれど、いま私学振興をしなければいかん」と言つたのを覚えてるけれどね。

伊藤 これは議員立法ですか。

藤波 私学振興助成法は議員立法だったんだな。議員立法でしょう。

伊藤 議員立法でも予算が必要な場合は——。

藤波 通つてしまえば、文部省につけるわけだな。

伊藤 大蔵の事前の了解は必要ないわけですか。

藤波 いや、要る。絶対反対だったんだ。

伊藤 それはどうやって説得したんですか。

藤波 見切り発車だ。だから参議院に行つても、立ち上がると袖を引つ張つて、「やめる、やめる」と言つたのは、隣に座つていた主計官だ。大蔵も一緒にいたからね。

伊藤 それは委員会の話ですか、本会議ですか。

藤波 いや、参議院の自民党文教部会じゃなかつたかな。

伊藤 自民党の文教部会はみんなOKだったんですか。

藤波 文句なしにOKだ。ちゃんと話をした。

伊藤 それで衆議院の文教委員会もOKですか。

藤波 OK。木島喜兵衛というのが社会党の文教部会長をしておつた。死んだけれどね。新潟だ。それが相手で、毎晩ぐらいワインを飲ませた。ワインの好きな男で、ワインを五本ぐらい持つて行って

飲ませた。宿舍が一緒だったからね。それで私学の話をしたのを覚えてるな。思い出した。三本目ぐらいから、「やる、やる」と言い出した。

伊藤 じゃあこの法案は超党派なんですか。

藤波 いや、野党はみんな反対だったろうな。しかし形だけだな。

東京都知事選挙に出た民社党の、立教の総長をしていた(有馬 松下正寿)。松下さんを口説くのに、どこに行ったかわからん。立教の総長をしていたぐらいだから、気持ちは「私学振興助成法に」大賛成なんだけど、野党という政党との板挟みになったんだろうな。いないといつて、探しに行ったことを覚えているな。突然いなくなっちゃったんだ。いた、いたと言って。

伊藤 ワインの効果はあったわけですか。

藤波 あった。

伊藤 あまり強く反対しないということですか。

藤波 そうそう。肉体的に反対はしない(一同笑い)。肉体的に「反対することが」あるんだね、バーツと委員長席を占拠するとかね。あれは本当にあるわけです。マイクの電源を引きちぎるとかね。すごかったな、あの頃は。私学「振興助成法」はよくやったものだと思うね、あのころ、あの文部省の空気の中で。いまでも独立法人で、帝大を中心に行っているものだから、みんな怒っているな。地方の国立大学も、私学も怒っている。私学なんか、余分なことをしてくれるな、と言っている。つぶれていくものはつぶれていくんだから。文部省は帝大中心だな、東京大学をはじめとして。あのころ、よく私学振興助成法が通ったな。あちこち医科大学を充実したり、教員養成の大学院をつくったりした。鹿児島県の鹿屋体育大学とか、兵庫県三田の教員養成大学院。大学の充実と称して、あのころ、よくやった。やっているの、幻惑したんだろうな。えらいことになってきたと思ったに違いない、旧国立帝大は。私学振興助成法、

専修学校法、よく通った。完全に野党各党は協力してくれたね。

伊藤 さっき野党は反対だとおっしゃいませんでしたか。

藤波 形は反対だよ。共産党なんかも反対だったけれど、でも山原健二郎という高知の男が「共産党 衆議院議員」文教で、気持ちはわかったな。

■文教族について

伊藤 やはりその頃の文教のボスは坂田さんなんですか。

藤波 大ボスはね。

伊藤 藤波さんはその下の小ボスなんですか。

藤波 いいや、小ボスにもならん、一等兵だ。みんな本当に一等兵だったんだ。西岡も一等兵。やろうといつて、本気になってやったからね。

武田 坂田さんとピタウさんの会談に藤波先生がいらしたのは。

藤波 それは文教部会長だったな。政務次官か、いや部会長だ。

伊藤 三本内閣の前だったら、政務次官ですよ。

藤波 私が政務次官をやったのは奥野誠亮の下だから。奥野と坂田さんとどっちが早いのかな。

武田 坂田さんの方が早いんじゃないですか「坂田道太氏は第三次佐藤内閣で文部大臣を務める(昭和四十五年一月十四日〜四十六年七月五日)」。

藤波 文教制度調査会長だったな。自民党文教制度調査会長だ。

伊藤 じゃあ、これは少し前の話になるんですね。

藤波 わからんな。政務次官になる前か。

武田 前ですね。坂田さんが文部大臣をやられたのは大学紛争の時

ですからね。

伊藤　ですから、必ずしも文部大臣「が坂田さんの時」とは限らないわけですね。

藤波　大臣は誰でもいいんです。私も、西岡も。「ああ、誰がなった？」「永井さんになったな」と言っているだけだ。「永井道雄が大臣になった」といって、「一所懸命やっておる、やらしておけ、やらしておけ」という感じだった。

伊藤　それで先生たちの上に、坂田さんが乗っかっているわけですね。

藤波　おった。

小池　先生の頃の大ボスというと、やはり坂田さんですか。たとえば灘尾「弘吉」さんとかもいらっしやいますね。

藤波　灘尾さんは雲の上だな。

小池　あまり雲の下には降りてこないんですね。

藤波　影響力はない。「影響力があったのは」坂田道太だな。その後「坂田さんは」法務大臣になって、「秘書官がみんな検事だ」といっていた。「周りはみな検事で、『法務大臣秘書官、検事〇〇』と書いてある。えらいこっちゃ」と言っていたよ。それから、防衛庁の長官になって防衛庁に行ったら、坂田さんが、「全部制服だよ、ここは駄目だな。おれは背広だから駄目だ」と言っていた。「大臣、そんなこと言ったらいけませんよ」と言っただけだね。「法務省に行ったら検事があるし、防衛庁に行ったら全部制服ですか、しっかりしなければいかんじゃないですか」「いやいや、君らがいるからいいよ」なんて言っておったな。

伊藤　何になろうと、文教のボスなんですね。

藤波　そうです。「衆議院」議長になってもそうだったな。

伊藤　私学振興助成法ができたのは一九七五（昭和五十）年ですが、「坂田文相の時代は」だいぶ前のお話ですね。

藤波　「私学振興助成法は」会期延長になってから国会に出したんだからね。

伊藤　でも大蔵の反対を押し切るといのは大変なことですね。

藤波　大変なことだ。毎晩、なんだかんだ言っただけで国会に籠城するという話になった。あれは自民党の政審を通すときかな。

伊藤　政審でももめたわけですか。

藤波　いや、政審に通す前に、徹夜して、一言一句を詰めた覚えがあるわ。

伊藤　政審になれば、大蔵の部会もあるわけですが、これは反対のわけですか。

藤波　反対ではないけれど、いろいろときつかったね。どうぞ、どうぞ、ということではなかったな。

伊藤　では党内でもかなり大変だったわけですね。

藤波　大変だったですね。

伊藤　文教部会はいとしても。

藤波　そうそう。

伊藤　それで政調で決めてもらわないと、ものにならないわけですね。

藤波　ならないわけだ。

伊藤　一応、政調の了解をとって――。

藤波　「そして」総務会の了解をとって、初めて国会に出せる。だから時間がかかったんだな。

伊藤　その前に、大蔵の了解をとらなければ――。

藤波　いかんわけだ。

伊藤　先生はさっき見切り発車だとおっしゃったから。

藤波　見切り発車だな。見切り発車というか、「はい、けっこうです」とは言わないけれど、黙ったんだな。

伊藤　そういうことがあり得るんですか。

藤波 だから、無理したんですよ。

小池 いまのお話で、会期延長の時に出したということは、大蔵省側としては、会期もすでに短いから――。

藤波 だからもう反対しないでもいいと。

小池 廃案になるということも考えて出したということですね。

藤波 そうですね。

伊藤 それを廃案にさせないために、だいふ頑張ったということですか。

藤波 頑張ったでしょうね。それはすごかったね。

小池 それは本当に野党の協力ができないですね。

藤波 できないね。教育を考えるものはみな一緒にならんと駄目だ。

伊藤 文部省自体は、国立大学、公立の小中学校中心ですからね。体制としては私学を助成するというか、私学関係の部局はなかったんじゃないですか。

藤波 ないですね。管理局がやっていたな。私が政務次官になったときに、私学を出たのはおるか、と言ったら、「はい、私は早稲田です」と言ったのは、参議院議員になった柳川「覚治」だけだ。柳川が総務課長をやっていた。この前話した、神宮を「祀るならここに」祀れとってロッカーを持ってきたのは柳川の知恵だな。早稲田の知恵だ。

伊藤 文部省の役人で幹部クラスはほとんど国立ですか。

藤波 東京大学だね。

伊藤 東京大学は少ないんじゃないですか。

藤波 そんなことはない、東京大学だ。

伊藤 そうですか。それで文教族は早稲田が多い（笑い）。

藤波 私学振興というのは大変なことだったね。よく考えると、そう思うな。私学の連中は喜んだわけだな。

伊藤 本当に私学は、それだけ逼迫していたわけですか。

藤波 苦労していた。

伊藤 赤字を抱えていたわけですか。

藤波 ええ、赤字を抱えていた。それでストライキをやられてね。

伊藤 学費値上げ「反対」ですね。

藤波 学費を上げると、学生は全部反対になった。それが引き金かもわからんな。

伊藤 でも学校によっては、黒字になっているところもあったわけでしょう。

藤波 あったんでしょうね。

伊藤 全部が全部辛かったわけではないでしょう。

藤波 しかし宗教的なことで――。上智大学はあのときにバースト前に出たんだね。ローマから金を持ってきたからね。やっぱり金次第だ。

伊藤 さっきおっしゃったように、先生はこのときは文教部会長だったんでしょうね。

藤波 そうでしょうね。文部政務次官のとき、私の前の文教部会長は西岡武夫で、じっと考えながら来た。文部省の政務次官を昭和四十九年から五十年までやって、部会長に私になって、やり始めたんだ。だから五十年頃ですね。

■学校主任制度について

伊藤 その文教部会長として、学校主任制度というのもおやりになったと思うんですが、これはご記憶がございますか。

藤波 あります。

伊藤 これはそもそも、どういう発想からですか。

藤波 学校がおかしくなっているというので、いろいろ勉強してみ

ると、教師がバラバラだという。教師をまとめて行くにはどうしたらいいんだといって、学年主任とか、学科主任とか、主任をつくって、主任が責任を持たなければ駄目だ。入ってすぐに教師が威張っているようなことではいかん。順番もある。だいたい秩序がなければいかん。全部参加賞主義だからね。参加賞主義というのはどういうことかという、運動会の時に一等賞や二等賞をつけると差別することになるから駄目だ、全部に同じものを参加賞でやればいいんだという主義だ。そんなことはない。年輩の先生には年輩の先生の値打ちがあるし、ちゃんと処遇をしるというので、主任というのが決まったんだ。それはそうだ。

伊藤 その主任に手当をつけるわけですね。

藤波 そうです。手当をつけるわけだ。

伊藤 それは、日教組としてはものすごく強い反対ですね。

藤波 強い反対だったね。

有馬 主任手当返上というのをやりましたね。

藤波 やった、やった。三重県なんかもそうだ。

伊藤 それは決まってるからですね。これは法律ではなくて、法の施行規則の改正じゃないですか。

藤波 ああ、そうでしょうな。

伊藤 ですから、議会でもめたわけではないでしょう。

藤波 議会ではもめなかった。言い合っただけね。むしろ

都道府県の問題だな。

伊藤 自民党の文教部会長として、日教組とやり合うという場面は

あまりないわけですか。

藤波 五月三日の憲法記念日に榎枝「元文」と「議論した」。こ

らは西岡と——。今度持ってくるわ。東京都の教育長をやっていた

小尾「庸雄」さんなんかこちらで、向こう側は榎枝と木島喜兵衛

と誰かで、ずいぶん反響がありましたよ。NHKの討論会で、長時

間国会討論でやった。あれは印象深いな。今度持ってくるわ。

伊藤 NHKの国会討論会というのは、記録があるんですか。

藤波 あります。

伊藤 文字になった記録ですか。

平松 本になったんですね。「教育の周辺」の中にあります。

藤波 うちで「本に」したんだ。

有馬 その榎枝さんとの討論というのは、いつごろの話ですか。

藤波 昭和五十年五月三日と違うかな。

有馬 では、先生は文教部会長のときですね。

藤波 私どもは教師聖職論というのをやって、向こうが労働者論だ。

教師は労働者であるか、聖職であるかということが論争の中心だ。

みんな政務次官とときにあたためて、部会長になってからどんどん実行に移したんだ。それは間違いないな。

伊藤 その本『教育の周辺』を出された雪書房というのは、どんな本屋さんですか。

藤波 雪書房は村瀬「杜詩夫」のところだろう。全関東学生雄弁連

盟の私が副委員長で、そのころにおった日大の学生の村瀬というのが本屋をやったのが雪書房だ。

伊藤 いまでもありますか。

藤波 いま、やっておるんじゃないかな。本人は病気で、明日にも

死ぬかもわからん。藤波か村瀬かというぐらいだ。

伊藤 その前に出された『人間の味——藤波労政の記録』というの

は、どこか出版社から出したんですか。自費出版ですか。

藤波 自費出版。

武田 これは探しても、手に入らなかったんですね。

藤波 ああ、持ってくるわ。

武田 助かります。

伊藤 コピーをつくりませう。

藤波 大平内閣(第二次・一九七九年十一月)だ。私は、てっきり文部大臣だと思って大平のところに行っただ。早い者から順番に呼ぶ。まだ文部省も決まっていな、労働省も決まっていな。それで行ったら、大平さんが「君は文部省だと思ってここ(総理執務室)に来たろうけれど、これから君がいろいろやっていくのに、向こう側を知らなければ駄目だ。何をやるにしても労働省はいいから、行って勉強しろ」と言われた。ああそうかと思った。それで、一緒に呼び込まれた谷垣「専一」さんが、そのとき文部大臣になった。いまの谷垣「禎一」のおやじだ。

■新自由クラブ結成

伊藤 それはまだだ、いふ先の話ですが、この前ちょっとお話がありました政治工学研究所が、なんとなく河野さん担ぎで、だんだん新自由クラブになっていくわけですね。それが次の年の昭和五十一年なんです、新自由クラブができますね。

藤波 選挙がある「昭和五十一年十二月五日」。選挙が終わって新生クラブをつくったんだ。熱海でつくったんだ「昭和五十一年十二月十三日に新生協議会を発足、翌年八月に新生クラブとする」。

伊藤 それは選挙のあとの話ですね。河野さんが代表になった政治工学研究所が中心になって新自由クラブ結成に行くわけですが、この新自由クラブ結成は、どういうふうにごらんになりましたか。

藤波 私はまだ早いという感じだ。いまはずいぶん変わったけれど、あの頃の自民党は年季奉公で、丁稚から始まって、順番に、政務次官をやって、副会長をやって、委員長をやって、大臣をやって、だんだん三役をやっているように上にあがっていく。時期が来たら、派閥でも分けるようなことをしてもらって、一本立ちしていく。そ

れを河野君がやるにはまだちょっと早いな、という感じが私にはあったな。それで、これは全く内緒の話だけれど、読売の田村「祐造」さんとか、毎日新聞の岩見「隆夫」さんとか、ああいうのはみんな河野君が相談相手になっていたが、河野一郎番だった。おやじの番記者だったから、相談をしておった。朝日新聞には誰もいなかった。それで藤本孝雄君に、「どうだ、おれは河野派に思っているんだけれど、どう思うか」ということを河野君が言うて、それで藤本孝雄が朝日の新聞記者に言うて、朝日新聞がこれはえらいこっちゃと、いって大騒ぎになった。それで一日、二日で新自由クラブというのが自民党から出て行くことが決まっちゃったんだ。もともと新聞がボーンと弾いて、後ろから押したんだ。

伊藤 あれは河野派をつくるという発想なんですか、それとも自民党を離脱するというのが先なんですか。

藤波 離脱するというのが先だ。

伊藤 これは、だ、だ、三木内閣でしょう。

藤波 三木内閣だけれど、反田中角栄です。

伊藤 ですから、三木内閣は、反田中内閣ですよ。

藤波 そうです。それをさらにやろうということで、田中のおる自民党と一緒にやれないというので出て、外から叩こうということだったんだ。

伊藤 だけど三木さんが一所懸命やっているのに、三木さんを置き去りにして出て行くというのはいかかなものかな、と見えるわけですが。

藤波 河野君はそう思っていた。このあいだ西岡君と飯を食った。彼は自由党から参議院に出たな。自民党が駄目で、自由党から参議院議員に出たもので、選挙対策委員長の渡辺秀央君と西岡武夫君を呼んで、西岡のお祝いをやったんだ。そのときに、「わしはもう来るか、もう来るかと思っ、君が来るまでまっていたんやけれど、

結局来なかったな」というような話をしてもらった。「そんなこと言うな。すまん、すまん」と言っておったんだけど。えらいこっちゃというので、そのときにその話が出て、あれはそういう意味で、新聞が作った政党だと。東京新聞や毎日新聞はじっとしておるのに、朝日が騒ぎ出して、いよいよ放っておけないようになって、岩見さんや田村さんは困ってしまっただけで、一緒に走り出したというのが実態だな。

私は絶対に反対だということで、反対しておった。最後に沖繩の知事選挙かな、河野君が応援に行っただけで、帰りに東京に帰らずに、大阪で降りて伊勢に来た。「藤波君、一緒にやろう」と言う。そのとき、私の先代の浜地文平さんが河野一郎さんに宛てた手紙が巻紙にして家に置いてあった。夜中に旅館から家内に電話をかけて、それを家内に持って来させた。その巻紙というのは何かというと、池田勇人が河野一郎をいじめたときに、河野一郎はもう何もできんようになって、自民党から出て行くようになって、仲間を集めたんだ。そのときに浜地文平さんは痛風で行けなかったんだ。「痛風で行かんけれど、私は反対だ。血気にはやるな、政治は思うようにいかん」といって、諫める文章が手紙に書いてある。それを持って来させて、それを読んで聞かせた。それで「浜地文平がかつて河野一郎にそういうことを言ったことがあるけれど、いまわしは君に、無理するな、あわてるな、ということをおもう」という話をした。「代が下があれば、方法も変わるけれど、考え方は同じようなものじゃ」と言っただけで、沖繩から来た河野君を東京に帰した覚えがあるわ。それが最後だった。その次の日かな、新聞に出たのは。次の次の日かな。あの日は、夜に帰ったのかな、伊勢に泊まったのかな。

伊藤 あれは河野さんが中心なんでしょうが、推進したのは――。
藤波 山口敏夫とか。

伊藤 田川「誠一」さんはどうですか。

藤波 田川さんは、河野洋平がやるというので、ついて行っただけだね。自分勝手にやっている人だという話を、いまでも政界の中では一般的に通っているね。何も、新自由クラブの理念もへたくりもないわ、あの人は。自分だけの人や。そういうことになっているね、いまも。

伊藤 田川さんが、ですか。

藤波 うん。だから河野洋平がやるもので、田川誠一というのはいって行っただけだ。しかし西岡も、いまは反対だったと言うけれど、山口敏夫なんかは「やろう、やろう」と言っていたんだらうな。有田一寿も「困ったことだ、ナミさん、困ったな」と言うていたね。有田、田川、山口、西岡、河野、もう一人、誰だらう。

伊藤 七人の侍ですか。

武田 塩谷「一夫」。

藤波 塩谷は行かない。前もって決めてあったことだけれど、伊勢で講演会をやることになってた。その講師は稲葉修と、河野洋平、秦野章、藤波孝生、四人の講師でやったんだけど、そのときに河野洋平が壇の上でポロポロ泣いた、「自民党から出る」と言っただけ。そうしたら、「人の前で涙を見せたら政治家は終わりだ」と稲葉修がその後で言っていたのを覚えているね。本当に釈然としない思いだったのかな。

伊藤 河野さん自身も、それほど成算があったわけではないんでしょ。

藤波 ない、成算はない。いまの田中はよくないということだけははっきりしているな。

佐道 河野さんが党を出ようということは、いつごろから考えていたんですか。

藤波 それはあわてることはない、というのが河野も含めた一般的な空気だった。さっき言ったように、朝日新聞が後ろから押したも

のだから、やらざるを得なくなった。

だいたい私はあの日に、伊勢の老人会が中心になってバスで旅行するということで、朝早くバスに乗って紀州に行き、新宮に行った。これはいまでも、東京から一番遠いところだ。遠いというか、時間がかかるところだ。北海道や沖縄の方がずっと便利だからね。それで「用事はないか」と言って伊勢の事務所に電話をしたら、「えらいこっちゃ、今日の新聞を見たか」と言うから、「いや、おれはバスで朝六時ぐらいに出て、新聞を見る暇もなく紀州に来ておるんだ」と言った。そうしたら、いろいろ大騒ぎで、七人目の藤波が来るだろうと言って、みんなワーワー言っているという。空気はどうや、と言ったら、青年部の連中はみんなやれ、出るべきだ、と言っておる。年取ったのは心配して、本当にやるのかな、と言っておるといふ。それで新宮の駅に行き、「名古屋に行くのと大阪に行くのと、どっちが早い？」と言ったら、「どっちも時間がかかるけれど、次に来るのは大阪に行く列車だ」というから、それに乗ったら、行っても行っても大阪に着かないんだ。時間がかかった。大阪から新幹線に乗って東京に行ったら夕方になっていた。そうしたらだいたい騒ぎは収まっておったな。これは、熊野三山がおれを呼んだんやな、と思った。老人会で、年寄りばかり心配して、「藤波さんどこに行くんや」「おれは東京に帰るから」「伊勢に帰らんでもええのか」「伊勢に帰ってもしょうがないで。東京に帰るわ」と言ったのを覚えていてから、新聞に出たのはそれぐらい急だったんだ。朝日が火元になって、ほかの新聞もパニックと一斉に書いたんでしょな。

■ 中曾根氏と河野氏

伊藤 この時点では、先生はこの派閥にいたんですか。

藤波 中曾根派。

伊藤 はっきりした中曾根派のメンバーだったわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 中曾根派の会合には一応出ておられたんですか。

藤波 出た。

伊藤 派閥の会合というのは毎週あるんですか。

藤波 毎週金曜日とか、木曜日とか水曜日にある。毎週ある。

伊藤 中曾根派では、仲間は誰ですか。

藤波 中曾根派では、誰といって……。中曾根康弘という人は、これは悪口ではなしに、私がいつも言うように書生みたいな人で、人は特に駄目なんです。河野洋平よりも木部佳昭のほうが上だと思っ
ている。木部佳昭というのは河野一郎の秘書をしておって、毎日一軒ずつ訪ねて歩いておるのや。こんにちは、こんにちは、と言って。「今度選挙になったら、また河野一郎を頼みます」と言って歩くのが仕事なんだ、そういう男だ。自分が、静岡県から国会議員になっても……。死んだか、このあいだ葬式がありましたか。毎日てくてく「木部です、木部です」と言って歩いておる男だ。定見も思想も何もない。「そんな余分なことはいらんわ、選挙に勝つというのが大事なことだ」ということだった。河野洋平よりも、そのほうが上だと思っっているのが中曾根康弘だ。

だいたい、山崎「拓」と野田「毅」を比較して、渡辺美智雄の派
で山崎、藤波の派で野田と言っておったけれど、私がリクルートで
やられてから、中曾根さんは山崎の方が上だと思込んだんだな。
それで、使わないようにいかんね、山崎みたいなもの、と私は言う
たけれど、野田よりも上だと思っていた。

そういう不満もあった。中曾根さんが河野洋平を大臣にせん、と
いう不満があるんだ。それが派閥であった。だから派閥もどうでも
よかった。反田中ということだが、中曾根さんは田中の方についた

りするので、そんな馬鹿なことはないというので。新聞が書けば、やるわな。やらなければしょうがないね。やらなければ、今度はなんでやらのだ、ということになるから、説明しなければならぬ。そういうことじゃないかな。成算も何もないです。全くない。

伊藤 じゃあ、やっぱり中曾根さんとの問題があるんですね。

藤波 あった。

有馬 ちょうどこの動きとほぼ重なって、三木おろしがありますね。

藤波 三木おろしがあるな。椎名「悦三郎」さんだ。

有馬 三木おろしの動きがあつて、河野グループの動きはそっちを見て、ということはなかったんですか。

藤波 なかった。グループを作って仕方ないなというので、走っていたわけだな。だから、仕方なしにつくった政党ですよ。きれいな志で、志の塊みたいに言っていたけれど、それはそうではないですね。

■新生クラブについて

伊藤 その年の暮れに、選挙がありまして、新自由クラブが十七議席とったわけですね。ちょっと人気が出ましたね。

藤波 とったわけだな。えらいものやね。十七とったんだな。七人だったよね。

有馬 その選挙の時はいかがでしたか、ちょっと伸びそうだ、という感触を藤波先生は持たれていましたか。

藤波 それは持っていただろう。私の後援会でも、青年会はみな、いいと言っていたんだ。当然河野と一緒に行動するだろうと思っていたんだ。そういう空気だったな。

伊藤 そのときのご自身の選挙はやりにくかったですか。

藤波 そんなこともなかったと思うがな。それでも、なんで行かないかという説明をせなならぬ。説明すると、ああそうか、と言っ

てわかってもらった。

佐道 河野さんたちが出たことで、中曾根派の中で何か動揺とかは

なかったんですね。

藤波 ない。ああそうか、と思うだけだな。

伊藤 そんなものですか。

藤波 そんなものですね。

伊藤 数が少ないから、ということもあるかもしれない。

藤波 河野洋平一人だからね。

伊藤 これは三木内閣の選挙ですね。これで「自民党が」負けて、

三木さんが辞めるということになるわけですね。

藤波 そのあとは福田ですか。

武田 そうですね。

伊藤 この選挙の時は先生は相変わらず四位なんですか。

藤波 四位ぐらいだろう。三位になったかいな。

伊藤 いつも安定で。

藤波 低位安定だ。選挙が終わって、熱海で新生クラブが出発だ。

在郷軍人集まろうと。それは政治工学研究所の残党ですよ。

しかたないな、ということで私が代表になった。それが新生クラブの出発だな。

伊藤 これは新生協議会というんですか。

武田 最初は新生協議会かもしれませんね。そのあと新生クラブに

なるんですね。

伊藤 これは議員さんの集団ですか。

藤波 そうです。

伊藤 どのくらいの人数が集まったんですか。

藤波 二十人ぐらい集まったんだね。

伊藤 派閥を超えて、ですか。

藤波 派閥を超えて。メンバーは三十人ぐらいかな。

武田 「新生クラブ発足時メンバー」（資料編収録）より」三十四人ですかね。

藤波 新生クラブは塩谷一夫、佐藤文生、渡部恒三、野田毅、石橋一弥の五人ぐらいが委員になったね。私が座長だ。

伊藤 これは派閥というわけではないんですね。

藤波 派閥というわけではない。派閥というわけではないけれど、だからみんな集まりやすかったんだな。

伊藤 でも各派閥は警戒はするでしょうね。

藤波 しますね。

伊藤 いずれ派閥になるかもしれない。

藤波 そう。

伊藤 様子を見に来ている人もいるでしょうし、必ずしも同志とは言えないでしょうね。

藤波 そうですね。でもそんな感じはいっぺんもなかったな。みんなが非常に気持ちよく、集まろうといったら集まった。毎週金曜日

だったかな、朝食会で、私が自分で確保しておいたTBRの部屋で、こういう「政策研究プロジェクトセンターの会議室のような」部屋

だ。どこに座るといのは決めないで、来たもの順に座って、初めからしまいまで議論していたね。

伊藤 それは講師を呼ぶんですか。

藤波 講師を呼ぶときもあったけれど、呼ばんときは、みんなが諸々のことを言った。そういうことは派閥では、ないわけです。派閥では大将が挨拶して、朝飯を食ったらだいたい終わる。

伊藤 議論はなしですか。

藤波 ちょっと議論するぐらいだ。

伊藤 派閥の長が挨拶をして、いまの国会の進行状況とか――。

藤波 その話をする。

伊藤 それは誰が話すんですか。幹部が話すわけですか。

藤波 その派閥から、国会対策の副委員長になって行っているのがおるわけだ。副幹事長とかね。幹事長室どうや、と行って説明をするわけ。

伊藤 それを普通の議員さんたちはただ聞いている。

藤波 ああそうですか、と聞いている。

伊藤 それで解散ですか。

藤波 ああ、解散。

有馬 そういう派閥の集まりでは、座る席次が決まっているんですか。

藤波 派閥はだいたい決まっていますね。おのずから決まる。

伊藤 上の方からだんだんに。

藤波 そう、そう。

伊藤 中曽根派にいらっしゃった頃は、藤波先生はどんな位置にいたわけですか。

藤波 まあ、普通の兵隊だね。

伊藤 その当時の中曽根派の上の方に座っている人というのは誰なんでしょうか。

藤波 それこそ稲葉修とか、山中貞則。それから宇野宗佑、上村千一郎、そのへんだらうな。

武田 新生クラブには、中曽根派からもだいたいぶりましたね。先生もそうですが、野田さんも、佐藤「文生」さんも中曽根派ですね。

伊藤 山崎拓もいますね。

武田 大石千八さん、向山一人さん、中西啓介さんも「中曽根派から来て」いますね。

佐道 この時点で先生は当選四回になるわけですから中曽根派の中でも、もう中堅ということになるんですね。

藤波 でしょうな。

佐道 当時、中曽根派の派内をとりまとめるような人はいたんですか。

藤波 誰だろうな。

伊藤 中曽根派の代貸しみたいたいの誰なんですか。

藤波 宇野宗佑とか渡辺美智雄とか、あのへんにはいるな。

伊藤 だいたい会長代理というのがあるじゃないですか。

藤波 会長代理は誰がいたろう。勉強してくるわ、今度。

伊藤 あまり上の方で、見えなかったですか。

藤波 見えなかったな。ただやることはやろうとって、福田赳夫

だから、三木内閣の時かな。私は衆議院の第一、第二、参議院の全

部の議員の部屋を歩いたのを覚えてるんだ。

伊藤 仲間を集めるためですか。

藤波 いや、「福田赳夫ひとりが次の総裁だと決めるのはおかしい、

総裁は選挙と選ぶべきだ」ということを言って歩いたんだ。国会議

員がおったのは半分ぐらいだったけれど、おまえ勇氣を持ってよう

やるな、と言われた。あんなことをやる者は少なかったんだね。

武田 先生はそのとき誰かを——。

藤波 福田ひとりに絞るのはいかんと。

伊藤 誰か対立候補みたいなのを考えられていたんですか。

藤波 いや、頭になかった。選挙の仕組みだ。

伊藤 このとき考えられるのは大平さんでしょう。

藤波 いや、大平とっていたわけじゃないんだ。

参議院選挙をやったとき、伊勢で、内田常雄が幹事長をやっていた

んだ、山梨県の内田。「このごろの若いやつらは勝手なことを言

うので困る」と言って、幹事長が挨拶をした。若い者って誰のこと

やと言って、私とは言わないでも藤波とわかるように言った。浜地

文平もそこにおるのや。「浜地さん、早う引退するものだからこん

な若い者が出てきて」とこう言うんだ。よっぽど頭に来とったんや

な。有馬 相当目立つ行為だったわけですね。

藤波 そうだと思うね。

武田 それは先生ご自身で考えられたことですか。

藤波 そうです。

武田 新生クラブとかは関係ないんですか。

藤波 関係なしに。

伊藤 単独で、ですか。

藤波 単独で。

武田 そうですか。聞いたことがないことですね。

■河野洋平氏との関係

有馬 先生、その新自由クラブ結成を巡る一連の動きの前後で、藤

波先生の河野さんに対する評価は、何か変化がございましたか。

藤波 なし。いまでもそうだ。友情の塊だな。友達だね。新自由ク

ラブの最後の大会があって、金丸「信」さんが幹事長で、金丸さん

から、「国対委員長、おまえ行って挨拶をしてこい。党を代表して

行け」と言われて、「志の操、思想を大事にしよう」という挨拶を

してきたのを覚えているわ。それからじきに自民党との合流話になっ

たな。最後まで頑張れよ、と言って来たけれど、意味がなかったな。

伊藤 最後まで頑張ったのは田川さんだけじゃないですか。

藤波 結局ね。

佐道 河野さんという方は、先生からごらんになって、総理の座に

つけたかった方ですか。

藤波 面白かったと思うね。

伊藤 それは人間的にですか、政策的にですか。
藤波 両方でしょかね。

伊藤 新生協議会が発足したことで、政治工学研究所は解散ですか。
藤波 解散。新自由クラブができた段階でもう解散だね。みんながいたから、在郷軍人集まれ、と言っただけで、それが新生クラブの中心になったのは事実だけれど、政治工学研究所というものは、新自由クラブができたときに解散だね。私はそんなこと「新自由クラブの結成・脱党」を知らなんだというのは、みんなが思っていたことだな。知らなかった。それで青年部に突き上げられたんだ。突き上げられて文句を言って、新聞で決めた政党だから、事前に相談しなかった。準備はきわめて秘密裏にやっていたから。ワーツと出ちゃった、という感じだから。

伊藤 ついて行くもついて行かないも、相談もなしに、とにかくバツと出ちゃったということですか。

藤波 そう、そう。

武田 藤波先生は、もう脱党論には最初から反対でしたか。

藤波 反対だった。

武田 じゃあ、河野さんを擁立して自民党の総裁にすること
は――。

藤波 それは文句ないけれどね。

伊藤 そうすると、一つの派閥形成になりますね。中曽根派だけではないでしょうが、派閥を超えた一つの新しい派閥をつくる。

藤波 そういう目で、みんな見ていたんだろうな。「私が」官房長官になったときに、みんな何か知らんけれど、不機嫌な顔をしていたからな。

有馬 不機嫌になったのは、派内ですね。

藤波 派内だ。

武田 藤波先生は反田中だったんですか。

藤波 いや、そうでもない。必ずしもそうでもない。活力が出る。政策の調査会なんていうのは、一年間ほとんど欠席無しに出ていたからね。

伊藤 じゃあ、河野さんたちの態度とはちょっと違うんですか。
藤波 違うんだらうな。思想的にはね。そこで浜地文平という人がまだ生きていたから、それもあつたろうな。選挙区の影響力だ。あと、乾英夫というのが会長でおったけれど、「全部藤波君に任せよう、現場における本人しかわからのやから、いろいろなことがあっても、おまえらぐずぐず言うな」といって、むしろ説得に回っていったので、後援会はわりあい良かったね。私がこうさせてもらうと言って説明に回ればよかった。

■ 新生協議会の運営について

伊藤 新生協議会は先生が代表になるわけですが、将来の藤波派と

――。

藤波 いや、自分ではその気がないから。

伊藤 外から見たらそう見えませんか。

藤波 かもわからんな。そんなことは思わなかったから、いまでも生きているんだらうな。加藤紘一とかというところ、思っていたわけだね。

伊藤 それでさっきおっしゃったようにTBRに事務所みたいなものを置いて、こういう組織をつくるとやはり事務局が必要でしょう。事務局員を雇わなければならないですね。

藤波 雇わなければならない。ハヤシという女の子がいた。

伊藤 そんなものですか。

藤波 うちの連中が応援した。

伊藤 藤波さんの秘書の人たちですね。

藤波 秘書だ。

伊藤 お金もいるじゃないですか。

藤波 お金もいる。

伊藤 講師を呼んでくれば講師謝礼も必要だし、連絡するといえは通信費が必要でしょう。そういうお金はどういうふうにするんですか。やはり自分で集めた政治資金でやるんですか。

藤波 そうそう。政治資金でやる。大して金はかからんもの。

伊藤 当選四回ぐらいだと、政治資金というのはどういう具合なものですか。

藤波 どうかな。よくやったものだといまは思うね。ごそつとどこかで金をもらってくるか。だいたいあの頃はそうだけれど、政治に金を出すというのは、昔は三井とか三菱とか、銀行がおって、その連中がみな面倒を見たんだろうけれど、吉田茂で終わっているわな、そういう時代は。それからあとは、妙な金ばかり集まっている。金を出すというのはおるけれど。竹下派はその仕組みを作ったんだ。全国で、たとえば十万円なら十万円出す。たとえば九州竹下会とか、北海道竹下会。それは年に一回は行かなければいかん。体がえらいと思うな、それをつくるのは。私の場合は、やり始めたら金がかかることだし、ようやらんな。いま亀井静香がやっとやっているぐらいだ。「私は」やらなかったな。汚い金も扱わんし。そうすると知れているんですよ、扱える金の範囲が。その分だけでやっていたな。

伊藤 やはりお金を出してくれる支持者がいるわけですか。

藤波 そう、そう。政治経済研究会。いまやっているところだな。

伊藤 それは大口ではなくて、ですか。

藤波 大口じゃない。大口は妙な金で、株で儲けたとか、薬屋が薬をごまかしてとか。そんな金は必ずスキャンダルが出て来るわ。そ

んな金にも手を着けないのでね。金はもらいにも行かなかったし。小さな金だ。私はヤマダ製鉄所の社長をしているからといって、その横について行くと、百万もらうのが精一杯だ。その程度だ。

伊藤 そういう支持者が何人かいるわけですか。

藤波 そうそう。何人かいて、自分もやるよ、勉強せえよ、といって激励を受けて帰ってくるという程度のことだったな。その代わりに上下のないグループをつくろうというので、みんな同じようにした。私の主義なんだけれど、みんなを同じようにしてやらなければいかんという主義で来たな。

伊藤 その新生協議会も、別に代表だからといって――。

藤波 そう、代表ツラをしたり、金を配ったりしなくても、みんな一所懸命勉強しようということだ。立山政策合宿といって、これは大蔵省にいた榊原英資なども行ったと思うね。立山で政策合宿をやるうといって、みんなで山に登っていった。新聞記者も一緒だ。国会議員も一緒だ。富山の玉生「孝久」というのがいたな。

伊藤 「新生クラブの名簿に」名前がないな。

武田 最初にできたときから、メンバーが増えたんでしようね。

藤波 増えたんだ。七十人ぐらいになりましたね。

平松 最終的には、七十人ぐらいになりましたね。

佐道 かなりの人数ですね。

藤波 すごかった。そういう意味では、みんな面白かったんだな。「私は」「頑張れよ、頑張れよ」と言うだけでいい。おれが行ってこんなのと喧嘩してきたんだけど、いいのかどうか、という発言をしたりしていた。

佐道 そういう活動は、たとえば派閥の長老の方から、「慎みなさい」とか、そういう批判はなかったですか。

藤波 いっぺんもなかった。だけど、心の中では思っておったんだらうね。中曽根内閣になってから、ずいぶん助けてもらったね。森

喜朗、加藤紘一、中曽根派で私と、羽田孜、定期的に寄って、私なんか助けてもらったね。中曽根さんは知らないな。言う必要はないし。私が頼んで、集まってくれと言って集まってもらって、やってきたな。本当は中曽根内閣で一番活きたんだろ。金でないものが活きたんだね。

佐道 その当時の考え方として、三木内閣のあとに福田さんになって、そのあと大平さんになるんですが、福田・大平のあとには中曽根さんが天下を取る、取らせたい、と思ってるんじゃないわけですか。

藤波 私はね。順番だと思っていた。

■福田内閣のころ

伊藤 福田内閣が昭和五十一年にできますが、これは話し合いですね。これには運動とかなんとかという形はないわけですね。

藤波 ないわけだ。

伊藤 この福田内閣の時は、先生は何も政府関係の仕事はないんですね。

藤波 ないでしょうな。党大会のときに、森や三塚「博」が、国対において、党大会の開会の辞を藤波さんにやらせようということになって、三塚がそれに乗って、福田総裁だったな、田中派のことを批判しておった。文京公会堂だったかな。そこで大会があって、開会の辞で、イギリスの学者のいう言葉、ロシアのことを引用して、開会の辞を述べたのを覚えているな。文教部長だったんだ、あの頃。

伊藤 党大会の開会の辞ですか。

藤波 うん。筆頭副幹事長ぐらいがやるのを、藤波にやらせようと思って。あれは自分でもやり甲斐があったな。

伊藤 それは非常に名誉ある仕事でしょう。

藤波 そうだったね。E・H・カー教授だ。「その国が発展するためには、その国の先頭にいい大学があった」ということを言っているけれど、私は日本の国がさらに発展しようと思ったら、政党がよくなるなければいかん。自民党が良くなければ駄目だ。立派な国に発展するときに、先頭に自民党が立っていたという政党をつくらうということをやったんだ。文教部長だった。

伊藤 それは福田内閣のときですか。

藤波 そうです。

有馬 そういうときの演説の原稿というのはご自分で書きになりますか。

藤波 自分で書く。

有馬 まったくご自分で、ですか。

藤波 自分で書く。

伊藤 自由ですか。

藤波 自由です。

伊藤 どうかの承認を得なければならないということはないんですか。

藤波 ない。あんたはもっとお題を言えといわれて、文教部長としては教授の話を聞いて、世界の先端に行く大学があったということやを言っているけれど、日本の国の場合は政党が先頭に立ってやろうということ、自民党が良くなければいかん、と言ったことを覚えてるな。

佐道 福田内閣ができたときに、自民党の党内改革が一つ重要な課題だったわけですが、そのこともあったんですか。

藤波 どうせそんなことを言ったって、単に言っているだけだと思っ

佐道 予備選の導入とか、総裁公選規定の改革とかが行なわれるわ

けですな。

藤波 いろいろな理屈を言っているだけだという気持ちだったな。本気になってやらなければ駄目ですよ。

■派閥と選挙資金

伊藤 前の三木内閣のときに、政治資金の規制法を強化するということをしますが、ずいぶん政治家の資金を絞りますね。あれは影響があったんですか。

藤波 どうだろう。あまり思わなかったね。

伊藤 普通、派閥の長は盆暮れに所属している議員にながしかを出す。これは不文律みたいなものですか。

藤波 まあ、仲間だよという挨拶料だな。全体から見れば知れていますよ。

伊藤 中曽根派ですから、中曽根さんからは盆暮れにながしかもらったわけでしょう。

藤波 知れているな。

伊藤 そんなものですか。あとは選挙のときですか。

藤波 選挙のときには公認料が――。

伊藤 公認料のほかに。

藤波 ほかに――。知れているな。

伊藤 公認料ぐらいはもらうんですか。

藤波 公認料ぐらいはもらうだろうな。

伊藤 それは派閥にいる証みたいなものですな。

藤波 そうそう。無派閥で行くということは、一銭ももらわなくても行くということだな。それが一番はっきりした理由になる。根拠になる。

伊藤 奥野さんみたいな人は無派閥だから、どこの派閥からもお金をもらわないということですか。

藤波 そうでしょう。

伊藤 あちからもこっちからももらえるという話かなと思ったけれど（笑い）。

佐道 当選回数を重ねて、派閥の中堅以上になっていくと、選挙のときとかに派のためにながしかの貢献をしるということで、少し出せとか、そういうことはないんですか。

藤波 誰だかの応援のこうい大会があるから行ってくれ、と言われるでしょう。そういうときには金を持っていくね。

伊藤 それは自分の金ですか。

藤波 自分の金、挨拶料だ。

伊藤 応援に行くのに、お金を持っていくんですか。

藤波 ああ。

伊藤 それは派閥から言われる場合と、党から言われる場合があるわけ出でしょう。

藤波 いずれにしても。

伊藤 いずれにしても、自分でお土産を持って行くわけですか。

藤波 そうそう。

佐道 応援演説の回数が増えるだけ、大変になりますね。

藤波 なる。知れているけれどね。せいせい五十万とか百万とか持つて行けばいい。その程度だ。

伊藤 その程度だ、といってもね。

小池 議員個人のほうも、応援弁士みたいな形で呼ぶときに、どちらかという演説のうまい人を呼びたがりますよ。先生なんかはそういう意味では引張りがこにはなりませんでしたか。

藤波 そんなことはないけれど。

伊藤 あまり要請があったら、お金が足りなくなるじゃないですか。

藤波 あいつは何も持って来ずに、一銭も置かずに行ったな、ということになるな。それはいかんか。

伊藤 それは非常にまずいことなんですか。

藤波 政治家同士としてはまずいな。

伊藤 政治家のおつき合いの作法なんですか。

藤波 そうそう。どちらかという作法だ。

伊藤 それだけの裏付けがあればいいけれど。

藤波 だんだん壊れてきているんだろうな。

伊藤 しかしだんだん当選回数が増えて、党や政府の役職をだんだんやるようになると、献金してくれる人も増えてくるんじゃないですか。

藤波 増えてくるでしょうね。

伊藤 またそれをうまく整理しないと、変な金を掴んだりすることになるわけですね。それは秘書の人が大事なことですか。

藤波 大事だということですね。

伊藤 よく、いろいろ問題が起こると「秘書が——」と言うでしょう。実際に、秘書が、という場合があるわけですか。

藤波 秘書が集めるわけですね。

伊藤 秘書の判断で集める場合があるわけですね。

藤波 そう。器量というかね。

伊藤 器量がありすぎて、自分のためにも集めるということもあり得るわけですね。

藤波 あるね。秘書同士の仲間だけで覚えていくということもあるしね。

伊藤 先生はどうですか、秘書には恵まれましたか。過去、ですよ。

藤波 あざなえる縄の如しだな（一同笑い）。私は、世の中で不思議なくらい金に関係がないんです。いやなんです。そのへんに札束が置いてあって、これなんとせんと家内がときどき言う。自分で忘

れておる。それぐらいだ。よくはないな。それで秘書がようけ苦勞するんだと思うね。

平松 納得します（一同笑い）。

有馬 失礼ですが、平松さんは何年ぐらいになりますか。

平松 私はこれで、ちょうど六年ですね。

藤波 大学のときから選挙をやってね。

平松 大学を出てからです。

藤波 お父さんもお母さんも教育者で、両方とも小学校の校長さんです。教員になるのだとばかり思っていたら、選挙で応援に行ったら、みんなが東京に連れて行けという。皇學館大學だ。東京に来て、いまやっているんですね。六年目だ。

伊藤 皇學館大學ですか。

平松 そうです。

藤波 結局、教員志望だったはずなんだけれどな。

有馬 村瀬「信一」がいた頃じゃないですか。

伊藤 われわれの仲間が、だいたいあそこには一人はいますからね。

藤波 誰ですか。

有馬 村瀬という私の後輩、伊藤先生の弟子がいました。いまは文部省ですけれど。そのあとまた田浦「雅徳」君というのが皇學館にいます。

伊藤 いま村瀬君というのは文部科学省の教科書調査官をやっているんです。いや、秘書の話から、変なことになりました、申し訳ありませんでした。

■「ふじなみレポート」エッセイ

伊藤 福田内閣のときに、「ふじなみレポート」を始められるんで

すね。

※「ふじなみレポート」は昭和五十二年一月より毎月一回後援者等へ、
業書で政治活動等の報告をおこなったものである。これらは『藤の
花』（東京美術 平成十四年）に第一号から第二四号（平成十四
年一月）まで収録された。二一五号から二一八号（最終号）までは
本書資料編に掲載した。

藤波 新生クラブができて、新生クラブと共に出発するわけだな。

伊藤 これは新生クラブと関係があるんですか。

藤波 いや、関係ない。

伊藤 これは自分の選挙区の問題ですね。

藤波 そうそう。時宜的なもので、昭和五十年でしょう。

武田 五十二年「一月」からですね「月一回発行」。

伊藤 なんてこういうものを出そうということになったんですか。

藤波 まあ、政治の動きを国民に知らせなければいけません。自分の県
民に知らせなければいけません、というだけですね。

伊藤 初めからあのハガキの形ですか。

藤波 そうそう。元気でやっとなるよということを示そうと思った。

伊藤 自分の支持者たちに配るわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 配る方法は。

藤波 郵便。

伊藤 郵送代も馬鹿にならないじゃないですか。

有馬 あれは何枚ぐらい出されているんですか。

藤波 企業秘密やけれどね（一同笑い）。「平松氏に」どれぐらい出
しているのや。

平松 一万一千弱ですね。

伊藤 一回出したら、そうとうなお金がかかるじゃないですか。

藤波 それを出さないと、本当に呼びかけることにならないから。

平松 いまから新しく出そうとすると、ちょっと問題になるかもしれ
ませんがね。

伊藤 なんてですか。

小池 公職選挙法の改正で、年賀状なんかも出せなくなりましたね。

伊藤 こういう「レポート」もできないんですか。

小池 できないと思いますね。日頃の挨拶みたいなことがしにくく
なりましたね。

平松 党に所属して、党から出している刊行物を自分用に内容を交
えて使うことは可能なんです。

藤波 自民党だったら、自由新報を使わなければ駄目なんだ。だけ
ど自由新報だと駄目なんだ、選挙民はね。これは自民党の広報紙と
しか思わない。藤波のことが書いてないと駄目なんだ。

有馬 先生の場合のように、ずっと継続的にやっている場合はいい
ということですか。

平松 そうです。これは定期刊行物として大丈夫ですということ
を頂戴して、出しているんです。

小池 ただ、河野太郎さんみたいに、インターネットのホームペー
ジ上でニュースレターとかやっている人もいますからね。それもちょっ
と矛盾がありますね。

平松 そうだと思いますが、まだ規制がかかっていないですからね。

小池 ホームページには規制がかかっていないですね。それから e
メールはかかっていないんですね。

平松 そうですね。あれは万人向けですからね。

小池 支持者向けではないということですね。だから、網のかけ方
がちよっと変だなという気がするんですけれどね。

平松 そうですね。インターネットを利用した選挙運動ということ
に対してまだ議論されていないんですね。

伊藤 いまいろいろの人がホームページをつくっているでしょう。

小池 それからeメールで配信するという形が多いんですよ。

有馬 総理大臣のメールマガジンもありますしね。

小池 広島大学では学長のメールマガジンもありますよ。

有馬 先生が「ふじなみレポート」を始められた頃は、議員さんがこういう形で情報を送るといったことは――。

藤波 なかったな。

伊藤 後援会の機関紙というのはあるでしょう。毎年一回とか、二回とか。

藤波 自由新報を使うとかね。

伊藤 派閥の機関紙があるでしょう。

藤波 あるかなあ。ありますかね。

伊藤 各派ともあったと思いますけれどね。中曽根さんのところもあるんじゃないかな。

武田 宏池会がありますね。創政会もありますね。

有馬 先生のこの月一回という形は、当時としてはかなり斬新だったんですか。

藤波 そう思いますね。

伊藤 だいたいハガキ一枚ですから、すぐ読めますね。これが冊子になっていると――。

藤波 だんだん世代が上がってきて、歳をとってきたもので、もっと大きな字でやれ、というけれど、昔はあれでよかったんですね。

伊藤 この頃から比べれば、いまのハガキは大きくなっているんじゃないの。

有馬 少しは大きくなっているんでしょうけれど、字を大きくすると、あまり書けなくなりますね。

平松 きりぎりです。

藤波 四百字×二枚です。

伊藤 よく入りますね。

藤波 四百字×二枚で、それより多いときは表の下に書く。

伊藤 表の下まで、使えることは使えるんですね。そうすると印刷費がかかる。

平松 裏も表も印刷で、ハガキのフォーマットですから大差はないんですね。

伊藤 かかるのは発送費だけですか。

藤波 いまの仕組みでやるとしても、こういう金の使い方を考えると、やることはようけあるな。もっと生きたやり方がある。全部、東京の支持者、大きな会社の社長も、三重県の選挙区のばあさん一人でやっているところも、同じ文章でやっているわけだ。絶対に違えない。やり方はいろいろあるよ。だいたい私は、乞食、いまはホームレスというけれど、乞食が筵の上に寝ておいたら、寝て話をする。座っておるときには座って話をする。政治家は目の高さが大事だ、政治家で一番大事なのは目の高さだ。そういう主義です。その主義の具体的な現われが「レポート」だ。

■ 検察の押収物

伊藤 新生協議会は何か記録がありますか。

藤波 何かあるか、わからんけれど。

伊藤 いつ会合を開いたとか、誰を講師に呼んだとか。

藤波 あるはずだけれどね。

平松 どこかにあるかもしれませぬ。

伊藤 もしあるとしたら、藤波事務所ではないですか。

平松 東京の事務所にはないですね。伊勢の事務所はどうですかね。引越しましたからね。

藤波 つまらんことだけれど、リクルート事件が起こったときに、

私はじっと辛抱していこうと思って黙っていた。日本の国は法治国家だから、法律の言うようにせねばいかんなど思って今日まで来ているんだけど、いっぺん、全部押収して持って行きましたからね。全部持って行った。つまらんものも。藤波孝生が写っておる写真まで集めて持って行った。

小池 誰と写っているか、ということですね。

藤波 誰と写っているか。つまらんことだ。なぜつまらんかというところ、その中で江副と写っているのはないかと、リクルートと書いてあるものはないかと、そんなことだけだからね、やつらの考え方は。

伊藤 押収したものは返されませんか。

藤波 いや返してきたけれど、こちらがいやだもの、いちいち見るのが。だから押収されたのは一応返ってきたけれど、部屋に放り込んであるわ。その中にあるかもわからないな。

平松 ひょっとしたら、あるかもわからないですね。

藤波 選挙区の日程表というのも全部持って行った。選挙区の日程表を持って行ってもしょうがないじゃないか、と言って。わしを調べておる検事に話をして、つまらんものを取るなど怒ったのを覚えているな。「なんで選挙区のおれの日程表を持って行くんだ。選挙区でわざわざいやがらせをするな」「ただで決まったことだから」「決まったなんてそんな馬鹿なことあるかい」と言っただけれど、そんな調子ですよ。検察本庁に来いというのを、「行かない。悪いことをした者は行けばいいけれど、おれは絶対に行けない」といって中野区検に行った。そうしたらようけ、ヘリコプターみたいなのがブンブン音をさせてやっておった。馬鹿な話だなと思った。けど世の中というものはそういうものだ。

伊藤 返ってきたものはどこに放り込んであるんですか。

藤波 部屋に放り込んである。物置だ。

伊藤 それは伊勢ですか。

藤波 伊勢。

武田 藤波先生の記録というのは、この「ふじなみレポート」が一番ですか。

藤波 間違いないね。

■漁港整備に関与

伊藤 これ「ふじなみレポート」を収録した『藤の花』で見ますと、一番最初が昭和五十二年一月ですね「第一号『新生協の代表』」。そこで新生協議会の話が一番最初に出てきます。これは、さっきおっしゃった、「数人の長老が総裁を密室で決めるというのでは」まじいということから、「党内中堅若手で新生協議会が発し」と書かれております。「結果は福田さん一人が立候補というかたちになりましたが」ということですね。

そこから先、「予算案の編成」という項目があって、来年度予算が平成されたということで、自分は党の文教部会長で、「文部省の三兆一千億円のまとめに当たりました。入試の改善、高校新設補助、私学振興などが目玉」ということを書いています。それで、もう一つ、これはあとで伺わなければいけないんですが、「第六次の漁港計画は、漁港整備促進議員連盟が結成され、白浜会長の下で私が副会長に就任。六年間で、一兆四千五百億円を確保しました」ということが書いてあります。この漁港整備促進議員連盟というのは、先生のお仕事の一つになるわけですね。

藤波 大したことはないけれど、私の選挙区は水産が強いんです。漁業組合長になると、だいたい権威をもって漁村の票をまとめますからね。それで、水産、水産と言うんですな。

伊藤 何か水産の話は前回もちょっと出てきたと思いますが。

藤波 水産の副部長をやっていた。田口長治郎の下で。

伊藤 文教族であると同時に、こういうことも一つの柱なんですね。

藤波 そうそう。予算になると赤坂プリンスホテルに部屋を取ってやっています。漁港整備促進議員連盟が。そこへ顔を出しに一日に一回行って、予算確保と言ってやるわけですね。

有馬 この議員連盟ができた頃の漁港整備促進というのは、どういうことが中心だったんですか。

藤波 漁港の予算だ。

伊藤 漁港整備の補助金ですか。

藤波 そうです。

伊藤 補助金だから、地元負担もあるわけですか。そうじゃなくて、国の事業としてやるものですか。

藤波 ものによっていろいろだ。予算編成のときに大蔵省にいっぺん行って、大臣とか主計官に頼んでくるという仕事だな。十人も揃っていけば、向こうも緊張してやるだろう。

伊藤 漁港整備なんていうのは農林省ですか。

藤波 農林省、水産庁の仕事ですけど、選挙区で強いものだな。

鈴木善幸さんが長い間会長をやっていた。そういう会だ。自分の選挙区は田村元さんが強くて、このあいだの選挙でも、中選挙区のとくに、漁業組合で三十人ぐらい理事とか監事とか集まってくれた。

「その中で旧田村陣営どれだ、旧藤波陣営はどれだ」といったら、旧藤波陣営は三人ぐらいしかおらんのだな。「あとはどうや」と言ったら、あとは全部田村だった。「強かったはずやのう、おれは四位やでのう」と言った。

伊藤 そういうことをバックアップすることによって地盤にもなるわけですね。

藤波 なるわけだ。だけど文教はないんですよ。科学技術もない。

伊藤 そうですね。

藤波 ないはずなんだ。それが証拠に、金がついて力があるのは全部田村に行っているんだ。何かないか、といったら、文教が空いているもので、そこに入っていったんだ。

伊藤 文教では私学はどうにもならないし。

藤波 三重県ではどうにもならない。

平松 ないですからね。

藤波 私学はないんだ。

伊藤 皇學館がある。

藤波 皇學館はいまはときどき講堂を借りるぐらいだね、後援会で。

■純粹の支持者

伊藤 それで「今月から毎月末に藤波孝生自身が書く『ふじなみレポート』をお届けいたします」ということがここに書いてあります。

「政治のいろんな動きを報告し、ふじなみたかおがどう考え、いかに行動するかをあなたにお伝えしたためです」と書いてありまして、最後に「二月のうごき」として、「国会が初旬から再開されます。二月は、したがって国会にいる時間が多くなりますが、土、日、月曜には出来るかぎり帰郷し、計画的に各地域にも伺います。面談ご希望の方は伊勢事務所にご指示下さい」と書いてありまして、「二月二十二日、相賀浦・田中屋にて」とあります。これはどこのことですか。

平松 選挙区の南勢町というところです。

伊藤 これが第一号であります。

藤波 懐かしいな。

伊藤 二月には「ふじなみレポート」第二号「草青む」、各地の

藤波会とか孝友会の発会式、会合や、J.C、県鯉組組合、県ソフトボール協会等々と懇談をしたということが書いてあります。そして「二月二十三日、日比谷のプレスセンターホールにおいて時子山「常三郎」前早大総長が発起人代表で『藤波孝生と語る会』が開かれ、各会代表八百人の出席を得て盛大を極めました。中曽根康弘、河野洋平、牛尾治朗、稲葉修、海部「俊樹」文相、大泉私学連合代表の皆さんが祝辞を述べてくれました」ということで、一句ありまして、

授かりし 一本の道 草青む

と書いてあります。この「藤波孝生と語る会」というのはどういう趣旨の会なんですか。

藤波 出版記念という意味だね。出版を記念して、それを語る会と一緒にやったんじゃないかな。

伊藤 何を出したときですか。

武田 『教育の周辺』ですね。

藤波 今度、『教育の周辺』を持って来よう。

平松 地元にあったそうです。送ってもらいます。

伊藤 こういうときは、いまの議員とかがやるパーティと同じような形になるんですか。

藤波 金をもらうよね。

平松 そうでしょうね。たぶん、いまよりもそういう雰囲気だったんだと思います。

藤波 私の場合は、本当に要るだけの金でしかやっておらんのね。五百円とか半端な数だよ。

伊藤 でもその本も配らなければならぬでしょう。

藤波 本もそうだ。

伊藤 じゃあ、その本のお金と、パーティの実際にかかる経費。

平松 それぐらいいの設定で出しますね。

藤波 それでも残らんやろう。

伊藤 でも人がたくさん集まらなかつたら赤字になっちゃうでしょう。

平松 そうですね。だからせめてトントンにはしたいという気持ちで、お願いをしに回りますね。出版記念会になると、お祝いといって、いくらか包んできてくださる方がいらっしやっただけでしょうね。

藤波 いやあ、ないね。

平松 ないですか。

伊藤 藤波先生の支持者はそんなケチなのかな（笑い）。

藤波 本人は金に関係ないと思ってるからね。支持者も。

伊藤 そういものですか。

藤波 あの人「に」は金を持って行かない。「持っていっても」うんといわんぞ、と言って、それは「持っていくかどうかは」支持者が判断します。

平松 それは間違いないですね。

藤波 金を持ってきたり、金を受け取ったりしたことはないですな。伊勢でも今度のランクを上にあげてくれとか、いろいろなことを言うてくる。それで、「これはわずかだけれど」といって、金を置いていくわな。その金を返しに行くのが、家内や秘書の仕事だもの。そんな政治家のところには、こっちでも行かんぞ、ということになる。いらん。

伊藤 いまのお話を伺っていると、まるでお金なしで政治活動をしてたように聞こえますけれど、そうなんですか。

藤波 そうそう。

伊藤 そんなわけには行かないじゃないですか。

藤波 いや、そうです。財布がないやろ。

伊藤 普通、財布が要らないというのは、お付きの者が置いていく（笑い）。

平松 うちの事務所は金がないものですから、僕は一銭も預かっていません。

藤波 金では買えんと思っておりますからな。絶対に買えん。金、金というけれど、知れているな、金で買える部分は。

平松 お金のつき合いではしかたないところが多いですからね。最終的には、お金のつき合いだと利害でつながっちゃうので、よくはならないですね。

伊藤 純粹の支持者というのはどうですか。

平松 先ほど本人が申しましたように、微々たるものです。無茶は言えないですから。

藤波 京都の梅原猛とか、東京だったら東京電力の平岩外四とか、「金を持っていてもしょうがない、藤波さんのところは金の話と違うぞ」というのが支持者だね。それでこれまで来れたんや。ありがたいことや。

平松 たぶんこういうことがあって、いま苦労するんだと思います（一同笑い）。

■支持団体のこと

伊藤 この二月のところに、「神政連研修会（榊原温泉）」と書いてありますが、これはなんですか。

藤波 仲間で、何人かで行ったんやろうな。

伊藤 それからモラロジ―南勢総会というのをやっていますね。

藤波 モラロジ―、道徳科学の会合だね。

武田 麗澤ですか。

藤波 柏の麗澤のことや。

伊藤 そこで講演をなさっていますね。そのあと猿田彦神社の造営

完工式にお出になる。この猿田彦神社は伊勢ですか。

藤波 伊勢です。

伊藤 神宮のところですね。

藤波 そうです。

伊藤 いろいろ、そういう行事とか会合に出席したり、講演したりということが、これを見ているとかなりたくさんありますね。

藤波 ああ、一所懸命やったんやな。

伊藤 自分の支持団体ですか。

藤波 支持団体に働きかけをしたんですね。いまみな代理で行ってくるけれどね。わしが行って、五人でも六人でも丁寧に政治の動きを話したんだな。それが大事なんですよ。

伊藤 たとえば松阪藤波会世話人会、大台藤波会、甲賀孝友会、波切藤波会、鳥羽JC有志、伊勢JC、県鯉鮪組合、県ソフトボール協会、赤福社員大会――。

小池 商売敵ですね（笑い）。

平松 大きいですから。

伊藤 あと、夜明会ですか。いろいろな会合に、次から次へとお出になっていることがわかりますね。

藤波 ずっと、国会やっておるあいだでも、金堀火來の行事には出て、政治の信条を訴えてきておるわけですね。

伊藤 ものすごい体力勝負ですね。

藤波 そうです、体力勝負だ。

有馬 こういふのは、そのうちのかなりの部分は、少しお酒のつき合いもしなければいけないわけですね。

藤波 時間によってあるね。酒は強かったな。あの頃は、一回によろしく飲んだ。官房長官の頃まで飲んでおったね。五合飲んで六合飲んで七合飲んで八合飲んでおった。二百人ぐらいでバスで来て、二百人の座敷をずっと一人ずつ一杯ずつ飲んで回る。

武田 それはすごいですね。

藤波 それをやらなければ負けるもの。その連中は一所懸命やってくれるわけだ、選挙になると、何も言わんでもね。

伊藤 飲んだふりじゃ駄目なんですね。

藤波 ふりじゃ駄目だ。

平松 できないですね。ふりでは済まないですね。

小池 パーティなどでは飲むふりをしている人がけっこういますね。

平松 そういふところではそうでしょうけれど、地元から人が来て、宴会で、となると、そういうことはやっていられないですから。

藤波 二十人、三十人、五十人。どれだけ多くても五十人までだね。大事なのは。その連中とは本当に腹を割って酒を飲んで、女の話もして。あそこがいいとかなんとか言ってやっているわな、みんな。政治家というのはいえらいいと思うよ。世の中では政治家を馬鹿にしているけど、いかんと思うな。政治家というのはいえらいいと思うよ。

小池 見ていると、割に合わない商売ですね。

藤波 ねえ。

伊藤 四時を過ぎましたので、次回にしたいと思いますが、今度は「ふじなみレポート」があるものですから、質問をあらかじめつくってお送りすることにしたと思いますので、よろしくお願いします。一同 どうもありがとうございました。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第4回

日時：2003年1月8日

14:00～16:10

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

平松 大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■ロッキード事件について

伊藤 この前のお話の中心は、新自由クラブと新生協議会でした。そのへんからお話を伺っていきたくと思いますが、この前のお話にも何か補足されることはございますか。

藤波 ないと思いますね。

伊藤 それでは、福田内閣が成立するまでの動きについて、どういうふうにお聞きしていかわかりませんが、田中内閣の末期から福田内閣の成立まで、田中さん、三木さん、福田さんという過程は、かなり自民党の中が混乱していると思うんですね。田中さんの疑惑の問題、ロッキード問題のときには、先生はどうされていたんですか。

藤波 科学技術庁政務次官を終わって、ちょっとおいて文部省の政務次官になって、文教政策一般、文教政策に一所懸命になっていたということですね。そのへん、あまり覚えがないんだけどね。

伊藤 でもロッキード事件に全然無関心であられたわけではないだろうと思います。あれについて、いまからでもいいんですが、どのようにお考えですか。

藤波 再生をするしかないなという気持ちでした。生まれ変わるしかない。

伊藤 それが新生協議会になるわけですね。

藤波 自民党が生まれ変わるしかない、と思い込んでいました。

伊藤 ロッキード事件そのものについては、どんなふうにお考えでしたか。

藤波 金権体質というのが自民党の体質で、それをすっきりさせる必要があるなという感じはしましたね。

伊藤 やはり田中さんは金権体質だ、ということですね。

藤波 いや、土地をなぶったということで、金権体質だと思ったということがダブっているんです。このあいだ田原総一郎さんと対談した。田原さんはいまは田中無罪論なんです。それで、なぜ田中さんがやられたんだろうという話で、「土地をなぶったからだろう」と私は答えたんですが、土地をなぶったからでしょうね。日本という国柄で、小さな島国で、土地の問題に触れたから事件になったとは思えないような気がしませんか。

伊藤 ロッキードからのあれ「依頼と金銭」はどうですか。

藤波 ロッキードはアメリカと日本の問題ですから、仕方ないというのもおかしいけれど、当時は生まれ変わるしかないと思う気持ちの方が強かったね。

伊藤 田原さんは無罪論なんですか。

藤波 いまはそうです。いまは田中無罪論が多いですね。

伊藤 それは職務権限の問題ですか。

藤波 いや、事実関係も含めて、『日本の政治』という本で――。

武田 このあいだ出された本ですね「田原総一郎著『日本の政治――田中角栄・角栄以後』講談社、二〇〇二年九月」。お金を四回渡したというのは、どうもあり得ないという話ですね。

伊藤 あの当時は、みんなにだいたい「有罪と」信じられていたんじゃないですか。

藤波 そうですね。それが嘘だったんだな。あれは総攻撃をしたからね。

伊藤 党内でもそうですか。

藤波 党内はどうだったのかな。三木内閣ができて、三木内閣をしっかりとさせるということ、それが全部だったんでしょう。田中さんに対する批判というのは。

■三木内閣から福田内閣へ

伊藤 椎名裁定で三木さんが出てきますが、三木さんが出て来るだろかなという予感がありましたか。

藤波 ない。

伊藤 どこへ行くと思っていましたか。

藤波 わからないね。

伊藤 もういろいろな噂が飛んだでしょう。

藤波 ええ。わからなかったですね。

伊藤 当時の藤波先生の地位だとあまり情報がないのかな。

藤波 でしょうな。中曽根さんが幹事長だからね。

伊藤 その中曽根派ですからね。

藤波 わかりませんね。

伊藤 それで中曽根さんが幹事長になって、三木内閣ができる。派

としては内閣を支えていくということになりますね。

藤波 そうです。

伊藤 今度は福田さんとかの挙党協「挙党体制確立協議会」ができ

ますが、その動きには先生たちは乗っていないわけですか。

藤波 先頭を切っては乗っていませんね、三木おろしには。

伊藤 支える方ですか。

藤波 見ている方だ。じいっと見ている方だ。

伊藤 積極的に支えるというほどでもない。

藤波 ない。

伊藤 そうですか。三木さんのあと、福田内閣ができるプロセスはどうですか。結局、大平さんか福田さんかという話になるわけでしょう。密約があったのかどうかよくわかりませんが。

藤波 福田に一本になるでしょう。

伊藤 二年で交替するという約束をしたのかしないのかよくわからないんですが。

藤波 しないだろうなあ、しないと思うね。大平が出ないということになったんだな、結果は。政治は結果だから、結果として出なかったのなら密約があったと言えばあったんだろうけれど、ないといえはないんだ。ないだろうと思うな、私は。

自民党というのは面白いもので、誰かになれば、その人以外が降りればそれで全部解決すると思ってるんだね。それは面白いと思うんだ。田中さんが、田中でなければ誰でもいいといって、椎名さんに任せた。誰かに決めるだろうと、こういうことだな。三木にやらせてみたけれど、三木は反対ばかりしている。事実、中曽根内閣になってから後ろを振り返って自民党の政治という事柄を見て、おかしいなと思うのはだいたい三木か宮澤だね。ローラーに引っかかってくるのはそれだ。靖国でも何でも、憲法問題でも、独禁法でも、みなそうですね。

伊藤 先生は、三木さんとはあまり接点がなかったんですか。

藤波 いや、ときどきは三木さんの家にも行ったけれどね。そんなに、三木でなければと思ってもいなかった。思想的にね。

伊藤 やはり思想的には違いますか。

藤波 違う。福田も違うけれど。三木を降ろして、三木でなければ誰でもいいやと思うものだから、福田か大平かどっちでもいいと思うので、福田を容認するわけだな。だけど私は、制度に則った方がいいと思ったので、このあいだ申しあげたと思うけれど、第一、第二議員会館と参議院の議員会館を、全部歩いた。約半分の先生に会って、話を聴いた。しかし全体的な空気が、あとは誰でもいいや、ということだったな。内田常雄が幹事長だった。それははっきり覚えてる。

伊藤 そんなものですか。

藤波 それは自民党の愛嬌なんですね。

伊藤 三木さんと福田さんを比べたら、先生はどっちに近いんですか。

藤波 思想的には福田で、政治の手法としては三木だな、どちらかと言えば。

伊藤 思想的には福田さんに近いということですか。

藤波 自分では、当時そう思っていた。

伊藤 まだこういう、自民党のトップがどうなるかということに関しては、動き回ったりするというレベルの問題ではないんですか。

藤波 大平と福田が戦う、その頃からですね。

伊藤 もうちょっと後ですね。

藤波 後です。その頃からですね。

伊藤 じゃあこのときはまだ見ているという感じですか。

藤波 見ているという状態ですね。党の姿を見ている。

■社会党との関係

伊藤 こういう自民党のゴタゴタが、反対党というか社会党を元気づける。実際そうだったと思いますが、社会主義協会などはさかんに活動するということで、「ふじなみレポート」第八号 昭和五十二年八月にも社会主義協会の話が出て来るんですが、社会主義協会という、先生は直接――。

※「ふじなみレポート」の第八号「永続すなわち真理」には、第十一回参議院選挙（昭和五十二年七月十日実施）後の社会党の党内抗争について言及し、「参議院選挙中の政党討論会で宮沢喜一、藤波孝生コンビが指摘したように、社会党の中に古典的マルクスレーニン

主義の考えに立つ社会主義協会という集団があり、国会議員の数は少ないが、全国的に強い組織と発言力を持っています。このままでは社会党の将来も心配だとの声も多いのです」と書かれている。

藤波 直接はない。だけれども、すっきりしていることはすっきりしている。野党も自民党も同じですから。派閥的なものは同じです。派閥政治ということは同じです。派閥政治というのは何かということがないけれど、新生クラブの座長になったときに頭の毛が抜けるなど自分で思った。それはなんでかな、と思っているいろいろ考えてみただけけれど、自分で意識したわけではないけれど、政治家の仲間というのはみんな誰かに相談することになっているわけだね。金の問題であろうと、秘書の問題であろうと、あるいは女の問題であろうと。とにかくなんでも誰かに相談して、その場を、今日から明日へ、明日から明後日へつないでいくというのが大事で、それが派閥政治なんだな。人事と金と両方だ。

伊藤 そうやって考えてみると、野党のやっていることも同じ。誰かと相談してやっているんだと思っっていますから、自民党だけが悪くて、野党はいいと思ったわけではない。みんな政治に関するものは総反省して、新しく出発するしかない。政党政治ですからそんなことはわかっているから、まず自民党が生まれ変わるしかないな、と思っ

ていました。

伊藤 社会党の中では社会主義協会派はかなり過激ですね。

藤波 過激だった。

伊藤 そういうものに対して危機感はございましたか。

藤波 私はないね。危機感というのはないと思うな。みんな同じじゃないかと思っっているから。ない、というのもおかしいけれど。

伊藤 相手はいちおう革命を言っているわけでしょう。

藤波 しかし勢力がないですからね。怒濤のように押し寄せて来る

という感じはないから、怖いと思ったことはない。

伊藤 社会党との接点はあまりないですか。社会主義協会だけではなくて、一般的に。

藤波 ない。文教ならあるけれどね。文教ぐらいだな。

伊藤 いちおう文教関係の社会党の議員さんとはおつき合いがあるわけですね。

藤波 そうです。つき合いがある。

伊藤 しょっちゅう委員会も一緒だし、終わってから一緒に飯を食ったりすることもあるんですか。

藤波 ある、ある。

伊藤 社会党でもあるんですか。

藤波 ある、ある。

伊藤 共産党はどうですか。

藤波 共産党はない。

伊藤 共産党だって、文教にいますでしょう。

藤波 いる。高知の山原健二郎、あれは共産党の文教だ。ほとんど関係ないね。飯食う場とは関係ない。

伊藤 議論だけやっているんですね。

藤波 議論はやっている。

伊藤 あの人はどうですか、議論は。

藤波 大したことないなあ。政党を代表して出て来ているわけだから、いちおうの見識はあるし、立派な人だと思うけれど、怖いと思う存在ではない。社会党が頑として動かなくなると、全体がどうにも動かなくなるから、それは怖いわ。

伊藤 当時は、議事妨害で突進してくるなんていう事態は、もうあまりないでしょう。この当時はまだありましたか。

藤波 社会党は方法を模索していたんでしょうね。模索している時代でしょうな。沖繩でひとまずケリがついたな。佐藤内閣で。

■ 新生クラブ発足

伊藤 この前、新生協議会のお話でしたが、これはあとで新生クラブになるんですか。

藤波 新生協議会がクラブになったのはいつかな。

伊藤 名称が変わったのか、俗称なのか。

武田 調べてみますと、昭和五十二年八月に先生が新生クラブの座長に就任されているんですね。その前に、新生協議会というのがあって――。

藤波 熱海で発足しているんだ。それが母体になって、新生クラブは五十二年ですか。

伊藤 これは人数が増えているのかな。

武田 新生クラブができたときに、藤波先生を除いて三十四人、入られて三十五人ですね。それで新生協議会の方は正確な人数がわからないんですが、できてすぐ解散しているんでしょうかね。

藤波 そうですね。

伊藤 あいだがあるんですか。

武田 あいだがあるんです。「新生協議会は」五十一年十二月にできて、その月の二十二日に一度解散しているのかな。

藤波 解散とかなんとかというのではなしに、新生協議会というのを新生クラブという名前にしたわけだ。それだけだ。

武田 そうですか、じゃあ解散ではないんですね。

藤波 命名したわけだ。

伊藤 この「新生」というのは、このまえ先生がお話になった党大会での自民党は生まれ変わらなければならないというあれなんですね。

藤波 そうです。それが基調ですね。それは新自由クラブに行った

者と別に、残った者でやっている集団としては、それを大きな声で言うことが新生クラブの証だからね。自民党の出直しというのかな、出直しだね。一回やめて、解散して出直そうということですね。それはやるべきだったなあ、絶対にやるべきだったね。

武田 これは声明書などは出されたんですか。

藤波 声明書は出さなかった。

武田 そういうことは全然なかったんですか。

藤波 ええ。

伊藤 集まりだけですか。

藤波 それはそれぞれの派閥にいるから、新生クラブとしてどうだというのは、聞かれれば答える程度だね。

伊藤 文書として、こういう綱領でとか、こういう目標で、ということをつくりましたか。

藤波 一步一步行動で示していこうということだった。館山合宿なんかもそうだな。あのととき誰がいたかな。大蔵省では、榎原「英資」なんかかいたな。新聞記者も一緒に行った。

伊藤 議員さんだけではないんですね。

藤波 ええ。

伊藤 「武田氏に」いまいった三十何人というのは議員さんですか。

武田 そうです。

伊藤 正式メンバーは議員さんなんですね。

藤波 そうです。最後は六十何人、七十人ぐらいだったな。

武田 それはまだ調べ切れていないんですが、すごく増えたというお話でしたね。

伊藤 「新生クラブは」だいたい後まで続くわけですね。

藤波 続くわけです。

伊藤 これはずっとうまく続いていけば、もしかしたら藤波派になっ

たかもしれない。

藤波 いやいや、そんなことはない。それは理念が違うから。私は誰とでも同じような立場で物を言うという目線の高さが大事だと思っていた。それは絶対に何よりも大事だと思っていた。いまでもそうだけれどね。新しく選挙をやるといふ議員が来ると、「乞食が立って物を言っているときは立って物を言え、座って物を言っているときは座って物を言え、乞食はいまはホームレスと言っけれど、寝ているときには寝て物を言え、それでなければ絶対に選挙は戦えない」と言っているわけだ。「そんなものですか」と言うから、「そうだそうだ」という。どんな社会でも目線の高さはあまり考えないけれど、政治はそうだ。目の前にいる一人の人間と同じ目の高さでなければ絶対に物を言うな、これが私の信念です。だから新生クラブはそれに徹したんだな。

伊藤 自民党を再生するということは、自民党をいっぺん解党して作り直すという意味ですか。それとも、自民党のがらはそのままで、中を改革しようということですか。

藤波 いや、名前も変えて出直すべきだ、というのがそのときの考えでしたな。

伊藤 じゃあ、もしかしたら新生党になったかもしれない(笑い)。

藤波 そうそう。

伊藤 そういう意味ですか。その後、国民運動本部長ですか。

武田 これは前回も藤波先生が話されたんですが、「ふじなみレポート」に自民党の全国大会で先生が開会の挨拶をされた部分で、自民党の生まれ変わりを意識した開会の挨拶を述べられています。これも新生協議会と通じるような意識があったわけですね。

藤波 そうですね。

武田 そのあと五十三年になると、自民党の国民運動本部長の代理になられるんですね。文言を読んでもみると、国民とのつながりを重視

するとか、そういうことをおっしゃっていますが、こういうことも少し関係があるのかな、と思ったんですが。

藤波 そんなにないね。国民運動本部長の代理になっていきますか。

武田 そうですね。自民党国民運動本部長代理ですね。

藤波 まあ順番ですね。自民党というのは丁稚奉公ですからね。順番に、政務次官をやって、委員長をやって、大臣をやって――。政務次官から部会長をやって、何かの会長代理をやって、部会長をやって、そして順番に上にあがって行って、ある時期が来たら、年季が明けて丁稚奉公から一人前の親方になって、そのときに派閥をもらうわけだな。自民党というのは、もともとはそういう丁稚奉公ですよ。少なくとも私は、初めの頃はそう思っていたね。

ところが、政務次官も部会長もやらん、というのがおる。中曽根康弘なんかはそうだな。あれはすぐに大臣だな。政務次官や部会長をやっていないから、党内のことがわからないというのが、中曽根に対する評価だ。いまの小泉もそうだな。だから自分の知っている者しか大臣に任命しないからな、あれは。だからようけ人材がおるんだけど、人材がわからないんだ。初めから田中真紀子なんかをつかんでいるというのがおかしいんだ。

伊藤 国民運動本部というのはご記憶がございますか。

藤波 あるけれど、そんなに大したことはないか。

伊藤 国民運動本部というのはいったい何をやる場所なんですか。

藤波 国民運動だ。

伊藤 いや、国民運動はわかりますが、具体的にはどういうことをやるんですか。

藤波 そのときそのときの問題がある。

平松 広報局みたいなものですか。

藤波 広報局でもない。

伊藤 いろいろな団体を束ねているところは組織局ですか。

藤波 組織委員会というのがあるね。

平松 団体総局ですね。

伊藤 国民運動本部というのはいったい何をやる場所なんだろうな、と思う。

藤波 動きを示すんだな。組織委員会というのは、止まっている状態でそれぞれの組織を掴む。国民運動というのはい動いているものを掴んで、組織化していくんだろうな。

伊藤 本部長代理というのは、本部長がいて、副本部長がたくさんいて、副本部長の中のトップが本部長代理だと思っんですが、党内ではかなりのポストですね。

藤波 ポストだね。覚えていないな、あまり。

伊藤 やはり段階なんですかね。

藤波 段階だ。一里塚。

■自民党の近代化

伊藤 当時自民党の中で、三木さんにしてもそうだし、福田さんにしても、党の近代化、党の改革というようなことをさかんに言っていましたね。

藤波 動かないんだね。

伊藤 なんとなくかけ声だけという感じがしますが。

藤波 そうですね。

伊藤 それを言っても、現実の自民党の黨員、議員さんたちにとっては既得権ですからね。動かないんですかね。

藤波 頭の中だけで、動かないんだな。

伊藤 やっぱり外からインパクトがないと、中だけではなかなか動かないですね。

藤波 そうですね。三重県あたりで道州制ということを書いた。私
が道州制、道州制と言っていたら、それは言うな、とみな言うわけ
です。なぜだと思ったら、道州制になったら、愛知県・名古屋が道
の中心になる。みんな東京に陳情に行つて来るといつて家を出て来
るのに、それが名古屋に行くだけのことになるじゃないかという。
その程度の話なんだ。だから道州制というのは駄目だという。ああ
そうか、ということだ。頭でやることはみんなそうだな。実際の動
きも、そうなっているね。

伊藤 道州制の問題というのは、先生が主張されていたんですか。

藤波 中曽根内閣で、道州制をやらなければいかん、地方の時代を
つくっていくことが大事だと言っていた。

伊藤 いままた問題になっていますね。

藤波 いまは市町村合併が中心になっています。

伊藤 でも東北三県が合併するとかいって、やっていますね。

藤波 あれはいいね。すごくいいや。

伊藤 あれも実現するのは大変なことだと思いますけれどね。どこ
が中心になるのか。

佐道 党の近代化の話なんですけど、三木さんから福田内閣になって、
三木さんからの申し送りといつてはなんですけど、総裁選の規定で予
備選が導入されることになるんですけど、予備選の導入については先
生はどういうお考えでしたか。それからその後すぐに党員拡大とい
うことが出てくるんですけど。

藤波 党員の拡大は大賛成だな。党員に基盤に置くのかどうかとい
う問題は、首相公選も含めて、私は反対ですね。なんのために議員
がなっているのかわからない。議員がなるときに、政治はあなたに
任せますといつて、議員になるわけだ。そのときに付託を受けるわ
けだ。だから議員が中心になってやるべきだというのが私の考え方
です。

伊藤 予備選はどうですか。

藤波 予備選も、わいわい言つて大騒ぎして、それだけの効果があ
るのか、ということになるな。

佐道 福田内閣のときに予備選の制度が導入されたことで、福田さ
んは負けて大平さんになるわけですね。それからいまの小泉さんも、
予備選の制度があるから、なったわけですね。自民党にとって予備
選を導入したというのはどういう意味があったと思われませんか。
藤波 みんな、マスコミが動かしているのを助長するだけじゃない
かな。

■党員拡大について

伊藤 あのととき、予備選のために党員をうんと増やすことをやりま
したね。先生も三重でだいぶ増やしたわけですか。

藤波 増えた、増えた。

伊藤 あれはどうやって増やすんですか。

藤波 党員を増やすには、政党政治の話をして、自民党でなければ
いかんということを書いて、腹に収める。金を払わなければいかん
からね。立て替える金はない。立て替えないから、増えないですね。

伊藤 党費の立替ですね。でもあのととき、ものすごく増えますね。
藤波 増える。

伊藤 あれは立替もかなり多いんですかね。

藤波 多いな。立替が多いんじゃないですかね。

平松 団体も強かったんでしょうね。

伊藤 団体、企業丸抱えとか、いろいろありますね。

藤波 いろいろありますけれど、あまり私は考えないな。

伊藤 じゃあ三重県は党員が少ないんですか。

藤波 三重県は少ないです。

佐道 党員が大幅に増えた派と、そうでない派がありますね。

藤波 あるな。

伊藤 田中派はとにかく増えたんですね。

佐道 ええ、増えましたね。それから三木派も増えたんですね。河本「敏夫」さんのおかげで。

伊藤 藤波さんのところは、まとまって党員になるところがないか。

藤波 それもある。

佐道 党員と党友を分けるというのがありますね。

藤波 党友というのは、金が多いだけのことだ。

伊藤 権利が多いわけではないんですね。

藤波 ないんだ。党友もつまらんなあ。いまもあるのかな。ちゃんとしておかんといかん。おれはいま無所属だからな。

伊藤 この「ふじなみレポート」を送っている先というのは、支持者ではあるけれど、別に党員であるわけではないんですね。

藤波 ない、関係ない。

伊藤 その中に党員も少しはいるということですか。

藤波 探せばね。

平松 党員はおりますでしょう。

藤波 どちらかと言えばおるだろうな。政治に関心があるわけだから。

伊藤 そういう個人の議員さんの後援会とか後援者とか、そういうものが全部自民党の中に党員として引っ張り込もうという感じだったわけでしょう。

藤波 しかしそれは金がかかりますからね。

伊藤 みんなからお金を出してもらおうからですね。でもなかなか、お金を出して党員になろうという気分までは行かないでしょうね。

佐道 党員の拡大というのは、各議員の方個人に任せるといふ形になるわけですね。

藤波 そう、そう。

伊藤 ノルマはないんですか。

藤波 ノルマはあるようだけれど、それはないな。政治の根幹ですからね。あまり考えたことはないな。

伊藤 「ふじなみレポート」を送っているところは、だいたい藤波先生の支持者なんですか。

藤波 そうです。それは間違いない。

伊藤 そうしたら、「ふじなみレポート」を送る名簿というのは大事なものなんですね。

藤波 そうです。大事です。

伊藤 これは取られると困るわけですね。

藤波 そうです。それは困るわ。

平松 頭の中から譲ってくれません。

藤波 秘書でもわからないわ。

伊藤 ええっ、秘書がわからないで、どうやって送るんですか。

平松 そのたびごとに教えられるんです。

藤波 指折り数えて、言うわけだ。

平松 微妙なところが、僕らではわからない。

藤波 送るのか、この人は送らなくてもいい、という人もあるし、目の前に来たら「自民党でなければいかん、藤波でなければいかん」と言うとしても、その人に「レポート」を送るとは限らない。それは政治生命ですな。

伊藤 本来の趣旨から言えば、そういう人たちを党員にするということなんでしょ。うけれど、それをやったら自分の支持者が全部党にわかっちゃうわけですね。

藤波 わかっちゃう、わかっちゃう。みな本当にはやらないな。

伊藤 自民党はみんな味方かというところ、そうじゃないですからね。
藤波 そう、そう。だから例えば建設業協会とか、税理士会とか、郵便局長会とか、はっきり看板を上げてやっているところはわかってもいいから、どんどん黨員として登録もするし、その人たちも協力もするけれど、それこそ隠れキリシタンみたいなのは、わざわざおもてに出すことはないな、という感じだな。中選挙区でも小選挙区でもそうだな。

伊藤 小選挙区でもそうですか。

藤波 そうだと思っね。

伊藤 ちょっと話が飛びますが、小選挙区で議員が禅譲するということはあり得るんですか。つまり自民党からは代議士は一人しか出られないわけですね。だから、誰かがリタイアするということに、その後の人に自分の支持者の名簿を渡すということになりますか。

藤波 なるだろうね。と思っね。

伊藤 小選挙区だとそうなりますか。

藤波 そうなると思っね。中選挙区でも一緒でしょう。

伊藤 いや、中選挙区はちょっと違うんじゃないですか。

藤波 いや、同じですよ。精神は同じだ。

伊藤 個人の政治家としては名簿が命ですか。

藤波 そうです。

平松 特にこの選挙はそれが命だと思いますね。

藤波 金を使わないからね。

平松 ほかのところの選挙と違って、建設業協会をがんがん締め付けて、お前のところで何票出せ、ということをやるとはいいから、個人の広がり選挙をやりますので、特にほかの人とは違いますね。

佐道 ますます黨員拡大とは違いますね。

平松 それが本当の行為なんでしょうけれどね。

伊藤 前に田川「誠一」さんのお話を伺ったときも、あの人も個人でやっているから、しょっちゅうハガキを書いていたみたいですね。
藤波 そうですね。みんなそうでしたよ。羽田「孜」のおやじ、羽田武嗣郎もそうだし、鹿野道彦のおやじ「彦吉」もそうだし、みんな委員会というハガキを書いていたよ。

伊藤 議事はどうでもいい(笑)。

藤波 どうっていいことはない。みんなハガキを書いていた。

伊藤 でもそういうスタイルの議員だけではないでしょう。

藤波 それが基本でしょうね。

伊藤 業界がバックアップするとか。

藤波 そういうのもあるな。どうだろうな、ひよっとすると、田中さんがそんなことをやっていたかもわからないね。

■派閥と各議員の関係

伊藤 さっきの新生協議会の問題に戻りますが、藤波先生が新生協議会の座長ということで、議員さんが集まっている話し合いをしている。そういうことになると、藤波先生は中曽根派ですが、中曽根さんが「何をやっているんだ」ということではないですか。

藤波 ない。

伊藤 じっと見ているだけですか。

藤波 そうです。それだけです。

伊藤 応援するわけでもない？

藤波 応援するわけでもない。応援は全然しない。部屋に来たこともない。

伊藤 そうすると議員さんというのは、派閥に属していても、一応はインディペンデントなんですね。

藤波 それぞれね。

伊藤 ほかの派閥から来ている人も、別段派閥の親分にごとわって来ているわけでもないわけでしょう。

藤波 ごとわって来ている人もあるかもわからんけれど、ごとわったらいい、というものでもないんだな。いわば隠れキリシタンの組織というけれど、実際は自分の名簿を持っているようなものだろうな。そういう意味での独立性はあるんでしょな。

佐道 派閥と個人の議員の方の独立性の問題なんですが、福田さんのときに派閥解消が言われましたね。実際、形として派閥を解消して――。

藤波 関係ない。見ていると、関係ない。

伊藤 中曽根派だって、あのときいちおう解消するわけでしょう。

藤波 そういうことになってるだけで――。

伊藤 名前を変えただけですか。

藤波 そうです。いまでもそういう政治の姿は変わらんですな。

伊藤 よく派閥のオーナーという言い方をするじゃないですか。

藤波 相談に乗る大将だ。

伊藤 一番力がある人、中曽根派だったら中曽根さんがオーナーですな。

藤波 そうです。

伊藤 例えば、橋本派は橋本「龍太郎」さんがオーナーかと言ったら、ちょっと違うでしょう。

藤波 やっぱりオーナーですよ。橋本会長が選挙区に行くということになると、国会議員は非常に緊張します。

伊藤 でもあの人が派を動かすわけではないでしょう。実際に派を動かしているのは別の人じゃないですか。

藤波 しかしそれは、橋本の意向を無視してはできないからね。

伊藤 そんなものですか。

藤波 はい、そうです。

伊藤 会長というのは、やはり大事なんですね。

藤波 大事なんです。大事なんだな。

武田 そのころ、山中貞則さんも政策集団をつくっていらっしやって、「山中グループ」と言われていましたね。だから中曽根派の中には、藤波先生の政策集団と、山中さんの集団があったんですね。

藤波 「温知会」という渡辺美智雄の会があった。

武田 中曽根派の議員さんがいろいろ政策集団を外でつくっているような感じですね。

藤波 そうです。

伊藤 それは中曽根さんから見たら、どういうふうに見えるんでしょうね。

藤波 どういうふうに見えるんだろうね。

伊藤 あまり気にしていないんですか。渡辺さんについては、気にしていたんでしょう？

藤波 気にしていたんでしょうな。張り合っていたというか。私が官房長官のときに渡辺美智雄が官邸に来たというから、「ちょっと様子を見てこい」といって、秘書官をやったら、「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ」といって帰ってきた。「なんだ」と言ったら、「藤波のような者を官房長官にしておくから中曽根内閣は駄目なんだ。早く辞めさせておれをせいと云っている。えらいこっちゃ」と言ってきた。「そんなことは普通のことじゃないか。えらいことでもなんでもないよ。政治家というのはそういうものだ、普通の話だ」と言ったことがあるな。そんなものですよ。

伊藤 派だから一致しているという問題ではないんですね。

藤波 そうです。特に中曽根派なんていうのはそうですね。

伊藤 やはり中曽根派の話を聞くと、かなりそういうことを言う人が多いですが、派として一致団結とか、そういう感じではないよう

な気がしますね。そうなんですか。場合にもよるんでしょうけれどね。

藤波 場合によるんでしょうな。

伊藤 不思議な派閥だな、と思いますね。

佐道 先ほど、派閥のオーナーというのは相談する相手だというようなことですが、相談をしたら、相談に応じる能力がないといけませんね。その点は、中曽根さんという人は相談し甲斐がある人でしたか。

藤波 選挙で中曽根さんが来たといえは、当選する可能性が強くなるね。国民的な人気があるからね。そういう意味でのオーナーにふさわしい人だということでしょうな。

伊藤 ちょっとお金に困っているんだけどなんとかしてくださいませんか、という相談はどうですか。

藤波 そんなことはよくある。

伊藤 オーナーのところに行くんですか。

藤波 オーナーのところ。オーナー代理とかね。それは金の相談だ。

伊藤 お金と人事が中心ですね。

藤波 お金と人事ですね。もういまは、お金は親方のところに行ってもない。まあ、人事だけですな。だけど、小泉では人事も駄目だ。あいつの知っているものしかないんだ。今度私は古賀誠を幹事長にしようという運動を起こしたんだ。山崎拓じゃ駄目だから。だいたい昔は、おれが官房長官で、山崎拓が官房副長官をしているときに、わかっているからな（一同笑い）。だからあんな者では自民党は駄目だ。山崎では駄目だ。ひとにやらせるばかりで、自分で腹を決めてこうだということをやらんから駄目だ。幹事長をやる者は、自分で腹を決めなければいけない。それをやらんから駄目だ。誰がいいというから、古賀誠がいい。あれは「私が」国会対策委員長よときの副委員長の一人ですからね。

伊藤 古賀誠はこの派閥だった。

小池 堀内派です。

伊藤 最近、派閥の再編が激しいから、誰がどこにいるのかよくわからない。

小池 もとは大平派ですからね。

藤波 田中六助だ。

小池 の、議員秘書をされていましたね。

伊藤 さっきおっしゃった、渡辺さんのグループとか山中さんのグループと、新生協議会のグループはダブっているところもあるんですか。

藤波 ダブっているところはないな。

武田 何か交流のようなことはあるんですか。

藤波 ない。

伊藤 そういものなんだな。

武田 例えばこのころ、宮澤喜一さんが「平河会」をやっていますか、平河会との交流もないですか。

藤波 ないな。表向きはね。個人的に宮澤派の番頭の林義郎と新生クラブの誰かが飯を食うとか、相談するとかいうことはあるけれど、表向きはない。だから生き残ったんだな。

伊藤 人を増やす場合はどうやって増やすんですか。

藤波 誰かが強く推薦すれば、そうしようかといって、世話人会で決めるんだ。

伊藤 いちおう世話人会があるわけですか。

藤波 ある。佐藤文生とか渡部恒三とか、石橋一弥とか塩谷一夫とか。

伊藤 このグループは中曽根政権をつくる時に役に立っているわけですか。

藤波 新生クラブが中曽根政権を支えてというのではなしに、例えば森喜朗と羽田孜と加藤紘一と、その二、三人かな、月にいっぺんずつぐらい飯を食って、私が頼んだから、非常に意味があった。と

きに竹下を呼んできたり、安倍晋太郎を呼んできたり、おやじさんも呼んできて、一緒に話して相談する。

一年ぐらい経ったときかな、例えば安倍さんが総理より先にアメリカに行ったことがあった。その前も、どうしようといって、その場で外務大臣が行くべきだということになって、森さんが安倍さんに話をするし、私は中曽根さんに話をするし、それで決めようといっ

■新生クラブの「改革案」、朝食会の「いとなび」

伊藤 「ふじなみレポート」によると、新生クラブが改革案をつくる作業をやるというようなことが書かれています。

※「ふじなみレポート」第十一号「戦後体制の見直し」（昭和五十二年十一月）には、昭和五十二年十二月に新生クラブは同志と相談して「日本の戦後体制の総見直しと改革案をつくる作業」に入るとされ、さらに「戦後三十二年、憲法問題、行財政制度、安全保障、産業政策、農林漁業、教育、福祉、土地政策、地方自治、エネルギー、数えあげれば限りなく、『日本の戦後』は抜本的な検討と、改革の必要性と未来へのビジョン作りを呼びかけているのです。具体的にはプロジェクトチームを作って進めます」と書かれています。

藤波 自民党の、でしょう。

伊藤 いやもっと大規模な、「日本の戦後体制の総見直し」というようなことですね。これは現実にはできたわけですか。

藤波 いや、できなかった。それができるとよかったですね。

中曽根内閣になっちゃったんだ。

伊藤 そういう意味ですか。

藤波 しかし中曽根さんは自分の意見でどんどんやる人だから。

伊藤 調整して、どうやってついでいくかということだけだな。

武田 こういう政策案みたいなものは、新生クラブでときどき出していくわけですか。

藤波 そうです。

武田 そういうものは政策合宿みたいなもので話し合っているわけですか。

藤波 いや、週にいったべんずつ集まるからね。金曜日の朝だった。

八時から朝食会。だいたい毎回二十人ぐらい集まってきたかな。

伊藤 どこでやるんですか。

藤波 TBRに自分の部屋を持っていたから。

伊藤 二十人ぐらい入れるわけですか。

藤波 入れる。

伊藤 朝食会というのは厳しいですね。八時からではね。みんな早起きだな。

平松 党の部会がその時間とあまり変わりませんから、みなさんその時間にはもう。

藤波 そこで朝飯を食べる。

伊藤 いや、議員さんは夜遅くまで宴会をやって、朝八時では、体力がなければやっていけないじゃないですか。

平松 そうですね。

伊藤 夜の宴会もあるし、朝の朝食会もあるけれど、地元にもしょっちゅう帰らなければならぬでしょう。金婚火来ですか。

藤波 そうです。

伊藤 この当時は、もう新幹線はできているな。新幹線に乗って、津ですか。

藤波 伊勢。

平松 宇治山田。

藤波 四時間。

伊藤 東京からですか。

藤波 ええ。

伊藤 いまとあまり時間は変わらないですか。

藤波 変わらないですね。

平松 近鉄が変わらないものですから。新幹線が、のぞみができて

三十分短くなったぐらいで、その違いぐらいですね。

伊藤 そうすると金曜日の夜あたりに帰るわけですか。

藤波 いまでも。

伊藤 同じ生活ですか。

藤波 同じです。ほとんど同じです。

伊藤 かなりハードですね。

藤波 そうです。

伊藤 それで火曜日には朝出て来るわけですか。

藤波 月曜の夕方とかね。

平松 月曜か、火曜日の朝ですね。

藤波 月曜の最終の新幹線なんかには国会議員がようけ乗っていま

すよ。新幹線の中で会議ができるぐらいだ（一同笑い）。

伊藤 それはいろいろな接点ができますね。

佐道 わざと乗ったりして（笑い）。

藤波 いま議員宿舎がそうですね。私はいま高輪の宿舎にいます

すが、エレベーターに乗るとだいたい野党の連中が乗ってくるから

な。そうすると、エレベーターの中で話ができるな。いまの方がずつ

と便利になっているな。ふだんの議員宿舎では、何を意識している

のか知らないけれど、いまの方がよく会うような気がするな。

小池 いまの野党の方が話しやすいということなんですか。

藤波 それもあるでしょうね。いまは新聞記者を制限しているから

ね。

小池 しゃべることが自由になった、ということですか。

藤波 そう、そう。

伊藤 じゃあ前は、新聞記者は「出入りが」自由だったんですか。

藤波 自由だった。だから例えば朝、新聞記者が野中なら野中の

「部屋の」入口で待ってあって、降りてくるときにずっと一緒にエレ

ベーターに乗ってくるとかね。そうすると周りにはみんな新聞記者

だ、昔だったら。いまは「建物の」入口にしかおれんことになっ

ているから。

伊藤 しかし入口まで行けばつかまる。

藤波 そう、入口に行ったらもう物を言わんもの。

伊藤 でも親しい新聞記者だったら、一緒に車に乗せちゃうでしょ

う。

藤波 それは人によって、どうしようと自由だけれど。

伊藤 先生はやりませんか。

藤波 私は、そうですね。

伊藤 一人で乗るんですね。

■記者との関係

佐道 新生協議会を立ち上げたりして、ずいぶん注目もされておら

れるようになったと思いますが、そうすると新聞記者でも先生をマ

クする人が出て来ると思うんですが、特に親しくなったとか、よく

会ったという記者の方はいらっしゃいますか。

藤波 だいたい中曽根派担当の記者が新生クラブ「担当」だ。私が

座長をやっている限り、一緒にもつという格好だ。私が官房長官に

なると官房長官番になる。国対委員長になると、そいつが国対委員

長のところに回ってくる。

伊藤 同じ人間が、ですか。

藤波 だいたい同じ人間です。各社一人か二人ずつくらい、いまでもずっとその連中とはつき合っていますね。もうだいたい論説委員になっているけれど、その頃は第一線の記者だった。

佐道 どういう人がいますか。

藤波 例えばテレビに出ているようなやつは、「読売新聞の」橋本五郎とか、毎日新聞の松田喬和とか、朝日だったら福家康宣とか、日経だと……。だいたいテレビの担当とか、いろいろなことをやっているわ。ばやいてね。テレビの担当は面白いし、役柄はいいけれど、つまらんわな。新聞記者はやっぱり第一線の記者魂というのがあって、論説委員室にいても、あまりいい顔をしないね。

伊藤 まあそうですね。論説委員室というのは、直接取材もやるんでしょう。

藤波 やるんでしょうね。面白いですよ。

佐道 新聞の記者もそうですが、この当時ですと、テレビの記者というんですか、そういう人もどんどん出て来ていると思うんですが。藤波 出て来ている。NHKを初めとしてね。NHKはいまの影山「日出夫」が国会対策で出て来るわ。日曜の朝の討論でね。あの影山君が私の担当だった。いまでもそうですね。何かあれば、あれがNHKで言うことになるんだ。

伊藤 しかし昔だったら、カメラマンがパシッ、パシッ、パシッということでしょうが、いまはテレビカメラでこうやって「テレビカメラを担ぐ格好をする」やられて、あれは大変ですね。注目されるときは記者がいっぱい集まるでしょうし、特に注目されなければ、どうっていうことはないでしょう。

藤波 そうですね。

伊藤 官房長官なんていったら大変でしょうけれど、無役のときは別にくっついて歩くわけではないし。やはりこの新生クラブで若手として大いに将来を嘱望されるような時期というのは、新聞記者も

ついてくるものですか。

藤波 そういう政治家になれば、一緒について来るな。

伊藤 そういう新聞記者と話し合いをしたり、情報を取ったり、まあギブ・アンド・テイクでしょう。

藤波 そうそう。あそこでこんなことを言っているよとか、参考にもなるんだ。

伊藤 もちろんガセネタもあるでしょうけれど。いろいろ探りを入れてくるということでしょうね。

藤波 私はブリキのパンツをはいた官房長官だと言われて、ブリキのパンツははいていないぞ、と言ったけれど、記者さんの扱いは保利茂という人を手本にしていたからね。それは、ようけ物を言わん。物を言わんけれど、嘘は言わん。これは記者にとって一番いいことだと思った。

嘘は言わんということで、中曽根のあと、竹下と安倍と宮澤と大混戦になった。宮澤さんはちょっと離れていたけれど、竹下か安倍かというので、だいたい安倍になったんですね。あのときも、「安倍ですわね」と担当の新聞記者はみんな言って来た。「いやいや、まだ決まったわけではない」と私が言うと、その夜中に、鵜飼の鵜が集まってくるわけです。それで政治部の総会をやるわけだ。そこでみな「安倍だろう、明日大きく安倍と書こう、打ち出そう」と言うわけだね。「だけど待てよ、藤波はまだうんと言っていないぞ。あいつ一人はうんと言っていない。ひょっとすると竹下かもわからん」といって、ちょっと待つわけだ。「そうかもしれないが、白眼視されて、もう社におれんけれど、藤波さんがうんと言わんでな」と言って泣いて来おった。だから「わからん、わからん、まだわからんぞ、蓋を開けてみないとわからんぞ」と言っておった。そんなことがありましたな。

伊藤 あれは突っ走って書きちゃったところがあるでしょう。

小池 毎日新聞が書きましたね。

藤波 中曽根さんの周りの人が全部というぐらい安倍だと言ったな、あのときは。政治評論家の誰だったか、がんで死んだ人——。誰だっけな。それとか四元「義隆」さんとか、全部安倍だったんだね。

「みんなが安倍だというけれど、藤波さん、本当にまだわからないのか」と言うから、「本当にわからないんだ」といった。「じゃあもう一晩待つか」といって。

平松 飛ばされないで助かったという記者もおりましたけれど。

伊藤 そのブリキのパンツというのはどういう意味ですか。

小池 ガードが堅いということですか。

平松 ガードが堅いらしいんです。

伊藤 下半身のですか（笑い）。パンツは口に穿けないじゃないですか。

平松 本当に話してくれなかったと新聞記者が言っていましたね。

小池 なぜ保利茂を手本にされたんですか。

藤波 あのころは、吉田茂と鳩山一郎のあいだに入るとか、あの人はずいぶん苦労したんだね。それで佐藤栄作をグッと支えてきた様子が非常に立派だったね。ようけ物を言わないでね。それで新聞記者を大事にした。保利茂ぐらいだろう、政治家が亡くなった後、その偲ぶ会をやったり追悼録をまとめたり、そんなことを新聞記者がやるというのはね。非常に立派だったね。

佐道 先生ご自身は、個人的には保利さんと接触があったんですか。

藤波 関係ない。「保利さんが」幹事長るときに、「ちょっと来い」というので、何を言われるかなと思って保利さんのところに行ったら、「浜地「文平」君から手紙が来て、藤波を頼むと言ってきた。よく勉強しろよ」と言って、「私が」一年生のときだった、ポケットに三十万円入れてくれて、ありがたいなと思った。それ一回だけだった。そのあと本願寺の門信「徒」会というのをやってね。あの

人は本願寺派で、築地の本願寺で月に一回朝飯会があるんです。お粥を食べるんだ。それに呼んでくれて、それに何回か行ったことがあるな。保利茂さんの会だった。すみません、そんな話ばかりで。

■後援会や県連、県会議員との関係

伊藤 地元では、先生にはまとまった支持者というのがあるんですか。

藤波 ない。

伊藤 本当に個々人ということですか。

藤波 そうです。

伊藤 地域はどうですか。

藤波 地域はだいたい伊勢中心だけれど、それは尾崎罌堂とか浜地文平の地盤だったから。それと志摩とか紀州とかがあるんだけれど、私がか大きな組織を持っているわけでもないし。個々人だね。その代わり、個人個人を大事にしてきたから、私がリクルートでやっていられるときでも、いま私がどういことを考えているかというの、後援者の誰かに聞くと、こう考えているはずだというのがわかるね。そんな会はないな、ほかに。全国にない。組織の上に立っている者はそうだけれど、下のほうがこう言っているというのは違う。けれど藤波後援会は、藤波さんはいま何を考えているだろうというのと、こんなことを考えていると思うよという話をする。藤波さんがどういことを考えているな、というのがわかる。

伊藤 なんとか会とあって、藤波さんの後援会はあちこちに地域的にできていますね。あれはだいたい市町村単位ですか。

藤波 だいたい市町村単位ですね。自分の本拠地の伊勢市だけは別です。

伊藤 これはいくつかあるということですか。

藤波 そうそう。学区別、中学校だ。

伊藤 一九七八（昭和五十三）年に県連の会長になられていますが、県連というのはどうもよくわからんのですか。

藤波 県会議員さんの会だ。主として。

伊藤 だけど「国会」議員の候補者を決めたりするでしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 だからかなり大きな役割をするのかと思うと――。

藤波 政党のその県の看板だからね。だから権限もあるし、力もある。

伊藤 僕が昔、千葉県の県連に行ったら、何かごく少数の事務員がいて、何をやっているのかと思った。自由新報が山積みになっていて、古いのを送らないで置いてあったりして、なんだか情けない状態だな、と思ったんですが、県連があまり機能していないというんでしょうか。議員の候補者を決めるときはワッと人が集まるけれど、日常的にはほとんど意味がないという感じがしますが、そんなものなんですか。

藤波 そんなものですね。アップ・トゥ・デイトで、そのときにバアーツと浮かび上がって、自民党の意見は、ということになるけれど、ふだんは地味なものです。

伊藤 候補者さえ決めえしまえば、県連は全然機能しないでしょう。

藤波 それでも、ここは推薦するとか、ここは公認するとかというのと、意味が違うな。選挙の最中でも。

伊藤 応援とか、そういうことですか。

藤波 ええ、そう。

伊藤 でも県連が推薦した人と、本部が決めたのと違ったりするとか。

藤波 そんなことはないね。

伊藤 三重県ではなかったですか。

藤波 ない、ない。政治は調整だと思っているから。

伊藤 あと、よくあるのは県議会で、自民党のグループが大きすぎて割れるとか、そういうことはよくあるでしょう。

藤波 感情でね。

伊藤 三重県はどうですか。

藤波 それは、あいつは気にいらんとかなんとか、いろいろあったけれど、そんなに大きな問題はいまままでないね。

伊藤 会派としてはいくつかになっているんですか。

藤波 人間によってね。県会議員の系列は、派閥みたいにあるな。だけど全体としてはそんなに大きな喧嘩にはならんな、三重県の場合。

伊藤 ○○会という県会議員のグループがありますね。それと議員さんの派閥系列とは必ずしも一致しないように思うんですが、どういう構造になっているのかな。

平松 会派というのは県議会の会派でしょう。

伊藤 県議会の会派があって、表向き自由民主党なだけけれど、その中に○○会とか△△会があるわけですね。

平松 流れがあるのは知っていますね。

藤波 いや、できないものだよ。

有馬 一般に県会議員さんのネットワークとしての県連のそういうことには、あまり上から手を突っ込んだりしないのですか。そういうことは放っておくわけですか。

藤波 国会議員も一緒に考えるということになってはいるけれど、それは県会議員さん「が考えること」ですね。

伊藤 市長の候補なんかはどうですか。

藤波 市長の候補でも、誰は誰「がいい」と言うけれど、県連で決まらなければ国で、といってもどうしようもないから、やっぱり県会議員さんですね。

伊藤 国会議員も参加するわけですか。

藤波 参加する。

伊藤 例えば伊勢市の市長を誰にするかというのは、藤波さんの発言がかなり大きいわけですか。

藤波 大きいと思うけれど、公認を誰にしよう、推薦をどうしようということとは、県会議員さんの会議で決めていくことが多いな。

■議員の人材

伊藤 県会議員の中で、生涯県会議員という人と、それ「県議」は第一歩で、国会に行こうという人がいますね。

藤波 ああ。いまはちょっと違っていろいろけれどね。いまはわからんな。だいたい県会議員も国会議員も、いいのはやりたがらないな。人材は、新聞記者とか、学者さんという世界と、裁判官・検事・弁護士という世界かな。三つくらいかな、国会議員を目指すのは。県会議員からは少なくなったよ。それは選挙そのものが意味がなくなってきたんじゃないかな。仕方がないから、おやじのあとで息子がやるとか、家内がやるとかね。家内がやるなんて、そんな馬鹿なことはないよ。家内がやるといっぺんは当選できるからね。地方議員から国会へというのは、やろうとはせんな。

有馬 それは基本的には、県会議員をやろうという人たちの人材が不足してきているということですか。

藤波 そう、そう。私らは厳しい競争をするなと言う方だから現職優先でいいけれど、実際はだんだん人材が枯渇してきたんじゃないかな。国会でも。

伊藤 国会でもそうですか。

藤波 国会はそうです。

伊藤 国会議員になりたいという人がいっぱいいるじゃないですか。

藤波 いや、いっぱいはいませんよ。あんな馬鹿なことをやる者はようけおりませんよ。

小池 県議員の場合は、広島では国会議員の秘書だった方がなるというコースもあるのですが。

藤波 あれはいかな。

小池 三重県ではどうでしたか。

藤波 少ない。議員によっては、自分がより強くなるために、秘書に市町村長をやれとか、県会議員をやれとかいって、わざわざそういうふうにする国会議員もおるけれど、それはどこかでおつかつてくるかもしれないね。必ずしもいいことではないと思うな。国会議員をやったら、その任期を一所懸命やって、秘書もそのつもりで一所懸命やる。だいたい、秘書上りの国会議員とか県議員というのは、あまりよくないな。そう思うね。わかっているように思うけれど、わかり過ぎるんじゃないかな。

伊藤 「平松氏に」なんだか秘書さんとしてはお聞きづらいでしょう（笑い）。

平松 本当にそれはそうだと思います。

藤波 国会議員もいろいろだな。「秘書に議員を」やれと言うのと、やめておいたらどうかと言うのと。

伊藤 県連の会長というのは、なりたいたい人が多いものです。

藤波 三重県なんかはそれほどじゃないけれど、県連会長をやると力が大きいように思うところがあるからな。そういうところでは、やりたがるでしょうね。

伊藤 県によって違いますか。

藤波 違います。全然違うな。

伊藤 みんな交替でやっているような感じがするところもありますけれど。

藤波 いいところはそうです。

伊藤 三重はどうですか。

藤波 三重は交替でやる。いま参議院の斎藤十朗がやっているんだ。「知事をやれ」とやかましく言うんだけれど、「三権の長をやったものが知事をやれん」と言う。「そんなことあるか、埼玉県を見てみる」と言うんだ(一同笑い)。

伊藤 いや、土屋「義彦」さんは長期政権ですね。議員さんとしてワン・オブ・ゼムであるよりは、小なりと言え一つのところのトップですからね。

藤波 選挙区としてはね。

伊藤 だからやり甲斐があるのかもしれないね。

藤波 あればちょっとずつ違うからね。カラーの問題だな。

■戦後体制見直しの柱

有馬 ちょっと元に戻りますが、さっき話が出ました新生クラブの戦後体制見直しのビジョンは、結局でまなかつたとおっしゃいましたが、こういう作業をしている頃、これからの日本を考えるときに、何が柱になるとお考えになっていましたか。

藤波 憲法ではない。安全保障でもないね。わかりきっていることだからな。生産者としての商工農林水産とか、教育や福祉とかというようなことかな。

伊藤 でも総見直しですから、憲法にも触れるわけでしょう。

藤波 触れることはいいけれど、憲法はしばらくは改訂しないと決まっているような政治の空気だからね。

伊藤 でも中曽根さんは一所懸命憲法改正を言っていたじゃないですか。

藤波 いや、自分で言っているだけだ。そんなことするもんか、と

いう空気だよ。

伊藤 いま憲法をまたやっていますね。

藤波 論議でね、やっているな。やっているけど――。

伊藤 やっている「けど」、ですか。

藤波 「けど」だな。中山太郎が会長でやっているけれどね。あまり大して意味ないな。ひょっとすると変えるかもわからんし。

伊藤 中曽根さんは「戦後政治の総決算」と言っていたわけですかね。総決算をしないうちに今日に至っているわけですけど。

有馬 いずれにしても、当時の時代的な雰囲気から言うと、単純に経済というわけでもないんですね。

藤波 ないですね。

伊藤 トータルなものでしょう、この表題を見たら。やはり一度、先生その当時の記録を見せてくださいよ。これはまさか警察に持って行かれたとか。その中には入っていないだろうと思うけれど。

藤波 まとめてくださいよ。

伊藤 今度データを見せてくださいよ。たぶん伊勢でしょう。だって議員会館の中に入るわけがないじゃないですか。

平松 完全に事務所を引き払っていますからね。

伊藤 事務所というのはどこですか。

平松 会館の事務所は完全に引き払っていますから。

伊藤 ああ、そうか。いっぺん落ちたときですね。そのときは伊勢に持って帰ったわけでしょう。捨てたかな。

平松 ちょっと私はいなかったものですか。

伊藤 伊勢の事務所かお宅か、どちらかですか。

平松 この前の引越しのときにどうしましたかね。

伊藤 だって、新生クラブというのは藤波先生の若き日の――。

藤波 夢だな。

有馬 この時代に自民党の活力の中核を担っていた方たちがどうい

うことを考えていたかというのは、歴史的に大事な問題だと思うんですね。

藤波 そうだな。

■臨教審と四六答申

伊藤 ちょうどこの時期は、先生は衆議院の文教委員長ですか。

藤波 委員長はやっていない。部会長だ。

伊藤 それは自民党の方じゃないですか。衆議院の委員長はやっていないんですか。

武田 これ「質問要項における記述」は違うかもしれませんが。

伊藤 文教委員会に属していたことは属していたわけですね。

藤波 そうそう。それでずっと理事もやっていた。

佐道 「入試改善に関する小委員会」の委員長ですね。

伊藤 当時から今日までそうですが、受験戦争という問題がずっとつながっていますね。これをどうするかという問題も絶えずあるわけですね。

藤波 一番オリジナルの臨教審でどうしたんだ、ということをよく言われるんだけど、臨教審は大失敗したんだ。なんで失敗したかという、文部省の機嫌をとりすぎたんだ。委員を決めるときに、文部省から出してくるのを認知したわけだ。それは駄目なんだな、改革にならないんだ。だから上っ面を触っているだけで、教育基本法を改正するか、そんなことにはならないんです。それを中曽根さんは怒っていたけれど。まあ、事務局も文部省だし、斎藤諦淳が臨教審の事務局長をやっていたぐらいだから、文部省的に回して、中教審的に回して、臨教審はないと。私の判断でやろうと思ったけれど、やっぱり駄目だったな。

伊藤 やっぱりそういうときは委員長に別な人、文部省と関係のない人を選ばないと無理ですかね。

藤波 そう、駄目ですね。委員長や会長は大きな意味がある。ずっと後のことになるけれど「昭和五十九年」、中山素平「当時日本興業銀行特別顧問」のところに私は頼みに行っただけです。「臨教審で教育の改革をやりたいので、会長を引き受けてくれ」と言ったら、あれはえらいものだ、中山素平ぐらいになると。興業銀行の顧問室に行っただけけれど、「ほかのことは何をやってもいいけれど、金儲けをしている者が教育のことだけは言えん。だからおれは副会長になって、ひとを助けることになる」「そんなこと言わんと、まあ会長をやってくれ。会長で決まるから」と言ったんだけど、駄目だった。それで京都大学の岡本「道雄」と、慶應の塾長の石川「忠雄」さん。岡本さんが会長で、石川さんと中山素平が副会長をやっただけけれど、結局駄目だったな。

伊藤 そういうときに文部省が事務局を構成しちゃうでしょう。

藤波 そうそう、事務局がでっちゃうからね。

伊藤 でもあれは文部省の審議会ではなくて、内閣の審議会でしょう。

藤波 そうです。格好はそうしたんだね。私が官房長官だから、臨教審をつくるときには全部答弁に答えたんだけど、結局は委員に失敗したな。

伊藤 そこから躓くと駄目なんですね。

藤波 駄目なんだ。

小池 先生が文教で入られたときには「四六答申」が出ていますね。四六答申は先生が二期目に入ったときには、出て来る過程でしたね。その四六答申が「第三の教育改革」と言われた時代の先生のご発言などご本を読ませていただいたんですが、そのときのイメージと臨教審を比較して、先生のイメージというのはいかがですか。

藤波 臨教審は教育の改革というより、中曽根内閣の改革だな。そうなっちゃったんだね。

小池 四六答申はいかがですか。

藤波 四六「答申」は本気になってやったな。だから、いまのゆとりある教育についてやあやあ言っているけれど、ゆとりのある教育にしようということを決めたからな、私が部会長るときに。いまぐずぐず言うことはないんだよ。いまは学力が落ちているとか、いろいろなことを言っているけれど、落ちるのは当たり前だ。ゆとりがあるんだから、土日で休みにして、全体の子供を連れて村の鎮守さんに歴史を勉強しに行け、という時代だから。それが大事なんだ。

「知・徳・体」ではなく、「徳・知・体」、「徳・体・知」が一番いいんだ。「徳・体・知」で行けと言ったのが私たちの時代だからな。

それでいいんです。いまのように学力が落ちるのは決まっています。

伊藤 落ちていいわけですか。

藤波 落ちていい。仕方がない。

伊藤 でも徳の方もできないで、ただ知だけ落ちるといふのは。

藤波 そうです。

小池 やはり四六答申は先生方はバックアップされたという、強い意識がおりなんですね。

藤波 それはあったな。

小池 四六答申のときの文部省とか、そのとき中教審の委員長だった森戸辰男について、先生はどのような印象をお持ちでしたか。

藤波 森戸さんというのは立派な人で、よく頑張ったと思うし、その後天城「勲」さんとか、森戸さんの配下におったのがおるわな、池田浩士とかね。みんな森戸さんの弟子だ。森戸改革というのを一所懸命やった。文部省が一所懸命やっているのを、国会議員が放っておくわけにはいかん、一緒にやろうということで、第三の改革と称して森戸改革を支持して、やっていたんだ。

伊藤 でもあの四六答申というのはあまり実現しなかったじゃないですか。

小池 実現しなかったですね。

藤波 しなかったけれどね。

小池 なかなかいいことがたくさんあって、以後の改革の先取りだったような気がするんですけどね。

伊藤 臨教審はまた同じようなことをやりましたね。

藤波 そうそう。

■海部文部大臣のことなど

佐道 話を戻して、四六答申と臨教審のあいだ、昭和五十二年、五十二年頃なんです。福田内閣のときに海部「俊樹」さんが文部大臣になられますね。先生は三木内閣のときの永井「道雄」さんにはかなり批判的でした。先生は「三木内閣のときは永井「道雄」さんにはやっておられて先生とたいへん親しい方だと思えます。海部さんも教育改革を掲げているいろいろやろうとされていたわけですが、先生からご覧になって海部さんは――。

藤波 西岡武夫と藤波孝生は「一所懸命やろうな」といって、二人で肩を叩いてやっていたけれど、永井さんであろうと海部さんであろうと、文部大臣は誰でもいいやということだった。

伊藤 海部さんは仲間じゃないんですか。

藤波 西岡に聞いてもらわなければ――。ちょっと西岡と私は本当の文教族になったからね。なりすぎていたんだ。

伊藤 海部さんは違うんですか。

藤波 海部さんは文教というより、違うな。もっとスマートだ。

伊藤 海部さんは文部大臣になったので文教になったんですか。

藤波 そうそう。青少年問題なんか熱心でしたね。

佐道 海部さんのときに、先生は衆議院の「入試改善に関する小委員会」の委員長になられますが、大学入試改善とか、日教組の問題とか、いろいろな改革を掲げておやりになるんですが、あまりご印象はございませんか。

藤波 入試改善はあまりないね。枝葉末節という気がするね。

伊藤 何をいじってもどうにもならないという感じですか。

藤波 枝葉だ。

伊藤 日教組とはどうですか。

藤波 私が国会議員になってから、藤波のポスターを剥げというと、選挙区に貼ってあるポスターを全部、一晩でザッと剥がされるようなことをやっていたからね。県教組、三重県教職員組合は強いですよ。一晩でポスターがなくなっちゃうんだ。そんなことをやってきたからね。

佐道 それはすごいですね。

藤波 皇學館の田中卓が来てから、なお、そうだったんだ。右が強くなったからね。右が強くなると、左の方も一所懸命になるからな。だから右もほどほどでいいんだよ。「平松氏を指して」皇學館だからね。

伊藤 いまでも三重は強いですか。

藤波 いまは三教組は駄目だ。山本正和という参議院議員を中心に一所懸命になってやってきた。前の三教組の委員長ですけれどね。それは強いですね。それは、三教組の幹部と毎週ゴルフをしないと県の教育長は務まらないとか、校長のあとは教組の推薦でないとか決まらないとか、そんなことはざらにあるな。

伊藤 すごいですね。でもだいたい日教組はあちこちで組織率は下がっていますね。

藤波 そうそう。

伊藤 三重は違うんですね。

平松 下がってはいるでしょう。

藤波 組織率はね。全部入っているからね、いま。

伊藤 ガタツと下がって発言力がなくなってきているところもかなりあるわけですね。

藤波 県会なんかでもやられたからな。県会の教組を支持しているかどうかというので、自民党の県会議員とかやられている。私は助けるけれどね。

伊藤 三重の県会では、教組出身の社会党議員というのはかなりいるんですね。

藤波 いるね。七、八人おるよ。

平松 北の方は多いでしょうね。

伊藤 社会党の一番のバックは日教組ですか。

藤波 自治労とかね。

伊藤 自治労があるか。自治労、日教組ですね。

■福田内閣の政策など

伊藤 福田内閣の予算編成で、初めて公債発行をしますね。

武田 先生はこのころ予算委員をやられていますね。

伊藤 公債発行のことで何かご記憶はありますか。

藤波 ついに借金することになったか、という感じだね。ずいぶん右寄りだったからね。福田内閣は青嵐会が別働隊だといったぐらいだ。田中内閣のときに、田中・大平を真正面から攻撃していたのが青嵐会だ。私らの仲間はみなそれと反対の方だったからね、守る方だった。福田内閣でもちょっと行き過ぎるんじゃないかと思った。右も左もいろいろなこと言うけれど、「一人の人命は地球より重い」

という福田さんの話はいいからね、人権意識としてね。だから、全体的には右寄りの思想だったけれど、そんなに強く賛成するとか反対するとかということなしに来たというのかな。

伊藤 じゃあこのときの公債発行予算については、あまり印象が深くないですか。

藤波 ない、ない。

武田 福田内閣のときの外交はいかがですか。

藤波 いまからだ、あとで後ろを振り返るといことがあからわからないけれどね。小泉の北朝鮮と一緒だよ。まだわからないよ。あと四、五年経って見ないと。結局、ブッシュに騙されて行ったんだと思うけれどな。

伊藤 福田内閣の時期、公明・民社が提携するとか、江田「三郎」さんが亡くなって、社会党の委員長が飛鳥田「一雄」さんに替わるとか、いろいろな出来事があります。結局、江田さんが亡くなった後、社会党が分裂して社民連ができるとか。

藤波 江田さんというのは大きな影響力を持っていたな。あの人が生きていたら、日本の政治が変わっているね。

伊藤 先生は江田さんとは直接の接点はないでしょう。

藤波 ないです。見たところで、江田さんという人の組織力は大きなものがあると思っただけれどな。亡くなって残念だったな。佐々木「更三」さんになったんでしょ。

伊藤 飛鳥田ですね。飛鳥田さんは何か関係がありますか。

藤波 直接はない。

伊藤 公明・民社が提携するということは、三重なんかではあまり影響はないですか。

藤波 ないですね。

伊藤 まだこの段階だと、藤波先生は党内が世界という感じですか。藤波 そうです、そうです。

伊藤 まだ党外まで手を伸ばしてどうこう、という時期ではないんですね。

藤波 誰もないですね。

伊藤 だけど国対とか、官房副長官とか官房長官ということになれば、ほかの党との接点をつくらなければいけないわけでしょう。

藤波 そう、そう。

伊藤 この段階ではまだ党内ですか。

藤波 三木、福田のときはね。

伊藤 それもだいたい中曽根派中心ですね。もちろんさっきの新生クラブは派を超えていますけれど、派を超えても党は超えないという感じですね。

藤波 そうですね。

伊藤 福田さんは、靖国神社参拝とか、成田関連の立法とか、防衛問題にかなり積極的だったように思います。それから元号の法制化もあります。こういう一連の事柄はよくタカ派的と言われていますが、こういう福田内閣の姿勢に対しては、先生は賛成だったんでしょか。

藤波 内閣によって、中曽根さんのときもそうだけれど、団体が力をつけるわけだな。「団体というのは」内閣に似た勢力。例えば元号なんていうのは、福田内閣でなければ出て来ないようなものが、そのときに出て来るわけだ。中曽根内閣のときでも、総決算、総決算と言いつ過ぎるものだから、総決算ならこれもやらなければ決算にならんぞ、と出て出て来る。それが出て来ると、声が大きくなる。わざわざそれに反対するということにはならないんだ。それが民意なんだな。

伊藤 そういう勢いなんですね。

藤波 勢いだね。

伊藤 元号の法制化なんていう問題は、もちろん異議はないことで

しょう。

藤波 そうそう。

伊藤 靖国神社参拝もそうでしょうし、防衛問題もある程度しっかり考えないとしょうがないということですね。

藤波 そうそう。

佐道 防衛の問題では、それこそいままさに問題になっていますが、福田さんのときに有事法制の研究をするということをおっしゃるわけですね。一九六五年に三矢事件があつて、そういうことを議論するのがタブーになっていたのに、福田さんのときに有事法制を言い出すわけですが、これはどういうふうに思われましたか。

藤波 議論を始めるわけだから、始めるのに文句を言う者はないだろうということだな。

伊藤 有事法制は必要だということですね。

藤波 自民党の枠を超えないで行くことだね。自民党の流れの中で、レットテルを貼られれば「私は」一番左の方だけれど、自民党の枠を超えないということが、各派から来ているわけだからしょうがないんだ。

伊藤 「藤波先生は」自民党の左ですか。僕は右のような感じですが。

藤波 右は青嵐会だ。

伊藤 なんで青嵐会に行かなかつたのかと思うんですが（笑い）。

藤波 行かない。人間関係だ。

伊藤 昭和五十三年に鄧小平が日本にやってくる。何か記憶にありますか。

藤波 いえ、ありません。

伊藤 福田内閣のときに、日中平和友好条約ができるんですね。これは例の覇権条項で相当もめますが、まだこういうことに直接触れるような立場にはないということですか。

藤波 ない。

伊藤 やはり官房長官ぐらいにならないと、ということですかね。

■福田と大平をめぐる

伊藤 それでその年の十一月に総裁選挙が行なわれて、福田・大平の一騎打ちということになるわけですが、このころから、先生さっきおっしゃっていたように、党のトップを動かすことに直接あるいは間接に関わるぐらいのことになるわけですね。

藤波 人間関係で、大平さんの一番近くにいた人と親しくて、その人と連絡をとりながらやっていたからそういうことになったんだな。

伊藤 先生自身は、大平さんを支持するグループなんですか。

藤波 大平さんだね。

伊藤 このときは中曽根派はどうしたんですか。

小池 中曽根派は福田「支持」だったと思うんですが。

藤波 福田だ。だけれども、大平とも話をした。最終的に、本会議に出るとか出ないとか行って、中曽根さんは本会議に出て、安倍晋太郎は出なかった。不信任のときに出て行ったんだな。

伊藤 藤波先生はどうなさったんですか。

藤波 私は大平さんが好きだったから、大平さんの連絡をして、中曽根派との連絡をしたけれど、そんなに大平の使いに出すということの中曽根派の中で言われたことはなかったな。自分でやっていたんだ。

伊藤 そうすると、中曽根派も福田支持、大平支持というふうには、必ずしも一本化はしていませんでしたか。

藤波 だいたい、派のことでくすぐず言わんという空気だったけれど。渡辺美智雄も大平だったからな。

伊藤 先生は？

藤波 私は大平寄りだったな。

伊藤 でも現実に投票をするときはどうなさったんですか。

佐道 これは投票していませんね。予備選で終わりですから。これは予備選が初めてですね。予備選の動向については、どういふふうに読んでおられましたか。初めての予備選が行なわれるということで、勝敗の行方については。新聞では福田優勢でしたが。

藤波 田中が大平についたから、大平が勝つと思っただけ。田中派が強いの、全国の組織を見て強いと思っただけ。

武田 「ふじなみレポート」を見ると、昭和五十三年十月に、総裁選挙の連絡をされているんですが、こういうときには誰を支持してくださいとか、誰に投票してくださいというものは一切言わないわけですか。

※「ふじなみレポート」第二十二号「総裁選挙へ」（昭和五十三年十月）では、昭和五十三年十一月から十二月にかけて実施する、自民党総裁選の日程および選出方法について説明している。また「政党史上初めての選挙ですから公明正大に行われ、総裁選挙後は、また一致結束して進むことを新生クラブは決議しました」と書かれている。

藤波 あのとときは誰が出たんだろう。河本と大平と福田と――。

伊藤 もう一人いたかな。

佐道 河本さんは立ったかもしれませんね。

藤波 選挙区で、例えば河本の場合、河本派の野呂恭一がいたからね。だから河本で行かないんだ。福田が大平かなんていったら、大平さんと言ったと思うね。

伊藤 大平をやってくれ、ということですか。

藤波 ということだな。

伊藤 投票まで行かなかったから、中曽根派としては統制しなくてもいいわけですね。

佐道 予備選ということになると、党员・党友の選挙ということになるわけですが、県連は相当動くんじゃないかと思うんですが、どうなんですか。

藤波 まあ、国会議員が三人寄ると、三つ出すわけにはいかないからなと言っていたんだね。だからほどほどにしていたんじゃないかな。

伊藤 でも結局、それぞれの議員さんは自分の支持している人になるべく投票してくれよ、ということですか。

藤波 そうそう、そうですね。

伊藤 それで大平さんが勝って、福田さんは「天の声にも変な声がある」とかいって辞める。それで大平内閣ができるわけですが、大平内閣ができるときに先生は内閣なんていう噂はありませんでしたか。

藤波 第一次大平内閣でしょう。ないだろうな、まだ。

武田 あったみたいですね。

藤波 あった、ぐらいいの話だ。

伊藤 そういふことはしょっちゅうあることですか。

藤波 大臣に何派から誰を出してやるという話は、ほかの派でも出て来るから。

伊藤 やはり中曽根派からの入閣予定者として、何人か候補を出すわけでしょう。そういうところに入っているということですかね。

藤波 「候補者に入っているという」ことは大事だね。だけど本当に自分では思っていない。まだまだと思っているから。

伊藤 しかしこのときは当選何回ですか。

藤波 四回。まだまだ。

伊藤 四回というのはまだですか。

佐道 四回だったから早いですね。

藤波 四回、五回では早いな。

伊藤 そうですか、六回とか七回ですか。

藤波 そうそう。

伊藤 でも第二次「大平」内閣では入閣されるんですね。そのときは当選四回のみですか。

武田 五回になってからですね。

伊藤 五回だといいわけですか。早いですか。

藤波 早い、早い。

伊藤 じゃあこれは、ねたみそねみの対象かな。

藤波 私と武藤嘉文は早かったな。

伊藤 これは大変だな、あとで逆風が来るな。

藤波 大平から、派閥の親分のところに電話がかかってくるんだ。

中曽根の部屋に。聞き耳を立てて聞いているんだ。向こうは「誰々をくれ」と言っているわけだ。おお、言っているぞ、というんだ。

あれど、うんと言わないんだ。「なかなか派内にもいろいろな意見があつて」とかなんとか言っているんだ。そんなことを言わないで、

ちゃんと入れてくれればいいのにな、と思って祈るような気持ちでおつて、まあ武藤と私が入った。あのときは誰が入ったかな。宇野

宗佑が入ったかな。やれやれと思つたことを覚えてるな。

伊藤 中曽根派へのポストの配分はいくつですか。

藤波 四つぐらいあつたんじゃないかな。そんなものだ。五つはないだろう。

伊藤 そんなにありましたか。四つあつたかな。

武田 大平内閣が成立すると、新生クラブのメンバーはずいぶん政務次官になったりとか、政調の部長になったりしますね。それは

先生が書かれていたけれど、新生クラブの二十何名がなるんですね。

「あと、五、六年もすればこの中堅若手が完全に日本の政治を動かす時代が来ます」と書いておられますね。新生クラブというよりは、

各派の配分で入るわけですね。

※「ふじなみレポート」第二十四号「行く年来る年」（昭和五十三年十

二月）に、新生クラブから政務次官、官房副長官などが八名、政調の正副部長に二十名が就任したと書かれている。

藤波 そうだな。

伊藤 だから新生クラブがなかなか優秀な人材を揃えていたということですか。

藤波 そうです。

伊藤 別に新生クラブの力ではなかったということではないでしょう。

藤波 ないと思うんだ。私はそう思うな。

■政調副会長に就任

伊藤 政調の副会長というのは、大平内閣でおなりになるわけです。

藤波 河本さんの下だ。

伊藤 河本さんが会長ですか。副会長は一人ですか。

藤波 いや、十人ぐらいおるんだ。各派閥から。河本派の野呂恭一が一緒だった。野呂も入れて、私も入れるところが選挙区だ。そんなこともあるんだ。

伊藤 政調の副会長というのはかなり大きな力を持つわけでしょう。

藤波 持ちますね。

伊藤 実際に各部会からいろいろと上がってくるわけですね。それを最終的に決着を着けるのは政調会の部長ですか。

藤波 政調審議会というのがあつて、そこで部長が発表して、それを政調の正副会長会議ぐらいで決めていくんだ。物を言わなければ、河本さんはパツと決めていく方だったからな。

伊藤 そうですか。河本さんの印象はどうですか。

藤波 河本さんは、物を言わんし、笑わんし、それでも決めることは決めていたな。あれでよかったんだ。生きてるかな。

平松 二年前に生きていたという話を聞いたんですが、そこからは

伊藤 この前亡くなったんじゃないかな。

佐道 亡くなりました。「二〇〇一年五月二十四日、八十九歳」。

伊藤 自分の三光汽船をつぶしちゃったんですね。ちょっと河本さんというのはほかの政治家と違うタイプだとよく言われますが、そうなんですか。

藤波 そうですね。

伊藤 笑わんで、しゃべらんで、よく当選してくるものですね。

藤波 ねえ、本当にそう思うわ。

平松 息子さん「河本三郎」がこのたび落ちましたが、それも通ったときはおやじの遺産だったと言われていましたからね。何かしら、あったんでしょうね。

藤波 いいところあったんだな。

平松 いいところがあったんでしょね。

伊藤 議員さんでもいろいろなタイプがいるんですね。

藤波 谷洋一のところだろう、兵庫県の三田だ。違うか。

平松 小選挙区になって違うと思いますが、中選挙区のときはちょっとわかりません。

※谷洋一氏は三田市を含む兵庫五区、河本三郎氏は相生市などを含む兵庫十二区、同区で当選したのは無所属の山口壮氏。中選挙区時代、三田市は二区、相生市は四区。

伊藤 神戸の裏の方ですか。

平松 田舎ですね。日本海側です。

伊藤 河本派というのは異質な派ですか、三木派以来。

藤波 そうですね。いまでもあの外務大臣が――。

小池 高村「正彦」ですね。

平松 代行でしょう、会長になりましたか。

小池 高村派にはなっていないですね。

伊藤 旧河本派といっているの？

佐道 旧河本派といっていますね。

平松 奥さまが生きておられると聞きました。パーティに車椅子でお見えになったと何年前かに聞きました。

伊藤 そういふことですか。この第一次大平内閣の政調副会長の時代から、また次回伺うということにいたしましょう。今日は幸いなことに福田内閣の時代はだいたいお話を伺いましたので、今度は大

平内閣の時代を伺いたいと思います。よろしくお願ひします。

藤波 つまらんことだけ覚えておって、なかなか大事なことになると忘れてるんだ。

伊藤 やっぱり、次々と忘れていかなかったら、日々事柄があるわけですからね。でも何か記録をつけていないと困ることもあるんじゃないかと思えますが。

藤波 政治家は日記をつけないな。

伊藤 そうですか？ 僕は政治家の日記をずいぶん出していますよ。

藤波 つけないですよ。

伊藤 いや、佐藤栄作とか――。

藤波 えらい人はね。だけど、つけないな。私は初めからつけないというのでいったからね。

伊藤 「ふじなみレポート」があるからいいじゃないですか。

佐道 これはすごい記録ですね。

伊藤 定期的にずっと出ているということは意味が大きいですね。

藤波 有権者の顔を思い浮かべて書くんだから。

佐道 読み手のことを思い浮かべながら書かれているんですね。

武田 すごく読みやすいですね。

伊藤 どうもありがとうございます。

藤波孝生 オーラルヒストリー

第5回

日時：2003年2月21日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

武田知己（政策研究大学院大学特別研究員）

平松大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■ 新生クラブの意義、党内の序列

伊藤 前回は大平政権の時代に入って、党の政調会の副会長をおやりになっているところまで行ってしまったんですが、その後からのお話を伺いたいと思います。その前に、前回の話で何か補足なされることはございますか。

藤波 新生クラブをつくった意味ですが、私が座長をしていて、野田毅君が事務局長をしていました。このあいだ「野田氏が」自民党に入って、ちょっと訪ねてきたので、新生クラブの目的というのは何だったのか、ということ話を話してみたいです。これは私の判断ですが、一つは「世代交代」ということがあったと思うんです。もう一つは「戦後政治の総決算」ということを言いました。それは中曽根内閣ができたときに使ったということです。ですから、ひょっとすると中曽根内閣の母体になったのは新生クラブではなかったか、という気がします。少なくとも、政治の総決算をやるうということ、でみんなが集まった、ということ。もう一つは世代交代ですが、その二つですね。

伊藤 世代交代というと、どのくらいの感じなんですか。当時は三角大福中と言われていたでしょう。

藤波 政治の場合には、世代交代ではなくて、当選回数が少なくても採る、という意味ですね。必ずしも年齢にこだわらない。

伊藤 当選回数何回でないとどうだというのは、かなりカチッとしたものです。現実には当選回数が言うわけですか。

藤波 自民党政治そのものは、一般の国会議員、委員会の理事、政務次官、部長、それから委員長――。

伊藤 それは議会の、ですね。

藤波 そうです。そして、整調の副会長、あるいは総務会の副会長、党の副幹事長、その三つぐらいがだいたいその次で、それを一所懸命やると、その次に大臣になる。だいたいそういう序列みたいなものがあって、当選五回から六回ぐらいにやらんと大臣にならんということになっていたわけですね。そこから見当をつけると、三回ぐらいで大臣になるというのは、よほど思い切った世代交代ですね。小泉内閣なんかは、そういう意味では完全にかつての自民党の姿を脱している格好ですね。大臣が終わって二、三回すると派閥の領袖になっていくわけです。中曽根康弘なんかは、政務次官も委員長もやっていない。そういうコースもある。

伊藤 それは別のコースなんですね。

藤波 別のコースですね。だけど、きわめて少ないコースですね。竹下なんか安倍晋太郎もそうだけれど、委員長もやっている、政務次官もやっている、という格好ですね。

伊藤 幹事長というのは、どれぐらいやるわけですか。

藤波 幹事長は、大臣をやって、派閥の領袖もやって、そのあとですね。

伊藤 小なりといえ、派閥を持っていないとなかなか幹事長にはなれないんですね。

藤波 党全体をまとめていく立場ですからね。小さなことでは簡単になれないですね。

伊藤 そうですか、やはり大派閥の領袖ですね。

藤波 そうですね。

伊藤 幹事長になると、そこから先は総理へのコースもありますね。藤波 総理へのコースもありますね。官房長官と幹事長と同じぐらいの可能性で、将来総理につける。

伊藤 幹事長と官房長官はだいたい同じぐらいの格ですか。

藤波 そうですね。

伊藤 それでまた重要閣僚をやったりして、総理への道を進む。

藤波 進む。党の二役も含めてね。

伊藤 あと、議長になるというコースもありますね。

藤波 議長になるコースもありますけれど、総理かまたは、というものではないんですが、ほぼ同じぐらいの名誉的な意味で、議長とこのうのはある。

伊藤 権力はあまりないわけですね。

藤波 そうですね。党内の権力はないけれど、名譽的には十分あるんですね。

伊藤 名譽だけがある。これも変なものですな（笑い）。

佐道 三権の長ですからね。

平松 別に行くわけですからね。

伊藤 それで行き止まりでしょう。

藤波 そうです、行き止まりですね。

伊藤 わかりました。新生クラブのことは、また改めてお伺いしたいと思います。

■大平、福田との関係

伊藤 今日は大平内閣の時代のことなんですが、先生は前回、「うん、そういうこともあったな」とおっしゃいましたが、だいたい大平内閣ができるときに、一応ノミネートされていたんじゃないか。つまり新聞や雑誌などに、「藤波入閣」という話がかんり出たわけですね。何かご記憶はございますか。ご自分でも期待されたとか。

藤波 大平さんと中曾根をつなぐものとしての意味が「自分には」あったんだね。

伊藤 じゃあ、それ以前から大平さんとおつき合いがかなりあった

わけですね。

藤波 あったわけですね。

武田 『政治と鎮魂』という本をいただきました。それに先生と大平さんとのつき合いがかなり書かれているんですが、だいたいつごろ大平さんと接触があったんでしょうか。

伊藤 何か役職とか、そういうことでご一緒になったことがあるんですか。

藤波 ないですね。牛尾治朗とか浅利慶太とか、ああいう連中は前から大平さんと心やすくて、いっぺん飯を食えと言って、私と飯を食ったのが始まりだ。

伊藤 そういう人たちが――。

藤波 段取りした。大平さんとの話が先だったと思うんですけど。牛尾治朗と浅利慶太が来て、「大平さんと飯を食ったらどうだ」という話でした。新生クラブの代表になったころ、座長になったころですね。

伊藤 大平さんの印象はどうでした。

藤波 大きいという感じでした。

伊藤 だいたい柄がらも大きいわけですね。

藤波 そうですね。包み込んでいくという感じでした。

伊藤 普通の時もなかなか物を言わんのですね。

藤波 言わんですね。

伊藤 同じですか。

藤波 同じです。

伊藤 何か話にくいじゃないですか。

藤波 そんなことはないけれどね。

伊藤 じゃあ、ひとの話を聞く方ですか。

藤波 そうそう。

武田 大平内閣ができるときには、大平さんの方から藤波先生に、

何か頼むよ、というようなお話は全くないですか。
藤波 ない。

伊藤 じゃあ、新聞とか週刊誌に出たのは、本当に純粋な予想なん
でしょうかね。

藤波 そうでしょうね。

伊藤 まだ当選回数が少ないわけですね。

藤波 そうです、五回ですからね。

伊藤 このときはまだ三回でしょう。だから、新聞や何かはどうし
てそういうことを書いたんでしょうね。

藤波 若い者の代表みたいな格好だ。

伊藤 やっぱり新生クラブが効いているのかな。

藤波 効いているんでしょうね。

伊藤 新聞の方の期待かもしれない。

藤波 そうですね。

伊藤 さっきお話があった浅利さんなどとお話しなさせて、それか
ら大平さんとは、ときどきお会いになるようになるんですか。

藤波 なるんです。

伊藤 どこでお会いするんですか。大平事務所に行くわけですか。

藤波 「大平事務所」に行ったこともあるし、大平さんが仕事をし
ていたところ、大蔵大臣のときは大蔵省に行ったり、あちこちですね。

伊藤 料亭なんかはどうですか。

藤波 料亭はあまり使わなかったですな。

伊藤 当時、いろいろな政治家がいろいろな料亭を根城にしていた
と思うんですが、先生はあまりそういうことはなさらなかったん
ですか。

藤波 あまりしなかったですな。

伊藤 あれはお金がかかるだろうと思いますが。

藤波 そうですね。あまり興味がなかった。

武田 大平さんもあまり料亭にひとを呼んだりはされなかったん
ですか。

藤波 そうだな。

伊藤 福田さんはどうですか。

藤波 あの人はあまりつき合いがなかったな。いろいろな話があ
ると、私のところに福田さんが来たけれどね。

伊藤 私のところというのはどこですか。

藤波 藤波のところへ。福田勉夫は中曽根康弘と同じ選挙区だから。

武田 中曽根さんには相談できないんですね。

藤波 相談しない。

伊藤 「藤波先生が」あいだに入るわけですか。

藤波 そうです。

伊藤 そうすると、大平さんとの関係も同じことですね。

藤波 大平さんとは、大平と私と直接ですな。

伊藤 それはそうでしょうけれど、大平さんと中曽根さん「のあい
だに入る」という――。

藤波 それは大平さんに聞いてみなかったから、わからない。

伊藤 でも先生はつなぎみたいなことになるわけじゃないですか。

藤波 そんなことはないと思うけれどな。

伊藤 それはそれで、別の話ですか。

藤波 そうですね。

■牛尾治朗について

武田 大平さんとは、政治の考えとか、政策のこととか、そういう
ことについても話されたんですか。

藤波 第一次の大平内閣の時だったと思うけれど、地方統一選挙が

あつて「昭和五十四年四月」、東京都知事に牛尾治朗を推薦したら、「それは結構だ、そうしよう」と大平さんも言った。そのときは、新自由クラブの河野洋平も——新自由クラブになっていきますからね——、自民党では青嵐会の中川一郎も、右から左までずっと連絡に走ったが、みんな牛尾で結構だ、ということだった。正月に大平さんが伊勢神宮に来たときも、伊勢神宮で私がつつと付いて歩いて、都知事は牛尾でいこうといつて念を押した。「間違いないいこう」と言った。「そうする」と言う。

東京に帰って、あるとき、地方統一選挙は四月だから三月頃だったか、「いっぺん来てくれ」という。誰が言ってきたのか、「大平さんから」連絡があった。森田一が大平の隣に住んでいるので、森田の家に行って庭から大平の家に夜入って、待っていたら、やってきた。「君との約束で牛尾治朗を考えていた。東京都知事選挙だけではないに、日本の新しい地方政治のあり方を考える意味で、牛尾治朗を考えていた。しかし藤波君、政治というものは、最高は最適とは限らないんだ。牛尾治朗というのはたしかに最高の人材だ、しかし今の時期に最適とは言えないぞ」という。

奥野誠亮とか旧内務官僚が動いて、一晩のうちに牛尾治朗が鈴木俊一にひっくり返ったんだ。そういうことがありました。説明するのがそのときの「大平さんの」目的だったんだけど、「最高は最適とは限らない」という名文句を残して、「君の仲間に話してやってくれ」という話だった。それで帰ってきたんだ。それが大平正芳という政治家をいちばん近く感じたときだったな。

伊藤 先生はどうして牛尾さんだったんですか。

藤波 「牛尾は」日本青年会議所の会頭をやったからね。私は、伊勢の青年会議所の副理事長止まりだったけれど、非常にいいな、と思っていた。

伊藤 前からですか。

藤波 前から。それで河野洋平とかといろいろ話をしていううちに牛尾治朗の名前が出て、牛尾治朗で行こうということになって、ずっと来たんですね。

有馬 先生の牛尾さんとの関係は、その青年会議所の活動を通じて、ということですか。

藤波 そうそう、通じて。

伊藤 じゃあ前から知っていらっしやるわけですか。

藤波 知っていた。

伊藤 知っているというだけではなくて、懇意であったわけですか。

藤波 そうそう。私の後援者になっていた。

伊藤 先生の牛尾さんに対する評価はどうですか。

藤波 よかったですね。新生クラブの——。

伊藤 この前のお話で、新生クラブに呼んでお話を聞いたということをおっしゃっていましたね。

藤波 そう。新しい自由主義とか、新しい地方主義とか、新しい国際主義とか、いろいろな考え方に合致した人だと思ったんだね。中川一郎に話したら、中川一郎も結構だという。河野洋平もいと言う。

佐道 牛尾さんご本人も乗り気でいらっしやうったんですか。

藤波 そうそう、乗り気だったね。

伊藤 そのとき、しかし河野さんは新自由クラブですね。

藤波 そうそう。政党が違うんだ。でも牛尾治朗は、河野洋平と近かった。

伊藤 いまお話になった奥野さんとか旧内務官僚が巻き返したというのですが、奥野さんたちはそれだけ党内で力があつたんですか。

藤波 そのときに、旧内務官僚はえらいものだと思つたな。もう一人、誰だったかな。考えてみれば後藤田「正晴」もそうだな。

武田 連帯感とか一体感みたいなものがあるんでしょうね。

藤波 あるね。内田常雄「三木内閣時代の幹事長」もそうだし。

伊藤 当時は旧内務官僚系の大物がたくさんいましたね。
藤波 大物で、古いのがいたね。

伊藤 中曽根さんだって、考えてみれば旧内務官僚だ。

佐道 古井喜実「第一次大平内閣で法務大臣」さんとか。

伊藤 そうそう、古井喜実なんかもそうだね。

佐道 結局、先生との約束をひっくり返して、牛尾さんをやめて、

鈴木俊一さんにするということだったんですが、それを言われて、

しかし先生は大平さんとの関係が近くなったというお話なんです。

藤波 そう思うね、気持ちの上だね。

佐道 そういうことを正直に言ってくれた、ということですか。

藤波 そうそう、腹を割ってね。

■大平内閣の政策研究会と新生クラブ

武田 大平内閣にはスローガンがあって、政策研究会もあったんですが、先生はこれに関係されたことはありませんか。ご記憶に残っていることは。

藤波 人脈的に同じような人脈でみんなやっているな、という気がしたな。牛尾治朗や浅利慶太や、ああいう連中だからね。新生クラブの時には榊原「英資」とか——。榊原が大蔵省の課長ぐらいをしていたな。一緒に富山県の立山に政策合宿に来たことがある。あのときは新聞記者も来たけれど、役人では榊原が来たな。

伊藤 それは新生クラブの政策研究会ですか。

藤波 政策合宿です。

武田 新生クラブに関係している方と、大平さんの政策研究グループで、人がなんとなくつながっているのは偶然なんですか。

藤波 偶然ですね。そういう風潮だったんだな。

伊藤 大平内閣がつくった九つの政策研究会には、先生たちは直接は関わらないんですか。

藤波 はい。

伊藤 学者とか（藤波 評論家とか）、そういう人たちがやっているんですか。

藤波 そうです。経済人とかね。

武田 これは当時、自民党でもかなり評判だったんですか。

藤波 そうですね。

佐道 かなり新しいやり方ですね、ブレインを使うというのは。党内的な評判はどうだったんでしょうか。

藤波 いいと思いますね。新しい政治を考える者にはよかったですね。

政策に基づいて政治を運営するというやり方だな。

武田 ある意味で新生クラブの考え方と似ているところもありますね。

藤波 そうです。

伊藤 だけど、これに反対する人もたくさんいたわけでしょう。

藤波 いたわけだ。

伊藤 議員でもない学者を集めて何をやっているか、という人が。

藤波 いたと思うね。派閥で政治を運営していく場合は政策が前に立たなくてもいいんだ、という考え方が当然あるわな。

伊藤 派閥で政治を運営していく場合には、そのときの風潮とか課題によって、ある人が前に出たり、別の人が前に出たり、ということになりますね。だから派閥にはいろいろなものも揃えておかないといかんわけですね。

藤波 そうです。

伊藤 派閥として、ある政策でまとまるということはかなり難しいものですか。

藤波 難しいだろうね。

佐道 大平内閣ができて、九つの政策研究会がかなり早い段階で

きて動き出したわけですが、先生ご自身が特に興味を持っておられた部会とかテーマとか、成り行きを注目されていたことはありますか。

藤波 田園都市構想だね。ああいうのはいいねえ。

伊藤 それはどういうことですか。

藤波 田園で、美しい自然の中に都市でないものをつくって、そこで農業などもやりながら、一方で都会人としての生活をしていくというような意味だね。

伊藤 それは新しい地方の時代とか、そういうこととも関係があるわけですか。

藤波 あると思うね。

武田 どなたがこの研究会に入られていたんですかね。

藤波 田園都市は誰がやっていたかな。

伊藤 かなりこの時期は急速に都市化が進むころですね。

藤波 進むころだね。

伊藤 こういう政策研究会は横目で見ているという感じなんです。

藤波 政治の本流はね。

伊藤 先生ご自身は？

藤波 私も中に入って一緒にやるということではないな。

伊藤 だけど、これと平行して新生クラブでもいろいろなことをやっているわけでしょう。

藤波 政治の面白いところで、人間的にそうやってつながりをつけていけば、みんなそういう気持ちになっていくわな。例えば閣議のあとで大平さんが、「労働大臣、おれの部屋に残っていけ」というので、行くと、加藤紘一が官房副長官をやっている、二人で大平さんの話し相手になる。そんなことが何回もあったからな。それがわかっているから、だんだん聞こえていくな。

武田 大平内閣になってからも、新生クラブの活動は続いているわけですね。

藤波 続いていたね。

武田 じゃあ大平さんの政策研究グループの方を呼んで、話を聞くとか、そういうこともやっていらしたんですか。

藤波 そうそう、そういうこともやったね。

佐道 グループ全体として、大平内閣のやろうとしていることに少なくとも賛同するという形になっていくわけですか。

藤波 私はあまり派閥のことに突っ込まないという主義でいた。みんな各派閥から来ているから、派閥のことに関わるとややこしくなるからね。田中さんのときもそうだし、福田さんのときもそうだし、大平さんのときもそうだ。それぞれ、好きとか嫌いとか私が言うといかんから、派閥のことは言わない扱いでいこう、ということだ。仲良くしていけばいいんだ、ということだったな。

伊藤 もっぱら政策の話ということですか。

藤波 そうそう。

佐道 お話を伺っていると、先生ご自身はかなり大平さん、大平内閣を支持しているというお立場だったと思うんですね。あとで内閣にもお入りになりますね。大平さんについては、大平さん個人の評価の問題と、田中さんとの仲が非常によく言われますが、その点はどういうふうにごらんになっていたでしょう。

藤波 私は、田中は田中、大平は大平だと思っていた。

伊藤 でも田中派の応援がなかったら、大平さんの内閣はできませんよな。

藤波 できないね。だから、福田さんの動きをこぼしておったな。

「おれがこんなに一所懸命考えておるのに、福田さんはどうしておれに協力してくれんのだろう」ということを言ったな。田中さんから離れて、福田に近寄るといふ意味とは違って、党内で目立たないで、あまりギスギスした関係にならないでいてくれればいいな、と思っただろうな。友情として、田中・大平というのはあったと思

うな。政治の同志、人間的な友人としてね。

伊藤 それはかなり深い結びつきだな、とっておられましたか。

藤波 思っていましたね。言わなかったな。こっちも言わんし、大平も言わんし。

伊藤 これは非常に微妙な問題ですからね。

藤波 触れないね。

■ 政調会と政調審議会

伊藤 この前、政調のお話でしたが、政調会の会長と副会長だけの会議もあるわけですね。

藤波 あるけれど、河本「敏夫」さんが会長なんだ。副会長は合わせるということだ。

伊藤 副会長は派閥から出ているわけでしょう。

藤波 ああ、派閥から出ている。

伊藤 そこで最終的な調整をする、ということですね。

藤波 調整も、だいたい会長に任ずという感じだ。

伊藤 政調会で扱われる問題は、各部会から上がってくるわけですか。それとも、例えば大平さんから「下りてくるんですか」。

藤波 政調審議会というのが一つある。

伊藤 それはまた違うんですか。

藤波 違うんだ。政審という。だいたいここで政策的なことはこなすということだ。

伊藤 政審で、ですか。

藤波 政審で。

伊藤 ちょっと待ってください、政審と政調はどういうふう違うんですか。

藤波 政調会長の下に政審があるんだけど、副会長は政審の議論を大事にして会長を助けてやっていくということだな。

伊藤 政審というのは、どういう顔ぶれがなっているわけですか。

藤波 政審というのは、自民党でいえば総務みたくなものだな。自民党の総務みたくなものを、政策的に審議していくということだ。

伊藤 政調会の会長、副会長、各部会というものとまた別に、政審があるわけですか。

藤波 いちおうは副会長の下に政審があるということだろうな、形は。

伊藤 各部会とは別なんですか。

藤波 部会は政審の中に入っている場合もあるし、大事なときに入ってきて物を言うということもある。政審で議論するわけだ。

武田 部会は決定する方ですか。

藤波 部会は決めていく方だ。

伊藤 部会で決めても、政調会の会長・副会長のところでOKが出なければ駄目でしょう。

藤波 政審で議論してね。

伊藤 そういふふうの下から、つまり部会から上がってくる問題と、例えば総裁から「こういうことをもうちょっと考えろ」というものもあるわけですか。

藤波 あるんでしょうな、あるんだと思うね。それは政調会長に「対して」あるんだ。

伊藤 そうすると政調会長が今度は部会に振ったりするわけですね。

藤波 そう、そう。

佐道 そうすると政調会長ご自身の考えておられる政策とかリーダーシップでかなり変わってくるということですか。

藤波 それは扱い方が変わってくるでしょうね。

伊藤 先生は、政調会は初めてでしたか。

藤波 副会長というのは初めて。

伊藤 部会長は？

藤波 部会長はずっとやっていた。

伊藤 文教ですね。

藤波 文教の部会長だ。

伊藤 部会長をやっている、副会長になって、会長が誰であるかということによって、政調のあり方は変わりますか。

藤波 変わると思うな。やり方が違うからね。少しは変わると思うよ。

伊藤 やはりリーダーシップのある人だと違うわけですね。河本さんはどうですか。受け身の方ですか。

藤波 どころなく存在感があったね。副会長といっても、総務会の副会長になるか、政調の副会長になるか、副幹事長をやるか、どれかだ。自分なりに大臣を待っている立場だと思っから、ほどよく回っていたということがあるな。あまり議論しないです。

伊藤 あまり議論しないんですか。

藤波 うん。

伊藤 調整、ということですか。

藤波 そうだな、調整だね。

伊藤 副会長になると、例えば文教部会の部会長との関係はなくなるわけではないでしょう。文教族ですから。

藤波 そうそう。「副会長は」何と何の部会の責任を持つ、というようなきちんとしたことではなくて、会長の下で、会長を補佐していくということだったな。

伊藤 どこかを分担するわけではないんですね。

藤波 ないんだ。

佐道 河本さんというのは「笑わん殿下」とかいわれて、一般にはどういう方かよくわからないんですが、実際は政調会とかではつきりとして自分の主張とかをおっしゃったりする方だったんでしょか。

こういう方針でこれからやりたいとかおっしゃるのでしょか。

藤波 私らの目からは、議論する政調会長というよりも、実行する政調会長という姿が濃く映っている。笑わないで、具体的にやってくわけだ。それは一つの政治家の姿だね。

伊藤 実行していくということは、政調会で決まったことを、例えば法案なり予算なりに反映させていくということですね。

藤波 そうそう、そういうことだね。

武田 政調副会長の日常の仕事というの、具体的に決まっているわけではないんですか。

藤波 「決まっているわけでは」ない。自民党というのはそういうものだよ。

佐道 融通無碍ですね（笑い）。

伊藤 いい言葉で言えば融通無碍だ。悪い言葉で言えば、何をやっておるのかわからん。ということだ。

平松 関係がなくても力を持っている人たちが出てきますしね。

武田 政調会では、大平さんの政策研究会のグループとは連絡を取ったりするんですか。

藤波 連絡を取ったりしない。阿吽の呼吸だ。

武田 融通無碍ですね（笑い）。

佐道 大平さんご自身は、施政方針演説でもご自身が立ち上げた研究会の中味に沿ったようなことをこれからやりたいとおっしゃっているわけですね。そういうことを土台にして、政調会でも議論を進めていくということになるでしょうか。それとも、そういうことではなくて、もうちょっと細かい具体的話になるでしょうか。

藤波 もっと大きな展開だ。細かい議論ではなしに、大きな立場で、総理総裁だからその方向に行くんだなと思っていくということだから。

■ 北方領土問題等外交問題との関わり

武田 このころの「ふじなみレポート」を読んでいると、先生は外交のことにいくつか触れられているんですね。昭和五十四年二月、三月ぐらいでしょうか、北方領土の問題について書かれているんですが、先生が北方領土あるいはソ連との問題に関心を持たれたのはこの前にはなかったなと思います。何かきっかけがあったのかな、と思っただんですが。

※「ふじなみレポート」第二十六号「外交の展開」（昭和五十四年二月）には、二月二十日の衆議院本会議でソ連によるクナシリ、エトロフ島での軍事基地建設に抗議、北方領土返還を要求する決議が採択されたと書かれている。また翌月号（第二十七号「花ひろく」）では、新生クラブにポリヤンスキー・ソ連大使一行を招いて意見交換したことを報告しており、そこで新生クラブ側は「クナシリ、エトロフの軍事基地を撤去して領土を返還せよ」と迫ったのに対し、ソ連大使側は「明らかにソ連領で、我々の領土に学校を作ろうが、軍事基地を作ろうが我々の自由だ」と反駁したという。

藤波 新生クラブの仲間の中に、旭川から出た、名前がわからん、三木派の者がおった「↓川田正則」。それが関係があるんじゃないかな。

武田 新生クラブでポリヤンスキー・ソ連大使を呼んで、講演を聴いて意見交換をしたということですが、何かご記憶はございますか。藤波 ない。

武田 領土を返還しろと、新生クラブでかなり迫ったということも書かれているんですけどね。それで議論が非常に白熱した。そしてこの大熱戦は近日予定の第二回戦に続きますと書いてあって、二

回戦の話がなかったんですが。

伊藤 北方領土問題はこのときだけですか。

藤波 いや、関心はあるな。私が「中曽根派」事務総長になったとき、リクルート事件が起こる前、中曽根さんが総理を辞めたあと、ソ連に行くという「昭和六十三年」。そのとき私と松垣徳太郎と二人がついていくわけだ。衆議院と参議院で一人ずつだ。新聞記者もね。それはいまになってみると、方向がだいぶ間違っていたんだね。北方領土を返せといった中曽根さんの主張は面白いなと思って、ビクビクしながら聞いておった。ビクビクしたというのは、ロシアで殺されるんじゃないかと思ったからだ。ピリピリしていて、そんな空気だった。スターリンが言っていることは間違っていたということとを、中曽根さんが言うわけだ。松垣徳太郎と袖を引っ張り合っていて、じきにやられるんじゃないか、と言っていた。「自分は」事務総長をしていたな、あのときは。ずっと「北方領土への関心は」あったんですね。

伊藤 このポリヤンスキー・ソ連大使なんていうのは、全然ご記憶はないですか。

藤波 一人の講師にしか過ぎません。ずっと後になるけれど、事務総長のころに自民党の安全保障の調査会長をして、そのときに田中さんの日本列島改造を手本にして、毎週一回ずつ勉強会をやった。総まとめに、赤坂東急でその調査会の打ち上げのセミナーをやった。そのときにプリマコフに会いといったら来た。そのときにプリマコフは、新しいロシアの方向を打ち出す気持ちを持っていったんだな。だけれども、法眼晋作以下、そこに集まってきた連中は「質問、質問」と言って、次から次へと立って言ったのは北方領土問題だった。日本人は駄目だな、とそのとき思った。安全保障の、こんなに世界の潮流が変わるときに、当事者のプリマコフが来ているのに、そんなことを一言も言わないで、北方領土の話ばかりするから、しょう

がないなと思って、会長として壇の上で聞いていた覚えがあるな。
伊藤 またそのときに伺います。

■新生クラブの訪中国

伊藤 いま言われたソ連との関係ですが、これまで対外的な問題ということには、先生はあまりお触れになってこなかった。これに続いて、新生クラブの人を率いて中国に行かれますね。だんだん外に目が向くようになってきたわけですか。

※藤波氏は昭和五十四年六月十五日に、新生クラブ訪中団の団長として中国へ出発、二十五日に帰国した。譚震林全人代副議長、張香山、肖向前、孫平化と会談、その他胡啓立（中華全国青年連合会主席）、陳昊蘇（全人代代表）、黃世明（政治協商會議委員）、陳錦華（上海市革命委副主任）、林麗蘊（全國婦人連合會副主席）らと会った。また北京大学や小学校、幼稚園、人民公社、農家、上海の紡績工場、労働者住宅などを訪問している（「ふじなみレポート」第三十号「中国訪問」より）。

藤波 そう言われれば、外に目が向くと言うよりも、さあやるぞ、という構えがだんだんできてきたんじゃないかな。外との関係をどうするか、という問題が少しずつ浮かび上がってきて、それを解決して進もう、ということだったんじゃないかな。

佐道 外交問題に取り組むための姿勢というかゆとりができてきたということですか。

藤波 ゆとりというよりも、政治の取り組む姿勢が現実味を持ってきたということじゃないですかね。

武田 六月に訪中団を組むのは、藤波先生のお考えですか。

藤波 野田君が「新生クラブの」事務局長でおったからね。彼も一

緒に行っていると思うな。

伊藤 これは向こうからの招待ですか、それともこちらから申し入れたんですか。

藤波 いや、向こうからの招待だろうな。孫平化じゃないか。

伊藤 それは新生クラブに向けて、ということですか。

藤波 そう、そう。

伊藤 じゃあ、一応向こうも少し評価したということですね。

藤波 そう、そう。

伊藤 実際に北京と上海に行かれたようですが、当時の中国をこんなにあって、いかがでした。いまとは全く違うと思うんですが。

藤波 そうですね。印象としては、まだまだこれからの国だということですね。

伊藤 これは昭和五十四年ですから、いまから二十年以上前ですね。中国が大きく変わりはしてからも、まだ十年かそこらですからね。

藤波 まだ「この訪問をしたころは」変わっていないですね。まだまだの国だ、という感じですね。

伊藤 当時だとまだ工人服一色という感じでしょうね。

藤波 ええ、そうですね。

佐道 この昭和五十四（一九七九）年という年は、大平さんが訪中されて、中国の借款が始まる年で、その意味では国交正常化後の日中関係の一つの節目になる非常に大きな年だったと思うんですが、そういうこともあったんでしょうか。

藤波 あまり意識はない。

武田 このときに行かれた訪中団の団員は、どういうふうを決められるんですか。

藤波 誰が行くかといって相談して、誰と誰が行こうということになって、行くということですね。

伊藤 これはお金はどうしたんですか。

藤波 自分たちで出したでしょう。

伊藤 このときはもう北京まで飛行機が飛んでいるわけですね。

藤波 飛んでいた。

武田 向こうでどういふところを見るとか、そういう打ち合わせは、

野田さんがされたんですか。

藤波 野田がやっただろうね。

佐道 野田さんは中国とはどういふパイプがおありだったんですか。

藤波 あまり詳しく知らないな。

平松 日中協会の会長をやっていらっしやっていますね。

武田 こんな前から「関係が」あったんでしょかね。

平松 ひよっとしたらおやじさんの関係かもしれないね。

佐道 上海というのは、このあと宝山製鉄所ができていくわけですが、その関係はおありだったんでしょかね。

藤波 ない。

伊藤 じゃあ上海では何をこらんになりましたか。

藤波 いろいろなところを見たけれど、宝山製鉄所みたいなことではないな。特別な問題で行ったということではなくて、一般的に見ただけだな。

伊藤 何か北京とか上海で、いまでも印象に残るようなところはありますか。

藤波 ない。

武田 「ふじなみレポート」を見ると、ちょうど全人代の開会中だったようですね。かなりいろいろな方と会っているようですね。それで若い指導者層に会いたいと先生方は希望されていますね。

藤波 今度代表になった胡錦濤なんかそうだろうな。胡錦濤なんかに会っているかな。会ってはいないかな。

武田 ここ「ふじなみレポート」には「書いて」ないですね。

伊藤 印象に残る人はいますか。

藤波 いろいろ会ったんだろうけれど、私は仲間が仲良くなれば良いというのが第一だからね。

伊藤 むしろそっちの方ですか。

藤波 そうです。それが問題だ。

武田 訪中団は全部で十名ぐらいですかね。「ふじなみレポート」第三十号を参照しながら」野田さん、大石「千八」さん、山崎「拓

さん、最上「進」さん、愛野「興一郎」さん、石橋「一弥」さん、

玉生「孝久」さん、西田「司」さん、小島「静馬」さん。

藤波 あのころは仲良くすればいいと思っていたんだな、それが一番だな。

佐道 ご自身で、これから中国の問題にこれから積極的にやっている

こうという――。

藤波 ことでもないな。

伊藤 当時だったら、田川「誠一」さんなんか一所懸命やっていた

たわけでしょう。

藤波 そうですね。

伊藤 松村謙三さんとかね。ああいうことをやるうという気はあまり

りなかったわけですか。

藤波 なかったですね。

武田 このころの「ふじなみレポート」を読んでいると、先生はいろ

いろいと、日本とアジアの関係についても書かれていて、アジアと

の平和が大切だとか、日本はアジアを背景にしているんだから、そ

ういう立場を理解されるように東京サミットでも言うべきだという

ようなことを書かれていますね。こういうことは、先生のもとから

のお考えでしょうか。

藤波 そうですね。

伊藤 いつから、アジアということを言われるようになったわけ

ですか。

藤波 アジアはアジアだ。

伊藤 それはそうでしょうが、アジアというと、ちょっと独特の感じがありますよね。

藤波 ありますよね。

有馬 先ほど戦後政治の総決算というお話が出ましたが、そのころ、国際政治、国際秩序の基本が少し変わっていくという感覚はお持ちだったんですか。

藤波 特に思わなかったけれどな。

伊藤 当時中国は、ソ連との関係が悪くなっているんだね。

武田 悪いですね。

藤波 ああ、中ソが悪いか。

伊藤 いまだってそんなに良くはないですけどね。この当時は非常に対立的だったと思いますが。

武田 もう一つ、大平さんの政策研究グループで「環太平洋構想」も謳われていたので、そういうことも先生のアジアの発言は関係しているのかなと思いましたが。

藤波 あるのかもしれないね。

伊藤 僕は当時、環太平洋とはいったい何じやろうか、と思いましたが。こんな広い太平洋の周りを関係づけるのは大変だと思っていましたけれども。

佐道 アジアということだと、中国と同時に、お隣の韓国がありますね。その前から金大中事件も引きずっていて、かなりぎくしゃくしている時期でした。そして七九年のちょっと後になります、朴正熙大統領が暗殺されたりすることになっていくんですが、韓国とは何か接点がありますか。

藤波 ない、ない。アジアの中に韓国というのも頭になかったな。それぐらいに、一般的にアジアということを書いていて、韓国が特別にこうだということはなかった。

武田 その後、中国とずっとつき合っているということでもないんですか。

藤波 リクルートという事件が、人間関係をブツツと切っちゃったからね。

伊藤 将来、上の方を目指していくとすると、やはり外国のリーダーたちとの関係というのは築いていかなければならないですね。

藤波 そう、そう。

伊藤 先生はこれまでの感じではあまり外との関係ということは出てこなかったと思いますが、アメリカとの関係は何か特別なものがございますか。

藤波 あったんだけど、「リクルート」事件を契機にブツツと切れちゃったな。アーミテージとか、ああいうのにしても非常に近くて、物を言っていたんだけど。

佐道 それは官房長官時代ですか。

藤波 その前。

伊藤 それは忘れないで置いて、そのときに伺いましょう。それは政局の話にいきましょか。

■大平内閣期の政局と新生クラブのメンバー

武田 このころ、大平内閣も党内のごたごたで成立したんですが、どういうふう先生はそのころの政局をごらんになっていたかというのを伺いたいですか。

藤波 やっぱり角福戦争以来、党内は同じことだろうな、角と福の戦いみたいなものがあった、大平さんもかわいそうに、その中に巻き込まれてやっているな、という感じだったな。

佐道 大平さんは巻き込まれた、ということですか。

藤波 そうそう。

武田 ちょうど大平内閣ができるときも、ダグラス・グラマンの話が出てきて、先生の「ふじなみレポート」にも少し触れられているんですね。何かご記憶はございますか。

藤波 ない。

武田 先生はこのころ、予算委員をやらせていますか。

藤波 予算委員会は覚えてるね。ずっと座っていた。

伊藤 あまり発言もしないで。

藤波 まあ、そうだな。

伊藤 与党の予算委員というのはあまり発言しないですね。

藤波 そうなんだ。委員の一人として座っていたという覚えがあるな。

伊藤 当時いくつかの委員会は、与野党が接近していますので、委員長が野党という事態もありますね。委員会では法案を否決されて、本会議で逆転で可決されるという事態もあったと思うんですが、そういう国会運営にはあまり先生は関与なさらなかったんですか。

藤波 しなかったな。国対委員長になって、国会対策というのはこんな世界があるんだなと思ったぐらいだ。

武田 当時の野党の動きなどで、何かご記憶のことはございますか。

藤波 そんなに突っ込んで、こちらから働きかけをするとか、そんなことはなかったね。

伊藤 でも新自由クラブは、中道政治といっていましたね。

藤波 実際に動くよりも、あいつらは理屈が多かったからな。自民党は理屈はあまりないよな。長いことするということだ。

佐道 「ふじなみレポート」には社会党のこととかも書いてありますね。実際に民社党とか公明党とか、このころから中道連立とか自民党との派閥的な連立とか、いろいろな動きを見せ始めている時期でもあるんですが、民社党とか公明党との動きとか特にないですか。

藤波 ない。

伊藤 でも新自由クラブは、先生は個人的には親しいから。

藤波 新自由クラブは別の政党だと思っていないから。

伊藤 自民党の一つの派閥だという感じですか（笑い）。

藤波 そうそう。

伊藤 いまの自民党と保守新党の関係みたいなものかな。

藤波 そうだな。

平松 当人は特に近かったでしょうね。

伊藤 そうですね。あれは、一緒に行かなかったということ仲違い、ということにはならなかったわけですね。

藤波 ならなかった。どうしてだろうな。

伊藤 一番近いのは河野さんとか西岡「武夫」さんとかで、田川さんはまた別ですか。

藤波 田川さんは別だ。おじさんだからな。河野のおじさんだ。

武田 そういう意味ですか。

佐道 山口「敏夫」さんなんかはどういう感じですか。

藤波 ちねん「山口敏夫」とのつき合いも古いんですけどね。

静岡県に小島静馬というのがおって、いまはもう岐阜の山奥に引っ込んでいて、高山のそばに。小島静馬というのは早稲田大学の雄弁会の代表選手みたいな男で、先輩の石田博英というのが行くと決まって、「石田博英来たる」ということで大々的にやった。小島静馬の県会議員の選挙のときだな。そのときに急に行けなくなって、その代わりにちねんがやって来て、私が国会議員として行くわと言った。その頃からだから、ちねんとの関係は個人的に古いんだ。西岡は文教だし、河野君とは人間的な友情だ。有田一寿も文教だ。有田一寿は九州の私立学校を運営していて、その学校にも行ったことがある。太宰府だ。

伊藤 山口さんは、人柄としては先生はお好きですか。

藤波 まあ、あいつはリクルートでやられて、それからあとの話だ

が、結婚式で西岡武夫とか山口ちんねんとかと一緒にいたら、その二人が「藤波さん、ぐずぐずして、また自民党に戻るとか、いろいろなことを言っているから駄目なんだ。世の中グルッと回転していくんだから、思い切って変わった方がいいよ」というようなことをさかんに言ったことがある。「おまえら、ぶつぶつ言うな」と私はいった。

ぶつぶつ言うな、と言うとおりになったんだ。西岡武夫は参議院に当選してきたけれど、自由党で当選してきたな。「西岡君、よかつたな」といってお祝いしたら、「自民党からもういっぺん、僕は衆議院でやりますからね」と言うから、「余分なこと考えんで、自由党で参議院で行け」と西岡に言ったことがある。あいつは杓子定規だ。山口ちんねんは、定規がなさ過ぎる。西岡武夫は定規にこだわりのすぎる（一同笑い）。

伊藤 でもある時期は非常にお親しかったわけでしょう。

藤波 ずっと親しいんだ。

佐道 七〇年代後半のこの時期、山口さんは新自由クラブの中でもかなりの実力というか、指導力を持っておられたんでしょうか。

藤波 持っていると思ったことはなかったな。

伊藤 山口さんは自民党に帰ったかたんでしょ。

藤波 帰ったからどうっていうことはないし、帰らなくてもどうっていうことがないという存在だ。自由奔放だよ。

伊藤 なんといいましようか（笑い）。

■新しい文化創造と地方

伊藤 さっきちょっとお話が出ました昭和五十四年四月の地方統一選挙では、「地方の時代」ということがさかんに言われるんですが、

この地方の時代というのはどんな感じだったんですか。何か特別なことがあってそういうことが言われたとは思えないんですが。

藤波 一般論として、でしょうな。

伊藤 「いまこそ地方の時代だ」というようなことをさかんに言っていたわけですが、スローガンですかね。

藤波 地方でしょうね。

武田 先生はこのころ、まだ三重県の県連の会長ですね。

藤波 会長をやっているか。

伊藤 県連の会長といっても、県会議員の選挙とか国会議員の選挙がなければ別に用もないという感じじゃないですか。

藤波 そうだな。

伊藤 県連の会長というのは、知事さんとの関係はどうなるんですか。

藤波 県連会長だから知事とどうだという関係は全くないな、三重県の場合は。

伊藤 そうですか。あれは全く別系統ですか。

藤波 どうっていうことはないな。県連会長だから知事といいか悪いとかということはないな。

伊藤 でも三重県はだいたい知事は自民党系でしょう。

藤波 そうだね。田中覚とか田川亮三も自民系ですね。

伊藤 別に悪いわけではない？

藤波 東大や京都大学を出ているから頭はいいしな。頭はいいわ、役人だ。

伊藤 役人上がりですか。

藤波 役人上がりだな。

伊藤 でも知事というのはかなり力を持っているんでしょう、地方では。

藤波 持っているね。

伊藤 その知事を誰にするかという候補を決めるのは、県連も相当

関わるわけでしょう。

藤波 関わるな。だけど三重県なんかの場合は完全に決まっていたからな。田中もそうだし、田辺もそうだ。

伊藤 決まっているというのは、どこが決めるわけですか。

藤波 周りだな。

武田 中で、あまり波乱もなく。

藤波 どうしよう、というようなことはなかったな。

伊藤 だいたい役人上がりというのは、自治省系統ですか。

藤波 農林省だった。田中や田川は農林官僚だった。

伊藤 知事選のときなどは応援をされるんですか、県連会長として。

藤波 県連会長としては、例えば県の大会なんかに行くと、三人ぐらいの一人として物を言うとかね。それはあるな。県連会長というのは、周りから見ると目はえらいんだけど、本人はえらいくないんだ。あいつらは役人だから、うまいことやっているな、と思うね。頭はいいし。

平松 県連会長というのは基本的に持ち回りですね。

藤波 そんなことはないんだ。持ち回りということになっているけれど、そんなことはない。

伊藤 やはりそのときの力関係ですか。

藤波 そうです。

伊藤 あまり長くやっているのと恨まれるでしょう。

藤波 恨まれるな。

佐道 先生の「ふじなみレポート」を拝見すると、交付税がどこどこ市のためにいくら決まりましたという報告だとか、三重県のために予算を獲得するように頑張ります、やっておりますという報告がたびたびあるんですが、先生のような国会議員が、地方との関係とというと、そういう予算の獲得に尽力することですか。

伊藤 国会議員はそうだな。

佐道 地方の時代ということだと思いますと、大平さんの構想でも田園都市構想に関心を持たれていたということですが、中央と地方の関係は変更の余地があるというような関心もお持ちでいらしたわけですか。交付税のあり方とか、地方自治体が物を決める権限のあり方とか。

藤波 活力という意味だね。活力のない地方というのはない。おかしい。三重県のためにというのか、三重県をほかの県よりもよくしていくということは、三重県から出ている国会議員の大きな役目だと思っていたから、そういうことになるんでしょうな。

伊藤 地元からのいろいろな陳情は、絶えずあるものですか。

藤波 絶えずあります。

武田 それは県連の会長には特に多いですか。

藤波 いや、県連会長が特に多いというか、国会議員だからあるんだな。

佐道 過去の話ではないんですが、いま中央・地方関係の見直しの議論が進められていますね。その中で大きなテーマは地方の自主的な財源の問題で、いまの議論は、地方自治体にかなり大きな財源を与えて自主性を強くしてあげようということです。そうなった場合、これまででしたら国会議員の方がかなり予算獲得でも影響力を行使して配分をして、ということがあったわけですが、その部分が少なくなるわけですね。いまの改革が本当にそのままの形で行くとしたら。

藤波 例えば予算編成のときなんかでも、陳情団は来ないな。

伊藤 そういうことになりますか。

佐道 そうすると国会議員の地方への影響力というの、いままでより少なくなるということになるんでしょうか。

藤波 この前の任期のときにやったと思うけれど、国土政策で、神戸に震災があったあと、第二太平洋国土軸というのができて、新し

い国土軸をつくろうという動きになってきた。そのときに、その会長をしている大分県の平松「守彦」知事が新しい地方をつくるという。新しい情報網、国際関係網など、いろいろな意味で新しい活力をつけ、地方が主人公だということをいった。そうだと思う。私は第二国土軸の実現のために走り回った。亀井「久興」君が国土庁長官をやっていたから橋本内閣だ。それで三月の年度末のぎりぎりのときに、新しい地方をつくるということをスローガンにして、新しい国土政策を決めた。それを思い出すと、いまでも胸が躍るような思いがするな。新しい地方をつくる。新しい風で、中央はあまりしないで、地域の時代をつくるというか、地方の時代をつくるということだ。

例えば、伊勢湾口道路というのが私の大きな政治の課題になっている。「三遠南信」といって、三河、遠州、南信州は馬鹿にされている地域だ。馬鹿にされているというのは、尾張に対して三河が馬鹿にされている。静岡に対して浜松「遠州」が馬鹿にされている。信州でも中心の信州に対して南信州が馬鹿にされている。三遠南信というのがそれだ。それを三重県でいえば、中勢、北勢の四日市とか津が中心で、伊勢なんか馬鹿にされている。それが一緒になつてやれば、新しい文化ができるな、というのが私の気持ちだね。

だから、そこで橋を架けるという仕事があるんだけど、いまは四国へ三本も橋が架かっている。知らない間に架かったんだ。それぞれ勝手に続けたことだ。暗黙のうちにみんなの政治目標として、伊勢湾口道路というのはまだ建設省、国土交通省でも生きている。私の周りの者はみんなそう思っている。それには新しい文化を創らなければいかん、という思いだ。新しい地方に新しい文化を創る。そのときの平松の言葉を活かして、いまもそう思っている。何も橋を架けるために言っているのではなしに、新しい文化を創るということ、地方の時代というのはあると思うな。うん、あると思う。

伊藤 地方の時代というけれど、戦後ずっと一貫してそうですけれど、地方の自主財源がない。

藤波 それはつくればいいんだ。小泉がつくればいいと思うんだ。聞いていると、小泉は大きな声で答弁しているけれど、内容のないことだな、と思うね。財源をつくればいいと思うんだ。

伊藤 中央で持っている財源を地方に分けないといけないわけでしょう。

藤波 結局は政治家が、どれぐらい住民を信頼しているか、という問題だな。

伊藤 政治家と同時に役人が、ですね。

藤波 役人は物を言わないな。

伊藤 いまはそうですね。言わないけれど、黙ってやっていますよ。藤波 黙ってやっているけれど、本当にやっていないよ。役人は、日本の国のためにどうしたらいいかということを本当になつてやっていない。

伊藤 それはそうですね。自分たちの權益を守ることがきちんとしていきますよ。

藤波 そう、權益を守ることがやっている。

佐道 小泉さんになって、地方の問題は影が薄くなったという感じがしますね。

藤波 わかってないんだ。アホだから、あれは。

伊藤 しかし神奈川だって地方ですよ。

藤波 神奈川は地方じゃないよ。関東圏だ。

■ 四十日抗争のJIN

伊藤 地方の時代はそれとして、いよいよ昭和五十四年九月に解散・

総選挙ということになって、先生は五回目の当選をなさる。

佐道 その選挙の前に、大平内閣で付加価値税問題の案があって、滑り出しは好調だったのが、かなり与党内の批判が出て、大平内閣がもめるということがありました。それがこの選挙にも影響してくるんですが、大平さんが新しい税金を言われて、それを選挙で信を問うという話が進んでいくんですが、それはどういうふうに思っておられましたか。

藤波 いまはもう完全にミスター大蔵だから、ミスター大蔵が大蔵省の役人に騙されたな、という気持ちだね、いまは。中曽根も騙されかけたね。それで竹下で成就した。大蔵の役人というのは悪いからな、一番頭がいいけれど。

佐道 タイミングが悪かった、時期ではなかったということですか。

藤波 でしょうな。税金を取ることに対して、少し傲慢だったんじゃないかな、政治家が。大平だね。

伊藤 しかしいまになってみれば、消費税をやらないことには何ともならんわけですからね。そういう新しい税金の問題を出せば、評判が悪くなるのはあたり前ですね。それでこの選挙では安定多数をとれなかった。安定多数をとれないということで、大平は辞める、という話が出てくるわけですね。それがいわゆる「四十日抗争」と言われる騒ぎの発端になるわけですが、この四十日抗争のあいだは、先生はどういう立場をとっておられたわけですか。

藤波 そのあいだ、ホテル・ニューオータニの密室に中曽根派の連絡所が設けられて、私はだいたいそこにいたね。派閥の仕事をしてたんだ。

伊藤 いままであまり派閥の仕事をされてこなかった先生が、突如派閥の話になりましたね。

武田 この四十日抗争のあいだだけですか。

藤波 四十日抗争のあいだだけだ。

伊藤 その事務所はなんのために必要なんですか。

藤波 連絡のために。

伊藤 情報を収集して、ですか。

藤波 そうそう。

伊藤 そういうところには、派の中堅幹部が集まっているわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 中曽根さん以下？

藤波 そうそう。

伊藤 そうすると、先生も中堅幹部になられた、ということですか。

藤波 そういうことですね。大臣待ちだ。

佐道 先生ご自身は、心情的には大平さんをこれまで支持しておられたと思うんですが。

藤波 青嵐会は福田派の別働隊だからな。騙されたな。

佐道 この選挙結果は、大平さんで負けたことは間違いないわけですね。先生ご自身のお考えとしては、大平さんはこのときに責任を取ってお辞めになるべきだというお立場だったんでしょうか。

藤波 違うね。大平はやるべきだ。

佐道 続けるべきだということですね。

藤波 難癖をつけて、総理総裁を辞める、という方がおかしいと思っ
ていたな。

伊藤 中曽根派の空気はどうだったんですか。

藤波 やっぱ同じじゃないかな。一般的にはね。

佐道 数字から見るとかなりの敗北になるわけですが、先生ご自身は、このときは選挙は安心というか安泰だったんですか。

藤波 安心だ。そのあとにもう一回あるな。

佐道 翌年ですね。

藤波 翌年か。

武田 このとき中曽根さん自身と、今後どうするかとか、大平さん

のあとをどうするかというお話をされた記憶はございますか。

藤波 亡くなったイノウエという新聞記者がおって、それが中に入って、大平さんの秘書と私とで、よく飯を食っていた。名前を忘れたな。大平さんの原稿はほとんどそいつが書いていたんだ。京都新聞の、何とかいったな。だいたいそういうときには新聞記者が入ってくるんだ。誰かと人間関係をつくるとき、独特の人脉というのは新聞記者がつくるんだ。

武田 それは何のために会っていたんですか。

藤波 何のためにではなしに、なんということなく会うんだ。その下地があって、大平さんと藤波孝生とは非常にいいということになって、私が一所懸命になって大平さんと打ち合わせをした。中曽根さんと大平を結ぼうと努力するわけだ。努力して、「中曽根さんがこう言ったら、大平さんはこう答えてください」というようなことを言って、うまく言ったかなと思っていたら、電話がかかってきて、「おれは言うたけれど、中曽根君は言わなかったよ」ということによくぶつかると。

例えば「大死一番というのは、死んだふりをして何かをするということだから、大死一番と言っても気にするな」と言うと、大死一番という、中曽根さんは本当に死ぬと言うことだ、というわけだ。おかしいな、と思ったことがたびたびあった。政治の話というのは、また独特だね。

伊藤 ちゃんと役割を振っておいても、なかなかその通りにはいかないんですね。

藤波 そうですね。

伊藤 そのニューオオタニでは、ずっと座っているわけですか。

藤波 いろいろ話をしながらね。

伊藤 外にあちこちに行って、ということやらないんですか。

藤波 格好だけやることもあるけれど、格好だけだ。

武田 新聞記者もそこにいるんですね。

藤波 そこにいるんだね。

伊藤 別に秘密の場所ではないんですね。

藤波 秘密の場所ではない。連絡所だ。

伊藤 中曽根派連絡所、というのですか。

藤波 そう。

武田 逆に中曽根派がどう考えているかということをお伝えたりもするわけですか。

藤波 そうです。

伊藤 でもこういうときは、なかなか最終的な決定をしないでしょう。

藤波 様子を見ながらだね。

伊藤 どっち側につく、なんていうことを最初から言うわけではないでしょう。

藤波 ない。田中・大平みたいな特別な友情で結ばれたものは別として、そう早くから言うわけではない。

伊藤 やはり様子を見て、勝ち馬に乗らなければしょうがないわけでしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 勝ち馬に乗ったときに、ポストなりをどれだけでももらえるかということが問題じゃないですか。

藤波 そのことが問題ですね。

伊藤 それは大臣待ちである藤波先生にとっては死活の問題でしょう。

藤波 しかし努力しなければいかんからな。

伊藤 でもどういう努力をするんですか(笑い)。

藤波 存在で示していくんだ。

伊藤 いるぞ、ということを示すんですね。でもなかなか難しいですね。

藤波 難しい。

伊藤 新生クラブなんかもあるぞ、ということの一つでしょう、ある意味では。

藤波 そうですね。

佐道 先生ご自身は、その前の選挙で当選五回目ですね。自民党の通常の順序で、だいたい六回目ぐらいから大臣ということから考えると、それでもまだちょっと早いですね。

藤波 早い。

伊藤 でもやっぱり次は大臣だろう、入閣だろうというのは、ほご自身も周りも思われていましたか。

藤波 前から名前が出ているからね。

伊藤 やっぱり、いっぺん名前が出るといことは大事なことなんですね。

藤波 大事なことだ。名前だけ出すよ、ということもあるんだ。二回ぐらいね。検討されたなということ誰かが言う。名前が出ればいい方だ。

■中曽根派内部の動き

伊藤 派閥は候補者を何名も出すじゃないですか。その中に並んでいるということが大事なんですね。

藤波 大事なことです。決める方もみんな新聞を見ているわけだ。

伊藤 そうか、新聞にもリクしないといかんね。

佐道 ただ、中曽根派内の当選回数序列というのがありますよね。

伊藤 ある、ある。上の方は何回でもやりたいわけだ。

佐道 上の方もやりたいし、まだなっていない方もいらっちゃって、先生は早めにリストに載るわけですね。そうすると派内で(武田

牽制とか嫉妬があるんじゃないですか)。

藤波 ある、ある。気にしていたらキリがないけれどね。

伊藤 でもやっぱり、藤波のやつ、と思っている人がいるでしょう。

藤波 ある、ある。政治というのは嫉妬心の塊みたいなものだから(一同笑い)。

佐道 実際にこの四十日抗争のときは、最終的に大平さんと福田さんと、自民党から二人候補が出て、首班指名を争うことになるわけですね。実質的には自民党が割れているという状態なんです。これは分裂まで行くかと思われましたか。

藤波 思わないね。

伊藤 分裂まで行くとは思いませんでしたか。

藤波 思わない。

伊藤 決着が着けばそれで終わり、ということですか。

藤波 終わりだ。自民党というのはそういうものだな。決着が着くまでだ、と思っていた。

佐道 割れることはない？

藤波 割れることはない。

伊藤 中曽根派はかなり早くから、大平と決めていたんですか。そういうわけではないですか。

藤波 ない。渡辺美智雄は大平と良かったのかな。宇野宗佑、稲葉修、山中貞則、ずっと考えてみると、いろいろなんだ。それぞれいろいろだ。中曽根がこうだ、と言っても行かないんだ。

伊藤 中曽根派は中曽根さんの統制が効いているわけではない。

藤波 ない。

伊藤 そうすると、これをまとめていくのは大変ですね。

藤波 大変です。それは大変だ。

武田 誰か調整役みたいな方がいらっちゃったんですか。

藤波 いや、いないね。

伊藤 じゃあ、いまおっしゃったような方々が、それぞれに各派の情報とかを持ってきて、いろいろなことをおっしゃるわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 それでこうしよう、ああしようという。

藤波 そう、そう。

伊藤 中曽根派の番頭というのは誰ですか。中曽根さんのところは番頭がいないのか。

藤波 いないんだな。

伊藤 親分が一人だけ（笑い）。あとは、いろいろな人がいる。

藤波 ようけおるんだけれどね、上村千一郎とか、バラバラだな。

佐道 中曽根さんのために中曽根さんを支えて、という感じの人はいらっしやらない。

藤波 いない。

伊藤 それで派閥をなすんですかね。

佐道 でも中曽根さんがボスなんですな。

伊藤 そうそう、大ボスだ。

佐道 小ボスがいろいろいらっしやる。

伊藤 渡辺美智雄なんていう人は、かなり大きなボスでしょう。

藤波 そうそう、大きなボスだ。

伊藤 藤波さんなんかは小さいボスですか。

藤波 いや、ボスに入らないだろう。

伊藤 一応新生クラブを持っているじゃないですか。

武田 大臣待ちですしね。

藤波 そういうことでは、理屈のいい方はそうだけれど、実際としては大したことはないな。まだ自分の力がないからな。

伊藤 派閥内基盤ですか。

藤波 ああ。

佐道 渡辺さんとか稲葉さんとか、そういう方は他の派閥とも連絡

をしたりなさっていた人ですか。

藤波 そうですね。

佐道 山中貞則さんというのはどういう感じの人ですか。

藤波 山中貞則は一匹狼だ、いまもそうだけれど。

伊藤 別にあの人は子分がいるわけでもないでしょう。

藤波 「子分はいないと」思うけれどな。私の選挙区に来て、藤波会、私の後援会の大会で、「藤波はおれが引き受けた」と言って帰ったけれどね（一同笑い）。

佐道 誰も頼んでない（笑い）。

伊藤 山中派だ（笑い）。

平松 この前も出て行って、戻ってきましたからね（笑い）。

伊藤 中曽根派というのは、出戻りの人もたくさんいるんじゃないですかね。渡辺美智雄さんも出たり入ったりしていましたね。

藤波 政治っていうのは面白いなあ、そういう意味でね。

武田 中曽根派が特殊なんじゃないか。

藤波 いやあ、どうだろうな。

伊藤 多少は特殊なんじゃないかな。宏池会とかなら、もうちょっと統制があるんじゃないかな。

平松 特殊だと思えますね。

佐道 宏池会とか、鉄の団結を誇る田中派とかと比べると、中曽根派はかなり異質な気がしますね。当選回数、低い方々、先生よりもっと若い方々はかなり動揺されると思うんですが、そうすると、よその派閥から手を突っ込まれて、ということもあるんじゃないかと思うんですが、そのへんは大丈夫だったんでしょうか。

藤波 まあ、「不安定の安定」というようなものだな（一同笑い）。

伊藤 先生はうまい言葉を使う（笑い）。

武田 ピッタリ来る（笑い）。

伊藤 そうですか、不安定が常態であれば、それは安定なんですよ

うけれど(笑い)。

佐道 妙に納得してしまいますね(笑い)。

伊藤 最終的に中曽根派は大平さんで行くわけですね。

藤波 そうです。

伊藤 これでまとまるんですか。

藤波 まとまるんだね。まとまるかどうか知らんけれど、まとまった振りをするんだな。

伊藤 振りをしないと派閥が危ないですからね。

佐道 これは新自由クラブに工作をして、ということになるわけですが、そのときには先生はかなり動かれたんですか。

藤波 いや、田中六助がいたからだ。自民党の幹事長だ。政調会長から幹事長になったんだ。田中六助が新自由クラブとの合流を考えるんだ。提携をね、中心になって。

伊藤 そういうところとやるときは、やっぱり幹事長ですか。

藤波 そうです。幹事長です。断然、幹事長です。

■労働大臣に就任

武田 先生はこの第二次大平内閣で労働大臣に就任されますが、そういうことはどういうふうに、いつぐらいから決まるんですか。

藤波 私は文部大臣だと思っていたからね。電話で呼び出しを受けて、総理官邸に行って、部屋に入ったときには、まだ文部大臣だと思っただ。谷垣専一がおって、谷垣が文部大臣になるわけだ。おかしいな、文部省と労働省と、もうようけ残っていないな、と思って行くわけだ。それだけど、「労働大臣を引き受けてくれ」と大平さんに言われた。その頃のことだから、一般論で何をやれと言ったかな。大臣でもやって欲しいことがあると言った、政治倫理かな、まあ何

かそんなことを言っていて、「労働省へ行け」という。こっちは、労働大臣かおれは、と思った。「これから大事になってくるぞ、この仕事は」と「大平さんは」言った。大平さんに任せたからまあいいわ、と思って引き受けたんだ。

「それまで」労働省に行ったのは、一回しかないんだ。「私が」文部政務次官のときに、いま「財団法人」修養団の理事長をやっている安嶋弥——宮内庁の東宮大夫をした——が文部省の管理局長をやっておって、労働省と私立学校の教職員の保険のことで対立していた。文部省は教育的立場でやろうとしたのか、労働省はどうでもいいと言ったのか。雪の晩に、「政務次官、労働省に行ってくれ」と井内

「慶次郎」官房長が言うものだから、雪の晩に安嶋を連れて行った。「労働省にいたのは」リクルート事件のあと参議院議員になった遠藤「政夫」で、その頃労政局長「↓職業安定局長」だ。橋本龍太郎と大野明がおった。その二人は私の一級上だけれど、二人の先輩が遠藤を囲んで向こうは対応したわけだ。そうしたら向こうの言うことの方が正しいのさ。これはいかな、と思った。喧嘩しに来たつもりだけれど、向こうの言うことの方が正しいわい、これはいかな、喧嘩にならん、と思った。それで遠藤に、「おまえ、おれを文部省の正式の遣いだとかわかってるのか。大臣の代わりの者が来ているんだ。奥野誠亮というわけにはいかなから政務次官が来たのに、上着を脱いで対応するとは何事であるか。馬鹿にするな」といって労政局長を怒鳴り散らした。「まあそんなに怒るな」と橋本と大野が言っただけれど、「そんな馬鹿なことがあるか、こんなやつを相手に話ができん」と言った。それでも言わんと収まらんものだから(一同笑い)。

それで帰ってきたら、井内はちゃんと文部省の玄関に出迎えておって、「政務次官、ご苦勞さまでした。いま労働省から連絡があって、政務次官に大変失礼をしたという。労政局長が上着を脱いで対応し

た、そんな馬鹿なことはないと思う。労働省全体が怒っておるので、政務次官、辛抱してくれ」という。それで大臣のところへ行こうと言って、大臣のところに行った。奥野誠亮の家は明治神宮の前だった。奥野誠亮の家に、雪の中、安嶋弥も井内もみんな連れて行って、「労働省との話はこうなった」という話をした。文部省の意見が通ったのかな。

平松 たしか通ったとおっしゃっていましたね。

藤波 通ったんだ。それでコーヒーを出してくれたんだけれど、奥野誠亮の奥さんは、飲めとも言わん。飲めと言わないと、大臣は上司なので飲めない。置いていくだけではないかんで、「まあどうぞ、お飲みください」と言わないといかんのや。飲めと言わないので、誰も手が着けられんなどいって、雪の中をまたすすぐ帰ってきたのを覚えておるわ。奥野誠亮の家内というのは、そんな家内だ。

平松 大臣の意志だったのと違いますか。

藤波 大臣もそうだ。「よう似た夫婦のう」と言ったんだ。大臣と同じような夫婦やな、と言ったんだ。家内が飲めといわんのだ。それで帰ってきたのを覚えておる。労働省は、そのときに一回行っただけだ。

それで、何を引き受けることになっても、「人間味のある」ということを言わなければいかんと自分で思っていた。いま私の後援会の東京の副会長をしておる宮川「知雄」というのが当時秘書課長でおって、総理の執務室から記者会見場に行くまでのあいだに、記者会見で言うかどうか決めなければならん。「人間味のある労政というのでいいか、人間味のある労働行政ということを言うぞ」といったら、「いい、結構だ。いいことだ」という。それでいまの問題を三つぐらい言って、それを言うてくたさいというのを廊下で立ち話をしながら「記者会見場に」行った。そうかそうかと言って、聞かなければわからんな。族議員とかいろいろなことを言うけれど、大

臣というものは何でもやれるようにならなければいかんだね。そのときはつくづくそう思った。記者会見で谷垣さんが私のあとに来て、自分の派閥で文部省をやれと言われて、文部大臣は谷垣か、と思ったのを覚えてるな、いまでも。

武田 最初のお話では、「大平さんは」文部大臣をお願いするとうような話だったんですか。

藤波 いや、言わない。自分で思っただけだ。

伊藤 呼び込みがあって、行ってみたら、ということでしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 とにかく中曽根派からの入閣候補のリストに入っているわけですね。

藤波 私と武藤嘉文とね。

伊藤 たぶんもう一人ぐらい入っていたんでしようね。

藤波 若いところで二人だ。武藤は農林大臣だ。

伊藤 結局、中曽根派の枠は二人ですか。

藤波 あのとときはもう一人ぐらい誰か入ったろうと思うけれど。

伊藤 二人というのはちょっと少ないような気がするけれどな。

藤波 少ない。三人だ。

伊藤 それで労働省とは思ひもかけず、ということですか。

藤波 そうです。しかし後で考えてみると、官房長官とか国会対策委員長が務まったのは、あのととき労働大臣をやったおかげだ。大平はそういう意味では、黙っておるけれど、えらい人だと思ったな。

■労働省関係の人々

伊藤 労働行政というのはこれまでほとんど関係がなかったお仕事ですね。

藤波 なかった。何をするかわからなかった。

伊藤 これは勉強しなければしょうがない。

藤波 そうそう。

伊藤 だけど役所というのは、ご進講というか、局長、次官からかくかくしかじかで云々、今日の問題はこういうことでございます、ということをやってくれるでしょう。それを丹念に勉強されるということになるんですか。

藤波 なるんだね。まず初めに、労働省は旧内務省だから、宮家に挨拶に行ってくださいと言うんだ。労働省は旧内務省だ、それはえらいものだよ。行く大臣と行かない大臣があるんだ。旧内務省というのは、労働省と警察と(伊藤 厚生省、建設省)、(武田 自治省)、そんなところだね。それが一つだ。それから、みんな職員が集まって大臣の訓辞がある。それでおれは労働者だ、饅頭屋だ「と言った」。

伊藤 饅頭屋が労働者かな。経営者の方じゃないですか。

藤波 経営者だけれど、毎朝四時半に起きて、五時から饅頭の館を炊いているのは労働者だ、という話をした。

早稲田の四年生のときに佐口卓というゼミの教師がおった。私は「ゼミは」一番人数の少ないところに行こうと思った。多いところに行ったら、必ず自分で怠けるなと思ったから、一番人数の少ないゼミはどこだといったら、社会保障論なんだ。早稲田大学商学部の話だ。先生は誰だといったら、佐口卓だ。そこに行こうと行って行ったら、「ゼミ学生は」六、七人だった。それはいいんだ。東京都の社会福祉事務所に行って、失業者だとか社会保障を受けている人の数字をもらってきたりして勉強したよ。

労働省で困ったなと思ったら、その佐口卓が労働省の学者だった。学者で三人ぐらいの中の一人だった。労働省にいろいろなことを頼もうと思うと、佐口卓という人に頼むんだという。「佐口さんは」「それはいい。おれのゼミの教え子が大臣になってきた」と言って

くれたから、それはよかったねえ。すごくよかった。早稲田大学商学部というのはいいところだなあ、と思ったな(一同笑い)。

伊藤 そうですか、先生は労働行政の一端を勉強されていたわけですね。

藤波 その先生は飛行機乗りの整備士だったんだな。いわば鹿児島のお覧のようなところにおったんだ。ようけ、自分の知っているやつが死んだんだ。それでもう表面に出ないということ自分で思っていた。

先生は一昨年かな、亡くなったんだけど、その前に勲章をもらおうと喋って話をしたら、「馬鹿なことをするな。おれは勲章どころの騒ぎじゃないんだ。死んでいったやつが多く、おれは生き残ったのが精一杯だ」という。全部ほかの先生のことや役人を頭に置いて、表面に出して、自分は陰に隠れて原稿だけ書いていたんだ。偉い人だったんだ。「そんなおれの生き方を知っているか」というから、「ああそうですか」ということで、勲章の話は沙汰消えになった。賞勲局から出してもいいと言ったんだけど、やめた。そういう先生だった。

労働省の役人はみんな知っていたんだな。福岡の市長になった桑原敬一、これが事務次官だった。それから官房長は中野サンブラザ「勤労者福祉振興財団」の理事長をやった人「↓谷口隆志」で、秘書課長は宮川知雄というコンビで一所懸命やってくれた。

勉強せないかんが、自分だけ勉強するのは恥ずかしいといって、NHKの有馬真喜子という女の人とか牛尾治朗とかと「懇談会を発足させた」。大将は誰だというから、大将は本田宗一郎でも入れたらどうだといって、「あんたすまんけれど、まとめてくれ」と言った。そのときに十人ぐらいで議論してもらって、人間味のある労働行政という中味を作って、そこでこれからの労働行政の政策の方向付けをしたんだ。

それを私は「政策の苗代」といった。温床だな。そこで何かまと

めようと思っただら何でも出てくるような温床をつくって、議論をして、それで初めて労働省はよそ並みの政策中心の考え方ができるようになった。一つは大平総理の田園都市構想の一環として労政を考えようということで、本田宗一郎に頼んだ。本田さんというのは三重県の鈴鹿に大きな工場があるものだから、どうって言うことはない。「本田さん頼むわ」と言ったら、「おれがやるのか」なんて初めは言っていたけれど、「やってよ」と言って、本田さんにまとめてもらったんだな。

佐道 労働省は、それまで統一的な労働政策は持っていなかったんですか。

藤波 あっただけけれど、特定の人が集まって議論するというようなことはなかったんだらうな。

有馬 本田さんは前からご存じだったんですか。

藤波 そうそう。知っておる程度だったけれどね。

伊藤 よく来てくれましたね。

藤波 よく来てくれたな、いま思うとね。死んでから値打ちが出る人があるが、本田宗一郎なんかそうだ、死んでから値打ちが出たな。生きるときはそれほどでもなかったよ。

伊藤 労働行政といってもうんと広いじゃないですか。

藤波 広いな。

伊藤 いま名前が出た中野サンプラザを初め、ああいう外郭団体が一斉に問題になっていきますね。炭坑離職者の話から始まって、いつのまにかダァッと。

藤波 一番中心になってやったのは、加藤「孝」というのがおった。リクルートでやめた男だ。リクルート事件というのは、株をもらったやつはみんな、文部省の（武田 高石「邦男」）、高石にしても、労働省の加藤にしても、一番いいやつだ。だから江副「浩正」はえらいものに目をつけているんだな。

三月四日に江副の一番の判決があるといつて、「マスコミが私の」あとを追いかけるものだから、もう逃げて、逃げているんだ。四日は東京にいないことにしようかと思っている。三月四日が一番判決なんだ。引っ張って引っ張って、いまになったんだ。早くやっていの方がよかったな。いまの方が司法の権利意識があるな。いまの方がきつくなっている。

平松 厳しいでしょうね。

藤波 引っ張ればいいと思っているんだらうな。

伊藤 じゃあ、その前後は追いかけて回される危険性がありますね。へたなことではつかまったら厄介ですね。

藤波 せっかく黙って十五年辛抱してきたんだから。

伊藤 毎回、藤波先生の名言があります。

藤波 遺言だと思えば、話したことないこともみんな言おうと思つて。そのときそのときで勝手なことを言っているものだから。

伊藤 そのほうがいいんです。

藤波 もうちょっとまじめない話をしないといかん。

伊藤 いや、政治の世界は僕らにはわかりませんから。いろいろな方からお話を伺って、それぞれ見方が全然違いますからね。派閥の構造とか、さっきおっしゃった出世の階梯とか。それは似たような感じですが、派閥の感じはちょっと違うと思うんですね。中曽根派の方の話を聞くと、ほかの派閥とは違うな、という感じがしますね。この前も藤波先生は、みんな中曽根の悪口を言って団結しているとおっしゃいましたが、あれは非常に面白かったんですが。

武田 親分の役目かもしれませんね。

平松 宿命でしょうね。

伊藤 今日の「不安定の安定」も非常によくわかります。先生、どうぞご健康にお気をつけてください。ありがとうございました。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第6回

日時：2003年4月8日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（元政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

平松 大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■労働界との接点

伊藤 それでは始めさせていただきます。前回は、大平内閣の発足のところをお話いただき、そのあと「一九七九年十一月、第二次大平内閣で」労働大臣に就任されるというところまで行っただけです。今回は、労働大臣の時代から、その次の鈴木内閣のところまで行ければと思って、質問要項をつくらせていただきました。その前に、前回のお話に加えることはございますか。

藤波 ないと思います。

伊藤 そうですか。この前、労働大臣に就任されたという話を伺ったんですが、初めて大臣になられて、地元への反応はいかがでしたか。沸きに沸くものですか。

藤波 そう思いますね。

伊藤 祝賀会をやったり、そういう行事もやるわけですか。

藤波 やりますね。同じ政調副会長をやっていた野呂「恭一」さんが同じ中選挙区で厚生大臣になって、私が労働大臣になった。そういう意味では「大臣になった価値も」半減するような感じだけれど、まあ陣営は喜ぶな。前に、科学技術庁の政務次官になったとき、田中内閣で田村元さんが労働大臣をやった。「私自身は」政務次官になったので、選挙はたぶん有利になるだろうと思って当てにしていたんですが、全部田村さんに取られた。やっぱり大臣というのは意味があるんだね。政務次官じゃ駄目なんだ。そういうことがそのときわかっていたから、みんな喜んでいましたね。

伊藤 支持者の人たちは、この次の選挙は大丈夫だと思ったんでしょね（笑い）。とにかく自分が支持していた政治家が大臣になっただけ嬉しいものじゃないか。

藤波 嬉しいでしょうね。

伊藤 もちろんご家族も喜びでしょう。

藤波 ええ。九段の議員宿舎にいたんです。その晩に、伊勢から家内が来るし、遅くまでみんな喜んでいたので、いまでも覚えていてます。

次の日に労働省に行って、講堂へみんな集まって、桑原「敬一」事務次官が「若い、いい大臣が来てくれた」という紹介をしてくれた。第二次大平内閣ですが、「大平さんは」労働省に対する思いの深いものがあった、曲がり角のような感じで労働省をみていた。総理自身がそういう気持ちでしたから、大臣としても非常に意気込んで労働行政に当たろうという気持ちで役所に入ったということが、感じとしては窺えます。一般の人は「私が」文部大臣になると思っていた。文部大臣の経験者として、ということもいまでもよくあちこちで言われるんですが、あのときに文部大臣をやっていたら、おそらく官房長官も国対委員長も務まらなかつたらうと思えますから、そういう意味では非常によかったと思っています。

伊藤 それはどういうことですか。

藤波 それは働く仲間を担当するのが労働省。労働行政というのは野党との接点であり、働く仲間の問題です。政治でいえば、こちらだけでやっていっても半分ではないということが、労働省に行けばわかるわけですね。批判勢力と言いつつ切ることではないけれど、対象が労働者、勤労者であるという役所ですから、そこでの扱いは、大平総理大臣の政治を決めることになるぐらいの感じを持っていたことは、自分でもわかります。

伊藤 労働大臣として、これだけはやろうという目標を持たれましたか。

藤波 何か、自民党の政治と反対派の政治がある。反対派はあってもいいんだけど、どうも総評があって同盟があって、固まり過ぎ

ている、硬くなり過ぎていて。ある意味では、総評官僚主義、同盟官僚主義になり過ぎてしまっている。だから、もっと自由闊達な論議があってもいいんじゃないかということだ。総評の大会の案内も来るんだけど、同盟の大会には宇佐美「忠信」さんとかみんなおつて、「いっぺん来いや」というので労働大臣として行って、大会で挨拶したのを覚えてる。

伊藤 宇佐美さんはその前からご存じなんですか。

藤波 そのときですね。

伊藤 そこからかなり長いおつき合いになるわけですか。

藤波 そうです、総評も。

伊藤 宇佐美さんとか堅山「利文」さん。

藤波 そうですね。

伊藤 総評は誰ですか。

藤波 榎枝「元文」、富塚「三夫」だったね。榎枝は文部省のときの相手ですからね。富塚と心やすくなったのは、一つの自分の窓でした。労働界に対する窓が開いたという感じがあった。

伊藤 総評と同盟とは、カラーが違うわけですか。

藤波 違いますね。

伊藤 あの頃は総評のほうが大きかったと思いますけれど。

藤波 あの頃は大きかったですね。数字では出ないけれど、八対二とか七対三とかいってましたね。

伊藤 そうすると、労働行政としては総評のほうに重点が行くということになりませんか。

藤波 総評、同盟、その他ということ、固まり過ぎていてという感じがありましたな。

伊藤 でも別に、労働省の側から交流を促していくという具合にはいかないでしょう。

藤波 しかし、そういう気持ちになれば、そういうふうに見えるん

ですね。

伊藤 榎枝さんというのは、あまり硬い人ではないですか。日教組で非常に強い力があつたと思いますが……。あと、労働界で印象に残った人はおられますか。

藤波 テレビ朝日の専務取締役をやっていた三浦甲子二というのがいて、その三浦さんの段取りで、赤坂で富塚と月に一回ずつ会って飯を食った。ああいうのは、懐かしいですね。その席上で、行って来いといって飛行機の券をとって、ポーランドのワレサのところに行つたことがあるんですよ。

伊藤 富塚氏が行つたんですね。

藤波 ええ。そういう雰囲気だったな。

伊藤 さっきのお話で富塚氏が窓口云々ということでしたが、やはり人間的にも親しくなられたわけですか。

藤波 なつたんですね。

佐道 富塚さんは労働界全体でもかなり人望があつたわけですか。

藤波 ありましたね。国会議員としてはまた別の観点になりますけれどね。小田原で社会党の書記長だったなとかいうのが亡くなって、そのあとに「富塚氏が」国会に出たんですね。私はそのときに反対をして、「それは選挙をやるのはいいけれど、福島出身だから、富塚三夫という人間からすれば、選挙をやるのは辛いことだぞ」ということを何回も言つて、「絶対におれは反対だ、あんたはもっと大きな立場でおれ」ということをよく言つたことを覚えてますな。

伊藤 でも総評の事務局長をやると、その次はもう議員になる以外にないじゃないですか。

藤波 そうですね、ないんですね。

伊藤 あれは「あがり」ですからね。宇佐美さんに対しての感じはどうですか。

藤波 紳士でよかったですね。労働界の面白味は、そういう連中が

みな持っていた。同盟の連中はみな紳士でしたね。そういう感じを受けたな。

武田 宇佐美さんともよく会われましたか。

藤波 よく会いましたね。

武田 やはり月に一度とか、それぐらいの頻度ですか。

藤波 そうですね。

伊藤 でも、定例ということではないんでしょう。

藤波 三浦さんの場合は定例だった。

伊藤 富塚さんの場合ですね。宇佐美さんと会うというのは、宇佐美さんのほうから連絡をして「会いたい」と言ってくるわけですか。

藤波 そうです。

伊藤 すると労働省に来るわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 大臣室で会ったりするわけですか。

藤波 そうです。

佐道 定例で会っておられたのは富塚さんだけですか。

藤波 富塚さんの下で国労の委員長をしていたのは何とといったかな。

伊藤 そういうときは槇枝さんは一緒じゃないんですか。

藤波 槇枝さんはまた違うね。国労の委員長は武藤「久」だったかな。

■前大臣からの引継

伊藤 このお借りした資料『労働行政執務資料』を指す」は、どの段階でつくったものですか。就任早々につくったものですか。

※労働省大臣官房のほか、各部署の懸案事項がまとめられている。資料編6参照。

藤波 『資料』を見て」就任したときですね。

伊藤 だいたい労働省の仕事はこういうものですよ、ということですか。

藤波 そうですね、そのときの資料だな。

武田 それは引継書みたいな形になるんですかね。

藤波 初めのときだな。

伊藤 前の大臣からの引継書というのはあるんですか。

藤波 別に引継書というものはあるはずだな。

伊藤 それは、こういうことはぜひ続けてやって欲しいとか――。

藤波 書いてあるんですね。

武田 先生の前には何か「引継事項が」ございましたか。

藤波 いや、ない。

伊藤 前任者は誰ですか。

小池 栗原祐幸ですね。

伊藤 いちおう引継ぎの儀式みたいなことはあるわけでしょう。

藤波 あるある。

伊藤 でも、そんなに深く話し合うということではない。

藤波 ない。握手して、写真を撮る、そのためのものだな。

伊藤 ああ、写真を撮るためですか。なんとなくわかるような気がします（笑い）。

佐道 引継書というのは分厚いものですね。一通り目を通されるわけですか。それともお役人の方が来て、早速いろいろな問題をご進講されるんですか。

藤波 そうですね。ご進講ですね。

伊藤 そのほうが手っ取り早いでしょうね。

藤波 早いな。

伊藤 「ご進講に来るのは」各局の局長ですか。

藤波 局長ですね、ほしい。

藤波 局長ですね、ほしい。

伊藤 大臣というのは人事権があるようで、現実問題としてはないんでしょう。

藤波 そうそう、ないですね。

伊藤 本当はあるはずだと思いますが、あまり役人の人事に口を容れると反撃があるだろうから。

藤波 文部省の政務次官として、私もし何か成功したことがあるとすれば、先輩から言われて実行したんだけど、ほとんど毎晩、各局の課長とか係長の若い連中と政務次官室で飯を食ったということだね。こんなこと初めてだということで、初中〔＝初等中等教育局〕は初中、大学局は大学局で、五、六人ずつ選手が来るな。政務次官室をレストランみたいにして、ほとんど毎晩ウイスキーの水割りでやっていたね。

伊藤 政務次官室で、ですか。そうすると役人たちは、この政務次官にやってもらおうと思うことを言うわけでしょう。

藤波 言うわけですね、若い連中ですからね。

伊藤 大臣になられたときはどうですか。

藤波 大臣のときは、そんなことよりも秩序を大事にしていたほうがいいと思った。局長とか課長とかね。

佐道 文部省ですと、課長クラスと食事をされたりして、どういふ人がどこにいるのかということも先生は全部把握しておられたわけですね。

藤波 そうですね。

佐道 労働大臣は予想もなかったポストということですから、労働省全体の役人の配置は、就任されたときはよくおわかりになっていなかったわけですね。

藤波 そうなんだね。

佐道 それはあとでいろいろな人に聞いたり、あの人は何をしているか聞くわけですね。そういう情報を授けてくれるような人は、例

えばどういう人になるんでしょうか。先輩の方ですか。

藤波 秩序を大事に思えば、事務次官とか官房長とかということだな。

■労働関係の与野党議員

伊藤 労働族というのはいないんですか。

藤波 私の頃はあまり国会議員は来なかったな。先輩には大野明さんと橋本「龍太郎」さんとかいたけれどね。

伊藤 あまり族議員はいないのかな。

佐道 先生が大臣に就任されたときは政争の真っ最中で、四十日抗争で自民党の中が揺れに揺れていた時期ですが、そういうことが、他の人があまり口を出さないということに影響があったんでしょうか。みんな政争のほうで忙しかったとか。

藤波 そういうことはあまり関係がないな。

伊藤 あまりみんな、労働行政には関心がないんですかね。

藤波 そうそう。

伊藤 でも一応、党には部会があるんでしょう。

藤波 あるある。

伊藤 それは労働部会ですか。

藤波 労働部会。それと労政調査会だ。森山欽司が労政調査会の会長だった。

伊藤 それじゃあ森山さんと話す機会が多かったんですか。

藤波 多かったですね。

伊藤 それは陳情ですか。

藤波 陳情というより、話だな。

伊藤 意見交換ですか。

藤波 はい。できるだけ身を低くして、いろいろな指導を受けに行っただけだね。人事院勧告の扱いとか、そういうことがあるわけだ。取り過ぎるものは、例えば林野の関係とかね。そういうことになる。と社会党の田辺「誠」さんとか山口鶴男のコンビで、自分たちのおもとの方向でやろうとするわな。田辺さんは強かったよ。

伊藤 それは衆議院の話ですか。

藤波 衆参を含めてだな。

伊藤 衆参では社労ですか。

藤波 委員会はそうです。しかし、ああいうのは委員会の形式的なものではない、族としてあったんだらうな。

伊藤 やっぱ一応あったんですかね。

藤波 あったんだね。

伊藤 どういう人が有力だったんですか。

藤波 自民党では森山、向こうでは田辺さんとか、そういう連中だったね。

伊藤 そういう人たちが直接、大臣に物申すわけですか。

藤波 そうです。

伊藤 議会の場ではなくて。

藤波 議会は形式だけです。実際をやるわけですね。

伊藤 大臣室へ来るんですか。

藤波 来る、来る。乗り込んでくるわ。

伊藤 人事院勧告は公務員の問題ですから、現業ですか。

藤波 現業ですね。

伊藤 全通なんかも――。

藤波 全通、日教組、林野。全通があるな。

伊藤 このころはまだ全通の委員長は宝樹「文彦」さんじゃないですか。

藤波 そうですね、宝樹さんですね。

伊藤 宝樹さんと直接会ったりする機会はありましたか。

藤波 いろいろ話し合いましたね。

伊藤 宝樹さんというのもちよっと面白い人だと思うんですけど。

藤波 そうね、そんな感じだったな。公労委員かな。

伊藤 そうだ、公労委の委員ですね。中労委とか公労委とか、そういうところに出てくるんですね。宇佐美さんとか、みんなそうですね。

藤波 そうです。

伊藤 そうすると、労働界のトップクラスの連中とは知り合いになる。

藤波 そうそう。

伊藤 それと関係の深い社会党や民社党の議員とも――。

藤波 仲良くなる。みんな話をしていううちに、関係がよくなるんですね。

伊藤 だいたいそういう人たちは、社会党の議員、民社党の議員も、社労の関係の人が多いわけでしょう。

藤波 多いですね、委員会としては。

伊藤 委員会というのは、そんなに形式になっちゃいますか。

藤波 そうです。

伊藤 もう、シナリオは初めにできている。

藤波 できているというか、つくっていくというか。委員会での話

というの、表向きの話のような気がするな。

武田 実際に大臣室で話すこととはかなり違うんですか。

藤波 違いはせんのだけれど、本当のものにはならないでしょうな。

伊藤 そこでなんとか、ということにはならないということですね。

藤波 だいたい物事を決めるときは一対一で決める。

藤波 そうそう。

■ジャーナリストとの関係

伊藤 その労働界だけではなくて、公労委とか中労委では、中立委員の学者の先生、労働法学者や、経営者の人たちが入っていますから、そういう人脈もできるんじゃないですか。

藤波 そうですね。そっちから入って行って、関係ができるな。

伊藤 労働法学者で、誰かご記憶の方はいらっしやいますか。あの頃だと石川吉右衛門さんなんかがいましたね。

藤波 石川さんというのはおったな。石川さんはどこかの宿屋の主人だった。

伊藤 そうです。千葉です。お金持ちですよ。

藤波 千葉の宿屋といえば、私の頭の中では石川さんは熱心だし、さかんな感じだけれど、俳句の鈴木真砂女も同じことだなと思った。

鈴木真砂女は、千葉県の宿屋の女将さんになって、出て来て、新橋で小さな料理屋をして、このあいだ亡くなった。

伊藤 それは俳句のほうのつき合いですか。

藤波 鈴木真砂女はね。全然関係ない話だけれど、千葉県の宿屋という話だけだ。石川さんはそうだったな。

伊藤 また脇道に逸れますが、俳句の関係は全国ですか。

藤波 全国です。

伊藤 じゃあ、至るところに友あり、ということですね。

藤波 つくろうと思えばね。

武田 大臣になられてからもずっと俳句をされているわけですね。

藤波 やっていますね。

伊藤 よくそんな暇があったな（笑）。

藤波 いや、好きなことだからな。

伊藤 あと、言論界はどうですか。いま三浦甲子二さんの名前が出ましたが。

藤波 読売の渡邊「恒雄」さんとか。「三浦と渡邊の」二人が河野「二郎」番の双璧で、自分で中曾根さんを育てていると思っような二人だったな。それに上手に指導を受けてきたわけだ。

伊藤 あの人たちは中曾根番をやったんでしようが、藤波番というのもいたんですか。

藤波 いた。

伊藤 有名な人では誰かいますか。

藤波 読売でいえば橋本五郎とか大久保好男とか。毎日でいえば岩見「隆夫」はちょっと上で、松田喬和、岸井成格が最近よく名前を出しているね。

伊藤 よくテレビに出ていますね。

藤波 よく出ているね。ああいうことがいいんだな。

伊藤 そうですか、岸井さんなんかが入りしていた頃ですか。

藤波 そうそう。岩見の子分だからな。

伊藤 そう、岩見一派ですね。

武田 岸井さんとは大臣になる前からですか。

藤波 いや、大臣になる前後ですね。

伊藤 大臣になると、そういう新聞記者とのつき合いはうんと多くなるわけですか。

藤波 うんと多くなるね。

伊藤 しかしそういう人たちは別に労働記者というわけではないでしょう。

藤波 ないない。

伊藤 労働専門の記者というのはいるんですか。労働問題だったら、おれに任せておけというような新聞記者は。

藤波 一般のところにあまり出て来なかったけれど、例えばイノウ

エとかね。

伊藤 それはどこの新聞ですか。

藤波 毎日「新聞」。それからこのあいだ家内が亡くなったのは誰だったかな。本人はもっと早く亡くなった。

伊藤 そういう新聞記者、さっきおっしゃった橋本五郎さんとか岸井さんたちは、どこに来るんですか。労働省ですか。

藤波 労働省。

伊藤 自宅というか、議員宿舎にも来ますか。

藤波 来ます。

伊藤 岸井成格なんかよく飲んでいる人だと思っけれど、新聞記者と一緒に飲んだりということはありますか。

藤波 言論界、役人、それから司法というのが一つの世界だろうな。裁判官と検察と弁護士ですね。

伊藤 それはなんで関係があるんですか。

藤波 関係があるというより、一つの世界を構成している。それから政治の世界。それから経済界。だいたいそんなものだな。

伊藤 経済界はどうですか。労働大臣の頃、いろいろな委員会にたくさん出ていたと思いますが。

藤波 労働大臣の頃に、本田宗一郎に無理を言って、懇談会をつくってもらった。それは一つの大きな意味があったと思うな。曲がり角の労働行政の整理をしようということだ。

伊藤 その一番の目玉は何ですか。

藤波 難しい、時代の変わり目のような議論ばかりしていて、労働行政がどうのこうの、というようなことではなかったと思うな。牛尾治朗とか。

伊藤 この前も牛尾さんの話が都知事選のことで出て来ましたね。

牛尾さんとはずいぶん深いおつき合いなんですね。

藤波 そうですね。

■高齢者問題への取組み

伊藤 この時期から、いまにずっとつながっている高齢社会という問題がだんだん話題になってくるようになります。これも労働省の政策対象になるわけですか。

藤波 「私が」一つだけ労働省に残したものは何かといったら、シルバー人材センターですね。これをつくったんです。失対があったが、失対をなしにして、だんだん少なくていくんだけれど、三重県なんかを見ても、失対の残り滓みたいなのに非常に強いものがあつた。だから失対をなくさなければいかん、ということが一つあつた。それをなくして、新しくシルバー人材センターをつくるということになった。この政策転換の政策をつくって、実際に役所をリードしていったのが加藤「孝」という男です。これはリクルート事件で引っかけってしまった。

伊藤 労働省の役人ですか。

藤波 労働省の役人だ。失対部長をしていたのかな。

佐道 次官になりましたね。

藤波 その後なったね。みんなやられたんだ。文部省の高石「邦男」にしても、加藤にしても、よくできるやつがやられたんだ。

佐道 アイデアも加藤さんから出て来たんですか。

藤波 そうだろうな。

伊藤 失対事業のほうは、日共が強かったでしょう。全日自労「全日本自由労働組合」ですね。

藤波 そうそう、全日自労だ。

伊藤 これをつぶすといったら、さうとう抵抗があつたんじゃないですか。

藤波 つぶすというよりも、新しい労働省の仕事をつくらうということだ。高齢化の社会に入っていくし、というので、シルバー人材センターというのを出してきた。

伊藤 結局、そこに吸収するみたいな形ですか。

藤波 そうですね。

伊藤 もうこのころになりますと、失対事業はほとんどおじいさんですからね。

藤波 そうそう。まあ大きな顔をしてやっているから、やめるときには権利を持っていて権利を売ったりね。そんな話があった。失対権というんだな（一同笑い）。

伊藤 あれは手帳をもらうんですね。

藤波 そうですね。

伊藤 「ふじなみレポート」に、先生が主導して高齢者問題で関係懇談会を設置したり、新生クラブでもその議論をしているようですが、高齢者対策というのは一つの大きな目玉ですか。

※「ふじなみレポート」第三十五号「八〇年代はじまる」（昭和五十五年一月号）には、「八〇年代の大きな政治課題は高齢者対策だと考えますが、閣議で私が提案をして、健康、年金、労働、生涯教育、住宅などの総合的な高齢者対策を進めるための関係懇談会を設置することにしました。政策集団新生クラブの方も政策の討議を進めます。同時に、各党の若手国會議員との意見交換を進めていきたいと考えています」と書かれています。

藤波 それは、本田懇談会で取り上げて、そこが中心でそれぞれやっただけでしょうな。

伊藤 一般的に高齢者問題というふうになると、厚生省の所管の問題になりませんか。

藤波 なりますね。

伊藤 ちょっと難しい問題かな、と思ったんですけれど。

藤波 厚生省のやっていることは、あまりピンと来ないんだ。労働省はやるう、ということをやったんですね。元気がよかったな、あのころは。

伊藤 厚生・労働というのはもともと一つの省ですからね。

藤波 そうですね。

伊藤 だけである時期は労働省の勢いがよくて、そのうちに労働省が元気がなくなると、厚生省のほうがだんだん強くなりましたね。

藤波 元気がどうか知らないけれど、強い弱いはあるな。

伊藤 予算規模が全然違ってきますからね。

藤波 そうだね、違ってくるからね。

武田 新生クラブでいろいろな議論をしたというのは、先生が議論しようといったわけですね。

藤波 そうそう。

伊藤 高齢者対策というのは、勤労者だけではなくて、一般「の高齢者」もあるでしょう。

藤波 あるある。

伊藤 それに対する対策ということになると、必ずしも労働省ということではないでしょうね。

藤波 ないですね。文部省もそうだし、厚生省もそうだし、広い立場で取り組んでいくことが大事なんだな。

伊藤 それで関係懇談会なんですか。

藤波 ええ、やったものだな。

伊藤 生涯教育ということをいえば、当然文部省も絡んできますね。

藤波 閣議で、シルバー人材センターができるという説明をしたら、大平さんが非常に喜んでくれた。そのときに竹下登が大蔵大臣をしておいて、「労働大臣、頭が禿げた人はどうするんだ」と言うんだ。

それは、シルバーというのは白髪のことだからだ（一同笑い）。

佐道 禿げた人は人材に入らない（笑い）。

藤波 それで「ゴールドです」と言ったら、大笑いになった。閣議でそんなことがあったな。

伊藤 それは閣議でも懇談会ですか。そうじゃなくて正式な閣議ですか。

藤波 正式な閣議。

伊藤 そういうのは珍しいんじゃないですか（笑い）。

藤波 珍しいですね。

佐道 高齢者対策で、労働省が声をあげて閣僚懇談会を設置するということになる、厚生省とか文部省はどういう反応になるわけですか。

藤波 やるのかな、というような感じだね。

伊藤 実際にやったんでしょね。

藤波 やった、やった。同じ問題意識はあったんだろうけれど、自分らが中心になってやろうというほどの情熱が出て来なかったんだろうな。もっとやるべきだったな、あのころはね。

伊藤 さっきおっしゃった諮問委員会みたいなところでの議論を踏まえているわけですね。

藤波 そうです。踏まえているわけです。ずっと議論して、だいたいのちのちまで政策的に労働省がやらなければいけないことは、その懇談会の記録を見れば全部載っている。そういう意味で、「苗床をつくってくれ」ということを言ったな。

伊藤 その懇談会には労働側も参加していたんですか。

藤波 メンバーはないかな。「レポート」にも載っていないか。有馬さんという女の人。有馬真喜子。

※有馬真喜子氏がメンバーとなっていたのは、昭和五十五年一月七日、労働省内に設置された「日本人の職業意識と能力開発を考える懇談会」である。この懇談会には有馬氏のほか、天城勲、牛尾治朗、本田宗一郎、斎藤進六、公文俊平らで構成されていた。

武田 ニュースキャスターですね。

藤波 NHKだ。

武田 天城「勲」さんも出ていますね。それから本田宗一郎。

伊藤 斎藤進六というのは――。

藤波 三菱か。

武田 公文俊平もいますね。

藤波 公文俊平は学者だ。

伊藤 公文さんはかなりシャープな方でしょう。

藤波 そうです。香山「健一」、公文、それから亡くなった（伊藤

佐藤誠三郎）、その連中がみな大平政治に通じていた。公文さんだけがちょっと空いていたのかな、手伝ってくれやと行って、手伝ってもらったんだな。みんな亡くなっちゃったな。佐藤誠三郎は死んだし、（伊藤 香山も）香山も死んだ。死ぬのはいかなあ。

伊藤 これは「日本人の職業意識と能力開発を考える懇談会」という名前なんですね。

藤波 だから全部だな。労働省全部のことについて議論してくださいと言ったな。

武田 有馬真喜子さんという方はニュースキャスターで、当時は有名な方だったんですか。

藤波 婦人会館の館長をしていたのかな。

伊藤 じゃあ、労働省と関係があったんですね。

藤波 そうそう。

武田 公文さんも労働省と関係があるんですか。

藤波 いや、なかった。

伊藤 これは懇談会ですが、一応答申みたいなものを出したんですか。

藤波 結局、出さないうで終わったんじゃないかな。最後は大平さんが不信任をくらったからな。

伊藤 こういう懇談会はどういうところで作るものですか。これは大臣が参加するわけではないでしょう。

藤波 それには参加した。

伊藤 参加するんですか。ホテルか何かでやるんですか。

藤波 労働省の中でやったような気がするな。

伊藤 会議室か何かで、ですか。

藤波 ええ、会議室で。

佐道 どのくらいの割合で開かれたんですか。

藤波 月一回ぐらいだろう。

武田 牛尾さんとか本田さんは先生が新生クラブでご存じの方で、先生がお呼びになったんですか。

藤波 そうそう。

武田 だいたいメンバーは先生がお決めになるんですか。

藤波 そうそう。

伊藤 これは省の中の懇談会なんですか。それとも大臣の私的懇談会ですか。

藤波 大臣の私的懇談会です。

伊藤 高齢者対策の問題のほかに、中小企業退職金法、労働安全衛生法、年金法改正など、当時いろいろありますね。何かご記憶のことはいかがですか。

藤波 ないねえ。

伊藤 そう大きな改正ではなかったのかもしれないけれど。

藤波 なかったですね。

■ 自民党と労働組合

伊藤 さっきのお話に出ました労働組合との関係のことですが、一

九八〇「昭和五十五」年に、自民党の党大会で労働組合との協力ということを決めるんですね。これは先生は何かご関係があるんですか。

藤波 あると思うね。

伊藤 労働組合との協力といっても、同盟のほうはもともとういう構えがあるからいいでしょうけれど、総評のほうはそんなにすなり行かないでしょう。

藤波 行かなかったと思うけれど、まあ突っ込んで話してみる。政府と労働者と労働組合の産労懇、産業労働懇談会というのがあったな。

伊藤 それはどこにできたんですか。

藤波 総理大臣も出席する。

伊藤 それじゃあかなり大がかりなものですな。労働組合の代表的な人たちが出てくるわけですか。

藤波 代表的な者がみな来る。

伊藤 財界の人も。

藤波 経済界も来る。

伊藤 あと、一般知識人も入っているんですか。

藤波 入っている。

伊藤 それから政治家と。

藤波 ええ。

伊藤 それじゃあ大きな懇談会ですね。

藤波 それは三ヶ月にいったんぐらいかな。それを中心に動いていたと思う。

伊藤 安倍「晋太郎」さんが政調会長ですが、政策推進労働会議、同盟とのあいだで公式会談を行ないます。あとで何になったのか、政策推進労働会議というのがあるんです。

武田 堅山さんとか橋本孝一郎さんですね。

伊藤 民間労組ですね。そういうものとの定期公式会談を行なうということ、ちょっと総評がひがんだりするんですが、安倍さんはそういうところに関心があったんですかね。これは政調の話ですが。

藤波 自分の力を広げようとしたんだろうね。

武田 このとき「一九八〇年一月」の党大会での、自民党が労組との協力方針を掲げる過程は、先生は何かご記憶ございますか。

藤波 自由闊達にやろうという感じは持っていたから、労働組合運動も。

伊藤 労働組合の側も、自分たちの期待する政策を実現していくためには、社会党だけに頼っていたのではやっていけない。同盟系ははっきりとそうですが、総評系の中にもそういう空気はあったと思うんですね。

藤波 あったと思うね。

伊藤 ですから、政府との接点を求めていたように思いますし、求めるとすれば、中労委とか公労委が一つの接点の場になると思うんですね。それで積極的に労働省側が——さきほどは富塚さんの夜の定期会談ということですが——公式にも定期会談をやったんじゃないですか。

藤波 やったんでしょうな。

伊藤 それは大臣の気構えがないと、できないでしょうね。

藤波 そうだなあ。

伊藤 そんなことをやっている、自民党の中では、社会党みたいなのと一緒にやっているとどうするんだ、という反論も当然出てくるでしょう。

藤波 世代交代とか、大平さんの考えている大平政治の実現とか、いろいろな意味で、自分の気持ちにもあったんでしょうな。一所懸命だったよ。

伊藤 藤波先生の労働行政について、大平総理がバックアップして

いるという感じですか。

藤波 そうでしょうね。

伊藤 いちおうそういう労働問題について、総理と話し合いをするということもあったわけですか。

藤波 労働界と私と総理大臣とで、サミットに行く前には話し合う。写真も撮ってあるけれど。宇佐美さんとか槇枝とか、みんないるわ。

伊藤 たしかにサミット前には、労働界の代表と会って希望を聞くんですね。

藤波 意見を聞くわけだ。

武田 先生は民主党の代議士の方、労働運動に深く関係しているような方とのつき合いはありましたか。

藤波 国会議員をたてるということでは、社会党と総評の関係のほうがずっと両方を大事にしていたんじゃないかな。民社というのは、えらい人でも国会議員をあまり大事にしないな。そもそも三輪寿壮とか西尾「末広」さんとか、あの頃はそれなりに一体でしょうけれど、私らのときはそれほどでもなかったな。

伊藤 春日一幸とか、西村「栄一」さんとかは、あまりおつき合いはなかったですか。

藤波 春日さんなんかはよく話したけれどな。

伊藤 春日さんというのはあまりにも有名で、特別な人だから。

藤波 「我輩、我輩」と言ってるね。

伊藤 非常にユニークなキャラクターの人ですね。ところで、毎年春闘があって、だいたい春闘が形になってきた。昔のように戦闘的な労働運動ではなくなってきた、お祭り、年中行事になってきたと思うんですが、先生が労働大臣のときの昭和五十五年の春闘では、電機労連が珍しく十二時間ストライキをやったんですね。私鉄スト

はときどきありましたが、このときも私鉄ストがあった。実際には、ほかはほとんどストなしですから、「ストなし春闘」ということ

ようです。ただ、公労委の労働側が私鉄賃金に連動させないことに抗議して、同盟系の一人を除いて全員が辞職するという事件があったんですが、何かご記憶はございますか。

藤波 宝樹さんが辞めたときだろう。ものすごく緊張したのを覚えているな。

伊藤 春闘も年中行事みたいになって、迫力がなくなってしまいましたね。

藤波 なくなりましたね。

伊藤 宝樹さんなんかは、これに喝を入れなければいけないという感じだと思うんですね。このころまでの春闘は、日本の経済が、浮き沈みがありますけれど、右肩上がりですから、少しずつペースアップしていく。「春闘は」労働行政の中でそれほど目立った大きな対象ではなかったんじゃないかという気がしますが、春闘ということでは何か思い出されることはございますか。

藤波 春闘には、労働大臣は知らん顔をしていなければいかんので、意見があっても物を言うな、というのが役所の中の空気だったな。

伊藤 そうですね、あれは言っちゃいけないんです（笑い）。労使関係ですからね。

藤波 絶対に物を言っちゃいかん。

武田 何をすればいいんですか。

藤波 黙って見ているだけだ。

伊藤 まあ中労委のほうは民間のことですからいいんですが、公労委の問題は引っかけってくるんですね。

藤波 そうですね。

伊藤 でも公労委も、労働省の中にあるといってもいちおう別機関ですから、口を出したらまずい。でも何かやるんでしょうね。公労委の場合、政府は当事者ですから。

藤波 そうそう。

伊藤 少し今度、宝樹さんのことでも思い出ししてください。

藤波 宝樹という人は面白い人だったな。

伊藤 実はいま僕は宝樹さんのインタビューをやっているんですよ。

藤波 そうですか。

伊藤 元気いっぱい。二時間と言っているのに、絶対に終わらないんですよ。尻上がりに元気になっている。「もう時間です、時間です」と何回も言わないと終わらないんです。

■大平内閣不信任案成立

伊藤 労働大臣のお話はあとでまた付け加えていただくとして、政治の話に戻したいんですけれど、よろしいですか。

藤波 はい、どうぞ。

伊藤 昭和五十五（一九八〇）年五月に大平不信任案が可決される。可決されたということは、要するに反大平派が欠席したからでしょう。中曽根派はその欠席派のほうに入っていたわけではないですね。中曽根派の中でも割れたんですね。

武田 中川グループとか、割れたんじゃないですか。

藤波 最終的に中曽根さんは本会議に出たんだな。

伊藤 それで不信任案が可決されて、選挙になるんですね。そのときに、福田さん、三木さん、中川グループが党再生協議会を結成して、場合によっては新党という噂も出たんですが、このときもまた公明・民社が少し関わっているんですね。こんな動きは、先生はどのようにご覧になっていましたか。

そのさなかに大平さんが急に亡くなられるわけですね。だいたい無理をされていた。ちょっと衝撃的な事件だったと思いますが、先生は前からお話のように楽観論者だから、まあ分裂はしまい、とお思

いでしたか。

藤波 「どうして福田さんというのはおれのことをわかってくれな
いんだろうな」というようなことを大平は絶えず言っていたね。
「わかってくれないのかなあ」と言っていた。

不信任案をやっているときに、ひな壇に座っていたら、隣が後藤
田正晴で、選挙の日付の話ばかりしているんだ。はあ、不信任
が通るんだなと思った。それが一つだ。もう一つは、総辞職と解散
と両方あるけれど、解散に行くんだな、と思って聞いていたのを覚
えているな。「後藤田は」自治大臣だからな（一同笑い）。

武田 そうですか。何と言っているのか（笑い）。

伊藤 それは不信任案が出たときの議会ですね。

藤波 そう、ひな壇の端のほうだ。

伊藤 まだ採決前ですね（笑い）。

武田 大平さんが亡くなられたときの先生の「ふじなみレポート」
を見ると、大平さんの思い出みたいなのが書かれていて、大平さ
んから「鎮魂」という言葉の意味を学んだ、とおっしゃっています。
これはどういう意味で、どういう経緯でこういう言葉をお聞きになっ
たんでしょうか。

※大平正芳が亡くなった昭和五十五年六月の「ふじなみレポート」
（第四十号「悲しみを超えて」）には次のように書かれている。

大平総理を失ったことの悲しみを、今かみしめています。思索
を重ね思想を練り、黙々と安定成長社会への調整を進められた大
平さんが私は好きでした。また、とても可愛がってくれまして、
よく二人だけの時間に、政治の果たすべき一つの役割である「鎮
魂」について問答したものです。総理は身をもって鎮魂のよびか
けをなさったのだと思います。勝った自民党にとって大切なこと
は党内が一致結束することです。粘り強い話し合いで首班候補を
一人にしぼること、新しい形は主流も反主流もない挙党体制であ

ること、全体的に内閣、党とも若返らせ、適材を配置し、大平政
治で育ててきた新しい政策の目を継承して花開かせることなどを
強く主張して頑張っています…

藤波 宗教の世界と政治の世界との接点におったということかなあ。
もともと大平さんという人はクリスチャンだね。その感じがよく出
ていたし、私もその感じを掴んでいた。亡くなったときは、ずっと
応援に回っていたときだったな。

伊藤 そもそも「鎮魂」という言葉はどのような感じの言葉なんです
か。

藤波 魂を鎮める。

伊藤 それはそうでしょうか。

武田 大平さん自身がおっしゃった言葉なんですか。

藤波 大平も言ったし、私からも言ったし。

伊藤 そうした場合の「鎮魂」というのは、どういう文脈のかな、
というのがよくわからなかったんですが。

藤波 とってつけたようになつたのかな。言葉としてはとってつけ
たようになっていても、二人の感じとしては、体から滲み出るもの
があったんじゃないかな。

武田 この「ふじなみレポート」には、「よく二人だけの時間に、
政治の果たすべき一つの役割である『鎮魂』について問答したもの
です」と書いてあります。

藤波 ああ、そう。

伊藤 政治における「鎮魂」というのはどういうことなのかな、と
思います。

藤波 政治以外の「鎮魂」というのはどんなことがあるかな。

伊藤 ふつう人間が死んだときに、さまよえる魂を鎮めるというこ
とではないですか。

藤波 魂の世界のことだな。

伊藤 先生もちろん宗教ですね。

藤波 そうです、神道です。

伊藤 大平さんはクリスチャンだとおっしゃいましたが、葬儀は別にキリスト教でおやりになったわけではないでしょう。

藤波 ない、ない。

伊藤 たしか仏式でおやりになったように思うんですが、違いますか。

藤波 仏式でしょうね。去年の秋深く、墓参りに一回行こうと思って四国に行ったけれど、別にクリスチャンでどうのこうのということとはなかったな。

伊藤 ふつうのお墓ですか。

小池 ふつうのお墓です。小高い丘の上で。

藤波 伊東正義が名前を書いてある。「君ここに眠る」みたいなことを書いてあるんだ。墓というのは、個人の名前を出してはいかな、伊東正義でも。

伊藤 署名があるんですか。

小池 署名があるんです。

藤波 あれは出したらいかん、絶対にいかん。

伊藤 また政治の生臭い話になりますが、大平さんが亡くなって、あとどうなるかというのは、政治家としては非常に関心があるところだろうと思うんですが、どんなふうに使われていましたか。どこへ行くか。

藤波 投票の結果で、国民は大平政治を支持して、同情を寄せたということなんだけれど。

伊藤 この選挙では勝つわけですね。

藤波 そのあとどっちを向いて行くかというのは――、重苦しい話だな。

伊藤 勝ったわけですからね。しかし「大平さんは」亡くなった。

一方に反対派の福田さんのグループがあって、福田さんの側に行くということはちょっとないでしょうね。

藤波 ああ。

伊藤 このときの後継問題に、藤波先生はまだ関与するほどの地位ではないんですか。

藤波 ないです。

伊藤 やはり派閥の領袖クラスにならないと駄目ですか。

藤波 そうそう、そうです。

伊藤 じゃあ、中曽根さんがどう動くかということをお慮りしている。

藤波 そうそう。

佐道 いろいろご相談があったりしたんじゃないですか。

藤波 自分らでも話をするし、中曽根さんともいろいろ話もあったけれど、まあそれぞれの立場というのがあるから、影響力があるとは思えないね。

伊藤 それで実際に鈴木内閣になるわけですが、鈴木善幸さんとはそれ以前からおつき合いはございましたか。

藤波 水産だけだ。水産の大将としての鈴木善幸だ。

伊藤 そういう関係でおつき合いがあったんですか。

藤波 そうそう。

伊藤 でも鈴木さんというのは当時、必ずしも総理総裁候補ではなかったでしょう。

藤波 なかったね。

伊藤 ちょっと驚かれましたか。

藤波 驚いたですね。ホテルオークラで、何の会だったか、大平さんが亡くなった葬式の晩かな、パーティをやった。そのときに鈴木善幸というのが浮かび上がってくるんだな。へえええと思った。

佐道 どなたかほかの人を予想されていたわけですか。

藤波 自分は完全に中曽根康弘を推そうと思っていただけだからね。

そうしたら鈴木善幸というのがずうっと前に出て来たから、おおっ
 と思った。あれは田中角栄と鈴木善幸との関係で決まったんだな。
 佐道 そのときには伊東正義さんの名前がけっこう出たんで
 すが、伊東正義さんは駄目だったんですか。

藤波 いや、中曽根さんは伊東さんならいいと思ってたんだらう
 けれど、伊東さんが受けないのものはっきりしていたからね。

佐道 それはどういった理由からなんでしょう。

藤波 大平に殉じたでしょうね。

伊藤 宏池会というのは中に絶えず対立がありますね。

藤波 あるなあ。

伊藤 なんだか伊東さんと鈴木善幸はいい関係ではないんでしょう。

藤波 ないよね。

■鈴木内閣の成立、党副幹事長に就任

伊藤 鈴木内閣ができて、先生は副幹事長になられますね。

藤波 なりますね。

伊藤 副幹事長というのはだいたい大臣経験者なるポストですか。

藤波 いやいや、各派閥から一人出る。順番が来て、やれというの
 でやるということになったんでしょう。格好もいいしね。

伊藤 でも幹事長と副幹事長とはすごい差があるでしょう。

佐道 筆頭副幹事長という方はいらっしゃいましたか。

藤波 誰だったかな。

佐道 あまり印象にないですか。

伊藤 あれは年功序列ではないんですか。

藤波 だいたい年功序列ですね。

伊藤 幹事長代理というのは、その中から選ばれるんですか。

藤波 いやいや、幹事長代理は別。あのときの幹事長は誰だ。

武田 桜内「義雄」さんですね。

藤波 幹事長代理は——。

伊藤 桜内さんはどういう方ですか。

藤波 派閥が一緒で、私が事務総長で、会長である桜内さんのお供
 をして、よくあちこちに金をもらいに行っていたけれどね。ときどきバツ
 シが裏返っておることがあって、「今日はバツシが裏返っています
 ね。夕べ悪いことをしてきたでしょう」と言ったら、「馬鹿言え、
 おまえはそんなことを言うところからいかんのか。いいことをしてき
 たんじゃない」という。そういう人だったな（一同笑い）。

伊藤 やっぱりそういうときはバツシを裏返すものですかね（笑い）。

藤波 年功の者にはかなわんと思った。年功の最たるものだと思っ
 たね、そのときは。

伊藤 だいぶ先輩になるわけですか。

藤波 ええ、ずっとずっと先輩だ。

伊藤 副幹事長というのはどういう役割なんですか。

藤波 幹事長を補佐する。副幹事長会議をやって、意見調整をする
 んだな。

伊藤 それで各派閥は副幹事長を通じて、党のトップの意見を聞く。

藤波 そうそう。

伊藤 そうすると派閥の会合なんかでは、副幹事長の人か、かくか
 くしかじかと——。

藤波 報告したりするわけだ。

伊藤 大臣経験で副幹事長をやったら、中曽根派の中でもだんだん
 上の方にランクされてくるんじゃないですか。

藤波 そうでしょうね。

伊藤 ましてや新生クラブ代表だし。

藤波 副幹事長で順番に土曜日の記者懇談を担当する機会があって、

それで行ったときに、鈴木内閣で外務大臣をやっていた伊東正義さんが外務大臣を辞めるという話になって、エライことになったなと思った。鈴木さんがアメリカを馬鹿にしてね。そういう発言だった。それが承知ならんというので、伊東正義さんは辞めることになった。そこで受けた感じというのは、中曽根内閣ができてからの一般の感じも強くあったな。中曽根さんの感じだというのは、言ってしまうといかんけれど、中曽根康弘がアメリカに行つて、いろいろなことを言ったりしたりして、右の最たる者だ、右翼だということになったけれど、鈴木さんの裏返しだからね。少し点数をもらおうと思えばね。

伊藤 鈴木さんという方は物事をまとめていく手法の人ですね。

武田 総務会長がすごく長いんですね。

伊藤 だから、前から先生がおっしゃっていた政治家のイメージで行くと、非常にいいタイプの政治家なんじゃないですか。

藤波 そうですね。まとめるということはいいけれどね。

伊藤 鈴木内閣に対しては非常に好意的であったわけですか。

藤波 一般的に私としてはね。その次、鈴木内閣のあとの中曽根内閣としては、鈴木さんをあまり大事にしたとは思わないな。

伊藤 それは大事にはできないでしょう。おれは鈴木とは違うんだ、ということでもアメリカに行つて、やるわけですからね。鈴木さんはそれ自身が面白くないでしょうし。

藤波 そうそう。報告には行つたけれどね、ときどき。いろいろな話をしに行つた。

■伊東外務大臣の辞任

武田 鈴木内閣の閣僚でご印象に残るような方はいらっしゃいます

か。

藤波 まあ、伊東正義さんが辞めたときが一番印象に残っているな。

武田 そのときは先生は副幹事長で何か――。

藤波 土曜日だ。土曜日でこれからいよいよ記者懇談会というときだ。そうしたら、伊東さんが外務大臣を辞めるというのでいま外務省に行つていっているという話で、エライことになったなと思った。それが鈴木内閣では非常に印象に残っている。

伊藤 記者懇というのは幹事長がやるものですか。

藤波 ふつうの日はね。土曜日だから、交替で副幹事長に命令が来るわけだ。幹事長から。

伊藤 おまえらもやれと。訓練だから。

藤波 そうそう、順番にね。

佐道 幹事長付きの記者の人たちとの懇談会ですか。

藤波 そうそう。

佐道 一杯やりながら、とか。

藤波 そうそう。

伊藤 それはオフレコじゃないんでしょう。オフレコなんですか。

藤波 オフレコじゃないでしょうね。

伊藤 じゃあ、うっかりしたことは言えないですね。

藤波 うっかりしたことは言えん。

伊藤 伊東外務大臣の辞任なんていう突発事故があったら、一体どういうふう言っているかわからないじゃないですか。

藤波 わからないね。

武田 こういふふう言えという指示はあるんですか。

藤波 いや、なかったね。

佐道 先生はどうおっしゃったんですか。

藤波 いや、事実だけ申し上げるとこうだ、ということだけだ。

佐道 その事実が何かということなんです、鈴木さんの発言があつ

て、アメリカとのあいだがもめて、そして伊東外務大臣が辞めるというのが経緯ですね。鈴木さんの発言の話なのに（武田 なんて伊東さんが辞めるんでしょう）。鈴木さんが日米関係を同盟ではない、同盟には軍事的な意味がないとおっしゃったんですが、あの発言を耳にされたときには、まずどう思われたでしょうか。

藤波 エライことになったな、と思った。

佐道 それは鈴木さんの発言自体が問題だと思われたわけですか。

藤波 そう、それは思ったね。だけれども、鈴木さんでもそうだし、後藤田さんでもそうだし、そういう年配の人で相当強い力を持った人が、わりあい簡単に平和主義なんだな。そこでハト派が多くなっただけな。

伊藤 藤波さんもハト派じゃないですか。

藤波 それでいいんですよ。それでいいんだ。今度の場合でも絶対小泉は間違っている。私はそう思うな。平和で行かなければいいかん、話し合いが第一だ、と言っていけばいいんです。

伊藤 それはわかりませんが、鈴木さんのような考え方のほうがよくて、伊東正義さんとか中曽根さんのような考え方は、先生とは合わない。無理していると思うな。

藤波 無理していると思うな。

伊藤 合わないんですか。

藤波 合わない場合がある。

佐道 でも鈴木さんの発言は問題だと思われたわけですね。同盟には軍事的な意味がないとおっしゃって、アメリカともめたわけですね。

藤波 それは間違っていると思ったけれど、なるほどこういう年配の人にはこういう面があるんだなということにはよくわかったね。

佐道 伊東さんが外務大臣をお辞めになるという考え方とか気持ちには、どういふふうに思われましたか。

藤波 あっさりしているな、と思ったけれど。さっぱりしていればいいというものでもないな。もうちょっとちゃんと話してくれればいいなと思ったね。

武田 かなりもめましたね。

藤波 ねえ。このあいだ、世界平和研究所の理事会・評議員会というのがあるって、中曽根さんが得々と小泉論をやって、「これでいいんだ」と言った。そのあと順番に、岡崎「久彦」さんとかいろいろの人が話をして、「後藤田さん、どうかね」と言ったら、後藤田が怒ってね。「外務大臣は間違っている。なぜ間違っているかというのと、臨時代理大使を外務省に呼びつけて、日本はこうするからというならまだいいのに、早くサダム・フセインは手をあげる、そうすればみな助かるのに、というようなことをわざわざ言った。そんな馬鹿なことがあるか。そんなことを日本の外務大臣が言っているのは、絶対に間違いだ。あんたはバツジをつけているんだから、もっとちゃんと指導しなければ駄目だ」と後藤田は中曽根さんに言ったね。ああ、平和主義だな、と思った。

伊藤 後藤田さんも平和研の仲間なんですか。

藤波 仲間なんだ。いいねえ。いいですよ。

伊藤 なんか、中曽根派とは思えないですね（笑い）。

佐道 平和主義の平和の考え方には微妙な違いがあると思うんですが、そもそも伊東外務大臣はなぜお辞めになったんですか。

藤波 それは鈴木さんで辛抱できなかったんでしょ。国ということを考えて。

伊藤 総理として仮に思っている、言うべきことではないということですか。

藤波 そうそう。

佐道 抗議の意味があったということですか。

藤波 抗議の意味があったと思うね。

伊藤 でも外務大臣を辞めることはないじゃないかという気もするんですが。

藤波 伊東さんはああいう骨っぽい人だから。世の中がだんだん鈴木さんを馬鹿にして、「暗愚の帝王」とかなんとか言うから、大平がおつたらな、と思ったんでしょうね。

伊藤 そうか、大平直系なんですね。

佐道 一方で中曽根派という派閥と党とのつなぎ役という形の副幹事長でいらっしゃる先生ですが、中曽根派などはかなり元気になるんじゃないですか。あの総理じゃ駄目だから、という意見が出て来たということはないですか。

藤波 それは、「鈴木内閣が」うまいこと行っているよりは、よしよしと思うんだろけれど、日本の国のためを思えば、それでいいのかな、という感じだろうね。

伊藤 そろそろ鈴木さんの任期の終わり頃には、次は中曽根さんという感じがだんだん出て来たんじゃないですか。

藤波 暮れ近くなって総裁選挙の話になる。十月か。

佐道 鈴木内閣ができて、鈴木さんの発言があって、伊東外務大臣がお辞めになるのは八一年ですから、「総裁選挙は」約一年経ってからです。中曽根さんは、ちょっと辛抱してしようという感じなんじゃないか。

藤波 中曽根さんはそうでしょうね。それで行革をやれというから、行管庁長官をやるよ、といって、自分がまとめていくことになるんだけれど、看板に誰がいいだろうということで、土光「敏夫」さんを持ってきたんだ。

正月に中曽根さんから電話があって、「東京にいつ来るんだ」というから、「出初め式もあるし、しばらくゆっくりしてきますよ」と言ったら、「早く出て来い」という。それで東京に行って、中曽根さんの家に行ったら、「今度行政改革をやることにしたが、看板

は誰がいいだろう」というので、「それは、経団連は土光さんがいいと言っているんだから、土光さんなら経済界が全部ついてくると思うし、経済界が動くということは、国民がみんな支持するということになると思うので、土光さんで行きましょうよ」ということを申し上げたのを覚えているけれどね。まあ、なんとも言えん感じで東京に来て、そんなやりとりをしていたのを覚えているな。土光さんを引っ張り出したのは中曽根さんだったからね。

佐道 中曽根さんも本気で行革をやるうということですね。

藤波 やろうとしていた。本気だったね。

伊藤 この前後に、相変わらず新生クラブはいろいろな活動をしていたんだと思いますが、昭和五十五年には私どもの大学の学長、吉村融を呼んで合宿したりしていますね。ご記憶はありますか。

藤波 どこでやったかな。箱根かな。

武田 那須高原ですね。牛尾治朗さん、富塚さん、シャーマン米國特使、そして吉村「現・政策研究院」学長、当時埼玉大学の先生ですね。それらを講師に迎えて、「八〇年代の進路」という政策合宿をしていますね。八〇年九月二十五、二十六、二十七日と二泊三日でしょうか。

伊藤 これはずっと続いているんですね。

藤波 続いているんです。

■憲法、靖国神社のことなど

伊藤 それからもう一つですが、「憲法を考える昭和の会」の座長を先生はおやりになりましたか。何かご記憶はございますか。

藤波 そんなことがあったな。自民党だろう。

武田 そうですね。昭和生まれの百人を超える人々の出席のもとに、

初めて総会を開く。それが八〇年十月です。

伊藤 昭和の会というのは、昭和生まれの人の会、という意味ですか。

武田 そうです。「同じ時代を生きてきた昭和世代が一つのテーブルについて、論議を深めよう」「憲法の問題は、これからの次代を担う昭和世代の責任だ、などのいろいろな意見が出て、この会が生まれました」とあります。それで先生が座長に就任されるんですね。

奥野「誠亮」発言がきっかけなんですね。

伊藤 奥野発言はときどきあるんですけど。

藤波 奥野発言は、憲法改正をやるべきだという話ですね。

伊藤 先生は改憲論じゃないんでしょう。

藤波 違う。いま憲法改正という、国論を二分するようなことをわざわざしなくてもいい、というのが私の意見だ。議論をして、議論を深めるのはいい。

武田 これはこのあとも続いたんでしょうか。

藤波 何回かやったんだな。

武田 あとになると出て来ないですね。次の年には、「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」ができて、これは会長が竹下さんで、先生が副会長ですね。

藤波 そうですか。

伊藤 忘れていきますか。

藤波 忘れてるわけじゃないけれど、そうかな。

伊藤 それは「ふじなみレポート」でしょう。

武田 そうです。八一年三月、自民党本部で設立総会を開いていますね。

藤波 このあいだある人が、「竹下さんというのは面白い人だと思っただけで、なぜ竹下さんになったのかな。安倍さんでなしに宮澤さんでなしに、なぜ竹下さんだったんですか。金ですか」というから、「いや金じゃない。田中さんの場合は金という面もあったけれど、

竹下の場合は、たぶん知恵だろう。人は知恵に集まったんだろう」「ああ、知恵ですか」「そんなに高尚な大きな知恵ではないけれど、身の回りのことをああだこうだというのは、絶対に竹下さんの知恵だとおれは思うよ」という話をしたんだね。私が副会長になったのも、竹下会長の知恵の一つでしょうな。

伊藤 実際にたくさんの国会議員と一緒に靖国神社参拝をされたわけですか。

藤波 ええ。

伊藤 先生はだいたいずっと靖国神社参拝をされているんですか。

藤波 そうです、やっています。

伊藤 総理の公式参拝は憲法違反だと言われて、靖国神社参拝についていまの総理も中国からだいぶやられていますけれど。

藤波 私はやり方によるんじゃないかと思うな、靖国問題は。

伊藤 これはなかなか厄介な問題ですね。

藤波 厄介だな。これで施設をつくるんですかね。

伊藤 いや、どうなりますか。そんな新しいものをつくって、誰が行くんですか。

藤波 ねえ。

武田 この「国会議員の会」というのは、やはり靖国法案を通そうという目的の会なんじゃないか。

藤波 そうだろうな。

伊藤 先生は靖国神社はどうなればいとお考えですか。

藤波 今のままでいいんです。少なくとも国民のみなさん方が靖国神社を鎮魂の場所だと思っているわけだから。国のために死んだ人の場所だと思っているんだから、別のところにつくったらおかしいです。解決ならん。

伊藤 一時の糊塗ですね。

藤波 そう。中国なんて、あのころ孫平化がやってきて、どうのこ

うの言ったけれど、「靖国神社の話は、新聞記者にもうちの秘書官にもみんな内緒の方がいいから、内緒にしよう」といって、「福田家」の女将に話をして夜部屋を貸してくれと言って、十一時ぐらゐから孫平化と話をしたのを覚えてるな。それは中曾根内閣の頃だな。中曾根さんがお参りに行ったその晩だ。どうって言うことはないよ。どうって言うことはないと思つたな。ちょっといまは、どうって言うことがありすぎるな。中国もいかなだろうな。政治というのは、ごちゃごちゃしたらいかんわ。

九段の議員宿舎で記者懇談をやっているときに、「隣の部屋で亡命という話があるけれど、亡命なしにしようや」という相談をしていたな。亡命騒ぎがあるけれど、記者懇談をやりながら、ウイスキーを飲ませて、別の部屋で相談していた。中国人の亡命騒ぎがあったときだ。

武田 このころありましたね。

小池 ありましたね。一回亡命すると騒いで、帰ったという話ですね。

藤波 ええ、それをどう扱うかという話をしていたわけだから。新聞記者のところでもそんな話をしたらエライことになる。隣の部屋で話ができたということは、ありがたいことだった。やり方によると思うな。

伊藤 藤波先生は、ご自分が総理になられたら、靖国神社に参拝なさいますか。

藤波 行きますね。

伊藤 中国からワーンと言ってくる。

藤波 相談して決めたんだからな。

■アメリカ訪問の目的

伊藤 ちょっと話が違いますが、先生は五十六年七月にアメリカに行かれますね。これはどういう資格で、どういう目的で行かれるんですか。

藤波 次は中曾根だ、と言いに行ったんだ。

一同 えええ！（驚く）

佐道 この段階で、ですか。中曾根さん「が総理になるのは」はその翌年の暮れですが。

藤波 鈴木内閣だな。渡辺秀央と行ったんだ。東力ひがしちかに案内してもらってブルッキングス研究所に行った。

伊藤 なんで東さんなんですか。

藤波 中曾根派だから。いま「東氏の小選挙区には（和歌山県第三区）二階「俊博」がいるからね。

伊藤 向こうに人脈があるんですか。

藤波 あるんだ。東力がいくと、ホワイトハウスなんか大手を振って歩けた。

武田 先生はすごい面々に会われているんですね。アミテージ、ポールドリッジ、トレザイスに会ったりしています。なんでこんな人に会えるのかと思つたんですが。

藤波 驚くべき人脈だった。

伊藤 これは誰かに命ぜられて行ったんですか。

藤波 いや、自分で勝手に行った。まったく勝手に行った。どこからも金をもらわない。自分で飛行機の切符を買って行った。

佐道 なぜ行こうと思われたんですか。

藤波 アメリカに、次「日本の総理」は誰だということを決めな

いと、日本はならんものだから。

伊藤 じゃあこのときは、中曽根さんになると思っていたんですか。

藤波 なった方がいいと思っただ。

伊藤 「hope、ですか（笑い）。

佐道 それは先ほどの鈴木さんの発言で困ったことだと思われたところから来ているわけですか。もう中曽根さんに次をさせないところから来ているわけですか。

藤波 それもあるし、もっと中曽根康弘が好きで、次は中曽根にやってもらおうということを出かけていった。

伊藤 じゃあ中曽根の売り込みじゃないですか。

佐道 いままで話だと、そんなに中曽根さんがよかったのか。もうちょっと距離を取っておられたような感じがしたんですが（笑い）。

藤波 政治の世界というのは、学者の世界とはまた違うからな（一同笑い）。理屈通りには行かないんだ。

伊藤 東力さんは——。

藤波 父親が三重県の南牟婁郡で教育長をやって、小学校の校長さんでもやったのかな。隣の選挙区だから。いま二階に完全に押さえ込まれて不遇になっているけれど。

平松 「東力氏は」ももとはお役人ですよ。

藤波 野呂恭一の娘を嫁さんにしたんだ。

佐道 防衛庁長官をやられていますね。

藤波 あれは中西「啓介」だ。

平松 向こうから大学を持ってきたりしましたね。

伊藤 向こうに人脈があるというのは、向こうに留学か何かしていたんですか。

藤波 大蔵省の役人をしていて、大蔵省から行ってブルッキングス研究所にいたんだ。

武田 研究所の所員だったんですね。

伊藤 そこで人脈をつくったんですね。

武田 「ふじなみレポート」を見ると、自分で正しい日米関係を築きたいと書かれていますね。向こうのすごい面々なんです、これだけの方に会われるのは、先生ご自身も初めてですね。

伊藤 初めてです。アーミテージが国務省の日本部長。

佐道 次官補ですね。

武田 ジョンソンというのは、アレクシス・ジョンソンですか。元CIA長官コルビーにも会われていますね。

藤波 ああ、そうだ。

佐道 会われた方々の反応はいかがでしたか。

藤波 中曽根で行こうということになったんだ。

伊藤 中曽根ウェルカムですか。

藤波 そうそう。

佐道 行かれるにあたっては、ことわって行かれるわけですか。

藤波 行かない、行かない「ことわってはいない」。

伊藤 中曽根さんに黙って、ですか。

藤波 黙って。

武田 帰ってきて報告はされるんですか。

藤波 報告なんかしない。事柄から行けばする必要はない。渡辺君やっておけと言ったから、渡辺秀央がやったかどうか知らんけれど。

非常に残念なのは、トシリキと言っていたけれど、東力のことだ。

トシリキは渡辺派になって、渡辺美智雄の自分になった。大蔵省にいたから。あのときに世話になったことを思うと、私も渡辺秀央も忸怩たるものがあるな。それは世話になったよ、人間関係で。いまはあんなにアメリカに人脈があるというのはいないだろうな。

伊藤 中曽根さんは昔からアメリカには人脈があるでしょう。

藤波 みな知っているな。

武田 東さんはそれ以上にあつたわけですか。

藤波 あった。

武田 中曽根派の中で、アメリカ人脈を持っているということ有名だったんですか。

藤波 そんなに知らないだろうな。私らは知っていた。

平松 役所の頃から、「アメリカの人脈に」強いという話はあったみたいですね。テンプル大学の日本校を持ってきたのも彼じゃないでしょうか。

伊藤 テンプルは日本に持ってきて、一応成功した。

武田 結局、中曽根さんの売り込みはかなり効果があったわけですか。

藤波 アメリカについていえば、あったな。

伊藤 非常にいい反応でしたか。

藤波 いい反応だった。

佐道 先生個人としても、お会いになった方々とは、あとで関係が出てくるわけですか。特に官房長官をやられたときに。

藤波 そうですね。

伊藤 じゃあご自身の顔見せもあったんですね。

藤波 いやいや、そんなことはない。

伊藤 でも結果としてそうなったでしょう。

藤波 結果だね。礼回りに東南アジアに行ったな。中曽根内閣が終わってから。国対委員長が終わって、事務総長だ。渡辺秀央や、名古屋の片岡武司、八王子の石渡「昭久」と一緒に、礼回りに行つてこようというて、礼に行つた。五年間世話になった、というてね。これはシンガポールと、インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピンと行った。

古い時代にインドネシアの一族郎党を養っていくのに金を貯めたというて、人民にやつつけられた大統領、スハルトが家に来いというので、家に行つた。「五年間世話になってありがとう」と言った

ら、「いやいや」といった。そのときに、「太平洋を囲む国会議員が集まって、議員連盟をつくって、そこで新しい政治のあり方や安全保障のあり方を研究しよう」といったら、スハルト曰く「いやそんなものは早い。国によって文化がみな違うんだから、教育を中心にして、もとの人間関係をつなげなければ駄目だ」と。こいつはえらいやっちゃな、と思つたね。一族郎党を食わしていくというが、そういうことになっているものだから。朝鮮もそうだけれど。こいつはアジアにある沼地の一番奥に住んでおるゴトヒキ「紀州でヒキガエルのこと」みたいな男やな、と思つた。ギョロツとした目をして、「人間関係を大事にしなれば」と言つたね。それは覚えてい

る。

伊藤 さっきお話がありました臨調の話ですが、中曽根さんはこれを一所懸命おやりになって、実際に中曽根内閣になってからいろいろなことをおやりになるわけですが、先生はこれには直接には関わらなかつたんですか。

藤波 国鉄の改革が台風の目になったわけで、そういう意味では関わっているね。このあいだ亡くなった電電公社の初代総裁、真藤「恒」さんなんかは、官房長官をやっている頃に、総理官邸に行つてくるといつて来て、私の部屋で二時間ぐらい遊んで、「もう帰りますからな、官房長官」というから、「まあそんなこと言わないで、せっかく来たんだから総理大臣に会っていけ」と言つたら、「いや、総理大臣に会わなくてもいい、官房長官に会って話せばいいんだ」と言っていたことを覚えてる。そんな独特な人間関係が一人ひとりにあった。中曽根さんは大事だと思つていたけれど、好きな人も嫌いな人もおるからね。

伊藤 やはり嫌いな人へのクッション役ですか。

藤波 それは大事ですね。

伊藤 第二次臨調そのものには、副幹事長としてはコミットするわ

伊藤 ではないんでしょう。外から見ている。
藤波 そうそう。あれは役所仕事だから。

伊藤 あとで官房長官になると、いろいろな形で直接的な関係が出てくるわけですね。

藤波 そうそう。

伊藤 ではまた官房長官になってから少し第二臨調の話を伺います。

■ 中曽根内閣へむけて、田中角栄との関係

伊藤 「質問要項の」最後のところに、「中曽根政権に向けてどんな活躍をされましたか」という質問があるんですが、さっきの話で済んでしまいましたね。もうちょっと経って、次の政権が本当に中曽根さんに来そうかどうかというところは、どんなところから感じられましたか。

藤波 なんのときだったか、鈴木内閣の顔見せの会合で、もう鈴木さん、辞めそうだった。辞めて、この次は中曽根だという感じが出たな。

伊藤 そうですか。それは情報として入ってくるわけですか。

藤波 そうそう、情報として入ってくる。

伊藤 中曽根さん自身もそういうことを言うんですか。

藤波 中曽根さんは言わない。

伊藤 まあ、自分のことだから言わないだろうな。

武田 中曽根派としては言いたい、次は中曽根さんだと。

藤波 そうです。

武田 それは言いたい一致した意見でしたか。

藤波 そうですね。

伊藤 しかしこの段階で言うと、田中派が同調してくれないと総理

になれないじゃないですか。

藤波 なれない。

伊藤 先生は田中派とのパイプはあるんですか。

藤波 田中さん本人とある。田中角栄という人が電話をかけてきて、「いま中曽根を探したけれど、いないから藤波を探して、これだけ伝えておけよ」と言ってきた。「ああそうですか」といったことを覚えてる。

伊藤 ということは、田中さんとは前からおつき合いがあったわけですか。

藤波 根本龍太郎という人がいた。広川弘禪派において、それから河野派に来たのが浜地文平さんだ。そのときに根本さんも同じようになっただ。

武田 根本さんは元広川派なんですか。

藤波 そうだと思うよ。広川さんは幹事長をしていたからね。初めのころ、「私が」衆議院に出るとき、公認が取れない。岩下かねという人が強くて、それは佐藤派だったから。そのときに根本さんが私を連れて、福田赳夫と田中角栄のところに行っただ。公認してくれと言ってね。それからの縁だな。

伊藤 じゃあかなり古くからの縁なんですね。

藤波 政治家を出発するときからですね。

伊藤 じゃあやっぱり反田中で新自由クラブというわけにはいかないですね。

ちよっと時間を過ぎました。次回はいよいよ中曽根内閣に入りますので、よろしくお願ひします。では来月またよろしくお願ひします。

一同 今日はありがとうございました。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第7回

日時：2003年5月7日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（元政策研究大学院大学助教授）

川越 美穂（東京大学大学院博士課程）

平松 大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■政策研究院発足時のこと

藤波 入れてもらってもいいんですが、政策研究大学院「大学」ができたときの話をします。私が伊勢に帰っているときに、吉村「融」先生から電話があって、「政策研究大学院が発足することになりました」という。「それはいいなあ、ありがたいなあ」といって電話で一緒に喜んだ。そのときに、「中曽根さんも来てくれるし、竹下さんも来てくれる」という話だった。だから「俗物がみな集まるのやな」と言った。政策研究大学院というのは何が魅力かといったら、アカデミックな雰囲気の魅力だ。アカデミックな雰囲気のないものは文部省の機関としては大失敗だ、ということをおぼろげに思っていたので、そのことを申し上げた。

そして祝辞の順番はどうだということで、「祝辞はしゃべらすことではない」と言った。私が言ったのは、「町村「信孝」文部大臣が来たら文部大臣に話をさせて、その次に教職員を代表して吉村先生が話せばいい。二人で充分や」と私は伊勢で言ったんだ。「ああそうか」ということでした。そういうことがあったことを、ちょっと覚えておいてもらっておいた方がいいと思うので、どこかに入れてもらったら結構かと思えます。

伊藤 そうですか——。中曽根さんと竹下さんを引っ張り出したのは、私です（笑い）、まことに申し訳ありません。俗物を——。

小池 アカデミックな雰囲気を——。

藤波 ぶち破ったんやな。へえ。そんなことがあったんですね。

伊藤 それは全然知りませんでした（笑い）。

藤波 知らんこともあると思う。

伊藤 私の責任ですね。

藤波 俗物の固まりだ。

伊藤 いや、先生、中曽根派じゃないんですか。

藤波 政策研究大学院のためを思ってそう言ったんだ。

伊藤 それは学長によく言っておきます。

■行政改革について

伊藤 よろしいですか。前回お話を伺ったあとでいろいろなものを読んでみまして、副幹事長時代に、行革の問題にずいぶん踏み込んでおられるんじゃないかという気がしたんです。この前さりと終わりましたが、早稲田四人組「三塚博、海部俊樹、藤波孝生、小淵恵三」のことにチラッと触れましたね。これはお借りしたものです。『新政経』の一九八二年四月号に「行革国会を振り返って」という文章を書かれています。これを読ませていただきましたら、行革国会をどういうふうにやったかということをおぼろげに詳しくお話になっておられるんです。

※『新政経』：新政経研究会（会長は石原慎太郎）の発行する雑誌。新政経研究会第一五六回懇談会における藤波氏の講演を収録している。

この中で、藤波先生はなかなかいいお言葉をお使いになるな、と思ったんですが、例えば「財政状況が非常に悪くなっちゃった。『五十六年度末で』国債の発行残高が八十二兆円。国民一人当たりになっていますと七十万円借金をしている」。これはいまもって大きくなっています。そこで「重い借金証文を風呂敷にいっぱい抱えて坂道を登っていくようなもので」、これをなんとかしなければならんとおっしゃっています。

そこから以下ずっと読んでいきますと、まさにいま小泉さんが言っている構造改革なんですね。それが緊急の課題だとおっしゃってお

られます。それから行政の許認可事業とか、行政そのものが公務員の数をどんどん増やしていく、自己増殖する。「行政そのものが自分たちの仕事を肥大化させていくという」行政の本能からいっても、戦後ほとんど手をつけずに行政が肥大化を続けてきたという事実があるわけでありまして、これに思い切った手を加えなければいかん」とおっしゃっているわけです。

それでちょうど五十七年度の予算編成を増税なき予算ということを始められて、実はもっと大きな見取り図を描いて順次進めていくべきところを、残念だけれど各論から入ってしまったという言い方をされております。そういうことを非常にたくさんおっしゃっているんですが、ご記憶として、いかがでしょうか。議会の中でずいぶんおやりになっているような感じですが。

藤波 副幹事長時代——、中曽根内閣ができる前ですね。

伊藤 そうです。中曽根さんが行管庁長官だったと思いますが、行革国会です。

藤波 行政管理庁長官をやっておる頃に、中曽根さんはいたい行革に関しては見取り図を書いていたんだな。それを言ったんだと思います。一緒に取り組んでいましたからね。

伊藤 先生ご自身が、「この間うちから瀬島さんであるとか、牛尾さんであるとか、臨調で御活躍いただいている皆さん方といろいろなお話をしているんです」とおっしゃっています。瀬島「龍三」さんの名前がときどき出てくるんですね。ですから第二臨調と連携を取りながらいろいろおやりになっていて、国会で行革関連法案を通過させるわけですね。これは入口だとおっしゃっています。

あと、総理とは孤独である、これをバックアップする体制をきちんととらなくてはいけない、ということもおっしゃっています。それから特殊法人とか、そういうものの改革もしなければならん、と言っています。そうすると、いま小泉さんが言っていることとほと

んど同じなんですね。そういうことをやって、「二十一世紀は、バラ色に輝く二十一世紀の日本ということ、われわれはいつも若い人と呼びかけている」とおっしゃっています。残念ながら、これは全くそうならなかったということでありまして、この行革はなかなかうまく行かなかったんですね。

ただ、ここで行革ということを書いて始めて出発点になったということ、行革法案が民社・公明・新自連の賛成で、付帯決議も何もつけないで、修正もしないで通過した。こういう体制はいままではいわゆる五五年体制と違うんだということ、ここで強調されておられます。ということをおっしゃって、このときのことをいろいろ思い出されませんか。

藤波 中曽根さんもそうだったし、私もそうでしたが、そのころは行政改革ということで突っ込んでいくと向こう側に森が見えてくると思っていたら、アメリカという大きな山がそばにあって、その影が大きかったんでしょう。中曽根内閣の出發をしてみたら。だから行政改革というものは、結果として国鉄の改革にしても、規制の緩和にしても、やったことになるとなるけれど、それはアメリカを見ながら、ヨーロッパを見ながら、ということになったという違いがあるんじゃないですかね。鈴木内閣のときに、中曽根さんが行政改革をやるうといい、藤波孝生も若い連中と話して行政改革をやるうと思っていたけれど、なかなか思うように進まなかったというのは、一つはアメリカとの関係、外交問題というのが非常に大きな問題になっていったということが関係あるような気がするな。

伊藤 行革とアメリカは関係がありますか。

藤波 外交問題をどう解決するかということが頭にあって——。

伊藤 行革が後回しになったということですか。

藤波 そうです。一般論としてね。

■官僚主義の今昔

伊藤 先生はこの前シルバースターのことをおっしゃいましたね。

ここでもちょっとシルバースターのことをお書きになっているんですが、これは労働省だけの問題ではなくて、文部省その他に関わる問題で、いろいろ総合的にやらなくてはいけない。「相当努力をしてみたわけでありませうけれども、行政が縦割りになっていて、それが全部縄張り争いで、自分たちの所管のことは本当に隅々まで守ろうとしますけれども、自分たちの所管外のことになると責任を回避して触れようとしなさい」ということで、なかなかうまく行かないんだという話をされているんです。この前は非常にうまく行ったようなお話をされておられたようでしたが、どうだったんでしょう。

藤波 労働省としてはやった、というつもりだったんでしょう。

伊藤 やはり縦割り行政を打破しなければいかん、ということをこの中ではずいぶんおっしゃっているんです。それはいまま言われていることなんですね。

藤波 そうですね。行政というのは横暴というのか、国民を大事にしようとしなくてやっているからな。

伊藤 この中でも、「日本の国はなんといいましても官僚王国でありまして、朕は国家なりぐらいのつもりでみんなそれぞれががんばっている」とお書きです。先生の表現は面白いですね（笑い）。

藤波 わかりやすいでしょう。

伊藤 わかりやすいですけど、じゃあどうするんだ、ということですね。

藤波 そうそう、「官僚は」朕は国家なりだ。

伊藤 いま行革をやらなかつたら、「恐らく二十一世紀までにもう

行革をやるチャンスは二度とこないだろう」と言っておられるんですね。その二十一世紀が来てしまいましたね。

藤波 中曽根内閣が終わるときに、「次に行政改革をやるのは十年先だ。いまは国鉄改革だけをやった。この次にやるときは道州制をやるよ」と言って終わったんですな。道州制なんていうことは誰も言わないわ。市町村合併だ。道州制は出て来ない。県議員が強いんだ。

伊藤 一番抵抗しているのは役人ですか。

藤波 抵抗もしているし、抵抗だけではなしに、朕は国家なりだな。朕は国家なりは抵抗はないな。

伊藤 政治家がかなわないということですか。

藤波 人材は官僚から入ってくるんだ。自分のことを言っておかしいんだけれど、例えばリクルートの話を例にとると、一審で私は無罪になったんだ。五年半かけて、百五十一回の公判をやった。これは無罪だわと自分で思っていた。それで無罪になった。二審以上になると、ちょっとおかしいからきちんと書いておくよと言う。内緒の話だけれど、裁判長がきちんと書いておくよと言ってくれたという話を聞いた。二審で何の新しい事実もなしに有罪になった。ああ、そうかと思った。

そのころに、『芦田均日記』を読んだ。芦田さんは総理大臣で、自分は何もそんなことをしていないと「書いている」。芦田事件「復興金融庫融資による昭電疑獄事件」というのは、進駐軍が二つに割れて、二つの派閥があって、片方の利益を取るために片方をやっつけなければいかんというので、芦田均をやっつけたということだった。

自分「芦田」は、なんという人だったか知らないけれど、官僚の世界を退いて弁護士をやっている友人にそのことを言ったら、「おれは担当じゃないからなんとも言えないよ。しかし君の事

件をちゃんと審理するように、裁判長に立派なやつをつけるようにする。それで御免してくれ」といってその人は逃げた。逃げたけれど、裁判長は事実関係に基づいて無罪を蘭明した。

だからそのとき、こうやって官僚主義というものをつくっていくんだな、と思った。裁判長は東大か京都大学かどっちかだな。なるほどな、日本の官僚主義というのはこういうものか、と思った。最近の話です。最高裁の判決が出たような話だ。もういっぺん見てもようと思って、何回も『芦田均日記』を読んだけれど、なんという人だったか、違うところで読んだのかもわからんなと思うけれど、官僚主義というのはエライものだ。

このあいだ国土交通省の上の者と飯を食った。私のことは何も頼まない。ただ、飯を食うだけだけれど、このごろ役人は物を言わなくなったな。世の中は、悪いものは官僚だということになっているから。政治が責任をとってやればいいんだけれど、政治は責任を取らんし、官僚は余計黙ってしまふんだな。もっとものを言ったらどうだと思ふ。

十四、五年前の中曾根内閣のときには山口「光秀」事務次官以下、大蔵省の連中はだいたい国のことを考えて、こうしたらいい、ああしたらいい、と言った。最後は間接税を強化しなければいけないので、結局中曾根内閣は馬鹿を見たけれど、しかし、昔は物を言ったんだ。山口さんが来たなら、誰よりも先に総理に会わせなければいかん、「総理大臣、山口さんの意見を聴きなさい」といった。その都度、主税局や主計を何人か連れてくるから、「その連中の意見をよく聴いて、やりましょう」といって、私も後藤藤田も中曾根康弘も経済のことはわからんものだから、大蔵省に役人に全部任せて、やった。いまは物も言えないのか、言わなくなったのか。官僚主義と言うけれど、昔の官僚主義と違うんだな。二十年ぐらい前の官僚主義といまは違うんだ。物を言わなくなった。物を言う者を集める、と言っ

ただだけれど。あのときにいっぺん、物を言うやつを集めなければいかんと思っただけれど、役人は物を言わなくなった。自分のことだけだ。自分のところが持っている公社・公団を守ろうということだけだ。権益擁護に走り回っている。

昨日の新聞だったかな、補正予算ではないか、石原伸晃が言うか言わんかぐらいのところまで来ているという話は何だったか。各省の事務次官以下に任ずという話をしたら、事務次官が抵抗してどうにもならん、という話があったな。すぐ忘れてしまふんだ。「麒麟も」老いれば駄馬に等し」と言うけれど、よう言うたな。

伊藤 そんなことはないと思いますけれどね。

藤波 それは役所を守るのは事務次官以下の責任だからな。それは権益を守るわ。縦割りもいところだ。そのあと、石原大臣がそれぞれの大臣と話をすることになっていっているんだけれど、それでもなかなか簡単にはいかんだろうと思っで見ているんだけれどね。

伊藤 そうですか、やはり権益を守ること重点が移っているんですね。

藤波 縦割りですね。

伊藤 行政改革のことで、「藤波さんが」副幹事長のときの行革国会で、金丸さんが委員長の特設委員会、このあいだお話があった早稲田四人組ということでおやりになるわけですね。それで自民党だけではなくて、民社、公明、新自連に賛成に回ってもらう。だから社会党と取引しないで法案が通る。

藤波 特に公明ですな。公明というのは、こうと決めたらそれで決まってくるんです。

伊藤 こうと決めさせるのが大変じゃないですか。

藤波 大変だけれどね。ほかの党は決まらないんだもの。特に社会党は決まらないもの。

伊藤 社会党は初めから反対に決まっているから、いいんじゃない

ですか。

藤波 公明は決まるんだ。

伊藤 民社は大丈夫なんでしょう。

藤波 民社は大丈夫だ。決まらんけれど、大丈夫だ。

伊藤 民社、公明ですね。新自連というのは新自由クラブのあとですか。

藤波 あとでしような。それも大丈夫だ、自民党と一緒に。

伊藤 問題ないですね。それで過半数を取ってしまう。

藤波 取る。

伊藤 だから一党派だけの独走ではない、という形で国会運営ができる。

藤波 そうですね。

伊藤 このことを先生は非常に強い勢いで、今度の成果だとおっしゃっていますね。

藤波 ああ、そうだな。

■義務教育制度廃止論

伊藤 あと、これは面白いなと思ったのは、義務教育制度をやめたらどうかという提案をされているんですね。みんな同じ形の人間形成をやるというのは無茶だ。明治時代ならいざ知らず、今日においては「義務教育というのは思い切って全廃してしまっ、いろんな学校に競争させ」たらどうか、とおっしゃっているんですね。

藤波 面白いね。

伊藤 これは文教関係の議員さんの集まりとかで、そういう発想があったわけですか。

藤波 そのときはそうですね。そういう意見も出たんだと思うね。

伊藤 いまでもそうお考えですか。

藤波 いまでも思うな。

伊藤 これは面白い意見だと思うんですが。

藤波 例えば、イギリスに行くとき先生が教壇に立つ。日本の先生なら「皆さん」と言うが、「皆さん」とは言わない。それは一人ひとりみな違うからだ。進歩発達の歴史が違う。だから「皆さん」とは言わずに、一人ひとりがどうやって勉強するかをじっと見ているんだ。それくらい違うんだ、ということを選挙で言ったことがある。それは面白いといって、選挙を一所懸命にやってくれた人がおる。だけど、簡単にはならん。

日本教育新聞の高橋さんの、何の会だったな、お祝いの会か何かで、初中局長、のちに事務次官になったやつがいたな。佐藤禎一の下に。

平松 「いまの」ひとり前の事務次官ですね。

※佐藤禎一氏の次の文部事務次官は小野元之氏であるが、小野氏は初中局長を経験していない。初中局長と事務次官を経験しているのは、佐藤氏の前の事務次官である、井上孝美氏である。

藤波 私が何を言ったのか、事件のあとだった。おそろおそろ言ったんだ。中学をなくせと言ったのか。中学の義務教育をやめると言ったのか。

伊藤 小学校だけでいいと。

藤波 なんでそんなことを言うかというのと、「中学の二年生から三年生になると、退学はできないと思うから、甘えるんだ。二年生から三年生になったら、扱いに困って、先生が手を焼いてしまう。何をやってもしょうがないので、ただ見守っているだけだ。それで早く卒業させると言っているだけだ。そんな馬鹿なことがあるか。教育は一所懸命やらなければならん。そんな退学もできないような中学はなしにしろ」という話をしたら、「エライことだ、藤波さんが

中学はなしでもいい、と言いつ出した」といって、面白い話題になった。それで本当に役所中が大騒ぎになったことを覚えている。だからなかなか、規制改革とかいろいろ言うけれど、改革なんてやれないね。そのままだ。そのときにそう思った。

伊藤 でもそれをやらないと、どうにもならなくなってきているわけですね。

藤波 どうにもならなくなってきている。大臣の値打ちがないこと見ろ。私は兵庫県で小学生が中学生に殺されたときに、文部省に電話を入れる、と秘書の水田に言うた、「私はこんなふうで（喉の調子が悪い）、向こうが聞こえんというといかんで、おれの代わりに文部省に電話しろ」。「なんて言うんですか」というから、「すぐに大臣は行け。これはただ小学校に犯罪者が来たという問題だけじゃなくて、日本の教育がやつつけられているんだ。文部省全体がアホみたいなものだ、だから、すいません、悪うございましたと大臣がお線香をあげに行け」と言ったんだが、国会の都合で行かなかった。アホみたいな話だ。今の外務大臣にしても、文部大臣にしても、法務大臣にしても、頭はいいかもわからんけれど、大臣に閃きがないな。だから役所の中で、「事務次官の上にもう一人事務次官がおるのと一緒や」と言われているんだ。いい表現だ、面白い表現だ。

伊藤 そうですね。大臣不在なんです。

藤波 大臣不在なんだ。

伊藤 大変なことをおっしゃっていますね。

藤波 そうですか。

伊藤 まあいいです。これは別に今すぐ発表するわけではないですから。

藤波 それはいいですよ。そう思うなあ。閃きがない。

■瀬島龍三氏との関係

伊藤 先生、瀬島さんとか牛尾さんとかとしゃっちゅう話し合っているというところをここでお話になっていますが、瀬島さんとはこのときですか、もっと前からですか。

藤波 もっと前からだね。後援会の大会のときに伊勢に行ってもらったんだ。私の藤波会の設立何周年だったか、学習院で亡くなった（佐道 香山「健二」さん）香山さんと一緒に、瀬島さんに行ってもらったことがある。二十年だったか。二十年だったら昭和四十二年か、そんなものだな。

伊藤 じゃあ、前からのつき合いがあるわけですね。

藤波 そうです。前からのつき合いがあった。

伊藤 それは中曽根さんの関係ですか。

藤波 いやいや、そうじゃない。

伊藤 ご自分の直接の関係ですか。

藤波 直接の関係だな、瀬島さんは。

伊藤 牛尾さんはまた別なんです。

藤波 日本JIC、日本青年会議所の会頭をやっていたから。私は伊勢青年会議所の副理事長止まりだ。青年会議所で一番偉いのは牛尾治朗だと思ったから。

伊藤 じゃあ、国会議員になられる前からですか。

藤波 前からだ。

伊藤 それから、土光「敏夫」さんはどうなんですか。

藤波 土光さんは、一般的には存在を知っていたけれど、直接知っていたわけではない。私は桜田武「昭和四十九年五月〜五十四年五月日経連会長」だった。桜田武という人は、藤波孝生をずいぶんか

わいがつてくれたよ。あの人が死ぬときまでね。

伊藤 桜田さんは四天王と言われた一人ですね。

藤波 一人だ。日清紡だね。私の顔を見て、「おい、おい」といつても話してくれた。

伊藤 先生とはだいぶ歳が違いますか。

藤波 ああ、ずっと違うな。人生の大先輩だったな。偉い人がおるもんやな、と思った。

伊藤 いろいろな場面で桜田さんとおつき合いがあったんですか。

藤波 ありましたね。

伊藤 いろいろな面で援助もしてくださいましたか。

藤波 金はあまり持っていなかったんじゃないかな。ポケットマネーはね。名前でもよかったんだな。

伊藤 あとこの話の中で、外交強化の議員連盟という話をされているんですね。それは石原慎太郎たちと一緒に、外交官を増やせという運動をやった、ところがなかなかそれは難しかった、という話もされています。一方で行革だと言っていて、他方で公務員を増やせということですから、これはなかなか難しいけれど、何が一番大事かというところ、外交を強化することが一番大事だ、という話をされているんですね。

藤波 そうだな。

伊藤 いまのような状態で、国外の情報というものが商社などを通じて早く入ってくる、外交ルートは遅い、ということもおっしゃっていますね。これは言い出しっぺは石原さんあたりなんですか。

藤波 いや、新生クラブで議論しているあいだに、そういうことになったんだろうな。

伊藤 石原さんも新生クラブなんですか。

藤波 いや違う。石原慎太郎は青嵐会だ。中川一郎だ。

伊藤 これ自体に、「石原先生は、私が申し上げるまでもありません

んが、自民党の、新しい保守党、近代的な保守党の旗手として御活躍をいただいております、いろんな面で私どもも御指導を受けているわけです。同じ昭和七年生まれでありますが、人はよく、どうして同じ年に石原慎太郎と藤波孝生が生まれたんだろう。またこんなに違った政治家がよく同じ年に生まれたものだと。何月にお生まれになったか知りませんが、星回りとは干支は全然違うんじゃないかと思っております」という言い方をされております。石原さんは「大都會の真ん中で大輪のダリアのような花を咲かせる。私などは、田舎の二流河川の河川敷で上ばかり見ている月見草みたいな者であります」と、面白い表現をされるんですね。でも石原さんとかかなり一緒にいろいろやったということですね。

この前のお話だと、新生クラブと青嵐会ということなんですが、事柄によっては、石原さんと一緒に例えば外交官を増やせ、というようなことをやっておられる。これはご記憶にありますか。

藤波 記憶にあるな。なにかそんなこと言ったことがあるな。やっぱり外交を強化しようというのは新生クラブです。いろいろ議論しているあいだにそうなった。

伊藤 そういう仲間に、議会の中では石原さんも入れたということですかね。

藤波 定まった仲間とだけしか物を言わん、ということではないからな。

伊藤 この前、副幹事長の時代はスツと通り過ぎられたので、これを読んでいたら、冗談じゃない、いろいろな話があると思ったものですから、ちょっと伺いました。

■中曽根内閣成立に尽力

伊藤 それでこの質問事項の中曽根内閣ということになるんですが、

先生は官房副長官、官房長官と歴任されるので、非常に思い出も多いでしょうし、一回ではとてもではないけれど済まないと思いますので、ぼちぼちとお話を伺っていきたいと思います。

前回、中曽根内閣ができる前にアメリカに行って、中曽根さんをさかんに売り込んだというお話がございました。それで、「お借りした資料の中に」官房副長官になられてからの「月曜会レポート」〔第一一〇〇号〕というものがあります。「国民政治研究会」が出している「月曜会レポート」というのは、ご記憶ですか。

藤波 頼まれて講演に行ったんでしよう。

伊藤 どんな組織だかご存じですか。

藤波 場所はどこにありますか。

伊藤 千代田区永田町二一〇―二、TBRビルですね。

平松 部屋番号も書いてありますか。

伊藤 八〇三です。

平松 新生クラブじゃないですか。

藤波 新生クラブだな。そこに来てもらったんだね。

※TBR八〇三号室は新生クラブの部屋ではない。

伊藤 来てもらったんじゃないなくて、先生が講演しているんですよ。

藤波 藤波さんの事務所ではないんですか。

藤波 国民政治研究会か――。

伊藤 その中で、「おとし私がアメリカでいろいろな話をして歩いたときに」云々という話がありました。「中曽根康弘という政治家は天下を取るか」という質問をずいぶん受けました。それに對して取ると思いますが、鈴木さんの次は中曽根だと思えますよ、少しこちらとしてはコマースシャルも入れて、話をしたら、そうか、あの人は防衛庁のスポークスマンではないかということに相当な人から言われました」ということが書いてありますが、なにかご記憶ですか。

藤波 面白いね。

伊藤 いや、先生のお話ですから。じゃあ、お忘れでございますね。

藤波 何を言ったのかわからないな。

伊藤 「外向けにも、そういう感じが定着しているようなのです。そのことが日本の国のためにいいのなら、それをうまく利用すればいいのだろうと思えますけれどね」という言い方をされています。やはりこの訪米と中曽根内閣の成立は、直結はしないんですが、アメリカに対する宣伝効果はあったというふうに評価されますか。

藤波 そう思いますね。それは思います。

伊藤 それで鈴木さんがお辞めになる。あとを中曽根さんに、ということでしたが、これは別に禅譲という形ではないでしょう。

藤波 そう、総裁選挙をやるわけだ。

伊藤 四十日間の空白ということを先生はおっしゃっていますが、この予備選をやるという段階で、藤波先生はどういう行動をとられたわけですか。

藤波 中曽根を総裁にするために一所懸命やったんだ。

伊藤 具体的にはどういうことをおやりになるわけですか。

藤波 三重県なら三重県の票を取るわけです。あちこちで、「中曽根さんでなければ」ということを言うわけですね。

伊藤 先生は中曽根派の重鎮ですから、三重だけ、ということではないでしょう。

藤波 ない。

伊藤 もう全国ですか。

藤波 前もそうだけれど、官房副長官になってからも、官房長官になってからも、中曽根の悪口を言うところどころに私が出かけるわけだ。出かけて、「いま総理大事は忙しいので私が代わりに来たけれど、話を聞かせてくれ」と言うわけです。政治家であれ、役人であれ。役人は滅多にそんなことを言わなければ、主に言論人

だね。中曽根の悪口を言う人、批判的な人のところに行く。そのときに言うた言葉は覚えてるんだけれどね。「それはあんたが中曽根が嫌いだからだ。おれも嫌いだ。そやけども、いま日本の国のためを考えれば、中曽根を使うだけ使うたらどうや。中曽根を使うというのは国のためだ。そう思わんか」というのが、だいたい統一した言葉だったな。それは感じると思うね。

伊藤 それはかなりみんなにアピールして、受け入れられましたか。

藤波 受け入れられたと思うね。

伊藤 十月十二日に鈴木さんが退陣を表明されて、一本化の調整を始めるわけですね。これがうまく行かない。

藤波 行かない。

伊藤 一本化の調整なんていうときは、先生が動き回るわけですか。

藤波 知らんな。一本化の調整をやったのかな。やらんだろう。やったことになっていきますか。

伊藤 中川さんと河本「敏夫」さんと安倍晋太郎が立候補して、調整するというのですが、うまく行かない。それで予備選挙になるということですね。このときは河本さんと安倍さんと中川さんですね。中川さんは最後までやるんだっけ。

藤波 やった、やった。票がなかったんだ。福田赳夫に総総分離という話があって、福田赳夫が総裁だ。それはいかんということだ。逆に言えば、総総分離でどうだというのが一本化しようという動きだったんだな。安倍や中川はそれでいい、ということだったんだろ。うな。それはいかんという。

伊藤 これは中曽根さんが断固として拒否したんですね。

藤波 そうそう。田中角栄氏も断固拒否したんだ。田中さんが非常に強かったんだ。福田とはいけなかったわけだ。一本化というのは福田を取る方に、ということだったんだ。それを拒否したんだ。伊藤 だけどこの段階では田中派の勢力が非常に大きいでしょう。

藤波 人数の上では大きいな。

伊藤 しかも田中派には活動的な分子がかなり多いですね。

藤波 多いな。

伊藤 だから田中派の支持を取りつけないことには予備選に勝てない。だから田中派との連携ということは非常に大事だと思うんですが、そういう場面は先生が動き回るぐらいの位置におられたんじゃないですか。

藤波 四人か五人で、一緒に話をした。

伊藤 田中派の人たちと、ですか。

藤波 田中派とも――。鈴木派の齋藤「邦吉」さんがおったな。佐々木「義武か？」さんとか。それは鈴木派の方だ。それから、安倍晋太郎の方は誰だったかな。何人かと話をしたのを覚えているな。

伊藤 それは一本化調整の話じゃないですか。

藤波 その話だね。だけど断固蹴って、総裁選挙をやるということに中曽根さんはなった。田中さんの意向もあったな。田中さんから私に電話がかかってきた。田中角栄から自民党本部に電話がかかってきて、「中曽根を呼べ」という。「中曽根さんはいま会議に出ておる」といったんだね。そうしたら、「藤波を呼べ」と言われて、私が角さんの電話に出て「藤波です」といったら、「すぐ断わりなさい。総総分離はいかん。あんな変なことをしたらいかん、間違いだ。そんなことをしたら何もやれなくなる。結果として何も政治をやれなくなる。やって、勝つだけ勝って、それで初めて総理大臣が仕事ができるようになるんだ。ということの中曽根君によく言え」という電話がかかってきたな。

伊藤 中曽根さんがいなかったら藤波さん、ということとは、もう代貸しみたいな感じじゃないですか。

藤波 代貸しじゃないんだけれど。物を言いやすかったんだらう、電話だから。中曽根さんが会議をしている隣の部屋で電話を聞いた

覚えがある。「中曽根さんは」総裁室で話し合っていた。

伊藤 じゃあその段階で、田中派はだいたい中曽根を支持するとい
う感じなんですね。

藤波 そうだな。

伊藤 そうすると一番の強敵は安倍晋太郎か河本さん。

藤波 安倍晋太郎だな、福田派だ。

伊藤 だけと実際の結果としては河本さんの方が余計取ったわけ
ですね。

藤波 河本さんは取ったな。

伊藤 河本さんはあのとき、うんとお金を使ったという話もありま
すね。

藤波 知らんな。

伊藤 あれでお金がなくなったんじゃないかな。

藤波 使ったかもわからんな。

伊藤 日大とか、いろいろ会社関係とか、ずいぶんやってみたいで
すね。そういう実際の予備選になると、予備選の選対委員長みたい
なことは誰がやるんですか。田中派は田中派でやるんでしょう。

藤波 そうそう、派閥別だ。

伊藤 田中派と中曽根派のつなぎは誰がやるんですか。

藤波 ととき話し合うんだ。四、五人かな、両方から出て話をす
る。

伊藤 その四、五人の中に、もちろん藤波さんも入っているわけ
ですね。

藤波 いちばん若造でね。

伊藤 若造なんですか。

藤波 いちばん若造ですよ。

伊藤 中曽根派にそんなに長老がたくさんいるんですか。

藤波 天野光晴とか、あんなのがいるんだ。田中派に合うのがある

んだ。宇野宗佑もそうだし。

伊藤 じゃあそのときは若手——、若手っていうことはないでしょ
う。中曽根内閣ができるときに、藤波内閣でもいいんじゃないか、
という——。

藤波 いや、そんなこと誰も思っていない。

伊藤 そういう話もないわけではないでしょう。参考資料にありま
すが、『自民党の次のドン』『毎日新聞社政治部編 昭和五十五年』
という本がありますが、これによると藤波さんも次のドンの中に入っ
ているんですね。

藤波 代表選手ぐらいだな。

■中曽根内閣の組閣

伊藤 でも選手に登録されるということは大変ですね。それで、
「昭和五十七年」十一月二十四日に「総裁」選挙があって、中曽根
さんが五七％獲得で、その翌日、党大会で総裁に就任。そして十一
月二十七日に中曽根内閣が成立するということになります。そこで
組閣の話ですが、官房副長官である藤波先生が国民政治研究会でお
話になった中に、誰とも相談しないでやったとありますが。

藤波 誰とも相談しない。

伊藤 これは本音の話ですか。

藤波 そうです。人事は中曽根康弘が一人で考えた。

伊藤 藤波さんにも相談なし。

藤波 なし。誰とも相談しない。国会便覧を持って、行政管理庁長
官室に籠った。物を言わないで考え込んでいた。面白いね。それは
田中角栄氏とは何回か会っているんだね。

伊藤 その前に、ですね。

藤波 前に。だから総裁選挙で応援しているんだ。

伊藤 そのことは考慮しなければいけないでしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 そのことも考慮して、自分でいろいろ考えて、組閣のメンバーを全部つくっているわけですか。

藤波 つくっているわけだ。

伊藤 それで一人ひとり呼び込んで、一人ひとりに「あなたはこういうことをやってくれますか」と言って、「いたします」と言ったら、「その大臣をお願いします」と言った、というふうに先生はおっしゃっていますね。

藤波 一般論として行政改革を言ったんじゃないかな。

伊藤 だいた行政改革ですね。

藤波 「行政改革をやりますよ、あんた事務次官以下頼みますよ」と言ったと思うな。それで、「あなた労働大臣をやってください」とか、「運輸大臣をやってください」とか言うんだな。

伊藤 そのときに、中曽根さんと「四役が座って」とありますが、四役というのは党の四役ですか。

藤波 党の。

伊藤 副総裁と幹事長、総務会長、政調会長ですね。これは閣僚を決める前にもう決めているわけですね。

藤波 総裁が決めている。一緒に同席するわけだ。

伊藤 それはわかりますが、後藤田さんと私が座って、と書いてあります。

藤波 私のところには、総理官邸から電話があって、「来てください」というので、行ったんだ。そのころは中曽根派の事務所は不満でひっくり返っているわけだ。中曽根内閣がきたらおれは外務大臣だとか、自分で思っておる連中ばかりだ。いっぱいいる。「おかしいな。誰も電話がかかってこないか」と言っているわけだ。来ない。

私に出て来いと言ってきたものだから行ってきますといって出かけた。そうしたら後藤田正晴がまだ引き受けないんだ。「総理大臣がおれに官房長官をやれと言っただけれど、自分の派から出せとおれはいま言っているんだ。おれのようなよその者が中曽根内閣で官房長官をやったら駄目だと言っているところだ。君が来たか」「はい、来ました」と言っているときに、中曽根さんから「すまんが、後藤田さんの下で副長官をやれ」と言われるわけだ。「喜んでやらせてもらいます」と返事をした。「そうか、新聞関係、マスコミ関係はみんな君に任すから頼むぜ。副長官はいいな、それならおれも官房長官を引き受けよう」と言って、初めて後藤田さんが引き受けるというわけだ。それでよかったということで、官房長官人事は落ち着くわけだ。

伊藤 そういう陣容が整ったところで一人ひとり呼び込むということになるわけですね。

藤波 最後に福田さんがカンカンになって怒っているという。竹下のところ、島根県出身の当時の総務会長は誰だったか。細田吉蔵だ。「おれがいつペン言っって説明してくる」と言っって、官邸から出かけるわけです。

伊藤 福田さんのところに、ですか。

藤波 ええ、福田さんの事務所に。そうしたら途中で、どうだ、どうだと新聞記者が言う者だから、押しつぶされたようになって帰ってくるわけだ。「行けなかった。行けんわ、電話でも話をするか」といって帰ってくるわけだ。「吉っつあん、よう行けんわ」と言っって、それでみなで相談して、福田さんによる説明しなければいかん。田中さんはもう来ないわけだ。後藤田正晴以下、田中派はみんなやっているわけだからね。これは福田が怒っている、国民の声であるかの如く福田派が怒っているということを、さかんにそのときに言っていたな。

伊藤 結局、誰かが説明に行っただんですか。

藤波 電話で話したんじゃないかな。しょうがないからね。

伊藤 結局、官房長官は田中派、閣僚のかなり多くが田中派、大蔵大臣も田中派。それで「田中曾根内閣」と言われたじゃないですか。それは結果である。一人ひとり適材を選んでみたら、結果として田中曾根内閣になっていたということだ、とここ「国民政治研究会」では説明されていますが、本音のところはどうなんですか。

藤波 そういうふうに私は思ったけれどな。

伊藤 中曾根さんはそう説明されたと思いますが。

藤波 そう思ったんだらうな。

伊藤 やっぱり田中派が支持してくれて政権ができたわけですから、それなりの配慮はしたんじゃないですか。

藤波 中曾根さんはなかなか認めなかったね。

伊藤 それは認めないでしょうね。

佐道 藤波先生も、それでいいんだ、というお考えでしたか。

藤波 しかたないもの。

伊藤 じゃあ藤波内閣ができれば同じようなことをやりましたか。

藤波 いや、どうかな。できんからいいけれど。

■官房副長官に就任

佐道 先生ご自身の官房副長官といのはどう思われましたか。労働大臣までお務めになって、官房副長官というポストはちょっと――。

藤波 全然、自分では思っていないな。しょうがないと思った。

伊藤 いやというわけではないんです。

藤波 いやじゃない。中曾根さんを助けて、一所懸命国のためにやろうと思った。

伊藤 ただ、ランクとして言えばどうなんですか。降格みたいなものですか。

藤波 ランクとしては、三重県の木村俊夫さんが官房長官から副長官になった。保利茂さんが入ってきて官房長官をやった。保利さんのもとで木村俊夫が副長官をやった。そういう例があるから、三重県の人にはわかってくれるだろうと思ったし、自分でも慰めというか励ましになったな。

佐道 中曾根派の中で、なかなか呼び込みが来ないといって荒れていた人たちがいたということですが、先生ご自身は、なにかこういうポストが来るんじゃないか、ということとは前もってあったんですか。

藤波 ないない、全くない。なくても新生クラブをやっていること思ったからな。

小池 でも、皆さんがいる中で、先生だけが呼び出されて官邸に行かれるわけですから、最初に行くということになれば官房長官ではないか、という雰囲気もあったんじゃないでしょうか。

藤波 そう思った人もあるだろうな。

伊藤 官房長官だと思って、みんなが畜生、と思っていたところが、副長官だったということで、少しは安心したとか（笑い）。

藤波 結果はそれでよかったんだ。

伊藤 これが本当に官房長官になっていたら、嫉妬で大変だったんじゃないですか。

藤波 大変だったね。亡くなった昭和天皇さんが、「藤波君よ、君は歳とった者にいじめられないか。若うて官房長官になったけれど」と、副長官になったときにそう言ったな。

一同 えええっ!?（驚く）

藤波 記録に残してもいいのかな。

伊藤 それぐらいのことは平気ですよ。

佐道 政治利用になりませんから。

藤波 「おかげで元気でやっておりますから、ごらんの通りです。いじめられません。みんな有益な指導をしてくれます」と言った。「それはよかった、それはよかった」という。

伊藤 そうですか。でも官房副長官になっただけでも、相当嫉妬はあったんじゃないですか。

藤波 副長官はあったなあ。覚えはないけれど。副長官になって、官房長官並みの秘書をつけるっていう、総理府と外務省と大蔵省「から秘書がついた」。外務省は岩田「達明」というやつだ。大蔵省は東京の国税局長もやったかな、森田「好則」。その三人ぐらいが官房副長官秘書になった。

伊藤 副長官に秘書がそんなにつくんですか。

藤波 いや、普通はないんだ。総理府だけだ。

伊藤 官房長官にはつくでしょう。

平松 官房長官には役所三つぐらいから、出向の秘書官がつかます。伊藤 そうですよ。副長官につくというのは聞いたことがなかった。

藤波 つけるというのは、まあそうするから、ということだったな。

佐道 官房長官待遇ということですね。

藤波 そうですね。

伊藤 後藤田さんとの関係はどうなんですか。

藤波 いまでも歩いていると、歳をとった夫婦が、「藤波さん、おう」なんて言ってくれるわ。いろいろなところを午前、午後と歩いていると。五年間、週に一回ずつ国会討論会に出たからね。そういう五年間を繰り返したわけだ。副長官一年、官房長官二年、国対委員長二年。五年やっている、いまでも官房長官は藤波だと思っているんだ（一同笑い）。本当にそう思っているんだ。ありがたいことだね。

佐道 「藤波官房長官」となったんですね。

藤波 なったんだ。

伊藤 国会中継で、「藤波官房長官」というのが非常に記憶に残ります。

藤波 NHKで国会討論会の録画に行っ、放送に入る前に便所に行くんです。それで連れ小便をするわけだ。五人ぐらいね。そこに誰か来ていない者がおる。民社が来ていないとか、あるいは社会党が来ていないとかいうと、「今日は、おまえらわかるか、社会党をやっつけるよ」とか便所で合議するわけだ（一同笑い）。だいたいそうなんだ。

佐道 放送前のトイレ合議があるんですね（笑い）。

藤波 あれは不思議なものだったな。ありがたいことに、全部任せてもらった。後藤田さんが任すと言うから。

伊藤 後藤田さんが、ですか。

藤波 そうです。「政府を代表して君が行ってくれ」という。副長官でも、いま安倍晋太郎の息子の晋三がときどき国会討論に出るけれど、あれに毎週出るわけだ。副長官が中曽根内閣を代表して。それはありがたいことだった。

伊藤 副長官というのは、普通はそんなに表に出ないでしょう。

藤波 出ない。いまちょっと安倍晋三が出ているぐらいだ。

伊藤 非常に似ているんですね。

藤波 北朝鮮問題があるからね。

伊藤 それもありますけれど、あの人はなかなか論客ですからね。

佐道 一般的には副長官はそんなに出来ないですね。

藤波 出ないね。官房長官が出るんだけど、「おれは歳をとっていて駄目だ、おまえ行ってやれ」という。

伊藤 後藤田さんだと役人風になるのかな。長官と副長官との関係は、総理の直系が藤波さん「副長官」で、田中派から送り込まれた

使者が後藤田さん「長官」となりますから、なかなか複雑な関係じゃないかと思っただんですが。

藤波 後藤田さんの方が「中曽根さんより」歳が上でしょう、二つか三つ上なんだ。

伊藤 その関係はうまく行ったんですか。

藤波 うまく行った。田中さんのこと以外はね。田中さんのことは、一審判決が出た日なんかは深刻だった。後藤田さんには、こんな判決が出たなんて、物を言うわけにはいかんし、深刻だったな。

伊藤 それで閣僚の選考で、あとでちょっと問題が起こるんじゃないでしょうか。ロッキード灰色高官ですか。

藤波 佐藤孝行はもっとあとだ。中曽根内閣じゃないな。

伊藤 加藤六月さんですね。

藤波 加藤六月だ。加藤六月はなんで問題になったんだ。

伊藤 先生は加藤六月さんに対しては非常に高い評価をされていますね。

藤波 そう、評価している。

伊藤 いちばん政策通である、非常に勉強家だ、とおっしゃっていますね。

藤波 そうそう、中曽根さんも好きだった。中曽根康弘という人をちゃんと理解しておったからな。

伊藤 それで田中派がかなり入ったせいもあります、中曽根派からの入閣は少なかったでしょう。中曽根派の中はどうだったんですか。憤懣が渦巻いていたんですか。

藤波 渦巻いていた。

伊藤 八つ当たりは来ませんか。

藤波 八つ当たりは来るさ。それは来るけれどな。

伊藤 藤波さんのことだから、ソフトにふわっとよけたんじゃないかと思うんですが。

武田 山中貞則さんはずいぶん言われたと書いていますね。

藤波 山中貞則がおったなあ。

武田 つまり自分のところに相談がないけれど、どうなんだろう、ということですかね。

藤波 そうでしょうな。二階堂「進」さんと同じ選挙区だからな。

伊藤 そういうこともあるんですか。

藤波 ある。私のところの田村元もそうだ。

■アメリカとの関係修復

伊藤 中曽根内閣ができたときの話として、「戦後歴代内閣で最悪の政治環境」と先生はおっしゃっていますね。これはアメリカとの関係が悪くなっているということも一つあるし、行財政改革がかなり辛い。そういう状況の中で、よくも内閣を引き受ける、という言い方がされたと言われています。私などは、そのあとになって考えてみると、別にそんな悪い状況ではなからうと思うんですが。

藤波 「あとではそう」思うけれど、あときはエライなあ、という感じだったね。

伊藤 大変だと思いましたか。

藤波 ねえ。田中垂流の内閣だということも定着したしな。

伊藤 それから右派内閣ということもマスコミに宣伝されて非常に困るおっしゃっていますね。

藤波 そうだ。それは国のためだと思って一所懸命やったけれどな。

武田 中曽根さんなので右寄りだという固定したイメージが当時あったんでしょうね。

藤波 右寄りだろうか。

伊藤 いや、風見鶏ですよ（笑い）。でも、憲法改正の歌を作った

りしたから。

藤波 政治だからな。政治はみんな風見鶏だ。それでいいんだよ。伊藤 そういう政治環境が整ったら、いろいろやるでしょうけれどね。一番最初の課題は、やはりアメリカとの関係修復だ、ということをおっしゃっているんですね。

藤波 初めての経験のときにはものすごく緊張するんだ、中曽根康弘という人は。初めてのときだけだ。二回目は知らん顔して、おれの天下だというような顔をしているけれど。初めのときは、それは緊張する。初めてアメリカに行ったときに、中曽根は右寄りだということになっちゃったんだけど、あれは緊張していたよ。

伊藤 実際に行かれるときは、先生も一緒に行かれたわけですね。藤波 官房副長官で「行った」。寺田輝介という外務省の、韓国大使を最後に退官したのかな、あれが当時外務省の広報室長だ。一緒にアメリカに行ったのを覚えている。朝日新聞の大月「信次」というのが団長で、風疾で死んだ。頭がよかったけれどな。

伊藤 総理就任のお祝いにレーガンさんから電話がかかったということが言われていますね。これはテレビ朝日の「あまから問答」【第四十一回 昭和五十八年一月十五日放映】で、藤波さんが「中曽根氏が」首相就任後、レーガン大統領から電話があったそうだが、どんな話をしたのか」という質問に対して、答えているんですね。早い機会にお会いしたいと向こうは言った。こちらからもそういう応答をしたというお答えです。

※第四十一回「あまから問答」には、藤波氏のほか、牛尾治朗（ウシオ電機会長）がゲストであった。司会は大宅映子である。藤波氏保管の台本（外務省用箋に書かれた番組中における想定問答）を見ながら質問している。

藤波 ごく普通の話だ。

伊藤 そういう電話があって、そう「いう内容」であったというこ

とは、官房副長官にすぐ連絡があるものですか。

藤波 ない、ない。

伊藤 でも一応ここで答えていますからね。

藤波 それは良かったからだ。

伊藤 あとで、ですか。

藤波 はい。総理の秘書官が言ったかもわからんな。私は官邸の中におりますから、秘書官が「レーガンさんから電話があった」と言うたんでしょ。

伊藤 副長官の秘書官はどこどこから来ていたとおっしゃっていましたか。

藤波 大蔵、外務、総理府。

平松 官房長官の秘書官を出しているところがつけるようですよ。

伊藤 総理の秘書官にも外務から来ているでしょう。この外務から来ている人と、先生のところに来ている外務の人とは、スツと連絡をしているわけですか。

藤波 しているんだらうな。

佐道 役所だからやっているでしょうね。総理も官房長官も、外務省から秘書官が来ているので、皆さん、それはやっているでしょうね。

伊藤 情報の流通は、そういう形でもあり得るわけですね。

佐道 中曽根さんがアメリカに行かれるときに首脳会談をやられて、そのあと向こうのマスコミに出られたりするわけですが、そういう日程とか、どういう姿勢で臨むとか、それは官邸の中で事前に打ち合わせをされたりするんですか。

藤波 そうです。

伊藤 「アメリカの三大ネットワーク、CBS、ABC、NBCにそれぞれ出演することを計画しています」と答えています。そういうことは誰がやるんですか。

※台本中に「訪米中総理は積極的にテレビに出演するそうだが」という質問があり、それに対して「訪米前をも含め、米国の三大ネットワーク、CBS、ABC、NBCのそれぞれに出演することを計画している。総理自ら米国民に語りかけることは、米国民に我が国の立場をよりの確に知ってもらえるというメリットがある」との回答が準備されている。

藤波 段取りですか、総理の政務秘書官だ。

伊藤 中曽根さんの政務秘書官は誰ですか。

藤波 中曽根さんの場合は、群馬県から来た、死んだ上和田【義彦】だ。行って、グラハムというばあさんと——。

佐道 キャサリン・グラハム、ワシントンポストですね。

藤波 そうそう、あの朝食会というのが一番先にあるんだ。それに行くわけです。赤い服を着て、こいつは生意気なやつちゃな、と思うけれど、一緒に行って朝飯をとった。

佐道 一緒にいらっちゃったわけですか。

藤波 一緒に行った。そこで「不沈空母」発言をやるわけだ。どうぞ気楽に来てください、というけれど、気楽は気楽だけれど、本人は初めてのことでガチガチに緊張していて、わしが総理大臣になったら日本のことを心配するな、と言わんばかりにいるわけだ。単なる朝食会だと思っているから、気楽に朝飯を食って、部屋を出て来たら、同行記者団がおって、「副長官、朝食会の際の総理の挨拶はどんな挨拶でしたか」というので、「どうって言うことないよ、スープはうまいなとか、そんなことを言ったんだ」と言っていたんだ。そうしたらグラハムさんが、ワシントンポストの主な記者をみんな呼んでいたんだね。ちょっと人数が多いな、と思ったんだ。本人は緊張しているし、本当に不沈空母と言ったのかどうか知らないけれど。私は英語はあまり得意じゃないから。

伊藤 そう言っていますね。

藤波 どこかで言っているでしょう。

伊藤 「前述の国民政治研究会で記者が」「中曽根さんは英語でべらべらやっている」というのに対して藤波さんが、「上手な人ほど、英語はあてにならないよと、申し上げておきます」。それで記者が「生兵法はケガの元ですからね」といって、「官房副長官も付いて行きますか」と聞くと、「藤波」「そういうことになるだろうと思えます」、記者「そのへんはしっかり頼みますよ」、「藤波」「幸いに私は語学がせんぜんダメですから」とおっしゃっていますね（笑い）。

佐道 中曽根さんは英語で答えておられたんですか。

藤波 英語でやっていたね。通訳はいたけれどね。

佐道 あのときには中曽根さんの発言の中には「不沈空母」という発言はなくて、通訳が間違えて、あとでワシントンポストは謝罪の文を出すということになるんですが、それは——。

伊藤 いや、英語がわからないから駄目でしょう。

佐道 英語のやりとりだったわけですか。

藤波 英語ができる人には敬意を表しなければね。できないものはまずいよ。

佐道 中曽根さんも自分は言ったかもしれないと思っていたのかも。しれない。

藤波 それはひどいものだったな。それで出てきたら、ワシントンポストには中曽根がこう言ったというのが載っているわけだな。おかしいな。それで同行記者団には私がブリーフをして、「あんなのどうって言うことない、心配するな、心配するな」と言った。「いやいや、みんな言っているじゃないか。不沈空母と言ったぞ」と言っているわけだ。おかしいな、と思った。ついに不沈空母になっちゃった。五年間、不沈空母になっちゃった。英語をやっておけばよかったな。

佐道 しかし、その朝食会での会話が記事になるとするのは、前もっ

てご存じなかったわけですか。

藤波 なかった。私はなかったな。記事にするときは私が言うからな。しかし好き嫌いがあって、外務省はそのときに、ちょっと中曽根にアメリカ寄りの物を言わせようと思ったんだらうな。

何ヶ月かあとにウィリアムズバーグでサミットがあった。そこに行ったときに、ドイツの総理大臣のシュミットと話をするわけだ。もちろん私は副長官だから一緒に行った。「ソ連からタンクがどんどんやってくるのは時間的な距離だ。ドイツなんかすぐだから、入ってきたぞ、と言ったらすぐにやって来るんだから、緊張しているんだ。日本なんか海に囲まれて楽なものじゃないか」と向こうは言ったんだ。ああ、そういえばそうだな、とっておった。

そうしたら次の日、日本から電話がかかってきて、「えらいことだな、昨日ドイツの総理大臣に中曽根さんはなんて言ったんだ」という。「何も言っていない、向こうがどンドン言うのに相槌を打っただけだ」と言ったんだ。そのときは、外務省の欧亜局長が新聞記者にブリーフしたんだ。誰とは言わんけれど、欧亜局長だ。相手はドイツだから。それはものすごく悪く言ったんだな。中曽根さんが言い出して、「完全に核武装の配備をしろ」とドイツに進言したということになっちゃったんだ。そんなことは中曽根さんは言っていないんだ。実際は、向こうは緊張しているから、それぐらいのつもりでやらなければいかんのに、日本は楽だな、というような話だ。外務省おかしいぞ、と思ったが、そのとき外務省は「絶対にブリーフは私のところでやります」と言うから、「それだったら頼むわ、おれもちょっと仕事ができるからいいわ」といって、どうでもいいと思っただけ、そうだった。そいつ「欧亜局長」はソ連嫌いだったんだ。そういうことがあるんだ。だいたい外務省のやつらはみな行った国の味方になって帰ってくるんだけれど、ソ連だけは恥をかかされるものだから、いやになって帰ってくるんだ。そいつだっ

たんだ。ソ連嫌いだったんだ。それで、中曽根さんがシュミットにそう言ったということになってるんだ。五年間そのままになっちゃった。そんなこと言っていないよ、と私が言うわけにはいかんし。そんなものですよ、怖いなあ。

■中川一郎の死

伊藤 この「資料の中にある」「あまから問答」は、昭和五十八年一月十五日に放映されているんですね「台本をみる」。その前、中曽根さんは一月十一日に訪韓しているわけです。そのことは全然聞かれていなくて、アメリカに行く話ばかり聞かれていますね。韓国に行く話は突然ですか。

藤波 瀬島さん。瀬島さんが行って地均しをして、だいたいこういうことで話をつけようということ、帰ってきて話をして、一番先に韓国に行くわけだな。韓国には、外務大臣と大蔵大臣と一緒に行くんだからいいわと思った。中川一郎はその前に自殺するわけだ。向こうに行ったら、朝鮮日報かな、なにかの新聞にそのことが出てくるわけだ。中川一郎が首をつって死んだらしい、という話だ。それで竹下、安倍両氏が、「こら、副長官、おまえ知っておって黙っておるのはけしからんじゃないか。ええときだけ、兄弟分か。おれらにもちゃんと言わんか」といって、そのとき初めて叱られた。伊藤 なんて叱られたんですか。

藤波 竹下、安倍に言わなかったんだ。山本幸雄が警察の出身で自治大臣で、私と中曽根さんと三人ぐらいいしか知らなかったんだ、自殺したのは。あのときは高血圧かなにかで死んだ、ということになっ

ていたな。
伊藤 最初は、ですか。

藤波 ああ。

伊藤 この中川さんの自殺問題というのはいまでもいろいろ言われているでしょう。当時、どんなふうにお考えでしたか。

藤波 自殺は早くわかった。「私は」風邪を引いていて、卵酒を飲むと風邪が治るといふから、ようけ酒を飲んで、いい気持ちで、びっしょり汗をかいて寝ておいたら、総理官邸から電話がかかってきて、「総理大臣がすぐ中川一郎さんの葬式に行け、お悔やみに行けと言おう」という。「どうした」と言ったら、「中川一郎さんが亡くなった」という。前の晩、夜中に亡くなったんだという。羽田に飛行機を手配してくれといって、飛行機で行ったんだ。千歳に着いた。そうしたら、総理大臣のご名代で官房副長官が来てくれたというのわかってるんだ。でも、「飛行場で待ってくれ」と言うんだ。「いや、おれはホテルに行くんだ。どうせ葬式まで、選挙区で焼いたりしてやっていると時間がかかるだろうけれど、亡くなったというホテルまでお悔やみに行くから」と言ったら、「すぐ来るから待っていてくれ」というんだ。おかしいな、と思ったんだ。そうしたらすぐ来た。それで乗って、一緒に飛行機で羽田に帰ってきたんだ。

伊藤 自殺だというのはどうしてわかったんですか。

藤波 自治大臣だな。山本幸雄が「実は——」と言って。それがわかっていたもので、安倍、竹下に叱られた。「霜を踏みアジアの明日を疑わず」といってこっちは俳句を作っている気持ちになっていたらやって来て、「こんな馬鹿なことがあるか、中川一郎は首をつって死んだんじゃないか」と言われて、竹下・安倍に叱られた。

伊藤 なんで自殺したのかとか、そういうことはわかりましたか。

藤波 わからんな。いまもわからない。評論家の飯島清さんがいろいろなことを言っていたけれどね。どうか、わからんな。

伊藤 最近また例の鈴木宗男の問題でいろいろ中川さんのことが言われていますね。

藤波 いろいろな人がいまでもいろいろなことを言うけれどな。伊豆のなんとかいうゴルフ場、英語の名前のところがある。そこで私が「打とうと振りかぶって」構えておいたら、後ろに男が来た。中川一郎の後援者の中で一番近い者だ。「なんで死んだか、いっぺんまた説明するから」と「その人に」言われたけれど、こっちはもう打たなければしょうがない。そんなことがあったな。

伊藤 それで結局説明は聞かず、ですか。

藤波 聞かずだ。高揚していたことは事実だね。総裁に立候補して、本人が高揚していたことは事実だ。

小池 だけど惨敗でした。

藤波 結果はね。だけど、和服を着て鯉に餌をやっている格好なんて田中角栄そっくりだ。中川一郎そのものは、思い上がったな、と思ったな、私は。

伊藤 中川さんのおつき合いはあったんですか。

藤波 あった、あった。牛尾治朗を東京都知事に出すときに、河野洋平から中川一郎までというのを私がつくったからね。中川一郎の誕生日の晩に、電話がかかってきた。みんな帰ったからといって、みんなが帰っていたから、二人で酒を飲んだことがあったな。だから向こうも近く思っているし、私も近く思っていた。何でもわかってもらえし、と思っていたからね。

伊藤 それだけ近くてもわからないんですね。

藤波 わからんと言った方がいいな。

佐道 政治家として評価をされておられたわけですね。

藤波 そうそう、思い切ってやるということだ。

伊藤 だけと言ってみれば、中川さんはどちらかと言えば、青嵐会で右派の方でしょう。

藤波 そうだ、大将だからな。

伊藤 その点では思想的にちょっと違うわけですね。

藤波 思想は違えりけれどね。
 伊藤 むしろ「中川さんは」石原慎太郎とか、そっちの方に近いわけでしょう。

藤波 そうそう。人間的にはとてもいい人だった。

伊藤 あれからいろいろな噂話があったりして、政界の中でもずいぶんいろいろな噂があったわけでしょう。

藤波 あった、あった。

伊藤 おそらくこうじゃないかな、という藤波さんなりのお考えはあるんだろうけれど、なかなかしゃべれないということなんでしょうかね。

藤波 どうかな。

■訪韓の事情、安岡正篤氏の「ウ」

佐道 先ほどの韓国ですが、アメリカではなくて一番最初に韓国に行こうということにされたら、いざいざ大きな理由は何かだったんでしょうか。

藤波 日韓問題は懸案の課題だった。賠償じゃない、ODA、経済協力をいくらするかという金額を決めなければいけません。このへんでどうだ、というのを瀬島さんが瀬踏みしてきたんだ。あのときは六百億か。

平松 四十億ドルと書いてありますね。

伊藤 そういう訪韓の話は、官邸の中でいろいろやるわけですか。それとも外務省ですか。

藤波 外交問題でどういう順番でやるか、なんていう話は、会議を開いてやるわけじゃないな、阿吽の呼吸だな。

伊藤 もう、瀬島さんと中曾根さん、という関係でやるわけですか。

藤波 やるわけだ。

伊藤 そうすると、官房長官とかはある程度蚊帳の外になるわけですか。

藤波 それは知っておると思うけれど、顔ぶれからすればね。決めますよと言って決めたわけではない。

伊藤 藤波先生なんかは、決まってから聞かされる。

藤波 決まってるから。

伊藤 びっくりされたんじゃないですか。

藤波 「アメリカの前に韓国に行くんですか」と言ったら、「韓国に行くよ」という。こっちは、韓国から帰ってきてアメリカに行くまでに、安岡正篤さんに「中曾根氏と」会わせようというのが第一の課題だ。

伊藤 なんで安岡さんなんですか。

藤波 安岡正篤は代々の総理大臣のご意見番だったね。四元「義隆」さんは初めから中曾根さんとやっていた。だから安岡さんにも会わんといかん。何回も話したんだけど、なかなかウンと言わなかったんだ。

伊藤 どちらが、「ウンと言わなかったの」ですか。

藤波 安岡さんが「ウンと言わなかった」。「安岡さんは」田中角栄とか中曾根康弘が嫌いだっただ。吉田茂、池田勇人、佐藤栄作と「ご意見番として」来ていたんだ。

伊藤 そのあとはどうなんですか。大平とか福田とか。

藤波 大平は大したことなかったな。大平は、田中角栄が応援したからな。

伊藤 藤波先生は、なんで安岡さんなんですか。

藤波 年に一回、伊勢で安岡さんの一族郎党が集まって「万灯行」の大会をやるわけです。

伊藤 そういう行事があるわけですか。

藤波 師友会の大会があるんだ。その日に、浜地文平さんという私の先代と、神宮の大宮司と安岡先生とで一緒に酒を飲むことになっているんだ。

伊藤 じゃあ浜地さんのあとは先生、ということですか。

藤波 そうそう。私も安岡先生に早くからかわいがってもらった。それで、「すまんけれど行ってくれ。中曽根さんは覚悟をして総理大臣になったんだから面倒を見てくれ」といったが、まあ、いやがってね。それで、「中曽根氏は」アメリカに行くんだから、アメリカに行く前に先生に会うと意味が違うので、頼むわ」といって頼んだ。「それなら行こうか」といって、新橋で一席設けた。今度持ってきたらいい。先生の色紙がある、その日に書いた色紙がある。林繁之さんという事務局長と、安岡先生と、中曽根と、私。

伊藤 どの事務局長ですか。

藤波 師友会の「事務局長」。国会議員をした林大幹の兄弟だ。

伊藤 当時安岡さんはどこにおられたんですか。

藤波 文京区白山。伊勢に頼んだのは浜地さんだ。そのときに、「胸を張っていけ」というのが安岡さんの話だ。

佐道 安岡正篤さんというのは、伝説をいろいろ伺うんですが、実際にはどういう方でしたか。

藤波 優しい酒飲みだ。

佐道 政治家が話を聞いて、なるほどな、と思わせるような感じですか。

藤波 そうそう、それはちゃんと文献によって教えるからな。一時、なんとかという人が手を焼いて、藤波君集めるといって、中川一郎、竹下登、安倍晋太郎を集めた。宮澤「喜一」さんは来ていなかったな。若いところでは私だけだった。そんな連中で、月に一回ずつくらい安岡さんの話を聞いたことがあった。

伊藤 それはいつごろの話ですか。

藤波 今度記録を持ってくるか。それで、河野洋平とか渡部恒三とか西岡「武夫」とか、別のグループ、若い文教の仲間で行こうといつて、それも月に一回ずつぐらいやった。そうしたら二回目ぐらいに欠伸をするやつがおつてね。欠伸するのはいかな、と思った。若い代議士だから、金焔火来で疲れていたんだな。会議、会議で。安岡先生の前で欠伸をしたんだ。これはいかな、ということになった。私が見てもそう思ったし、安岡さんもちろそう思ったろう。それでやめたんだ。あと二回ぐらいやっていたら、新自由クラブがなくてよかったんだ。

伊藤 そうですか、じゃあ新自由クラブの少し前の話ですね。

藤波 そうだ、新自由クラブの前だ。若手の文教の仲間、という話だった。その二つがあった。今度記録を持ってくる。

佐道 政治家の中にも信奉者が多かったわけですか。

藤波 多かったね。

伊藤 いま記念館があるんですね。

藤波 埼玉の嵐山にある。それ「安岡正篤氏と会ったこと」は、「中曽根氏が」韓国に行つて、アメリカに行く前の話だ。

■外務省と中曽根内閣

伊藤 後藤田官房長官が、「アメリカの要請で武器技術の供与ということを決定した。武器輸出三原則の枠外である。紛争のときにも提供する」という談話を発表するのですが（昭和五十八年一月十四日）、あとで国会でいろいろもめますね。この問題についてはなにかご記憶がございますか。これは「あまから」問答の中で、「防衛問題については、来年度予算でわが国は実質的に昨年よりも高い伸びを確保した。また、武器技術交流問題についても、総理の強いリ

ダーシップのもとに二年越しの懸案を処理した」と述べておられます。防衛問題については、「中曽根さんの強いリーダーシップのもとで」と先生は述べておられますが、それはそういうことなんでしょうか。武器技術の交流問題というか輸出問題というのは、前からかなり懸案になっていた問題ですね。

佐道 なかなか決められなかったものを、中曽根さんが総理になられて、結構早くサツとお決めになるんですが。

藤波 それはそうだろうな。「中曽根さんが決めた」というのは、官房におる者として、総理大臣を良く言うために使う言葉だ。だけど、武器の扱いならそうだろうな。後藤田さんというのはそんなことは絶対に自分からは言い出さんからな。

佐道 中曽根さんが総理になる前に、先生はアメリカに行かれて中曽根さんを売り込まれたわけですね。中曽根内閣の発足にあたって非常に大きな問題が日米関係の修復ということだったわけですね。そうすると、先生と中曽根さんの間で、この武器技術もそうですが、アメリカとの関係改善のために、こういうことをやるべきだとか、やろう、とかいうことは、議論されたり相談されたりということがあったんですか。

藤波 あったろうと思うけれどな。

伊藤 この「あまから問答」の中でも、いまの防衛問題のほかに、「貿易摩擦については、国内的困難にもかかわらず、タバコ、チョコレート、ビスケットをはじめとして、広範な関税引き下げが決まり」と述べられていますね。

藤波 一つの「あまから」ですか。

伊藤 五十八年一月です。アメリカに行かれる前です。だから防衛問題と貿易摩擦問題は、なにか形を作る、ということですね。こういうことは副長官というより、中曽根総理個人の発議といえますか、どんどん決断をしていくと。懸案ではあったわけですからね。

藤波 そう、懸案だったね。

有馬 いまわれわれが見せていただいている「あまから問答」の台本のような資料は、外務省の郵紙に手書きで書いてあるんですね。これは外務省の方が、質問は決まっているのかもしれないが、想定回答をつくって先生に回してきたわけですか。

藤波 いや、知らんな。覚えがないな。

有馬 最後のところだけ、タイプの打ったものが貼ってあるんですね。

小池 これは交信野紙の二番ですから、外交官がメモで使うよりも、交信的なものに使う用紙ですね。ですから野紙としては、外務省の中でも課長クラスが書くようなものです。書いたのは課長クラスですね。

伊藤 これは藤波先生の字ではないですね。

藤波 書いた覚えはないな。頭のいい人の話だ。

佐道 アメリカに行く直前に対米姿勢を統一して、公表するためにこういう問答をするということですね。

伊藤 こういうことは官房長官がやるのではなくて、副長官がやっているんですね。これは民放ですけれどね。

藤波 放送はね。

佐道 ということは、先生のところにも、秘書官からだけではなく、外務省からブリーフがどんどん来たりするんですか。

藤波 来たな。

伊藤 誰が来るんですか。

藤波 一時よく来たな、外務省から。

伊藤 次官ぐらいが来るんですか。それとも局長ですか。

藤波 局長以下だな。

伊藤 課長クラスとか。

藤波 はい。

伊藤 審議官ぐらいが来るのかな。

藤波 よく選挙で、選挙区の人が「外国に行つて頼まれてくるのは藤波ぐらいだ」と言っていたな。総選挙のときに藤波を頼むよ、と外国で頼まれるという。外務省のやつらが大使で行っているでしょう。ありがとう、ありがとうと言っていた。

有馬 このころの雰囲気として、外務省が中曽根さんに言わたかったという言い方をされたんですが、外務省として、例えば日米関係について、できることならこういう方向を中曽根内閣に出してもらいたいという意向が働いているような気もするんですけれど。

藤波 それはあったと思うよ。

伊藤 前の鈴木内閣で日米関係を悪くしましたからね。

藤波 失敗したから、どうやって回復するのかということについてやっていたと思うな。

小池 このときには、レーガンの「力による平和」がありましたし、米ソ関係が緊張してくるんですね。新冷戦の直後ですからね。

藤波 大緊張だ。大河原「良雄」という人がアメリカ大使をしていた。「中曽根氏と大河原氏は」いま平和研「世界平和研究所」のオーナーと理事長の関係だ。あの人は人柄がいいから、中曽根さんとは合うわ。そんなことがあって、いろいろなことを言っているんだろうな。

■首相訪米の随行者

伊藤 それでいよいよ十七日に中曽根さんが訪米される。ついていくのは、先生とあと誰がついていくわけですか。

佐道 北米局長。

藤波 外務省のその連中はみんな行くからね。

伊藤 外務省はかなりたくさん行くんですか。

藤波 いやあ、それでも四、五人だろうな。

伊藤 やはり北米局関係の人ですか。

藤波 それから上和田氏と官房副長官、私の秘書。

伊藤 ほかの省庁はついていくんですか。

藤波 ほかの省庁は行きたいといってわいわい言ってくるから、通産省なんか、入れたようなことも覚えているな。頼まれて、一人ですつと行くようなことを言った覚えがあるな。

伊藤 防衛もそうでしょうし、通産は貿易摩擦の問題だから行きたいわけでしょう。

藤波 防衛は行きたいな。

伊藤 結局、連れて行ったんですか。

藤波 だと思っね。

伊藤 あと同行記者団が行くんですね。これはだいたい各社、中央紙。地方紙は――。

藤波 地方紙はない。あれだけだ、上毛新聞。

一同 あああ!?(驚く)

藤波 藤波孝生が総理大臣になったら伊勢新聞だ(一同笑い)。上毛新聞が一人行ったと思うな。

伊藤 それは面白い(笑い)。

佐道 福田さんのときも行ったんですかね(笑い)。

藤波 絶対に行ったよ。

伊藤 そのときは政府専用機で行くわけですか。

藤波 ええ。

伊藤 同行記者団もそれに乗せていくわけですか。

藤波 記者団は一緒に乗せていくんだな。

伊藤 このときなノンストップで行って――。

藤波 行って、飛行機の中でうまい物を食わせて。

伊藤 うまい物を食べたわりには、うまく伝えてくれない。

藤波 記者懇談もやって、行くわけですね。

佐道 記者懇談は総理自身がやられるわけですね。

藤波 総理もやる。私は何回もやる。

伊藤 何回もやるといっても、飛行機の中ですからね。

佐道 十二、三時間ありますからね。

伊藤 何を話すんだろうと思いますが、やはり国内政治の問題なんかもそうとう——。

藤波 関心があるな。

伊藤 こういふときはもしかすると——。

藤波 サービスするわけだ。帰りはよくなかったな。

佐道 不沈空母の影響ですか。

藤波 不沈空母の影響だ。

伊藤 険悪な雰囲気になるわけですか。

佐道 行きはよいよい、でしたけれど。

藤波 行きはよいよいだ。

伊藤 帰りも同行記者団を乗っけてくるわけでしょう。

藤波 乗っけてくるわけだ。

伊藤 この裏切り者めが（笑い）。向こうについて、ワシントンです。

藤波 その日は泊まる。

藤波 泊まるだけだ。

伊藤 どういうところに泊まるんですか。

藤波 普通のホテルだ。

伊藤 それで翌日レーガン大統領と——。

藤波 その前にグラハムおばさんと朝飯だ。そこでやるわけです。

伊藤 時差があるから、朝は辛いでしょね。

藤波 「中曽根氏は」朝は不機嫌だしね。血圧が低いのかな。よう

物を言わんし。

伊藤 そうですか。その話はあとで竹下内閣につながる話ですね。そうですか、朝、不機嫌ですか。朝食会はレーガン大統領と、ですか。

藤波 グラハムのばあさんの話だ。

伊藤 それでレーガンとの会談はどんなふうに行なわれるわけですか。あれはサシですか。

藤波 サシです。

伊藤 通訳だけ連れて入るんですか。

藤波 通訳だけ連れて入る。外務省だろうな、通訳は。

伊藤 藤波さんはどこにいるわけですか。

藤波 ウィリアムズバーグに行くときに二回目の会談をしたのは覚えてるんだ。それは藤波孝生が入っていた。行くときに、ホワイトハウスの大統領執務室に行って、別の入口から当時の國務長官、

シュルツ「が入ってきた」。

伊藤 最初に行ったときは——。

藤波 レーガンとサシだ。こういう話だったということは私が聞いて、私が記者団にこういう話だったと言う。それはどうっていうこととはない。

伊藤 藤波さんは直接にはレーガンにはお会いにならなかったんですか。

藤波 そのときはね。ウィリアムズバーグのときは覚えてるんだ。ウィリアムズバーグのときに二回目の首脳会談をやったのかな。そのとき私が入っていた。そこにシュルツがひゅうっと入ってきた。シュルツを入れたときに、安倍外務大臣も入れと言わなければいかんものを、安倍外務大臣は外にいたわけだ。

シュルツがいたと言ったら、大河原が真っ青になって、びっくりした。出てから正直に言うわな、こういう顔ぶれだったと。レーガンと中曽根とシュルツと私と四人だ。「シュルツがいたら、おれの

ところの大臣も入らなければならぬ」と大河原が言う。それはそうだ。それで安倍派というか福田派はひっくり返るようになって、どんだん電話がかかってくる。安倍さんは隣の部屋だ。耳をつけて聞いておいたら、「すぐに帰って来い」という電話をかけてくるんだ。福田起夫からかな。それでエライことになったな、おれも断わっても断り切れんな、いや私が悪いんやといって、悪者になって逐次断わりを入れた。最後は加藤「六月」君が中に入ってくれたかな、「あまりきつく言うな」といって。

伊藤 普通で言うと、向こうが国務長官が出てきたら、こちらは外務大臣が入らないとおかしいわけですね。

藤波 おかしいわけだ。

伊藤 なんでそうなったんですか。

藤波 向こうが、予定外にシュルツが入ってきたんだ。大統領の補佐官が一人いたんだ。

伊藤 じゃあそれと「大統領補佐官と藤波さんが」カウンターパートになるわけですね。シュルツが入ってきたというのがちょっとイレギュラーだったんですね。

藤波 イレギュラーだった。それは覚えているわ。

伊藤 ちょうど四時ですので、アメリカ訪問のところで今日は終わりということにしたいと思います。

一同 どうもありがとうございます。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第8回

日時：2003年6月3日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（元政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

平松 大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■牛肉・オレンジ問題

伊藤 さて前回は、中曽根内閣の官房副長官をおやりの時代の前半部分を伺ったんですが、今日はその後半部分を伺って、いよいよ官房長官というところまで漕ぎ着けたいと思っております。この前、中曽根さんの訪米とか日韓問題についてお話を伺ったんですが、「ふじなみレポート」【第七一号「平和と安定を求めて」昭和五十八年一月】によりますと、日米会談では「日本の専守防衛政策の説明と牛肉・オレンジの自由化について日本側の考え方を説明」されたと書かれておりますが、これはご記憶ございますか。専守防衛は前からのことですが、このときの問題はやっぱり牛肉・オレンジだと思ふんですね。先生は牛肉・オレンジ問題は本当のところ、どういうふうに考えておられましたか。

藤波 農林大臣は羽田孜か。

武田 中曽根内閣の農林大臣は金子岩三ですね。

藤波 長崎の。知らんな。

伊藤 牛肉はそうか、「三重には」松阪牛があるか。

藤波 そうです。

伊藤 オレンジはあんまり関係ないですかね。

藤波 いや、オレンジは関係ある。みかん県ですからね。

伊藤 先生は、牛肉が自由化になると大変だという感じではあったわけですか。

藤波 あったですね。参議院選挙があった。松垣徳太郎が負けた。ザッとみんな負けた。

武田 松垣さんはこのとき郵政大臣ですね。

藤波 大負けしたな。

※松垣徳太郎氏が落選したのは平成元年の参院選である。

伊藤 日米関係を考えると、牛肉・オレンジの自由化を進めなければ、デッドロックに乗り上げるといふ感じだと思ふんですが。

藤波 そんなに思わなかったな。ただ生産農家のほうは政府に対してきつかったな。それはきつかった。

伊藤 だけど自由化をある程度認めるとすれば、なんらかの形で手当をしなければならぬでしょう。

藤波 そうです。

伊藤 そのへんを藤波先生はどういうふうにお考えだったのかな、と思ったんですが。

藤波 アメリカの圧力というのは、そんなに思わなかったけれど。

伊藤 思わなかったですか。

藤波 思わなかった。政策のテーマにはなったけれどね。

伊藤 何か非常にシンボリックな感じで出てきましたね。

藤波 国民や農家のほうは、中曽根内閣に対してきつく当たったな。

伊藤 官房副長官としては、なんとかしなければならぬでしょう。

藤波 うん。

伊藤 あまりご記憶ないですか。

藤波 あまり記憶ないな。参議院選挙を見てびっくりした。全部落ちちゃった。

伊藤 それは自由化の問題と関連していると思えますか。

藤波 あった。その選挙だろう。松垣さん以下みんな落ちちゃった。松垣さんも落ちた。

※藤波氏が官房副長官の時代に行われたのは、昭和五十八年第十三回参院選であるが、自民党は安定多数を確保している。参院選で自民党が大敗し、松垣氏も落選したのは平成元年の第十五回参院選である。

伊藤 それは農林族なんですか。

藤波 農林族だ。愛媛だから農林県だ。

伊藤 みかんですね。

藤波 みかんだ。

平松 三重県も南のほうと海岸線はみかん農家が多いんです。それこそ紀州のみかんです。ですから、みかんも牛肉も関係するので、そのへんの風当たりは強かったんだと思います。

伊藤 もっとも、ご自分の選挙じゃないから(笑い)。

伊藤 そうそう。

平松 友達にも生産農家がありますし。

伊藤 ではその問題は、もし思い出されたらあとでお話してください。

■「文化と教育に関する懇談会」について

藤波 全般的に中曽根政治を進めるということについて少し申し上げます。これをご覧ください。「事前に配布したペーパーを示す『中曽根内閣史』資料編 五四〇頁」。

伊藤 これは何ですか。

平松 『中曽根内閣史』の政策について書いてあるところです。

藤波 「文化と教育に関する懇談会」を中心にして物を言いたいんです。中曽根政治をどう進めるかということをしていると考えてみて、気のついたこと、テーマを、ふだんから手帳に書いておいて、それを実行していたら、中曽根さんが実行したとよく言われるんです。

それはそれでいいけれど、実際に進める場合には、中曽根さんがこう思っているからこうするというのはなかなか通らん。だから懇談会や審議会をつくって、そこでとりまとめをお願いして、こういう意見が出て、右にする、左にするということになったから、右に

しようとか。問題点をずっと挙げてもらって、考えてみると左の方が強そうだから左の方に行こう、ということにしようというのがだいたいの方針でした。それで「文化と教育に関する懇談会」を出発させたのは副長官の時でしたね。

そのときは、中曽根さんがどうしても教育改革をやりたいというものですから、一年間ぐらい事前に懇談会をやりましたよ、ということでも出発させました。ソニーの盛田「昭夫」さんではなくてもう一人の名誉会長(伊藤 井深「大」さん)井深さんに、「頼みますよ」といったら、井深さんは「やってもいいけれど、わしは幼児教育論をやらんらんで、幼児教育論専門だから」と言うので、「幼児の教育が大事だということを言ってもらえばいいので、それを入れてください。入れてもらって結構だから、全体をまとめてください」といってお願いをしたのが、文化と教育に関する懇談会の出発です。

山本七平さんとか曾野綾子さんとかは、だいたい電話で、それぞれ私が頼んだ。「就任、頼みますよ」といったら、「やります、やります」と言った。

それで田中美知太郎さんだけは電話では済まんと思った。大先生だから、いっぺん京都に行こうと思って、家を訪ねて、京都駅からタクシーに乗って行ったんです。それで先生にお目にかかって、「どうしても来て、文化と教育に関する懇談会で話をして欲しい。月に一回だ」と言った。そのころもう目が見えなかったんですな。

火傷をしたもので、顔はくしゃくしゃになっていました。田中美知太郎さんは「婆さん、婆さん」といって、私と二人で話をしているときに家内を呼んで、「中曽根さんの教育についての会合があって、わしに、京都から出て来て、ひと月に一回でいいから話をしろと言うんだが、どうだ。今日は番頭さんが来てくれたんやで、返事せならん」と言う。

伊藤 「番頭さん」ですか（笑い）。

藤波 ええ、私のことをね。「ありがとう、ありがとう」と言っ
て、こっちは丁寧に物を言った。ギリシャ哲学の大先生ですからね。そ
うしたら家内は、「いま中曽根さんなら政治をやってくれるだろう
から、中曽根さんの命令は聞かないかん。京都駅までは送って行
くけれど、それから先はわからんな」ということだった。それで、
「奥さん、京都駅まで送ってきてください。東京駅では総理府の若
い人に頼んで、電話で何号車の何番に乗ったと聞けば、迎えに行き
ますから、頼みます」と言った。田中美知太郎さんはほとんど目が
見えぬのですから。それで引き受けてもらったのを覚えています。

出がけに、フツと出てきたら玄関のところで「紫色の花が目につ
いた」。小さな家でした。廊下にダットと本が積んであるような家
でした。やっぱり学者の家というのはえらいものやなと思って、た
のしんでそれを見て、出てきたら庭の塀のところに紫色の花が咲い
ていた。「ああ、きれいですね。奥さん、これはどこの花や？」と
聞いたら、ギリシャの花だという。向こうから来た地中海の花が咲
いている、と言っていたのをいま思い出しました。

その後の話になるけれど、悠々と出歩いたので、十三年ぐらい前
かな。ロサンゼルスに行ったときに、どこに連れて行くんやという
ので、美術館に行きたいと言って、ロサンゼルス美術館に行った。
美術館といっても、海賊みたいに船を襲ってゴソツとまとめて持っ
てくるようなそんな美術館だ。これは地中海の美術が多いと思っ
たら、みんな海賊が盗ってきた物だという。ああそうかと思っ
て、フツと中庭に来たら、中庭にパーツとその紫の花が咲いている。田
中美知太郎の家に咲いていた花だ。「なんていう花や？」といっ
たら、キャンサス (chanthas)、と言ったな。受付のおばさんが教え
てくれた。「ああ、そうか。どこから来た」と言ったら、「これは地
中海から来た」と言っていた。いっぱい花が咲いていた。そうか、

キャンサスという花かと思ったのが、その後のこととして覚えてい
ます。

「文化と教育に関する懇談会は」そんなふうに出発して、必ず総
理も出席をした。これと靖国の問題は、「中曽根総理は」自分が好
きだったからだ。文化と教育に関する懇談会には必ず総理も出て、
もちろん私も出た。総理大臣の私的諮問機関だったな。それでまと
めの報告書をここ「配布したペーパー」につけたんです。

私的諮問機関の主なものとしては、「文化と教育について」と、
「日本の安全保障について」と、それから「閣僚の靖国神社参拝に
ついて」の三つが、結果としては出ただけけれど、方法として教育
のことをやらなければいかん、それには教育基本法の改正をやらな
ければいかん、というのが中曽根さんの信念だった。

それで、「中教審というけれど、中教審は文部大臣の諮問機関で
ある。そんなものではない。政府全体で取り組まなければ駄目だ」
というんだ。「ああそうですか。ならそうしますわ」と言って、「と
にかく勉強する、この顔ぶれで行きましょうか」といったのがこの
メンバーです。文部省から天城勲でやろう、それから田中美知太郎
とか山本七平とか曾野綾子とかいうのを順番に挙げて、「それぞれ
頼みますからな」「そうしよう」ということで出発させて、いろい
ろな話を聞いて、一年間ぐらいかけて報告書をまとめてもらったの
を覚えています。早くやればよかったですけど、すごく時間がか
かるんだな。

私が官房長官になったもので、臨調クラスでやろうと行って、こ
れには非常に関心を持って、文化と教育に関する懇談会の結果をこ
れでまとめようということをやった。結局、文部大臣は松永光と森
喜朗。二人が文部大臣をやったと思うんですが、政府全体の審議会
として、文化と教育に関する懇談会のあとの審議会が臨教審です。
斎藤諦の事務局長はしょうがない、よかったんだけど、委員の

顔ぶれを全部文部省推薦のメンバーにしたんです。大失敗だ。それなら文化についての話ができん、ということになると思うんですね。臨教審の座長には岡本「道雄」さん（伊藤 京大の）を頼んだ。ということ、この前話した通りで、興業銀行に行つて会長に断わられたときに、ああこれはできるかいな、と思つたけれど、文部省を横にしたらできんので、文部省を取り込まなければいかな、と思つたもので、委員の顔ぶれを文部省の言うままにしたんだ。それが大失敗だったな。だから技術的なことにしか過ぎないようなことになつてしまった。

最終的に、「おかしいぞ。できないじゃないか、官房長官」というので、「いや、もうちょっと待ちましようよ」といって、あのときはかけていた。あのころはもう国対委員長だったかな。国対委員長をやっている頃に大詰めで、臨教審だけはどうしてもまとめたかったので、やろうと思つた。やろうというのは、教育基本法の改正をやらなければ駄目だと初めから言つておつた。私の周りもみな右寄りの人が多いけれど、「何もかも、というわけにはいかんが」といったら、「国の伝統を大事にするということだけでも入れなければおかしい」という意見が強くて、「そうしよう」ということでやったんですけれども、委員の顔ぶれからしても、全然そういうことにはならなかった。

いまは事件の関係上、リクルート社の江副「浩正」さんを特別委員にするとか何とかという話があった、ということになつてはいるけれど、そんな問題じゃないんです。

そんな問題じゃなしに、文部省関係で行くのか、文部省以外のものを大事にしていくのかということが問題なんだ。いま中教審にきて、ずっと引き継いでやって来ていて、教育基本法を出すかどうかということになつてはいるんだけれど、なかなかまとまらん。そのときの責任があるので、森喜朗君は一所懸命になつていまやつてはいる

けれど、公明党など全然話にならん。だから、ようけ言い過ぎてはいるんだな。いまの気持ちに立ってみると、あの頃から国の伝統を守るということが大事なんだということだけ考えて、伝統を守る教育、伝統を守ることが大事だということに絞つて、それだけ改正するよいうなことにすればいいんじゃないかと私は思うんだけど、やっぱり役所としては、いろいろなことを入れないと収まらないということがあつて、オールラウンドにしようと思ひすぎるんじゃないかという気がするんです。

これは中曽根内閣が終わつてからのことになりすけれど、衆議院で私、それから参議院を代表して検垣徳太郎さんの二人が中曽根さんのお供をして、ゴルバチョフの新しい路線の話も出ておるし、行こうというので、モスクワに乗り込んでいった「一九八八年八月か」。この前も話したけれど、モスクワの政治研究所で話をしたときは、本当にそのへんから火が噴いてくると思うような緊張した空気の中で、やつていた。

そのあと、どこかを見て帰ろうということになつて、バルト三国に行こうということで、「連れていってくれ」とソ連の高官に話をしたら、飛行機の部品がどうかこうとか言つて、なかなか行こうとせん。だけど行こうと言つて、リトアニアに言った。首都はなんといったか「↓ビリニユス」。そこに行つて、食べるものがうまかつたのでよかつた。リトアニアに女の総理大臣がおつたが、モスクワから担当者がついてきてはいるんだ。そのときに私が質問して、「リトアニアという国について、一番大事なことは何や？」と聞いたたら、教育だ、と言ふんです。「子供を教えることか？」といったら、教えることだ、という。「それは結構だ、何を教えるんだ？」と聞いた。たぶん、共産党の幹部がモスクワからついて来てはいるから、世界の歴史とか、あるいはソ連邦の歴史とか言うんだと思つたら、「リトアニアの歴史、わが国の歴史である」という。おおそうか、

これはひょっとするとソ連邦はバラバラになるな、と思った。そう思ったら、そうなった。それは「ふじなみレポート」に書いてありますけれど「第一五五号「リトアニア」平成二年四月号」。

ついでに言うと、斎藤英四郎さんという人が、そのとき経団連の会長をしておった。そこにも当然「レポート」は行っておるな。そうしたら、「歴史教育が大事だ、国の教育が大事だ」といって、ソ連邦がひょっとするとどうなるかわからんと言っておるのが中堅議員でおるけれど、こんなのはけしからん」という話を経団連会長がしたという。そんなことはないと思っただけれど、聞いたら、そんなことを言っているという。「私は」大事なことやなと思っただ、そう言ったんだけれど、そんなことを言っている自民党は駄目だというようなことを経団連の人が言っているのではしょうがないと思っただ。そのときに今泉がほろほろ泣いておった。「こんなことを言ってくる人がおる、情けない」と言っただ、うちの女の子が泣いておった。「大事なことを発見してきてくれたのに」と言っただ。

それが巡り巡って、いま教育基本法どうのこうのということになってきているのは非常に感慨深いものがあるな。文化と教育に関する懇談会から出発して、ここに来たなという感じがするんです。いま、全般的にちょっと右に寄っているなという気がする。右に寄るのはいいんだけど、役人が右だ右だと言っただ、右の意見に耳を傾けて、左の意見を放っておくという風潮すら感じる。

「内閣法制局の者が、『自衛隊の隊員をイラクの後始末に遣っても憲法違反にやらん』と言っただ」という話を総務会で野中「広務」が発言しているという話を聞いて、野中も引き下がってきているけれど、そんな馬鹿なことはない、とわしは思うんだな。長いこと言っただ、そんな話で、考えてみると、ひょっとするとこれは吉田政治の批判まで行くな、という気がしたんだ、そのとき。そういう論調をどこかで見ただ。そういうことになってくるよ。いまの風潮で行くと、

吉田政治の批判になる。わしらは商売をやって経済で儲けていくんだ、経済で大きな国になればいいんだから、軍備はアメリカに任せるといふのが吉田茂の戦後の方針だったはずなんだ。それで来て大成功したと思うんだ。そのことは日本の国にとっては大事なことだと思っただけれど、内閣法制局も追認し、役人の典型のようになったか、とつくづくと思うんです。

何もかもが右に寄っていくというのはいかんと思う。左の者は左できちんと柱を立てて、物事を考えていかなくてはいかんと思う。どうも教育基本法の改正も、それと同じような思いをちょっと抱きすぎているんじゃないかという気がするんだけれどな。親に孝とか、兄弟に親しむとか、公共に奉仕するとかいうようなことをあまり考え過ぎるといかん。言い過ぎたらいかん。しかし、国の伝統というのは守っていかなければいかん。国の伝統を否定したら終わりになるということだけはわかっていなければいかん。教育基本法を巡って議論しているというのは、戦後の日本の政治をどうやってきたか、これからどうやっていくかということを考える上で、非常に大事な問題を含んでいると思うんです。先生方にもぜひそのことを考えてもらって、論陣を張ってもらいたいと思っただ、いいんです。

■懇談会、審議会のJUN

伊藤 この「教育と文化に関する」懇談会は、官房副長官の時代に、中曾根さんに言われて立ち上げたわけですね。

藤波 そうです。

伊藤 その立ち上げは藤波先生がやられたということですね。

藤波 そうです。

伊藤 それで会長は、なぜ井深さんなんですか。

藤波 経済人で行こうということだったので、ああ結構ですなという
ことで、経済人にやってもらったんです。

伊藤 経済人といっても、経済人はほかにたくさんいるじゃない
ですか。

藤波 それは、井深さんに何かを頼もうと思ったんです。

伊藤 それは藤波さんが、ですか。

藤波 はい。

伊藤 前からご存知だったんですか。

藤波 前から知っておった。青少年教育の会長をやっていた。

有馬 当時、中曽根政治の一つの特徴のようにして、「審議会政治」
という言われ方がありましたね。だけど実際にそういうものを組織
したり人選したりするところと言うと、必ずしも全部中曽根
さんがやっていたわけではないんですね。

藤波 そうです。それはみな手分けをしてやっていた。

伊藤 そうすると例えば、靖国神社参拝はまた誰かがお世話をした
わけですか。これも藤波さんじゃないんですか。

藤波 懇談会は全部そうだな。

伊藤 全部、ですか。

藤波 全部そうです。

伊藤 人選から。

藤波 はい。

武田 平和問題研究会も、先生が――。

藤波 高坂「正義」さんが北海道に旅行しておったんだ。だから北
海道中のホテルを探せとあって、札幌を中心にホテルを探して、ど
こかのホテルで捕まえて、高坂さんに電話で、こういうわけだとい
って頼んだことを覚えています。それが高坂さんの平和懇談会だ。

伊藤 こういう会合はどこでやるんですか。

藤波 食堂が多かったね。

伊藤 官邸の、ですか。

藤波 総理官邸の食堂が多かったな。

伊藤 この文化と教育に関する懇談会で、一所懸命発言されたのは
どなたですか。これだけ顔ぶれがいますね。井深さん、天城さん、
石川「忠雄」さん、鈴木「健二」さん、曾野さん、田中さん、山本
さん。これには幹事役がつくんですか。

藤波 いや、幹事はつかないね。井深さんを中心にしてまとめてく
れ、といった。

伊藤 実際に文章は誰が書くんですか。

藤波 この文章は誰が書いたのかな。

伊藤 これは文部省の人がやったんですか。

藤波 そうでしょうな。

伊藤 それとも、官房副長官についている人がいるんですか。

藤波 内閣官房。

伊藤 内閣官房に文部省関係の人がいるんですか。井深さんが文章
を書くということはたぶんないでしょう。

平松 たぶん官房の関係者でしょうね。

伊藤 副長官を補佐する人はいるわけでしょう。この前お話があり
ましたね。

藤波 あいつらが書いたということはないな。内閣官房ですな。

伊藤 この教育基本法の改正は、いままたもめている大問題ですが、
このときからずっとやっているわけですね。

藤波 二十年やっているんだな。

伊藤 それで結論が出ない(笑い)。

藤波 出ないね。

伊藤 なんとも情けないですね。

藤波 情けないですな。委員会はほかに何があったかな。

伊藤 靖国ですね。靖国神社参拝は、これでよろしい、ということ

になったんでしょ。

藤波 よろしいことになった。それは文句言う者はおらん。いまでもね。

伊藤 でも中国から何か言われて、結局やめたじゃないですか。

藤波 ああ、中国はな。

伊藤 それから「日本の安全保障政策」についてというのは、高坂さんですか。高坂さんなら（佐道 総合安全保障ですね）。この文化と靖国には、中曽根さん自身も出席されて、ご発言もあるわけですか。

藤波 いや、発言しない。じいっと聞いている。

伊藤 藤波さんは発言されるんですか。

藤波 いや、私も聞いている。

伊藤 毎回出るんですか。

藤波 目的は、それぞれの人に物を言ってもらおうということだから、出るのは出た。

伊藤 これは司会が誰がやるんですか。

藤波 座長ですな。

伊藤 座長は井深さんですね。じゃあ安全保障については高坂さんという話でしたが、靖国神社の場合は誰ですか。

藤波 藤森「昭一」さんの前「の前」に日赤の社長をしておった林敬三だ。

伊藤 これはどうやって選んだんですか。

藤波 誰にしようというってみんなに聞くと、だいたい温厚で公平な人のところに落ち着くんだな。

伊藤 「閣僚の靖国神社参拝問題に関する懇談会の委員には」梅原「猛」さんも入っていますね。すごい顔ぶれですね。末次一郎なんという人も入っていますね。

藤波 そう、末次一郎さんもいる。それから自殺して死んだ人（武

田 江藤「淳」さん）江藤さんなんかも、ほかに全然関係しておらるので、関係してもらおうというって積極的に頼んだ。そうしたら、引き受けますわというので、よかった、よかったというって来てもらったんだ。

伊藤 曾野さんは、こっちにもあっちにも入っていますね。曾野さんはもっているな（笑い）。

藤波 別嬪だしね。

伊藤 それじゃあ藤波さんのお好みだな（笑い）。

藤波 別嬪さんと違う。

武田 若いときはおきれいだっただんでしょ（笑い）。

平松 若いときのことは僕は知らないですから（笑い）。

藤波 「前川レポート」の前川「春雄」さんのが一つあったな。

伊藤 それはどこですか。

佐道 「前川レポート」をお出しになった研究会ですね「国際協調のための経済構造調整研究会」。

伊藤 それはまた別の話ですね。

藤波 あれは私の諮問機関かな。

伊藤 あれはどうなんだろうな。

武田 あれも私の諮問機関になるんじゃないですかね。

伊藤 公的には何もないからね。

藤波 日銀に頼みに行ったのは覚えている。「前川さんは」日銀の顧問をしていた。「藤波さん、なんでわしがそんなことをせながらのや」と言うので、「いま日本人の中で、外国から見ると一番信用のあるのはあんたや。そんな信用のある人がやらなければいかんので、あんた引き受けなければしょうがないぞ」と言ったら、「わしはもういいと思うけれど、大変だな」というもので、「頼むわ、中曽根内閣で頼みますわ」といって頼んで、引き受けてもらった。そうしたら、ヨーロッパのほうからわいわい、規制緩和をやれ、

向こうの物をもっと日本は買えと言ってきたけれど、そのときに、「前川さんが引き受けてくれて、いま意見をまとめますから」と言ったら、前川という名前を聞いただけで、ヨーロッパもアメリカも含めて、それだったらちよっと待とうかということになったんだね。えらいものだと思ったね。一人の人間の値打ちというものだね。中曾根が「必ずやります」と言うより、もっとずっとはるかに信用があったな（一同笑い）。「前川さんに無理を言うて」「まとめを頼んでいるから」と中曾根さんが言っていて、それでひとまずは収まったからね。

■二階堂進、規制緩和等について

伊藤 先生は日中関係にはあまり関わっていないんですか。

藤波 日中は、部分的には関わっているんですけど、日中交流協会「↓日中友好協会」というのか、リンリンとか孫平化とか、ああいう連中ですからね。それは一所懸命つき合ったし、向こうも本当に信用してくれた。中曾根内閣の五年間ね。

伊藤 この中曾根内閣の時に二階堂「進」さんが首相特使として中国に行ったりされていますけれど、先生は二階堂さんとはどうですか。

藤波 あまり関係ないな。二階堂というのは「中曾根でない」ということなんだ。中曾根でないのが二階堂なんだ。選挙区を見たら、相手は山中貞則なんだ。自民党の中で、鈴木善幸とか、あんな連中がみんな二階堂を担いでやっていたけれど、中曾根ではないという意味だな。

伊藤 存在自体がそういうものですか。

藤波 そうそう、名前自体がね。存在する前に名前がある。

伊藤 さっきソ連に行かれた話をされましたが、あれはだいぶ後のことですか。

藤波 後のことです。ついでに申し上げたけれど、中曾根内閣が終わってからだ。

伊藤 中曾根さんはソ連に対してどういうふうに思っていたんですかね。

藤波 まあ、普通の国だと思っただろうね。大きな国であることは事実だ。ゴルバチョフの前のなにかという人が死んだな。それで中曾根総理が葬式に行っていて、ゴルバチョフに会った。

あのときは国会の討論会かどこかで録音しておいて、新聞記者がみなおって、そこに電話して、「総理、葬式に行きましょう」と言っていて、「総理大臣が葬式に行くのか」と言ったけれど、「いやあ、もうソ連は変わりつつあると思うので、このへんでバツと行くと早く言うのがいいですよ。日本の場合でも、そういうときは早くバツと言う方がいいので、バツと言ったらどうですか」と言ったら、バツと言ったな。何でもないとときでもあの人はバツと言っただけだな（一同笑い）。非常によかったね。新しい幕を開いたように思った。そういうものだ。

だから、アメリカの向こうを張って、アメリカかソ連かというぐらいいい。私はこれでいつ死んでもいいんだけど、なんで死んでもいいかというと、日本の国に生まれて、アメリカの大統領の執務室と、モスクワの共産党の大將の部屋と、両方の部屋に行っていて、椅子に座って物を言ってきたので、まあ結構だな、と思っているからです。

伊藤 中曾根さんは、前からお話に出ていますように、「戦後政治の総決算」ということを謳い文句にしているわけですね。従来の基本的な枠組をタブーなく見直す必要があるというご意見ですね。これは前から、先生が新生クラブでおっしゃっていたと思うんですが。

藤波 そうです。でも結局何をやったかというところ、国鉄の改革だけではすな。

伊藤 形になったのは、ですね。

藤波 形になったのはね。言ったことはいろいろなことを言ったけれど、教育なんかやらなかったに等しいな。考えてみると、いろいろなことに手を着けてやったけれど、結局は国鉄の改革だけだったな、という気がするんだけれどね。

いまの小泉内閣を見ても、いろいろなことを言っているけれど、一つでいいから、一つでも成功すればいいな、と思って見ていますな。ようけ手を着けすぎだ。規制改革なんてできるわけがないんだ。

伊藤 わけがないですか。

藤波 私が官房長官の時に、総理官邸で、「順番に各役所の事務次官以下、局長みな来い」と言ったら、一番先に厚生省が来た。藤森「昭一」君が官房副長官でおったからだろうけれど、その関係で厚生省が来た。「藤森氏は厚生省出身」。口を開いて、「官房長官、あんた、奥さんが真っ黒けになってもいいんですか」と言うので、何を言うのかなと思って、「どういう意味や？」と言ったら、「フランスから化粧品をようけ入れてきたが、日本の国で買うようになったら、フランスの女性にはいい化粧品でも、日本の女性には合わんというのがありますよ。真っ黒けになりますよ」と、一番先にそう言った。ああ、そうか、真っ黒けの規制改革か。いや規制改革は無理やな、とそのときに思った。思ったけれど、こんなものに負けたらいかんので、「いや、そんなこと言うてもあかん、そんなことを言うても、やるものはやらなにかんので、真っ黒けは大歓迎や。政府が責任持ってるので、君ら厚生省も責任持てよ。それでもやらなければいけんのや」と言ったのを覚えているけれどね。

伊藤 やっぱり、あんまり成果は上がらずですか。

藤波 上がらずだね。品目を挙げてやったけれど、アメリカははじめ

外国からは評価されたけれど、そんなに日本の国があおるときに規制緩和したとは思わん。

伊藤 緩和しても緩和しても規制があるわけですね。

藤波 あるわけだな。

伊藤 ですから、新生クラブの考え方と中曽根総理の考え方がだいたい一致しているということですかね。

藤波 そうですね。あのころはそうだったんだろうな。

■ロッキード事件、田中角栄氏の裁判

伊藤 ちょうど中曽根内閣の時に田中さんの「ロッキード求刑・判決という」問題が起こるわけですね。最初に懲役五年の求刑が行なわれる。求刑が行なわれた段階で、国会で田中辞職勧告を巡って、議会がけっこう荒れますね。そして一審判決があったときにまた、議員辞職問題でもめるわけですが、こういう問題が起こったときは、藤波先生はどういうことになるわけですか。

藤波 えらいこっちゃん、という気持ちだな。「田中曾根内閣」と世の中で言うぐらい、田中派主導の内閣ですからね。その田中派の親方が辞職勧告を受けたり、裁判の結果が出たりということだから、後藤田「正晴」さんが、副長官の私の上におるわけだ。えらいことだな、というのが実感だな。どうしたらええやろと思うんだけど、しょうがない、時間が経たなければしょうがないなと思った。最終的には、山より大きな猪は出んわいと思うよりしょうがない。山より大きい猪は出ないけれど、この猪は大きいぞと思って、田中さんの裁判だけは見守ったな。

伊藤 辞職勧告を出す、出さないで、相当もめるわけですね。

藤波 うーん、ねえ。

伊藤 後藤田さんはなんとかして守りたいということでしょうけれど、それをやっていたら内閣は危ないかもしれない。

藤波 危ないな。このあいだ有事立法の時に民主党が賛成してもいいというような話で、戦後初めてだと言ったけれど、「当時は」社会党というのはものすごくはつきりしておったからね。公明党も竹入「義勝・委員長」以下、こういう疑獄関係についてはうるさかったんだ。

伊藤 田中問題については本当にうるさいでしょう。

藤波 末端がうるさい。上の方はわかっておったから。竹入とか、やると思うけれど。

伊藤 上の方は、お世話になったりもしていますから（笑い）。

藤波 下の方はうるさかった。そのうるさは、いまの比じゃないね。そういう気がするな。これはえらいことになったものだな。

伊藤 とりあえずそれは、辞職勧告を出させないで済ませたわけですね。

藤波 そうです。それは総理大臣の気迫だろうな。小さなことは公約しても嘘を言ってもいいんやと、そんなことを言ったらいかん。小泉さんはいかん。

伊藤 「田中曾根内閣」なんて言われているところで、田中さんを一所懸命擁護するようなことをやったら、中曾根内閣としては具合が悪いんじゃないですか。

藤波 有罪になってもしょうがないと思ったな、あのとき。

伊藤 あとで、ロッキード事件の一審判決が出たときには、先生は首相執務室で中曾根さんと一緒にテレビを見ていたと言われているが、一審判決は有罪ですからね。

藤波 そうですね、きつかったな。

伊藤 それでまた辞職を巡って、今度は議会在空転してしまうことになるわけですね。

佐道 有罪判決というのは予想の範囲内でしたか。有罪になるだろうという予想でいらっしやいましたか。

藤波 そんな安易なことではなしに、有罪になってもしょうがないな、という気はあったな。なってもしかたないなと、自分ではね。人には口では言えん話だな。

伊藤 言えない、ですか。

藤波 言えない。言ったら大変だ。気持ちでは、やられるだろうなと思っただけ。ほかに方法はなかったでしょう。いま考えてみても。

伊藤 だからといって、国会に根回しをしたり、派閥間の調整をしたりということとは、副長官の仕事ではないでしょう。

藤波 うん。

伊藤 だけど、やるんですか。

藤波 やらざるを得んでしような。内閣がつぶれるからな。

伊藤 田中派が反乱を起こしたら――。

藤波 終わりだな。

伊藤 終わりですね。じゃあだいたい苦勞なさった、ということですか。実際には駆けずり回ったわけですか。

藤波 そうですね。

佐道 先生は官房副長官ということで政府の側にいらっしやるわけですが、こういう問題だと、例えば党、自民党の中で先生と一緒に走って走り回る、よく動かれる方はいらっしやったんですか。

藤波 党は党でやっていたと思うけれどね。

伊藤 いちおう党と官邸とは別でしょうけれど、実際には――。

藤波 連絡はとるけれどね。

伊藤 そういうときでも、中曾根派として動くわけですか。

藤波 いや、官房副長官として動く。

伊藤 田中派はこのときは、何が何でも守りたいわけでしょう。

藤波 守りたいわけだな。守りたいけれど、本当に田中さん――。

守りたいので一所懸命、そう思わなきゃいかん。

伊藤 田中さんの威令はまだ行なわれているわけでしょう。

藤波 そうです。完全に威令は行なわれている。竹下、金丸もそうだったんだな。

伊藤 まだ反乱を起こしていませんからね。

武田 中曽根さんは藤波先生に相談されたりしたんですか。

藤波 相談するというほどのことはないけれどな。中曽根さんはこういうふうに通じるだろう、こうだろうということは、だいたい私が想像するな。それで、おれが何を言わんでも藤波はこうやるだろうと中曽根さんは私のことを思うな。そういうふうに通じる。

伊藤 じゃあ活発にディスカッションをして、結論を出して、という話ではないんですね。

藤波 ない、ない。もっと恥ずかしそうなものだよ。

佐道 以心伝心、阿吽の呼吸ですね。

武田 そのとき、中曽根さんが田中さんと会談されるんですね。それは先生は関係されているんですか。

藤波 知ってはいるけれど、こっちは、やっとなる、やっとなる、と思っているだけのことだ。政治家というのはみんなそうだろうな。以心伝心でしょうな。

伊藤 とにかく会見をして、辞職なさいますか、と意向を聞いたんでしょうね、形として。

藤波 辞めない、辞めない、と言ったんだらうね。

武田 物の本によると、「事態は重大である」と中曽根さんが言った。「それはわかった」という(笑い)。

伊藤 それはそうだな。辞める、とは言わないだらうな(笑い)。

佐道 中曽根さんと田中さんにも阿吽の呼吸があったんでしょね。

藤波 あったんでしょね。

伊藤 シビアな問題だったら、ストレートに物事は言えないでしょ

う。

佐道 そうすると、阿吽の呼吸の阿吽が合っていればいいんですが、ズレが生じたりすると困りますね。

藤波 しかしそれは、山より大きな猪はない、と思っていなければしょうがないでしょう。最終的にはそうだ。

■日米防衛協力について

伊藤 ちょっと話が変わりますが、後藤田さんが「アメリカの要請で武器技術の供与を決定した」という談話を発表します。これでまた社会党がガーガー言うわけですが、後藤田さんが発表されるということは――。

佐道 中曽根さんが決めたということですね。

伊藤 そうでしょうね。この武器技術供与の問題ですが、これはかなり大きな決断だと思うんですね。前から問題になっていたものを中曽根さんがひょいと決めた。これはアメリカにずいぶん評価されたと思うんですが、こういうことになると、特に藤波先生に相談があるというレベルの話ではないわけですか。

藤波 面と向かっての相談ということではなしに、今度はこういう問題があるな、これはいつごろ解決しなければならんとか、こういう格好がいいな、ということとはだいたいわかるな。阿吽の呼吸だ。伊藤 でも後藤田さんという方は、ちょっとこれには抵抗があったのかな、と思ったんですけれど。

藤波 中曽根さんだね。後藤田ということとは。

伊藤 同時に、日米防衛協力委員会がシーレーン防衛に関する共同研究を始める、ということもやっているわけですが、これも中曽根さんのリーダーシップということですか。

藤波 外務大臣は安倍晋太郎ですね。防衛庁長官は誰だ。加藤紘一か。

武田 谷川和穂さんですね。

藤波 谷川和穂だったらいかなな。

伊藤 谷川さんはやる人ですね。

藤波 うん。やる。

佐道 その直前に、前回の話もありましたが、たまたま訪米をされて、日米首脳会談で、例の不沈空母発言をされて、防衛協力を進めましようという話をした直後ですね。

伊藤 防衛問題は、藤波先生はそれほど深く関わっていないわけですか。

藤波 1%を突破するときは官房長官だった。

伊藤 日本の安全保障政策についてというのは藤波先生がやっているわけですからね。

藤波 1%を突破するときは、竹下「蔵相」と、加藤紘一防衛庁長官。外務大臣の安倍晋太郎もいたな。それから藤尾正行がいたな、政調会長だ。総理官邸の小食堂で一晩徹夜して朝になったら、もういぞ、やりたい人がやればいいだろうと言った。気がついたら、秘書官がみんなひげ剃りの道具を持ってきて、朝みんなでジョリジョリひげを剃り始めたのを覚えているわ。それでいまの顔ぶれを思い出したんだ。

伊藤 1%を超えることあるべし、ということですね。

藤波 そうそう。

伊藤 でも実際には超えなかったわけですね。

藤波 超えなかったわけですね。そんな枠に囚われるのはおかしいということだ。

伊藤 これは三木内閣の時の決定ですね。それは前の前、その前の内閣ですが、そういうことも全部拘束するわけですか。

藤波 するわけだ。

伊藤 拘束しても、新しい内閣が、いやそれには従わないよといえ、それでいいわけですね。

藤波 新しい政策決定をすればいい。

伊藤 閣議決定をすれば、ですね。いっぺん決めたら未来永劫に動かせないといったら大変なことになりますからね。三木内閣だって、いつまでもこれでやっていくんだというつもりで決めたわけではないと言われていますからね。

藤波 そう言われていますか？

伊藤 当面、ですね。

藤波 当面ね。

伊藤 当面というのは、どれぐらいの当面かわかりませんね。

佐道 当面にもいろいろありますからね。

■ 土光敏夫と行革審、国鉄改革

伊藤 さっき教育臨調のお話でしたが、臨時行政調査会の最終答申が「一九八三年」三月に出されました。「増税なき財政再建」をスローガンにした答申だったわけですが、この答申を受けて、五月に土光「敏夫」さんが行政改革審議会、行革審の会長に就任されます。「ふじなみレポート」「昭和五十八年五月」によれば、「藤波」先生が土光さんに電話をしたというこのようですが。

藤波 総理大臣だろうね。

伊藤 中曽根さんから言われた、ということですか。

藤波 そうでしょう。

伊藤 土光さんは前からご存知ですか。

藤波 知ってはおりましたし、会長になってからも、土光さんのと

ころに政治全般のことについて報告に行ったことを覚えています。それを聞いていて、最後に手を握って、「すまんけど頼むぞ、頼むぞ、中曽根を助けてくれよ」と言ったな。

伊藤 土光さんのほうから、ですか。

藤波 ええ。それは覚えてる。

伊藤 藤波先生は土光さんという方をどういうふうにごらんになりますか。

藤波 わからんけれど、思うことが純粹だね。泣きながら、涙を流してやっていたからね。手を握って、「頼むぞ、頼むぞ」と言っただけ。

伊藤 では行革審の会長としても熱心におやりになったわけですか。

藤波 そうだと思うな。

伊藤 この行革審の進行を、官房副長官として、あるいはその後も官房長官として追いかけていくということをされたわけですね。

藤波 そうですね。

伊藤 ずっとフォローしたわけですね。

藤波 そうそう。でも具体的には、そんなにやあやあ言うほどのこともなかったな、実効はね。国鉄の改革なんていうのは大きな問題だったね。

武田 その委員会の委員長も土光さんですか。

伊藤 国鉄改革は、ちょっと違うんじゃないかな。

武田 ちょうど同じぐらいの時期に、国鉄再建監理委員会ができてるんですね。

伊藤 再建監理委員会ができますね。この国鉄の改革には、藤波先生は直接には関わりがないでしょう。

藤波 総裁「↓仁杉巖」は、堤義明に頼まれてなっておった。国鉄総裁だ。そのクビを切ったときに初めてできたんだ。それは官房長官のときかな。

伊藤 官房長官になってからでしょうね。なかなか国鉄総裁が言うことを聞かないんですね。

藤波 国鉄が言うことを聞かないんだ。資料も持って来ないんだ。どれだけの部分が国鉄の分なのか、民間はどれだけかというふうないろいろな資料があるはずなんだけれど、それも持ってこない。非協力なんだ。「これはいかん、総裁は辞める。ときの声だから、中曽根内閣は国鉄の改革をやらなければいかん。外国も見ているから、どうしてもやるんだ」と言っただけで、中曽根さんはえらい勢いだっただけ。総裁のクビを取る、辞めてもらおう、ということになった。「そうですね、それだったら、来るときに関係があるので、堤義明に電話しますよ、いいですか」と言っただけで、目の前の電話を取って、交換に堤義明につないでくれと言った。それで中曽根さんに受話器を渡して、「総理自身が堤義明に断わりを入れてくれ」と言った。「すまんけど、総裁を辞めてもらおう」と言ったら、「そうですね」と向こうが言った。そのときに、これで国鉄の改革が動き出すな、と思った。総裁が反対だったら動きませんからね。

伊藤 それはとても進まないですね。

藤波 そうしたらそのあとで、「副総裁と技師長も、総裁と一緒に辞めてもらえ」と中曽根さんが言うんだ。「ああ、一つではいかんのですか」「三人にしろ。そうでないと改革が動かん」という。それでまた副総裁と技師長とに官邸に来てもらって、私が話をして、「総裁と一緒に辞めてくれ」と言った。あんなに辛いことはなかったな。

伊藤 やっぱり辞めてくれ、は辛いですか。

藤波 うん、辛い、辛い。それでも、飯は食ってきたけれどな。世の中になるべく恨みが残らんようにしようと思って、飯を食おうとって電話して、呼んできて飯を食った。あのときはえらかった、三人クビを切って辞めてもらおうときは。

伊藤 あまり辞めてくれということとは、それまでやっていませんか。
藤波 やっていない。私の性に合わんもの。平和主義者だからな。
それはこういうわけで、理屈から言ったらこうだよ、と言ってピシッと話すことは、後藤田さんではできるだろうけれど、できんな（一同笑い）。

伊藤 それは官房長官になってからの話でしょう。やっぱり後藤田さんじゃ駄目なんでしょうね。

藤波 そうかな。

伊藤 藤波先生がどういう顔で言われたのか、想像がつかないけれど。

平松 直接は関係なかったんでしょうけれど、四十五歳クラスで幹部に上っていくぐらいのがいらっしやいまして、直接は言わなかったのかな、あのときは。

藤波 中曽根さんが総理大臣かな。私は官房長官が終わったあと、金丸さんが幹事長かな。金丸さんの下で私は国対委員長をやった。

そのとき金丸さんが、いまでもよう忘れんけれど、私の顔を見て、「ああ、山を下りてきたな」と言ったね。「はあ、下りてきました。

下りてきて、先生の下で働かせてもらいます。教えてください」と言った。よく覚えてるな、「山を下りてきた」という言い方は面白いな。やっぱり山の上で風当たりがきつかったと思ったな。

伊藤 官邸は山ですか。

藤波 官邸は山だ。

伊藤 高い山だから空気が薄いかもしれない（笑い）。

藤波 そういえば、うまいこと言ったな。

伊藤 官房副長官というのはけっこう忙しい仕事でしょう。

藤波 そうですね。

ASEAN訪問

伊藤 この「一九八三年四月に、中曽根さん、安倍さんと一緒にASEAN訪問に出かけられますね。これはご記憶にございますか。

藤波 出かけた。

伊藤 インドネシア、タイ、シンガポール、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、と回っているわけですね。

藤波 タイは二つ目ですか。

武田 ニカ国目ですね。

藤波 新聞記者を連れて行ったらみんな腹を下したね。元気でいたのは、私と中曽根の息子だけだった。中曽根の息子「弘文」が一緒に行ったんだ。中曽根の息子と私とが忙しくて、段取りするのに一所懸命だった。酒を飲む暇がなかったもので、それがよかったんだ。ウイスキーの水でやられたんだな。

伊藤 よく言われますね。

藤波 息子と私と二人だけ残っただけだった。タイだった。タイの川の上で飲んだんだ。

伊藤 これらの国を歩き回って、一番印象的だったのはどこの国ですか。

藤波 マレーシアですね。クアラルンプールはいい街だと思ったな。静かで。

伊藤 当時マレーシアはそろそろ工業化が進んでいる時期じゃないですか。

藤波 そうですね。シンガポールもちゃんとしていた。

伊藤 シンガポールは、その時期はもうずいぶん発展していたでしょう。

藤波 そうです。中曽根総理がシンガポールのリ・クアンユーに会ったときに、「日本の国には織田信長と豊臣秀吉と徳川家康と、英傑が三人おって、それぞれみな役割が違うんだ。あんたはそれを三人分全部一緒にやったな」と、リ・クアンユーのことを言ったのを覚えてるな。リ・クアンユーは喜んでね。

伊藤 まあ、リ・クアンユーみたいな独裁的なやり方だったらいろいろなことができるでしょうね。中曽根さんは羨ましかったんだ(笑)。

藤波 羨ましかったんだろうと思うな。

佐道 各国首脳にも会われたわけですね。マレーシアのマハティールとか、スハルトとか、それぞれご印象はいかがですか。

伊藤 副長官は、そういう会談に出ているんですか。

藤波 あとをつけていく。

伊藤 じゃあその会見の場面にいるわけですか。

藤波 いるわけです。

伊藤 そういう指導者たちはどうですか。マハティールとか――。

藤波 みんな変わったな、フィリピンも変わっただろう。

武田 このあとに「マルコスから」アキノになったんですね。

藤波 イメルダの亭主がやっていた。フィリピンの総理官邸の横に大きな川が流れておって、そこからゴルフを打つと、川の向こう側まで飛ぶんだという。田中さんが来たときに、ここで打ってもらって、川の向こう側まで飛んだよ、という話を聞いたな。ああ田中さんというのはえらいもんやな、と思ったりした。だけど、フィリピンでは総理大臣だけが奥に入っていて、イメルダと私は横の部屋におった。イメルダをからかおうと思って、イメルダにかまったのを覚えている。「あんたはきれいな人や、日本にはおらん」と言った。それで総理大臣は出るんだけど、官房副長官中心で、イメルダ主催で、その晩に晩飯を食わしてくれたのかな。集まった。それ

でイメルダが「さくら、さくら」を歌ったんだ。「こんなきれいな人はおらんと思ったけれど、歌も上手や」と言って、ほめたのを覚えてるな。喜んだね。

伊藤 そうですか、藤波さんはそういうこともお上手で(笑)。

佐道 いろいろ各国の意見を聞いたわけですね。

藤波 そうです。聞いたわけだな。最後にはなんとかいう小さな国、ブルネイに行ったね。

武田 できたばかりですね。

伊藤 石油の国です。

藤波 暑い、暑い、暑かった。キーン、キーンと太陽が頭に当たって跳ね返る音がするような暑い国だね。

伊藤 そういときは一句生まれませんですか。

藤波 ずっと句集に載っているけれど。

■ウィリアムズバーグ・サミット

伊藤 その意見を背中に背負ったような形で、ウィリアムズバーグ・サミットに出かけるわけですね。

藤波 出かけるわけです。それは安倍さんと一緒に出発した羽田のことを覚えているけれど、誰も送りに来ないわけですよ。田中派は送りに来ない。田中判決の直後だから、誰も来ない。官房長官も羽田に来ないんだ。こっちは総理大臣のお供をしていくわけだからね。

伊藤 よう忘れんわ、あれは。えらい空気でしたよ。

藤波 それは政府専用機でしょう。

伊藤 政府専用機。普通なら送りに来るのを、送りに来んのや、みんな。竹下も来なかったな。

佐道 田中判決のほうが大きな問題だったんですね。

藤波 政府専用機。普通なら送りに来るのを、送りに来んのや、みんな。竹下も来なかったな。

藤波 そうですね。

伊藤 田中判決があったからといって、来ないというのは変じゃないですか。

藤波 おかしいんだけどね。

伊藤 このウイリアムズバーグ・サミットでは、ずっとついて行かれたわけですね。

藤波 ついて行きました。

伊藤 首相、安倍さん。それで実際に向こうの首脳と個別会談もやるんでしょうけれど、そういう場面にもくっついて行ったりするんですか。

藤波 できるだけそうしました。

伊藤 じゃあ一応、当時のレーガンとかミッテランとかサッチャーとかコールとか、そういう向こうのリーダーたちの横顔もごらんになっているんですね。

藤波 そうですね。いま言った中では、コールが中心だったな。

伊藤 どうですか、そういうリーダーたちの印象は。

藤波 のびのびやっていると感じだね。

伊藤 中曽根さんはそういう中で――。

藤波 今日の朝だ、「二〇〇三年エビアン」サミットの写真を見ておったけれど、小泉は端のほうだね。ウイリアムズバーグのときは、親方はどこに立つのかなと思ったら、パットと真ん中に立ったんだ。おお、やっとなる、やっとなると思った。そういう写真を撮ったら日本の者は喜ぶわな。

伊藤 それはそうですよ。

藤波 あれは、ようするな、あんな恥ずかしいことをようすると思っただ（一同笑い）。いろいろな国がいるのに、レーガンの横に割り込んだ。

伊藤 だけどあれで中曽根さんは十分に成果を上げたでしょう。藤

波先生はそうは、よういかなですか。

藤波 ああ「いうように」は、いかな。小泉も中途半端だ。

伊藤 やっぱり中曽根さんの響みに倣わなければいかなでしたね。

藤波 なあ。

伊藤 でもまあ、小泉さんもサマになってはいたと思いますけどね。

藤波 ああいうことはあるのかね。プッシュが途中から抜けて中東に行ったとか。本当に言われているような話があるんだろうか、フランスの「シラク」大統領と。

伊藤 フランスに対する嫌がらせというか、いやみでしょうね。やはりこのサミットでの中曽根さんの大活躍というのは、ご自分の目でごらんになったということですか。

藤波 そうです。ブリーフはみな官房副長官がやらなければいけませんから、会議が終わって出てくると、ピタッと横について、親方がパッパと二言、三言いうのを聞いておって、ああそうですかといって、それをちょっと長くして、新聞記者に言うわけだね。ブリーフだから、やらなくてはしょうがない。

伊藤 それは副長官の役割なんですか。

藤波 そうです。

武田 そのときは控え室か何かですと待っていらっしゃるわけですか。

藤波 そうそう、横の部屋でね。それで小便に来たり、廊下に来たりするときパットと横に行つて聞いて、それを新聞記者に説明するわけだ。

伊藤 新聞記者は別のところにいるわけですね。

藤波 別のところに固まっているわけだ。

佐道 そうすると、藤波先生の語り一つで、記事の内容が大きく変わるようになりますね。

藤波 そうです、そうです。安倍さんが行かずに、もう一人の副長官が行ったね。参議院のね。それで安倍晋三があちこちのテレビに出ておるんだらう。いま二人だな。大相撲にも来ておったしね。総理大臣杯を渡すのに。

コールなんていうのは、ウイリアムズバーグでふっと窓を開けたら、向こうでゴルフをしているのさ。それでふっと見たら、アメリカの国務長官がいるんだ。あれおかしいなと思ったら、「ちょっと早く起きて、会議の前にやっています」と言うんだ。それで、のびのびしているなと思ったね。

伊藤 全然緊張なですか。

藤波 緊張なしですね。

伊藤 だけど首脳会談といっても、長い間かかって各国の意見を詰めているわけですからね。だからだいたいのことは事前にわかっているわけでしょう。

藤波 それでも日本の場合にはぎこちないな。ウイリアムズバーグに行く前に、ホワイトハウスで、レーガンと中曽根の会談があつて、私が入って、向こうは主席秘書官一人が入ってやっていたら、横の部屋から国務長官が入って来た。安倍外務大臣が外におったもので、大問題になったんだな。大河原「良雄・駐米大使」は、「もうわしは辞めて責任を取る」といったけれど、「まあまあ、君が辞めてもしょうがない。この際、外務大臣に辛抱してもらえ」といった。

それで、「中曽根に馬鹿にされておらんと、早く帰って来い」といって、日本から「安倍外相宛に」やいやい電話がかかってきた。これはいかんなと思ったな、あのときは。そんなことがあっただけに、日本の場合にはぎこちないですね。それをアメリカの場合は、政治家がバツとゴルフをやっているから、これは気楽なものだな、のびのびしているな、とつくづく思ったな。

伊藤 こっちもゴルフでもやればよかったのね。

藤波 ねえ。

佐道 ウイリアムズバーグは、中曽根さんにとってはサミットデビュー、最初のサミットですね。

藤波 そうですね。よかったですね。

佐道 それにしては非常に評価される成果をお上げになったと思います。

藤波 そうですかね。

武田 だいぶいろいろな発言をされていますからね。

藤波 発言はうまいんだ。

佐道 中曽根さんの発言も、先生がブリーフで伝えたものが出てくるんですか。

藤波 言葉や物の言い方や何から、みんな中曽根さんのものだな。

私はそれを伝えたことは伝えられど。

朝日新聞の大月「信次」というのが新聞記者で、そのときの随行者団長だったんだ。その大月は自殺して死んだんだな。大したものだ、編集局長ぐらいになったんだけれどね。そういうことでは、運命があるな。政治家にもあるけれど、それぞれ運命があるな。

「記者へのブリーフでは」どこまで言うていいのかわからんもので、そのころ外務省の広報室長をしていたのにやらせた。どこかの大使をしていた、もう辞めたか。ベトナムの大使か何かをしていた。それに話をして、「ずっと張り付いて、ドイツとかフランスとかアメリカのブリーフをしているところに行つて聞いてこい。一人ずつ、どれぐらいの話をしているかというのを聞いて、ちょっとまとめるまでのあいだ、おれはいろいろな話をしているから、そのあいだに見て、どこまで話していいのか聞いてこい」と言った。日本だけ余計にしゃべったらいかなでしょう。それはブリーフの難しいところだ。外国の様子を聞いてきてから日本のブリーフィングを始めるということにしたのは、初めてだったな。それしか方法がないと思っ

た。

武田 藤波先生は、発言の内容とか会議の様子はほとんどわかっているわけですか。テレビモニターか何かはあるんですか。

藤波 モニターはない。本人に聞かなければ。

伊藤 でもだいたいのは組は決まってるから、中曽根さんがポイントを言えばわかるわけでしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 言わないことまで言ったり。

武田 そういうことですかね。

藤波 そう、そうです。

佐道 このサミットで中曽根さんがレーガンさんとかに大いに認められたのは、SS20のミサイルに関する発言ですね。これはアジアにも大いに関係があるので、全体的にやっつけようとか、そういう話をされたと思います。そういうサミットに向けての日本の取り組み方は、事前にきちんと準備があったと思いますが、それは副長官と藤波先生がお入りになって、まとめて行かれたわけですか。

藤波 まとめるのは役所がまとめるんだ。総理官邸で、それを聞く会議をやるんだ。そのときには「自分は」必ず入っている。

伊藤 最後のまとめは官邸でやるわけですね。

藤波 やるわけですね。

伊藤 外務省とか通産省とか、いろいろな人が入って。

藤波 そうそう。

佐道 先生も、このときシェルパをしていた本野「盛幸」さん、のちにフランス大使になられた、とかとけっこうお会いになったりしていませんか。

藤波 ありましたな。

伊藤 本野さんとは――。

藤波 何回も会った。本野はいま何をしているんだ。

佐道 いま野村総研が終わって、外国の銀行の顧問とかをされたりしていますね。

伊藤 けっこうお忙しいみたいですよ。

藤波 そうですか。地味な男だけれど、面白かった。よくやったな。

伊藤 シェルパってなかなか大変だと思っんですね。

藤波 ねえ。地味な男だけれどな。

伊藤 外務次官が定期的に総理と官房長官にはブリーフしますが、副長官はあまり関係ないわけですか。それとも一緒に聞いているんですか。

藤波 いや、一緒には行かないな。

伊藤 ご自分についている、外務省からの出向の補佐する人からいろいろ情報を聞くわけですね。

藤波 そうです。岩田「達明」というのは今度キューバ大使になった。

■中曽根・石橋論争、施政方針演説について

伊藤 これはご記憶にあるかどうかわかりませんが、九月の秋の国会で、中曽根・石橋論争がありました。石橋政嗣という社会党の委員長と防衛論争をやって、石橋さんは「非武装中立論」でやるわけですから、中曽根さんとは真っ向から対立した。「ふじなみレポート」〔第七十九号「十月へ」昭和五十八年九月〕では「非武装中立でやっていけるという保証はまったくないわけで、平和のための積極的外交と適切な規模の防衛力の整備が必要だ」と述べておられます。石橋さんとの論争は、ごらんになっていたわけですね。

藤波 そう、そう。あの頃は必死だったね。

伊藤 先生は石橋さんなんかとは全然接点がないわけでしょう。

藤波 ないわけです。石橋さんというのはなかったな。
 伊藤 石橋・中曽根論争だったら、さぞや面白かったろうと思うんです。

藤波 面白かったね。

伊藤 火花を散らすような状態だと思うんですが。この非武装中立論なんていうのは現実的ではないとお考えだったと思いますが、社会党のこういう考え方については、その当時はどう思っておられましたか。なんでそういう議論が成り立つのか。

藤波 戦後日本の大きな流れの一つなんでしょうな。それに乗っかっている。民主党も、横路「孝弘」をはじめとして、一定の頭であるから、菅「直人」も小沢一郎を忌避したり、ということになってくるんだろうな。いろいろと思いついておったけれど。

伊藤 防衛問題、憲法問題になると、民主党はもしかすると分裂するかもしれませんね。

藤波 うん。

伊藤 このあいだの有事法制の問題ではかろうじて、なんとか抱えましたけれど。横路さんが起立採決しているから、世の中変わったな、と思つて（笑い）。

佐道 中曽根・石橋論争のときには、中曽根さんもかなり事前に準備をして臨まれていたという感じですか。

藤波 時間はないけれど、まあいろいろ話をしておつたんでしょ。第一回目の総理の施政方針演説のときなんかは、官房副長官も入って、秘書官連中も一緒になって、官房の連中も一緒になってやっただけだね。いまでも思いつく。長嶋の家だ。もう長嶋の家におつたろう。

小池 成城の長嶋茂雄の家ですね。

藤波 もう、そこにおつたんじゃないかな。

伊藤 それは最初のときだけですか。

藤波 最初の時だ。最初の時は覚えておるけれど、二回目以降は、国連演説なんかは私も一緒にみたけれど、施政方針演説というのはだいたい秘書官が責任を持ってやるんだらうな。

伊藤 秘書官が中心ですか。

藤波 そうだな。あれは役所的だからね。

伊藤 それをいかにも役所らしくなくしゃべらなければならぬでしょう。

藤波 そうだな。

佐道 中曽根さんは秘書官がつくられた施政方針演説にかなり注文を出されるほうですか。

藤波 あとから手を入れるんだ。どんどん手を入れる。夜遅いのは苦にならないんだ。血圧は低い方だから。朝は機嫌が悪いけれど、夜の遅いのはいいんだ。どんどん手を入れる。

佐道 じゃあかなり真っ赤になるんですね。

藤波 そうです。

伊藤 それをまた清書して読むわけですね。

藤波 そうそう。

伊藤 あれはどうしても読まなければならぬんですね。参議院と衆議院と同じことを言わなければならぬから、違ったら具合が悪いでしょう。

藤波 言わなければいかん。二度言う、ということもあるし、はみ出して言うのと困るからな。どれだけ手を入れても、読んでいけば間違いない。空中戦をやると間違いを起すからな。

伊藤 中曽根・石橋論争なんていうのは初めから物事がわかっていてやっているわけではありませんから、足を踏み出すこともあるだろうし、それが面白いんだらうと思えますけれど。

佐道 しかし論争の時は横で見えておられるわけですね。

藤波 そうです。

伊藤 ハラハラするものですか。

藤波 いや、ハラハラせんな。

伊藤 やってる、やってる、というようなものですか。

藤波 やってる、やってる、だな。

佐道 もっと頑張れとか(笑い)。

伊藤 石橋さんもこれで議会での花形ですからね。

藤波 石橋のあとは誰だったかな。前は横浜の市長をした(伊藤

飛鳥田「一雄」)飛鳥田さんだろう。社会党の党首というのは値打ちがあったけれどな。

伊藤 もう社会党は社民党と名前を変えてからほとんど存在感なしだから。

佐道 土井たか子さんがいるというだけで。

伊藤 土井党になっちゃったんだ。

■各国首脳の訪日

伊藤 この年の秋に、各国首脳が次々とやって来ます。レーガン、胡耀邦、コールというふうに、どんどん訪日がありました。レーガンさんの場合、日の出山荘での接待をやるわけですが、こういうことには先生は関わられるんですか。

藤波 関わるけれど、浅利慶太が中心ですよ。

伊藤 まあそうでしょうね。演出ですね。

藤波 どんなふうにするかという演出だね。

伊藤 浅利さんというのは、かなり中曽根さんが信用していたんですか。

藤波 そうです。信用していたな。

佐道 浅利さんは官邸にいらっちゃって、いろいろこういうプロゲ

ラムを相談されるんですか。

藤波 そういうときもあるし、電話で話すこともある。大平政治の中心でもあったし、中曽根さんも中心でやってきたな。毎年暮れ、十二月末に劇団四季の忘年会があって、それには中曽根康弘、藤波孝生、牛尾治朗などは必ずおったね。浅利慶太が挨拶して、その年に客を惹きつけて成功した俳優の表彰をして、みんな歌を歌って、本当に涙を流して、感激的な忘年会だ。いいねえ。このあいだ手紙を出したところだ、あれは懐かしいといって。

伊藤 レーガンさんが日本に来られたときの印象はどうでしたか。

藤波 振り付けをしたら必ずやる人だ、ということだね。振り付け通りにしゃべり、かつ歌えというときには歌うし、やるときにはやるんだらうと思った。アメリカというのはそういうものだと思っただけ。役者だからな。

伊藤 もともと役者なんですからね。

武田 日の出山荘の時には、レーガンさんにもこうしてくださいという振り付けを、浅利さんのほうから、あるいは中曽根さんからかもしれませんが、されるんですか。

藤波 頭を越えてやるだらうな。やるけれど、こうしてください、とは言わんだらうと思うな。

伊藤 まあそうでしょうね。日の出山荘に行くにはヘリコプターか何か使ったんですか。

藤波 使ったね。

伊藤 そういうときは、官房副長官は行くんですか。

藤波 日の出山荘に行ったのは覚えてる。

伊藤 行ったんですか。そんなに広いところじゃないでしょう。

藤波 そうそう。寒いところだね。

佐道 日の出山荘でこういう出迎え、接待をしようというアイデアは、浅利さんなんですか、中曽根さんなんですか。

藤波 中曽根さん。

佐道 じゃあ、日の出山荘でやるうという中曽根さんのアイデアに従って、あとの振り付けを浅利さんがやるんですね。

藤波 そうそう。

佐道 しかし警備の問題とかで、警察はいろいろ大変でしたね。

藤波 そうだった。

伊藤 大変だったでしょうね。裏山の問題がある。

藤波 次々と来たというけれど、昭和天皇がいたからよかったね。

本当に昭和天皇という人は立派な人だった。本当に立派な人だった。うちは伊勢だから内輪みたいな話だけれど、「どうだ、どうだ」と昭和天皇は私にも言ってくれた。

伊藤 各国首脳はまず天皇に拝謁するわけですね。

藤波 そう、打たれるわけ。威風堂々と言うけれど、昭和天皇には威風があったね。中味はどうってということない、植物がどうのこうのというような話なんだけれど、それでも威風があったな。「どうだい、きみは若くして官房長官になったけれど、先輩はいじめないか」と私に言ってくれたときは、ああ、この人のためには死んでもいいな、という気になった。「いえ、大丈夫です、大丈夫です。おかげで元気でやっております」と言った。

伊藤 いじめられて泣いております、とは言えないでしょう。

藤波 言えんわなあ。よかったな。

伊藤 中国から来た胡耀邦なんていう人はどうでした。

藤波 胡耀邦もよかった。中曽根さんは胡耀邦が好きで、胡耀邦、胡耀邦と言っていたけれど、中国の中では権力がじきに鄧小平中心になったんだな。胡耀邦というのはしっかりしておったし、体は小さい方だけれど、腹はできておると思ったんだけれどな。

伊藤 権力闘争には負けちゃうわけですね。

藤波 負けちゃうわけだね。

伊藤 中曽根さんも、将来は胡耀邦だと思っておられたんだと思いますけれどね。

藤波 あの頃はそう思ってたとき合っていたと思うけれどな。

伊藤 西ドイツのコールさんはどうでしたか。

藤波 コールは体も大きいし、中曽根と気も合うわ。中国は、鄧小平なんかも大事にすればよかったと思うけれど、鄧小平の時代が来るとは思わないだろうな、アメリカなんかもね。そういう意味ではまっとうな政治家なんだね、中曽根康弘というのはね。

伊藤 日本がある程度経済大国になったし、中曽根さんという存在があるし、各国の首脳が次々と訪問してくるということですかね。

藤波 そうです。そういうことだね。

伊藤 次々と外国の大物がやってくると、官房副長官といってもけっこう忙しいんじゃないですか。

藤波 忙しいは忙しいけれど、忙しいというだけで、何も責任はないわな。

伊藤 責任はないですか。

藤波 何も責任はない。

伊藤 こういう各国の首脳がやってきたときの責任は、やっぱり外務省ですか。

藤波 外務省ですね。

伊藤 じゃあ外務省は大変なんですね。

藤波 外務省は大変だ。

佐道 先生は官邸にいらっしゃって、外務省との接触もずいぶんおやりになったんですね。

藤波 ああ、外務省が多くなるわ。

佐道 この時期、外務次官は松永「信雄」さんですが、松永さんという方のご印象はいかがですか。松永さんはその後五年駐米大使をやられて、そのあと政府代表をやられて、外務省外交官としても、

戦後では――。

藤波 立派だと思っね、松永さんは。ブレないな。ときどきブレるやつがおるでね。

伊藤 松永さんはこのとき知り合っただんですか。それとももっと前からですか。

藤波 いや、その頃ですな。

伊藤 その頃からずっと。

藤波 そうですな。

伊藤 立派な外交官だと思いますね。

■解散、総選挙

伊藤 さて、最後になりますが、十一月二十八日、野党四党が信任案を上程するというところで、中曽根さんは解散権を行使して、パツと解散する。解散をして、自分で勝たないと、本場に権力基盤が固まらないということもあるんだろうと思いますが、解散にはあまり向かない時期だったと思います。田中さんの問題で自民党が非常に評判が悪くなっている時期ですから、あまりいい時期ではないですね。でも解散に追い込まれるといいますか、自民党の中も走り出しているということもあるんでしょう。この解散の問題については、何かご記憶がございますか。

藤波 福田ピン「福田一」さんが衆議院議長で、田中さんが早く選挙やれ、参議院と一緒にやれと言ってきたのはこの前話した通り。どうせ一回はやらなければいかな、という気はあったから、その時期やな、という気はしたけれどね。

できるだけ回ろうと自分では思っているだけのことで、回って、回ってしているあいだに、家内がぶっ倒れてしまったということ

覚えてるな。官房副長官の最後の時だ。

伊藤 それは自分の選挙区ですか。

藤波 自分の選挙区で、私の代わりに家内が回っていた。私は全国を回っていたんだ。

伊藤 そうか、奥さんが「主人をよろしくお願いします」と言っ、回って歩きますね。

藤波 やるわけだ。それで選挙が終わって文部省に相談したら、東京医科歯科がいいというので、東京医科歯科に入院させて、学長と院長に、「一ヶ月だけ預けるで、頼むわ」と言った。肝臓病だったんだ。いまはもう忘れておるんだけれどね。二回目の入院だ。初めの衆議院選挙の時に入院して、二回目なので、せいせい一ヶ月でやってくれと言った。

宮内庁の役人が次々と外国からやってくるのに、みんな家内を連れてくるもんで、「副長官、奥さんどうですか、奥さんどうですか」とばかり言う。それで一ヶ月たったら出てくるっていついたら、「退院したのは私が」官房長官になってから、半年かかったな。

「この大学は国立大学だから、もうやめる。一ヶ月患者を預かるっていついたのが、半年もかかるような大学は駄目だ」「官房長官、本当にそうおっしゃるなら、私どもも本気で言うけれど、一ヶ月でもし奥さんを出したら、またまた働き出すでしょう。奥さんを大事にしようと思ったら、半年ぐらいかかりますよ。半年ぐらいかけて預からんことには。官房長官、奥さんを大事にするんでしょ」という。「ああ大事にする、大事にする」といった。だから宮内庁の役人が一番喜んだね。

伊藤 各国の首脳が来たときは、奥さんの代役は誰がやるんですか。代役はなしですか。

藤波 代役なし。一人。

伊藤 寂しいですね。

藤波 しょうがないわ。

伊藤 小泉さんだって、自分の姉妹とやっているでしょう。田中さんは真紀子さんとやっていましたね。何か親戚のお嬢さんとか、頼めばいいのに。

藤波 いまの官房長官公邸の女の人が飯をつくってくれたから。

平松 まだいらっしやいますね。

藤波 いるな。総理が公邸に入るところから仕方ない、官房長官も入らなければいかんなと思って入ったけれど、ゴキブリは来るし、トカゲは入ってくるし、それはエライところだったな。毎朝起きて、東西南北に手を合わせて、「すまんけど、今日一日中曽根内閣頼む、助けてください」と言って手を合わせて拜む。それが朝の日課の始まりだ。それはいまでも覚えているけれどね。

伊藤 官房長官の公邸ですか。

藤波 そうです。公邸の二階で寝る。

伊藤 副長官には「公邸が」あるんですか。

藤波 副長官の時は入らなかったな。

平松 公邸はあるんですか。

藤波 ないだろう。九段の議員宿舎だ。

■中曽根氏続投、組閣へ

伊藤 その選挙で、自民党が二五〇と、とんでもなく減っちゃったでしょう。

藤波 そうだった。

伊藤 それで無所属の八人を追加公認して、やっと過半数を確保するという事態になったわけですね。そこで、中曽根さんの継続を認めるかどうかということで、ちょっともめるわけですね。

藤波 大もめだ。

伊藤 大もめですか。だけど中曽根さんを認めないと、どうするんですか。ここで二階堂が出てくるわけですか。

藤波 二階堂が出てくるわけだ。竹入も、民社党の佐々木「良作」も、全部二階堂がいいというんだな。自民党の中でも鈴木を初めとして、看板をあげた。あれは結局は福田だな。福田は群馬で強かったからね。総理大臣になって、中曽根さんが国に帰るといって、そうするかといって一緒に行くかといっている誘われて、官房から官房副長官と、総務副長官の浅草の深谷「隆司」とで、二人がついていったんだ。助さん、格さんだ。

各市町村で、市町村長主催の総理大臣歓迎パーティをやるわけだ。昼間でもやる。そして市町村長の挨拶を聞いておると、だいたいこの地域は福田が強いとか中曽根が強いかわかる。それはなぜかというと、福田派のところは、福田内閣のあとだから、「二人目の総理大臣ができました、皆さんおめでとう」という。それで「やっと待望の総理大臣ができました」というところは中曽根派だ。やっとできた、というのが本当に少ないんだ。選挙は福田のほうがだいぶ強いなとつくづくと思ったことを覚えているわ（一同笑い）。

佐道 わかりやすいですね（笑い）。

藤波 わかりやすいだろう。わかりやすいよ。

平松 中選挙区はそうです。

藤波 全部そうだね。小淵というのは一人もおらへんのや。

佐道 小淵さんの時はどんな挨拶をしたんでしょうね（笑い）。

藤波 ねえ。

伊藤 この二階堂擁立というのはかなり現実的なものだったんですか。

藤波 派閥だ。

伊藤 これをつぶしたのは田中さんですか。

藤波 金丸がつぶしたんだ。「わしも嫌いだ。わしも中曾根は嫌いだけれど、国のために働いておるやないか」というのが金丸の理屈だった。あのときは金丸さんが総務会長をしていたかな。

伊藤 自民党の最高顧問会議で、田中さんの政治的な影響力を排除するという条件にした総裁表明をやって、中曾根さんの継続ということを決めるようですが、そのへんのこと、副長官としては、あまり直接見聞きしていません。

藤波 わからんな。見聞きしていない。金丸ということは、知恵は竹下だ。竹下が知恵を出して、田中さんがまとめた話だろうな。

伊藤 しかし田中氏の政治的影響力を排除するといえば、田中派との関係はどうなるんですか。これで少し田中離れをするという形になるわけですか。

藤波 一般にはね。一般にそう思わせただんどうな。

伊藤 この時最高顧問会議の席上にはたしか二階堂さんもいたと思うんですけど。

藤波 福田赳夫もおっただろう。福田の仕業だな。

伊藤 これは、福田さんとかそちら側の圧力を受けた形で、しかし田中氏の政治的影響力を排除すると言ったわけですから、こういう圧力を利用して、ちょっと田中離れをやって見せた。

藤波 そうだね。

伊藤 これは中曾根さんにとって、都合が悪いわけでもないでしょう。それで二階堂をつぶしたんですから。

藤波 だけど、山より大きい猪はないと思って行ったんだな。そう思っているあいだにそうなったんだろう。そう思ってやったら、そんなことにならない。自然にそうなったものだと思うけれど。エライもんだね。福田だな。

伊藤 それで総理指名があって、第二次内閣ができるわけですが、このときの組閣には、先生は直接関わるんですか。第一回目の組閣

の時は、後藤田さんが官房長官で、後藤田さんは、「副長官に藤波が来るんだっただらいいや」ということで、官邸におられたわけでしょう。

藤波 そうです。待っていた。

伊藤 この第二次内閣の時はどういう具合だったんですか。

藤波 人事は中曾根さんだね。

伊藤 だって先生はこのとき官房長官になれるんでしょう。一番最初に官房長官を決めるんじゃないですか。

藤波 決めるんだと思うけれど、周りから誰か推薦して、それを受けてやるんだらうな。推薦はあったらうな。

伊藤 このときは官房長官として、後藤田さんが統投ということはなかったんですか。

藤波 なかったな。

伊藤 藤波さんという声は――。

藤波 早く決まったんだな。

伊藤 これは中曾根さんの意向ですか。

藤波 そうです。初めからそういうつもりだったんだらう。

伊藤 そうしたら、官房長官としては組閣に直接関わることになるんじゃないですか。

藤波 いや、三役は知らんだらうな。普通、三役がみな一緒に決める。

伊藤 三役を決めて、官房長官を決めて、それで組閣、ということですね。

藤波 普通はね。だけど、中曾根さん自身がやったんだらうな。中曾根自身が人事をやったと思うよ。

伊藤 このときにも田中派から六人入閣しますので、田中派をある程度重用している。そうせざるを得ないですね、当時の自民党の中の状況から言えば。問題は、新自由クラブから入閣させるというこ

とですね。それで田川「誠一」さんを入閣させた。

藤波 田中六助の仕事。党の仕事だ。

平松 「田中六助氏は」幹事長ですね。

藤波 幹事長だ。

伊藤 田川さんというのは、藤波先生の昔からの知り合いじゃないですか。

藤波 誰を取ってどうするか、というのは官房長官の仕事だな。私は一所懸命、田川さんと会ったり、河野「洋平」と会ったり、西岡「武夫」と会ったり、山口「敏夫」に会ったりしたんだけどな。

伊藤 このときは、なんで田川さんなんですか。田川さんは代表をやっていたのかな。代表は河野さんじゃなかったですか。

藤波 河野が田川さんを私に推して、「おれが入るわけにはいから」だったので、田川になった。

伊藤 田川さんとは気心の知れた間柄ですか。

藤波 ええ、そうですね。

伊藤 田川さんというのはかなり気難しい人じゃないですか。

藤波 難しいけれど。新自由クラブもどこまで本気になってやったのか知らんけれど。おれも一緒にやるといっただけで、おじさんのつもりでやったんだらうな。新自由クラブのおじさんみたいな存在だからね。本人も真面目に大臣を務めてくれたね。実に一所懸命やってくれたよ。

伊藤 何か真面目な人なんですね。

藤波 真面目な人なんです。中国問題なんかでも真面目に、一所懸命やってくれたな。

伊藤 さて、それでいよいよ官房長官としてスタートということで、今回は官房長官の時代のお話を伺いたいと思います。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第9回

日時：2003年7月2日

14:00～16:10

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（元政策研究大学院大学助教授）

川越 美穂（東京大学大学院博士課程）

平松 大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■中曽根内閣と岸信介、田中六助

伊藤 この前は官房副長官時代のお話を伺いました。今日は官房長官のときの前半ぐらいのお話でいっぱいだと思います。この前、新自由クラブとの連立の問題で、田中六助さんのことをちょっと伺いました。中曽根さんの「官邸日記」といって、『中曽根内閣史』の中で活字になっているものがありますが、それを見ますと、「一九八三年」十二月二十四日に岸さんの秘書の中村長芳さんが来て、岸さんの意向を受けて田中幹事長を推した、と書いてあります『中曽根内閣史』資料編 六三六頁。また同じ日の記述に「岸氏活動」ともあります。中曽根さんの日記からは、第二次内閣組閣時には自民党の長老であった岸さんの影響がかなりあったんじゃないかという感じを受けます。また田中六助さんと岸さんとの関係も、かなり密接だったんじゃないかと。

伊藤 この田中六助という政治家について、先生のご印象はいかがですか。

藤波 新しい世代の私どもとしては、せいせい田中六助までだな。

岸信介というのはずっと上の方だ。

伊藤 まあ、そうですね。

藤波 ねえ。引退しているわけやで。そういう時代的な立場としての田中六助という者を考えて……。そうですか、岸さんとか、そんなことが『中曽根内閣史』に書いてあるか。

伊藤 ええ。

藤波 よく遊びには行ったけれどね。

伊藤 誰のところに、ですか。

藤波 岸さんのところ、御殿場に。岸さんが御殿場において、官房長官時代に一人で遊びには行ったけれどな。

伊藤 何かいま、御殿場の岸邸が公開されているみたいですね。

藤波 ほう。

佐道 官房長官時代、お一人で行かれたんですか。

藤波 はい、遊びにね。

伊藤 それは官房長官の時代ですか、もっと後ですか。

藤波 官房長官の時代。

佐道 その前は、あまり行かれなかったんですか。

藤波 行かなかった。岸さんは皇學館大学の総長をしていたから、伊勢へはよく来られたんだな。だから私は接点はあるんだけれどな。

もう過去の人だったよ、何とも思わんな。

伊藤 過去の人だけれど、影響力はあったんじゃないですか。

藤波 精神的にはあっただろうな。

伊藤 「藤波氏より」上の世代にはあったでしょう。

藤波 中曽根さんにはあった。

伊藤 中曽根さんにはあったと思いますね。田中さんも当然関係があったんだろうと思いますが、六助さん自体に対してはどうですか。

あまり先生は接点はないですか。

藤波 六さんは病気があったからね。

伊藤 やはりあの人も糖尿ですか。

藤波 そうそう。糖尿だ。自民党の本部がやられて、私は官房長官

をしてもらったと思うな。国対委員長じゃない、官房長官だった。幹

事長が来たな。自民党本部が火事で燃やされたときに来たわ。その

ときに金丸さんと一緒に、六さんを迎えたのを覚えておるな。無理

して、幹事長としてよく頑張っているなと思った。それから自民

党を代表して演説をしたのはいつだったかな。私が官房長官の時だ

な。「読み上げている原稿の」一字一字がこれくらい大きな字だ

な。「読み上げている原稿の」一字一字がこれくらい大きな字だ

た「両手指で直径十センチぐらいの輪をつくる」。

伊藤 ああ、有名な話ですね。

藤波 大事なとき、ここぞというときにきちんとやる田中六助、というものを頭に置いてやっていたね。若い者には一つの目標だったという気がしますね。

伊藤 あの人は宏池会でしょう。

藤波 そうです。

伊藤 ですから先生とはもちろん派閥も違うわけですし、年代もだいぶ違うと思いますけれど。

藤波 違いますね。

伊藤 何か一緒に、ということはありませんね。

藤波 そうですね、ないですね。

伊藤 やはり古い型の政治家なんですか。必ずしもそうは言えませんが。

藤波 どうかなあ。「六さんはこんなことを考えているよ」ということを、テレビ朝日の三浦甲子二が来て話をしてくれたな。官房長官のときに。

佐道 官房長官になられたときに、岸さんのところによく遊びに行かれたというのは、何かきっかけがあたりだったんですか。

藤波 いや、政治の報告に行った。いろいろな動きをね。岸さんに関わらず、例えば鈴木善幸さんのところにも行くとか。

佐道 党の長老への報告ということですか。

藤波 そうそう。その一人として岸さんのところに行った。皇學館の話とは別だね。

伊藤 そういう長老への報告というのは岸さんぐらいですか。ほかには――。

藤波 鈴木善幸さんとか、福田赳夫さんもそうだったかな。三木さんのところへも行った。

伊藤 ああ、前総理大臣ですね。

藤波 そうですね。

伊藤 そういうことをするのは慣例みたいなものですかね。

藤波 でしょうな。歴代やっておるんじゃないですかね。

佐道 岸さんは先生にとって、元総理大臣、党の長老という存在以上のものではなかったですか。

藤波 ない、ない。あったほうがいいのかな。

佐道 いろいろ（笑い）。

藤波 ないよ。年代的にね。もう岸さんではないと思ったけれどな。

伊藤 そうですね、僕は先生と同じぐらいの歳ですが、岸さんのインタビューをやったときに、これは相当なおじいさんだと思いましたが。ただ迫力はあったように思うんですね。

藤波 迫力はあったね。

■第二次中曽根内閣の組閣

伊藤 同じ日「の「官邸日記」に、「党、組閣基本方針作る」とあって、田中氏の影響力排除云々という言葉はありませんが、いくつかの方針が書かれています。先生はこの前、この第二次内閣の組閣は、とにかく中曽根さん一人で行ったというお話をされましたけれど、党も組閣方針みたいなものを作ったようなんです。そんなことが本当にあるのかどうかわかりませんが、完全に中曽根さんが一人で行ったというわけにもいかんのでしよう。

藤波 改造の時ね。

伊藤 改造じゃないでしょう。これは第二次です。先生が官房長官になられるときですね。

藤波 中曽根さんは自分の頭で全部やったんだろう。

伊藤 全部ですか。

藤波 やってましたね。

伊藤 じゃあ、藤波さんにも相談なしですか。

藤波 ない。

伊藤 そんなものですか。それで十二月二十九日の「日記」〔六三六〜六三七頁〕には、「新内閣は党内閣、新人二人、平均年齢三歳強低下、昭和生れの官房長官出現」とあります。これは藤波先生のことを言っているわけですね。中曽根さんは内閣の若返りとか政治の世代交代を狙ったんだらうと思いますが、ふだんはそういう言動をなさっていましたか。

藤波 いや、そんなに若い者だけ重視するようなことはなかったな。

伊藤 でもいちおう世代交代ということは言っていたんじゃないですか。そうでもないですか。

藤波 世代交代は思っていたから、例えば「中曽根内閣の関係にも」加藤紘一とか、羽田孜とか、渡部恒三とか、昭和生まれもだいぶ出ているんだね。そこへ行く前に、田中六助とか中川一郎とか、大正生まれがおるわな、竹下派でも。そのへんがポイントだったんじゃないかな。配置としては、歳をとったのや若いのや入れたけれど、中心はそのへんだったと思うね。

伊藤 あとで三人に絞られる宮澤さん、安倍さん、竹下さん、そのへんが次の世代だという感じですか。

藤波 宮澤さんは別ですね。いくつですか。

伊藤 宮澤さんは「いま」八十を超しているね。

藤波 大正一桁でしょう。

小池 一桁ですね。大正八年だったかな。

伊藤 それぐらいの世代だと、先生よりだいぶ上になりますね。

藤波 そうそう。

伊藤 先生たちが若返りといったら、もう昭和生まれになるわけ

すね。

■官房長官の職務

伊藤 それでいよいよ「先生は」官房長官ということになるんですが、官房長官というのは一般的にいつて、どういう仕事なんですか。

藤波 まあ、いろいろなことをしたけれど。

伊藤 要するに官房の長のわけでしょう。

藤波 一つはね。一つはというのは、一つは総理大臣の補佐をするということだ。上を立てる。それから官房の中をまとめる。いま宮内庁次長をしておる羽田田「信吾」さんなんかが主席参事官。内閣官房をまとめるということですね。それから、国内の外回りのいろいろな層といるいろいろな連絡を取る。外国とも連絡を取る、というようなことですね。

伊藤 その場合は、外務省との関係はどうなるんですか。

藤波 そこは安倍さんが上手であって、外務省の意見を総理大臣の意見として、中曽根さんを国際舞台に立たせてくれたから、それによかったんだね。

伊藤 官房長官というのは、外務大臣が不在の時は外相代理になりますね。外交と非常に関係が深いわけですね。

藤波 深いですね。

伊藤 それはそういう関連になっているわけですか。

藤波 特に中曽根さんの時に、「外務大臣と防衛庁長官が外に行くときは、官房長官が代理をやれ」という指示があって、きちんと私が代理をやったんです。中曽根さんになってから初めてのことだな。伊藤 そうすると外務省との関係もかなりきちんとしておかなければいかんわけですね。

藤波 そうです。

伊藤 もし官房長官不在の時は、外務次官か何かかブリーフィングに来るわけですかね。

藤波 月に一回ということはない、週に一回ぐらい来るな。

伊藤 次官が、ですか。

藤波 うん。大蔵省と、両方だな。

伊藤 大蔵省も次官ですか。

藤波 大蔵はいろいろだ。外務省は事務次官だな。

伊藤 官房長官というのは、大蔵と外務と一番密接なんですか。

藤波 そうです。

伊藤 それで秘書官もそこから来ているわけですね。

藤波 そうです。

佐道 さきほど、中曽根さんの日記に「昭和生まれの官房長官」とあったわけですが、先生は当選七回ということですね。官房長官というのはちょっと前に話題になりましたが、官房機密費とか、そういうものも持っておられるし、党と政府のパイプになる非常に重要な役目であるということ、かなり重みにあるポストということになると思います。先生ご自身は、官房長官に指名されたときには、どういうふうに思われましたか。

藤波 中曽根さんを支えて行かなくてはいかん、と思った。上を支えていく。それが官房長官の仕事だろうと思いましたが。性格もあるしね。私自身が何かを示さなければならんとは思っていない。アメリカで生活して、テレビのスイッチを入れてずっと見ていて、日本人で出てくるのはゴルフの青木「功」と政治の中曽根だけだ。アメリカで出てくる日本人は二人だけだ。私は「中曽根総理を」助けられればいいな、と思った。

佐道 官房副長官を一年間やられてから官房長官になられたというのは、ご自身の中ではすんなり移行できたということになるんです

か。

藤波 うん。この前も言ったように、木村俊夫さんの「官房長官をやってから官房副長官をやったという」例があったから。自分としては、派閥の重要なことから見て、ああそんなものだなと思ったから、案外得心してできたな。

伊藤 官房副長官と長官ではずいぶん違いますでしょう。そうでもないですか。

藤波 副長官の時は、「長官の」後藤田さんというより、総理大臣を支えなければいかんということで、官房副長官を一年間やってきたから。

伊藤 じゃあ似たようなものですか。

藤波 似たようなものですね。

伊藤 上に人がいない、ということですね。

藤波 官房長官だったら、上に人がいないね。

伊藤 いちおう中曽根さん、中曽根さんといっても、副長官の時には、上には後藤田さんがいるわけでしょう。

藤波 いたなあ。気がついたらずっといた。

伊藤 気がついたら、ですか（笑い）。後藤田さんというのは相当強烈な個性の持ち主じゃないですか。

藤波 いや、私は誰かに押さえ込まれているとか、誰かに仕えなければと思ったのが中曽根さんにあったということは珍しいことだ。絶対服従だ。

伊藤 後藤田さんにはそうでもないんですか。

藤波 ないな。そんなことは思わなかったな。

伊藤 このあと総務庁ができて、後藤田さんが総務庁の長官になります、総務庁ができると、いままでの官房長官の職務とはどう

いう関係になるんですか。

藤波 上を見ていたから、あまり横を見なかったな。そんなに気に

はしなかったな。

伊藤 後藤田さんとは、そのあともしょっちゅう会ったりしていたわけですか。

藤波 ええ、いろいろな話をした。このあいだも平和研で理事会があった。

伊藤 先生も理事なんですか。

藤波 そうです。ずっと理事です。

佐道 中曽根さんは、官房長官としての藤波先生と頻繁に意見を交換されるというタイプですか。

藤波 一日に十回でも会う。新聞の「首相の一日」を見れば、官房長官と何回も会ったと書いてあるけれど、もう横の部屋だからね。

竹下さんは、「横の部屋だけれど、行くのに十年かかるよ」と言っていたけれど、なんとということはないな、と思ったな。一日に十回でも総理の部屋に飛び込んで行って、いろいろなことを話したな。

伊藤 すぐ隣の部屋なんですか。

藤波 すぐ隣の部屋だったな。もう新しいの「首相官邸」はできたんだな。

平松 もう使っています。

伊藤 中曽根さんのところは周りを固めている人がいるでしょうけれど、官房長官は自由に入れるんですか。

藤波 そうです。官房長官だけは自由に入れるな。

佐道 ドアが別になっているわけですか。

伊藤 もちろんドアは別でしょう。別の部屋でしょう。

佐道 つまり首相の部屋に出入りするのに、普通の出入口とは別の出入口があるわけではないんですか。

藤波 それは秘書官がおるところを通って行くだけだけれどね。けれど、官房長官だったら、「総理はおるか」とか「会ってくれ」とか言わないで、入って行ったな。行ったり来たりした。

佐道 党の方とは頻繁に連絡をされることになると思うんですが、それは「相手は」幹事長ということになるわけですか。

藤波 テーマによってだね。幹事長の場合もあるし、総務会長の場合もあるし、政調会長の場合もあるし、国対委員長の場合もある。

伊藤 党と政府の定期的な会合というのはあるんでしょう。

藤波 ある。週に一回だね。

伊藤 党・政府連絡会議ですか。

藤波 政府与党連絡会議。

伊藤 どういう顔ぶれでやるんですか。党は三役ですか。

藤波 党三役、それから参議院の議員会長、それから国対委員長。政府の方は官房長官。あと誰がおったかな、主要閣僚だな。二つあるんだ。政府与党代表者会議というのと連絡会議とがあるんだ。

伊藤 どっちが頻繁に開かれるんですか。

藤波 週に両方ともあるんだ。与党とは特に連絡を密にしてやるということだったな。

伊藤 やはり一番の問題は議会対策ですか。

藤波 そうですね。議会対策とか、いろいろな問題がどう影響するかということをお自由に発言して、みんなやっていたな。例えば日本

航空の飛行機が群馬県で「御巢鷹」山にぶつかったことがあったな

「一九八五年八月十二日」。あんな時も、政府与党はそれぞれの立場でいろいろな意見を言うわな。そういうことがあっていいと思うな。

中曽根さんがちょうど外国に行っていて、両方とも「合同慰霊祭」

出なかったんだ。大阪の中之島「同年十月二十二日」にも、東京の日比谷「十月二十四日」にも、官房長官が代理で行って、総理大臣

の弔辞を読んで、遺族に接してきたな。そういうものだ。そんなふうに、行ければ総理大臣が行くし、総理大臣が行けない場合は官房長官が行くというようなことですね。

非常にありがたいことに、これは後藤田さんに感謝しなければい

かんけれど、副長官一年と官房長官二年と国対委員長二年と、合計五年間、NHKの国会討論会にはほとんど毎週出た。今でもだいたいぶ歳をとったりしたけれど、「ああ、官房長官がおるわ」といって、新幹線に乗ったり、飛行機に乗ったりすると「私を見つけた人が」安心したように言うわな。それは五年間テレビに出してもらったおかげだな、と思う。それから官房長官は何人もおるし、国対委員長も何人もおるけれど、五年間出っぱなしで出ているとそういうことになるんだな、という気がしたな。いま、しみじみとそう思いますよ。

伊藤 それは藤波さんが論客だから、ということですかね。

藤波 いやいや、そうじゃなしに、回数だな。

小池 NHKに——（佐道 数多く出るのは、論客でいらっしやっただからお出になったんでしょう）（笑）。

藤波 いやいや、そんなことないと思うな。

伊藤 でもなかなか難しいじゃないですか。討論会に出て発言して、それが問題になったりしたら党内で問題になることもある。

藤波 なるべく難しいことを言わんようにしたが、いまの人は難しいことを言うなあ。わかりやすく話をしなければいかん。国会討論会というのは、私はわかりやすいということが一番のことだと思ってきた。

■官房機密費

伊藤 さっきの官房機密費の話ですが、お話しできることはありませんか。これは本当に官房長官が——。

藤波 裁量だ。

伊藤 裁量でできるんですか。

藤波 できるんですね。

伊藤 いちいち総理の承認は取らないんですか。

藤波 そんなことはない。官房長官の見識だ。

伊藤 かなり額が大きくなって、ですか。

藤波 額が大きくなって。

伊藤 多かろうと、少なかろうと。

藤波 うん。

伊藤 よく話に出ますけれど、右翼の連中なんか官房長官を狙って取りに来ると。

藤波 ううん、まあ話はいろいろだけれどな。

伊藤 まあ、そんなこともあったんでしょね、きっと。でもそれをいちいち官房長官がやっていたわけではないでしょう。

藤波 総理大臣の金ということになってはいるけれど、だいたい官房長官がみんな知っておってやったことだろうな。

伊藤 だけど例えば恒例で、毎年来たやつにこれぐらいやるんだ、という決まり切ったものは、官房長官自身でいちいち対応するということではないでしょう。

藤波 でしょうな。

伊藤 誰がやるんですか。

藤波 ——。

伊藤 官房長官の配下にそういうことをやる係がいたんですか。

藤波 いない、な。

伊藤 金庫は官房長官の部屋にあるんですか。

藤波 官房長官の部屋にあるはずだ。あるけれど、いちいち金庫から出すということではないな。

伊藤 じゃあどうやってお金をあげるんですか。

藤波 金庫があって、金庫があるぞ、というようなものだけのことだろう。

有馬 官房長官が直接指示する場合は、誰に言うんですか（伊藤この男にいくらやれ、というの）。

藤波 どうかな。

伊藤 自分でお金を掴んで、やったわけではないでしょうね。

藤波 特に誰か決まっておって、ということじゃなかったな。

有馬 それは口頭で言うわけですか。当然、書いたりしないわけですね。

藤波 そうそう、口頭だね。

伊藤 でもちゃんと、誰にいくら渡したかわからなければ、あと一体いくら残っているのかわからないじゃないですか。

藤波 そんなのは自分の頭の中で計算できなければ、しょうがないわ。

佐道 それができないようでは官房長官は務まらないと（笑い）。

藤波 務まらない。

伊藤 そうですか。しかし何百万、何千万というお金から、何十万里までのお金をいろいろなランクで人に渡したりするわけだから、それを全部覚えてるんですかね。この人には去年いくらやったから、今年もいくらやらなければならぬとか、いろいろあるんじゃないですか。

藤波 どうかなあ。

伊藤 やっぱりこの問題はとぼけられるか（笑い）。

佐道 いまこういう季節だから、こういうお金をといることは、党の方の問題になるわけですか。官房機密費とは違うわけですか。

藤波 党もあるな。

伊藤 幹事長が持っているんでしょ。

藤波 党は幹事長が経理局長と相談して、やる。

伊藤 政府のお金は（佐道 もうちょっと違うことに使ってますね）。

藤波 官房長官だね。

伊藤 例えば誰かが外遊に行くというようになるとお金もらいに来るとか、総理から、「あの人の餞別をやってくれ」というのもあるんでしょ。

藤波 たまにはあるんでしょな。

伊藤 そんな他人事みたいなお金をおっしゃって（笑い）、ご自分が官房長官だったのに。

藤波 とにかく、金庫はあるけれど、金庫の金を自分で左右して、どっちに持っていくとか、ある人に何をやるとか、そんなことは考えたことがない。

伊藤 誰かがやっていたのかな。

藤波 それは、自然にそうなったんだけど。意図的に自分で何かをしようとしてやったわけじゃないんだな。

小池 例えば外国の要人が来られたときに、外務省機密費から出す場合もあるんですが、外務省機密費は少ない。よく、お土産みたいなものを交換しますね。そういうお金を出すようなことがあると、「はい」といって、先生は官房長官として、取って行きなさいという形でやったので自然に出て行った、ということ、自分はそこにはあまり関与しなかったということですか。

藤波 そうそう、自然だね。自然だね。そういう場合でも、オーストラリアがどう、ニュージーランドがどう、というようなことを考えたことはないな。誰かが外務省と話していたのかな。

伊藤 いろいろな支払いは、キャッシュでやるんですか。小切手で

藤波 小切手じゃない、キャッシュでしょう。

伊藤 ということは、金庫の中に現金が入っているということですね。

藤波 ああ、入っているよ。そういうことになっているんだな。

伊藤 どうもわからない（笑い）。

藤波 金庫を開けて、金庫から何百万と出して、それを誰かに払うということは、した覚えがないな。

伊藤 そうですか。じゃあ誰かにやらせていたんだな。

藤波 誰かやったか、と言ったら、誰もいないだろうな。自然に、だろうな。

伊藤 「自然に」ということはないでしょう(笑い)。

佐道 先生ご自身は、官房機密費というのは非常に有効に活用されましたか。

藤波 よく、足りるとか足らんとかいう話があるけれど、自然に――。金を使ったからうまく行ったとか、そんなことじゃなしに、誠心誠意やれば解決する。それは金も多少要るのかもわからんけれど、金でどうこう、ということはないな。

伊藤 そうですか。僕は誰に話を伺ったときだったかな、岸さんだったかな、「人間は何事をかを為すためには誠心誠意が大事だ。ただ誠心誠意というのは裏付けがなければいかん」というお話がありましたので、その裏付けというのはつまり、いまの金庫の中のものなんでしょうね。

藤波 「裏付け」という言葉の中には、非常に計画的に、これだけ裏付けがあればいいだろうというような話があるな。それは裏付けは要ると思うけれど、きわめて自然に裏付けなければいかん。

伊藤 まあ、そうですね。それはそうです。

藤波 ねえ。そうすると、本当にそう思っていないと、そうならんからな。本当にそう思うことが大事なんだ。

伊藤 いや、なんだかいまのお話はよくわからなかったんですが、機密費の問題ですから、これ以上はしょうがないですね。

藤波 機密は機密だからな。

佐道 これは官房長官の引継ぎの中で重要な問題になるわけですか。藤波 ならんな。そんなことはならん。

伊藤 前の官房長官がいっぱい使っちゃって、残ってないよ、といったら困るじゃないですか。

藤波 困るんだろうと思うけれどな。いまはワイワイ言い過ぎるんじゃないかな。もっと自然なものだよ。

佐道 その「自然」というのが実態がなかなか掴めないの、「自然」という言葉の意味がよくわからない(笑い)。

伊藤 たぶん、藤波先生の頭の中では「自然」なんでしようけれど、僕らの方にはうまく伝わって来ない(笑い)。

■調整役としての官房長官

伊藤 内閣というものは、親玉は中曽根さんに決まっているんですが、中曽根さん自体も、もちろんいろいろ調整役をすると思います。が、それを助けて、調整の中心になるのは官房長官ではないですか。

藤波 そうですね。

伊藤 これは先輩の代議士から、「官房長官、『一忍は百事を為す』』と言われた、と「ふじなみレポート」(第八十三号「三月へ」昭和五十九年二月)に書いてあるんですが、そうすると忍耐しなければいかんわけですね。自分を出さないで、あっちとこっちとうまく調整するというようなことですね。これはなかなか大変なことだと思いますが、藤波先生の前からのお話ですと、調整ということが非常に大事だということですね。官房長官といたら、ずいぶんハマリどころだったんじゃないかと思うんですが、その調整ということは、党との調整もあるだろうし、閣僚の中の調整の問題もあるでしょう。それから党外、新自由クラブとも、国会の中の問題であれば国対委員長とも連絡を取るでしょう。野党ではありますが、民社とか公明あたりとはいろいろな接点があるでしょうし、場合によっては社会

党とも接点があるだろうと思います。そういう調整はいろいろな場面でやるわけですか。

藤波 そうです、いろいろな場面でやる。

伊藤 夜飲む、なんていうことも入るわけですか。

藤波 それはまあ、夜飲んだらいいなとか、そんなことは思わないで、自然にそうなる場合はそうなるな。

伊藤 あまり作爲はないんでしょうが、自然に懇親するといえば、机を前にして議論し合うのと、料理屋に行って酒を飲みながらやるのと、先生はゴルフをおやりになるかどうかわかりませんが、ゴルフをやりながらしゃべるのと、いろいろな場面があると思うんですが。

藤波 毎日毎日、動いていけばいいよな。ギンギン言わないで動いていけばいい。

伊藤 そうするとやっぱり人間関係でしょう。

藤波 そうなるな。人間関係でしような。

伊藤 人間関係というのは、比較的頻繁に接触を持つ、コミュニケーションする、ということが大事なんでしょうか。

藤波 朝起きて、東西南北を拜んで、「今日一日、中曽根体制をもたせてください」というのは、そういうことだな。ひょっと思いついて、ああ民社にいったべん連絡しなければいかんとか、公明に何そのの法案で頼むという話をしなければならんとか、そういうことだな。そうすると動いていくな。今日から明日へ動いていく。今日から動いて明日になったら、ああ、ありがたいことやな、と思わなければいかん。ふふ、自然に。

佐道 今日「自然に」という言葉が非常に印象的ですな。

藤波 それは自分がおるから、自然にやれるんだね。例えば竹下内閣の時だ。中曽根さんが終わって竹下内閣になって、昭和天皇が亡くなって平成天皇になったときに、四月二十九日をどうしようというところになってきたんだ。弘ま四月二十九日を「自然のヨーこしよ

うと言った。昭和天皇さんは自然が好きだった。ちょうど十一月三日日は「文化の日」ということだった。「文化と自然とでいいから、自然の日にしよう」といった。向こうで話をして、議員会館でそう言ったんだ。終わってからだ。それで、「みどりの日」になったのか。今度また法改正したか。

平松 変えようという動きはありましたが、今回はたしか駄目だったんですね。

藤波 駄目だったんですね。あのときに「自然の日」にしてあげばいいんだ。神さんだけでなしに仏教も「自然」という言葉で、読み方は「じねん」だけれど、やっぱり自然しぜんなんだ。

伊藤 「自然」というのは同じような意味なんですか。

藤波 同じような意味だ。昭和天皇さんにふさわしい名前なんだ。今度は「昭和の日」にしようというのか。それを考えて、おれはもう官房長官と違うと思った。国対委員長になってからでも官房長官のようなつもりでやっていたけれど、それが終わったら、もういかな、と思った。だから自然になるといっても、自分がどこにおるかによって違うんだな。絶対に違うね。

伊藤 ということは、官房長官というのは相当重みがあるということですか。

藤波 あると思うなあ。総理大臣を補佐して、世の中のために一所懸命になって働くわけだから。働くということが目的なので、働いた結果のことを考えているわけではないけれど、まあ、そういう意味では重いんでしょうね。そのときにしみじみと思って、もう世の中のことについて物を言うまいと思ったな。

伊藤 なんて、ですか。

藤波 竹下なら竹下流があるし、安倍晋太郎には安倍晋太郎流があり得るし、宮澤さんには宮澤流があるし、細川には細川の流儀がある。現方の流儀を官房長官がどうまとめるか、幹事長がどうまとめる

るか、によって決まってくるわけだからな。つまらんことは黙って
いようと思って、それからずっと来たな。黙らざるを得ないことに
ぶつかってしまったって、黙ってきたけれど。自然に動くというけれど、
自然に動くためには、自分が自然に動く真ん中にいななければいかん
な。

伊藤 しかないまの「自然」というのと、ある程度自分を抑えて周
りを調整するということは同じことですか。

藤波 同じことだな。

伊藤 そうですかね。自分の心の赴くままにという「自然」とは、
全然違うわけですね。

藤波 違う、違う。

伊藤 世の中全体がなんとなく動いているその動きに乗っかってい
くということですね。

藤波 それで、どういうことが大事なのかということだけをピシッ
と決めて行かなければいかんな、自然に。例えばこの十五年間、事
件にも遭ったんだけど、考えてきたことは、今日デフレ政策でみ
んな辛い思いをして、毎日のように人身事故があって、飛び込み自
殺があったりしているけれど、中曽根内閣のときに何かすることは
なかったのか、ということだ。中曽根内閣のときにしてあげば、い
まこんなことは思わなくても済むやないかということがなかったか、
ということとずっと十五年間思ってきた。それは、経済が上を向い
ているときには上を向いているし、下を向いているときはなんとし
てもいかなのや、というのがいまの話だけれど。当時、何かなかつ
たかな、という気がするけれどな。「自然に」ということはなかな
か難しいことだ

伊藤 「自然に」というのは、本当に自然にというのはただ流され
ていくだけですから、そうじゃなくて自分で創らなければならぬ
「自然」でしょう。

藤波 そう、そうです。「自然体」と言うからな。

■靖国神社参拝と懇談会

伊藤 中曽根さんの靖国年頭参拝というのは、先生は同行されたん
ですか。

藤波 行かなかったな。八月十五日には行ったけれどね。

伊藤 これはちょっとよく意味がわからないのですが、「ふじなみ
レポート」に、その年の八月になると官邸の空気が重くなると書か
れています。

※「ふじなみレポート」(第八十八号「八月のことば」昭和五十九年七
月)には、次のように書かれている。

八月は地方ではお盆の月、六日の広島、九日の長崎における平
和祈念式典、十五日の戦没者追悼の式典へと進みます。昨年は官
房副長官、今年には官房長官として、二年続けて首相官邸の中で仕
事をしていて気付くのですが、八月が来ると急に官邸の空気が重
くなるのです。去年もそうでした。そのことを執務室に入っていっ
て中曽根総理に話すと、総理も「全く同感だ」ということでした。
戦争など国家権力の発動によって犠牲になられた方々、政治や行
政の過誤怠慢によって不幸になられた方々の霊が年に一回、政治
の中心として象徴的な建物である首相官邸へ帰ってくるのだと思
います。だから昔から「政治とは鎮魂なり」とされてきたのだと
思うのですが、中で仕事をしている者にとってはとても気の重い
一ヶ月で、過ちのない政治をすすめていくことを念じながら諸霊
の平安を祈る毎日なのです。

藤波 お盆だな。八月盆だ、田舎だ。みんな帰ってくる。国のため
に犠牲になった人がみんな官邸に帰ってくる。だから空気が重くな

るんだ。霊が帰ってくるんだ。

伊藤 官邸の空気が重くなるんですか。

藤波 そうです、空気が重くなる。

佐道 実際にそういうふうにお感じになるわけですね。

藤波 そうそう、自分で感じるわけ。ああ、来たな、来たな、と思っ
てね。

有馬 それは官邸で、ですか。官邸に帰ってくるという感じなんで
すか。

藤波 官邸に帰ってくる。国の意志によって決まったことで犠牲に
なった人はみんな帰ってくるんだ。そういう意味です。

伊藤 この八月の靖国神社参拝には、同行なさったんですね。

藤波 そうです。そのときは私と厚生大臣、広島の、いま生きてい
るかな、増岡だ。増岡と一緒にいった。

小池 池田派の、呉の増岡「博之」さんですね。

藤波 そうそう。渡部恒三の前に厚生大臣だった。あのときに、私
と増岡さんが総理のお供をして行ったな。あれはすごかった。全国
から遺族や旧軍人が集まってきて迎えてくれた。

伊藤 それは熱烈な歓迎ですね。

藤波 官房副長官のときに、靖国神社の境内の能舞台で、日本遺族
会の青壮年部が断食の祈願をして、「総理大臣がいっぺんお参りす
るといい」ということだった。総理大臣が行くわけにはいかんから
といって、八月十五日に代理で行けというもので代理で行った。あ
のときは総理に言われたのかな。官房副長官として行った。「いま
右から左にすぐにといいわけにはいかんのか。だから今日は総理大
臣が来て、どこから撃たれてもいかん、傷ついてもいかんので、私
が死ぬつもりで来た——モーニングを着てね——。断食はやめろ、
こんな陽の当たるところで断食をしていたら、身体をこわす辛い
ことになるから。まあ一年ぐらい時間をくれ。一年間ぐらい時間を

もらうあいだに、なんとか君たちの気持ちを満たすように努力して
みる。私は努力する」ということを言って、「今日は帰るから、断
食を解け」と言って帰ってきた。それが五十八年八月十五日だ。帰っ
てすぐに懇談会を出発させて、ちょうど一年目、昭和五十九年八月
十五日に懇談会の結論を決めることにした。

伊藤 年が少しずれているのかな。

有馬 懇談会の答申が出たのは六十年ですね。

藤波 お参りしたのも六十年か。「副長官ではなくて」官房長官の
時に行ったのか。前の年に行ったんだ。

伊藤 官房長官のときは、中曽根総理と一緒に十二閣僚が靖国神社
参拝、となってます。それが五十九年です。先に八月十五日の参
拝があって、あちこちから非難があったりして、あとから懇談会を
つくったんじゃないですか。

佐道 靖国懇は五十九年にできますね。それで六十年八月に内閣総
理大臣の資格で、中曽根さんが靖国神社を参拝する。

伊藤 中曽根内閣史の年表によると、「昭和五十九年八月十五日、
中曽根首相ら一二閣僚、靖国神社参拝」となっています。次の年の
八月十五日は公式参拝だったんですね。その前の昭和五十九年には、
非公式の参拝を十二閣僚でしているわけです。おそらくいま藤波先
生が副長官のときというのは、その前の年ですね。

藤波 副長官ではなくて、官房長官でしょう。五十九年か。八月十
五日であることは間違いない。

伊藤 それを公式参拝にしる、ということですね。

藤波 総理大臣がいっぺんお参りしる、ということだ。

伊藤 五十九年にお参りはしているんですね。

藤波 非公式参拝だな。

伊藤 「中曽根首相ら十二閣僚」と書いてありますから、その中に
先生が入っていないわけがないですね。ちょっと当時の新聞で確認

してみます。

※「ふじなみレポート」(第八九号「秋に向かって」昭和五十九年八月)には、八月十三日から十五日にかけて、日本遺族会青年部の人々が、首相、閣僚の公式参拝を要望する断食祈願を行い、十五日に藤波氏自身が靖国参拝した後には彼らを訪問し、「大臣等の靖国参拝に関する懇談会のご意見をよききいて政府の態度を決定したい」と伝えたと書かれている。なお靖国懇は昭和五十九年七月に発足、八月末にメンバーが最終選定されているが、「中曽根政権を支えた元官房長官が明かす靖国参拝の舞台裏」(『正論』三五一号 二〇〇一年)では、靖国懇のメンバーは概ね藤波氏が選定したと明言している。メンバーには林敬三(日本赤十字社長)、曾野綾子(作家)、梅原猛(京都市立芸術大学長)、江藤淳(東京工業大学教授)、末次一郎(青少年問題審議会委員)、芦部信喜(学習院大学教授)、横井大三(元最高裁判事)ら一五名がいる。なおこの懇談会の答申は昭和六十年八月九日に提出された。

靖国神社参拝についての懇談会ですが、ほかにも中曽根内閣のときには懇談会をつくっていますが、官房長官の私的諮問機関としてはこれだけなんです。ほかは総理の諮問機関なんです。これだけなんで藤波さんなのかな、と思ったんですけどね。これだ藤波 なんてかな。

伊藤 面白いものです。官房長官の私的諮問機関というのものもあるんですね。中曽根内閣は私的諮問機関をたくさん作ったので、議会で相当問題になるじゃないですか。先生も答弁に引張り出されてやっているみたいですね、『中曽根内閣史』を見てみますと。

※昭和五十九年四月十日の参議院予算委員会、公明党の峯山昭範議員が「私的諮問機関の問題」について質問している。また首相の靖国公式参拝後、昭和六十年八月二十七日の参議院内閣委員会では、社会党の野田哲議員、公明党の原田立議員より、私的諮問機関であ

る靖国懇の答申と政府決定との関係につき追究し、官房長官の藤波氏が答弁している(『中曽根内閣史』資料編 五二八頁)。

藤波 そういえば親方が、「いろいろな人の意見を聞いて方向を出してもらって、それをやろう」と言うものだから、「それならそうしよう」と言って――。

伊藤 それはいいんですが、「いわゆる八条審議会とどう違うのか」ということでだいぶ攻められて、「あれとはちゃんと区別してやっております」とか、苦しい答弁をしていますね。

藤波 ああ、そうですね。

伊藤 それで、「やっぱりちょっと紛らわしいこともありましたが」といって、半分弁解もしていますね(笑)。このやり方は議会を軽視するものだという意見があるんですね。

藤波 大統領的だということだね。

伊藤 そうですね。政策決定を議会ではなくて私的な諮問機関でやるのはけしからんじゃないか、ということなんです。じゃあ議会で委員会をつくってやってくれるかと思ったら、やってくれないわけですからね。

佐道 先生ご自身は、そういう審議会方式には違和感はありませんでしたか。それでいいじゃないか、と思われましたか。

藤波 いや、「違和感」はなかったね。メンバーが問題だ。メンバーさえちゃんとしていけば違和感はない。

伊藤 靖国懇のお話はあとでまた伺いますが、この前のお話で、中心になるのが林敬三さん、その代理が林修三さんで、似たような名前の二人ですね。

藤波 林修三という人は法制局だ。

伊藤 そうですね。靖国問題はまたあとで伺います。

■第二次中曽根内閣の三大改革目標

伊藤 第二次中曽根内閣の施政方針演説なんです、再開された国会で施政方針演説が行なわれるわけです。施政方針演説なんていうものは、閣議決定するわけでしょう。

藤波 そうです。

伊藤 そうすると官房長官もその起草に関わるんですか。

藤波 いや、だいたい秘書官室で書くな。

伊藤 こういうのは、中曽根さんが「おれは自分が書く」とは言わないんですか。

藤波 原稿の下敷きはあって、夜遅くまで赤鉛筆を舐め舐め、中曽根さんが書き直すわけだね。

伊藤 それを清書するのは誰なんですか。

藤波 清書は秘書官室でしょうな。

伊藤 中曽根さんは三つの改革をするといっていて、第一が行政改革、これは前からの話ですね。それから二つ目は財政改革、これは一つ目と非常に深く関連している。そして三つ目が教育改革ですね。だいたい先生もそういう心構えでお助けすることになるわけですか。

藤波 そうですね。できないよな。政治は、ようけ間口を広げたらいかん。

伊藤 でも結果的に、国鉄改革に絞ったじゃないですか。

藤波 結果的にはそうだな。財政改革ができなかったというのは、間接税をやれなかったからだな。

伊藤 次の内閣に引き継いだじゃないですか。

藤波 国対委員長で、私はよう忘れんけれど、毎日毎日、原健三郎

が議長をやって、「まだ大丈夫か、まだ大丈夫か」と言うから、「何が大丈夫か」といったら、小便が近いのが大丈夫かということだった。議長席に座っていてね。それが大丈夫か、ということだった。みっともない話だけれどな。

伊藤 そういうときは副議長に代わるということは一。

藤波 副議長に代わってもどうっていうことはない。やっぱり議長が動かなければいかん。

伊藤 議事進行しているときに、ちょっとトイレに、というわけにはいかんのですか。

藤波 いかん、いかん。

伊藤 議長というのは大変な職ですね。だいたいお年寄りになってるじゃないですか。

藤波 大変な仕事だ。

佐道 生理現象は仕方ないんじゃないかと思えますけれど、それは許してもらえないわけですか。

伊藤 し瓶でも置いておくんだな。

藤波 あの頃はね。

佐道 いまはそんなことはないんですか。

藤波 いや、いまでも基本的には同じだろうと思うけれどな。

佐道 中曽根さんの三つの改革ということでは、三つは多過ぎるということですか。

藤波 教育改革はできなかったんだ。財政改革もできなかった。

伊藤 それで行政改革の中の一。

藤波 国鉄の問題だけやった。

伊藤 国鉄だけじゃないですね。

小池 電電公社。

伊藤 電電公社もやったし、たばこもやったでしょう。これは目に見える形でやりましたね。

佐道 小泉さんは、何もかもやろうとしたから。

藤波 中曽根内閣も、何もかもやろうとしたんだけれどな。

伊藤 でもたくさん望んで、一つぐらい結果としてできるということじゃないですか。初めから一つに絞っていたら、それがさんざん集中攻撃を食らって、つぶれちゃう。

佐道 それぞれ三つについて、ここまでやりたい、という目標はあったわけですね。できる、できないは別にして。

藤波 それぞれの担当者はそうだろうけれど、内閣、党を含めた体制としては、そんなに何をどうするというにはならなかったろうな。いちおう看板は出したけれどね。そう思うな。

伊藤 やはりスローガンになっちゃうんですね。

藤波 そうですね。

伊藤 でもこれだけはやらせてくれというのは、総理としてはあるんじゃないですか。

藤波 間接税のときも、こんなのどうだと総理が言って、蔵出税とかいろいろなことを言ったけれど、結局のところみんな反対だということからね。言うとなら、与党からも反対が出てきて、これはいかんと思った。塩谷一夫とか河野洋平とか、みんな反対だ。これはいかんなどと思った。竹下さんは幹事長だろう。竹下幹事長、気をつけなければいかんなど思って、国対委員長が院内の総理の部屋に行って、「すいませんけれど、もう間接税やめよう。無理だ。大蔵省はいろいろなことを言うけれど、できませんわ、これは」と言った。

「なぜでさんのだ」と言うから、「川の流ればしもからかみへ流れません」と言ったのが、そのときの私の言葉だ。「しもからかみへ流すというのは無理だ。こんなことはいかん、できません。すんません」といって頭を下げた。「わかった、そうか。しもからかみへ流れんいう」と言った。それで中曽根内閣では間接税が終わった。竹下内閣がそれを引き継いだ。

伊藤 それをいま一〇%台にしなければいかん、と言っていますからね。やっぱり流れが少しずつ変わっているのかもしれないね。

藤波 そうだなあ。

佐道 三つの改革のうち、行政改革の問題が実現の方向になっていくわけですが、藤波先生としては教育改革などには非常に思い入れもありませんか。

藤波 それもこのまえ言ったように失敗したわけだ。斎藤諦淳を「臨教審」事務局「次」長にして、体制はできたんだけど、委員は全部文部省推薦、松永光、森喜朗文部大臣推薦の連中がやったから、文部省の中教審と一緒に議論しか出ないな。

伊藤 そうなると思いついた改革はできないということですね。

藤波 できない、できない。役所の論理で動いていくからな。

佐道 本音としては、いま議論されていますが、教育基本法の問題まで手を着きたいという意識はあったんですか。

藤波 そうそう。戦後の総決算の中で、教育のやり直しをやるうと。それには教育基本法の改正を初めとして、やることはみなやるう、命がけでやるう、というのが関係者の気持ちだった。だけれども、中で議論していることは、入学試験の改善とか校内暴力の問題とか、そんなことで、それはみんな文部省の発想の中の話だな。

伊藤 あのときただ一つ、九月入学を実現しようという話がありましたね。これは確かに面白いことなんです。それを一つのきっかけとして、いろいろなことが変わる。でも、とうとうそれも押し切れなかった。あれが非常に象徴的だと思いますね。しかしこれだけ強力な内閣でも、できることには本当に限りがある。やっぱり既得権益を持っている人たちの抵抗というのは必死で、強いですからね。藤波 強いな。日本は官僚主義の国だよ。絶対にそうだ。役人天国だ。

■ 経済問題への対処

伊藤 今度は経済問題になります。米国の対日赤字が一九八三「昭和五十八」年に史上最高の二二六億以上になったわけです。それで、対外経済問題担当に河本「敏夫」企画庁長官が就任するわけですが、河本さんはまた独特な派閥の領袖ですね。この人には相当期待したんですか。

藤波 期待したけれど、結局できなかったし、思うようにはなかなか行かんと思った。一番期待を集めた人だったね。

伊藤 これはどういう政治家なんですか。ちょっと普通の人と違う感じがしますけれどね。

佐道 先生ご自身は河本さんと個人的に接触はございましたか。

藤波 悪くないですね。河本さんが絵を描いて一つの方向に持っていかうということには、なかなかならなかったな。ならなかったから、よかったんだ。それができたら河本内閣だ。

伊藤 やっぱりそういう総理の器だと思ふような人なんですか。

藤波 そう思っていた。

伊藤 あれは三木さんの後継者ですよ。

藤波 そうです。

伊藤 でも三木さんとはずいぶん違った感じだと思いますけれど。なんであの人が後継者になるのか、よくわからなかったんですけれどね。

佐道 なんて三木派かな、と思ったんですが。

藤波 わからなかったな。

伊藤 ほかの政治家とちょっと違うという感じは受けておられましたか。

藤波 受けていた。

佐道 よく話をされる方ですか。「笑わん殿下」というあだ名がありましたか。

藤波 話をする。個人的にはね。

伊藤 かなり自分で積極的な経済に対する政策を――。

藤波 いや、それは言わんな。こちらから言うていくのは聞くけれど。

伊藤 むしろこちらから言うわけですか。アメリカのリーガン財務長官が来ていろいろ交渉をするわけですが、そういう問題になるとあまり官房長官は関係なくなるんですか。

藤波 専門に任ずるんですね。それぞれの立場があるからな。通産大臣とか大蔵大臣とか。

伊藤 これは主に金融の問題ですから、竹下さんとか河本さんとか、そういうことになるわけですか。

藤波 そうだな。

伊藤 先生はそういう金融問題などはあまり勉強なさらなかったんですか。

藤波 それぞれ専門がおったからな。河本さんの話を聞いてやっておると。

伊藤 でも将来総理になろうと思うと、経済問題、財政問題も――。

藤波 いや、総理になるというのは、本人が決めていなかったんだ。

伊藤 そのつもりなし、ですか。だって、官房長官の部屋から十年ということじゃないですか。

藤波 それは竹下が言うたんだ。

佐道 若くして官房長官に選ばれたわけですから、将来の目標として見えてくるかな、という意識はなかったですか。

藤波 うーん、なかなかうまいこと行かん、という感じだったね。部分的なつながりがなければしょうがないなと思ってた。例えば

アメリカの輸出が落ちた。日本でもっとアメリカのものを使おうとか、外国のものを使おうということ、総理にテレビで言ってくださいという話をしたり、効果につながる方法はいろいろ考えたけれど、そのほかに何かやるうということはないな。責任者がそれぞれおったからな。

伊藤 このときに日米農産物交渉も焦点になっていましたね。前回もお話がありました、「ふじなみレポート」〔昭和五十九年四月〕には、訪米中の山村「新治郎」農林大臣と何度も連絡をとったということが書いてありますが、何かご記憶がありますか。

※「日米農産物交渉は大変ご心配をかけました。三重県は果樹、畜産の農家が多く、『藤波がいるのにどうだ』という結果になっては申し訳ないと思い、心をくだきました。頭越しの政治決着を避け、農林水産省の事務協議を積み上げました。訪米中の山村農相と連絡をとって激励、何度も交渉中断の末、米国の当初の要求からはずっと譲って決着をみました。更に農政を充実し、農家が犠牲にならないように最善の努力をいたします」(「ふじなみレポート」第八五号「新緑の季節へ」昭和五十九年四月)。

藤波 始終電話がかかってきたのを覚えてるな。

伊藤 「どうしようか」と言ってくるんですか。

藤波 そうそう。「こうしますが、いいですか」という話だな。

伊藤 するとそれをどうするんですか。

藤波 いや、任せる。

伊藤 任された方もたまらないですね(笑)。

藤波 あの頃は役人がしっかりしていたからね。いまもしっかりしているけれど、いまの役人は自分のことばかりだな。

佐道 内閣の立場というのがございますね。例えばアメリカとの関係は良好にしていこう。日本の市場が閉鎖的であるとか言われているわけですから、できれば開放して自由化の方向がいい。そういう

流れから行くと、この農産物というのはかなり大きな壁になるわけですね。いまもそうですね。そうすると内閣全体がめざしたい方向は自由化ですが、農産物交渉がネックになる。それでアメリカに行くと、山村農林大臣が農産物市場をあげないという立場で交渉すると、進まない。これは一農林省だけではなくて、後ろに自民党とか、いろいろ関係する人たちがあるわけですね。そうすると、政府、官邸としては、いろいろな調整をして、どこまでだったらできるかとか、いろいろなことをおやりになるんだと思うんですが、まさに官邸では、藤波先生、官房長官が調整役になるわけですね。

藤波 窓口になって、行くときには話をするだけはしているから。どこに行っても、どう言っても、それでもノーと言ったら帰ってくるか、行くときにだいたい相談して行っているから。

佐道 その相談ができていくから、あとは任せる、ということですね。

藤波 そうそう。

伊藤 かなりアメリカ側の要求は強かったと思うんですが。

藤波 強かったと思うね。山村さんだな、農林大臣は。「山村新治郎から電話です、農林大臣から電話です」というのを何度もとったのは覚えがあるわ。

佐道 農林省はなかなかイエスとは言わない。だけど外務省なんかは、もうちょっとなんとかしてくださいと言ってくると思うんですが。藤波 そうそう。それでもそんなことはみんな現地では話さなければいかん。外務省は外務省で、ちゃんと駐米大使館の大河原「良雄」さんの下に外務省から行ったやつがおるので、役所の方針を決めておるわけだ。農林省から行っているやつもおるし。えらい叩かれたな。

■日中関係、中曽根氏と中国首脳の関係など

伊藤 昭和五十九年三月に中曽根さんが中国に行かれて、趙紫陽首相と会談をするわけですが、このとき円借款も決めてきますね。こういう中曽根訪中のときは、藤波さんについて行くわけではないんですか。

藤波 初めの一年、副長官の時に行ったけれど、官房長官になってからは留守番だ。官房副長官で中国に行ったのは山崎拓だったかな。

伊藤 やっぱ官房副長官がついて行くわけですか。

藤波 うん、ついて行く。

平松 官房長官は残るんですね。

伊藤 留守舞台のボスになるわけですね。

藤波 そう。

伊藤 でもやっぱり、中曽根さんは向こうに行って、どういうふうにするとか、こういうふうにするとか、そういうことはあらかじめ打ち合わせをして行くわけでしょう。

藤波 そうです。

伊藤 このときに「日中友好二十一世紀委員会」が発足して、石川忠雄さんが座長になりますが、こういうことには先生は何かご関係がありますか。

藤波 委員会は、石川さんを中心に出発したんだな。学習院の専務理事をしておった(佐道 香山さん)香山健一が連絡役だった。

伊藤 誰との連絡役ですか。

藤波 主に私だね。官房長官だ。

伊藤 香山氏は先生とはかなり密接な関係があったんですか。
藤波 早くからありましたね。大平内閣のときから。

伊藤 彼は大平さんのブレーンですね。彼が昔の全学連の委員長だったというのはご存知だったでしょう。

藤波 知っていました。

佐道 日中友好二十一世紀委員会のように、民間人が入って、中国側にもカウンタートパートがあって、相互に政府ではできないいろいろな話をして、お互いに友好的な交流をしようという仕組みは、どなたかアイデアを出された方がいらっしやるんですか。香山さんとかがアイデアを出されたんですか。

藤波 ごく自然に、個人でその仕事に当たるのではなくて、グループで当たる。群れて当たるというのがだいたい方針だったのかな。

伊藤 そういう形のお互いの交流というのは、別に中国だけではなくて、いろいろな形であるわけですね。

藤波 あるわけです。鄧小平とはあまり関係がなかったな。どうしてもかな。鄧小平というのは中曽根内閣の頃、何をしていたのかな。追放されていたのかな。

佐道 追放ではなくて、胡耀邦さんと趙紫陽さんという若手がやっているというふうに言われていましたね。

小池 鄧小平は国家最高責任者と言われて、主席ではないんですが、実質上のトップという形でしたね。

佐道 あまり表には出ない。中曽根さんは胡耀邦さんとすごくいい関係を築いて、ということを言われていました。

藤波 それでいいと思っていたんだろう。向こうがね。

伊藤 気も合ったし、将来的にこの人がいいんじゃないかと思っておられたんでしょうけれど、権力闘争で負けてしまった。

藤波 北京事件で駄目になったのか。

小池 趙紫陽は天安門で駄目になりました。

伊藤 中曽根さんの期待は外れちゃったんですね。
藤波 そういう意味ではね。

小池 いまも江沢民の関係で言えば同じですね。温家宝や胡錦濤がいますけれど、いま闘争していますね。

伊藤 このとき、朝鮮半島もちょっと不安定だし、北朝鮮問題もありますね。これは僕、ちょっと調べてくるの忘れたんですが、八四年十月三十一日に「対北朝鮮措置に関する内閣官房長官談話」というのがあるんですね。北朝鮮がこの年の一月に米国及び韓国との三者会談を提案するということがありまして、それがどうなったのかよくわかりませんが、先生、ご在任中に朝鮮問題はどうかでしたか。何かご記憶はございますか。

藤波 いや、あんまりないな。

伊藤 もちろん、北との接点はないわけですか。

藤波 ない、ない。昭和五十九年、そのころ何かあったかな。官邸はない。

伊藤 官房長官談話が出るぐらいだから、何かあったに違いないんですが。この官房長官談話というのは、総理大臣談話とは多少ランクが違うんですか。

藤波 非常に違うでしょうね。官房長官談話は、ちょっと退いて、しかし内部はそうだよ、ということでしょうな。

伊藤 官房長官談話というのも閣議で決めるんですか。

藤波 いやあ。発表してやるんだらうな。

伊藤 総理大臣談話は、一応閣議の了解を取るんでしょう。

藤波 ええ、とりますね。官房長官談話は「閣議了解は」ないな。

伊藤 誰が実際には書くことになりますか。外務省から来た秘書官とか、そのへんになるんですか。

藤波 そうでしょうな。

伊藤 何かあったかな「八四年十月の官房長官談話のあたりの年表を調べる」。九月に全斗煥大統領が日本に来ていたということがあ

藤波 十月の末、私が官房長官かな。後藤田さんではないか。

伊藤 昭和五十九年ですから。

小池 昭和五十九年十月三十一日にはインドのインディラ・ガンジー首相が暗殺されるということがありますが、北朝鮮とは関係ないですね。

伊藤 これはちょっと調べておきましょう。

藤波 何を言っているのか、いっぺん調べてみてください。

※第十回を参照。

■全斗煥大統領の来日と日韓関係

伊藤 それで全斗煥大統領が来日しますが、国賓としてくるわけですから、天皇に拝謁ということがありますね。そのときに天皇がどういふことを言われるか、いわゆるお言葉問題ですが、これは官房長官は非常に関わるんじゃないでしょうか。

藤波 関係あるね。

伊藤 どういうところと相談するんですか。

藤波 外務省ですね。中心は外務省だ。

伊藤 外務省と官邸と――。

小池 あと宮内庁儀典課ですか。

藤波 いや、儀典課は儀式をやっているだけだ。外務省ですね。

伊藤 宮内庁の意見というのはあまりないわけですか。

藤波 うん、外務省ですね。

伊藤 天皇のお言葉問題でいふ先生ご自身も苦勞なさったんじゃないかと思うんですが、ご記憶のことはございますか。例えば植民地統治のことをどういふふうに表示するか、とかですね。これはかなり厄介な問題ではなかったか、という気がするんですが。もし思

い出されましたら、お願いいたします。

藤波 はい。

伊藤 それで中曽根さんの「日記」には、「天皇のお言葉を外務次官と協議して来た」と書いてあるんですね。「昭和五十九年八月二十七日『中曽根内閣史』資料編 六三八頁」。だから外務大臣のブリーフィングがあって、だいたい中曽根さんの意見で、何かやったのかな、という気がするんですが。

面白いのは、「上御一人の御意思伺う要あり。宮内庁、外務省は一貫して対韓遺憾の意表明に消極。右翼の反発を恐ると」。ちょっと意味がわからないんですが、「米、中国と開戦したが、併合条約は別との意見の様だ」。要するに対米戦争、それから中国とは開戦していないだけだ——、開戦したのか。

佐道 事実上の戦争ですね。

伊藤 開戦したんだ。併合条約は戦争の平和条約とは別だ。「明治帝の仕事は孫の天皇の仕事と一体だ、故に皇統連綿という、と云っておいたが、敗戦を終戦と偽称した官僚の狡知か、又は御一人の意か、明にする要あり。Ford及び鄧小平には遺憾を辞に用いている。天皇の反応は、訪日につき反対を押しこめる全政権の命運に關す。それは日本の命運、日韓の将来に重大な影響をもつ。明日富田「朝彦」長官(佐道 宮内庁長官)を呼ぶ」ということを書いていますね。だいたい外務次官との協議がメインなんですかね。

藤波 メインです。外務省の担当の局長と事務次官だ。

伊藤 さらに瀬島「龍三」さんと呼んで意見を聞いていますね。「富田長官を公邸に呼び、天皇のお言葉問題を協議。先方の原案に遺憾の言葉が入っていたので、一部修正して承諾する」。先方というのはこのことを言っているのかわかりませんが、相手国ということはないと思いますので、宮内庁なのかな。

有馬 こういうときは、非公式なチャネルを通じて、韓国側からそ

れなりの期待とかが伝達されるということはないんですか。

藤波 日本の新聞社の幹部などが中に入るといことはあるけれど、直接にはないな。

平松 外交ルートはありませんか。

藤波 外交のルートは、朝鮮から何があるということはないな。誰がこんなことを言っているというような話だけだ。

伊藤 韓国側から、こういうふうに言ってもらわないと困るんだ、というのも来るんじゃないですか。

藤波 日本の外務省からね。

伊藤 外務省を通じて、ですね。

藤波 そう、日本の外務省を通じて、だ。

伊藤 官邸に直接ということはないと思いますけれど。

藤波 ない、ない。

伊藤 これはかなり調整が厄介な問題だったと思いますが、官房長官がどこまでどういうふうに入介入するのかわかりません。

この場合は中曽根さんが——。

藤波 いろいろなことをやろうと思ったけれど、結局国鉄の改革しかやれなかったというのと同じで、戦後政治の総決算というなら、第二次世界大戦というのは何であったのか、ということをもっとはっきり言えばよかったと思うけれどね。いまにして思うと、そうだな。あれから十五年も二十年も経っているからそう思うので、結果論だな。そういう気がするな。あのときに天皇の発言がどうだとか、いまにして思うとそうだな。特に戦争責任の問題はそうだな。

伊藤 韓国も非常に政界が不安定で、これとどういうふうにつき合いかというのは非常に厄介な問題だと思いませんか。官房長官としては、韓国の在日大使との接点はどうなんですか。それは外務省の問題であって、官房長官直接の問題ではないですか。

藤波 そうそう。そういう立場だな。

伊藤 しかし外務大臣の代理をやっている場合には、そんなことは言っていられないですね。

藤波 だけど、全体的にそうだな。具体的に首相官邸が突っ込むといかん、という感じがあったからな。外交は外務省、という建前であつたな。

伊藤 いまの話もそうなんですけど、韓国問題になってくると、瀬島さんが必ず中曽根さんの日記に出てくるんですね。瀬島さんはしょうちゅう官邸に連れていたんでしょうか。

藤波 そんなに来てないな。

伊藤 そうすると、どこで会っているんですかね。外で会っているんですかね。

藤波 月にいっぺんづつぐらい、東条会館で、あのときに瀬島さんは来ていたかな。外務省だな。

伊藤 何かそういう定期的な会合があるんですか。

藤波 そう、総理と私が出る会合があつたな。いま思い出した。国際金融では、なんとかいうのがあつたな、大蔵省の局長をしてあつた。それから外務省はこの大使をしたか、フランスの大使であつたか、なんとかいう人があつたな。そのときに瀬島さんがあつたな。

佐道 中山賀博さんですか。

藤波 中山だ。中山賀博が毎月ぐらい来ていた。それから、大蔵省のOBだ。あの会合はまだ外に出ていないな。

伊藤 何か名前が付いているんですか、何々会とか、何日会とか、木曜会とか。

藤波 ついていない。名前をつけたら外に出るんだ。

佐道 大蔵省OBも、中山賀博さんと同じぐらいの年次の方ですか。

藤波 そうそう。平和研で亡くなったのは誰だ。

伊藤 その平和研の人は大蔵の人ですか。

藤波 大蔵だな。

伊藤 それは聞いてみればわかる。そういうのは、幹事役は誰がやるんですか。

藤波 誰だろうな。

伊藤 藤波さんは、ひょいと出て行けばいいということですか。

藤波 そういう会だつた。私は一人、体制の中から来るとよいうために、総理大臣が私を気楽に使ったんだと思うな。後藤田さんはよう使わなかつた。それは中曽根康弘より上だからな。

伊藤 そうですね。なにか自分より年上の人を官房長官にしたので、やりにくかつたんでしょう。

藤波 やりにくかつたと思うよ。そんなことは言うたらんしな。本人も言わんし、後藤田さんもそんなことを言うわけがないけれど、やりにくかつただろうな、と思うよ。

伊藤 後藤田さんは全然気にしなかつたとおっしゃっていましたけれど（笑い）。

佐道 そんなことはないでしょうね。ただ年上だけではなくて、内務省の先輩ですからね。

伊藤 そうだ、内務省の先輩というのははるかに権威がある存在だからな。瀬島さんとはそういう会合で会うぐらいのものですか。それとも個人的にもお会いになつたりするような間柄ですか。

藤波 それは行政改革以来、土光「敏夫」さんの番頭役を務めて、中曽根内閣が発するときもずっとそうだし、鈴木内閣の行管庁長官以来、特に突っ込んだ間柄であつたな。

伊藤 やはり中曽根さんとは非常に密着した関係ですか。

藤波 そうそう。

伊藤 それで中曽根さんの番頭さんとしての藤波さんともかなりご懇意であつたと考えていいわけですか。

藤波 瀬島さんは懇意ですけど、具体的に言えばそういうことだな。

伊藤 いわゆる個人的な関係にはならないですか。

藤波 いや、個人的にも尊敬している。物事を整理するのはいい、あの人は妙な能力だな。「一つ何々、二つ何々、三つ何々、四つ何々」と、五つでなしに四つだな。

伊藤 要点をまとめるわけですか。

藤波 まとめる。そのまとめ方が上手だね。

伊藤 それはやっぱり頭がいいということですね。

藤波 頭がいいということだ。

■社会党幹部等との関係

伊藤 いま社民党はちっぽけな政党になって、もう消滅するんじゃないかと言われていますが、この八〇年代はまだ社会党は議会の中で大きな力でしたね。

藤波 大きな力だった。

伊藤 ただ若干、昭和五十九年に社会党は自衛隊の違憲合法論という、なんだか訳のわからない議論をしたわけで、党内でガチャガチャもめていた時期です。そういう社会党と官房長官というのは、全然関係ないものですか。

藤波 関係はないわけではないけれど、自民党国対、与党国対委員長を通じての関係が深かったな。

伊藤 個人的に話ができるという社会党の幹部というのは、先生にはおりましたか。

藤波 国対委員長になってからは、よく行ったな。大出俊とか山口鶴「男」さんとか。社会党の国対委員長だからね。ほとんど毎日ぐらい一緒に飯を食っていた。

伊藤 それは国対委員長のとくにしっかり伺いたいと思います。

佐道 官房長官時代は、社会党の人に特に頼むとか、接触するということはそんなに多くなかったわけですか。

藤波 なかった。

伊藤 でも頼まれるということはあるんじゃないですか。

藤波 あっても、それは個人的なことだな。あっても、どうっていうことはない。

伊藤 政治的にというよりも個人的にいろいろ頼み事があるんじゃないですか。

藤波 それはあるでしょうな。

伊藤 このころ社会党は勲章はどうだったか知りませんが、勲章をくれとか、そういう話はもちろんあるでしょうし。外国に行くときにちょっとご挨拶とか言ってる。

藤波 機密費の話だ。

伊藤 まあ、そうですね。

佐道 それも自然に。

伊藤 自然の流れで。

佐道 社会党と外国ということと言うと、全斗煥大統領が九月の最初に来日されるんですが、九月二十日に社会党委員長だった石橋「政嗣」さんが北朝鮮に行つて、金日成と会っているんですね。それで金日成が対日関係を改善したいというようなことを言っているんですね。これが先ほどの官房長官談話と何か関係があるのかな、という気もするんですが。社会党はよく北朝鮮に行ったりすることがありましたか、こういう社会党の動きは――。

藤波 それは知らんな。そのときに北に行つたのは知らんな。団長は石橋ですか。石橋というのはいい政治家だったのにな。

伊藤 いい政治家ですか。

藤波 うん、そう思うけれどな。

伊藤 あとで国対委員長になってから接点があったと思いますが、

人柄とか、そういうことがわかるほどには、まだこの時点では接触はないんでしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 もっと後ですね。

藤波 書記長をして死んだのは誰だ。河野洋平さんの選挙区で、社会党の書記長をして、宇都宮に行つて帰つてきて、風邪を引いて死んだ。平林剛だ。

伊藤 専売ですか。

藤波 そう。社会党の書記長をしていて、何か知らんけれど、あの頃国会が止まったんだ。それで、「すまんけど頼むわ」といって頼みに行つて、「動かしてくれたら、わしは黙つとるで、大出君による頼め」と言ったのかな。国対委員長になってからかな。

伊藤 そうですね、仕事としては国対委員長ですね。議会が止まつて、なんとか動かそうというのは国対委員長の仕事ですね。

藤波 あれはよう忘れんな。風邪を引いて、社会党の応援に宇都宮の方に行つて、帰つてきて、京浜の大学病院に入院して、その晩に死んだんだ。「昭和五十八年二月九日」。あれは「私が」副長官のときか。

伊藤 先生は前から国対をやつていて最後は国対委員長ですから、そのあいだも、副長官兼、あるいは官房長官兼国対委員長みたいな立場ですね。だからいつのことかわからなくなる。

藤波 官房副長官のときだな。新聞記者が十一時頃来ていて、一杯飲んで、ウイスキーをぐっと飲んだ。そうだ、九段の宿舎だったから、官邸に行く前だな。

伊藤 官房長官のときはたしか官邸に移られたとおっしゃっていましたよ。

藤波 誰かが「知っていますか？」というから、「なんだ？」と言つたら、「亡くなりましたよ」というので、飛んで行つたら、「来たの

はあんたが一番早い」と奥さんが言った。そうだ、官房副長官のときだ。そこで富塚「三夫」が出たんだ。それで私は富塚に反対したんだ。「代議士なんかやめろ。輝ける総評の事務局長をやつていて、馬鹿な、国会議員みたいな、つまらんことをやるな」と言った。

平松 でもやられたんですね。

伊藤 そういうことを言えるような間柄なんですか。

藤波 それは何でも言える。国会議員に「なることに私が」反対したのはその人と、楠田實の二人だ。佐藤内閣の秘書官をしていた。何回も何回も鹿児島に行つて、鹿児島で衆議院をやるつもりだった。「やめろ、やめろ、こんなつまらんことをやるのはやめろ。楠田實の名前が泣く」と言った。そうしたら、「安岡正篤さんと藤波孝生の二人がわしの立候補に反対する」と言った。ついに国会議員にはならなかったね。文藝春秋の講師が連れて行くものだから、面白いものだから人が集まってくるんだね。そうすると自分に人気があると思うんだ。

佐道 勘違いされたわけですか。

藤波 うん。絶対あんなのは連れてつたらいかん、と言つたのを覚えてるな。それと、富塚が国会議員になるということに反対した。

伊藤 なんて富塚氏を知っているんですか。

藤波 テレビ朝日が仲を持ったのかな、富塚さんと月にいっぺんずつぐらい晩飯を食っていたな。五、六年だ。

佐道 労働大臣以来ですか。

藤波 以来、ずっと続いている。

伊藤 富塚というのは面白い人ですか。

藤波 面白い、面白い。元氣だ。

伊藤 いま富塚さんの話を聞きたいと思つているんですよ。

藤波 私がリクルートにやられて、最高裁判所に弁護士と相談しながらいろいろな陳情書を持っていつでも何もならんで、やめろ、

やめろと言った。騒ぎが大きくなるだけだ。だけど、最後までとにかくわしはやると言って、富塚さんが労働団体の代表をやった連中の、歳とったのを(平松 十五人ぐらいですか)十五、六人かな、連名で、「藤波さんは日本の国のために大事な男なのでちゃんと見てくれ」という話を最高裁まで出したんだ。

伊藤 それは知らなかった。

佐道 たしかに先生の忠告された通り、国会議員になられてからの富塚さんは、残念ながらちょっと精彩がないですね。

■自民・民社連立の動きと二階堂氏擁立問題

伊藤 そうだな。社会党は社会党なんですけど、当時の民社党の佐々木「良作」委員長が自民党との連合を検討するというようなことを発言する。民社党の中も非常に複雑ですから、もめてもめて、ということなんですけど、そもそも第二次中曽根内閣ができるときに、新自由クラブと同時に、民社党も連立を組むかという話がたしかあったはずなんです。ですから民社党と自民党の連立ないし、場合によっては最終的に統合ということが当時から話題になっていたと思うんです。先生はこのとき民社党との連合云々という話が出るような状況の中で、民社党の佐々木委員長あたりとのパイプはなかったんですか。

藤波 パイプというか、ようけ知っておったけれどね。名古屋の春日一幸。塚本「三郎」とか大内「啓伍」はあとだからね。春日一幸さんは一所懸命やっていたな。

伊藤 春日さんも連立派なんですか。

藤波 連立派というほどのことはないけれど。そんなに重きを置かなかったんじゃないかな。

伊藤 このときの連立の動きと、このあとに起こってくる二階堂「進」擁立問題、このときも民社が動くわけですから、どういう関連になるのかな、と思うんですが。

藤波 民社も公明も動くからね。

伊藤 そうですね。そういう政界の動きは、新聞記者を通じてなり、いろいろな情報を通じて、一応キャッチしておられるわけでしょう。

藤波 そうそう、一応はね。

伊藤 やはり情報が一番集まるのは官房長官のあたりですか。

藤波 そうでしょうな。すぐ忘れちゃうけれどな。

伊藤 忘れちゃうんですか。自然に流れて、そのまま出て行っちゃうんですか(笑)。

藤波 あれは一つの、二階堂擁立の流れになっていくね。

伊藤 だけど二階堂さんは当時、副総裁に指名されているんですね。この経緯はどういうことなんですか。

藤波 それは党の問題だ。六さんの推薦かな。違うか。幹事長がそのつもりにならなかったら、副総裁というのは本当に面倒だからな。

伊藤 誰にとって面倒なんですか。

藤波 党にとって。一つ機関ができると、人が増えて、危ないな。そこが中心になっていくからね。

伊藤 要するに総裁のほかに副総裁がいたら、そこが一つの目玉になっちゃうということですか。

藤波 なっちゃう。

伊藤 たしかにこれは目玉になるわけですね。

佐道 副総裁というのはそれほどのポストということになるわけですか。

藤波 序列からいけば、幹事長より上だからな。

伊藤 だけど、副総裁で総裁になった人はいないんじゃないかな。

佐道 そうですね、実際には。

藤波 でも党内、ということでは、大きな意味があるよ。

伊藤 副総裁が何かの事柄に反対だといえはなかなかうまく行かないという、それぐらいの力ですか。

藤波 もっと大きい力があると思うな。例えばいま、あんなに総務会でぐずぐず言うんだったら、野中「広務」さんを自民党の副総裁にしたらどうだ、という話があるな。そうしたら、やっぱり幹事長が困るな。だからそうしないわ。

伊藤 幹事長が動きにくくなるんですね。

藤波 うん。

佐道 幹事長がOKと言わなければ副総裁はできないんですか。

藤波 そう思うな。

伊藤 このときに中曽根内閣に副総裁を置くことの意味は何なんですか。やっぱり田中「角栄」さんを取り込むということですか。

藤波 党内引き締めだ。そうだ。

伊藤 たしかに二階堂さんは第二次内閣の発足のときに、田中「角栄」の影響力を排除するというあの会合には出てはいるはずなんです。だからある意味では反田中、田中さんからちょっと疑われているようなところがあって、それを取り込んだのかな、と僕は思ったんですけれどね。

藤波 いや、党内バランスだね。

伊藤 実際、誰がどうやって推進したのかというのはわからないけれど、田中六助さんではないかというのが先生のお考えですね。

藤波 うん、六さんだと思うな。

伊藤 幹事長だから、ですか。

藤波 はじめは二階堂が幹事長をしていたんだ。もともと二階堂に対しては、中曽根派に山中貞則というのがおるから。「きみ、きみ」と言っ、中曽根さんのことを「きみ」と言える唯一の人だろうと思うけれど。「中曽根が、中曽根が」と言う。

伊藤 藤波さんは中曽根さんのことをなんと言うんですか。

藤波 「総理、総理」という。

伊藤 総理以前から、ということはないですね。

藤波 以前からということはない。以前は「会長」と言っていた。

伊藤 総理を降りてからも、やっぱり「総理」ですか。

藤波 例えば宮川「知雄」さんは私のことを「大臣」というだろう。労働省の役人はみな、私が労働大臣をしたから「大臣」という。

※宮川氏は藤波氏が労働大臣のときに大臣官房秘書課長であった。

平松 仕えた方はそうですね。官邸におられた方は「長官」といいますね。「結局、私にとっては長官だった」という説明をされますね。

伊藤 呼び方というのはなかなか難しいですね。どうでしょうか。四時を過ぎましたので、ここで切りますか。どうもありがとうございます。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第10回

日時：2003年8月5日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

有馬 学（九州大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（元政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

川越 美穂（東京大学大学院博士課程）

平松 大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■官房長官と国会運営

伊藤 前回、靖国参拜のお話でしたが、調べてみましたら、昭和五十九年にたくさん閣僚の方がそれぞれ参拜されています。中曽根さんも行かれています。「公式参拜」とは言っていないんですね。そのときに、官房長官だった藤波さんが、日本遺族会の青少年部の人たちが悲願断食をしているのを説得なさった。ちょうどその時期は、「閣僚の靖国神社参拜問題に関する懇談会」を始めていた時期で、その結論が出て、翌年中曽根さんが公式参拜をなさるとのことでした。

それからもう一つ、「官房長官談話」は、例のラングーン事件で北朝鮮に対する制裁をしていたわけですが、ちょうど一年経ったということ、その制裁を解除しようという問題でした。朝鮮半島問題についての状況が少し変わってきていて、いろいろ意見があったんですが、とにかくその制裁を解除しようということで、内閣で協議をして、官房長官談話という形で、翌年の一月一日から「制裁解除を」行なうということを発表されたもののようなのです。たぶん、藤波さんが自身が中心的な役割を果たしたということではなく、「官房長官談話」という形でそれを出すということであったので、あまり記憶がないのだろうと思えました。なにかそれで思い出されることございましたら、付け加えていただきたいと思います。

藤波 何もないです。

伊藤 それでは、前回官房長官時代のお話を伺ったんですが、引き続き官房長官としてのお話を伺おうかと思えます。一九八四（昭和五十九）年四月に、中曽根さんはパキスタン・インドを訪問します。インドでは議会で演説もされるんですが、この前のお話では、官房

長官はこういうときは留守番だそうですから、行かれなかったのだと思います。中曽根さんのパキスタン・インド訪問について何かご記憶はございますか。

藤波 ありません。

伊藤 それでは、前にもちょっと触れましたロンドン・サミットは、やはり留守番だったと思えますが、藤波先生として、ご記憶のことはございますか。

藤波 ないですな。

伊藤 それでは先に行きます。「ふじなみレポート」第八十七号「暑い季節」昭和五十九年六月」ですが、中曽根内閣は支持率が高かったんですね。五〇%を超えている。ところが国会運営が非常に厳しいと書かれています。さまざまな改革を掲げた中曽根内閣は、重要法案をいっぱい出して、厳しい国会運営を強いられたということですが、国会運営ということになりますと、官房長官というのは何か役割があるんでしょうか。

藤波 国対委員長と連絡をとる役目ですね。

伊藤 主には国対委員長がやるということですね。

藤波 そうです。国会運営ですから、国対委員長の仕事ですね。小

此木「彦三郎」さんとか江藤隆美とか「が国対委員長」ですね。

伊藤 国会が開かれているときは、藤波官房長官は何をなさっているわけですか。

藤波 内閣全体のことについて、総理大臣を補佐して、国会に臨むということですね。

伊藤 抽象的にはそういうことですね。

藤波 それは大変なことですね。

伊藤 そうですか。でも実際にそれをやるのは国対委員長ということになりますね。

藤波 まあ、そうなるわけですけどね。国会を大事にするという

意味で、政府の、そして官房長官の姿勢ですね。

伊藤 中曽根内閣は国会を尊重しないじゃないかということではないじゆめられていますね。

藤波 そうですね。

伊藤 官房長官もひな壇に並んでいるわけでしょう。

藤波 そうです。

伊藤 官房長官に対する質問というのものもあるんですか。

藤波 ありますね。

伊藤 どういう場合ですか。

藤波 政府全体の姿勢の問題とか、中国とか。外務省というより、内閣がどのように臨むかということで、よく質問を受けることがありますね。

伊藤 でも閣僚の中ではあまり質問を受けることは多くはないわけですね。

藤波 多くはないですね。具体的には各大臣になりますから。ただ、国会を軽視しているんじゃないかとか、大統領的だと思っていいい加減になっているんじゃないかという、中曽根内閣に対する声がありましたから、そういう中で、国会を大事にしているんだ、国会のご意見を聞きながらやっていくんだ、ということを示すのが官房長官の役目ですね。

伊藤 いまの小泉内閣もそう言われていますけれどね。

藤波 言われています。支持率が五〇%以上というのを聞いてびっくりしたんですが、支持率ということはあまり考えたことがなかったな。何%あるのか、ということとは考えたことがなかった。

伊藤 いまの内閣は一所懸命考えているようですね。

藤波 そうですねえ。「動あれば反動あり、反動あれば動あり」で、高ければ次の日にはまた低くなる。低ければまた高くなる、ということではないかな、支持率というものは。

伊藤 ちょっとしたことでも支持率は上がったたり下がったりしますね。

藤波 そうですね。

伊藤 国会運営ということになると国対委員長が中心だから、官房長官としては、それと連絡をとるぐらいの話ですかね。

藤波 総理大臣的な総理大臣と、大統領的な総理大臣とがあって、「中曽根総理は」大統領的でしたから。大統領的というのは、中曽根さんもいまの小泉さんもそうだけど、上から下へという感じが多くて、国会の意見で、ご注進、ご注進で国会はこういうことを心配しているよということを背景にして政治をやっていくというよりも、何をグズグズ言っているんだということ、おれはおれの道を行く、というのが大統領的だと言われていました。そういうことからいうと、国会運営というのは大事だったと思いますね。小此木さんという人がいて、中曽根内閣はやれたんだと思います。絶対そうだと思うな。

伊藤 つまらん話ですが、ひな壇に並んで、本会議の時は必ずいるわけでしょう。

藤波 いるわけです。関係法案があるんですね。

伊藤 官房長官の関係法案というのはありますか。

藤波 宮内庁とか賞勳局は、官房長官の所管だな。

平松 いろいろと幅が広い「法案が多い」ので、どこか一部、内閣に關係しているものがあるので、官房長官に關連するものは多いですね。

伊藤 でも質問の対象になるようなものはそんなにたくさんはないんじゃないですか。

藤波 ない、ない。

平松 質問の対象になるのは、どちらかというといやな質問ですね。

伊藤 それは、いい質問というのはあるわけじゃないですか（笑）。長時間、あそこに座っていて、みなさん目をつぶっていて、

時々寝ているんじゃないかと、週刊誌などに写真が出ますね。
藤波 起きていますよ。

伊藤 しかし、あれだけ長時間にわたって座っていたら、眠くなるんじゃないかと思えますけれど。

藤波 夜寝ないものは駄目だな。夜パッと目が覚めても、寝ていけないものでないかと駄目ですね。

伊藤 しかし、自分とあまり関係のない話を延々とやっているし、質問も同じような質問が何度も何度もあるでしょう。よく体力がもつと思って感心していただけますけれど。委員会にも官房長官が呼び出されることはありませんか。

藤波 よくある。

伊藤 内閣委員会とかですか。

藤波 内閣委員会ですね。靖国の懇談会のこととか、臨教審の問題とか、内閣全体ですから、ありましたな。よく委員会に呼び出されたな。

伊藤 じゃあ臨教審の問題は、官房長官が答弁するわけですか。

藤波 そうです。人事院勧告は違うかな。そうですね。

伊藤 そうかもしれないですね。そういう答弁には想定問答というのがあるじゃないですか。あれはどこで作るんですか。

藤波 参事官室。いま官内庁の次長をやっている羽毛田「信吾」というのが、参事官の大將をしていた。

伊藤 だいたい、質問というのは想定問答の中に収まるものですか。

藤波 収まるものです。

伊藤 それ以外の質問はあまり出ない。

藤波 だいたい、その見当を外したことはないですね。

伊藤 だいたいという質問が出るかというのは、想定できるんですか。

藤波 だいたいできるんですね。「私が」労働大臣のときに、いま

民主党の副委員長か、横路「孝弘」がスーパーなどの流通産業の労働者の問題を取り上げると言っていて、わからんもので聞きに来て、労働省から行って説明したら、「ああそんなことはわかった、わかった、もうおれは質問をやめた」と言っていて、何も質問を受けないことになった。あのときの労政局長は誰だったかな。二人で委員会に出たら、そのまま質問して来ましてな（一同笑い）。向こうは聞いておるから、全部わかっておるな。こっちは何も聞いとらんので、さっぱりわからんのだ。あいつはひどいやっちゃん、と思った。ルール違反というわけにもいかんし、困ったことがありました。それは滅多にないことだ。まだ生きておるかな、あのときの労政局長。私の横で、辛そうな顔をしていた。当時の職業安定局長だったな。

※労政局長は細野正氏、職業安定局長は関英夫氏。

伊藤 そういうときは、脇から支えてくれるものですか。

藤波 普通はね。ところがその職業安定局長もあまり知らんのだろう。辛そうでしたな。

伊藤 そういうことは珍しいことですか。

藤波 珍しいことだ。そのときから横路は、私は大嫌いだ。あいつだけは信用ならん。

伊藤 しかし、わざと仕組んだわけではないんでしょうね、きっと。

藤波 いや、思うけれどな。何にもわからんのだ。

伊藤 同じ年の九月に、栗原「祐幸」防衛庁長官がアメリカに行つて、防衛予算の七%増を約束したと言われているんですが、そういう具体的なことを先生はご記憶ですか。

藤波 行って、簡単にウンと言つて帰ってきたな、という気がしていましたね。

伊藤 でも約束したから、これは約束になってしまふので、どうしようもないわけですね。

藤波 そうです。

伊藤 といって、栗原さんがどうかなくなったわけではないですね。
藤波 ないですね。財政事情だとか、憲法のもとでとか、理屈はどうにでもなると思っただけがありましたな。

■ 中曽根氏総裁再選、竹下・金丸両氏との関係

伊藤 それで八四（昭和五十九）年の秋頃から、そろそろ総裁選だということ、宮澤さん、そのうち安倍さん、河本さんも出るという話が出て来ます。そして二階堂さんが出るという話で、二階堂さんと田中角栄のあいだで議論になるという事態が起こりますが、こういう事態は官房長官のところに、どんどん情報として入ってくるものですか。

藤波 情報は入ってくる。

伊藤 どういうところから入ってくるんですか。

藤波 あちこちから、電話なり、やってくる人なりがいますな。

伊藤 そうするとだいたい、総裁選がどうなるだろうかということは一。

藤波 わからん。

伊藤 でもたくさん情報があれば、ある程度の見当がつくじゃないですか。

藤波 つくんでしょ。

「群蜻蛉 退くも進むも ままならず」という俳句を作ったな。がんじがらめになって、心配はしているけれどね。

伊藤 二階堂さんはやる気だったんでしょ。

藤波 でしょ。わからんけれどね。私にはわからんけれど、角さんと実際はどういう経緯があったか知らんけれど。金丸さんがこっちへ送ってくるんだな。最後に行って、会議で。金丸さんによって

中曽根内閣が寿命をもつんだ。

伊藤 十月二十七日に自民党の幹部各派実力者会議というものが、岸さんが座長になって開かれて、二階堂さんが中曽根さんの党改革に対する批判をして、鈴木、福田、河本がそれに追随する。それで中曽根再選がいったん見送られるということになっていきますが、やっぱり中曽根さんの再選については批判的な空気もかなりあったんですか。

藤波 そうだろうな。

伊藤 先生としては、中曽根さんをなんとかして守りたいということでしょう。

藤波 そうです。

伊藤 そうすると二階堂さんをはじめとして、鈴木さん、福田さん、河本さんが中曽根批判に回ったら、中曽根さんを支持しているのは

藤波 竹下、安倍を、助さん格さんのように両横に従えて、金丸さんでやっていこうということだろうな。

伊藤 では田中派、ということですか。

藤波 そうです。田中派の若手ですな。

伊藤 それ以外は全部批判的なんですか。

藤波 民社や公明もね。

伊藤 民社、公明はどっちなんですか。

藤波 二階堂さん。四面楚歌のような感じだったな。

伊藤 中曽根再選の時ですね。

藤波 はい。

伊藤 ちょっと危ないかな、という感じでしたか。

藤波 あのとき金丸さんは総務会長かな。

佐道 総務会長ですね。

伊藤 総務会長というのは重きをなすわけですね。

藤波 党内の空気ですね。

伊藤 結局、その会談が翌日もういっぺん開かれて、どこでどうなったのかよくわかりませんが、三十一日の党大会から両院総会になる。

藤波 金丸さんの話は、「みんな中曽根は嫌いだろう。おれも嫌いだ。だけど国のためになるかどうかというのを考える。中曽根はいま国のためになるだろう」ということだった。アメリカとの関係とかいろいろなことを言ったんだな。「だから中曽根でいいじゃないか」と言ったんだな。それは私の記憶だけだね。

伊藤 その場にいたわけではないんですか。

藤波 ない、ない。官房長官はいない。総理官邸からだ。

伊藤 本当に金丸さんは中曽根さんをあまり好きじゃなかったんですかね。

藤波 好きじゃなかった（一同笑い）。そう思うなあ。

伊藤 藤波先生はどうなんですか。

藤波 国のためになる（一同笑い）。

伊藤 「藤波先生と」金丸さんとの関係はどうですか。金丸さんは、「中曽根の子分だから、こいつ「藤波氏」も嫌いだ」ということですか。

藤波 いや、そんなことはない。私の山中湖の別荘は竹下さんが段取りしてくれたんだ。家内が病気だということを知っておって、選挙区におってもいかん、飛び回ってもいかん、山中湖は涼しいからそこで休め、ついてはここを買え、というので、山荘を買った。山荘を買った分だけは、あとで竹下からもらった。結局、山荘はただでもらったようなものだけれど、それが金丸さんの別荘の横だ。

金丸さんの別荘番は自衛隊のOBが夫婦でやっておった。「そこへ行って、『藤波です。金丸さんの横の別荘を買ったので、あなた、私の家も一緒に守してくれ、ときどきいいから回ってくれ』と頼んでこい」と竹下さんが言うので、そうした。

昔から、権力者は、自分に隣に越してくる人が一番好きだな。その轍を踏んで、竹下さんが私に言うてくれたんやと思うんだ。ものすごい意味のあることだった。そんなことは何も言う必要もないものだ。リクルート事件の時は、「豪華な別荘」と新聞は書いたけれど、豪華な別荘でも何でもない。つまらん山荘だけれど、いまだに持っているのは、そういう曰く因縁があるからだ。やつつけられておるときには山荘を手放そうかと思っただけれど、これだけは記念に置いておけと思っただ、いまも持っているんだからね。

伊藤 いまでもときどき行かれますか。

藤波 行きます。竹下の思い出があるから。金丸さんの思い出もある。

伊藤 しかし、ということは竹下さんはずいぶん藤波さんに思いをかけていたということですね。

藤波 思いをかけていたかどうか知らんけれど、気を遣ったな。竹下が死んだときに私は、「日本の政治は変わるぞ」と言ったんだな。変わってきたな。いまはそんなに気遣いをする者はおらん。じいっと見てね。

伊藤 それで金丸さんとの関係もよかったわけですね。

藤波 よかった、よかった。だいたい麻雀していたけれどね。

伊藤 あの人は麻雀が好きですか。

藤波 好きだったな。

伊藤 藤波先生はどうですか。

藤波 私は麻雀はやらん。全然やれん。

伊藤 それはまずいですね。

藤波 うん、まずい。それでもかえっていい。使いにいって。

伊藤 場所はどこですか。

藤波 あれは日比谷の横の十全ビルか。

伊藤 別荘の場所はどこですか。

藤波 山中湖。もう金丸さんの別荘はない。

平松 手放しましたね。相続の問題か何かですね。

藤波 家内のためというので、家内の名前にしてあるから。私の名前ではなくて、家内の名前だ。そのほうが竹下さんが喜ぶでな。つまらんことだけれど。

佐道 二階堂さんの騒動の時に、田中さんは支えてくださったということなんですが、もう一つ中曽根さんがそもそも総理になるときに、田中の支持と宏池会・鈴木派の支持が大きかったと思うんですが、このときは鈴木善幸さんも中曽根さんに対してどちらかという

と反対で、降ろそうという形になっていたと思うんですけれど。

藤波 そうそう、そのときはね。少なくとも二階堂さんを推しておつたな。

伊藤 そもそも中曽根内閣ができるとき、鈴木さんのある意味で禅譲みたいな形だったんですね。

藤波 「中曽根さんは」鈴木内閣の一員だったんだね。

伊藤 その鈴木さんが、今度は中曽根反対に回るといのはなんですか。

藤波 二階堂のほうがいいと思ったんだらうな。

伊藤 先生がごらんになって、二階堂さんという政治家はどうですか。

藤波 わからん。中曽根派に山中貞則がおったから、わからんわ。

伊藤 どうして山中さんがいるとわからないんですか。

藤波 いや、山中さんの言っておることしか聞いていないから。

伊藤 ご自分では直接の関係は全然ないんですか。

藤波 ない、ない。二階堂さんとはなし。

伊藤 関係ができたなら、今度は山中さんとの関係が難しくなる、というところもあるんでしょうね。

佐道 山中さんが、二階堂さんとか鈴木さんなどの長老とのパイプ

役になっていたわけですか。

藤波 そんなことはないけれどな。選挙区というのはい。

小池 初めから悪い話しか聞いていないわけですね。

藤波 「山中さんが」二階堂のことをよく言うわけがない。

伊藤 結局この時は、自民党大会で中曽根さんが再選されるわけですが、中曽根再選劇の中で、藤波先生はどういう役割をされましたか。

藤波 「進むも退くもままならず」だな。じいーっとしていた。「はあ、ああ」と言っていた。

伊藤 だけどなんとかして中曽根を守らなければならないと思っていました。

藤波 思った。

伊藤 思ったら動かなければいけないじゃないですか。

藤波 動いても、そんなに大きな動きにならない。金丸さんに、どうですか、と言いにいくぐらいのことだな。

佐道 三役の中では金丸さんの存在が一番大きかったわけですか。

藤波 政調会長は誰だったかな。

佐道 政調会長は藤尾「正行」さんです。幹事長が田中六助さんです。

藤波 断然、金丸さんだな。

佐道 鈴木善幸さんが、中曽根さんではなくて二階堂さんを推そうというときに、幹事長は鈴木派の田中六助さんだったわけですが、

田中さんはこのときどういう行動をしておられたんでしょう。体がもう相当悪くなっておられたんでしょうか。

藤波 悪くなっていた。いまの私ぐらいのことになっていた。それは質問したら、大きな字でしか原稿を書かないしね。

伊藤 先生は字を大きく書かなくなっちゃって大丈夫でしょう。

藤波 大丈夫だけれどね（微笑む）。

伊藤 「いまの私ぐらい」なんて言うから。

藤波 「この会が」始まってしばらく、氷砂糖を食べているようなことではいかんわ。低血糖に気をつけているんで、すいません。みな溶けましたよ。

伊藤 六助さんなんかはどっち側を向いていたんですかね。

藤波 中曽根のほうを、田中六助は向いていたと思うな。自分では伊藤 そうですね。じゃあ宏池会といっても、鈴木さんはそうかも知れませんが、みんながみんな二階堂派だということではないんですよ。

藤波 ないんですな。そう思うね。鈴木さんだな。

伊藤 宏池会の中で先生がお親しい方は大平系統の方ですか。

藤波 そのときの内閣におるといったら、それこそ栗原さんとか。各派から来ておったけれど。

■反中曽根派と党の長老たち

伊藤 そういう人たちが別に中曽根反対で積極的に動いたというわけではないでしょう。

藤波 ない、ない。空気だね。空気が反中曽根だったんだな。

伊藤 それでも、田中「角」さん、竹下さん、金丸さんのグループが押さえた、ということですか。

藤波 そうです、最終的にはね。中曽根さんを田中「角」さんは信用しとったんやと思うけれどな。私は当時、田中さんも、竹下・安倍の時代が来たと思っていた。しかし田中さんは、中曽根さん本人がきちんと関係を結んでいたんだらうな。

伊藤 藤波先生も田中さんとはいいわけでしょう。

藤波 そうそう。悪いわけはないけれど。

伊藤 いままで、中曽根反対でやっていた二階堂さんが、相変わらず

ず副総裁として留任する。こういうことはどういうものですかね。

藤波 党の人事ですから、仕方ないといえば仕方ないけれど、妙なものをやったな。副総裁でおると、敬意を表しに行かなければいかんしな。三役のところを周りに行くと、副総裁を馬鹿にしている。馬鹿にしてという失礼なことはいかんけれど、敬意を表していなかったな。そういう気がしたな。

伊藤 でも藤波さんは行かなければならない。

藤波 そうそう、挨拶にね。

伊藤 いや、本当にちょっと不思議な感じですね。

藤波 不思議な感じだ。

伊藤 中曽根さんは日記の中で、「この間 dramatic であったが、老人輩の戯劇はカーテンが開く前の寸喜劇である」「昭和五十九年

十一月六日『中曽根内閣史』資料編 六三九頁」と書いています。

中曽根さんとしては世代交替を意識した記述だろうと思いますが、この段階で長老たちというと、元の総理大臣たちということですかね。

藤波 うん。

伊藤 鈴木さんとか福田さんとか、こういう人たちは、先生から見たらだいたいお年寄りに見えましたか。

藤波 年齢のことは思わんだけれどな。いるな、いるな、と思った。

やっとなる、やっとなると思った。

伊藤 こういう人たちの中で、先生、どうですか、鈴木さんとか福田さんという人たちと直に接する機会はないと思いますか。

藤波 まあ、中曽根さんを嫌いだっただらうな。鈴木さんも、福田さんもね。

伊藤 じゃあ福田さんは、藤波さんに対してはどうですか。

藤波 いや、どっていうことはない。それなりに官房長官のところ

に、なんでも話が来ておった。福田さんはね。

伊藤 鈴木さんはどうですか。

藤波 鈴木さんも、ときどき回って報告しに行くと、来たな、という。水産の先輩ですから、よう話を聞いてくれたな。反中曽根の中に、さっきの山中貞則みたいな話だけれど、田村元さんがおったしね。大きな声で言っておった。

伊藤 田村さんなんかはどういう批判をするんですか。まさか直接「嫌いだ」というわけではないでしょう。何か理屈を言うでしょう。

藤波 言わないな。

伊藤 そうですか。官房長官は、この前お話があったように、回って歩いて、いろいろご報告なさるわけですね。

藤波 そうそう。

伊藤 おまえの話なんて聞きたくないという人はいないわけですね。藤波 そうです。

伊藤 いちおう恭しく敬意を表して行くわけですね。

藤波 恭しく、というと言葉が悪いけれど、丁寧に物を聞いて、行くよ。

伊藤 それは二階堂さんのところもそうですか。

藤波 二階堂さんのところもそうだ。普通だね。

伊藤 向こうはどんな感じですか。

藤波 行けば、一所懸命話を聞いてくれるし、向こうの言うことも聞くわな。

伊藤 特にどうって言うことはないですか。

藤波 どうって言うことはない。

伊藤 どうですか。政治家としてごらんになって、そういう長老政治家の中で、誰が一番印象的ですか。

藤波 まあ、前任者だから鈴木さんの感じが濃厚だったね。中曽根内閣はこれでいいのか、という批判を持っている感じがしたな。だけれど、それはしょうがないな。

伊藤 中曽根さんは禅譲を受けたけれど、前任者をあまり褒めない

で、むしろ腐す側に立ったとよく言われていますが、そんな感じもあるんですか。

藤波 あるでしょうな。あったと思うね。

伊藤 あまり鈴木さんに対して敬意を払わなかったですか。

藤波 敬意を払っておったんだけど、よう表現せんからな(笑い)。気持ちにはあったんだろうけれどな。

伊藤 それは藤波先生、うまい言い方だ(笑い)。よく意味がわかりました。

■第二次中曽根改造内閣の人事

伊藤 それで改造内閣ができて、幹事長が金丸さん、総務会長が今度には宮澤さん、政調会長・藤尾さんという布陣になるんですね。閣僚もずいぶん大幅に入れ換えています。このときも中曽根さんが一人でやったんですか。

藤波 人事は一人でやったな。ほとんど自分一人でやったな。

伊藤 藤波さんにも、これはどうだろうかというお話は無いですか。

藤波 いや、そんなことはないようになっていくけれど。私は渡部恒三を推薦したとかね。いろいろな話になっているから、それを裏切るわけにもいかんから。そういうのは世間話だな。

伊藤 正式に、という形ではなくて、それとなく――。

藤波 飯を食ったりするときにね。

伊藤 中曽根さんは、人事に関しては、あまり人から積極的に意見を聞いたりということはないんですか。

藤波 そうですね。

伊藤 でも、もちろん田中派といいますが、それは意見を聞かないわけにはいかんでしょう。

藤波 派閥を大事にして、各派の意見を聞いていくということがわかっておれば、それでいいわけだ。大きな問題だ。

伊藤 閣僚だって、各派閥から推薦でしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 幹事長、総務会長、政調会長の三役は、一般的にはどうやって決めるんですか。これは各派閥からの推薦というわけにはいかんでしょう。

藤波 総裁だな。竹下、安倍はまだ内閣におるだろう。それで宮澤さんを出すわけだな。総裁の意向だな。

伊藤 宮澤さんに対して、中曽根さんはかなりいい感触を持っていませんか。

藤波 いや、あまりいい感触じゃなかったんじゃないか。普通だろう。伊藤 幹事長に金丸さんを据えたというのは、実力者ということですね。

藤波 そうだね。再選されたということは金丸さんのおかげだということがようわかっている。責任を持ってやっていこうということだな。

伊藤 今度は金丸さんが守ってくれるということになりますね。

藤波 そうそう。

佐道 宮澤さんを三役に据えたのは、鈴木派とそれまでちょっとよくなかったのを改善しようという形なんじゃないか。

藤波 鈴木派というより、宮澤さん個人でしょう。

伊藤 期待することがあったということですか。

藤波 放っておくわけにはいかん。

佐道 この人事は、新しいリーダーといわれる宮澤さんと安倍さんと竹下さんのうち、宮澤さんは総務会長にされて、安倍、竹下はそのまま外務大臣、大蔵大臣という有力ポストにいらっしやるわけですが、非常に面白いことに、河本さんを沖縄開発庁長官にされてい

るんですね。総裁候補の一人だった人を、沖縄開発庁長官はないだろう、というようなポストだと思っんですが、これは何か、それなりの意図があっっておやりになったんでしょうか。

藤波 中曽根さんに意図があったんやろうな。あったら思えんな。河本さんを沖縄開発庁長官にしたのはそうだろうな。一つのはっきりした基準によって、河本さん、これをやってくれ、断わられたらもういいわ、断わられたら仕方ないな、ということが終わる、というぐらいの強い、本人の気持ちがあったんだらうな。

武田 十一月にその河本さんが、対外経済問題・民間活力担当特命となってるんですが、これはどういう経緯なんじゃないか。

藤波 沖縄をやっているままで？

武田 沖縄はやっていて、特命大臣という形になるんですかね。

藤波 本当にやって欲しいと思っただから、やってもらったんだ。

伊藤 河本さんに対する評価は、中曽根さんとしては、ある程度あったんですかね。

藤波 改造してからだいぶ経ってからの話。

伊藤 十一月六日ですから、「改造してから」一週間ぐらいですね。

藤波 あっ、そう？

伊藤 やっぱ「おれは役不足だ」ということだったんじゃないですか。

佐道 中曽根さんが提示したポストを飲んだということ、中曽根さんへの忠誠心を示したわけですね。

藤波 そうでしょうな。

■ 宮内庁改革を考える

伊藤 この年、昭和五十九年の暮れの日記に、中曽根さんが「天皇

制と二十一世紀の渡り廊下がこれからの最大の役務。宮内庁の改革に着手する」「昭和五十九年十二月三十一日『中曾根内閣史』資料編 六四一頁」と書いているわけです。ちょうど昭和六十年というのは内閣制度百年とか、戦後四十年とか、自民党の三十年とか、いろいろ記念の年にあたるわけですが、中曾根さんは次の年に宮内庁改革をやるぞ、と言っておられるわけです。宮内庁改革ということになると、これは官房長官が直接関わることになります。中曾根さんが宮内庁改革というのを考えたのはどういうことかおわかりになりますか。今までの宮内庁について――。

藤波 十二月ですか。

伊藤 年末、十二月ですね。何かお考えがあったんですかね。昭和六十年を迎える直前ですね。実際に宮内庁に手を突っ込んだんですか。

藤波 突っ込まない。途中で、宮内庁は官房長官の直属になるな。

あれはいつだったか。おれは皇居を隅々まで見に行っただことがある。

昭和天皇さんが、藤波が来るやで隅々まで見せよう、といった。

平松 入れないところに入ったときですね。

藤波 平沢「勝栄」を連れて行ったんだ。国会議員「当時は内閣官房長官秘書官か」をしている平沢は警察関係だから連れて行った。

はしっこのところの一番奥まで私を入れてくれた。昭和天皇さん――当時は昭和と言わない、天皇さんが――、藤波君には一番奥まで見せようと言ったもので、ご案内しますっていうね。

武田 官房長官の主管が変わるんですか。途中から宮内庁も管轄されたんですか。

藤波 内閣官房で、田川「誠一」さんが、大臣がどうのこうの、と言ったのはいつだったかな。

佐道 第二次内閣ですね。一九八三（昭和五十八）年十二月からですね。

武田 総務庁ができるんですか。八四年七月ですね。七月に後藤田さんが最初の長官になるんですね。それで変わったんですか。

伊藤 それで田川さんがガタガタするんですよ。国家公安委員長をクビにしようという話で、田川さんがむくれた。田川さんがむくれたときに、藤波さんといういろいろ話したと田川さんは話していますね。

藤波 「自治省があるので一緒にやってくれと言われたから、おれは引き受けるときに自治省と国家公安委員長と両方引き受けたんですよ、警察もおれの責任でやる」と、田川さんは言ったんだ。それで、

あとで西岡「武夫」を呼んだけれど、埜があかん。山口チンネン「敏夫」を呼んだけれど、埜があかん。河野洋平のところに行っただけれど、埜があかん。それで埜があかんまま終わったんだ。

伊藤 そうです。田川さん、頑張っちゃったんです（笑い）。

藤波 信念の強い人やな、と思った。初めは損得だと思ったけれど、

損得じゃないんだ。政治家としての信念だ。えらいものだ、あれは。

伊藤 とにかく宮内庁の所管問題があったわけですか。

藤波 所管問題で、賞勳局や何かと一緒にになった。あれは機構が変わったのか。総務庁は――。

佐道 総務庁ですね。行管庁が「一部、総理府と」一緒になったんですね。

伊藤 「賞勳局、宮内庁は」そこに入らないで、官房直属になったのか。

藤波 十二月に、中曾根さんが宮内庁に手を入れると書いてあるの？

伊藤 ええ、改革すると書いています。

藤波 ああ、いいこと言うてるね。改革せねばいかんわ。

伊藤 やはり宮内庁に対するご不満があったんじゃないですか。

藤波 ねえ。

伊藤 というのは、昭和六十年というと、昭和天皇の在位六十年はいいんだけど、相当なお歳でしょう。それで宮内庁についている

いろいろ心配なさっていたんじゃないかと僕は思うんですが。

藤波 そうですね。

伊藤 いざという場合の対応とか、ですね。その課題が結局竹下内閣に行くわけですね。そのことは先生は、この段階であまり直接「関係なさらなかったんですか。」

藤波 総理と話はしたけれど、外を向いてそんなことを言ったかな。いいね。

伊藤 宮内庁長官を替えたりとかしていると思うんですね。

有馬 宮内庁は、何が問題だという認識だったわけですか。

藤波 中曽根さんは天皇の足下をしっかり守ろうということだったんだらうな。

伊藤 たしか長官が気に入らなかつたんじゃないかと思うんだけど。

藤波 富田「朝彦」というのがおって、宮内庁長官をやっておった。その後だ。

伊藤 このときは誰ですか。

武田 富田さんです。

伊藤 その後は誰ですか。

武田 六十三年に藤森「昭一」さんになっていますね。

藤波 六十三年ね。それだな。

伊藤 何か、そのへんが気に入らなかつたんじゃないかと思いましたが、どうですか。

有馬 人事の問題だったんですかね。

藤波 あまり突っ込んだ話はなかつたけれど、当時あるとしたら、私の考えでは天皇の戦争責任論というものをどういうふうに收拾したらいいか、ということを考えていたと思うね。私はそう思ったな。

伊藤 それは藤波先生自身が考えていたということですね。

藤波 そうそう。

伊藤 毎回毎回、いろいろな形でやられますからね。

武田 このときの侍従長が入江「相政」さんですね。六十年に徳川「義寛」さんに替わるんですね。

川越 十月から徳川さんですね。

藤波 入江は自殺したんだな。天皇さんが亡くなってからだ。

伊藤 あの日記『入江相政日記』を書いた人でしょう。

武田 はい。

伊藤 この内閣で、官房長官の藤波先生は留任ということですが、結構長くなるわけですね。

藤波 二年。

伊藤 二年ですか。まあ、いまの官房長官はもっと長いですけどね。でも官房長官は、しょっちゅう替わっているものじゃないですか。

藤波 順番にやればな。

伊藤 やっぱり留任して、決意を新たに、ということですかね。また「自然」ということになるかもしれないけれど。やっぱり中曽根内閣をなんとかして守っていかうということですか。

藤波 「平松氏に「毎日新聞の岩見のコピーをもらって来いよ」と言っ」留任の時は、知らん顔して留任したな。そんなにどうっていうことはなかったな。

伊藤 でも周りで、官房長官替われ、ということはないですか。

藤波 どうか。あつたんやろうけれどな。

伊藤 あつたでしょうね。おまえだけいい役割をしている、って。

藤波 始終あつたろうと思うけれど。朝、手を合わせて、東西南北を拜んで毎日やっていたんだな。

伊藤 「本日も中曽根内閣をお守りください」ですか。

藤波 その通りだ。日本の国と中曽根内閣をお守りください、と思っ

た。

伊藤 八百万の神に、ですか。

藤波 そうそう。

伊藤 伊勢神宮じゃないんですか(笑い)。それで昭和六十年になって、中曽根さんが日米首脳会談に出発しますね。それから帰ってきて、フィジーとパプアニューギニアの歴訪に出かけるということ、ずいぶん立て込んだ日程を作っていますが、これは中曽根さんの首脳外交というものです。しょっちゅう中曽根さんは外遊で、留守。留守部隊の親玉が官房長官だということになりますと、けっこう大変ですね。

藤波 国の中は大変だな。日本航空のJALの飛行機が山にぶつかったのは、いつだったかな。

佐道 御巢鷹ですね。八五年の夏、八月十二日ですね。

伊藤 まだ質問要項がそこまで行っていないですね(笑い)。

藤波 夏、お盆だ。

伊藤 中曽根さんはその日米首脳会談で、SDI(佐道 戦略防衛構想ですね。スターウォーズ計画)を理解すると発言されて、多少問題になったのかな。

小池 科学技術の提供、という問題ですね。

伊藤 そのへんはあまりご記憶はないですか。

藤波 記憶はない。

■創政会について

伊藤 ではちょっと政局のほうに行きますが、竹下さんが創政会を発足させるという動きがあります。その動きというのは、竹下さんは身近だから、するとわかったんじゃないですか。

藤波 わかったけれど、誰にも話をするわけにはいかんし、じいっとしておったな。

伊藤 じいっとしていたのはわかりますが、どんなふうにごらんになっていましたか。

藤波 まあ、やる、やる、というぐらいに思っていたな。

伊藤 「やる、やる」ですか、「やれ、やれ」じゃなくて。

藤波 「やれ、やれ」じゃない。

伊藤 だけど、これをやったら、中曽根内閣にどういふ影響が出るかな、と思いませんでしたか。

藤波 若い者が世代交替を要求してくるんだから、しょうがないな、と思ったね。流れとして、しょうがない。

伊藤 いいことだ、ということですね。

藤波 そうそう。

伊藤 いずれ、新生クラブがどうなるかわかりませんが、藤波派も独立するかもしれない。

藤波 いや、そんなことは思っていなかった。

伊藤 新しいリーダーがどんどん出てくる。

藤波 そうそう。

伊藤 じゃあ竹下さんに対しては温かい目で見えていた、ということですか。

藤波 そうですな、比較的。

伊藤 ただ、うまく行くかどうか。田中さんに押さえつけられて失敗するんじゃないかということも、当時よく言われていたんですね。

結局ほとんどの議員を創政会のほうに引っ張り込んだんですね。

藤波 そうですね。一人ひとりいろいろあった。梶山「静六」は梶山で、渡部恒三は渡部恒三で、小沢一郎は小沢一郎で、羽田孜は羽田孜で、こっちはじいっと動きを見ておったな。しかしエライことだったな。田中さんにとってもエライことだったろうな。

伊藤 そういうときに、いまおっしゃった羽田孜や渡部恒三とかいう人たちと話し合う機会もあったんですか。

藤波 あった、あった。

伊藤 そうしたら向こうの人も話すでしょう、いまこんなになっている、と。

藤波 そうそう。

伊藤 そうすると、だいたいうまく行きそうだな、ということですか。

藤波 そうそう、そうですね。

伊藤 しかし先生としては田中さん自体も――。

藤波 こちらは判断をくだしたり、これはいいとか悪いと言う立場ではないからね。

伊藤 言うのはまずいですけれど、思うのは自由ですから。

藤波 思うのは自由だ。

有馬 たぶん中曽根さんとしては、そういう世代交替はいずれ起るであろうけれど、急激にはなく、もう少し緩やかに、というほうが都合がよかったわけですよね。

藤波 田中さんとの関係を考えればね。

有馬 そこらへんの中曽根さんの反応はいかがでしたか。

藤波 問題は金丸さんでしょうね。この人がどっちを向いているかということだ。

伊藤 どっちを向くかといっても、あの人は竹下さんの方に向くというか、竹下さんをけしかけた方じゃないですか。

藤波 けしかけたかどうか知らんけど、流れはそっちだったな。

伊藤 じゃあもうかなり決定的、ということじゃないですか。

藤波 そうです。そう思うな。

伊藤 そうすると田中さんのところには、二階堂さんとか、あとから入ってきた小坂「徳三郎」さんとか、そういう人たちが残ってい

くわけですね。やっぱり官房長官としては、田中さんにも政局などについて説明に行くんでしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 こんな中で、大変ですね。

藤波 竹下さんがどうなっていくかというのは、竹下と田中との関係から行けば、安倍さんにはいいわ。竹下と同じように、安倍さんが力が持つ場合は、いいわな、福田が弱る。福田よりも安倍ということになるのは、これはいいわな。それはいい。福田が弱るのはいい。福田が困った、というならいいよ。

伊藤 じゃあ、田中と竹下とは違うんですか。

藤波 違うな、田中・竹下とは違うな。中曽根さんから見る場合。

私には一緒のことやな。

伊藤 しかし結局のところ、創政会を旗揚げして田中派が大きく割れて、ということになっても、それは中曽根内閣に対して何の影響もなかったじゃないですか。

藤波 結果としてなかったと思うな。

伊藤 だからといって、田中さんが中曽根内閣をどうかしようと思つたわけではないだろうし、竹下さんは一所懸命中曽根内閣を支えたんでしょ。

藤波 そうそう。全然変わらなんでしょう。

伊藤 じゃあ、あまり影響はなかったということですか。

藤波 結果としてね。

伊藤 可能性としてはあったでしょうけれどね。

藤波 あったと思うな。

伊藤 田中さんが倒れたりしなかったら、またいろいろ影響があったかもしれないですね。

藤波 そうだな。

■衆議院議長に坂田道太氏が就任

伊藤 全然別の話ですが、福永「健司」さんが「衆議院議長を」辞めて、坂田道太さんになる。これは健康上の理由といわれていますが、本当なんですか。

藤波 健康上の理由で交替したんだな。

伊藤 ご病気ですか、高齢ですか？

藤波 なんだったんだらうな。

伊藤 福永さんとはそれまで何かご関係がありましたか。

藤波 いや、あまりない。

伊藤 坂田さんは文教族だから、非常にご関係があるでしょう。

藤波 そうそう。あれ「福永氏」は松永光の選挙区だらう。埼玉かな。

伊藤 衆議院議長を誰にするかというのは、やはり最大党である自民党が実際上は決めるんでしょう。

藤波 決める。

伊藤 どのへんで、どうやって決めるんでしょうね。議会の中に議長選挙委員会があるわけではないし。

藤波 派閥。

伊藤 やはり総裁あたりの周辺で決めるんですかね。

藤波 やっぱり派閥でしょうな。福永さんはどこですか？

川越 出身は滋賀ですが、埼玉で副知事をしていますね。

藤波 埼玉だ、だから松永のところだ。松永と親しかったので、おれは福永さんとは関係なかったんだ。

平松 中選挙区の頃は、そういうことが結構ありましたね。

藤波 松永は中曽根内閣で文部大臣をやったよな。

伊藤 やはり、前にいろいろな方のお話を伺ったときに、総理大臣になるコースとか、議長になるコースがある。竹下さんだったかな。「水泳の紹介の言い方で」○○のコース」ということですね。だいたい「国会の議長というのは」党の長老を処遇する道ですね。いちおう形としては三権の長ですから偉いわけですが、本当の実力者になるというポストではないですね。いろいろな派閥の思惑で人が決まるということですかね。長老の中から選ばれて。

藤波 当選したら議長になるといって選挙をやったのは、大阪の原田憲「元運輸大臣・郵政大臣・経企庁長官を歴任」だ。そのとき落選した。その時は誰がなつたらう、桜内「義雄」さんがなつたかな。伊藤 初めから議長をめざす人はいるんですかね。あまり考えたこととはなかったんですが。

藤波 まあ、コースと言ったらコースだけれど、力よりも、無難にというのが一番の仕事だな。スキヤンダルに巻き込まれるといかん。

伊藤 そうですね。このあいだ誰か、参議院議長が引かかったんじゃないなかったつけ。

佐道 井上「裕」。

藤波 井上さんとか土屋「義彦」さんとかね。

伊藤 参議院ばかりだな（笑い）。良識の府、参議院なのに。

佐道 坂田さんが議長、というのは別に異論も出なかったわけですね。

藤波 ない。中曽根さんと世代を同じくするし、私らみな覚えておったから、おまえらの意見も坂田さんなら吸収できるし、いいなと思っただね。

伊藤 じゃあ、坂田さんの衆議院議長なんていうのは、藤波先生として非常にいい、ご推薦申し上げたいぐらいの話ですか。

藤波 そのあとは誰だったかな。

伊藤 誰だろう？ 議長というのは、われわれもあまり……。本会議で乱闘でもない限りは「意識しません」ね。

藤波 原健三郎か、田村元か。

伊藤 三権の長だけれど。

小池 この坂田さんなんですけれど、前にほかの方のインタビューを取っていたときに、表は石井派から無派閥になりましたが、裏は田中派、という話を聞いたことがあるんです。坂田さんというのは、先生はどういうご認識でしたか。

藤波 表も裏もないんじゃないかなあ。いい人だよ、坂田道太という人は。坂田道太とか伊東正義というのは、自民党にとって取って置きの人だったね。総理大臣にいつなってもいい人だった。

伊藤 えええ!? そうですか。

藤波 それでもやりたくなかったから断わったけれどね。

伊藤 それは人格者という感じですか。

藤波 そうそう。

小池 先生は伊東正義とは非常に親しかったということですか。

藤波 伊東正義さんとは親しかった。坂田道太とも親しかった。

小池 お話を聞いていると、宏池会系でも、どちらかというところと鈴木善幸——宮澤というところと、大平——伊東というところはちょっと違うし、また田中六助も違いがありますね。先生としては、どちらかというところと大平の筋のほう、という感じですか。

藤波 大平ですね。そうそう。

佐道 伊東正義さんは、鈴木内閣の外務大臣をお辞めになって、そのあとあまり公的なポストには就いておられないですね。

※伊東氏は外相辞任後、党政調査会長・総務会長などを務める。

藤波 中国問題だ。

武田 党のほうでやられていたんですか。

藤波 と思うな。日中議員連盟の会長か何かやっていたんじゃない

か。

佐道 先生は、伊東さんとお会いする機会は何回多かったんですか。

藤波 私の第二議員会館の三〇五の部屋が、伊東正義の部屋だ。

伊藤 部屋だということはどういう意味ですか、替わったということですか。

藤波 亡くなった。

佐道 亡くなったあとに、その部屋に入られたということですね。

藤波 そう。

平松 伊東先生の後継で出た方が落っこちて、それで部屋が空いたんです。一回入っていたんですね。その方が落っこちて、どこか空いておるかといったときに、伊東正義さんのその部屋が空いておるといって話になって、そこに入ったんです。

伊藤 議員会館の部屋というのは、自分で希望できるんですか。

藤波 議運、国対で決めるんだ。おれの部屋は三三六だな。

平松 もとは三三六でした。

藤波 三三六で、小此木さんが階段から落ちて死んで、これはいかな。自分は落選した。両方「の理由」で三三六は辞めて、反対側に移ったら、そこが伊東正義の部屋だった。人間は部屋で覚えておるからね。役人でも経済界の者でも、どこの部屋に挨拶に行ったか、ということ覚えてる。

伊藤 先生は、行きつけの料理屋というのはあるんですか。

藤波 行きつけの料理屋というのはあるけれど——。

伊藤 いろいろの方に伺っていると、誰々に会うためには、夜どこかの料亭に行けばいいとか、言いますね。

藤波 そんなに決まっているということもないよ。

伊藤 そうですか。じゃあ、だいぶ浮気をして、あちこち行くわけですか。

藤波 呼ばれる方が多い。呼ぶよりもね。

伊藤 呼ぶとしたらどこに呼ぶんですか、決まったところはないんですか。

藤波 ない、ない。

武田 番記者の方とご飯を食べるとか、そういうときにはどういうところを使われるんですか。

藤波 明治記念館。

伊藤 官房長官の頃だって、番記者の人たちを呼んで宴会をやったりするでしょう。

藤波 「藍亭」か。大したことじゃないよ。

伊藤 中曾根さんには、そういうところはないんですか。

藤波 ない、そんなものは何もないよ。いままだ、赤坂でやっている料理屋、一ツ木通りで――。

平松 ああ、なんとかいうところですね。一ツ木通りの一本か二本手前ですね。

伊藤 親しい議員さんたちと一杯飲もうというときにはどういうところに行くんですか。

藤波 それでも、みな「川崎屋」とか、あちこちに行ったんだろう。

伊藤 よく、「〇〇先生の巣」とか、そういうことを言いますけれど。

藤波 そんなことはないと思うな。

平松 それこそ、田名角榮さんとか、そのへんと違うんですか。

伊藤 ちょっと世代が違うのかな。

佐道 世代が違うんじゃないですかね。政治資金規正法ができて以来は。

平松 そこまで入り浸るといえるのは、ずいぶん前ではありませんか。

藤波 「中曾根さんが行く赤坂の料亭は」「なんとか龍」だ。「せんりゅう」でもないよ。

佐道 藤波先生が「せんりゅう」にいたら、絵にならないですね（笑い）。

伊藤 俳句の代わりに川柳はやりませんか（笑い）。

藤波 やらない、やらない。

佐道 中曾根さんは「福田家」には行かないだろうし（笑い）。

伊藤 中曾根さんはそういう宴会みたいなことはあまり好きじゃないんですかね。

藤波 好きじゃない。そうだ、「金龍」だ。

平松 あそこはまだ残っているんでしょうか。

藤波 残っている。

伊藤 それは中曾根さんがよく行かれるところですか。

藤波 そうそう。

伊藤 じゃあ、何かと言ったら、藤波さんも使うんじゃないですか。

藤波 使うけれど、どうっていうことないな。「巣」というのは、その女将とできているときだ。昔の人はそういうときに「巣」というんだ。

伊藤 じゃあ、半分居住しているみたいだな、そういう感じですか。

藤波 昔の人はね。特急を止めた（佐道 荒船清十郎）、荒船清十郎が言う言うた。エレベーターで宿舎が一緒だった。「藤波君、世

の中いろいろ言うけれど、洋服と和服があるようなもんじゃ」と言っていた。「着てるものがちょっと違うとるだけで、いろいろ

なこと言うけどな、二号とか愛人とか言うけれど、洋服を着るだけじゃ」と言った。そういうのは、古い世代の話だな。「面白い話だな。面白い話だ。

伊藤 面白い話だ。

藤波 面白い話だ。

藤波 違う、違う。

伊藤 じゃあ、楽しい時代はあまりないんですね。渡邊恒雄さんの話なんか聞いてみると、そういう話がいっぱい出てくるんですね。

誰々はどこで、という話ですね。松野「頼三」さんもそういう話をしていたな。

小池 していましたね。小泉「純也」と塚原「俊郎」が争ってとか、そういう話をしていましたね。

伊藤 そうですか、やっぱり時代が少し違うのかな。

藤波 違うんだな。

■加藤紘一氏のいふ

佐道 ちょっと話の流れからは違うんですが、さっき宏池会の話が少し出ていましたね。この昭和五十九年十一月の改造内閣のときに、加藤紘一さんが防衛庁長官で初入閣されているんですね。やがて宏池会のプリンスということになっていくわけですが、この初入閣時の加藤さんについて、何かご印象はございますか。

藤波 いよいよ世代交替がここに来たな、という気がしたね。

伊藤 やはり輝けるプリンスでしたか。

藤波 うん、当時ね。大平が大事にしたからね。

佐道 加藤紘一さんはいまかなり厳しいところにいるわけですね。かなり毀誉褒貶がある方で、褒める方もいらっしゃると思いますが、かなり厳しい批判される方もいらっしゃいますね。

藤波 そうそう。

佐道 先生ご自身はどういうふうにごらんになっていますか。

藤波 やっぱりナマの人間だから。野党からすれば、自民党というのは政官財の癒着の塊だと言うわな。それはある意味で癒着だな。みんなちょっとずつ、ちょっとずつとかいって癒着しているわけだ。加藤紘一なんかそうだ。それは人間がすっかりしていて、それぞれ判断していくわけだから、それでいいんだよ。そう思うな。

いま厳しくなっているね。私の後援者のある人が、「加藤紘一を大事にしよう。藤波さん、それは大事なことだ」と言うから、「そうだ、そうだ、それはいいことだ」と言って、最近だが、加藤紘一を大事にしようと自民党の中で言っておるわけだ。私の影響力がないからかわかんけれど、あんまりうまく行かなかったな。

伊藤 それはいつ頃の話ですか。

藤波 最近の話です。

小池 今度は山形で選挙に出ますからね。

藤波 そうしたら、「もう加藤紘一は終わったんじゃないか」と言っていたね。「いや、終わってない、終わってない」と、こっちで言う。私はある人に頼まれてやっているけれど、加藤紘一は本当にいいのかな、という気が、そのときしたね。これは大変だな、と思っただよ。性根を据えてやるといいな。いい政治家だけれどね。

伊藤 先生が「いい政治家だ」というのは、どういう政治家がいい政治家なんですか。

藤波 やっぱり人間として、しっかり判断力を持っているということだ。中国と台湾にしても、朝鮮半島の問題にしても、いいんですよ、そのとき判断するだろうという予測はできないからね。加藤紘一は辛いね。そういう気がしたな。一時より辛くなっているな。

伊藤 加藤紘一さんとはけっこうおつき合いは長いんですか。

藤波 長い、長い。初めからだ。

伊藤 新生クラブですか。

佐道 じゃあ、かなり前から期待しておられたわけですね。

藤波 そうです。大平さんが兄弟分として、ちゃんと据えてくれたしね。大平さんが閣議のあと、「おう藤波君、寄って行けよ」といって、行くと、だいたいそこに加藤紘一がおった。官房副長官だ。「君ら、仲良くやっていけよ」と大平さんが言っていた。

伊藤 年齢的にはどうなんですか。

藤波 それは加藤紘一がずっと若いな。私が昭和七年で、加藤紘一は昭和十三年か十四年だろう。

佐道 そうとう大平さんにかわいがられていたんですね。

藤波 ああ、「かわいがられて」いた。

佐道 伊東正義さんと加藤紘一さんはどうでしたか。

藤波 それは悪いことはなかったと思うけれど、そんなに肝胆相照らすということもなかっただろうな。

佐道 じゃあ、加藤紘一さんというのは、大平さんとの関係の印象が強いということですね。

藤波 ええ。

■日米関係について、アメリカとの人脈

伊藤 まだこの時期、日米の経済摩擦は相変わらず強いものがあつたわけで、日本の黒字はたしかにすごく大きかったですね。アメリカの対日赤字が五十九年で三六八億ドル、過去最高ということでした。それでアメリカに対する自動車輸出の自主規制の継続ということが決まっているわけです。これはアメリカとしてはイライラするわけでしょうし、といって日本でどうこうするといっても、どうしようもないことでしょう。といって、何もしないでいるわけにはいかない。外交問題といえますか、日米関係については、官房長官としてもずいぶん大きな役割を演じなければならぬでしょうし、総理大臣ももちろんですが、日米関係はどうですか。日米経済摩擦を中心に、ちょうど第二次内閣のあたりで日米関係は一番激しいと思うんですけれども。

藤波 経済を中心にして物を見ていけば、日米関係は非常に大事だし、将来を考えても、日本にとって決定的に大きな意味があると思

う。しかし、経済をちょっと離れてみれば、どうっていうことはいでしよう。

伊藤 まあ、そうですね。

藤波 だから、そのところだな。どう言えばいいのかな。たしかにアメリカは経済の大きな国だし、日本の国が短時日に五十年で「復興し、経済大国になった」今日があるのはアメリカのおかげだということもいえるけれど、経済ということではさうだけれど、どうっていうことないんじゃないかな。そういう気がするな。貿易摩擦というのはみんな一所懸命取り組んだし、自分のほうでももっとしなければいかんと思っただけれど、あまり経済にのめり込んでもよくないな、という気もしたな。

伊藤 藤波先生は、アメリカとのコネクションというか、人的なつながりはありますか。

藤波 個人的なものはない。どうっていうことはない。

伊藤 親しい友人とか……。

藤波 あるといえばあるけれど。各国ともそうだ。イギリスともそうだし、東南アジアの国もそうだし、中国もそうだし、韓国もそうだし。あいつはいきとるようだったら、おれが引き取りに来るぞ、という関係はないね。そういうのが政治家の中にはおるけれどな。

伊藤 中曽根さんのロン・ヤスのような……。

藤波 ロン・ヤスは便利だからロン・ヤスと言っただけのことだ。

伊藤 それもあるでしょうけれどね。政治家として、将来総理総裁のことを考えたら、やっぱりアメリカの政界、財界との人的なネットワークは必要でしょう。

藤波 必要と言えど必要だし、リクルートからもう十五年経つ。継続してそんなことはどうっていうことはない。

伊藤 いや、その前です。

藤波 当時ですか。一般的な問題になるんだ。

伊藤 ある程度ネットワークは――。

藤波 あると言えばあるし。

伊藤 この前だって、先生、アメリカに行つて中曽根さんを総理にしようといういろいろやったという話ですが、それは人的なネットワークがなければできないじゃないですか。

藤波 そうなだけだね。

伊藤 あのとときは、どなたかが連れて行つたという話ですね。

佐道 東さん。

藤波 東力を連れて行つたんだな。大蔵省からブルッキングス研究所に行つていたのを連れて行つた。それはどの銀行とか、どういう人間関係とかというのは、特別対処して行くという手もあるな。

伊藤 誰か、向こうとの人脈を作ってくれる人を持っていないと困りますね。

藤波 そうだな。とにかく便利だな。いろいろな話が来たけれどね、当時間も。官房長官を二年もやっておると、いろいろな連中がいろいろなことを言ってくるわ。アメリカの弁護士だけでも、いろいろな来ます。

伊藤 それは何をしに来るんですか。

藤波 「日本でこういう仕事をしたい」という。

佐道 売り込みですね。

藤波 売り込みだ。アメリカで日本を売り出してもらいたいとか、かまをかける。あなたに頼みますと言つて、中曽根内閣の代理店みたいにして言えば、やってくれるよね。金は要るわな。

伊藤 じゃあ、アメリカのPR会社なんか来るわけですね。

藤波 内閣に来るのは弁護士だな。法律事務所。国会の周辺によう来ておる。いっぱいおる。

佐道 ロビイストですね。

藤波 いわゆるロビイストだね。

伊藤 ロビイストとして雇つてくれというんですね。

藤波 いう。

伊藤 それはアメリカ大使なんかをやっている人たちに聞いてもそうです。ロビイストの売り込みがたくさんあるという。

藤波 そうそう。そんなのはどうっていいことはない。

伊藤 日本の国内にも来ますか。

藤波 アメリカから来る。どうっていいことはない。大事だと思つて、いちいち取り組んでおつたら大きな間違いになる。あれだけ嘘をついてやるもんでね。

佐道 経済摩擦はかなり厳しいけれど、全体としてみれば、先生はそんなに心配はしておられなかったということですね。

藤波 していなかった。私は心配しなかった。

■松永信雄氏の駐米大使就任、国鉄改革等

佐道 改造内閣ができるまさにこの頃に、日米関係でいいますと、日本の駐米大使が大河原「良雄」さんから松永「信雄」さんに替わられるんですが、松永さんご自身はアメリカに一度も在勤経験がない方です。大物次官でいらつしたことは間違いないんですが、松永さんを駐米大使に、というの、かなり政治の意向だろうとよく言われるんですが。

藤波 一般的には、誰かが松永さんを特に強く推したということはないと思うな。

伊藤 松永さんとはけっこうおつき合いは多かったですね。

藤波 一般的にね。大物次官として、よく働いたと思うね。

伊藤 この前のお話のように、次官はいろいろブリーフィングをやるわけでしょう。そうすると松永さんとはかなりしょっちゅうお会

いになったということですね。

藤波 そうそう。

伊藤 あの人の人柄については、どういうふうに見ていましたか。

先生はあの人はいやじゃないんでしょう。

藤波 いやじゃない。いいじゃない。結構ですよ。

佐道 でも、「結構です」という「断わるような」意味も（笑い）。

伊藤 「結構です、要らない」という意味にも（笑い）。

藤波 いい人やね。

伊藤 きちんと報告されますね。われわれもお話を伺って、実にきちんとしたお話をなさる方だと思ってるんですが。

藤波 きちんとしているよ。大河原さんもきちんとしているけどね。

伊藤 やはりそれぞれ、次官になるぐらいの人ですから。

藤波 そうそう。

佐道 じゃあ松永さんの駐米大使就任について、特別な何かがあったということではないんですか。

藤波 そうだと思ふな。

伊藤 ああいう次官の人事というのは内閣で決めるでしょう。

藤波 役所で決めてくるよ。

伊藤 決めては来るでしょうけれど――。

佐道 駐米大使なんていうポストになると、これは内閣ですね。

藤波 そうですね。特に総理大臣ですね。

佐道 中曾根さんのご意向が大きかったということですか。

藤波 意志を報告に来るんじゃないの。

伊藤 まあ、そうですね。そうすると、外務次官の人事というのは、外務省だけで決めるわけじゃないでしょう。

藤波 いや、役所だな。

伊藤 やっぱ外務省で決めますか。

藤波 決める。

佐道 小泉内閣が異例だったということですか。

藤波 ねえ、外務省はね。熊谷弘が通産で「役人の人事に口出しをしたが」、昔なら河野一郎とか、だいたい人事を動かすのは名前があとに残るぐらいの人だね。何人かね。だいたい人事ぐらいでやっていたんじゃないか。そういう気がするな。

伊藤 下手に人事をいじったら、火傷をするもんですね。

藤波 大火傷だ。

佐道 熊谷さんは、河野一郎さん並みの名前を残されるんでしょうか（笑い）。

藤波 大物かどうか知らんけれど、当座はそうだな。

伊藤 藤波先生はそういうことをやられたことはない。

藤波 やったことない。とにかく国鉄の改革をやるのに、総裁や副総裁のクビを取れということで、エライことをするな、と思った。

「本当のクビを取るんですか」と言ったら、「クビをとる、そうしないとできん」という。いま考えると、国鉄改革はようやれたと思うけれど、やっぱりあのときの総理大臣の判断だね。理事長も含めて、三役のクビを取れといって。

伊藤 でもあれで動いたんでしょう。

藤波 動いた、動いた。

伊藤 いまクビを取らないから動かないじゃないですか（笑い）。

小池 道路公園ですね。分割民営化が進まない。

藤波 動かないね。

佐道 国鉄ではないんですが、五十四年の夏に電電公社の民営化の法律が通っているんですが、これは関与されたんですか。

藤波 総裁は誰だった？

佐道 真藤「恒」さんです。

藤波 ああ、真藤ね。あった。真藤さんという人は、総理官邸に胸

を張って入って来るんだけど、官房長官の応接の部屋に座り込んで、動かんのや。向こうの「総理の」部屋に行け、と言うても動かんのや。つき合ったのは真藤さんですからね。

伊藤 それは官房長官を通じて言ってくれということですか。

藤波 総理のところに行って話して来いというのさ。「いや、あんたがいい、あんたがいい」と言うんだ。それで相手は山岸「章：当時全電通中央執行委員長」だろう。わしが山岸に会ったときに、分割するといったら、分割だけやめてくれという。分割をやめたら、あとは一般で行くんだな、と言ったら、一般で行くんだという。そうか。結局、日本一の組合だと言って、委員長から連合の大將になったね。ああ、そうかな、と思った。大したことないな、と思ったけれど。

真藤さんも山岸も、両方心安かったからね。だいたい法律をつくる頃には全部、スパーに行行って見習ってきたんですね。日本電電公社は、サービスピ精神をいかに発揚するかということ、スパーに行行って勉強してくると言った。頑張っていたな。

伊藤 非常に俗な話だけれど、僕らも国鉄民営化したらいっただいどうなるんだろうねと思っていたら、本当にサービスが良くなりましたね。

藤波 良くなった。力になった。十年前はそんなことを思わなかったけれど。最近、名古屋の財界と経済の話を見ると、昔は名古屋といたたらだいたい、中部電力と名鉄と中部日本新聞と東海銀行、そんなあたりが中心だった。いまは完全に、民営化したJRが入ってきているものね。トップになるという。

小池 JR東海ですね。

伊藤 JR東海はいんだらうね。

小池 「東海道」新幹線を持っていますからね。

藤波 えらいもんだと思ったな。十年の差で、経済界がひっくり

返った。JRで、トヨタがあとをくつついてくるくらいのもんだ。

伊藤 トヨタは世界の大企業ですからね。中京地域はそれですね。

佐道 そう考えるといいですね。

伊藤 それなのに名古屋の地盤沈下と言っているじゃない。

藤波 そんなことはない。いままでのところが地盤沈下しているんだ。

伊藤 東海銀行は駄目ですね。

藤波 東海銀行を見てるとそうだな。名鉄を見てもね。

伊藤 名鉄も駄目ですか。

小池 不祥事が続いているんです。

平松 そうでなくても落ちているでしょうね。

伊藤 あまり路線がたくさんないということもありますね。

平松 けっこう周辺の細かいところまで行っているんで、あまり収益がよくないんじゃないでしょうか。

■防衛費1%問題など

伊藤 どうしましたようか。質問要項が終わりました。

佐道 一点だけ、ちょっと日米関係にも関係があるんですが、八四年末に、中曽根さんが平和問題研究会をおつくりになって、高坂正堯さんが座長になりました。そこで防衛費の1%を突破した方がいいという報告書をお出しになっているんです。それでいよいよ防衛費の1%という問題がいままでよりかなり大きくクローズアップされてくるようになったと思うんですが、これは先生としてはどういうふうにお考えでしたか。

藤波 「戦後政治の総決算」と銘打って内閣が発発して、国民は中曽根内閣がいくつかの課題を必ずやるだろうと思っているわけだ。

その一つが1%問題だ。また一つは靖国神社の問題だ。内閣はそれに応えなければいかん、そういうふう思ったな。

佐道 そのために内閣もそれに向けてやっていこうということですね。

藤波 そうそう。徹夜した朝、秘書官がひげ剃りを持ってきた。「弁当はあとや」と言って弁当をあとにして、みんなでヒゲを剃った。ジャーツという電気剃刀だ。安倍さんや竹下さんや加藤絃一、藤尾政調会長、ジャーツとやってた。小食堂だ。

佐道 内閣は一致していたわけですか。

藤波 一致したかどうか、決は採らんけれど、だいたいそれまで、と思っただな。

伊藤 だいたいそっちのほうに行ったわけですね。

藤波 そうそう。

佐道 加藤絃一さんも、それで頑張ろうということですね。まあ、防衛庁長官ですからね。

藤波 そうそう。

伊藤 ちょうど四時になりました。ありがとうございます。まだ官房長官時代に残りがありますので、そのあととも国対「委員長時代」があります。

平松 これは毎日新聞です。「岩見隆夫「近聞遠見」(毎日新聞二〇〇三年八月二日)のコピーを配布」。

伊藤 「記事を読んで」これは本当なんですか、「低姿勢は正姿勢」。

藤波

藤波 本当です。

伊藤 そうおっしゃっていたんですか。

藤波 そうです。呟いていた。

伊藤 誰が低姿勢なんですか。

佐道 藤波さん。

伊藤 藤波さん自身ですか。

藤波 低姿勢で行こうと言ったんだ。

伊藤 中曽根さんはそんなことを言わないじゃないですか。

藤波 言わないね。中曽根さんは言わんな。

佐道 「藤波すびりっ」とはみなさん名前をお出しにならなかったということですが、こうすると岩見さんも書いたということがよくわかりますね。

伊藤 新生クラブの話も出ていますね。野田毅なんかが入っているな。加藤絃一、山崎拓だ。「いつの日か／＼藤波首相」を、という熱い思いがこもっていた」。先生は先ほどあまり肯定的にはおっしゃらなかったけれど。

藤波 本人は全然そんなことは思わんわ。

伊藤 そうですか。

有馬 「回顧録の執筆を、せひとも」と最後にありますね。これ「オーラルヒストリー」が、それですよ。

藤波 全部申し上げるから。

伊藤 孝堂先生の俳句もありますね。有罪確定のときの句が、「今生の喧嘩の果てに 小鳥来る」なんですね。

藤波 はい。

伊藤 今度で官房長官時代が終わるかな、と思います。今日は先生、比較のお元気でしたね。

藤波 そうですか。

有馬 いつも藤波先生、ネクタイの柄が――。

佐道 今日はミッキーマウスですね。

有馬 ご自分で選ばれるんですか。

藤波 そうです。

藤波孝生 オーラルヒストリー

第11回

日時：2003年9月18日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（元政策研究大学院大学助教授）

武田知己（政策研究大学院大学特別研究員）

川越美穂（東京大学大学院博士課程）

平松大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■青年団の思想と政治哲学

伊藤 「自民党の」総裁選挙でいろいろ大変なんじゃございませんか。先生はあまり関係ないですか。

藤波 ええ、関係ないです。私は無所属ですから。

伊藤 ああ、まだ復党できないんですね。いつ執行猶予が切れるんですか。

藤波 十月末だ。

伊藤 じゃあ、間に合わないですね。

平松 判決を本人が見てから十日後「に執行猶予が切れる」ということらしいので、確実に切れるのは、十一月一日頃だと思えます。

伊藤 その前に解散になってしまいますね。

藤波 そう、いまのままだったらね。小泉再選になれば。

伊藤 もう、なるでしょう。

藤波 わからん。私はわからんと思っている。

伊藤 小泉が再選されなかったら、誰がなる可能性がありますか。

藤波 それは三人「亀井静香、藤井孝男、高村正彦」が話し合っ、出すんでしょな。

伊藤 話し合いがまとまりますかね。

藤波 まとまるでしょうね、反小泉で。小泉純一郎というのは、私がいまここで言うのもおかしいけれど、本当にアホなんだな。なんにもわかっていない。人気が落ちてくると外交をやる。昔から外交は、人気落ちるといかんのでやるということになってるんだ。何かというと、外交で恥をかかないというのが中心なんだ。北朝鮮であろうがイラクであろうが。

伊藤 じゃあ、中曽根さんもそれをやっていたということですか。

藤波 中曽根は、外交はあまりないでしょう。

伊藤 そんなことはないでしょう。

藤波 どんな場面ですか。

伊藤 いや、ロン・ヤスの関係とか。

藤波 それはアメリカとの関係だ。

伊藤 あと、あちこちにしょっちゅう出かけていますよ。

藤波 それは東京におらんほうがいいもんで、行ったんだ（一同笑い）。

伊藤 何か、この前の回の話で追加することはございますか。

藤波 よかったらいま、私の政治哲学みたいなものを話しておきたいと思いますが、いいですか。

伊藤 はい。

藤波 私の出身は青年団とか青年会議所とかいうんですが、物の考え方としては、青年団が中心だと思えます。それは、あと誰かが引き継いだかという、竹下さんがそうだったと思う。私の場合もそうだった。それはどういふことかという、みんなそれぞれ考えがあって、一堂に会して話し合っ、話し合っ結果を大事にする、ということだ。それが青年団の思想なんだ。大事にするのはどういふことかという、目的に向かって一所懸命やるということだ。それが青年団の考え方だ。一人ひとりバラバラの考え方でもいいんです。何かやるときに、パーツとまとまっやればいい、というのが私の考え方です。

例えば、文部省の政務次官のときにやったことは、政務次官室を開放して、一番上が係長ぐらいの若い諸君が夕方になると次から次へと集まっきて、「パー文部政務次官室」というのができる。藤原「清」という秘書「政務次官付主任」は、そのために一所懸命やっていた。そこで日頃から鬱々考えておる、自分の職場、例えば初中局なら初中局、大学局なら大学局、文化行政なら文化行政における

若い連中の思いを吸収して、ウイスキーを振る舞いながら弁当をついて食べた。

それを積み上げてやっておればいいと思ってやっていたら、非常に評判になって、それが私が文教部会長のときに、私学助成とか、あるいは高等教育の充実とか、あるいは生涯教育の展開とか、知・徳・体のバランスのある教育とか――。私は徳育が中心だと言った。その頃に知育の勉強は放棄しているわけだ。放棄しているというのはどうということかという、いまになって知育は大事だと言っているけれど、私が部会長のときに、知育は二番、三番でいいから、徳を大事にする教育をやるということが決まっているわけだ。そんなふうに、一人ひとりの考え方を持ってきて、それをお互いが努力をしながら、文教部会長としての仕事をやれたと思うんです。それはひとつの青年団の考え方だ。

それから、労働大臣で成功して、いまだに「藤波労政」と言ってもらえるのは、これもいろいろあるけれど、本田「宗一郎」さんを会長にして、いろいろな連中を集めてきて議論をしたからだ。議論したほうがいいと言って、考え方はいろいろだけれど、それを集めてきて、ひとつひとつの筋道を立てた。それがよかったということになっている。これも青年団の考え方だ。

中曽根内閣のときに、閣議だとか、いろいろなところで一所懸命になって努力をした。国の歯車を回すために努力をしたけれど、いつもいろいろな人の意見を聴くというのが中心で、それも青年団の考え方だったと思うんです。

そんなふうに、目的はいろいろだけれど、ひとつひとつの目的を持って、いろいろな意見を持った人に集まってきてもらって、話し合いをする。まとめ上げる。まとめたら、それに向かって一所懸命やるというのが青年団の考え方だ。それがそれぞれの分野で成功したので、いまだに言うてもらおうぐらいの力を持っている。それをや

ると、次は二回目「の選挙」だから気をつけろとか、政務次官や大臣になったときにかえって「選挙は」危ないから気をつけろとかいうけれど、選挙のときでもちっとも怖いものなしになる。というのは、そんなことは通り抜けて、もっと超越したものを中心に物を考えていくからだ。自分ではそう思っていて、私は非常に成功したと思うんです。それがいまだに、ひとつひとつの分野で、「藤波労政」とか「藤波文教」とか「藤波官房長官」とか言ってもらおうようになったのは、それが非常によかったからだと思う。

中曽根のあとは、日本の世の中は全部安倍晋太郎で固まっておったんだけど、それが竹下になったというのもむべなるかなで、ひとつひとつ意味のあることだったと私は思うんだ。

初めに鈴木内閣が発出したときに、中曽根さんが行管庁長官になって、正月に出て来いというので、正月に行ったら、「民間の人の意見を聴くのがいいと思うが、誰がいいと思うか」というので、土光「敏夫」さんを推薦した。「経済界ではいま土光さんが一番いいと思う。特に行革のような仕事は、貧乏人は麦を食えというのではなく、自分で高ぶらずに、貧乏人のような顔をして、めざしを食べているような人がいい。だから土光さんが一番いい」ということを申し上げた。中曽根さんは「そうだな、そうしよう」と言った。

私は「発想はいいと思うけれど、いつまでも土光さんに頼っておると流れてしまうといかんで、きちんと論理を立ててやるのが大事だ。それには瀬島さんが一番いい。瀬島龍三という人を番頭に、土光行政改革で行こう」ということを申し上げて、それが成功した。

瀬島さんが段取りして、韓国に行くことになった。韓国に行って、日韓親善を謳いあげる。そのときに中曽根さんが「外務大臣の安倍君を連れて行く」というので、「安倍さんを連れて行けば、中曽根内閣は最後まで安倍晋太郎と一本になってやっていくのでもいいと思

うけれど、本当は竹下を連れて行けば、安倍、竹下の二人が助さん、格さんになって、いつまでも中曾根さんを守ってくれると思うよ」ということを申し上げた。「それはいいけれど、竹下君を連れて行く理由はあるか」というから、「今度は金が出るので、外交だけじゃない。日本の国内の金も要るので大蔵大臣を連れて行くというのなら、理屈はあるじゃないか。だから外交と、内政の大蔵の両方を連れて行くことにしよう」ということをご提案申し上げて、二人連れて行った。それで、最後まで助さん、格さんになって、竹下、安倍が守ってくれた。そういうことも、ある意味で私は青年団の精神だと思う。ちょっと無理かもしれないが、そんなふう思うんだ。

全部を通じて、藤波孝生の政治哲学というのは、結局は青年団の一番大事なエッセンスをとって、それを遂行したことに尽きるところ。今日は引退する前のときなので、そのことを申し上げておきたいと思うんです。これが一つです。

それからもう一つは、私はずっと一生、四十年間を考えてみると、先輩にずいぶんかわいがってもらったと思うんです。先輩と私との関係は非常に大事で、それは早稲田の学生の頃からそうだった。例えば早稲田の学生のときに、池田敬八とか、小西彦太郎とか、鈴木憲男とか、吉田与蔵とか、あるいは中津幸雄とか、福田実とか、全部先輩なんです。大大先輩。雄弁会といっても、早稲田の総長をやった時子山常三郎にしても大先輩。ずいぶん、かわいがってもらった。それから同じように、福井康順という人にかわいがってもらった。東洋哲学の権威者だ。福井さんの話は、蕎麦屋の二階で聞いた。「君ら、中国で共産党がなせ天下を取ったか知っておるか」と言うので、学生がいろいろなことを言ったら、「そんなアホなことばかり言っているな。それは蒋介石の軍隊よりも、共産軍・毛沢東の軍隊のほうが強かったから共産党の天下になったんだ。そのことがわからんといかんぞ」と言ってくれた。ああ、東洋哲学というのはこ

ういうものだな、とあって、ずいぶん勉強になった。

それから、早稲田の商学部の一学年のときに、「先生が」いまから模範答案を読むと言って読んで、俺の答案じゃないかな、と思っただ。八十人も九十人もおるところで読んだ。帆足理一郎という日本有数の倫理学の先生の試験で、七百人ぐらいおる一学年の中で私の答案を読んでくれた。しかし、そんなことがあって、俺よりずっと頭がいいやつばかりおると思っただけで、えらい心配しておったのが、そんなに心配せんでもいいなと思ったので、大学の勉強というものを馬鹿にし始めた。藤波孝生が馬鹿にし始めた。これはいかな、と思いついながらも、ついついそういうことになった。ずいぶんかわいがってもらって、帆足理一郎さんの家に遊びに行ったこともあった。学生時代もずいぶん先輩にかわいがってもらった。

その後、政治の世界に入った。森コンツェルンの「森清が」会長をやっていた。副会長は園田直だ。会長が亡くなって、副会長が会長になった。二人からずいぶんかわいがってもらった。藤波孝生の哲学は、人柄を中心にして、森さんを追いかけていけばいいと思っただ。頑張ってきたからこうなった、というところがある。

その後ずつと見てみると、浜地文平さんにしても、徳川宗敬さんにしても、安岡正篤さんにしても、先輩です。岡田重精さんにしても、大阪の羽曳野の松本草垣まつくさかき女史も先輩です。あの人は、死んだと言いつながら横になって寝て、物を食べると、何百日も生きておった人です。実に神秘的な人です。その松本草垣さんにしても、みんな大先輩がかわいがってくれたと思うんです。

思ったことを言うてきたとも思えるけれど、先輩と話していると、礼をもちて話してきた、礼をもちて話さなければいかなんという気があった。礼をもちて話してきた。藤波孝生が礼儀正しいというのが評判になった。「お伊勢さん」というニックネームがついたのも、そういうことからだと思っただ。

振り返って考えてみて、礼儀正しくして、先輩にぶっつけて、先輩に面倒を見てもらったので、ここまで来ることができた。中曽根さんにしてもそうだし、三木さんにしても、鈴木さんにしても、福田赳夫さんにしても、かわいがってもらったと思うんです。後輩が思ったことを言うてもいいけれど、礼をもって接するということが中心にしてやってきたので、ここまで来ることができたな、という気がするんです。だから、そのことが非常に大事だということをお願いしたいのが一つです。

以上二つのことだけ申し上げておきたいと思います。特に文部政務次官のところ、何か話があったら言いたいと思ってきましたのは、「バー政務次官室」のことです。そこで、若い連中が腹の中でめいめい思っていることを吸収したということは、非常に意味があったと思います。それが文教部会長になっても意味があって、よくできたという気がするんです。以上です。

■「政敵」について

伊藤 いまのお話で、政治家としてずいぶんいろいろな方にお世話になったというところでございましたが、普通よく「政敵」という言葉を使うじゃないですか。そういう関係の方はいらっしやらないんですか。

藤波 政治の「敵」は田村元。これは選挙区ですね。

伊藤 やっぱり地元の敵ということですか。

藤波 そうです、政治家の場合は選挙区です。悪い意味ではない。それはいまでも続いている。ときどき私は行って、きちんと季節の挨拶をして、いろいろなことを教えてもらってくるんだ。根本龍太郎さんが、もう一人だな。

伊藤 それはどういう関係ですか。

藤波 これは浜地さんと兄弟分だった。河野一郎の河野派だった。「河野派が」中曽根さんと森「清グループ」との二つに分かれたときに、森さん、園田さんを助けて、重政誠之や根本龍太郎がやってきた。その一人だな。もともとは根本さんも浜地文平も、農林大臣をやった広川弘禪の派だ。それが河野派に来て、それが中曽根と森の二つに割れた。河野一郎が昭和四十一年七月七日に亡くなって、どうしようかというときに、四十二年一月に総選挙があって、それから森は森、中曽根は中曽根で、きたわけだな。

伊藤 中曽根派というの、しょっちゅう出たり入ったりしていますね。先生も出入りはあるんですか。

藤波 最初、中曽根さんか森さんか、どちらに行くかというので、浜地さんと私の二人で両方に会いに行ったんだ。それで話を決めようと思った。森さんは、「俺は何にも力がないけれど、俺と藤波君と相談しながらやろう」と言った。その足で中曽根さんのところに行った。中曽根さん曰く「俺と一緒にやれ、やらないと君は落選するぞ」。それで、おれは一緒にやる人がいいよと言って、森さんのほうに行った。

伊藤 森さんのほうに行ったんですか。それであとでまた中曽根さんのほうに行くわけですか。

藤波 そうだ、行くわけだ。宇野宗佑とか上村千一郎とかと一緒に中曽根派に行くわけだ。三期ぐらいあとからだ。それで「中曽根さんが」私だけを大事にしたら、先輩がみな怒るな、怒るはずだわ。私には何も意見を言わなかったけれど、中曽根さんには、「偏っておるんじゃないか、仲間の扱いがおかしい」と言っていたな。

伊藤 中曽根派自体が、前の竹下派みたいに力チツとまとまっている集団ではないでしょう。

藤波 ないな。

伊藤 渡辺美智雄さんみたいにしゅっちゅう出たり入ったりとか。先生はそういう意味では、そこからあとは出たり入ったりはないわけですか。

藤波 ないわけだ。

伊藤 いちおうずっと中曽根派で来ている。

藤波 いちおう来ているわけだ。

伊藤 一応来ているけれど――。

藤波 いややもん。ずっとだよ。

■世代交代の空気

伊藤 前の話に戻ります。三角大福中と来て、中曽根さんでタネ切れになりますね。それで自民党も若返りということになるわけですが、社民連とか民社党あたりでも、だんだん世代交代が起こってくる。全体として当然みんな高齢化するわけですから、世代交代が起こるのは当たり前なんです。だんだん変わってきている。先生はほかの党派の人とつき合っていて、ご自分も次の世代、あるいは次の次といえますか、そういう世代になってきたな、という感じでおられたわけですか。

藤波 よそを見ながら、自分もこうだというふうには思ったことはなかったけれど、民社党の場合、春日一幸さんというのは断然違う。話にならないくらい違うのであって、大内啓伍も塚本「三郎」も、両方とも子分だった。それは塚本に替わっても、意味は違うけれど、実際は春日一幸さんが力を持っていた。実際に力を持っている人とつき合っていかなければいかな、ということはいつも思っていた。伊藤 そうですか。春日さんがなんとなく民社党のオーナーみたいな感じなんですか。

藤波 そうそう。西尾末広のあとは春日一幸だろうな。

伊藤 春日さんのあとはどうですか。

藤波 民社党もスケールが小さくなった。

伊藤 春日さんのように、ガチッとした力を持った人が、あとはだんだんいなくなってくるわけですか。

藤波 そうですね。

伊藤 この前、竹下さんの創政会のお話を伺いました。竹下さんが創政会をつくったときに、初めは勉強会だといって、田中さんも「それならよからう」と認めた。結局それが派閥の再編になっていくのを見て、これは二階堂「進」さんをはじめとした人たちがつぶしにかかったと言われていますが、そんな感じですか。

藤波 初めはそんなふうには思うんだけど、だんだん本気で世代交代が始まるな、という気がした。渡部恒三というのは私の友人で、いま「衆議院の」副議長をやっているけれど、ちょうどその時期に脳梗塞か脳血栓かで病気になって、虎の門病院だったと思うけれど、入院した。それで見舞いに行ったら、渡部恒三は渡部恒三なりの話をしていたけれど、客観的には梶山「静六」とか小沢一郎が竹下派をつくるときに、渡部恒三には初めは声をかけなかった。あいつはおしゃべりでいかに、とあの連中は言うた。おしゃべりではないと私は思っておるのだけれど、そう言うて、非常に門戸を閉ざしながら仲間を集めてきたというのが竹下派・創政会のときだった。だから、これは本気でやるな、という気がした。

伊藤 初めからバーツと広げるのではないからですね。

藤波 広げるのではなくて、一人ひとり丁寧に、絞って絞ってやっているな、という気がした。

伊藤 最初に創政会を作ったころと、そのあとの竹下派の幹部とはちょっと違うんじゃないかと思いますが、先生は直接に竹下さんあたりからそういう話はなんとなく聞いてるんですか。

藤波 なんとなく聞いているのは聞いているけれど、よそのことだと思っ

伊藤 竹下さんも別に藤波さんに了解を求めなければならぬわけではないから。やっぱり竹下さんが新しい派閥のリーダーになってくれば、自民党全体が若返るといいますか、世代交代が起こる。そうすると竹下のあとはどうなるか、という感じを持っていたんじゃないですか。

藤波 竹下派の中ではなくて、政治全体の中で、のことですか。

伊藤 ええ。

藤波 どうかな、わからんな。

伊藤 どういう人たちが次の若い世代のホープとして見られていたんでしょうか。たしかに藤波先生もその一人だと思っ

藤波 実際はずっと若返ったな。竹下、安倍。安倍というのは竹下と同じぐらいだな。宏池会は宮澤か。宏池会は〇・五ぐらいで横に置いて、竹下・安倍だね。

伊藤 それはだいたい衆目の一致したところですか。中曽根派の中ではどうですか。中曽根さんはいまだって頑張っていますからね。

その当時は世代交代についてはどう思っ

藤波 渡辺美智雄さんが「中曽根」総理のところに来ておるとい

「なんじゃ」と言ったら、「藤波のようなものを官房長官にしておいてはあかんのや、あんなものは官房長官になつたらいかんのや、と

の世界でははっきり物を言わないとわからんで、はっきり物を言う

伊藤 渡辺美智雄という人はいろいろ毀譽褒貶のある人ですけど、

藤波 大平さんのほうに行ったりな。大平さんが好きだったんだ。

伊藤 大平さんが好きなのは、先生だってそうじゃないですか。

藤波 ねえ。私と武藤嘉文だね。武藤嘉文さんはちゃんとしておるようなところがあるけれど、自分だけよければいいという人だとい

伊藤 ちょっとあまりその後名前が生まれせんね。

藤波 藤井孝男も一所懸命やっているんだけど、岐阜だからな。[同じく岐阜の]武藤嘉文なんて働かさなければいかんと思っ

伊藤 創政会が旗揚げしてしばらくして、角栄さんがかなりイライラして、ついに倒れた。それで通信病院に入院するという事態が起

藤波 率直に事実を認めただけで、それで心配するとか、それで困

伊藤 田中さんが倒れるということは、当時の政界の中では衝撃と

藤波 大きかったですね。

伊藤 中曽根内閣に対して影響がないのかな。つまり中曽根内閣は「田中曽根内閣」と言われて出発したじゃないですか。田中さんが後ろ盾にくっついていて。その後ろ盾が倒れるというのは、田中さんから離れるチャンスでもあるけれど、後ろ盾が危なくなることもある。どっちを考えるんですかね。

藤波 そのころ、金丸、竹下が完全に中曽根を助けているので、あまり関係ないだろうな。客観的にそう思うね。

伊藤 そうですか。じゃあ中曽根内閣においては、田中さんではなくて竹下さん、金丸さんが大きいわけですね。結局それで支え続けてくれたので、あと竹下内閣になるということですか。

藤波 そういうことだな。

伊藤 ちょっと話が変わりますが、昭和六十年に田中六助さんが亡くなります。これはどんな感じでしたか。

藤波 ああ、ついに逝ったか、という感じだ。

伊藤 やっぱり病気だったから、ですか。

藤波 そう。本会議場で、代表質問をやるときに大きな字で原稿を書いてやっていた。逝ったか、という感じだったな。すぐに飛んできてお悔やみに行っちゃったけれどね。

伊藤 田中「六」さんとの関係はどうですか。

藤波 六さんとはよかった。

伊藤 六助さんは宏池会の中で宮澤さんとは対立していたわけですね。「一六戦争」なんて言われていましたから。

藤波 そうそう。

伊藤 宏池会の中で、先生はどちらかというところ、宮澤さんのほうではないグループと——。

藤波 宮澤さんのグループだけれど、宮澤さんはあまり一人ひとりをきちんとせんのだ。派閥的にきちんとしないんだ。宮澤喜一という人が存在しているなとは思ったけれど、宮澤派というのが宏池会

の中にあるな、とは思わなかった。

武田 田中六助派というのはあったんですか。

藤波 六さんを助けた人はあったと思うけれどね。

伊藤 宏池会というのは、どうなんですかね。

藤波 もともとそういう仲間だけれど、その中でも特に宮澤さんというのはサラッとしておったんだね。

伊藤 じゃあやっぱり跡目は宮澤さんに行くとは思っていなかったということですか。

藤波 誰が跡目とか、そんなことは思わなかったな。六さんが死んだから宮澤が中心になったのか。

平松 流れとしてはそうですね。

伊藤 宮澤さんが「宏池会を」引き継いだけれど、本当のオーナーの感じではないですよ。

藤波 そうですね。

■内閣官房のメンバー

伊藤 先生は中曽根内閣の官房長官になられて、第一次改造で続投になるわけですね。そのときに官房の構成は変わるんですか、変わらないんですか。

藤波 変わらないね。

伊藤 じゃあ前やっていた参事官とか、そういう人たちがずっといたということですか。

藤波 そうだ。いま宮内庁の次長をしておる羽毛田信吾が厚生省から来ていて、参事官室に陣取ってやっておった。「昭和五十五〜五十八年内閣官房内閣参事官」。羽毛田を中心にした体制は変わらんとするね。「平成四〜七年内閣官房内閣参事官室首席参事官」。

伊藤 あと「参事官は」外務と大蔵から来ているわけですか。

藤波 あと通産。

平松 警察もいますね。

伊藤 それは首相秘書官ではなくて、官房長官についているわけですね。必ずその四つの省ですか。

藤波 そうそう。

伊藤 それもあまり替わりなしで行くんですか。

藤波 佐藤謙が大蔵から来ていた「昭和五十七、六十、六十二年内閣官房長官秘書官」。役人生活は、防衛庁に行つて防衛事務次官をやつて終つた。それから警察から来た平沢「勝栄 昭和六十、六十二年内閣官房長官秘書官」は国会議員になっている。それから外務から来ていたのは、このあいだ死んだ中本「孝」、六十一歳だった「昭和五十八、六十一年内閣官房長官秘書官」。

伊藤 すいぶん若死にですね。

藤波 若死にだ。

伊藤 そういう官房ですが、最初に副長官から長官になられますね。そのときに官房の構成みたいなことはご自分でやるんですか、それともあてがい扶持なんですか。

藤波 あてがい扶持。

伊藤 各省から、この人を、と言ってくるわけですか。

藤波 そうそう、言ってくるわけだ。

伊藤 こつちから注文をつけるわけにはいかないんですね。

藤波 そうそう。中曽根さんのときには、秘書官のクラスが一つ上になった。

伊藤 それは官房長官についているのもそうですか。

藤波 そう思うね。どうか知らんけれど。

伊藤 やっぱりその人たちがよく働いてくれれば、官房長官としては非常にいいですね。

藤波 いいわけだ。

伊藤 そういふ人たちが答弁をつくってくれたり、いろいろな仕事をこなすんでしょう。

藤波 そうそう。

■売上税と防衛費問題

伊藤 それでは中曽根内閣の後半の問題になりますが、昭和六十年の国会では、特に防衛費と税制の問題になりました。税制改革は、その後先生が官房長官を辞められたあと、非常に大きな問題になってくるんですね。これがやがて売上税の問題になるわけですが、この税金問題は、先生としてはどういふふうにお考えだったのか、あるいはどういふふうに関わられたのか。

藤波 官房長官時代はどうだったか。税制は国対委員長のとまだね。

伊藤 官房長官の時代から税制改革の問題はワーワーなっていましたね。

藤波 言っておいた。大蔵省が一所懸命だった。

伊藤 やはりこれは、直間比率の見直しが中心ですか。

藤波 「それが」中心。

伊藤 やっぱりのちの消費税につながるようなものを、なんとかしてつくらなければならぬということですか。

藤波 そうです。

伊藤 これは先生としては、それはそうだろうな、ということですか。それとも反対のほうですか。

藤波 国対委員長になってからは、仲間がほとんど反対になっていった。例えば河野洋平もそうだったな。自民党では塩谷一夫なんかは商工業者中心の陣営だったので、絶対反対だった。だいたい強いな、

と読んで話を聞いた。はじめシライというのが主税局長「当時の主税局長は水野勝氏」で、一所懸命になっていた。山口「光秀・事務次官」以下、税制・経済のことは大蔵省に任そうや、といってきた。フツと気がついたら、大蔵省が仕組んで段取りをしておるので、これは任せておけんなという気がしたな。「私が」国対委員長になつてからだ。

伊藤 とにかく税制改革は絶対に必要だということは――。

藤波 看板としてあった。だけど、そんなに具体的にでてくるとは思わなかったな。

伊藤 なんてそういうふうになったのかよくわかりませんが、中曽根さんは大型消費税の導入を否定しますね。「縦横十文字に」云々ということですね。ということは、自分で手足を縛ったようなことにならないですか。

藤波 自分で手足を縛るといふか、方向を言わないと世の中治まらん、ということにしてしまったな。

伊藤 だけど実際には売上税の問題は自分で提起しなければならぬことになるわけですから、嘘をついたんじゃないかということでごめられますね。

藤波 「私が」国対委員長をやっている、国会でずいぶんきつい場面があった。そのとき竹下さんが幹事長をしておったな。竹下幹事長に「わしが総理に断わってくる」と言って総理のところに行つて、「今度の間接税中心の考え方は、もう国会を通りませんのでやめます」と言った。「なんでやめるのか」と言ってまじまじと私の顔を見た。「川というものは、下から上へは流れません。上から下へは流れるけれど、下から上へは流れません」と言ったら、「ああ、そうか」と言っただけだった。

「私の責任で言ってくるでな」と竹下さんに言ったら、「そうか、言ってくるか」と言ったことを覚えてるな。それで「消費税は」

竹下内閣のときにできたんだな。

武田 そうですね。

伊藤 税制という問題になると、竹下さんは大蔵大臣もずいぶんやりましたし、竹下さんの知恵もだいぶんあるんじゃないかと思えます。党の税調、山中貞則さんもこの時点からある程度やっているわけでしょう。このへんの調整はどうだったんですか。それから大蔵省ですね。

藤波 スローガンにしても謳い文句にしても、実際に大蔵省にいてみようということにして動いておったけれど、ちょっとしてから、これはいかん、という気がしたな。政治に逆行すると思ったな。これは政治とは違うという気がした。一所懸命やったな、あいつらは。「主税局長は国対委員長室に出入りすることはならん」と言ったのを覚えている。「大蔵省は嘘を言っつかん」と言った。

佐道 このとき税制の問題と一緒に、防衛費1%枠突破という問題がありました。防衛庁が中期防を繰り上げてやるという話がずっとあって、それは防衛費1%枠を突破しないとかなかなかできないということが懸案になっていたのを、中曽根さんがこの時期にやるうというところで問題になっていたと思うんですが、これにはどのように取り組もうとされていきましたか。

藤波 中曽根が天下を取ったらやるだろうということがいくつかあって、1%問題はその中の一つだな。だから私も本気になってやるうと思った。靖国神社に参ることとか、防衛費1%の話はみんな一緒や。伊藤 そして実際にやったわけですね。

藤波 やったわけだ。

伊藤 だけど議会ではそうとう――。

藤波 きつかった。

伊藤 そのときはもう国対委員長ですか。

藤波 国対「委員長」だ。

佐道 一九八五年には結局できなくて、八六年に突破するんですね。

八五（昭和六十）年に最初にやろうとされたときに、一％を「突破する」という話をしたら、党内からもさっそく反対が出たわけですね。

藤波 出た。

佐道 長老の福田さんとか、鈴木さんとか、みんな反対と言い出した。党のほうでは金丸さんが幹事長だったと思いますが、そういう方と連絡を取りながら進めていこうということでしたか。

藤波 そうですね。

伊藤 それで六十一年には突破したんですね。このとき予算委員会などで議論するわけですが、国対委員長としてはどういうふうにするんですか。

藤波 「しようがない」ということだろうな。

伊藤 言いたいだけ言わせておいて――。

藤波 公明党は支持だろう。公明をあてにして、やっていたんだ。

伊藤 どこかが支持しないと突破できませんからね。

■国対委員長に就任

伊藤 先に国対委員長のお話を伺ったほうがいいような気がしますね。「一九八五（昭和六十）年十二月に」国対委員長におなりになるわけですが、これはどうやって選ばれるんですか。

藤波 総裁指名。「すまんけどな、おれはやろうと思ったことだけやりたい。それには法律が要るので、法律を通さなければならんで、国対委員長を務めてくれ」と総理に頼まれて国対委員長を引き受けたのを覚えているな。

伊藤 竹下さんなんかはずいぶん国対をやられていますね。

佐道 竹下さん、金丸さんですね。

藤波 そうそう。「山を降りてきたか」と金丸さんが言ったのを覚

えているな。

平松 そういう表現をされたそうですね。

伊藤 それは何を表現されたんですか。

平松 内閣の官房長官から国会に来た、ということですか。

伊藤 山を降りてきた、ですか。その前は国対関係の仕事はなさっていませんか。

藤波 やってない。全然やっていない。

伊藤 それじゃ大変なことじゃないですか。

藤波 そうですよ。それで委員長代理が大事だといって、渡部恒三にした。「すまんけどな、助けてくれ」とわしが渡部恒三の部屋に言いに行ったんだ。「本当だったら、あんたが委員長で、おれは委員長代理をやらなければいかんのだけれど、こういうことになってしまったので、すまんけど助けてくれ」と言いに行った。「いやいや、助けてくれでもなんでもない、おれはやる」と言って、やってくれた。平松 すでに大臣を経験されていましたし、普通なら引き受けないところだと思っんです。

伊藤 そうですね。それでそのほかの国対の委員は、各派閥から出るんですか。

藤波 副委員長はそうですね。

伊藤 それで委員長代理が筆頭になるわけですね。

藤波 そうそう。いま宏池会でやっておる小里「貞利」とか、古賀誠、それから糸山英太郎。参議院から斎藤十朗とか村上正邦とか、そういう連中がおったな。ハマコー「浜田幸一」が見に来て、監督に来るんだ。

武田 それはどういうことですか。党を代表してくるんですか。

平松 勝手に来るんでしょう。

伊藤 しっかりやれ、ということですか。なんだったら、おれが先頭に立ってやるから。

佐道 乱闘があるときだけ、とか。

武田 乱闘要員。

伊藤 ハマコーさんと先生はどういう位置になりますか。

藤波 どうっていうことはない。ずっと後のことになるけれど、ハワイに金丸さんが行っておるとき、金丸さんに用事があったって、金丸さんと呼ぶときにハマコーを呼んだ。それがよかったんだな。「藤波というのはえらいもんや。おれをまず呼んで、それから金丸さんと呼べということになったんだ」という。政治家というのは誰を通じるかというのが大問題だ。それはほめてもらえたな。いまでもほめてもらっておるね。ハマコーさんの息子が浜田靖一だね。ハマコーさんの息子とか、小此木「彦三郎」さんの息子「八郎」とか、そんな若い連中とときどき飯を食うんだ。

伊藤 国対には、各党の国対がいるわけでしょう。当時は社会党が最大野党ですね。社会党の国対はどなたでしたか。

藤波 大出俊。山口鶴男が先だったか、どちらかだ。

※昭和六十一（一九八六）年九月まで山口氏、以後平成三（一九九二）年まで大出氏。

伊藤 それはなかなか大変ですね。

藤波 大変だ。

伊藤 ずいぶん手強いじゃないですか。ほかの党はそれほどのことではないとして、とにかく国会運営をやっていくためには社会党と話をつけないことにはどうにもならんわけでしょう。

藤波 どうにもならんけれど、社会党はいろいろだ。民社党はあてにならない。小沢「貞孝」という長野県の人が国対委員長をやっていた。あてにならん。それで藤波国対は公明党を大事にして、自公路線の出発になるんだな。いまいろいろのことを言うな、いいとか悪いとか言うけれども、出発はそうだったんだ。

伊藤 そのときの公明「の国対委員長」は誰だったんですか。

藤波 市川「雄一」さんだったか、ゴンちゃんが先かな。福岡県の権藤「恒夫」というのがおった。ゴンちゃんが先だ。ゴンちゃんには本当によかった。一本で支持してくれた。

※昭和六十一（一九八六）年十二月まで権藤氏、以後平成元（一九八九）年五月まで市川氏、その後市川氏が書記長になり、国対委員長は再び権藤氏となる。

伊藤 そうすると大事なものは、味方になってくる公明党ということですね。

藤波 ウォーッと突っ込んだものだ。

伊藤 敵のほうともある程度話をつけておかなければ駄目でしょう、大出俊とか。

藤波 そうそう。

伊藤 これはどうやって話すんですか。また、どこで話すんですか。

藤波 まあ、だいたい副委員長が話に行くね。社会党担当は糸山英太郎だ。

伊藤 そうですか、もう決まっていますか（笑い）。糸山さんはどうでした。うまくやってくれましたか。

藤波 副委員長が一所懸命やるかどうかだけのことだ。一所懸命やっただな。

伊藤 例えば「社会党が」反対でも、どこまで反対するかとか。形をつけさせてやるというか。

藤波 そういうことは毎朝確認しに行かないと、社会党は前日に言うことと違うことがあるからな。うんと強いのが出てくると、そっちにザーツと流れていくんだ。公明はそんなことはなかったですね。

伊藤 じゃあ、ちょっと約束してもあまり——。

藤波 あてにならん。向こうもそう思っているでしょう。

伊藤 だけど、強い流れが出て来て動いてしまえば、またやり直しですね。

藤波 そうです。

伊藤 ということは、社会党から言えば、値段をつり上げているようなものじゃないですか。

藤波 値段の話は、ほとんどないような時代になっていたんじゃないか。値段をつり上げておるな、と思ったことはなかったな。

伊藤 でもなんの代償もなしに話がつくということはないでしょう。藤波 いやあ、国対委員長はほとんど党内をまとめるだけで精一杯だったんだろう。

伊藤 国対委員長が党内をまとめるためには、多少何かが必要じゃないですか。

藤波 わからんな。そんなに意味がないと思うな。

伊藤 じゃあとにかく、誠心誠意だけで話し合いをするという以外ないということですか。しかし糸山さんが何をやってたかわからないですね。

藤波 渡部恒三が糸山さんと話をして、社会党はこうだということ。「私のところに」持ってきた。国対副委員長会議というのは毎朝やってた。

武田 毎朝やるんですか。

藤波 毎朝。

伊藤 議会が開かれているときでしょう。

藤波 そうそう、八時ぐらいからだね。

伊藤 最終的に大きな問題で話し合いをまとめるときに、委員長同士で話さなければならぬということはないんですか。

藤波 委員長同士で話をすることはあった。記者の前とか、記者の見とらんところで、いろいろあった。

伊藤 どこか隠れてやるわけでしょう。

藤波 そうそう。電話で話をしてね。

伊藤 電話で話すんですか。

藤波 電話で日と場所を決めて、行って話をする。

伊藤 新聞記者に嗅ぎつかれないで会うことはできますか。

藤波 できる、できる。

伊藤 新聞記者だってしょっちゅう国対委員長を見張っているといますけれどね。

藤波 それでも、あいつらはわからんな。朝の四時ぐらいが一番寒いんだね。ずっといても、寒さの頂上になる。

伊藤 そのころにいなくなるわけですか(笑い)。

佐道 でもそれは大変ですね。

藤波 大変、大変。大変さ。

伊藤 健康を壊す元だな。

藤波 生きとるだけで精一杯や。

伊藤 この前先生の事務所に行ったときに、官房長官の一日の日程表がありましたね。ああいうものには、そういう話が出て来ないわけですか。

藤波 出て来ないね。

伊藤 あれは公式のもんですか。

藤波 そうです。

伊藤 先生、社会党の二人についてはどんな感じでしたか。

藤波 党内をまとめるのに精一杯だという気がしたな。一所懸命やっているな、という気がした。

伊藤 人柄としてはどうですか。

藤波 なかなかえらいなあ、大出俊とか。山口さんは中曾根さんと選挙区で同じ選挙区だったんだね。伊香保の温泉だ。あれはえらかった。

伊藤 あの選挙区か。

藤波 初めの年が大出俊か。二年目が山口だったか。

伊藤 山鶴さんというのは感じとしてはどうですか。

藤波 やわらかそうにしておるけれど、きつかったな。死んだか、生きとるのか。

武田 まだ生きてらっしゃるんじゃないですかね。

藤波 大出俊は？

伊藤 大出さんも死んだとは聞かないね。

藤波 なあ。権藤は亡くなった。市川雄一は今度勇退する。

伊藤 今度インタビューするかな。向こう側から見て藤波先生はどうでしたか、と聞かないと。いや、なかなかやさしそうで（武田結構きつかった、とか）（笑い）。

藤波 山口鶴男は日教組をバックにしておった。群馬の教職員組合だ。

伊藤 一番激しいところじゃないですか。

藤波 それで、奥野「誠亮」文部大臣のときに、奥野さんと榎枝「元文」を対談させるのに、私と山口鶴男が両方で努力した。私が「文部省の側はわしが責任を持つ、あんたはそっちの責任を持つ」と言った。文部省は、「会ったときに何と言うんだと大臣が言う」というもので、「馬鹿もん、男と女が布団の中に入ったら、ちょっと手を伸ばすと紙が置いてあるんや、袋の紙が」と言ったのを覚えておるわ。それがあることが大事なんだ。

伊藤 じゃあ、その前からつき合いがあるんだ（笑い）。

藤波 ああ。

■ 自民党に代わる国対委員長

伊藤 この国対委員長というのは党の七役の一人ですから、党の幹部会には出るわけですね。

藤波 出る。

伊藤 もう、えらいものですね。その七人の中に入っていれば、少なくとも党の中ではナンバー7以上ではありますからね。

藤波 そうですね。

伊藤 やっぱり国対委員長というのは相当えらいものですね。

藤波 えらいものだ、党内ではね。

伊藤 うまく国会運営ができなかったら、失敗——。

藤波 失敗したらそれは責任を取らなければならぬ。

伊藤 もう、あとは駄目ですね。

藤波 そうそう。

伊藤 各派から有能な人を送ってもらわないと大変ですね。

藤波 そうです。

伊藤 だけど副委員長はこちらから指名するわけではないんですよ。

藤波 そうです。

伊藤 向こうが送ってくるんでしょう。

藤波 そうそう。

伊藤 国対委員長は誰かの下のいうことではないんですか。総裁のすぐ下なんですか。

藤波 そうです。ああ、幹事長がいるな。

伊藤 幹事長と連絡をとっていないといけないんですね。

藤波 そうです。幹事長に見込まれないといかん。

伊藤 このときは幹事長は誰ですか。

藤波 初めは金丸で、あとは竹下だな。

伊藤 二人ともいい関係ですね。

藤波 いい関係だ。

伊藤 竹下さんも金丸さんも、両方とも国対のベテランですね。

藤波 ねえ。

伊藤 じゃあずいぶん助けてもらえるんじゃないですか。

藤波 出る。

藤波 そういう関係だね。小此木さんはえらかったな。小此木彦三郎は中曽根派で、私が官房長官のときに国対をずっとやってきた。国対委員長のとくに江藤隆美が「わしも引退するで」と言うて、家内が息子を連れてきたな。今度勇退するんだな。国対委員長をやっているときに倒れたんだ。それで奥さんが中曽根さんに会わせてくれと言ってきた、段取りするわと言ったのを覚えてるな。いままで、ようもったな。

平松 何度か入院してましたけれどね。

伊藤 いま社会党担当とかそれぞれ担当が決まっているというお話でしたが、それは誰が決めるんですか。

藤波 副委員長と委員長が相談して、私と筆頭とで決める。

伊藤 だいたい得意な人脈を持っていないと話にならないじゃないですか。

藤波 そうそう。

伊藤 糸山さんは社会党と何かあったのかな。

藤波 本人が「やらせてくれ」と言うて、やったんだな。

佐道 糸山さんはその前に国対の経験はあったんでしょうか。

藤波 あったと思うね。

佐道 先生ご自身は、糸山さんとはその前から接点がございましたか。

藤波 全然ない。糸山は中曽根派だったんだ。知らんわけではなかったけれど。

伊藤 糸山さんはお金持ちでしょうが。

藤波 そう。

伊藤 中曽根派に入って、少し献金でもしてくれただのかな。

佐道 公明党はどなたが担当だったんですか。

藤波 公明党は誰やったかな。「平松氏に向かつて」誰が担当だったか、石松「佐智 自民党本部職員」に聞くとわかる。石松に聞い

てみて。

伊藤 担当もそうですが、直接委員長に会いたいということもあるでしょう。

藤波 あるある。

伊藤 これはけっこうきつい仕事ですか。朝から晩まで。

藤波 きつい仕事だ。

伊藤 会期中はずっと院内にいらなくてはいけないわけですか。

藤波 国対委員長室にいる。自民党のよその理事が国対に打ち合わせにやってくる。国対委員長は一日おらなければならぬ。

伊藤 いろいろな法案がありますね。どれを優先的にやるか、社会党との関係で吊るされてしまう法案があるでしょう。どれをどうやって――。

藤波 どうするかというのは、国対委員長の判断。

伊藤 もちろん、幹事長やなんかと相談するんでしょう。

藤波 いや、法律に関しては国対委員長だね。

佐道 じゃあ、かなり大きな権限を持っているんですね。

藤波 そうそう。

伊藤 例えば主管している官庁、大蔵なら大蔵から委員長にところに、これはぜひ通してくれ、というような陳情もあるわけですか。

藤波 あるある。

伊藤 いちおう政府提案として出すけれど、これは最後の取引に使うという法案も出てくるんですね。

藤波 出てくる。

伊藤 それは結果としてそうなるんですか。初めから意図して、のりしろみたいなもので、あとで、というものもあるわけですか。

藤波 そのときの具合だね。

伊藤 もう防衛関係の法案なんかはだいたい駄目ですね。

藤波 そうそう、内閣委員会だね。

伊藤 内閣委員会が一番の難物ですか。

藤波 そんなこともないな。

伊藤 教育関係だったら文教だし。

佐道 予算委員会もありますね。

藤波 予算委員会があるな。

佐道 国対委員長に就任されたときに、中曽根さんがどうしてもやりたいものがあるからなってくれと言われた、とおっしゃっていましたが、中曽根さんが特にやりたいと言われたのは、具体的には何を挙げられたんですか。

藤波 挙げなかったね。だけど、法律が全部要るということはわかっておったね。官房長官を二年ぐらいやったからね。

■「チェルネンコの死、中曽根氏がゴルバチョフ氏と会談」

伊藤 話は全然変わりますが、「一九八五年三月ソ連で」チェルネンコという書記長が死んで、ゴルバチョフが登場しますね。そのチェルネンコの葬儀に中曽根さんが行くわけですが、「ふじなみレポート」の中では、中曽根首相自身が葬儀に行くべきだと、先生が中曽根さんに示唆したと書いておられますが、これはどういう意味なんですか。

藤波 やっぱり礼儀だね。そのあとゴルバチョフだろう。うまいこと行ったんだ。ゴルバチョフがたまたま中曽根さんと会ってくれたのでよかったんだね。

伊藤 これは国会の会期中なんですね。それはほかの「党の」国対に了解をとっておかないと駄目なんですか。総理が国会の会期中に外国に行くというのは――。

藤波 行きたいと言えばよかったんだ。それを了解してくれるよう

に頼んで、了解してくれと言えばよかったんだ。NHKで国会討論会のビデオ録りがあって、それに出ているときに亡くなったと言ってきた、総理、葬式に行くべきだ、とそのときに判断して、中曽根さんに電話で話したことを覚えておるわ。

伊藤 国会討論会は、藤波先生が出席されていたんですか。

藤波 そうそう。国対委員長だろう。

伊藤 よくやっていましたか。

藤波 よくやっていました。五年間ほとんど出ていた。いまでも、「あつ官房長官がおるな」と言ってくれるのは、そのせいだ。

佐道 資料の中にビデオが残っていましたね。

藤波 そうです。

伊藤 官房長官の役割として出るんですか。

藤波 官房長官の役割として出るし、国対委員長も出るんだ。

伊藤 国対委員長のときも出たんですか。

藤波 出た。官房長官と国対委員長と、二人出るんだ。副長官のときも、「きみ行って、全部やってくれ」と言われたもので、三年間――。

佐道 後藤田「正晴」さんが官房長官だったから。

藤波 後藤田さんはほとんど出なかったのですね。三年間プラス二年間、五年間はほとんど出た。

佐道 それで中曽根内閣の顔のようになったんですね。

藤波 なったんだな。

伊藤 ほんとうにほかの党と激論をするんですか。

藤波 やるな。やるんだけれど、NHKに行って、ビデオを録る前に連れ小使でみんな小使しに行くんだ。それでだいたい便所で決まるんだ。今日は誰をやっつけるんだ、民社党がおらるので、あれをやっつけようという。

武田 トイレには一緒に行かないといけないですね(笑い)。

佐道 トイレで談合して、筋を決めるわけですね(笑い)。

伊藤 あれは辛い仕事ですか、それともけっこう楽しい仕事ですか。

藤波 辛い仕事だったな。余分なことを言うてはあかんし、辛かったな。それでも、物を言わんといかんしな、黙っとるといかなあと思って、辛い仕事だったな。

伊藤 藤波先生はあまり発言をされないで、まとめ役のような政治行動だとおっしゃるものですか、討論会ときはどうなんだろうと思っただんですね。討論会で黙っているわけにはいかんでしょ。まとめるわけではないから。

藤波 なるべくわかりやすく話すということを心がけた。それがよかったんだね。青年団の精神だ。視聴者は一人ひとり考え方が違うけれど、いまこうやって動いていますよ、ということだけ言えればいいなという気持ちだったね。

伊藤 でもほかの党から自民党は集中的に攻撃されるわけでしょう。

藤波 攻撃されるわけだ。

伊藤 反撃もしなければならぬでしょうし、下手な反撃をしないで聞き流しておくこともあるんだろうと思いますが。

藤波 そうそう。

佐道 藤波先生は官房長官と国対委員長とおっしゃいましたが、官房長官と国対委員長が、お二人で出られるということですか。

藤波 そうそう。

佐道 そうすると、藤波先生「が官房長官」のときには、藤波先生と「国対委員長」小此木さんで出られていたんですか。

藤波 それが多かったね。

伊藤 そのあとは――。

藤波 唐沢「俊二郎」。官房副長官。

佐道 先生のはまた後藤田さん「が官房長官」になられるので、

「官房副長官」唐沢さんが出られるんですね。

藤波 唐沢とか渡辺「秀央」だ。

佐道 そういふ人と、先生が出られたんですね。

藤波 そう。だからなおさらこちらが大きくなるわけだ。向こうは官房副長官だからね。私は国対委員長だから、中心になる。

佐道 小此木さんは討論会でいろいろおっしゃるようなタイプの方ではないような気がしますが、どうしても先生の比重が大きくなりますね。

藤波 そうそう。いまでも新幹線に乗っていると、一人や二人は「官房長官」と呼んでくれる人がおるわ。「もう昔の話や」と言うんやけれどね。五年間やっとなるから、だいたい覚えてくれとるわ。一定年齢以上の人だね。若い人は知らん。

伊藤 そのとき、中曽根さんはゴルバチョフに会うわけですね。

藤波 会うわけや。

伊藤 そういうセットは外務省がやるわけですか。

藤波 事務的に外務省だな、そうですね。

伊藤 官邸のほうは、特に何かするわけではない。

藤波 ない。モスクワの大使館でしょうな。

伊藤 でも首相秘書官とか、先生のところに来ている外務省の人とかはお互いに連絡をとるんでしょうね。

藤波 そうでしょうね。

伊藤 葬儀にわざわざ行って、ゴルバチョフにも会えなかったといったら、ちょっとまずいんじゃないですかね。

藤波 うん。

伊藤 あと中曽根さんは、例えばサミットにしても、何回も行っていきますよね。先生は留守番役なんだろうが、中曽根さんがサミットに行くとき、みんなカッコいいといひますね。

藤波 ワーッと「人を押しつけるような格好をする」真ん中に入っていくものでな。

伊藤 ちよっと藤波先生のパフォーマンスとは違いますね（笑い）。あれは、やろうと思ってるものじゃないでしょう。

藤波 なあ。

伊藤 やっぱり中曽根さんは「世界の日本」を代表する中曽根、という気持ちが見えていますね。

藤波 そうそう。政治の中曽根康弘とゴルフの青木「功」の二人だけだな、アメリカのテレビに出てくるのは。アラスカに行ったときに、一日じいっと見ていたんだ。そうしたら、中曽根と青木だけが出てくるんだ。見事やね。

伊藤 あの人じゃないとできないでしょうね。サミットに行ったら、サッチャーの隣に行くとか——。

佐道 いつのまにかレーガンの隣にいるとか、できないですよ。サミットは毎年の年中行事になっていたわけですが、開催前の事前準備がございませぬ。外務省を中心に。これは官房長官も入って、いろいろやるわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 でも官房長官が自分のほうから主張することはないわけですね。

藤波 ないない。

伊藤 要するに情報としていろいろなことを知っておくということですか。

藤波 そうです。でも官房長官室におると、サミットに行っている中曽根さんから電話で、「すまんけど、京都に断わりを入れてくれ」とかね。サミットを次に日本でやるときには京都でやれという人がおるわけだ。パンティ屋の——（佐道 ワコール）（平松 下着屋）ワコール。何か理由がなくてはいかんもので、警備の関係でできんとかいう。だいたい警備にかこつけていたな。すまん、という断わり番だ。

佐道 その断わり役を先生に頼むんですね。

藤波 そうそう。いちいち電話でおるかいな、と言わないもんで、ときどき言うて来るのやろうと思うけれどね。断わらなければいかん。一番いいのは、帰ってきてから「いまモスクワにいるのやけれど、来年日本に来るといふけれど、サミットのことは辛抱してくれ、警備ができないといふておるで、辛抱してくれよ」と言わなければならんな。それが留守番役の大事なことだな。

■中曽根氏の外交姿勢

伊藤 こういう国際的に活躍する中曽根さんの姿は、外務省としては嬉しいわけですか。外務省の立場からいいたら、どうなんでしょう。

藤波 外務省がヒッピーすることは間違いないね。安倍外務大臣だろう。

伊藤 安倍さんも、ついでに名声を上げることになるんじゃないですか。

藤波 なると思うな。中途半端やったな、安倍さんという人は。控え目に、控え目に、だ。わしの真似をしたんやな、あれは。

伊藤 控え目ですか。

藤波 控え目だった。竹下さんとの関係だろうな。

伊藤 竹下・安倍の関係というのも非常に面白い関係だと思いませんか。

藤波 そうだなあ。

伊藤 両方ともかなり知恵のある人だと思うんですが、お互いのつき合い方は、ライバルでもあるわけですからね。

藤波 ライバルだな。最後に竹下、安倍は二人で話したな。竹下が「あなた、安倍さん、やってくれよ」と言わへんと。だけど、竹下

は簡単におりられないと思うよ。「私が」官房長官のときか国対委員長の時か、竹下のおやじさんが亡くなって、「すまんけど葬式に行ってくれよ」というもんで行ったけれど、バスに乗って行けども行けども、竹下の家に着かへんのや。飛行場を降りてから長いんだ。

伊藤 掛合町「島根県雲南市掛合町」ですね。

藤波 出雲空港だ。飛行場を降りてバスに乗っても乗っても、着かへんのや。こんな山奥から来たのなら、簡単にはおりられんな。どうぞ、どうぞ、ということにはならんな。そう思ったな。それで竹下・安倍会談というのは、人がいろいろ言うけれど、そんなものは関係ないと思ったな。あんな山奥から来ているんだから、簡単におりるわけではないわ。DDTとPTAともう一つぐらい、英語の先生でわかっておるのは三つぐらいだったという。

伊藤 安倍さんのほうはどうですか。

藤波 カッコはよかったね。

伊藤 息子は似ていますか。

藤波 顔つきが似ているね。性格は違うわ。安倍晋三は、おやじを助けようとせないかん。助けなければいかん。

伊藤 一所懸命助けていますね。

藤波 一所懸命助けています、というのが他人に見えるようなことではないかん。

伊藤 中曽根さんは外務省との関係で言うと、外務大臣を兼ねているような感じになってしまふ危険性もあるわけですね。安倍さんにも十分に配慮しないと、まるで安倍さんを馬鹿にしたようなことになっちゃうでしょう。

藤波 なっちゃう。

伊藤 そのへんはどうですか。

藤波 最初の年にアメリカでサミットがあった。そのときに行って、

首脳会談の第二回目かな、レーガンの部屋で、レーガンと中曽根さんと、中曽根さんについている私と、レーガンについている主席秘書官と四人で話し始めた。そこに国務長官が裏から入ってきたんだ。その瞬間に安倍外務大臣を部屋に入れなければいかんのや。うっかりしていたんだ、私は。一所懸命に書いてはおったんだけど。その瞬間に入れなければならぬものを、入れなかったもので、それから日本から安倍晋太郎のところに電話が鳴りっぱなしだ。

「すぐ帰って来い、外務大臣の存在をそんなに馬鹿にする総理大臣はいかん。帰って来い」といって、福田さんとかみんな言うんだ。そんなこう言うなと思ったけれど、「私は安倍さんだけを大事にして、あんたが総理大臣をやるのを見ていくんだ」といって安倍晋太郎に忠誠を誓った。つい横の部屋に寝ておいたら、夜中にも日本から電話がかかってくるんだ。階段のところで聞くと、安倍さんが「怒るな、怒るな」と言うてるんだ。だから、すぐ帰って来いと言われているんだ。これはいかんな、と思った。

そのことを大河原「良雄」さんはいまでも言うわ、「あれは大失敗やったな」と。私が呼びに行かなかったんだな。国務長官が裏から入ってきたのでね。

伊藤 わからなかったんでしよう。

藤波 わからなかった。わからなかったんだけれど、そんなことは言うとならねのね。首脳会談に、向こうの国務長官が来たら、外務大臣も入らなければならぬ。

伊藤 それは初めから打ち合わせがなくて、やっているんですか。

藤波 そうそう。打ち合わせでは、誰も入らずに四人でやるということだ。四人というか、二人でやるということだね。

伊藤 それに二人くっついていてるわけですね。それはまずかったですね。でもそういうときに安倍さん自体は怒り狂うというようなことはないんですね。

藤波 ない。冷静だった。「わかった」という。安倍さんも一緒に
なって怒っておいたら、本当に大変だ。「竹下・安倍で」助さん、
格さんだけど、片方は亡くなるわけだね。あれは安倍さんの人柄だな。
伊藤 中曽根さんはどうしても表へ、表へと出るから、ちょっと安
倍さんは引き立て役みたいな格好になる場合もあるわけですね。

藤波 あるある。大いにあるな。

伊藤 でもそれは中曽根さんを助けていくことだ、と安倍さんとし
ては割り切っていたわけですかね。

藤波 割り切っていたんだな。

伊藤 もちろん中曽根さんも、安倍さんの意見は十分に聞いていた
んでしょね。どうですか。

藤波 意見のすり合わせはやると思うけれど、違う意見のときもあっ
たな。

伊藤 安倍さんに気を遣っているという感じはありましたか。

藤波 ない。ないよ。

伊藤 中曽根さんは、やっぱりそういう感じかな。

藤波 意外と気を遣っていたのかなあ。

伊藤 藤波さんが気がつかないくらいだから。

佐道 遣っていないけれども、遣っているように見えるものですね。
ね。

伊藤 遣っているように見せないとまずいですよね。

■官房長官と外交

佐道 安倍さんも外務大臣としてよく海外に行かれましたが、その
ときには外務大臣が不在になるので、外務大臣臨時代理が置かれま
すが、官房長官がなれることが多いと思うんですが。

藤波 外務省と防衛庁の二つだけは官房長官がやれというのは、中
曽根内閣からだ。中曽根内閣からそうなった。「外務、防衛は、行っ
て官房長官がやれ」と言われた。二年間でずいぶんあったね。

伊藤 外務大臣不在中、防衛庁長官不在中に、何か大事なことがあ
りましたか。

藤波 いや、役所は役所で判断してやってくれるね。だけれども、
そういう関係になったのは、臨時代理を誰がやったかということに
もよる。私の選挙のときに、伊勢新聞というのがあったけれど、
伊勢新聞の社長と話したら、「藤波さんの選挙は国内では頼まれへ
んけれど、外地で大使館と呼ばれて飯を食うと、だいたい外務省の
人間が大使をやっている。その人から、藤波さんの選挙は大丈夫か
と聞いて頼まれる」とよう言った。「ありがたい、ありがたい」と
言った。面白い関係やな、と聞いた。

佐道 臨時代理をなさっているあいだに、官房長官としても外務省
の方にかなりお会いになるんでしょうけれど、外務省の方とはその
あいだにずいぶんお知り合いになりましたか。

藤波 知り合いになったな。

伊藤 先生ご自身と外務省の役人との関係はどうですか。

藤波 大蔵省よりはいいと思った。

佐道 どういう点でしょうか。

藤波 大蔵省というのは内政の責任者だからな。責任を持ってやる
うと思うと、相手が官邸であろうと官房長官であろうと、やり負か
せることがある。外務省には、そういうところがないな。

伊藤 なければ困るんじゃないですか。

藤波 それはそう思うけれど、ようわかってくれたんじゃないかな。

伊藤 大蔵は自分が日本国家を支える柱だという意識ですかね。

藤波 そういう意識だ。

伊藤 外務省にもそれぐらいの気概を持ってもらいたいな(笑)。

佐道 官房長官として一番よく接触がある外務省の人は外務次官になるわけですか。

伊藤 週いっぺん来るからね。

佐道 松永「信雄」さん、そのあとは柳谷「謙介」さんですね。

藤波 中曽根内閣のときは柳谷だな。

伊藤 だいたいブリーフィングが週一回あるんですね。

藤波 柳谷は、事実上の仲人。

伊藤 そのブリーフィングを聞いているわけですから、国際情勢については、かなりの知識を得るということになりますね。ほか「の省庁から」はブリーフィングはないんですか。

藤波 ないない。

伊藤 外務省だけですか。大蔵省はないわけですか。

藤波 大蔵はない。

伊藤 警察はどうですか。

藤波 警察はあったな。

伊藤 警察は定期的に報告がありますか。

藤波 ある、適宜報告がある。

伊藤 それは警察一般ですか、それとも公安ですか。

藤波 警察一般やろうな。公安中心の警察一般だな。

伊藤 防衛はないでしょうけれどね。

藤波 防衛も、何回か臨時代理をやれと言われて、いっぺん六本木に來いといっぺん、ラッパを吹かせるという。ああおれはラッパは嫌いやといっぺんも行かなかった。「その代わり選挙区に明野航空学校というのがあるので、そこへ行くで」と言ったら、陸幕長をやっていた中村守雄というのが鹿児島から明野に飛んできた。

きをつけ、とみんなを並ばせて、ダットとやった。六本木にはいっぺんも行ったことがない。

伊藤 それは惜しいことをした。

佐道 臨時代理として外務省の建物には行かれましたか。

藤波 減多に行かなかったな。なんのときだったか、いっぺんだけ行ったことがある。飛び込んで行ったことがある。そんなに意図的に、来いといわれて行ったのではなかったな。

佐道 外務大臣と防衛庁長官の臨時代理は官房長官がやるというように中曽根内閣のときに決められたということですが、総理大臣の臨時代理はどうなるんでしょう。

藤波 それはその時やな。

佐道 その時、その時で決めるということですか。

藤波 そう。

伊藤 長老とか、そういうことではないんですか。

藤波 ないない。大臣のうちだ。

佐道 中曽根さんがサミットに行かれるときの臨時代理は、その時、その時で違っていたわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 官房長官がなるということはあるんですか。

藤波 ないと思うな。なかったやろう。

■貿易摩擦対策、対外経済推進本部の設置

伊藤 あと五分ぐらいしかないんですが、アメリカとの貿易赤字の問題が中曽根内閣のときにかなり深刻な問題になったんですね。僕が記憶しているのは、中曽根さんがどこかに行って外国の物を買ったということがありましたね。そうしたらアメリカ製品を買わないで、フランスか何かの物を買ったというエピソードを覚えていますが、あれはかなり深刻な問題だったと思います。官房長官としてはいかがでしたか。

藤波 深刻な顔をしておらなければならんな。

伊藤 日本は貿易黒字ですから、どんだんお金貯まってくっていくのはいいことなんですが、アメリカにとっては大変ですね。アメリカからいろいろ文句も言ってくるし。

藤波 言ってくるしなあ。

伊藤 門戸を開放しろと言ってくる。それで一九八五（昭和六十）年、レーガン大統領が中曽根さんに親書を送ったということがあるようですが、ごらんになったことはありませんか。

藤波 ない。親書は何のときに送ったんだ。

武田 これは『中曽根内閣史』の年表に書いてあるんですね。たぶん、これをきっかけにして対外経済推進本部というのができるんですね。

伊藤 この対外経済推進本部というのは、中曽根さんを座長にしてできるわけですが、これは先生は関係なさるんですね。

藤波 出たな。

武田 これはアクションプログラムを出されるとき、先生が座長をなされるんですね。

藤波 座長だ。

伊藤 主なことは関税の引き下げですか。

藤波 関税引き下げやろうな、中心に動くのは。

伊藤 この対外経済推進本部というのは内閣につくったんですか。

藤波 自民党と一緒にやると。

川越 政府と与党で、となっていますね。

藤波 そうだ、一緒にやったんだね。

伊藤 どういう機関なんだろうな。法律的な根拠を持った機関じゃないんでしょう。

藤波 ないね。

武田 「ふじなみレポート」を読むと、アクションプログラムを出

すのは大変だ、とにかく何か対応しなければいけない、と書かれているんですね。重要な決定なんだろうが、制度的にどういう決定になるのかと思ひまして。

伊藤 アクションプログラムの内容は――。

武田 「一八六〇品目の関税引き下げを決定する」と『中曽根内閣史』の年表には書いてあります。それで正式に決定と書かれているんですが、どういう意味なのか。

伊藤 関税引き下げは輸入しやすくなるからでしょう。

武田 ここで決めたことをやろうという意味なんですかね。

藤波 やろうということだ。

伊藤 ちょうど国産愛用運動の逆をやるわけですね。外国のものを買いましょう、ということですね。中曽根さんがパフォーマンスをやられたのは、その一環なんでしょう。

佐道 この時期ですね。表を使ってテレビでやりましたね。

伊藤 そうだ、パネルを使ってやったんだ。

佐道 アクションプログラムも国内調整上かなり難しい問題があったと思いますが、もう一つ、八五年九月にブラザ合意がありました。

ドル高を是正しようということで、円高が急激に進んで、国内の小企業がどんどんつぶれて円高不況が始まるのではないかという批判が相当出た時期だったと思います。官房長官は記者会見などで、内閣の顔としていろいろ説明しなければならなかったと思いますが、これはかなり重要な問題だったのではないかと思うんですが。

藤波 そうですね。

伊藤 官房長官の記者会見でいちいちこの問題を説明しなければならぬんじゃないですか。おそらく毎日毎日それをやって、参事官なんか準備してくれて、お勉強して、あたかも全部自分が知っているような顔をして言っているわけですから、あまり覚えておられないんじゃないかと思うんですが。

藤波 市場開放を一夏かけてやったことがある。それはアクションプログラムだ。

伊藤 市場開放はそれですよ。

武田 七月に中曽根首相がヨーロッパに行くので、その前にまとめなければいけなかったということですね。

藤波 各省庁に、事務次官以下みな来いといって、官邸に呼んだら、一番最初に来たのが厚生省だ。厚生省の事務次官以下、局長連中が来て、私はその話をしたら、「官房長官、奥さんが真っ黒けになってもいいのか」と言った。

武田 化粧品ですか。前に聞いた記憶が――。

藤波 そうそう、その時の話だ。

伊藤 それぞれ各省で管轄していることで、例えば通産とかで、この関税を下げられたら大変だということで、相当抵抗があったと思うんですが。

藤波 あった、あった。ひどかった。震度四の騒ぎだ。

佐道 官僚の総抵抗があったわけですね。

藤波 そうそう。総抵抗だ。官僚とは強いなと思った。

伊藤 そうですか。しかし言ってみれば、官僚のトップは官房長官じゃないですか（笑い）。

藤波 次官だ。

佐道 このプラザ合意のときに竹下大蔵大臣が、プラザ合意に行くことを秘密にするためにゴルフ場から変装して行ったという話ですが、そういうことは打ち合わせをされているわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 それは官房長官はわかっているんでしょう。

藤波 わかっている。一人だけわかっている方がいい。ゴルフ場から、ゴルフの格好をして、飛行機に乗っていくんだ。

伊藤 どこかで着替えるんですね。

藤波 そうそう。

伊藤 もう時間ですので、このへんで切ります。まだ靖国問題もあり、変な話ですが、三光汽船が倒産して三木派がどうなるかという問題もあり、いろいろな問題がありますので、次回、官房長官から国対委員長の時をぼちぼちと伺っていこうと思います。

来月はたぶん選挙になると思うんですが、先生は今度立候補されないわけですが、実際に選挙になった場合、どうなさることになりますか。

藤波 出ないつもりです。だからここにおると思うな。

伊藤 応援もされないんですか。

藤波 応援もしないつもりです。

伊藤 先生が推していた人が駄目になったんですか。

藤波 そうそう。自民党は別の判断をした。もともと私の系統なんです、国交省の「三ツ矢憲生は」。私の事務所ですら来た山本「教和」というのが面白んだけど、違う判断をした。藤波「が推薦した山本」と田村「元氏が推薦した中川正美氏」と両方を殺して、それで新しいのを出した。

伊藤 喧嘩両成敗みたいなことですか。

平松 県連というか、国会議員裁量でしょうね。

伊藤 わかりました。それじゃあ来月やらせていただいてもよろしいですか。

藤波 はい、その方がいいです。

伊藤 それでは次回よろしくお願ひします。

一同 どうもありがとうございます。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第12回

日時：2003年10月16日

14:00～16:20

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道明広（元政策研究大学院大学助教授）

武田知己（政策研究大学院大学特別研究員）

川越美穂（東京大学大学院博士課程）

平松大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■議員バッジについて

〔録音開始直前〕

伊藤 議員生活も終わりですね。

藤波 ああ、せいせいした。

伊藤 「せいせいした」というのを録音しておきたかったな。もう、バッジも外されたんですね。即、そうするものですか。

藤波 そうです。

〔録音開始〕

伊藤 あのバッジは何なんですか、買う物なんですか。当選したときにもらうんですか。

藤波 もらう。失ったりすると、買うんだな。〔平松氏に〕バッジはいくらや？

平松 本物ですか？

伊藤 本物って、偽物があるんですか。

平松 お土産みたいな物があると聞いたんですが。まったく同じ物ではないんです。本物はうるさいんです。予備はいくらかで、たしかあったと聞いたんですけれどね。

伊藤 なくした場合には申請を出して――。

平松 なくした場合には、誰が買ったというのが登録してあるので、それを持っていったということをやちゃんと控えるそうです。

伊藤 じゃあ、結構大事な物ですね。印籠じゃないけれど（笑い）。

武田 本物と偽物、お土産用というのがあるんですね。

平松 お土産用の物があると、ちょっと小耳に挟んだことがあるんですが。

佐道 でも背広にずっと付けていて、つい違う背広を着て付け忘れ

るということはないんですか。

平松 むかし誰かが、それで門に入れてもらえなかったことがありますね。

伊藤 門を通るときのあれ「証明」になるわけですね。

平松 衛手がちゃんと顔を見て、顔と共にこれ「バッジを指す」がないと入れないそうなんです。

伊藤 顔を見ればわかるじゃない。

平松 それでも入れなかったそうです。近くにおった者が外して、どうぞ、といって付けさせたという話を聞いたことがあるんですが。持っていたのは森喜朗でしょう。

佐道 われわれの仲間でも、大きな荷物でも忘れるようなやつがいまから、こういうバッジとかはね（笑い）。

伊藤 秘書の人は、あそこに入るのに何かあるんですか。

平松 通行証があります。これなんですけれど「写真入りの通行証を示す」。バッジも付けておけというんです。

伊藤 それもバッジがあるんですか。

平松 これなんです。「秘書用のバッジを示す」。バッジをここ〔胸〕に付けて、これ「通行証」をぶら下げておけ、というんです。

武田 そのバッジは先生が持ってらっしゃると違う物ですね。

平松 全然違います。議員バッジではなくて、秘書のバッジです。

伊藤 じゃあ、いま「藤波さんが」議員じゃなくなったら、秘書の方も入れないわけですか。

平松 いや、とりあえず片付け等がありますので。

伊藤 片づけというのは、どこの片づけですか。

平松 部屋の。「議員会館も議会も」同じなんです。別に中に入ることは可能なんです。

伊藤 でも議会の中に何か物を置いてありますか。

平松 それはいいです。人によって、役職に絡んでいる場合はあり

ますね。

伊藤 ああ、部屋があるからですね。じゃあ、例えばいま現在国対委員長だったら、国対委員長の部屋に何か物があるかもしれない。

平松 そうですね。わからないですけど。そういう時期にいなかったの。

伊藤 じゃあ、院内には、藤波先生がお使いになる机、椅子はなかったわけですね。

藤波 院内にはなかったよ。

伊藤 会館の中だけですね。党の役員でもやっていけば、何かあったんでしょけれどね。

藤波 個人の物じゃない、党の物だ。

伊藤 無所属の場合は――。

平松 無所属の会、無所属の控え室があるんです。

伊藤 無所属の会ではないでしょう、無所属なんでしょう。

平松 無所属の控え室というのもあるんです。無所属の議員から会費を取って――。

伊藤 事務をやる人がいるわけですか。

平松 ええ、事務をやっています。役所の方ですけど。

伊藤 そうですか。いや、余計なことを一所懸命聞いてしまいました。

■教育、三公社改革

伊藤 今日には官房長官の時代の続きですが、できれば今日は官房長官の時代を終わって、国対委員長の時代まで入りたいと思います。なかなかそうは行かないかもしれませんが、あまり気になさらないで、お答えになれることを答えていただきたいと思います。

一九八五（昭和六十）年、六月から七月にかけて、いろいろな答申が出てきますが、「ふじなみレポート」を見ていますと、先生は「中曽根政治の正念場」だと書いておられるんですね。「ふじなみレポート」第九十八号「千日行」昭和六十年五月。六月にまず臨教審の教育改革第一次答申が出されます。これはなんでしたっけ。

武田 教育改革に関する第一次答申です。臨教審の会長が岡本道雄さんです。

伊藤 教育改革の基本方向ですね。

川越 第一部から第三部までありまして、第一部が教育改革の基本方法、第二部が本審議会の主要課題、第三部が当面の具体的改革提言というように三部構成になっています。

伊藤 当面の具体的改革提言が大事だな。一般的は改革方法といっても関係ない。

武田 学歴社会の弊害の是正ということですね。

伊藤 入学選抜問題ですね。大学入学資格の自由化等ですね。

藤波 中曽根さんは首相官邸に臨教審を持ってきたときに、人間生活のすべての中に教育の果たす役割を据えようというつもりでやっ

たんですが、とにかく委員の人選とか、文部省の斎藤諱が事務局長になったこととかで、文部省のレベルになってしまったんだな。

「大失敗した」と言うたな。

伊藤 大失敗ではありませんが、いくつかのことは実現したわけですね。

藤波 実現したけれど、レベルの低い小さな問題に終始した。

伊藤 こういう第一次答申が出た段階で、どうもあまり先行きよくないな、というお感じでしたか。

藤波 もう、委員のメンバーを決めたときにそうなんだ。

伊藤 すでにそのときですか。

藤波 総理官邸のほうではね。

伊藤 それもあとで伺うとして、七月に行革審の答申が出ます。これと国鉄の分割民営化とはまた別なのかな。

川越 行革審の答申のほかに、国鉄の再建監理委員会の答申が出ています。

伊藤 国鉄の分割民営化については、先生は何かご関係なさっていますか。

藤波 総裁のクビを切るときだ。いまやっとなるね「おりしも国土交通省が道路公団総裁の解任のために聴聞などを行っていた」。

伊藤 いまやっていますね(笑)。

藤波 あれは早くやるべきだ。

伊藤 でもあれは直接の責任なんですか。

藤波 いや、総理が言い出したんだ、「総裁のクビを取らなければいかん、それでなければ改革は進まん」と。それはいまと同じで、例えば国鉄の遊休地が何坪あるとか、いま人員は何名あるとか、赤字がいくらになっておるとか、そういう資料をみんな持って来いといっても全然持ってこないんですから、それじゃあ話にならない。いまの藤井「治芳・道路公団総裁」さんと同じだな。それで、「辞めてもらわなければしょうがないな」と中曽根さんが言う。当時の総裁はなんといったか——、西武鉄道から来た仁杉「厳」だ。それは考えてみたら、西武の堤から推薦されて総裁にしたという経緯があったので、「それは堤の了解だけとれよ」という。

首相官邸ですから、総理の執務室から電話して、堤義明を捜してくれといったら、すぐに出た。それで「いま総理に替わります」といって、電話を取り次いだ。総理は、「すまんけれど、かくかくしかじかで、あなたの推薦を受けて仁杉さんを預かったけれど、ずいぶん立派に国鉄総裁をやってもらったけれど、いま国鉄を改革せよというの、日本だけではなくて世界の空気になっているんだ。それが資料を持ってこないというのは一番大きな問題なので、総裁を

辞めてもらわなきゃしょうがないと思う、了解してくれ」「わかりました」ということで、仁杉さんの話はいったんです。

伊藤 話がついたといっても、いま問題になっているのは、「道路公団総裁は」国土交通大臣が任免権者だということですが、あのときの国鉄「総裁」はどうなんですか。やはり任免権者は——。

藤波 行政改革ということで、総理大臣のところにあつたんだろう。臨教審もそう。運輸省の中のことではなくて。

伊藤 それじゃあ、堤さんの了解さえとれば、あとは簡単にクビが切れたんですかね。いまは、もめて、もめて大変じゃないですか。

藤波 いまは大変だな。その頃、運輸大臣は三塚「博」さんですか。

それで、辞めてもらうということになった。そうしたら、「副総裁と技師長のクビももらうんだ」と総理大臣が言うもので、しかたないなということ、また副総裁と技師長も一緒に頼むわ」といって私が電話をかけたのを覚えておるわ。総理が言うので、しょうがないわ。それでそのときに、国鉄の分割民営化が決まったんだ。そう思うな。

伊藤 その国鉄の民営化は、前の年「昭和五十九年」に国鉄再建監理委員会が緊急提言という形で、国鉄の公社制度を廃止し、分割民営化を初めて明示するということがありまして、昭和六十年七月に国鉄再建監理委員会が最終答申をして、それが最終決定になるわけですね。ですからそのあいだに、総裁のクビということがあったんですね。法案が出たのはその翌年「昭和六十一年」ですね。法案の時は先生は——。

藤波 もう国対委員長だね。

伊藤 これは国会ではどうだったんですか。

藤波 国会はきつかったな、やっぱり。橋本龍太郎が自民党の行政改革の委員長か。何回も官房長官室に来て座っていた。それだけ難しかったんやろう。三塚のあとの運輸大臣は誰だった？

佐道 三塚さんの後は橋本さんです。

藤波 完全に行政改革が目当てになっているな。

伊藤 国鉄民営化の法案を通すことに対しては、社会党の抵抗があるわけですか。党内にはあまり「反対は」ないんでしょう。

藤波 自民党は大丈夫だったと思うな。

伊藤 やっぱり社会党が、国鉄労組との関係で強く反対していたということですかね。「川越氏に」行革審の答申はありますか。

川越 行革審の答申の中にも国鉄の話があります。

伊藤 三公社の話も出てくるでしょう。国鉄、専売、電電。

川越 入っていました。

伊藤 これは一緒かな。

川越 「総合調整機能の充実方策」という部分がありまして、その中に「三公社のことが」書かれております。

伊藤 国対委員長として、法案通過に非常に苦労したというご記憶はございますか。

藤波 それはいいな。それはいいけれど、一般的に簡単に決まらなかったという感じはあるな。

伊藤 それじゃあ、委員長じゃなくて副委員長あたりが一所懸命頑張ったんですかね。

藤波 そうです。副委員長の担当は誰だったかな。

伊藤 そういう担当があるわけですね。政党と役所と、両方の担当があるわけですね。この前は社会党担当という話が出て来ましたね。

藤波 ねえ、糸山「英太郎」だ。

伊藤 この国鉄の分割民営化は、それによって直接に利益を受けるものがないわけですね。だから圧力団体はない。抵抗する側の勢力はある。それは国鉄労組を初めとして、ということですね。

藤波 「何が決まってもいいけれど、最終的にわれわれが阻止するから心配するな」と社会党は言うていた。「法律は国会を通らん」

と言いつけておったね。

伊藤 それを通すのは、「国対」委員長としては大変だったんじゃないですか。

藤波 と思うな。

伊藤 もう終わったので、お忘れになっているということはないですか。

藤波 そうですか、「運輸相は」三塚さんの後が橋本か。

伊藤 そういう布陣ですね。そうか、国対委員長としてあまり記憶がないのかな。

藤波 一般的に、黒い雲が上を覆っているような感じがしたな。

伊藤 でもいつか通るといふ確信は持っておられたんでしょう。

藤波 持っておったけれど、なかなかきつかったんだ。富塚「三夫」さんには私は非常に心安かったからな。労働大臣をやったからな。

伊藤 心安かったといっても、こういう問題については駄目でしょう。

藤波 そうそう。だからきつかったね。そういう意味できつかったんだ。いまでもまだ尾を引いておるよ、何人クビを切ったとかでね。会社そのものは成績を上げておるけれどね。

伊藤 まだこのときは分割民営化で相当リストラをするわけですが、リストラされた連中をほかのところで吸収できる余裕が日本経済にあったじゃないですか。

藤波 みんな役場に行くとか、県庁で働くとか、あったあった。

伊藤 でも国鉄のやつはあまり働かないから採りたくない、という声があったでしょう。

藤波 そうそう。一般論と個別が交錯していたからな。

伊藤 じゃあその問題は、また思い出したら話してください。

■「長寿社会」対策

伊藤 同じ月に、「長寿社会対策関係閣僚会議」というのが設置されて、藤波先生が主宰されることになりましたが、長寿社会対策というのは具体的にどんなことを考えておられたんですか。何故このとき問題になったんですか。長寿社会になってきていることはたしかだと思えますが。

藤波 名前だ。「長寿社会」という名前を、中曽根康弘と藤波孝生が決めたんだ。それまでは「高齢者対策」と呼んでいたんだ。

伊藤 いまでもそう呼んでいますね。

藤波 高齢者とか、そんな名前ばかりだった。だからそれは高齢者じゃない、長生きしたことでめでたくなければいかん、ということだ。

伊藤 ああ、そうですか。これはこれからも使わなければいけないな。

藤波 「長寿はいいですよ」と言ったら、「長寿はいいなあ」といって、長寿社会になった。いろいろな話をしてるとき、茶飲み話で決まった。そういうこともありますね。それが、官房長官が責任者になった理由でしょう。そうでなければ厚生省がやるものね。

伊藤 だけど、結局厚生省の役人が中心になるんでしょう。

藤波 そうなっていますか。

伊藤 いえ、これは閣僚会議ですね。でも結局データを出してくるとか、そういうことは厚生省になりますね。

藤波 なりますね。

伊藤 対策を具体的に考えるのも、やっぱり厚生省になりませんか。藤波 なりますね。基本的にはそうなるな。

伊藤 どうするつもりだったんですか。いま高齢者といっていますね。高齢者問題というのはいろいろありますね。

藤波 保険問題とか、いろいろあるな。

伊藤 保険もあるし、年金もあるし、医療もあるし、大変ですね。

藤波 ねえ、大変ですね。

伊藤 このとき解決してくださらなかったから（笑い）。

藤波 その走りですな。もうちょっとやればよかったな。

伊藤 何か具体的にこれをやろうということをお考えになったことはありますか。

藤波 いやいや、それはないと思うな。そのときの厚生大臣は誰だ。

佐道 八五年七月だと増岡「博之」さんですね。

藤波 靖国神社の国家護持は増岡だ。

伊藤 「関係閣僚は」厚生省と労働省と文部省ですね。これは生涯教育の問題とかでしょうね。

藤波 そうそう。

伊藤 労働省としては、今日の問題がありますね。定年制度をどうするかとか。

佐道 文部大臣が松永光さん、労働大臣は山口敏夫さんですね。

伊藤 この関係閣僚会議というのは、何か結論を出すわけではないんですか。

藤波 案を決めてきて、それを了承したりするんだな。

伊藤 あまり大した権限があるわけではないんですね。

藤波 そうです。

伊藤 政府としてこういうことをやっていますよという看板みたいな印象を僕は持っているんですけど。

藤波 座長がだいたい指名する。文部省なんかはそうだと思うな。

私がやっておるとしたら、文部省を入れるだろうな。労働省も入れるだろうな。そういうふうには、座長の見解というか見識で、閣僚会

議のメンバーを決めることができる。

■靖国神社公式参拝への道程

伊藤 そういうことがございましたが、この時期一番中心の問題は、靖国参拝問題です。前にもちょっとお話が出ましたように、先生が私的諮問委員会をつくって、座長になって、結論を出されて、それにしたがって中曽根さんが靖国神社参拝をされることになったわけです。この間のプロセスで記憶のことはございますか。

藤波 いろいろ思い切って発言したな。あの会議では激しい議論が出た。梅原「猛」さんは委員だったけれど、反対だ、ということになっているな。最近、反対と言いつつ切っているな。

伊藤 当時もそうだったんですか。

藤波 そうだったな。

伊藤 その反対論の理由は何ですか。

藤波 法律論じゃないかな。法律論は、弁護士をやっていた人が発言していたな。

伊藤 それは賛成なんですか。

藤波 法律的に、賛成とも反対とも言わずに議論している。末次一郎とか、評論家の江藤淳さんも入っているな。

伊藤 それは名前を聞いただけで、間違いなく賛成だとわかりますね。

藤波 そうそう。

伊藤 先生はもちろん参拝の方向でまとめていこうと。

藤波 ほとんど聞いとるだけやったな。中曽根さんもそうだ。自分で発言しない。

伊藤 じゃあ、誰がまとめるんですか。

藤波 日赤の会長（佐道 林敬三さん）、林敬三。あのへんがまとめるということになっておったけれど、なんとかなるわと思っていた。委員会ができた経緯はわかっておりますね。中曽根さんも私も樂觀して聞いておったというのが本当のことやろうな。宗教団体はみんな反対だったな。新宗連「財団法人新日本宗教団体連合会」とか——、仏教団体はみな反対だ。神道の復活になるというのが主な理由だったな。

伊藤 神道系はどうなんですか。

藤波 神道系は反対なし。

伊藤 それはそうでしょうね。仏教系とキリスト教系は反対ですね。

藤波 キリスト教系は、「共産党かキリスト教か」と言うぐらい反対した。共産党なんかは、思想的には激しかったんだろうな。

伊藤 でも結論としては、参拝然るべしということですね。そのときに条件があるわけですね。公式参拝としてはこうでなければならぬ。たしか社殿の中で礼拝の儀式をやるのはいかなのでしょうか。

藤波 そうそう。神道の儀式で、二拝二拍手一拝はいかん、一礼して帰って来い、というのが答申にも書いてあるやろ。

武田 はい。それが八月九日に出るんですね。

伊藤 それにしたがって、中曽根さんはその通りにおやりになったわけですね。

藤波 そうです。前日に私が靖国神社に行った。八月十四日だ。なんとかいう福井の殿様、松平「永芳」が宮司で、その話をしたときに、えらい顔をした。ええ顔をして、「いい政府から来ておる藤波さんがそんなことを言いに来るんですか」というような顔をしておった。「そうだ、そうさせてもらう」と言って、帰ってきた。

次の日は、万歳、万歳で迎えてくれた。遺族の代表がみんな、全国から集まってきた、戦友が戦死しておるとか。八月十五日の国の戦没者慰霊祭のあとだったな、行ったのは。万歳、万歳で迎えてく

れた。

伊藤 靖国神社の境内にみんな集まっていたわけですか。

藤波 そうそう、集まっていたわけだ。

伊藤 総理と一緒に官房長官も――。

藤波 厚生大臣・増岡も一緒にお供して行ったな。ほかの大臣はどうだったか、行ったかどうか知らないけれど、私は総理のお供をして、増岡さんが隣におつて、一緒に行ったということは覚えてる。写真があるやろ。

武田 この中に入っていたと思いますね。『政治と鎮魂』（橋本茂著 心泉社 二〇〇一年）から写真を探して「これでしょうか。真ん中が藤波先生ですね。」

藤波 「写真を見て」増岡さんがおらん。隠れておるな。

平松 「写真を見て」議員バッジがついていますね。

伊藤 「写真を見て」何もキャプションがついていないね。これは当時の新聞でもかなり大きく取り上げられたと思うんですが、一般の評判はどうだったんですか。

藤波 評判はよかったんじゃないか。中曽根さんが言うておったようにした「主張を実行した」、ということでは、よかったんだらうな。

私は殺されるつもりで、朝出かけた。官房長官公邸から出て、家内を送り出して、周りの池に鯉がおつて、池の鯉を見ながら「家内に」言った。「おれが殺されたら、早く伊勢に行け。いまは昔と違って黒い長い車があるから、それに乗って早く帰れ。東京でうろうろしていると東京の人に迷惑をかける。だから早く伊勢に帰れよ、それで葬式をせいよ。おやじとおふくろよりも大きな葬式をするな。花はもうな。一切花はもらわないで葬式をせい。午前中、慰霊祭は警備してくれるので、それより前に殺されたら、左の連中に殺されたと思え。参拝したあと、参拝の仕方が悪いといって右翼が反対

するかもしれん。参拝のあとは右翼に殺される。いずれにしても、まともに生きて帰ってくると思うなよ」と言っただけのことを覚えてるな。池の鯉が泳いでおつた。その八月十五日は暑い日だった。家内は「わかりました」と言ったな。

伊藤 年表を見ますと、「お祓い、玉串捧呈、拍手は行なわず一礼。お花の実費は公費とする」という公式参拝の新見解を前の日に官房長官が公表して、次の日、中曽根さんがそのような形でやる。この年表では、「野党、市民団体一斉に抗議」と書いてあります。

藤波 抗議と言うけれど、まあ抗議をしたということにしておこうという感じだった。十六日だと思っただけで、中国から言ってきた。孫平化が中国大使館から電話をかけてきて、会いたいと言ってきた。官房長官で結構なので、会ってくれと言う。それで遅駆けに来てくれと言った。夜の十二時だったと思うな。夜の十二時になると、新聞記者も来ないし、周りのものも寝るので、わしはそうっと行くぜ、といって、「福田家」の女将に、「福田家で話をさせてくれ」といった。

平松 どちらの「福田家は赤坂と紀尾井町にある」。

藤波 四谷。

平松 紀尾井町ですね。

藤波 福田家で、「昔は中山伊知郎さんとかみんな来て、うちで寝ていましたよ」と女将が言っておつた。中山伊知郎「経済学者 一八九八〜一九八〇」というのは宇治山田中学で、私の先輩だということを知っているの、中山伊知郎の名前を出したんだと思う。

「来て、飲んで騒いでいました。それで寝ていました」という。「ああ、そうですか」と言った。寝てから来るわと言って、夜の十二時頃に車で行った。

孫平化が来た。それで話をした。「藤波さん、ひどいじゃないか」と言うので、「わしのところの死んでる者は、靖国神社で会おうと

言って死んだんだ。中国も認めてくれ」と言った。「ちょうどその頃に、日本兵に殺された中国人もようけおるんだ、この問題はいかんぞ」と言うので、「いかんでもまあしょうがないじゃないか。これだけ国民のみなさんが、中曽根総理やったら公式参拝をするだろうと言って期待が集まっているんだ。そうさせてもらったので、そう思ってくれ」と言って、押し切った。二時間ぐらい話をしたのか、ほかの話もして、それで別れたな。そのときは、中国はそんなにうるさいことはないな、と思った。そんな尾を引く話ではないと思っ

た。

伊藤 その予測は外れたわけですね。
藤波 いや、外れていないと私は思うな。私が次の年も官房長官だったら中曽根さんは行っておったと思うけれど、国会対策委員長になってしまった。後藤田さんが「やめろ、やめろ」と言ったんだな。「やめろ、やめろ」と言ったんだと思うよ。次の年、昭和六十一年八月十五日に、もう一回中曽根康弘が参っていたら、それで制度になっただけだ。八月十五日に参るものだという制度になった。一回だけだったので、次の年に行かなかったたので、周りの国々が反対したら行けないということになったんだ。絶対に行くべきや、と言ったんやけれどな。国対委員長室でそんなことを言ったのを覚えておるわ。

伊藤 さっきの孫平化と会ったというのは、十六日ですか。

藤波 十五日じゃないと思ったね。直後、ということにしておいたらしい。

伊藤 これはしかし、官房長官の時代ではかなり大きな出来事ですね。

藤波 そう思うね。中曽根さんは「戦後政治の総決算」という看板を掲げたけれど、その一つは靖国神社を公式参拝するということだったのではないかと思えます。

伊藤 小泉さんもそう言いましたけれどね。

藤波 あれは言うだけだ。

伊藤 とにかく中曽根さんは一回はやった。そうだ、官房長官が替わっているんだ。後藤田さんだったら、中国派というか、そっちのほうだからね。

藤波 次の年もやればよかったんだな、あのとき。惜しいことをした。

武田 先生はその次の年に、後藤田さんに、行くべきだというお話はされたんですか。

藤波 最後の二年間、渡辺秀央が「官房」副長官だ。渡辺秀央に、後藤田さんにこう言えよ、と言ったのを覚えておる。

伊藤 言ったって、後藤田さんは確信犯だから。それと、中曽根さんのお話では、中国の国内情勢の問題もあったという言い方もされていきました。

藤波 まあ、いろいろなことを言っているんだ。

■三木派との関係

伊藤 またその問題については触れることもあるかもしれませんが。

ちょうど同じ時期に三光汽船が倒産します。これは官房長官に直接関係があることではありませんが、自民党の三木派のスポンサーでしょう。

藤波 河本「敏夫」さんだね。

伊藤 それがぶつつぶれて、一体どうなるかということになりますね。中曽根内閣と三木派というのはどういう感じですか。

藤波 悪い感じじゃないと思う。三木武夫さんが総理大臣の時に、中曽根幹事長だったんだ。だからそんなに悪い関係ではない。中曽

根さんは、河本さんという人をあまり知らないと思う。あまり触れ合いがなかったな。

伊藤 藤波先生はどうですか。

藤波 私は河本さんに二年間仕えたからな。労働大臣になる前、政調会で。政調会長と副会長だ。「三光汽船が」つぶれたんだな。一般論としては、景気が悪いという話を聞かんのので、経営がまずかったな、というふうに思ったけれどね。率直にそう思ったことは覚えてるな。

伊藤 やはり経営上の問題なんですかね。

藤波 そう思うな。

伊藤 かなり政治資金に注ぎ込んだんじゃないか。

藤波 いや、そんなことはない。そんなに注ぎ込むほど、ようけ出しとらんと思うよ。

佐道 「藤波先生は」いろいろと各派にも目配りをしていたと思うんですけど。三木派自体はどうなると思われましたか。

藤波 そんなに三光汽船が三木派を支えているとは思わなかったね。支えている一つだな、ぐらいい思っていた。

伊藤 河本さんが完全なオーナーというわけではない、ということですか。

藤波 ないない。三木さんがおったでな。

伊藤 そういうことですか。それならなんとなくわかるような気がします。

藤波 派閥というのは、三光汽船がつぶれたというのも、田中さんが判決を受けて世の中につつけられているのと同じことのような気がしたな。派閥というのは、みんななかなか苦労だな、と思った。それだけのことで、そんなに突っ込んでどうということはないな。

伊藤 じゃあ藤波派ができれば大変でしたな(笑い)。

藤波 いやあ(笑い)。中曽根派だったらえらいことだな。

伊藤 中曽根派は、この前のお話だと特に中曽根さんを崇拝尊敬しているわけではないけれど、まとまっているということでしたが、「中曽根さん自身が」スポンサーというか、本当のオーナーなんですか。

藤波 オーナーだろうと思うね。中瀬古「功：明電工元相談役」さんとか、おるだろう。株をやって儲けた男だ。児玉「誉士男」さん以来。ロッキードの時かな、二百万か三百万持っていて、わしは関係なかったことにしてくれといって、あいつらに話をしたというのが、いまになって伝わっているわ。それが中曽根さんがまだやるかどうか、という話だ。さかんに党内を巡っておるでね。

伊藤 やっぱいろいろな裏話があるんだな。

■官房長官と危機管理

佐道 昭和六十(一九八五)年八月、中曽根さんの靖国参拜、三光汽船の倒産と同じ時期、政治問題ではないんですが、日航機が御巣鷹山に追突するという大事件が起きているんですね。新聞も数日間はその一面の紙面を割くという状況になっていたわけです。八月十二日ですね。やっと機体が見つかって、生存者も見つかって、遺体の搬出という時期に靖国参拜があったということになるんですが、これは自衛隊も出てくる、米軍のリーダーも関係するということで、一種の危機管理の問題にもなるんですが、こういう大事件が起きたときには、いろいろな情報が官房長官のところに入って来るんですよ。

藤波 来る来る。首相官邸に入ってくる。それはみんな官房長官のところに来る。私の選挙区外ですが、四日市の市長がやってきて、

四日市に大学をつくりたいので相談に乗ってくれと言ってきた。

「弁慶橋清水」で飯を食っているときに、その話が入ってきた。日本航空の飛行機が一機、どこかにいって、わからんという。これはいかん、といって、すぐに官邸にとって返して、官邸に陣取っておった。そんなことを覚えておるね。福田赳夫の御巢鷹山の話だ。

佐道 群馬県ですね。中曽根さんも福田さんも両方とも群馬県ですね。

藤波 福田赳夫の花輪が初めて来たという。福田さんの花が来たんだけど、どうするんだというので、それはいかんな、中曽根事務所に言うて、もう福田さんの花が着いているので、早う出せよ、と言ったのを覚えておるわ。妙なことを覚えておるな。議員本能だな(笑い)。

伊藤 これは大事件ですが、官房長官としてどこかに指示するということは一。

藤波 そのときに防衛庁か運輸省か、あちこち電話して、早う捜せ、と言ったのを覚えておるわ。

伊藤 そういうことはやるんですか。

藤波 「総理も心配している、捜せ捜せ、どこに行ったんや」と言っています。

伊藤 あのとときわからなかったんですね。

藤波 しばらくわからなかったんだ。

佐道 群馬県か長野県か、と言われていたんですね。まさに総理のお膝元というか、群馬に落ちたわけですから、花輪が遅かったら大変ですね(笑い)。

藤波 日比谷で北日本、向こうは大阪の中之島公会堂で合同慰霊祭をやった。二回とも総理がおらんのだ。

伊藤 外遊でしょう。

藤波 副長官は「総理に」ついて行っておるので、官房長官は留守

番しておって、両方に行って弔辞を読んだのを覚えておるわ。背中は遺族の前で火が凍っていくような思いがした。冷たい感じで辛かった。

伊藤 しかし官房長官の責任じゃないだから。

藤波 責任ではないと思うけれど、政府はいかんな。誰と言わず、部屋の空気は冷たいものだな。

佐道 日航機が消えたという連絡があって、場所はわからないけれど、実際に墜ちたことは確実だというとき、対策本部を緊急に設置しようという話になるわけですか。

藤波 なったと思うな。対策本部、本部長——。

伊藤 運輸省とか警察とか、そういうところがかかるんでしょうか。

藤波 対策本部として仕事をしたというより、中曽根内閣として心配したんだろうな。

■防衛費問題への関与

佐道 この時期、この前からお話が出ている防衛費の問題で、1%を超える、超えないという話があるんですが、新しい五ヶ年計画、中期業務計画が決まると1%を突破することになります。これは前回のお話のように、竹下さん、加藤紘一防衛庁長官、金丸「信」さん、政調会長の藤尾「正行」さんで議論されたということですが、この問題のときに1%突破に向けて、議論を中心になってまとめていったのは先生ですか。ほかの方々の反応はいかがだったんでしょうか。

藤波 政調会長の藤尾さんが議論の中心だったろうか。1%以内とというのはいつ決めたんだ？ 三木内閣のときに決めたんだね。

佐道 そうです。

藤波 中曽根さん、うちの総理は当時幹事長をしておったけれど、だいたい中曽根内閣から振り返って、非常に厳しいな、と思うときは、三木さんか宮澤さんか、どっちかが関係しておるんだ。三木さんやろ、1%を決めたのは。

伊藤 そうですよ。この新しい防衛計画を承認すると、一・〇三八%になるんですね。

佐道 ほんのちよっと、気持ち超える、ということですね。

伊藤 そういう計画でしょう。

佐道 計画です。

伊藤 だけど現実にはそうならなかったわけですけど。

佐道 八五年にはそうならなかったんですが、翌年には超えたんですね。

伊藤 これはかなり大きな決断だったんですね。

藤波 そうですね。決断だった。総理官邸の小食堂に陣取って話をしたね。総理官邸を根城にして騒ぐというのは珍しいな。

佐道 竹下さんなどは中曽根さんを支える側に回るのかな、と思います。加藤紘一さんは、何か積極的に議論をされたんでしょうか。

藤波 そういう意味で、中心は藤尾さんだったと思うね。加藤紘一は終始黙っておったな。藤波孝生も黙っておった。

伊藤 たぶん藤波先生は黙っていただろうと思う。みんなの話をよく聞いているんですね。

佐道 金丸さんはいかがですか。

藤波 金丸さんも黙っていた。

伊藤 要するに、みんな藤尾さんの言うことに、まあそれでいいんじゃないの、ということですね。

藤波 そうそう。

佐道 その場の状況が見えるようですね。

伊藤 どうしてこの五者なんですか。

藤波 話がゴシャゴシャにならんように。予算をまとめていく上で、相談して決めたんだと思うね。党の政調会長と、官房長官。

佐道 竹下大蔵大臣、加藤防衛庁長官、金丸幹事長、藤尾政調会長、それに官房長官ですね。

藤波 総務会長は誰だ。

佐道 宮澤さんですね。宮澤さんは「この会合には」入っていないですね。

藤波 宮澤さんは入っとらん。加藤紘一が入っているからいいと思っただろう。

佐道 加藤さんに泥をかぶってもらおうということですかね。

伊藤 でも加藤さんは、前から1%枠は超えるということを言っていたんじゃないですか。

藤波 事務的にそう言っていたんだらう。

伊藤 藤尾さんという人はかなり確信を持って言っているんですよ。1%を超えてもしょうがないじゃないかと。藤波先生ご自身はどう思っただらうか。

藤波 やっぱり1%突破も、靖国神社の国家護持と一緒に、中曽根康弘という人に対する国民の期待がそこにあるというのがわかっていましたからね。そんなものだろうと思っただけ。

伊藤 黙って聞いていけばそうなるという感じですか。

藤波 やっぱり藤尾さんの意味があったな。福田派だな。

伊藤 先生は藤尾さんに対してはどういうご印象ですか。

藤波 兄貴分だ。中曽根派になる前は、森「清」派とか園田「直」派の時には一緒におったんや。藤尾さんが竹下さんに「私のことを」言ってくれた。竹下さんが「政務次官を決める」担当で、自民党副

幹事長ぐらいたったかな。そのときに藤尾さんが電話をしてくれて、「おれの派の仲間の中に、藤波君がおる。若いのでこの次と思っただけで、本人はなかなかやる気があるので、政務次官にせい」

といった。それで「私が」文部省の政務次官になると思っていたら、加藤六月がどうしてもやるというので、みんな退け、といって、一つずつ横に退いて、「私は」科学技術の政務次官になったな。それは覚えておるわ。そのときに、「おう、竹下君かい。すまんけどの」「と藤尾さんは竹下さんに言っていた。「すまんけどの」とは言っていたけれど、頼んでいる言葉遣いではなかったな（笑い）。これはいかんと思ったが、やっぱりいかんのや。科学技術の政務次官だった。藤尾さんにはそういう思いがある。だから藤尾さんが出てくると、こっちは頭が上がらんのだ。なんと言われても

伊藤 そうですか。やっぱり兄貴分の言うことは聞かなければならないということですか。

藤波 そうそう。

伊藤 どうですか、人柄は。

藤波 それはいいですね。

伊藤 まっすぐな人なんですか。

藤波 まっすぐだ。ピッチャーで言えば剛速球投手だ。

佐道 ときどきバックネットのほうに投げたり。まあ、くせ玉は投げないということですね（笑い）。

■記念式典の開催

伊藤 この年は、自民党の立党三十周年記念、内閣制度百周年式典、天皇陛下ご在位六十周年の式典、とにかく式典だらけですね。こういうことは官房長官がやるんですか。あまり関係ないですか。

藤波 秋にやったのは内閣制度の百周年か。

武田 先生の「ふじなみレポート」（第一〇四号「春夏秋冬」昭和六十年十一月）を見ると、国民参政九十五年、普選六十年、婦人参

政四十年の式典が国立劇場で行なわれているんですね。

佐道 式典ラッシュですね。

藤波 内閣制度百年というのは秋にやっただろう。本当は春にやるべきものを、自分の勝手に秋にやった。何か右翼がやってきて、ああこいつに殺されるな、と何回も思ったね。

武田 内閣制度のときですか。

藤波 そうだと思うな。

伊藤 天皇陛下ご在位のほうじゃないですか。

武田 内閣制度百周年式典は、「昭和六十年」十二月二十二日にやっていますね。

伊藤 だから天皇のほうじゃないですか。

藤波 天皇のほうかもわからないな。在位六十年か。

伊藤 昭和六十年ですから。

※昭和六十一年四月二十九日に挙行している。

藤波 春だと思っけれど、秋にやるのはけしからんという。こいつは間違いないに懐に刀を入れているな、あるいはピストルかもわからんけれど、まあ刀だろうな、と何回も思ったね。平沢勝栄が警察から来て、官房長官の鞆持ちをやっていたんだ。それで、あの人は会うな、と一所懸命言うわけだ。向こうは意見があるといっているのに、意見を聴かないわけにはいかん。「そうですか、会ったらいかんと私は思うけれどな」と「平沢は」言っただけれど、「私は」会った。何回か私が「バカ野郎」と言ったのを覚えておるわ。

伊藤 向こうが言ったんじゃないかと、藤波先生が言ったんですか。

藤波 大きな声で言った。強がりだ。

伊藤 そういうことを言う藤波さんの姿を想像できないものですか。

藤波 ここは守るべき時や、と思った。

伊藤 何か凶器を持っていたような感じでしたか。

藤波 そう思ったな。

伊藤 でも、それで官邸に入って来られるんですか。

藤波 国会で会ったな。

伊藤 国会といっても警備は厳しいから、簡単には入れないですね。

武田 相手は一人で来るんですか。

藤波 いや、よけい来るんだな。五、六人。

武田 先生はお一人ですか。

藤波 一人だった。

伊藤 護衛はいないんですか。

藤波 いないな。

佐道 官房長官でしたら、SPの人がいらっしやるんじゃないですか。

藤波 おるはずだけれどね。どうっていうことはないと思ったな。

伊藤 そういうときは怖くないのですか。

藤波 いや、怖いので、声が大きくなるんだな。

伊藤 今日は危ない話が多いですね(笑い)。

武田 殺されるとか(笑い)。

伊藤 左翼のテロよりも、右翼の暴力のほうが近くにありませんね。

藤波 近くにある。中曽根さんそのものが右翼と近いところにおったからね。そういう感じがした。国民的な期待といても、そういう右翼の連中が大きな声で言うものだ。靖国神社の問題にしても、

1%の問題にしても、この際、政策的に解決できるのならやるべきだというのが私の感じだったね。中曽根内閣を守るためですね。

伊藤 その場合の右翼というのは、どういう右翼ですか。

藤波 いまはいかんわ。いまは暴力団か右翼かわからんでね。その

頃はちゃんとおったんだね。

伊藤 ちゃんとした右翼ですか。

藤波 うん。そんな暴力団みたいなものとは違う。

伊藤 誰か有名な人はいましたか。

藤波 有名というか、ど忘れしたけれど、いたな。

伊藤 そういう人は、中曽根さんのところとか官房長官のところにもしょっちゅう来るわけですか。

藤波 書類を持ってね。要求書とか意見書とかね。

伊藤 斬奸状なんか持ってこられたら大変ですね(笑い)。しょっちゅうそういう式典にはお出になるでしょうから、あまりそれぞれに印象はないと思いますが、特に印象があることはございますか。

藤波 在位六十年のときは――。

伊藤 あれは武道館かな。

武田 皇居ですかね。これは最後に到着するんですかね。

藤波 在位六十年の時は、銀座で行進があって、そのあとみんな手に提灯を持って、提灯行列で宮城前に集まった。村上正邦が委員長をしていた。あのとき私は国対委員長だ。

伊藤 式典自体はどこでやったんですか。

藤波 私は国対委員長だろう。官房長官か。

伊藤 官房長官の時代ですよ。二重橋で万歳の音頭をとられたわけですか。

藤波 銀座の通りを歩いて、そのあと宮城前に行った。それはいつだ？

伊藤 官房長官はいつまでですか。

佐道 官房長官は「昭和六十年」十二月までですね。

藤波 六十年と六十一年のお祝いだ。二回やっておるんだな。

武田 六十年と六十一年にまたがるんですね。六十一年四月二十九日に式典をやっている。両国の国技館ですね。

伊藤 いまの二重橋の話はまた別なんですね。式典が終了したあと、と書いてある。

武田 だから、これは六十一年ですね。となると先生はもう官房長

官は終わっている。

藤波 国対委員長だね。

伊藤 「雄弁会で鍛え、選挙で鍛えた喉も裂けよとばかりの大きな声で『天皇陛下万歳』と叫んだ。二万人がその声に続いた」と『政治と鎮魂』（一九二頁）にあります。元氣だったんですね。

藤波 黛敏郎さんがおって、「藤波さん、万歳の音頭をとれ」と言われて、「天皇陛下万歳」をやったんだ。ちょうどそのときに、天皇さんは二重橋の上のところに出ておったんや。それであとから、天皇さんのそばにおった（伊藤 侍従）（武田 入江「相政」さん）入江さんから電話があつて、「天皇さんが喜んで、藤波が音頭を取っているわと言ってくれた」という。「ありがとう、ありがとう」と言った。そんなことを覚えておるな。

昭和天皇というのは提灯行列が好きやったんや。そのことを知っておったから、提灯行列をしようや、と言った。それで「天皇が」二重橋まで出てくるとは知らなかった。向こうが勝手に出て来たんや。勝手に出て来て、聞いておいたら、私が天皇陛下万歳という音頭をとっておるもので、「ああ、藤波が音頭をとっておる」と侍従長に言った、ということだ。宮城前に二万人ぐらいいおったんだな。ようけおった。

武田 先生は昭和天皇と「会って話すの」は内奏のときですか。

藤波 内奏で呼ばれて、「また来てくれ」と侍従長から電話を入れてきた。「それなら行くわ」と言っ行って行くと、昭和天皇さんが、ふだん思っていることをみんなご下問になられるわけだ。それはもういろいろ話になる。その話をみんなにされているんだ。そういうふうに領域のことを考えなければならぬときには、運輸省なら運輸大臣、文部省の仕事は文部大臣に聞かなければいかんということはわかっているんだ。昭和天皇もわかっているし、聞かれるほうもわかっている。ただ、総理大臣と官房長官の二人だけは、領域なしに

聞けるんだ。

それで「私は」思っていることをみんな言っ、「ご宸襟を悩まし奉るな」と児島高德が桜の木に彫ったように言う。この話は知っておるか。「ご宸襟を悩まし奉るな」と私がいうのさ。ご下問があつて、それに答えるけれど、半分ぐらいしか知らんな。あとの半分は、「なんだかわかりません」と言うこともあるし、わかったような顔をして言うこともある（笑い）。それで最後に、「日本民族はちゃんと乗り越えていきますから、心配されるな」ということを言うわけだ。「ご宸襟を悩まし奉るな」という言葉を使っ言うわけだ。

まあ、十ぐらい質問されるので、「じゃあもう行きますわ」と言って立つと、「藤波、もっとおれ」と言うのや。もう誰もおらへんで、大きな部屋に二人しかおらへん。この「政策研究プロジェクトセンター」の会議室の「五倍も六倍もあるような部屋に、真ん中に机が置いてあつて、椅子が二つ置いてあつて、一つに天皇さん、一つに官房長官が座つて、内奏をする。初めに内奏しなければいけないので、「今度、広島高裁長官になるのはいい男です。大丈夫です」というようなことを言うわけです。「あ、そう」と言われる。次に、といって、昭和天皇がご下問を始めるわけだ。だいたい終わると侍従長から官邸に電話がかかつてきて、「藤波さん、あれだけへりくだつて昭和天皇さんのご下問に答えてくれたので、天皇さんは胸のつかえが降りたと言っ喜んでくださった」という。「ああそうですか、ありがたいことだ、ありがたいことだ」と、たまつてきたら言つた。そんなことを言つたのを覚えておるな。

伊藤 じゃあ結構回数も多いんですね。

藤波 多かつたな。それは伊勢のおかげだな。そう思う。

伊藤 でもそれは国務大臣でなければ駄目なんでしょう。

藤波 駄目だ。官房長官が段取りするわけだ。今度、誰々は内奏に行つてくれと言っわけだ。

武田 それは向こうから来てくださいという話があるんですか。
藤波 いや、こちらから言うときに、宮内庁に申し込んでおくわけだ。

伊藤 じゃあ宮内庁と相談しながらやるんですね。

藤波 やるわけだ。

伊藤 そうするとそれは、国対委員長になるとなくなっちゃうわけですか。

藤波 なくなっちゃう。

伊藤 天皇にお目にかかる機会は全くなくなるんですか。

藤波 なくなっちゃう。

伊藤 それは寂しいものですね。そうですか、内々で「藤波、来い」ということはないんですか。

藤波 ない。そんなことはできません。

伊藤 そうですか、それは残念だな。

■官房長官の交代

伊藤 それで昭和六十年の年末に「内閣」改造がありますね。第二次中曾根内閣の第二回改造内閣ができて、官房長官がまた後藤田さんになるということですが、これは何か意味があるんですか。「中曾根内閣の」出発の時には後藤田さんが官房長官でしょう。それで途中で藤波さんになったわけですね。

藤波 閣内を引き締めるという意味なんだろうな。私に総理が言ったのは、「すまんけど、行って法律を通してくれ。一つの内閣というものは法律が通らんと仕事したことにならない。法律を通せよ」ということだった。「わかりました」と言って、国対委員長に就任した。幹事長は金丸信だ。金丸さんのところに行って、「これからは

幹事長にお任せしますから、用事があつたら言うてください」と言った。「そうか、山を降りてきたな」と言ったのはその時だ。

伊藤 山を降りるといふのは、官房長官を辞めて、すぐに国対委員長になるんですか。

藤波 そうです。

伊藤 国対委員長というのは、この前ちょっと伺ったように思うんですが、役職としてはかなり大きな役職ですね。

藤波 大きな役職だ。

伊藤 官房長官も大役ですが、国対委員長も大役ですね。どっちが上なのかよくわかりませんけれど。

藤波 法律を通すのが仕事だな、と思ったね。

伊藤 後藤田さんが官房長官に戻りし、金丸さんは幹事長になる。

旧田中派を重要視しているという感じがしますが、そうなんですか。

武田 このころは「旧田中派は」竹下派になっていますね。

藤波 結果としてそうだな。結果としてはそうだけれど、旧田中派を優遇するというつもりではなかったと思うな。人によってだろうな。

伊藤 このときは、竹下「蔵相」、安倍「外相」は留任なんですね。

これはこの前おっしゃっていた助さん、格さんなんですね。

藤波 そうそう。

武田 先生は後藤田さんには何か引継ぎみたいなのをされたんですか。

藤波 引継ぎしなかったな。

伊藤 前にも伺ったかもしれませんが、後藤田さんと先生の関係はどうですか。

藤波 悪い関係ではないな。

伊藤 特に関係でもない。

藤波 ああ。

伊藤 これは聞き方によりますね。

武田 普通は中曾根派の官房長官がいたほうが仕事やりやすいと考えるんじゃないでしょうか。

藤波 それでもまあ、いいところはあるんやろうなと思ったな。初めの一年間、「私が」副長官のときに、「官房長官とこに行った」といつて聞くと、「公邸に行って寝ています」というんだ。ああそうか、寝ているというのは血圧が低いからだ。後藤田さんは低血圧だ。それでやっぱり朝方は機嫌が悪い。ああそうかと思った。そう思ったけれど、まあ、ええところはあるんやろうなと思ったな。決して私は生意気なことを思ったわけでもないし、低血圧だと思ったこともないな。ピチッと締めるところはピチッと締めるんだらうなという気がしたな。

伊藤 後藤田さんのインタビューをやったんですが、目つきが怖いんですからね。顔が笑っていても目が怖いんですよ（笑）。絶対に優しい目じゃないですね。

藤波 歳をとった後藤田正晴とか、伊東正義とか——宮澤喜一もいまやそうだけれど——、あのへんの保守的な革新というのか平和主義というのはきついな、なかなかね。それがいいと思っている思想的なものがあつたので、安心して見ておられたな。好きやった。

■昭和六十一年衆参同日選挙

伊藤 八六年にダブル選挙になりますね。昭和六十一年七月です。選挙というのは、国対委員長としてはあまり関係ないんですか。

藤波 「国対」副委員長の応援に行ったのをおぼえておるわ。派閥を超えて。

伊藤 それは自分の気持ちで行くわけではないんですよ。

藤波 公の——。

伊藤 公には、どこが仕切っているんでしたっけ。

平松 いちおう党という建前です。

伊藤 党のどこですか。

藤波 幹事長、総務局長。

伊藤 総務局で、藤波先生にあそこに行ってくれとか、ここに行ってくれとか。

藤波 連絡をとって、どこどこに行きますという。

伊藤 向こうからも要望があるわけでしょう、藤波先生に来てもらいたいという。

藤波 あると思うね。

平松 直接頼まれる場合もありますね。

伊藤 直接もあるんですか。

藤波 周りに気の利いたやつがおったら、「党に」言うだろうなと思って、こっちが勝手に決めるんだな。

平松 話をいちおう通して、党を通した形にして。

伊藤 いちおう断わっては行くけれど、直でやっている場合が多いわけですね。

平松 一応党を通さないと、応援の往復旅費などが出ないんですね。ですから建前上は応援演説というのは党を通した形になっているんです。

武田 とりあえず内諾をもらうようなことですね。

伊藤 前に誰かから伺ったんですが、応援に行くときは金一封を持っていかななくてはいいかんとという話を聞きましたけれども、そうなんですか。

藤波 うん。持っていかなければいいかん。

伊藤 来てくださって、ありがとうございます、ということでは。

藤波 そんな馬鹿なことはない。

佐道 応援してあげるほうが持っていくわけですか(笑い)。

藤波 そうそう。

佐道 呼ばれれば、呼ばれるほど大変ですね。

伊藤 出費がかかるな。

藤波 かかる、かかる。

佐道 政界の中で地位が上がったという証拠なんですよ。

藤波 そうそう。

伊藤 でもちゃんとしたスポンサーが付いていないと、お金がなくなりますね。

藤波 そうですなあ。お金がなくなるなあ(笑い)。

伊藤 いや、なくなってもいいんですが、補給してくれるところがないとね。

佐道 いまの選挙なら、例えば十月十日に解散するであろうという話が前からずっとありましたね。そういうときには、議員の方々も早めに地元に戻ったりして、選挙運動を事前にされたり、党のほうもいつごろという予定を立てることができると思うんですが、この八六年の選挙の時は、ダブル選挙をやるんじゃないかとか、どうだろうかと、とずっと言われていて、突然「やることに」なったわけですね。これはみなさん、かなり準備で大変だったと思うんですが、先生はやるだろうなと予測されておられましたか。

藤波 「死んだふり解散」のときか？

佐道 「死んだふり解散」のときです。

藤波 「死んだふり」というのは私が言うた言葉だ。

伊藤 よく言葉をおつくりになりますね。

武田 「死んだふり」というのは最高だと思います、名言ですね。

藤波 いまの呉の市長をしている小笠原臣也が自治省の選挙部長ですね。役人というのは頭がいいなと思ったな、そのときに。その小笠原と私と二人だけで話をした。

「私が」「任せてくれますか」と言ったら、金丸幹事長が「任す。任すからやってくれい」と言うから、「そんならやりませう。細かい相談はせんよ」と、それだけ言って、あとは小笠原との相談だけだ。ここだったらいよいよ、と言った。

いまなら「当時のことをしゃべっても」もう小笠原にもいいやろ。それで決めたんだ。決まった晩に官邸に報告に行った。今晚、帰ってきてから来いというので、総理大臣・中曽根康弘、官房長官・後藤田正晴、副長官・唐沢俊二郎、それから藤森「昭一」がおった、「事務の」副長官だ。それだけおって、一番初めに唐沢がものを言っ、「大丈夫か」というので「大丈夫です」と言った。その次に藤森が「藤波さんが大丈夫だというので大丈夫だと思ってるが、いいですか」と言ったのかな。そんな確認するようなことを言った。

後藤田さんがまた「同様のことを」言った。「私は答えた」「大丈夫です、間違いない」。中曽根が最後に「本当に大丈夫か、国対委員長」と言うので、「いかんだったたら、私はバッジを外して家に帰って行くで、それで饅頭を売ったらいいだけや。饅頭売りに帰って行くで、大丈夫です」と言ったのを覚えておるわ。それが官邸で十二時ぐらいだ。新聞記者は帰っている。みんな十二時ぐらいに集まったんだ。

それで山口鶴男が社会党の委員長だった。「総理はどんな気持ちでおる？」というので、「死んだようにしておる。がっかりして、目に一杯涙を溜めておるわ」と言ったんだ。「そうか、それならしょうがないな」と言っていた。それが死んだふり解散だ。

でも公明党の矢野「絢也」幹事長だけはわかっていた。その手打ち式を、議長応接室、議員運営委員会の総会をやるところで、各党の幹事長と国対委員長が集まって、やったんだ。それで誰にもわからぬので、うまいこと行ったな、と思ったんだ。そうしたら出て行くときに、矢野が私の袖を引っ張って、「藤波さん、うまいことやっ

たな」と言いよる。あれはびっくりしたなあ。公明党は「当選者を」減らさなかったな。ダブル選挙あり得るといふ指示を出していたんだ。

佐道 矢野さんはどこから——。

藤波 考えたんやろうな。小笠原と藤波のことやで、何か企むに違いないと。企んだわけではないけれど（笑い）。

佐道 読まれましたか。

藤波 あれは見破られたな。矢野絢也。

佐道 矢野さんは大したものですね。

伊藤 藤波さんが話したわけではないでしょうね（笑い）。

■選挙区、定数は正問題

伊藤 この衆議院選挙で選挙区の問題、定数は正の問題がありますね。

藤波 その選挙でどういうふうにしたんだ。

武田 最終的に「八増七減」になるんですね。

伊藤 選挙区を変えるところは大変でしょう。

藤波 大変だ。次々と後援会がバスで乗り付けてくる、「いかん、反対だ」と言っている。この問題の責任者は渡部副委員長だった。渡部恒三さんに委員長をやってもらった。「荒物師やってくれ、頼むわな。責任はおれが一切持つぜ、いつでも辞めるぜ」と言った。渡部さんは、ああでもない、こうでもないと言った。聞いて、やっておった。気の短い渡部恒三が一所懸命になってやっておった。それで「八増七減」になったんだな。

伊藤 なかなか折り合わない選挙区が出てくるわけですね。

藤波 そうそう。

伊藤 あれは理屈じゃなくて——。

藤波 中選挙区だろう。

伊藤 だから逆に言えば、いろいろな可能性があるわけですね。

藤波 そうそう、いろいろな可能性があるわけだ。

伊藤 二人区ができるということに、社会党あたりはかなり反対したわけですか。もちろん自民党の中でも反対はたくさんあるんでしょうけれど。

藤波 完全に党利党略だな。党利党略で、そのときに誰が議員になっておるかによって、ヤヤー言うわけだ。うるさいところがみんな来るわけだね。

伊藤 でも一応原則で押し通さないことには——。

藤波 しょうがないわ。

伊藤 あるところだけ例外を認めたら、じゃあおれのところも、となるわけですからね。これは国対委員長が責任を持つことですか。区割りには公職選挙法でしたか。公職選挙法の改正ということになるわけですね。これは委員会はどこにかかるとですか。内閣委員会にかかるとかな。自治省かな。

藤波 地方行政「委員会」だ。

伊藤 これは与党内ももちろん、野党との調整も必要だということですね。

藤波 与党内の調整も必要だ。愛媛の関谷「勝嗣」、ようけ来たな、後援会が。

伊藤 バスに乗ってどこに来るんですか。

武田 後援会が来るんですか！ 大変ですね。

藤波 そうそう。文句を言いに来るんだ。

伊藤 後援会を動員するんでしょう。そういう後援会が来て、国対委員長とどこで会うんですか。

藤波 国対委員長室で。

平松 調整してやって来るんですね。おる時をめがけて来るんです。本人が連れてきますから。

武田 大量に入って来るわけですか。

平松 そこまではちょっと——。

伊藤 ある程度大量に入るんでしょうね、面会で。

平松 後援会も必死ですからね。

武田 そうですね、必死ですね。

藤波 いま、若手のおやじ、小委員長ばかりやった男、大蔵省のOB、なんとか言ったな。それからいま「松山」市長をやっている中村「時広」のおやじ、中村時雄、民社党だ。それから関谷だ。みんな反対だ。

伊藤 愛媛の話ですか。

藤波 ああ、みんな反対だ。

伊藤 あそこは民社がいたんですね。

藤波 社会党かな。民社だ。

伊藤 現役の方は、いずれにしても動かされたら厄介ですね。

藤波 最後に公明が吞んでくれて、やっとまとまったんだ。公明党の福岡から出ている国対委員長、死んだ——「権藤恒夫」。今度勇退する、石田の前の委員長「市川雄一」。それらと一所懸命話をした。

伊藤 さっきおっしゃったように、渡部恒三さんがだいたい腹をまとめて、根回しもやって、いよいよ困ったら委員長に投げる。

平松 責任だけ取らせる（笑い）。

伊藤 これでダブル選挙になる前提ができるということですか。

藤波 そうそう。

伊藤 これをやらないと、この時点ではちょっと具合が悪いわけでしょう。

藤波 政府が困るんだな。国会が困るのか。最高裁判所で——。

伊藤 判決がありますからね。政府が困るし、議会を通さなければ話にならない。いちおう、格差を何倍にするとか、なるべく縮めなければならぬ。縮めるためには、だいたいの基準をつくっておいで、それに引っかかる場所を調整する。どこが引っかったのか、愛媛だとかが引っかかって、それで具体的に人名が上がってきて、そこで問題が生じる。それを渡部さんは、たぶんせつと説得していたんでしょうね。

藤波 「なんでこんな馬鹿なことをおれがやらなければいけないんだ」と、口癖のように言いながらやっていたな。

伊藤 渡部恒三さんだって、自分の選挙区が引っかかっていたら

（佐道 それは大変でしょうけれど）（笑い）。

藤波 会津弁ですね。

伊藤 会津弁ですね。福島弁とはちょっと違うんだ。そうですね。

藤波 それでこれは「定数は正案について」議長調停案が出るんですね。

藤波 坂田道太だ。

伊藤 それが出るわけですが、さっきのお話の、自治省選挙部長の小笠原さんのあたりでいろいろやっていたんでしょうね。

藤波 そうでしょうな。

伊藤 もちろん先生も入った話だろうと思いますけれど。

藤波 そうです。

伊藤 この小笠原さんという方は、先生とは前からおつき合いのある方ですか。

藤波 いや、ない。

伊藤 このときですか。

藤波 このとき。その後は広島県の副知事に行って、知事になるのかと思つて、「副知事は結構だな」と言ったら、「もう県庁を出ます」といつてやってきた。「そんな馬鹿なことがあるか。宮澤「弘」とか藤田「雄山」とか言わんと、広島県の県庁の上に昇られんのか。

小笠原はいかんのか」と言ったら、「行きません」という。そうか、宮澤か藤田でないといかんのか。藤田というのは参議院の藤田「正明」の長男だな。フジタ組。いまは「広島県知事は」藤田かな「平成五年十一月就任、平成十三年十一月より三期目」。それで「小笠原は」呉の市長に出て、当選して、まだやっておるのやろう。馬鹿な話だ。知事になると思った。

伊藤 議長調停案なんていうのは、ある程度国対あたりで詰めて、本当に議長が――。

藤波 形だけだ。

伊藤 そういうことなんでしょうね。一応話をつけておいて、それを権威づけるということですね。

藤波 そうそう。議長室で、このあいだのようなことでは、国対委員長は何しとるんや、ということになる。

伊藤 議長調停案を出して、蹴られちゃったら――。

藤波 駄目だ。

平松 斎藤十郎ですね。

伊藤 その前の準備が悪い。

武田 平松さんに言っていただけでよかったですね。名前を挙げていただいで（笑い）。

平松 地元ですから。

伊藤 このときの選挙では自民党は三百を超える議席を獲得して圧勝したわけですね。このときは、雰囲気はどうだったんですか。

藤波 「勝った、勝った」だった。それで、国対委員長だけが、「勝った、勝ったと言うけれど、また三百祭りが始まるぞ」と言うたんだ。あまり勝ちすぎたらあかんのや。野党の国対委員長と話をし、ちょっといいんや。案を作ってね。あまり強いと、やっちまえ、やっちまえ、ということになってくるんだ。それで「三百祭りが始まるぞ」と言うたら、「そんなアホなことを言うな」と言われたけれど、「お

れは言うんや」と言って、祭りが始まるぞ、と言っていたら、やっぱりそうなっていったな。そのあと自民党が強くなってきた、傲慢になってきた。

伊藤 行け行けどんどんになっちゃうわけですね。そうすると国対委員長としては辛いことになるわけですね。

藤波 そう思うね。自民党が辛くなる。

伊藤 勝って嬉しいと思ったら、違うんですね。

藤波 一般的にはそうだけれどね。

伊藤 勝たなければ困るんでしょうけれど、勝ちすぎて困る。

武田 このとき中曽根さんは、「八六年体制の新しい自民党の時代が来たんだ」というお話をされましたが、どういうご印象ですか。

藤波 中曽根さんは喜んだね。

伊藤 中曽根さんは嬉しいでしょう。

藤波 負けるよりはいいな。

伊藤 ダブル選挙には反対の方も党内にはいたんですね。宮澤さんとか――。

藤波 あまり聞かんな。

伊藤 やっぱり、「勝った、勝った」で意気が上がって、という感じでしたか。

藤波 そうそう。

武田 先生のように、これから大変だぞ、と思う方はいらっしゃらなかつたんですか。

藤波 おらんだらうと思うな。

伊藤 この選挙の結果で、第三次中曽根内閣ができます。今度は金丸さんが副総理として入閣して、宮澤さんが大蔵大臣、藤尾さんが文部大臣、これがまた大変ですね。後藤田さんがまた官房長官ということになりました。この新しい内閣については、どんなご感想でございましたか。

藤波 もうそれぞれ、やっとなる、やっとなるというぐらいのつもりだ。大して感想もないな。

伊藤 国対委員長はそのまま相変わらずということですね。

藤波 はい。その選挙に勝ったもので、中曽根さんの任期が長くなっただらう。

伊藤 そうです。

藤波 小此木「彦三郎」さんが言うて、梶山「静六」さんが応えただ。小此木と梶山の友情で、長くなっただ。友情だな。梶山と小此木というのは仲が良かったな。梶山は竹下の心の親友だったな。梶山時代というのになるのやと思っただけだな、死んでった、あの人は。

伊藤 あり得たことですか。

藤波 あり得たことだよ。

伊藤 先生は期待したほうですか。

藤波 普通だな。立派な人やな、と思った。

■新自由クラブ解党

伊藤 残り時間が少ないんですが、新自由クラブの解党が昭和六十年八月です。新自由クラブの面々の中で、田川「誠一」さん以外は自民党に復党しますね。この新自由クラブの仲間、もともと藤波先生と非常に近い人たちですね。この復党と藤波先生は何か関係があるんですか。

藤波 個々にはあったけれど、田中六助さんが幹事長だった。田中六助さんが中心になって、自民路線を取り仕切ったな。田中六助さんは、「そのとき」死んでるか、生きてるだらう。

武田 もう亡くなっています「昭和六十年一月逝去」。

藤波 ほう、新自由クラブが自民党と一緒になったときは？ 田川さんが入閣したときは？

武田 初めのときはそう「田中六助氏を取り仕切った」ですね。

藤波 あとのとき？

伊藤 ええ、解党するときです。これは藤波さん、何かやったんじゃないですか。

藤波 いやいや、そんな悪いことはしない。

伊藤 悪いことじゃないじゃないですか（笑い）。

藤波 金丸さんが、「おまえの古巣やで、古巣に行って挨拶してこい、自民党を代表して」と言っただね。金丸さんが幹事長だった。あのへんに言われて、新自由クラブの総会に行ったことを覚えてるわ。

伊藤 解散総会ですか。

藤波 解散総会に近かったと思うな。「志操」を大事にせい」という話だけしてきて帰ってきた。今度、十二月十五日に藤波孝生お別れ会を伊勢でやるので、そのとき集まってくるけれど、一人だけ河野洋平を呼んでいるんだ。「来るか」と言ったら、「行く、行く」という。元気になったな、いま。

伊藤 何か具合が悪いみたいな話ですが。

藤波 いや非常に元気になった。このあいだ宿舎に来た。

伊藤 これは新自由クラブの側の復党にあたっての接点は誰ですか。

藤波 個々だらうね。

伊藤 一人ひとりですか。

藤波 山口ちんねん「敏夫」は哀れとどめてるし、いま。

伊藤 いまはそうですね。復党するときには山口さんがかなり熱心に動いたんじゃないですか。

藤波 向こうが動いた。金丸さんとのコンビでね。

伊藤 しかし自民党としては、選挙に勝った後じゃないですか。さ

らに新自由クラブを入れる必要はあまりない。

藤波 ない、ない。党としてはないと思う。

伊藤 前は、自民党が少なかったから連携する必要があったと思いますが、この期に及んでは――。

藤波 どうでもよかった。

伊藤 必要ないから袖にするんじゃないかと。

藤波 金丸さんと山口ちんねんとの関係があるから、人間関係中心に動いたな。

伊藤 それで先生は「志操」云々とおっしゃいましたが、その志を貫いたのは田川さんじゃないですか。

藤波 だけだな。みんな、どうでもよくなった。どうでもよくなったついでに、山口ちんねんみたいなことになった。西岡武夫はいま自由党だからね。

伊藤 今度民主党になるんでしょう。

藤波 自由党の国会議員のおところで、「ナミさん、おれはじきにまたやるからな」と西岡武夫が言うておった。「何をやるのや?」と言ったら、長崎で衆議院をやると言った。「いま、おまえ、参議院の自由党におるのやないか。一番いいと思わないといかんぞ。自分のやっていることをいいと思わなかったら、絶対にひとはいいと思ってくれないぞ」と言ったら、「そんなことないやろ」と言っていたな。

伊藤 田川さんはたしか進歩党という政党を作って、一人で数年頑張りましたね。あれは宇都宮さんなんかと一緒になのかな。宇都宮徳馬という人とは、藤波さんは関係ありますか。

藤波 ない。金持ちだからな、あれは。

伊藤 あの葉ですね。

藤波 葉だ。

伊藤 ミノファーゲンといったかな。

藤波 あの人の言っていることは嘘だと思った。金があるのに、ないみたいな顔をして物を言っているの、これはいかん。

伊藤 しかし政治家が金があるような顔をしたら駄目じゃないですか。むしられるだけですから。

藤波 でも、宇都宮徳馬はいかん。嘘を言うんだ。実際は葉でようけ儲けとったんだらうね。

伊藤 ミノファーゲンというのはすごく儲かったみたいですね。たぶん田川さんは、それとくっついていたんですね。

藤波 ああ、そう? 田川誠一というのは立派な人だ。中曾根のことを悪く言ってるね。

伊藤 その点で気が合ったわけではないでしょう(笑い)。

武田 二人で悪口を言ってる(笑い)。

■皇室問題懇話会の会長に就任

伊藤 ちょうどいま四時ですが、あとは中曾根派の事務総長の時代がありますね。

藤波 安全保障調査会長。

武田 それから皇室問題懇話会の会長になられていますね。

伊藤 それがありますね。もしお時間がよろしければ、皇室問題懇話会の会長の話だけしてください。

藤波 そのころは、特にどうっていいことはないな。

伊藤 これは昭和六十二年ですから。これは、皇室問題懇話会と言っています、実際問題は、昭和天皇がちょっとお具合が悪いということと関連してつくられたのではないんですか。

武田 これは事務局長が村上正邦ですね。

藤波 村上正邦が決めたんやろう。藤波会長を決めたんだ。

武田 主要なメンバーは森さん、羽田「孜」さん。

伊藤 藤波さんが会長でしょう。このときの皇室問題というのは、天皇の代替わり問題ですね。

藤波 内緒でね。

伊藤 それは大問題ですね。なんせ昭和天皇は六十年以上おられたわけですから、大正天皇から昭和天皇に代替わりがどういうふうに行なわれたかということは、誰も体験している人がいないわけですね。これは懇話会ですが、懇話会というのは議員さんたちの自発的な会なんですか。

藤波 そうです。

伊藤 でもいちおう中曽根さんが――。

藤波 中曽根さんは関係ない、皇室問題は。

伊藤 でも、全く関係なくやるんですか。

藤波 うん。村上と私らの仕事だな。

伊藤 言われてやったわけではないんですか。

藤波 言われてやったわけではない。

伊藤 するとこれは、事務局はないわけですか。

藤波 事務局長は村上やる。

伊藤 役人についてはいないんですか。

藤波 役人はいないな。

伊藤 ええ？ だけど、そうしたらどうやってやるんですか。

藤波 村上正邦がやる。

伊藤 宮内庁の職員とかを使うのかな。

藤波 いやいや、議員でやったんだ。

伊藤 議員だけで？

藤波 うん。

伊藤 それはわかりますけれど、具体的な案作りといいますが、そうなたらどういうふうにするんですか。

藤波 ないと思うね。それは村上だな。

平松 どこからか探してきたんでしょね。資料なんかは、役人がいなくても取り寄せることができますよ。ほかの団体の若い者を引っ張ってくることも可能だと思います。

伊藤 あの段ボールの中にあるかな。

藤波 だいたいの仕事は実際は、藤森さんがみんなやってくれたんだ。それは中曽根さんの命令でやっていたんだ。事務的なことは。伊藤 それとどういう関係になるんですか。

藤波 議員の立場で、それを話し合うということはあったけれど、

そんな強い連携があるわけじゃない。

伊藤 内々はあるんですか。

藤波 村上や私はね。一般論として、議員懇談会は、皇室の予算を充実させようということできた懇談会だ。

伊藤 この前ちょっと藤森さんにいろいろ話をしてくださいと言ったら、絶対にしないという。

藤波 あれは役人の続きだな。

伊藤 そう言っていましたので、いまのところちょっと諦めているんですが、そのうちまた。

藤波 あれは死ぬまで言わんやろう。

平松 役人ですからね。

藤波 踏み込んで言うたね。

伊藤 その問題を外してもいいですから、話してくださいと言ったんですけれど。

藤波 あれは家内が死んだしね。

伊藤 やっぱり、話していると危ないと思ったんでしょね。

藤波 横を見ても家内は寝ていないし、一人で考えたんだらう。

平松 「藤森氏の奥様は」亡くなりましたね、今年でしたか、去年でしたか「↓二〇〇三年三月」。

伊藤 この年、夏に中曽根さんの任期の一年延長を決めますけれど、延期するという動きについて、先生は何かご関係なさいましたか。二年にしろとか、一年にしろとか、いろいろ議論があったじゃないですか。

藤波 選挙の結果だ。

平松 それと、今日おっしゃったのは、小此木さんと梶山さんの関係ですね。

藤波 中心は小此木さんだね。

伊藤 その人たちは一期延ばすというんですか、それとも一年延ばすというんですか。

藤波 一年延ばすということが決まってきました。

伊藤 だんだんそこに落ちていくわけですか。一期Ⅱ二年延ばすという案もあったでしょう。

藤波 一期のつもりでおったら、一年というので、ああ短いなと思っただけれど、そうかと思っただのは覚えておるわ。小此木さんが言うので、まあいいわ、と思ったな。

伊藤 その延長があって、そのあとは改造はないのかな。

佐道 もうないですね。

伊藤 昭和六十二年に竹下内閣ができるまでのあいだ、藤波先生としては国対委員長としていろいろ活躍されるということになるわけですね。

武田 売上税の問題がありますね。

伊藤 そうですね。ですからもう少し、国対委員長の時のお話を伺わなければなりません。そして竹下内閣が六十二年「十一月」にできて、「藤波さんは」中曽根派の事務総長になる。私なんかは、えっ、なんで藤波さんが事務総長なの、それまで派閥のことをそんなに一所懸命やってきたという話は全然聞かなかったのに、事務総長になっている、と思いました。僕は派閥の事務総長は何をやるものか全

然わかりません。今度はそれを教えてください。それから党の安全保障調査会長。これも大事な仕事でしょう。

藤波 大事な仕事だったな。角栄さんの都市政策調査会の真似して、安全保障調査会をやったんだ。勉強会を一年間、毎週やったんだ。安保調査会長の時のものは、自民党にないかな。

武田 これは党の「組織」だから、新聞にちらちら出て来ますかね。八七年ですから、もう新聞で調べられますね。

伊藤 また新しく「質問項目を」つくりますので、お願いします。一同 どうもありがとうございました。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第13回

日時：2003年11月12日

14:00～16:00

於：政策研究院政策研究プロジェクトセンター

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

小池 聖一（広島大学助教授）

佐道 明広（元政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（政策研究大学院大学特別研究員）

川越 美穂（東京大学大学院博士課程）

平松 大輔（藤波孝生氏秘書）

記録者：丹羽清隆

■政界引退後、地盤の継承について

伊藤 もう「議員会館の」部屋は引き渡したんですか。

藤波 引き渡した。当選が決まると、すぐに部屋が決まるから。衆議院の事務局がやるのかな。だいたい選挙中に引き揚げるんだ。

伊藤 そうしないと部屋が足りないんですか。

藤波 足りない。

伊藤 このあいだの選挙はいかがでしたか。

藤波 まあまあ、でしょう。

伊藤 与党も過半数を充分取ったし、民主党もけっこう伸びたし、両方ともハッピーですね。

藤波 保守新党がかわいそうだね。社民党もね。

伊藤 でもいいんじゃないですか、「保守新党は」自民党に入ったんだから。

藤波 民主党なんか、お化けだ。

伊藤 やっぱり公明党の存在感が強くなったという感じですね。

藤波 選挙では大きかったな。

伊藤 そういう意味では、これからの政局運営もなかなか大変でしょうね。

藤波 大変でしょうね。

伊藤 今度の選挙は、ほんとうに眺めておられたという感じですか。

藤波 そうです。

伊藤 何も動かず、ですか。

藤波 問い合わせが来るのにはみんな、新しいのにせよ、と言ったんだけれどね。わしは動かなかった。動く、後継者の陣営もみんな私の陣営になるんだ。陣営の幹部は替わらないことになるんだ。

それはいかんからね。

伊藤 じゃあ、藤波先生を支持していたグループはどこに行ったわけですか。

藤波 もう年寄りだから、引退ということ考えたな。

伊藤 そういう人が多いんですか。自民党の候補者のところにみんな行ったというわけではないんですか。

藤波 結果はそうだけれどね。だけど、幹部になっている連中は代替わりしたろうね。若返った。

伊藤 藤波会みたいなのは、もうなくなったわけですか。

藤波 なくなった、実態はね。覚悟もいるし、勇気もいることだけれどね。もういいんだ。

伊藤 きれいさっぱりとしたわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 じゃあ、「ふじなみレポート」もこの前の回〔第二一八号平成十四年九月〕で終わりですか。

藤波 終わり。

伊藤 よし、最終回は記念にしておかなければ（笑い）。

武田 平松さんの地盤がなくなりましたね。

藤波 今度は新しいところでやるから。三ツ矢「憲生」の新しい事務所だね。

藤波 その方は、先生が後継者に推していた人ですか。

平松 結局、それ「藤波氏が推した人」は県連の決定で外されまして、「三ツ矢氏は」新しく自民党の公認になった方です。

伊藤 そうですか。それは藤波さんの息が全然かかっていない人なんでしょうか。

藤波 しょっちゅう飯ぐらいは食っているんだけれどね。

平松 しょっちゅう飯ぐらいは食っておったんですが、本人は、出るのであればうちの後継という形をとって公認を取りたい、それな

らば出たいと言っておったんですが、輿連の決定でポンとなつてしまつたので、こういう結果になりました、という挨拶はあつたんですね。

伊藤 じゃあ、関連があるわけですね。

藤波 あるある。形式的には、松木「謙公」というのが北海道で当選しました。いままでの選挙区は自民党だか公明党がおるので、網走のほうにやられて、自由党でやったんだ。渡辺秀央に頼んで、面倒を見てもらった。そうしたら「自由党が」民主党と一緒になつたもので、候補者になつて、比例代表で出て来た。よく頑張つて、比例で当選してきた。小選挙区では自民党に負けたんだ。たぶん「議員会館の」三〇五「号室」は、松木が入ると思うんだ。

平松 朝から事務長のところに電話したので、たぶん同じ部屋に、うちの秘書をやっていた松木というのが入ることになると思うんです。結局、北海道の札幌市内で選挙をやっていたんですが、民主党が認めないということで、はじき飛ばされちゃつたんです。それで武部勤さんのところ「北海道一二区」に行つた。武部さんは当然のことながら強いですから、でも比例で通る可能性があるんじゃないかということで、その選挙区に行かされて、「北海道ブロックでは民主党が」四人入つたので、ぎりぎり四番目に滑り込んで当選しました。

伊藤 その人が、「藤波氏の」部屋のとこに入るといふことですか。

平松 本人はそれが一番よかつたんです。ずっと、十年、二十年一緒にいてくれましたから。

伊藤 秘書ですか。

平松 ええ。

藤波 青山の学生時代からだよ。書生みたいなものだ。

伊藤 三重じゃなくて北海道になつたんだ（笑い）。

平松 そうなんです。三重から北海道に変わったんです。

伊藤 「平松氏に向かつて」あなたはその人の秘書になるんですか。
平松 僕は三重のほうです。ほかの二人はそちら「松木氏のほう」に行くようなんですが、「僕もそちではいかんのかな」と言つたら、「三重県に置いておかなければあかんで、おまえはそち「三ツ矢氏のほう」へ行け」ということでした（笑い）。何度か、「そち「松木氏のほう」ではいかんのですか」という問いをしたんですが、「二人は行かなければあかん」と、ここ数日で何度も言われていますので。

伊藤 それじゃあしょうがないですね。

■ 売上税問題

伊藤 さて、前回から国対委員長時代の話を伺っているんですが、今回は、質問要項にあるように、売上税の問題です。そもそも売上税の問題は、大平内閣のときから一般消費税導入ということで始まるわけですね。大平内閣のときのこの問題については、何かご記憶がありますか。

藤波 大平さんは大蔵省で「ミスター大蔵省」と言われたぐらいだから（大平のあとは竹下かな）、大平さんは財政上、やろうとしたんでしょ。そうだと思う。大蔵省そのものの感じで、大平内閣のときはやつたんだと思う。わかつたんや。中曽根内閣のときはわからなくて、大蔵省の連中が言うものだからやろう、ということになった。そこに大きな差があると思う。

伊藤 大平内閣のときは、それで大平さんは苦労したわけですが、実現せず。それでまた中曽根さんが取り上げることになるわけですが、中曽根さんは財政再建ということで、大蔵省から言われて決意したということですかね。

藤波 そうです。

伊藤 自分だったらできるだろうと。

藤波 自分だったらできると思ったかどうか知らないけれど、そこで使命感を一つ持ったんだね。国の財政をちゃんとしなければいかんという。

伊藤 こういう増税になる話をしたら、その内閣は不人気になるということは目に見えていますね。

藤波 そうだなあ。

伊藤 それについて、藤波先生なんかは一体どういうふうにかけていたのかな、と思うんですが。

藤波 とにかくまあ、大蔵省の言うままだったからな。大蔵省の役人というのは、いまよりもずっと国のことを心配しておった。大蔵省が日本の国を段取りすると思っておったから、大蔵省の連中がそれを言い出したので、やらなければいかんということを使命感としてセットしたということだね。

伊藤 ただいまの日本の財政はその頃と比べてひどい状態ですが、その頃も相当ひどいわけで、赤字国債がどんどん積もっていく。いずれ財政破綻するということは目に見えているわけですね。総論ではみんな、そうしなければいかんだろうなとは思いますが、現実の問題になると自分のところに災難が降ってくるわけですから、これは政治家としてはなかなか大変な課題ですね。藤波先生ご自身はどういうふうにしてもらいましたか。これをやったら大変だろうな、という感じでしたか。

藤波 大変だろうと思ったけれど、それぞれ役所があって、役所の上に大蔵省がおって、大蔵省が日本の国のことを段取りすると思っ
ていましたから、大蔵省がやれというんだから、やらざるを得ん
なと思っ
ていた。

伊藤 結局、この前お話のあったダブル選挙の前までいろいろ議論

をしていて、ダブル選挙の時に中曽根さんは、「やらない」と言っ
たんですね。何と表現したんだっけ。

佐道 「縦横十文字に」投網をかけたような形で「大型の消費税を
取ることはしません」と言ったんですね。

伊藤 そういう言い方で、やらないということを言われたわけす
ね。このへんは、藤波先生は関わっているわけですか。

藤波 形として出したのは、選挙の前だったか。

伊藤 言い出したのはそうですね。そうしたらどうも調子が悪い。

藤波 竹下さんが幹事長になったからかな。大蔵省は誰だったか。

伊藤 ダブル選挙で結局それをやらないと言って、選挙で勝ちます
ね。勝ったところで、山中「貞則」さんを税調の会長にして、税制
改革を本格的にやるということになったわけですが、山中さんは税
の専門ですね。

藤波 そう。

伊藤 中曽根さんとの関係は非常によかったんですね。

藤波 まあまあ。

伊藤 まあまあですか。

藤波 私と一緒に、中曽根のことをぼろくそに言うところけれどな。

伊藤 中曽根派なんですよ。

藤波 そうそう。まあまあでしょうな。

伊藤 山中さんは税制の大物なんですか。

藤波 というところに、党内ではなっているな。長いことやってきた
ということだろうな。鈴木宗男の外務省のように、大蔵省の面倒を
長いこと見てきた。いろいろみんなの気持ちがあるから、あれにし
たんでしょいうな。相沢「英之」は今度落ちたのか。

小池 落ちました。

伊藤 この党の税制調査会というのはかなり大きな組織のようす
が、先生もそのメンバーですね。

藤波 メンバーになっていると思うな。

伊藤 でも幹部ではないんですね。

藤波 幹部じゃない。

伊藤 まあ、税問題というのは、藤波先生がそんなに関心を持っているわけではないんですね。

藤波 そうそう。全体から見ても、何人かの幹部の連中に表に立ってやってもらわなければいかん、というぐらいの感じだった。

伊藤 やっぱ税問題だと喧喧諤諤うるさい方がたくさんいらっしゃるわけでしょう、山中さんだけじゃなくて。

藤波 そうだなあ。国のことは全部を政府が見て、国会というのは税制のことを考えればいい、というぐらいのつもりがあった。イギリスが発祥のことを考えて、国会は大事だ、税金をどうするかというのは大事な問題だということ、重要性はわかっていたんだけれど。だから自民党税調の幹部連中も大事なことだという感じがあって、ちくはぐになっただろうな。

■消費税導入反対運動

伊藤 その頃から、流通が中心でしょうけれど、大型間接税反対という運動が起って、自民党の中でも村田「敬次郎」さんとか天野「公義」さんとか——。

藤波 塩谷「一夫」とか——。

伊藤 鯨岡「兵輔」さんとか、そういう人たちが一斉に反対の声を上げますね。

藤波 強かった。

伊藤 強かったですか。こういう人たちは財政を再建していくためには、消費税ではなくて何か別の税を考えろ、ということなんで

すかね。

藤波 ねえ。財政全体はようわかっているつもりの連中だけれど、税制で消費税みたいにしてやるのはいかん、という感じだったな。

商売人を背景にした都市の連中だね。生産者というより消費者の立場に立つ連中だったな。

伊藤 藤波先生はそっちのほうには加担していないわけですか。

藤波 それぞれポスト、ポストで流儀があって、ようわかっている連中だけれど、国会対策委員長としては、総理大臣がやりたいと言っているんだから当然だろうな、という感じがあった。そんなに強くこっちは働きかけなかった。

伊藤 立場というのがあるんですね。

藤波 うん、立場だな。立場というのがあるんだ。けど反対派は強かった。塩谷君なんかは強かった。息子が出たかいな、塩谷立は出たか。

平松 通りました。浜松の塩谷の息子が今回当選したんです。

伊藤 結局、税制改革の問題で、党の税調が一九八八（昭和六十三）年一月に売上税を導入するという税制改革の基本方針をまとめるんですね。山中さんは税調の会長ですから、山中さんのリーダーシップですかね。

藤波 そうでしょうね。

伊藤 先生は同じ派閥だから、しょっちゅう山中さんには会ったりしているんでしょう。

藤波 いや、立場、立場だな。話し合いはしたけれど。しかし結局、決めたけれど実行できないんだ。

伊藤 山中さんというのはどういう方ですか。僕らもインタビューしたいな、と思っっているんですが。

藤波 やってください。

伊藤 難しい人ですか。

藤波 難しいだろうな。

伊藤 聞きにくいんだったら大変だな。

佐道 ポンポンと会話が進む方ですか。

藤波 ええ人や。

伊藤 いい人ですか。

藤波 うん。

伊藤 いい人だったらいいな。

佐道 いい人というのはいろいろな意味があるから(笑い)。

伊藤 基本的に藤波先生がいい人だといったら間違いないでしょう。

結局、間接税導入反対という声が上がってきて、三重県では社会党

と公明党が反対意見書を出すということで、先生もお立場上大変だっ

たのではないかと思うんですが。

藤波 いや、あまり考えなかったな。

武田 この時期のことを調べてみますと、三重県の自民党は態度が

未定なんです。「よくわからない」という回答でした。だから先

生にお聞きするのが一番いいかな、と思いついて。

伊藤 わからない、という態度だったんだらうね。

武田 そういう態度だったんでしょね。

伊藤 反対もできない、賛成もできない。

藤波 最後はしかし、総理のところに行きに行きました。それ

ははっきり覚えていて。「間接税関係は一切いかん」と言った。国

会に法案を出したろう。何日も通らんだ。原健三郎が議長で。昼

も夜もな。

伊藤 中曽根さんが「法案の修正には一切応じない」という非常に

強硬な姿勢を見せるわけですが、自民党の幹部の人たちが、修正も

やむを得ないんじゃないかという意見を出すわけですね。中曽根さ

んとしては、いったんやれと言って、腰砕けになるのはまずいとい

うことでしょうか。

藤波 そうでしょうね。

伊藤 この二月の時点では、もう法案が出ているわけでしょう。だ

から国対委員長としては、これをなんとか通さなければならぬ。

藤波 そう思ったけれど、通らん、通らん。なかなか通らん。最

後に竹下幹事長に、「わしは総理大臣のところに行ってくる」といっ

て、私は一人で衆議院の院内の執務室、総理がおるところに行つて、

「法案を通すのは無理だ。私は責任を負います。国会対策委員長が

責任を負うから、無理だ」と言った。「なぜ無理だ」と言うから、

「川というものは上から下へ流れるので、下から上へは流れません」

と言ったのを覚えておるわ。「そうか、わかった。駄目ということ

だな」「駄目っていうことだ、いかんということだ」ということで、

終わったんですな。終わったことは、覚えておるんや。

伊藤 その前に、「八七年三月に」岩手ショックというのがあるじゃ

ないですか。岩手の参議院選挙で、岩動「麓」さんが敗れる。社会

党にやられるんですね。これは売上税反対一本槍でやって、自民党

に勝った。これは大変だということだと思つてなんですが。

藤波 外から見てみると、自民党が負けて社会党が勝つたように思

うけれど、一つ選挙が終わったな、というぐらいのものだ、中にお

ると。そんなにショックのようなことではなかった。ああ、負けた

か、と思っただけだった。

伊藤 結局、原健三郎議長の裁定ということで決着をつけるんです

が、この段取りはどうするんですか。国対委員長がやるわけですか。

藤波 衆議院の事務総長、あの頃は誰だったか。久保田だったかな

「↓弥富啓之介」。自民党の国対委員長や議連の委員長と相談して。

議連の委員長は誰だったか「↓越智伊平」。

武田 あとで調べます。

伊藤 党の幹部の人たちと総理と、そのへんで最終的な決着をつけ

るためには幹部の会議を開くんでしょう。

藤波 会議は開かん。

伊藤 数人の人で決めるわけですか。

藤波 そう、決めて、降りてくるわけだ。

伊藤 例えば国対委員長が「これはどうも通りそうもない」と言うことは、かなり大きな決め手になるわけですね。

藤波 決め手になるわけだ。完全な決め手になるでしょう。

伊藤 これは廃案になるんだっけ。

武田 これは調べてみましたら、与野党の合意がなければ廃案というところで、一応衆議院、参議院を通過して、そのあと与野党の国対委員長会談で「合意はできません、廃案にします」ということで廃案になるんですね。

伊藤 なんとなく手続きとしてよくわからないですね。

武田 そうなんです。ここがよくわからなかったんですが。

伊藤 「藤波氏に」記憶ですか。

藤波 議連の委員長は誰かい。議連の委員長室だ。議長は座っておって、体がつつかどうか、小使は大丈夫か、ということだったので、ホッとしたりと思うな。

伊藤 缶詰にされて動けないときですか。

藤波 そうそう。

伊藤 この国会で、防衛費一％枠の突破が問題になっていて、防衛問題を優先するというところで、売上税は当て馬というか、それと取引になったのではないかという話もあるんですが、どうですか。

藤波 ないと思うなあ。

伊藤 何の法案を優先してやっていくかというのは、国対委員長がかなり大きな影響力を持つんでしょう。

藤波 と、思いますね。

伊藤 その国対委員長が先生のわけですから、どういう選択をされたかな、と思えますが。

藤波 これはいかんので、こっちをやるう、というようなことではなかった。

伊藤 とにかく売上税は通らない？

藤波 通らない。

伊藤 これは野党が反対しているというだけではなくて、与野党の中に反対論者がいるということですね。

藤波 そうそう、それが大きな理由だったね。だから国民は反対だ。伊藤 その与野党の議員たちも国対委員長に対して、「やめる、やめろ」と言ってくるわけですか。

藤波 立場があるから。それでも会合があって、誰と誰が出ておるかというのを見ればわかるな。ちょっと辛い、というぐらい言うてきたということではなかったな。

伊藤 直接にはあまり言っていないんですか。

藤波 ない。

伊藤 じゃあ、反対の会合を開いて、何人議員が集まったとか、そういう情報は来るわけですね。

藤波 そうそう。どんどん来るわけだ。

伊藤 場合によって、強行突破をしようと思ってもできない？

藤波 できない。できなかった。

伊藤 やったら欠席する人もいるかもしれない、ということですか。藤波 そういうこと。欠席よりも、血の雨が降るような空気だった。あのときの空気はすごかった。

伊藤 えらいときに国会対策委員長になっていますね。

藤波 ねえ。しょうがないわ。

伊藤 でもこの国対委員長の下に、副委員長がいっぱいいるわけでしょう。その連中が走り回ってくれたんでしょうが、その中にも反対はいるんですか。

藤波 国対にはいなかったと思うけれど、動かんのだな。全体が動

くか動かんかを見るのが国対委員長だからな。

伊藤 相当無理をしても通らない。

藤波 通らない。

武田 野党の反応はどうだったんですか。

藤波 野党はもう全然いかんな。

伊藤 話にもならないということですか。

藤波 話にもならん。

伊藤 国対委員長の会議があるでしょう。

藤波 話にもならん。

伊藤 藤波先生が一所懸命説得しても、全然話にもならんですか。

藤波 ならん。

伊藤 それで、しょうがない、廃案になってしまいうわけですね。

藤波 そうそう。

■新派閥の発足

伊藤 この年「八七年七月」に竹下派が経世会を立ち上げるということがあります。これは前にお伺いしたと思えますが、そういう状況はずっとわかっているものですか。やってる、やってる、ということですか。

藤波 いや、派閥というのは全体を睨むと同時に、派閥の中の話ですからね。だから派閥を離れると、そんな大きな問題じゃない。そんなに大きな問題だとは思わなかった。

伊藤 所詮、よその派の問題だということですか。

藤波 そうそう。

伊藤 でも竹下さんは藤波さんと非常に親しい間柄でしょう。でも派閥が別であれば――。

藤波 基本的にそうだな。大きな問題だけれど、大きな問題といっても、一人ひとりの政治家の問題だ。私も派閥を行ったり来たりしているから、派閥のきついことはよくわかるけれど、誰が行くんだ、小沢一郎が音頭を取ったのか、というぐらいのことだったな。そんなにどうっていうことはなかったな。結果としては、それで竹下や金丸が浮かんで、田中さんは駄目になってくるんだね。そうなると思わなかったな。

伊藤 派閥といえ、このときは田中派から竹下派が奪権するといえますか、そういう交替ですね。今度中曽根さんが議員になれなかったでしょう。そうすると、中曽根派はどうなるんですか。

藤波 亀井「静香」がやっていくんだ。亀井が会長だ。

伊藤 あれが中曽根派なんですか。

藤波 中曽根派というよりも、新しい派閥ですね。そう思うな。

伊藤 中曽根直系というのはいないんですか。

藤波 もうだんだんいなくなった。引退したからね。今度、谷洋一、堀之内「久男」、江藤「隆美」、藤波、中山正暉。中山は、息子が立候補する前に、辞めたと言いに行ったんだ。

小池 総裁選の時に辞めましたね。総裁選挙の前に、亀井さんを推さないということで、派閥を離脱されたんですね。それで今回出ないで、息子さんに替わった。

平松 息子さん「中山泰秀」はたしか、比例「近畿ブロック」で上がりましたね。

伊藤 そうすると中曽根派というものはもう存在しないんですか。

藤波 武藤嘉文ぐらいか。

平松 それぐらいですね。

伊藤 それは亀井派に行かなかったんですか。

小池 いえ、行ったんです。

平松 派閥の中にはいますが、ほとんど中の状態は亀井派だと言っ

ていいと思います。

伊藤 江藤さんは辞めたからね。途中で変な話をしますが、中曽根さんは今度辞めさせられたような感じですが、あの問題については先生、どんなふうにお考えですか。

藤波 中曽根康弘という人は書生さんだから、政治そのものが書生っぽいから、初めての経験の時はものすごく緊張するんだ。アメリカに行くにも何をやるにしても、初めての経験では緊張する。「あんた辞めろ」と言われたのは、小泉が初めてだった。あれは怒るぞ、と言ったら、怒った、怒った。怒るといっていったら、最後まで怒っていた。初めて、あんた辞めろ、と言われたから怒ったんだな。

伊藤 そうか、いままでそういうことを言われたことがないんだ(笑い)。

藤波 ないと思うんだ。

伊藤 中曽根さんはこれからどうなりますか。

藤波 いやあ、あんなものはもう誰も相手にせんわ。マスコミはどうか知らんよ。マスコミは知らんけれど、国会の中では誰も相手にせん。そういうもんだ。

伊藤 まったくそういうものですか。

藤波 まったくそういうものだ。

伊藤 議席がなかったらただの人になる。

藤波 ああ、そうだ。

佐道 議員バッジがついていれば、違ったわけですか。

藤波 違っていると思うな。誰も相手にせん。

伊藤 宮澤さんもそうですか。

藤波 そうそう。いままで、何かのことを大きな声で言うほど悪くなる立場だな。

伊藤 これはあとで話が出て来ますが、中曽根研、平和研、あれはどうなりますか。

藤波 やっていただくだけ。規模を小さくすればいい。

伊藤 規模は小さくしなければ駄目ですかね。

藤波 駄目ですね。そうなりますよ。

伊藤 現在、藤波先生は平和研に関わっているんですか。

藤波 理事をしている。

伊藤 それはちょっとあとでお話を伺います。

■中曽根総理の後継に竹下氏が指名される

伊藤 その前にまず竹下内閣ができるわけですね。竹下内閣ができるとき、中曽根さんが竹下さんを指名するときに、藤波さんは関わっているじゃないですか。

藤波 竹下内閣ができるとき、私は、首つって死んだ青木さんのところに電話をしたら、夜中に来いというもんで、夜中に行った。

伊藤 どこに、ですか。

藤波 竹下のところだ。

伊藤 青木さんというのは、青木伊平さんですね。

藤波 そう、首つって死んだ。それで、新聞記者も誰もおらんところ、内閣の人事のことについて相談してきた。それで、「おまえどうだ」というので、「わしはもう何もせんでもええ。中曽根派をまとめて一所懸命派閥をやっていくで、なにもええ。越智伊平を入れてくれ、建設大臣や」といって頼んできた。その通りになった。その理由は、いまだ道路公団は藤井「治芳」さんがんばっておるで、いかんけれど、四国へ初めて橋が架かるんで、四国の者が建設大臣をやっていると、四国の人が喜ぶで、というのが私が頼んだ理由だった。竹下さんはそれをどう思うか知らんけれど、言っておこうと思っ

て言ったら、そのようにしてくれた。だから初めての橋の渡り初め

のときは、越智建設大臣だった、よかった。

伊藤 それは竹下内閣の組閣の話ですね。竹下さんを中曽根さんが指名したというのはどうですか。あのときは候補者が三人いたわけですね。

藤波 ほとんど全部、中曽根さんの周りの人は安倍と言ったな。晋太郎が総理になると言っていたな。四元「義隆」さんとか、飯島清とか、中曽根の周りにはみんなそう言ったな。私だけは、「いやわからん、わからん。安倍と決まっておるわけじゃないし、わからんぞ」と言っていたんで、新聞記者は毎晩のように「社内」でいじめられるという。会議をやって、「社のみんなが」安倍内閣で打とう、というんだってな。「ちょっと待ってくれ、もう一人、藤波だけがウンと言わないので」といって、新聞記者が各社で言って、結局、竹下になったんだな。そんな覚えがあるな。

伊藤 中曽根さんの心境は、どういふことだとお考えでしたか。

藤波 天皇陛下のことが非常に気になっていたんだらう。昭和天皇さんを大事にするということだけだ。形の上では安倍さんだろうけれど、実際に面倒を見るのは竹下だろうな、という感じは持っていたと思うんだ。それで、私は竹下だと思っていたな。

伊藤 それは中曽根さんの顔色からですか。

藤波 そうです。いろいろなことで、外向いて頑張ってきた中曽根内閣のあとやで、内政をまとめていくのは、竹下のほうがいいやろう、という感じとか、いろいろな理由だな。最後に竹下と安倍と二人で話して決めるという場面があって、「竹下は」簡単に降りるものかという気がした。それは、竹下の父親が亡くなったときに、すまんけど葬式に行ってくれというもので、私は総理大臣の代わりに行った。官房長官の時かな。鳥根の飛行場に降りて、バスに乗ったけれど、バスに乗って行けども行けども竹下の家にたどり着かん。こんな山奥で、DDTとPTAと二つしか知らんという「所で」英

語の先生をしておったんだ。青年団をやっておったのはこんな山奥か。こんな山奥から来たら、竹下が総理大臣というものを前にして、安倍さん、あんたやってくれ、と言うわけはないと思ったな。事実そうだった。

伊藤 でも二人は一応仲良しということになってますね。

藤波 なってる。それでいい。人柄からいっても、人望からいっても、安倍晋太郎というのは強かったな。結局は中曽根さんも岸さんとの関係で折れて、安倍に譲るだろうとみんな思っていたからね。だから、「竹下」と書いてあったからびっくりしたんだらうね。宇野宗佑総理のところに行って、紙に書いたのを持って党本部に行っただ。

伊藤 それは党本部に行って開けるわけですか。

藤波 そうそう、宇野宗佑が幹事長だった。「竹下登」と書いてあったんだ。安倍晋太郎じゃなしにね。

佐道 中曽根さんは、岸さんのことを配慮しなければならぬ関係だったんですか。

藤波 中曽根さんは岸内閣の科学技術庁長官で初めて入閣したんだ。ものすごく岸さんのことを大事に思っていたね。

佐道 中曽根さんの周りでも、先生ぐらいですか、竹下さんだろうと言っていたのは。

藤波 周りでは、そうだと思うね。みんな安倍だったな。

伊藤 そうですか。前から先生は竹下さんと政治手法が同じだということをおっしゃっていましたが、竹下内閣ができたということは、藤波先生にとってはよかったです、ということですか。

藤波 よかった。

伊藤 竹下さんは「ふるさと創生」とか言われますが、ああいう感じはどうなんですか。

藤波 内政というと、ああいうことしかないんだらう。

伊藤 いいスローガンだとお考えでしたか。
藤波 いいか、どうか。ほかにないんだろう。

■中曽根派事務総長に就任

伊藤 竹下内閣のときですか、先生が中曽根派の事務総長になるのは。
藤波 そうです。竹下内閣になってからだね。

伊藤 いままで藤波先生のお話の中に、中曽根派の話はあまり出て来なかったんですね。閥務をそんなに一所懸命おやりになったことはたぶんなからうと思うんですが、なんで事務総長になられたんでしょうか。

藤波 どうって言うことはないけれど、私は渡辺美智雄と張り合っていたからね。「渡辺美智雄は」「藤波みたいなやつが官房長官やっているが、あんなものは辞めさせろ、おれがやらなければいかん」と、中曽根のところに行き来たんだからね。その程度の話なんです、こんなやつに「閥務を」やらしといたらいかな、ということだけ。ずいぶんやられた。野田毅が帰ってきて山崎派に入ったようなものや。みっともないなあ。全面降伏だよ。福岡「山崎拓」と熊本「野田」とで張り合っていたのね。

伊藤 この、派閥の事務総長というのは何をやるんですか。

藤波 私の場合は、派閥の中の面倒を見て、応援に行ったり、いろいろな相談をするんだけれど。激励会を東京でやるとか。

伊藤 中曽根派の事務所は当時はどこにあったんですか。

藤波 砂防の二階。

伊藤 砂防会館ですか、いまのところですか。

藤波 うん。中曽根派になってから、ほかの派との事務総長会議と

いうものを置いて、それを大事にしようとした。福田派というのは塩川正十郎がやっていた。

伊藤 初めて聞いた話だ。宏池会は――。

小池 加藤紘一かな。

伊藤 まだ加藤紘一じゃないだろう。

小池 宮澤の下ですからね。

武田 事務局長と事務総長は違うんですか。

平松 違います。

小池 事務局長というのは普通の人ですね。福島正光さんがやっている。

平松 事務局長は国会議員はやりません。

伊藤 大きな派閥といったら中曽根派、宏池会、福田派、竹下派。

竹下派は誰でしたか。

藤波 羽田孜か。

佐道 七奉行の一人ですね。

武田 あとは三木派。

藤波 三木派は、山持ち。選挙の度に山を売って、やっと後始末をすると言った。言うところだけだ。おれと一緒に。

平松 もう辞められましたか。

藤波 もう辞めた。おれと同期だ。

伊藤 それはどんなところで集まるんですか。

藤波 料理屋。

伊藤 やはり当番を決めて、やるんですか。

藤波 当番を決めて。

伊藤 言い出しっぱは誰ですか。

藤波 私。

武田 いまでも続いているんですか。

藤波 いや、もうやってないだろう。

伊藤 だいたい派閥自体が危ないぐらいだから。
藤波 三木派と中曽根派と福田派と、竹下派。

伊藤 それはやっぱり情報交換ですか。

藤波 情報交換ですね。いままではまったく交換なしにやっておったんだな。情報交換をして、党全体を見ていこうということだ。それまでは派閥の中だけ見ていたんだね。

伊藤 各派閥とも事務総長がおったわけですか。

藤波 おったわけだ。つくったわけだ。

伊藤 派閥の事務所を管理したりすることも、その役割なんですか。

藤波 それは事務局がおるで。

伊藤 事務局長がやるわけですか。

藤波 うん。

■事務総長の役割

伊藤 「関務」という言葉があるじゃないですか。あれは具体的に何だろうというも思うんですが。

藤波 何やかやの相談全部。所属する委員会の相談から、全部だ。

伊藤 ありとあらゆることですか。

平松 選挙に関してもあるんでしょう。

藤波 もちろん選挙もだ。

武田 事務総長が全体のとりまとめ役になるんですか。

藤波 そうそう。

伊藤 毎週ある派閥の会合の時にはどういう役割をするんですか。

藤波 これは派閥の長が直接、ですか。

藤波 挨拶をして、まとめていくだけだな。

伊藤 司会から何から全部、長がやるわけですか。

藤波 長がやる。

佐道 事務総長がおやりになるんですか。

藤波 事務総長はやらん。

伊藤 派閥の長がやるんですね。一切取り仕切るんだな。派閥の事務所の中に、事務総長の部屋もあるんですか。

藤波 あってもいいし、なくてもいいし。派閥で昼飯を食べに行くときに、事務総長というのは頭の中にあって、集まってくるときに、事務総長がおるんやから行こうかということになる。中曽根とか宮澤とか、看板が誰やと言うよりも、事務総長が誰だということで行くとか行かんということも決まるというぐらい、大きなウェイトを占めていた。

例えば今度、総裁選に立候補した藤井孝男の応援をした、船舶振興会の息子(平松 笹川「堯」ですか)笹川だ。いまでもよう忘れんけれど、予算委員にせいと言うんだな。で私は、「まだ一年生じゃないか。一年生が予算委員というのはないんだ、なれん」と言った。「もし、ようするんだったら、予算委員の欠席しているところへ、三回ぐらい続けて座っておれば、衆議院の事務局の予算委員会の担当の者が、君を委員として扱うようになるから、努力せい」と言った。言ってくるのを怒って、「そんな勝手なことばかり言っはいかん」という、それが事務総長の仕事だった。

伊藤 事務総長にいる頼み事もたくさんくるんですね。

藤波 来る、来る。金の話も女の話も、みんな来る。

佐道 じゃあ事務総長でいれば、派閥の中のことはほとんど全部わかりますね。

藤波 わかる。すごいよ。

武田 相談役みたいなものですね。

藤波 そうそう。

伊藤 じゃあ中曽根さんとは一心同体でやらなくてはならないですね。

藤波 ならないね。

伊藤 悪口なんて言っている暇はないわけですね。

藤波 ない、ない。

佐道 自民党全体で言えば、幹事長みたいなポストになるわけですか。

藤波 なるわけだな。自民党全体で言えば。

伊藤 派閥のお金は預からないんですか。

藤波 いるときは、使わなければしょうがないだろう。

伊藤 それはどこから出すんですか。

藤波 あちこち、もらいに行った。

伊藤 事務総長がもらいに行くんですか。

藤波 会長とね。中曽根さんの時は、前に言ったことがあるけれど、

桜内「義雄」さんと一緒に行ったのはよう覚えてるな。

武田 先生の前が桜内さんですか。

藤波 いや、会長だ。

伊藤 中曽根さんが総理の時は、会長が桜内さんなんですね。どういところに行くんですか。

藤波 後援者のところへ。

伊藤 いままで桜内さんの話は伺ったっけ。

小池 バッジの話を伺いましたね。

伊藤 桜内さんはどういう感じですか。

藤波 大人だった。

伊藤 人柄は穏やかなんですか。

藤波 穏やかだ。宝塚のファンでね。

佐道 何かイメージが――。

伊藤 同じ派閥ですから、長いおつき合いですか。

藤波 そうです。金をもらって、バッジが裏返っているもので、

「夕べは悪いところに行きましたな。誰に引張られたんですか。

バッジが裏返っていますよ」と言うたら、「馬鹿なことを言うな。悪いことがあるか、いいところに行ったんや。いい話や」と言った。

それはものすごく覚えてるな。そんな話をしながら、金をもらいに行ったな。「中曽根派だけでも、金をください」と言ってる。

伊藤 会長をやっていたら、そういう仕事をしなければならぬんです。中曽根さんはこのときは会長に復帰しますから、中曽根さんは自分でやるんですか。

藤波 そうだ。

伊藤 藤波さんに行ってきたということではなくて――。

藤波 ないね。

伊藤 そういうときに一緒に来いということでもないんですか。

藤波 ないね。

伊藤 事務総長が使うお金は、派閥の会計か何かを持っているわけですか。

藤波 うん。事務局長だね。

伊藤 その事務局長からお金を出すには、会長の了解が必要なんですか。

藤波 いやいや、事務総長だ。使う分はね。

伊藤 じゃあ、議員さんが、事務総長のところに来て、「ちょっとお金が欲しい」と言うこともあるんですか。

藤波 ある、ある、ある。

武田 自分で稼げとか（笑い）。

佐道 選挙の時にいくら渡すとか、そういうことも基本的に事務総長が取り仕切って決めるんですか。

藤波 それがいいと思うね。人によるんだ。

伊藤 でも中曽根さんは、事務総長がいようがいまいが、自分でど

んどんやる人じゃないですか。

藤波 それぞれだね。

伊藤 ちゃんとそういうことを重んじますか。
藤波 重んじる。

■中曽根派の後継、派閥と選挙

伊藤 中曽根さんが総理を辞めて、派閥の長になるでしょう。ということは、派閥の長が次の総理大臣候補ではなくなるわけですか。それとも中曽根さんは第二次内閣を作ろうと思って、会長に復帰するんですか。

藤波 それはないと思うね。

伊藤 あの頃から、派閥の会長がだんだん総理大臣候補じゃなくなってきたりしないですか。これはどういうことなんですかね。

藤波 一人前になるまでに、商売屋では丁稚奉公をして、だんだん修行して、のれんを分けるだろう。のれん分けをするようなものだな、派閥というのは。中曽根さんは政務次官をやったことがないし、委員長をやったことがない、ということはずいぶん言われた。事実やっとならんのや。まず政務次官をやって、自民党の中の部長というのがあるんだ、それをやって、委員長をやって、それで大臣になって、大臣をやっているあいだに党の三役の一つになって、いろいろな面で徳をつけていくな。一定のところまで行ったら、のれん分けをしてもらうわけだ。

伊藤 でもなかなかのれん分けが難しいから、竹下派のようにのれんを奪って行く人もいるじゃないですか。

藤波 そうそう。いろいろですね。

伊藤 中曽根派では、渡辺さんみたいに飛び出すとか。

藤波 うまいこといかんとね。

佐道 よく言われたのは、中曽根さんは総理を竹下さんに譲ってお

辞めになりましたが、機会があればまたやりたいと思っていたのではないか。

藤波 一般にもそう言われたけれど、私は、五年やったらもういいと思っていたと思うな。そのままずっと来た。中曽根さんが総理大臣を狙うか、ほかの派閥でもどうでもいい人がなったりしておった。「中曽根さんは派閥の」会長だけれど、総理大臣をやることはないと思った。政治の世界の生き方が変わってきたから、派閥もそうなんだ。

伊藤 そうすると中曽根派の次の総理候補として、中で競い合うことになるわけですか。

藤波 総理大臣候補としてはそうだね。

佐道 派閥の後継者ということですね。

藤波 そうそう。

佐道 中曽根さんは総理をお辞めになったわけだから、会長になるとしても、中曽根さん自身は「総理候補に」ならないわけですから、中曽根さんの後継者をいずれかついで、ということになるわけですね。

藤波 なる。

佐道 後継者争いですね。

藤波 そのときに、中曽根さんは名誉会長になる。そういうものだと思います。みんなそう思っていたんだらう。

佐道 そういう雰囲気だったんですね。

藤波 うん。

伊藤 次の会長候補になるような人々が複数いるわけでしょう。

藤波 そう。

伊藤 藤波先生もその一人かもしれませぬけれど。

藤波 はい。

伊藤 実際に竹下内閣のあと、宇野さんがなるわけですが、宇野さ

んもその一人だったわけですか。

藤波 いや、派ではそんなふうに見ていなかったな。派では渡辺美智雄と私だけだったな。

伊藤 そうですか。だから藤波先生が事務総長になったというのは、そういう意味で大きいんですね。

藤波 大きい、大きい。内閣官房長官よりも大きいんだ。

佐道 しばらく閣務に専念するというのが大事なんですね。

藤波 そうそう。

伊藤 ときどき閣務に専念するということをいろいろな人が言いますが、それはどういうことなのかな、といつも思っていたんですけど。

藤波 そういう意味だ。

伊藤 中曽根派には機関誌がありましたか。

藤波 いろいろなところで発表している。

伊藤 機関誌はありましたか。

藤波 ない、ない。「青雲」とか、そんなものはないな。

平松 私はほとんどタッチしてなかったですから。

佐道 中曽根派は正式名称はなんというんですか。

小池 いまは志帥会ですね。

武田 なんとか研究所ですか。

藤波 政策科学研究所、政科研。

武田 じゃあ「政科」とかいう機関誌になるんですかね。

伊藤 機関誌はあったんですか。竹下派の機関誌は「創政」ですね。

武田 途中から「経世」になりますね。

伊藤 池田派以来のあの流れもたしか機関誌があったと思うんですね。

小池 「宏池」ですね。

伊藤 中曽根派は機関誌を出していなかったのかな。

平松 ないこともないでしょうけれどね。何かしらあると思うんですが。

伊藤 藤波先生は、ご自分に関しては、一貫して「ふじなみレポート」ですか。

藤波 そうです。

平松 月に一回、ずっと出しています。

伊藤 派閥に「機関誌がない」というのも変だな。中曽根派というのは、国会議員だけの派閥なんですか。

藤波 そうそう。伊藤 中曽根派の影響下にある県会議員とか、そういう人たちは——。

藤波 都会議員にはいるね。

伊藤 都会議員の中には中曽根派という人がいるんですか。

藤波 あった、あった。

伊藤 三重では——。

藤波 それはいいない。

伊藤 東京だけ別ですか。

藤波 うん。

伊藤 そういう人たちも、派閥の会議には来るんですか。

藤波 いや、来ないね。総裁選挙の時だけだ。

佐道 三重になると、中曽根派というのではなくて、藤波派ですね。

藤波 そうやるね。

伊藤 僕はてっきり機関誌みたいなものがあると思いましたが。

平松 ないこともないでしょうけれどね。選挙をしたいと、そこに所属しているという話が多いようですね。次の参議院に出るので、

ここでお願いしたい、ということはあるようですね。

武田 次の選挙を考えて、ということですね。

佐道 派閥の中に、事務総長のほかに国会議員の方がつく役職とい

うのはあるんですか。

伊藤

佐道

伊藤

伊藤

藤波 あることになっていてるけれど、大して意味がないな。

小池 よく代行がきますね。事務総長代行というような形で。

伊藤 藤波先生の代行はいましたか。

藤波 いない、いない。

武田 いろいろなお仕事は、事務局の人とやるわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 あの頃は中曽根派もかなり大きかったですよ。

藤波 大きかったなあ。

小池 六十五名ぐらいですかね。

佐道 次の選挙の時に、どういう新人を出そうとか、そういうこともやられるわけですね。

藤波 そうそう。

伊藤 自分を売り込みに来る人も、事務総長のところに来るんですか。

藤波 そうそう。

伊藤 今度立候補したいけれど、中曽根派で応援してくれませんかとか。

藤波 そう、来るわけだな。

伊藤 結構いろいろな人に対応しなければなりませんね。

藤波 そうです。

伊藤 お金のこともあるだろうし。

藤波 お金のこともある。

小池 そういうときも、総裁派閥というと、人がいっぱい来るということになるんですか。例えばこの時点では、中曽根内閣が終わって竹下内閣ができたんですが、主流派じゃないですか。そういうときには新人の方がたくさん来て、そうでないときには人は来ないという感じなんですか。今回の森派みたいにたくさん来るとか。

藤波 そうだね。

伊藤 急に森派がいっぱいになりましたね。

佐道 森派だけ太った。

平松 勧誘がすごいです。

武田 勧誘もあるんですか。

平松 取り合いみたいですよ。

伊藤 ああ、当選してきた人間を、ですか。

平松 ウチが応援したとか、誰の関係だとか。

小池 ああ、それはありますね。広島だから名前を言わなくてもわかってしまいますが。

平松 今回の選挙でも代わりに応援してこいといって。

藤波 中川秀直だろう。

小池 中川秀直ですか、森派ですね。

平松 尾身と違いますが。

藤波 尾身だ。

小池 彼はもともと新自由クラブですから。

平松 すごかったですよ、この前の伊勢の選挙は。尾身幸次は来るわ、森喜朗はじきじきに来るわ。「自派閥に」入れたくてしかたないみたいですね。

小池 三ツ矢さんはどの派閥に入るんですか。

平松 決めてないと言っているんですけど。もともと行く気がないんですよ。

伊藤 「平松氏に」あなたは三重に行っていたんですか。

平松 僕が行っていたんです。

小池 でも国土交通省だから、亀井さんなんじゃないですか。

武田 藤波先生とも関係がないわけではないですね。

平松 運輸系なんです、あの人は。

小池 航空関係ですね。

伊藤 いろいろなつき合い、いろいろなコネで接触があるんですね。

平松 いろいろところで接触があるみたいですね。

伊藤 逆に議員さんなり議員候補者なりが、派閥のほうに接触してくるといふこともあるでしょう。

平松 当然そうです。そのほうが多いんじゃないですか。何もなしで、ポンと出られるほうが珍しいですから。

■安全保障調査会会長となる

伊藤 中曽根派の事務総長と並行して、自民党の安全保障調査会の会長になれるわけですか。

藤波 はい。

伊藤 これは、どういうわけでなられたんですか。

藤波 自分で立候補した、おれに安全保障をやらせてくれと。

伊藤 そういうことってあるんですか。

藤波 あるある。

伊藤 誰のところに行くわけですか。

藤波 人に言えばいい。

伊藤 竹下さんにでも言うんですか。

藤波 そうそう。

伊藤 やっぱり安全保障の問題をやりたいと思われたんですか。

藤波 やりたい。それで週に一回ずつ勉強会をやったんだ。田中角

栄さんが日本列島の改革をやったときに、事務局長は国土庁の――

(武田 下河辺)、下河辺淳で、角栄さんが日本列島改造論をずっと

一年間やった。角栄さんは何も言わんと、毎回来て、座っておった。

私はまだ一年生だったが、あれは勉強になった。ものすごく勉強に

なったもので、安全保障でそれをやろうと思って、勉強会をやった。

そのときの事務局長は、今度当選してきた松木と、防衛施設庁をやっ

た人、ど忘れしたが、それが事務局をやった。大臣に反抗して名前が出た男がいるだろう(佐道 宝珠山さん)。ああ、宝珠山「昇」だ。宝珠山が事務局をやってくれた。誰かの悪口を言うただろう。

佐道 ええ、長官がバカだと言って――。

藤波 そう、宝珠山。松木と宝珠山が事務局をやって、毎週一回ず

つ定例的に日を決めて、そこに必ず違う講師を呼んで、月に四回、

五十人ぐらいの講師で、「国の安全保障」と称して勉強会をやった。

毎週やった。

伊藤 それは記録がありますか。

藤波 自民党の本部に行ったらあるよ。

佐道 それはぜひ欲しいな。

藤波 なんにも言わんで、わしは黙って座って聞いておったんだ。

毎週。

伊藤 呼んだ講師の中で、印象的な、記憶に残っている人はいます

か。

藤波 全部だ。安全保障で物が言えるようなやつはみんな連れて来

た。大学の先生とかね。

武田 このころだと誰でしょうね。高坂「正堯」さんとか――。

佐道 高坂さんとか、永井「陽之助」さんとか、佐藤「誠三郎」先

生とか、いろいろいらっしやるでしょうね。大学の先生とか、評論

家とか、ジャーナリストとか、ですね。

伊藤 防衛庁のOBもいるでしょう。

藤波 いるいる。

伊藤 外国の人は。

藤波 最後にまとめて、西武のプリンスホテルでやったんだ。セミ

ナーと称してね。そのときに手紙を出したら、プリマコフが来てく

れた。ロシアから来てくれた。アメリカは誰だったか。

武田 アメリカはイクレ前国防省次官、フランスからルルーシュ、

イギリスからハント国際戦略研究所副会長。

佐道 「日本は」佐瀬「昌盛」さん。

伊藤 これは一年間ですか。

藤波 一年間やった。最後にそのシンポジウムをやったんだ。プリマコフはゴルバチョフの弟子で、冷戦が終わって、ゴルバチョフが新しい方向を打ち出すというときだ。それがわかからんで、それを聞け、と言うんだけれど、北方領土返せ、とそればかりだ。法眼晋作をはじめとしてね。「質問」と言って立って、口を開くと、日本人は北方領土の問題だ。アホだなあ。

渡辺美智雄は政調会長だ。一銭も出さないんだ。私が会長だものだから。自分で自腹を切って、全部やった。五百万ぐらい出したな、あのときは。

伊藤 自分のお金ですか。

藤波 そう、自分のお金で。

佐道 政調会長がお金を出さないというのは(笑い)。

藤波 金いらん、というもので、いや、金いらんっていうことはないよ、いるよ。世界から呼ぶから飛行機代はあるし、日本で滞在中にも飯を食わさなければいかん、ホテルに泊めなければいかん。金はあるわい。全部切ってきた。内緒の話や。ちょっと悪い話だ。

伊藤 その勉強会は、安全保障調査会とは別なんですか。

藤波 いや、一緒。

伊藤 安全保障調査会の研究会なんですか。

藤波 そうそう、勉強会。

佐道 自民党の安全保障調査会がそんなに勉強会をやったというのは、六〇年代の安保の改定のとき以来じゃないですか。

藤波 研究は初めからしないで、北方領土だ。馬鹿な話だと思ってね。外務省っていうのは馬鹿ばかりおるわ、と思った。鈴木宗男がわかっておって、北方領土を返せと言って釣ったんだ。

武田 自民党の中で、この勉強会に参加された方はどういう方なんですか。

藤波 誰も来んで、わし一人のときもあったな。「会長、一人ですか、今日は」といって、「いやあ、秘書さんがみんな来とるで」と言った。秘書がきているんだね。資料が欲しくて。

佐道 国防族と言われる方々がいらっしやいますね。その方々は、安全保障調査会のメンバーになっておられる方が多いと思うんですが、そういう勉強会にはあまりいらっしやっていないんですか。

藤波 四、五人はおったな、熱心なやつが。誰がおったかな。

伊藤 それはさっきの記事の中に出ていませんか。

武田 出て来ないんです。「自民党史」も中曽根内閣までだから、調べられないんです。党に行かないとわからないですね。

伊藤 その記録を見たいので、自民党の係の人に紹介してくださいませんか。

藤波 「平松氏を見て」探しに行くだろう。

伊藤 では平松さんについてもらいます。

佐道 それはぜひ拝見したい。

■防衛費増額に尽力

伊藤 それから昭和六十三年度の防衛関連で、かなり増額になるわけですが、これには先生はだいぶ活躍されたという記事があります。

武田 竹下さんが先生によく根回ししてくれとお願したという記事があるんですね。

伊藤 それは本当ですか。

藤波 本当だと思うね。

伊藤 先生は文教族で、国防族とは一度も聞いたことがないけれ

ど。

藤波 そのときは安全保障の調査会長としてやったな。文教はずつとあとあとまで、こんなものでいいですか、と「予算の査定が」終わってから主計官が来ておった。官房長官をやっておるときも来ておったな。

伊藤 藤波さんのインタビュが今日あるんだ、と言ったら、ぼくのところの吉村「融」学長が、「ああ、木田「宏」さんを次官にしたのは藤波さんだぞ」と言っていました（笑い）。

藤波 よう知っておるね（一同笑い）。

伊藤 「聞いてみる」とか言っていました（笑い）。

藤波 あおときは、宮内庁に行った「安嶋」弥がいた。

伊藤 競争者があったんでしょう。それを藤波さんがひっくり返したんだ、と聞いていました。

小池 だいたい初中局から「次官に」なるのが普通で、大学局長、学術国際局長からは普通はならないですね。

伊藤 だから僕の頭の中では、藤波さん「文教族」でしたが、突然国防族になったか、という感じですが。

佐道 これは文教をベースに内政をやってこられたわけですね。そして労働大臣も務めて、官房長官もお務めになった。それで派閥の後継争いと同時に、外交・安全保障を勉強して、その先のことを考えていらしたんですね。

藤波 中曽根内閣のあとの内閣だから、防衛問題をちゃんとやってくれよ、と言ったのを覚えておるわ。

伊藤 誰が、ですか。

藤波 私が。

伊藤 ああ、竹下さんに言ったんですね。

藤波 うん。竹下内閣の大蔵大臣だ。

武田 宮澤ですね。先生は特に防衛問題についての方針はあったん

ですか。

藤波 私は米ソの対立は間違いないしに、ゴルバチョフとプリマコフが変えるな、と思ったんだ。そういうつもりでセミナーを開いたら、北方領土のことばかりだ。日本はいかんなと思ったよ。それははっきり覚えてるな。

伊藤 しかし防衛予算を増やすということを一所懸命おやりになるのは、どういうことですか。いちおう米ソ対立が緩和されて、世界が比較的穏やかになるかもしれない。

藤波 かもしれない。だけど陣営としてではなくて、一つ一つの国が大事になってくる。だから専守防衛のままでもいいから、専守防衛で国をしっかり守るように努力する、という話をしたな。

伊藤 要するに専守防衛のための武装を強化しなければいかん、ということですか。

藤波 そうそう。

佐道 この防衛費増について、対米配慮をしたという言い方があるんですが、

藤波 対米配慮なんて、そんなことはなかったな。

佐道 この時期なんです、中曽根さんのときに一度決着がついたはずのFX問題が、アメリカ議会までひっくり返って、また大変大きな問題になった時期なんです。これは日本にも、なんでアメリカに日本の技術をやらなければいけないんだという議論もあったと思うんです。これは安全保障調査会の中でも議論になったのではないかなと思うんですが、ご記憶ございますか。

伊藤 要するに国産化の巻き返しですね。

藤波 大して問題にならないな。覚えてないな。

伊藤 この安全保障調査会は、さっきのお話だと、一年間だけ研究会をやったということですが、そのあとはやらないんですか。

藤波 やらないな。

武田 仕上げがこのシンポジウムということになるんですか。
藤波 うん。仕上げだ。

武田 このあいだに世界平和研究所ができるんですね。

伊藤 世界平和研の設立には先生は関わっているんですか。

藤波 関わっていることになってはいるけれど、渡辺秀央が主にやっていた。私や後藤田「正晴」の意見を聞いてね。後藤田も理事になっておる。渡辺秀央もなっている。

佐道 つまり中曽根派だけではなくて、ほかの派閥の協力も得て、ということですね。

藤波 そうそう。

武田 先生がやっていた安保調査会とは別のものとしてできるわけですか。

藤波 そうそう。

伊藤 関係ないんですか。

藤波 関係ない。

佐道 これをやるう、つくろうというのは中曽根さんの意志ですか。

藤波 そうです。

武田 逆にこの安全保障調査会には中曽根さんは全然タッチしないで、先生が纏められるという形ですか。

藤波 そう。自民党に聞いてみたらいい。村川「二郎」は死んだし。

伊藤 誰か事務局の人を紹介してください。このときの勉強会の記録が残っているかどうか。

藤波 あるはずだ。ウチに印刷ものがあつたよ。

武田 印刷されたんですか。毎回の勉強会の――。

藤波 あるはずや。

佐道 研究会の運営で、先生を助けられたのは、先ほどお名前が出た宝珠山さんとか、なんですな。

武田 防衛庁の方で、ほかに関係された方はいらっしゃるんですか。

防衛庁とは連絡をとりながらやるという形ですか。

藤波 やった。

佐道 それが宝珠山さんなんでしょう。

武田 宝珠山さんが窓口になってやった、ということですか。

藤波 そうそう。西広「整輝」という事務次官がおつたな。あいつの時代だったな。

佐道 そうですね。西広次官ですね。

伊藤 じゃあ西広さんなんかも非常に協力したわけですか。

藤波 そうそう。

■リクルート事件のこと

伊藤 ちょっと厄介な問題に入りますが、昭和六十三年「六月」にリクルートの件が川崎で問題になり始めるんですね。やがて中曽根さん、安倍さん、宮澤さん、みんな関わりが言われるわけです。

そのうち、藤波先生の名前もあがってくるということですが、そもそもこのリクルートの江副「浩正」さんとの関係は、かなり古いんですか。

藤波 古い。牛尾治朗さんが中に入って、私の後援会の一つに江副さんが入ってくれたんだ。なんていう研究会だったか。牛尾治朗や劇団四季のあれが入っていた。

佐道 浅利「慶太」ですか。

平松 細かい会がいっぱいあったんですね。

伊藤 江副さんというのはどういう感じの方ですか。

藤波 一生終わったね。

伊藤 初対面の感じはどうでしたか。

藤波 キョトンとして、頭がいいのか悪いのかわからんという感じ

だね。

伊藤 でも、いい印象ではあったんですか。

藤波 そうそう。

佐道 「江副氏は」さざなみ会に「加入されるんですね」。

藤波 そうそう、さざなみ会。

佐道 それが昭和五十九年三月ですね。

伊藤 実際にいろいろなことがあったのは、そのもっと前だから、

だいぶ前から知り合っておられるんですね。

藤波 そうですね。

伊藤 それは労働大臣の時代ですか。もっと前ですか。

藤波 古いんだ。

伊藤 先生がリクルートのシンポジウムで講演なさったのが昭和五

十五年ですから。

川越 それは労働大臣時代ですね。

藤波 その前からか。覚えてないな。シンポジウムに行ったかな。

川越 江副さんの名義でさざなみ会に加入したのは昭和五十九年と、

朝日新聞ではなっているんですが。

平松 牛尾治朗さんの関係ですから、古いことは間違いないでしょ

うね。

伊藤 牛尾さんも先生の支持者なんでしょう。

藤波 そうです。

伊藤 牛尾さん自身も江副さんとは非常に親しかったので、あとで

引っかかるわけですね。なんで引っかかったのかよくわかりませ

けれど。江副さんは好ましい人間とごらんになっていたわけでしょ

う。

藤波 ええ、そうです。

伊藤 多くの人たちがそういうふうに見ていたわけですか。

藤波 そう思うな。

伊藤 リクルートはあの頃、儲かっていたんでしょ。

武田 七〇年代の終わりぐらいですから、どうなんでしょね。

伊藤 儲かっていたんじゃないのかな。

佐道 新興の企業で、江副さん自身もかなりマスコミの注目を浴び

続けていましたから。

伊藤 結局これは、労働省と非常に関わりがあることですね。言っ

てみれば、職業紹介法と関わるような仕事ですね。だから官でもや

ることを民でもできるという、郵便小包とか、そういうのと同じこ

とだね。ヤマト運輸なんかが伸してきたのと同じことじゃないでしょ

うか。だから新しい事業として非常に注目されていたと思うんで

ね。

いろいろ言われていることによれば、リクルート社が、藤波先生

の出版記念パーティのパーティ券をたくさん買ったとか、そういう

ことが年度の裁判でもずいぶん言われたんでしょう。

藤波 なあ。さざなみ会の会費ぐらいいは出しているだろうけれど、

株やそんなものは私は知らなかった。徳田「英治」という秘書がみ

んなやっていた。

伊藤 でも普通、そういうものは秘書が扱うぐらいのものでしょ。

藤波 そうです。

武田 全然問題ないですね。

伊藤 だからみんなの名前がワーツとあがったというのは、政治献

金だということですね。それがいいことですかね。それがいい日、

江副からお金をもらうのは悪いやつだということになった。

藤波 すごいねえ。

平松 最近、株を受け取っておるといって、すぐ週刊誌に載ります

ね。新しい企業が株式を発行するときに、知り合いとか有名人に渡

すと、ちよっとの記事ですが、すぐ載りますね。問題はないでしょ

うけれどね。

伊藤 株を持ってよ、というのはよくある話でしょう。

藤波 早稲田の法学部を出て、検事になっておるのがおりましたな。それがTBR「ビル」に調べに来た。一番早かった。調べに来てどうのこうの言うて、出て行く。

私が選挙区に行つて、伊勢から帰ってくるのを待って、TBRに行つて、検事の調べを受けた。結婚式があるので、おれは結婚式に行くと言つて、黒い服を着て、白いネクタイを締めて、靖国神社に参つて結婚式に行くということで、先に私がTBRの部屋から出た。そこに私を調べた検事がおつて、私よりあとから出る。そのときに、「あんたが藤波の部屋から出て来たら、藤波が取り調べを受けた」というのが新聞記者にわかる。そんな馬鹿なことないぞ」と、今度当選してくる松木というのが言うたら、「わからないようにして出るわ」と言つて、自動車のトランクに入つて出たんだ。

それが私の事件が終わつてから新潟地検に行つて、新潟県の知事を取り調べるときに、いつ検事が入つたんだろうというときに、どうも自動車のトランクに入つて知事に尋問しに行ったようだ。それで覚えてるんだ。名前は忘れたな。

何回も公明党の池田克也に来てもらうことにしたというもんで、「おれは悪いことをしたらへんのに、池田克也さんと一緒に検察庁に出かけなければならんなんて、馬鹿なことあるか」といって、中野の区検に出て、調べられたんだ。そのときも、ヘリコプターで飛んで、今どこを走っていますというようなことばかり言つて。ああ、時代だなあ、と思つた。「池田と違う、何も人に悪いことをしてないのに、検察の言うこと聞く必要ない」と電話で言い切つたもんで、じゃあ中野に来てくださいという。その頃は、五島昇のキャピトル東急に泊まつておつた。中野に行くときに、ようけ新聞記者がキャピトルにやってきました。そのときにキャピトルの従業員がみんな私を守ってくれた。あれはえらいものだった。そんなことがあつた。

悪の権化みたいにな、ある日突然、中曾根はけしからん、藤波もけしからんと右翼がマイクでやり始めたものだから、こんな馬鹿なことあるかな、と思つた。

その頃には、ずっと最高検察会議を何回も開いておるのやけれど、リクルートの問題で藤波はどうもやられそうだが、という話になつたときに、何人もの人が「藤波はやられそうだけれど、藤波をやつても、結局公判は維持できないという話があるので、やらんだらう」と言つておつたんだ。ああ結構だな、そんな馬鹿なことあるか、と思つた。それでやられたんだな。馬鹿なことをやると思つたけれど。そういうようなことだった。

そのときに、山岡「賢次」というのは民主党か「自由党↓民主党」。藤尾正行のところ「と同じ選挙区：旧栃木二区」の。あれが法務政務次官をやつておつて、「国会対策委員長をやつて、裁判所関係で舵をとれるのは藤波さんしかおらんで、藤波さんに頼んでこい」と山岡が来て、法務省の中と相談して、私が法務問題の議員連盟の会長になつたんだ。府中の刑務所なんかを見に行こうと言つて、行ったのを覚えてるな。法務省のために一所懸命働こうと思うものを縛つてしまつて、馬鹿な話や。アホやな、本当に。だけどまあ、それはしょうがないな。

初めはそんな空気だったので、絶対大丈夫だと思つておつたら、だんだん自民党の中で一人だけやつつけられるやつがいるんだ、という。それだったら、全部自分で引き受けて、国の鎮魂がそれでできればいいわ、と思つた。自民党は金が強すぎて、自民党というよごれておる、いかん、というような空気で政治が動いておるで、いっそのこと――江副がそうやつたとは思わんけれど、江副が持つてくるよといつて、国のためだと思つて政治資金を出した話だけれど、竹下も安倍も宮澤も、みんなやつておるというのなら、そんなのは全部自分一身で拭えばいい。これが国の鎮魂になるな、という

気がしたもので自分で腹を決めて、しょうがないな、と思ったんやな。

中野区検で私がやられているときに、二日目かな、全部伊勢のほうの選挙区の事務所の家宅搜索を受けたというもんで、「馬鹿なことあるか！」と検事に怒ったのを覚えておるわ。その検事が、早稲田を出た検事だった。「おれを調べてもどうにもならんよ。調べたらいかん。関係のない選挙区の自宅の家宅搜索をして何も無い。嫌がらせにしか過ぎんやないか」と言うたな。そういう話が入ってきたので、私が怒ったのを覚えておるわ。

伊藤 ちょっとここで切りましょうか。リクルート問題で、いま先生がおっしゃったように、自民党の鎮魂か知りませんが、自民党を代表してかぶったという形になったわけですが、もうちょっとそのへんのことを、藤波先生の立場でいろいろお話しいただければと思いますので。

藤波 はい、そうします。

伊藤 次回またお願いいたします。

佐道 先生は東京ではホテル住まいになられるわけですか。

藤波 増上寺の鐘がボーンと鳴るのがいいわ。

佐道 どちらのホテルですか。

藤波 東京プリンス。増上寺の横。いいねえ、鐘の音を聞いて。

大寺の 大梵鐘に 小鳥来る

伊藤 藤波先生は神道かと思ったら、仏教もいいんですね。

佐道 「藤波氏の持っている本を指して」それは『奥の細道』ですか。また読み返しておられるわけですか。

藤波 ええ、読み返している。

武田 いまの句は、先生の句ですか。

藤波 うん。

佐道 お泊まりになってつくられたんですか。

藤波 今日つくったんや。

川越 去年のインタビューのときに、今年中に『伊勢湾』というタイトルの句集をおだしになるということでしたが。

藤波 十七日の夜、六時半から「出版記念を兼ねて」「ご苦労さんの会」をやりませう。十五日には伊勢でやる。要するにお別れ会や。

「お別れ会というのは絶対反対」と言うものがおるので、絶対いやだということもんで、「ご苦労さんの会」ということにした。やっと執行猶予が解けて、何の罪もないのと一緒だ。裁判がなかったのと一緒で、これでいいわと思ったら、物がようけ言えんようになった。神さんは、よう考えておるわ。なあ。ありがとうございます。一同 どうもありがとうございます。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

第14回

日時：2004年10月7日

11:00～16:00

於：伊勢市 藤波孝生邸

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

武田 知己 (大東文化大学専任講師)

川越 美穂 (政策研究大学院大学RA)

平松 大輔 (衆議院議員秘書・元藤波孝生氏秘書)

藤波 俊也 (藤屋窓月堂代表取締役 孝生氏弟御)

藤波 邦江 (藤波孝生氏夫人)

記録者：丹羽清隆

※二〇〇三年一月以後、藤波孝生氏病氣療養のため、インタビューを中断していたが、これは第十三回までを補足するため、藤波氏の自宅にて実施したインタビューである。藤波氏が発言困難のため、邦江夫人、弟御の俊也氏にご出席いただき、藤波氏の発言の補足をお願いした。したがって、藤波氏の発言は、邦江氏、俊也氏、元秘書の平松氏、またはインタビューが、いわば通訳のように、藤波氏の発言を繰り返して確認をとっている。その確認（通訳）部分は藤波氏の発言と一体のものと考え、記録していない。ただし確認部分分が、藤波氏の発言の解釈であったり、補足である場合には記録している。

発言者名に「藤波」とあるのは藤波孝生氏。藤波俊也氏は「俊也」、藤波邦江氏は「邦江」と表示した。〔記録者・編者〕

■リクルート事件の公判

伊藤 藤波先生、よろしいですか。

藤波 どうぞ。

伊藤 リクルート事件についてはこの前少しお話いただきましたが、われわれがよくわからないことは、リクルート事件というのは藤波先生にとってどういうことであったのか、ということ。それを端的にお話になってくださいませんか。よく、藤波さんは身代わりだとか、いろいろ言われますが、今度の平成研の一億円事件〔日本歯科医師連盟（日歯連）から自民党旧橋本派の政治団体・平成研究会への一億円ヤミ献金事件〕も、結局橋本「龍太郎」さんではなくて、村岡兼造さんが起訴されるということでした。リクルートについて、先生、何かおっしゃることがございましたら、お話しください。

藤波 中曽根政治が終わって、中曽根時代に何があったかということ、いつも考えていた。本屋にも行った。それで経済の話勉強しようと思った。「良い本が」なかった。何もないという。時代の風潮で、バブルが崩壊したときによう考えた。中曽根時代に打つべき手かなかったのかということ考えた。それが大事だと思って考えた。考えて、考えた。ええ案は出なかった。

中曽根は嫌いだという人が多かった。嫌いなら嫌いでいい、中曽根を好きになるのは国のためやと言った。「中曽根嫌いの人達は」藤波の言う通りだから、俺はだまっておるから、と言ってくれた。

「中曽根時代に」打つべき手がなかったかということ「考えた」。それ「を考えるの」が一番大事なことだと思った。そうしたらリクルート事件が起こってきた。

伊藤 リクルート事件が問題になり始めてから、藤波先生の名前が出てくるまで、ずいぶん時間がありますね。

藤波 あるある。

邦江 だいぶ長いこと、ありましたね。

藤波 藤波をやる「起訴する」のはいいけれど、藤波をやっても公判が維持できないということをやった。検察の幹部会で。コミッションが。

伊藤 野球のコミッションナーですか。

藤波 法務省上がりだ。

武田 根来「泰周」さんですね。

藤波 そういうことを言うとのを聞いた。小沢一郎の子分の当時の法務政務次官が、根来さんと一緒に私の部屋に来て、会長をやれと言った。

伊藤 何の会長ですか。

藤波 法務を応援する議員連盟の会長をやれと言った。

武田 それはいつのことですか。

平松 根来さんからそういう話が出て来たあとの話ですね。

藤波 いやいや、前。

伊藤 それで、それは引き受けたんですか。

藤波 「引き」受けた。府中へも見に行った。

伊藤 刑務所ですか。

藤波 法務と検察の応援団だ。予算を取ろうということだった。

伊藤 取った予算で「藤波氏が」やられたのか。

藤波 そうそう。私の関心は、中曾根時代に国のためにやることはなかったか、ということだ。それを考えた。

金や株や、ようけ、その話が出て来たときに、公明党の——。なんとかカツヤだ。

平松 名前が出て、さっさと辞めた人ですね。

川越 池田克也ですか。

藤波 そうそう。自民党からも誰か出せという話があって、藤波の名前が出て来た。俺は事實は知らんけれども、中曾根時代に起こったことだから、俺が相手になってやる、さあ来い、と俺は思った。

伊藤 そんな自信があったんですか。

藤波 うん。さあ、来いと思った。問題は誰も、上も下も傷つかんことが一番いい。そんな馬鹿なこと、俺一人で十分や、という思いがあった。だから、さあ、来いという気持ちだった。

伊藤 でも初めの頃、いろいろな人の名前が出て来て、藤波さんの名前はほとんど出て来なかったじゃないですか。

武田 中曾根さんが出て、宮澤さんが出て、安倍さんの名前も出ました。

伊藤 次から次へといろいろな人の名前が出てくるけれど、藤波さんの名前は出て来ない。でも藤波さん自身は、自分は危ないかなとは思わなかったんですか。

藤波 思わなかったな。

伊藤 じゃあ、相手にしてやるというときは、自信があったんですね。

藤波 そうそう。

伊藤 それじゃあ、どこでやられちゃったんでしょうね。

藤波 わからんな。

一審、二審、百五十一回——。

伊藤 公判の回数ですね。

藤波 うん。毎回遅刻なし、皆出席。

伊藤 自分で出たんですね。

邦江 そうそう、自分で全部行きました。遅刻もなし。

藤波 それでわかった。取り調べの責任者がああ言った、こう言ったで、「二審の」裁判長はわかったはずや。俺も初めてわかった。

武田 公判で何か話があったんですね。

邦江 百五十一回「公判に」出た中で、いろいろな人が話をして、誰がこう言うと思ったああ言うと思った、ということがわかったわけでしょう。

藤波 取り調べの責任者が証人として出て、弁護団や裁判長が質問した。そうしたら、しどろもどろで、真っ赤な顔をして。それで、俺が勝ったと思った。

伊藤 それは一審の話ですね「一九九四年九月」。一審は無罪ですね。

武田 一審は無罪です。

藤波 二審の裁判長——。

平松 二審の裁判長の名前ですか。

武田 『政治と鎮魂』に載っているんですね。

平松 載っているはずですよ。

邦江 一冊、持って来ましょう「持って来て、武田氏に渡す」。

武田 先生の弁護団の名前ですね。横井「大三」さんが主任弁護人

で、裁判長の名前は、一審が三上英昭さんですね。

藤波 横井さんが引き受けてくれた。靖国神社の問題の会議に出てくれた。

武田 靖国懇ですか。

平松 「横井さんは」靖国懇のメンバーでしたな。

川越 そうです。

藤波 「そんな馬鹿なことはない、真面目な人がそんなことをするはずがない」と言うて、横井さんが引き受けてくれた。

武田 二審の裁判長の名前は出ていないようですね。「二審の裁判長に至っては」という書き方ですね。

藤波 人事の季節で、裁判長が二審で替わった。司法研修所の所長で、担当の裁判長が替わると思った。そうしたら替わらんのだ。判決を読むといて。

平松 「司法研修所の所長に転出して」出たけれど、裁判を替わらずに、戻ってきて判決を読んだんですね。違いましたっけ。

藤波 そうそう。

平松 いったん「東京高裁から」出たんですが、これは俺がするといふ話だったらしく、また戻ってきて、そこで裁判の判決を自分で読んだらしいんです。

伊藤 それは二審のことですか。

平松 二審のことです。

伊藤 それは平成九年の話なんだな。

藤波 その男は、田中角栄さんのときに、アメリカで資料をもらうのに、「免責特権であんたのことはやらへんから、材料だけくれ」と言うて、最高裁判所の担当課長をやった男だ。間もなく、大阪の高検の検事長になった。めっちゃめっちゃやるなと思った。真っ赤な顔をして、二審の判決を言うた。

■ニューカレドニアへ行く

藤波 それで資料を持って、「天国にいちばん近い島」に行った。

※「天国にいちばん近い島」とは、ニューカレドニアのこと。森村桂の同名の小説によりこのように呼ばれる。

武田 ニューカレドニア！

藤波 そうそう。書いた。

伊藤 このあいだ自殺した人でしょう。森村桂。

藤波 そこに資料を持って行った。

平松 自分でニューカレドニアに行って、何か書かれたんですね。

藤波 そうそう。「今、そこで書いたものが手元に」ない。

平松 たまたま天国が一番近い島ということで、森村さんの名前が出ただけで、自分で書かれたものがあったんですね。

伊藤 ニューカレドニアとか、確かにあっちのほうに行ったらっしやるんですね。

武田 書いたものがあるんですね。

川越 探してみてもない、ということですね。

藤波 うん。

平松 裁判が終わってからの話で、裁判が終わったあとに書かれたものです。

伊藤 いまの話はどこから出て来たんですね。

平松 二審の判決が終わって——。

伊藤 二審の判決で有罪になりますね。今度は上告しますね。

平松 そのあいだの話ですね。二審後です。二審を受けて、そのあとニューカレドニアに行くときに資料を持って行って、自分の文章を書いたんだけど、それを探しているんだけど、ないということ

とです。事務所を動かしたときか、今回閉めたときか、宿舎を引き払った荷物か、どれかの中にあるかもしれませんね。

武田 それはリクルート事件のことを書かれているんですね。
藤波 そうそう。

伊藤 平成九年の三月に有罪判決があつて。

川越 その年の八月にニューカレドニアに行かれていますね。

伊藤 この、ニューカレドニアに行かれたのは、何か意味があるんですか。

藤波 ある。村田「昌謙」さんが、あっちがええ、と言つた。

武田 村田さんというのは？

藤波 「書く」方位学の権威。

武田 ああ、それでニューカレドニアがいいと言われたんですね。
平松 あちらの方向が、ということですね。

邦江 だから私もついて行きました。フィジーとか、パラオとか、オーストラリア、ニュージーランド。私が行きたいところ行けないわ、と言つて。その頃は、カナダとかトルコとか、そんなところに行きたかつたんだけど、行けない。

藤波 ゴチャゴチャ言うなよ（笑い）。

伊藤 方位として、こういう「南の方という」感じなんです。

武田 村田さんが、方位学の権威なんですね。

邦江 そうそう。

武田 伊勢の方なんですか。

邦江 いえ、東京の方です。私が行きたいところへはちょっとも行けません（笑い）。

藤波 それが方位だ。

邦江 お父さん「藤波氏のこと」は言うなと言つてくれけど、言わしてもらつてくれ（笑い）。

武田 いや、言つた方がいいですよ。

邦江 早う、ようになつたら、行こうなと言つてましたから。ようなつてね、また旅行しないかね。

伊藤 そうですね。ホウイ、ホウイというから、僕は法医学かと思つた。

武田 僕も法医学の先生が、なんでニューカレドニアなんだろうと思つた。

伊藤 ふだんあまり行けないようなところに行つたから、いいじゃないですか。

邦江 そうですね。旅行ではそういうところに行けませんものね。

伊藤 そうですよ。パラオから始まつて、ニューカレドニア、オーストラリアからニュージーランドまでね。ニュージーランドもよかつたんじゃないですか。

邦江 ニュージーランドもよかつたですよ。温泉も行きましたし。

伊藤 あそこは温泉で有名ですね。

邦江 水着を着てね。

武田 でも、先生、バイカル湖とかイルクーツクとかも行かれていますね。

邦江 そんなのは一人で行きましたよ。

武田 それも方位学ですか。

藤波 そう。

武田 北と南だ。

藤波 そのとき、そのときだ。

伊藤 方位を考えているとは思わなかつたですね。

「ここで藤波氏が、小泉太志命が総裁を務めていた財団法人神武

参剣道場（三重県志摩市磯部町）について何か言いかけるが、ここでは総裁を嗣いだのが自分であるとだけ話す」

伊藤 じゃあ、ちょっとここで切りましょう。二審が終わって、方位の話でニューカレドニアに行ったということですね。今度は上告して、最高裁の判決がある。それから引退までのあいだに考えたことをちょっと話していただこうと思います。

〔二時五七分一時中断〕

■判決確定後の決意

〔二時四七分再開、ここから藤波俊也氏参加〕

伊藤 「俊也氏に向かって」さっき、リクルートの続きの話をされたんです。二審で有罪判決があつて、方位の関係でニューカレドニアに行かれた。そしてこれから上告して最高裁で判決があるという前まで行きました。裁判のことはさほど詳しく聞いてもしょうがないんですが、裁判が終わって、有罪判決が確定して、執行猶予がつきますね。そこから先、どういうふうに考えておられたのか。最後に引退をどういう経緯で決めたのか。そのへんを伺って、最後に政治生活四十年を振り返って、ということをお話になりたい、ということでした。藤波先生がお話になりたいということであつたので、どうしますか。

俊也 「孝生氏に向かって」引退の決意というのはどういうことかな。どういう心境？ 体調のことかな。

伊藤 前にお話を伺ったときには、もうじき執行猶予が切れる。それで自民党に復党して、もういっぺん選挙に出る、というお話だったんです。でも選挙が、執行猶予が切れる前になっちゃったんですね。

俊也 引退の声明は？

平松 引退の声明は文章にしていますね。

俊也 ええ、私が読み上げた。

平松 ペーパーにしたものを読んでもらいましたので、どこかにあるはずですよ。ちょっと僕の自宅に戻らないと。

伊藤 持っておられる可能性はありますか。

平松 あります。データで残してあるはずなので、パソコンのデータはCD-Rに焼いて持って帰ってきたものをハード「ディスク」に放り込んでありますので、あると思います。

藤波 二十五年の表彰のときのものも、あるわ。

武田 それは「ふじなみレポート」にも――。

平松 あれは入っていましたね。

川越 二十五年のものは入っています。

平松 引退のときのコメントは、あるはずですので、探します。

伊藤 少しお話になれますか。「藤波氏、お疲れの様子」ちょっと無理ですか。じゃあ、もう少し休んでからにしますか。まだ時間がありますから。藤波先生は横になって休むのが楽なんですか。何がいちばん楽なんだろう。

藤波 人の話を聞いているのがいい。

伊藤 そうですか、そのほうがいいですか。

俊也 二人でいても、ちょっと話をしません。

伊藤 そうですか。高裁で有罪になつたでしょう。それで上告して、もういっぺんひっくり返せると考えておられたのかどうか。最終的に最高裁で有罪が確定したときにどういう思いでおられたのか、そのへんを伺いたいと思うんですね。それからそのあとがあるでしょう。そんなに何年もないですか。

川越 平成十一年に有罪が確定しているんですね。

伊藤 それでわれわれが「オーラルヒストリーを」始めたのは？

川越 第一回は、二〇〇二（平成十四）年十月です。

伊藤 いま平成十六年ですから、有罪判決があつてから、もう五年

ですね。ですから、有罪判決を受けたときの印象と、有罪判決があったから、執行猶予の期間が切れた後どういう形で再起しようと考えておられたのか。それから周りの方、特に中曽根さんは、いったいどうしろとおっしゃっていたのか。そのへんをお聞きして、それくらいよいよ引退をどうして決意されたのかを伺う。その上で、過去四十年を振り返って、自分の政治生活とは一体何だったのだろうか、ということについてお話をしたい。だいたい藤波さんもそういうおつもりでおられたんですね。それでいまリクルート事件の高裁判決まで行ったんですね。それで三十分以上お話を伺ったんですね。

川越 「藤波氏は昼食を」食べられたあとなので――。
俊也 痰が詰まっているんですね。もうしばらく休んでからにいたしましょう。

伊藤 そうですね。

〔二時五三分中断〕

〔二時二〇分再開〕

伊藤 端的にお話してください。さっきは高裁で地裁の判決がひっくり返り、有罪になります。それで上告されて、最高裁に行きます。最高裁での審議は別に実質審議ではないでしょう。これはわからないうちでしよう。結果をただ、待っているだけです。

藤波 そうそう。

伊藤 そのときは、どうなるという見通しでおられましたか。有罪になるか、差し戻しになるか。

藤波 なると思った。

伊藤 差し戻しに？

藤波 なると思った。

伊藤 そうしたら有罪になってしまった。そのときの心境はどうだったんですか。

藤波 しかたない。

伊藤 それはそうですね。これはひっくり返し方がない。それが平成十一年です。私たちが先生のお話を伺い始めたのが、平成十四年です。ですから有罪判決があって三年ぐらい経って、先生のお話を伺い始めたんですが、そのときにはずっとお若い頃からの話を伺って、その時点でのお気持ちを伺ったことはたぶんなかったと思います。有罪判決があって、執行猶予がついて、四年経って執行猶予が切れる。それまでのあいだ、代議士、政治家ですね。そのあいだに、将来どういふふう復活していかうと考えておられたのかな、と思うんですが、それはどうですか。

藤波 復活するとか、また戻って来るとかいうのは、入り口の話だ。もっと深刻だ。「しかたない」という意味は、日本中、世界中を相手にして戦ってやるぞという気持ちの裏表や。

伊藤 最終的な有罪判決があったときに、中曽根さんはどういう対応をとられたんですか。

藤波 いままでの仲だから、残念だという感じだ。

伊藤 どうしているとか、これからどうしろという言い方はされないですか。

藤波 しない。

伊藤 たしか、最初に起訴されたときにはまだ中曽根派の事務総長をされておられましたね。それを離脱されますね。それで中曽根派ではなくなってしまうわけですか。

藤波 なくなる。

伊藤 派閥の会合にも出ない？

藤波 うん。

伊藤 そうすると非常に政治家としての活動がやりにくくなる？

藤波 なる。

伊藤 なったんですか。

藤波 うん。

伊藤 そうしたら、どういふふうにしてやっていったらいいか、わからないじゃないですか。

藤波 一コマ一コマで、前を向いて歩いて行く以外にない。

武田 先生に協力してくれるというか、助けてくださるような政治家の方はいらっしゃったんですか。

藤波 私には好意的だった。

伊藤 それは中曽根派の人ですか。

藤波 「中曽根派の人を」含めて、好意的だった。

伊藤 みんな逃げたわけですから、好意的ではありませんようけれどね。

藤波 うん。

伊藤 言ってみれば、リクルートの問題をみんな逃げて、藤波さんがかぶったという形になりますね。そういうわけではないんですか。

藤波 そういう形になるかな。

伊藤 ほかの役人とか政治家とかそういう人たちに話を聞くと、おそらくあの事件で引っかからなければ藤波派ができていただろう、というように言い方をする人もいるんですが、ご自分で、そういう話を聞いたらどう思いますか。

藤波 別の質問に移ってもいいか。

伊藤 いいですけど、いまのはちょっと質問としてまずい、という意味ですか。

藤波 いやいや。「平松氏に向かって」あれ「笠森稲荷（伊勢市）」に電話して。門跡の、床の間に置いてある。「平松氏、妙法院門跡であった福井康順が書いた床の間の軸を取りに行く」。別の話にしてください。

※福井康順：第二回を参照。

伊藤 別の話にします。それで最終的にリタイアしよう、今度は立

候補しないという決意をされたのは、健康上の問題ですか。

藤波 それが一番や。

伊藤 二番目は何ですか。

藤波 私の陣営は特に別で、リクルート事件のときでも――。

「平松氏、軸を持ってくる。照于一隅（妙法院門跡康順）」と書かれています。

伊藤 「一隅を照らす」と読むんですか。

藤波 それでいい。

俊也 最澄の言葉で、「照于一隅、此則国宝（一隅を照らす、これ国の宝なり）」というものです。そういう気持ちだったわけです。一つは健康で、一つはそういうこと。

藤波 これを書いた人が元気でおるか。

俊也 「笠森稲荷に」聞いてくれということですか「平松氏、福井康順氏が元気でいるか、笠森稲荷に電話で確認するために席を外す」。

これを「康順氏」書いていただいたんです。

藤波 そうそう。

伊藤 書いてもらったのは、辞めるときの話ですか。

藤波 いやいや。

平松 最近の話ですか。

藤波 うん。

俊也 まだ表装が新しいな。

政治家としての四十年を振り返って

① 政治生活「二回」

伊藤 じゃあ、一応そこで終わりにして、藤波先生がこのあいだお話になりたいと言ったこと一番大きな問題は、自分の政治生活四十年を振り返って。

藤波 蕎麦屋の二階で話をしたとき「この話は、第二回と第十一回に出てくる。」

武田 誰とですか。

藤波 早稲田の雄弁会の仲間。私が幹事長だ。ちょうど中国が共産化しているときで、なぜ中国共産党の天下になったかということ議論した。

伊藤 この人「康順氏」が関係あるんですか。

俊也 「孝生氏に向かって」この人がそのときにおったの？

伊藤 蕎麦屋の二階で話したというのは、政治生活のスタートの頃の話でしょう。

藤波 「中国共産党がなぜ天下をとったか」と言ったんだ、康順さんが。それで、「私たちが」「中国が貧しかった」とか、そんなことを言うたんや。そうしたら、「おまえら馬鹿もんや」と言う。

武田 康順さんが、ですね。

藤波 うん。それで「康順氏が」「共産軍が強かったからだ」と言った。「おまえら、そんなこともわからんのか」と言った。「時代の波に乗って、いい気になっておるのはいかん」という。東洋哲学の泰斗だ。

川越 東洋哲学の泰斗が康順さんなんでしょうか。

藤波 そうそう。

武田 みんながいろいろ言ったけれど、「中国で共産党が天下を取ったのは、共産軍が強かったからだ。そんなこともわからないで、時代の波に乗って代議士になっては駄目だ」と言っただけですね。

藤波 代議士じゃない。雄弁会の話だ。

「俊也氏席を外し、夫人が参加」

伊藤 「夫人に向かって」いまいろいろお話があるんですが、早稲田大学の雄弁会の仲間と蕎麦屋の二階で話をしているという場面なんです。そこで、いま持ってきた「軸の字を書いた」康順さんの

話が出てくるんですね。康順さんがそこで話をしたというんですが、康順さんという人はご存知ですか。

邦江 私は知りません。「孝生氏に向かって」笠森稲荷さんとの

な関係？ 笠森稲荷さんが行っていた元の寺のお坊さん？

藤波 そうそう。

邦江 ああ、大阪やらどこやら。

藤波 そうそう。

邦江 いま「元気がどうか」聞いてもらっています。

「平松氏に話を聞いたらしい俊也氏が戻ってくる」

俊也 もうだいぶ前に亡くなったと言っています。

邦江 「孝生氏に」その人は雄弁会に関係があるの？

武田 政治生活四十の始まりの頃ですね。

俊也 雄弁会の幹事長のときや。四十年以上前の話だ。

伊藤 そうです。政治生活が始まる前の話です。そこでなぜ康順さんが出てくるのかわからないんだけど。康順さんは、早稲田大学

と関係があったんですか。

藤波 あった。教授やった。

武田 東洋哲学ですか。

藤波 ああ。

伊藤 そうですか。話がわかってきました。

藤波 蔣介石が台湾に逃げたのも、共産党が強かったからだ。

伊藤 それが藤波さんの四十年の政治生活とどういふふうに関係があるんですか。

藤波 また一回りして、康順が目の前に現われた。

伊藤 それは夢の話ですか。

藤波 誰も知らん話だ。本当の話だ。生きていれば九十三歳だ「？」。一回りということは、私が代議士になって、自由民主党という池の中で泳ぐことを決めて、泳いでいるときに、何でもやってやる、安

全保障だろうが、外務省だろうが、年金だろうが、教育だろうが、何でもやる「と考えていた」。そうしているあいだに、小泉さんと出会う。

邦江 さきほど参剣道場の話が出ましたでしょう。その参剣道場の主が小泉太志命さん。天皇陛下をお守りするという。その人と会ったわけ？

藤波 そう、浜地文平さんと、二人が盛り立ててくれた。それでおれは何でもやってやるから辛抱しろよ、と小泉さんが言うた。

「当选して、本会議場に行ったら」一番前に座っているやつがぶつぶつ言うておるな、と思って、聞いたら、般若心経だった。床の間の軸だ。

邦江 「藤波家に掛かっている」床の間の軸ですか？鍵田さんの？

藤波 鍵田さんの般若心経だ。

邦江 奈良の方で、鍵田忠三郎さんといまして、衆議院「議員」をしていました。その人と「仲が」良かったんですね。

※鍵田忠三郎：平成六年没。奈良市長、衆議院議員を歴任。地震雲研究家、剣禅の修行を積んだ人物として知られる。

平松 息子さんの鍵田忠兵衛氏が県議員でしたが、先月奈良市長に当選しました。

武田 鍵田さんが前にいたんですか。

藤波 般若心経を「言っていた」。私は本会議場に行つて座ったら、深呼吸をすることになっている。悪いやつらが悪いことをして、ええやつはええことをして、やっているけれど、みんな一所懸命国のためにと思つてやっているんや。悪いのはみんな深呼吸をして、わかつた。前のほうで、般若心経をあげているのがおるんだ。

邦江 鍵田さんがあげておったの？

藤波 うん。

邦江 国会中に？

藤波 そうそう。ええことだよ。

天皇さんのところに来てくれといって、なるべく早く早く仕事をするようにと、しばらく待つとれよと言われた。

※「初当選のころ、小泉太志命から早く天皇のところまで仕事ができるよう、それまで辛抱するように、といわれていたが、官房長官になつてようやく内奏の機会を得た」という意味か。この話は「第十二回」も出てくる。

武田 天皇さんのところに行くというのは、それは官房長官のときですか。

藤波 そうそう。

平松 要するに、早く天皇の前で仕事ができるようになる、という意味ですね。

武田 何の仕事を早くするんですか。

伊藤 国の仕事。

武田 何を待っているんですか。

藤波 辛抱しておれという。入江「相政」さんが総理官邸に呼びに来る、天皇さんが質問を持って待っておるといふ。総理大臣と官房長官には、何を質問してもいいんだ。

武田 そうですね。それで天皇さんが――。

藤波 「天皇のところから」帰つて来ると、入江さんからまた電話がかかってきて、「いろいろ話していたら、胸のつかえが降りたと言つて喜んでいて。また来てなと言つた」といふ。入江さんは死んだ、残念だ。

「天皇からの」質問は、半分ぐらいいしわからなかったけれど、「書く」「ご宸襟を悩まし奉るな」と、話のあとで、陛下にそう言うた。胸のつかえが降りたというのは、そういうことだ。それが中心の話だ。

そんなことをやって、派閥の面倒を見て、何でもやるぞという腹

でいた。それで派閥ができて、面倒をみるといって、藤波派ということになって、できる。できなければ、いかんわけだ。

武田 最後には、そうですね。

藤波 一回りして、四十年、五十年経って、自民党を中心にして、やってやるぞという構えができたなら、やればいい。

武田 派閥をつくってやる、ということですね。

藤波 そういう意味だ。「夫人に」小泉先生と浜地先生の本を持ってきて。

「夫人、本を取りに行く」

俊也 さっきの藤波派の問題の答えですね。

伊藤 やっとここまで来てわかりました。

武田 いろいろなことがあって、一回りして、やるぞという構えができたなら、やればいい、ということですね。

「夫人、二冊の本を持ってくる。『浜地文平先生を偲ぶ』（偲ぶ会代表、昭和六十二年）、『小泉大先生を偲んで』（角川書店、藤波孝生・小泉美隆編、平成二年）。藤波氏は席を外す。以下、その本を見ながら話が行なわれる」

■政治家としての四十年を振り返って ②小泉太志命と浜地文平

川越 『小泉大先生を偲んで』は「藤波先生も共編ですか。皇學館から出ていますね。」

武田 『浜地文平先生を偲ぶ』というのを読みたいな。見たことがない。面白そうですね。小泉先生は前にもお話に出て来ましたね。

川越 『政治と鎮魂』の中にもちょっと出て来ましたね。『小泉太先生を偲んで』を見て「神武参剣道場の二代目の総裁に、藤波先生は平成元年に就任されていますね。小泉太志命さんが亡くなられて、

継がれたんですね。

武田 藤波先生は、浜地先生の地盤を継がれるんですね。

俊也 そう。

伊藤 だから、事務所に写真を掲げていましたね。

武田 それから大平さんがあるんですね。

伊藤 中曽根さんはないのか。

俊也 あれを見ると、中曽根さんのことは悪く書いてありますね。

伊藤 そうなんですよ。

武田 中曽根さんをよく言う人は少ないかもしれない。

俊也 もともと肌が違いますからね。大平さんとか森清さんとか園田直さんとか。

武田 これ「二冊の本」は著作リストに入れたほうがいいのかな。

川越 入れましょうかね。略歴の下に入れておきます。

伊藤 最後に藤波さんの言葉として、「最後に私事になって恐縮ですが、私は昭和三十八年に三十歳で県議会に出、昭和四十二年に衆議院議員選挙に出馬、以来ずっと政治生活を進めてまいりました。中学時代からの親友である山路啓雄さんの紹介で大先生のご指導を受けてから三十年、今日にいたりました。最初、伊勢から日本の政界への使者に立てとおっしゃっていたので以来、道場へお伺いするたびに、やあご苦労さん、ご苦労さんと、いつもあたたかく迎えてくださり、あるときは厳しく、あるときは優しくご指導いただきました」と書いてある。これは精神的に。

俊也 何か迷うことがあると、そこに行つたようです。

武田 この小泉さんというのは、政治家とのおつき合いがあったとは限らないんですか。

俊也 そうとは限らない。

武田 では藤波先生とは個人的な関係なんですね。角川春樹がいる。藤波先生は角川春樹ともたしかおつき合いがございましたね。

俊也 ええ。

伊藤 道場はどこにあるんですか。

俊也 磯部というところです。伊勢から志摩へ入る入口にあります。その磯部で、山路啓雄さんが料理屋をやっている。中学の同窓生です。

伊藤 その方は支持者なんですか。

俊也 磯部町の後援会の会長をしています。商工会の会長もやっています。

伊藤 『浜地文平先生を偲んで』を読みながら「ああ、ついに運命の神は我に微笑み給わなかった。次点、二千票の差」。浜地さんもよく落選していたんじゃないかな。連続当選じゃなかったんじゃないかな。

俊也 以前はどうか知りませんが、私らが支持してからはそんなことはなかったと思いますね。いつも一番最後のほうでしたけれど。

伊藤 これは戦中期のことも書いてある。

武田 戦中期のことも書いてありますか。鳩山日記にかなり出ていますね。

伊藤 「鳩山一郎、尾崎行雄など」と書いてある。鳩山さんとは関係があったんだろう。

「藤波氏、戻る」

伊藤 これは面白そうですね。翼賛選挙で最高点で当選して、戦後追放になるという話を書いてある。そのとき尾崎行雄に、あんな翼賛選挙に推薦されて喜んでると非難された。これは自伝ですね。「追放生活六年」、追放されていたんですね。追放解除になるとまた立候補して、「広川の家に行ったら、広川弘禪が顔を出して、いきなり新聞紙に包んだもの一束を一人ひとりにいとも簡単に手渡して、しっかりやってくださいという。その中味を調べてみたら、二十万

ぐらいかなと思ったら、なんと五十万入っていた」。これは広川派だ。

■政治家としての四十年を振り返って

③新聞記者との座談会

藤波 『藤波すぶりっと』の冊子を渡す」どこかに入れておいて。

武田 これは引退されるときのものですか。

藤波 新聞記者を大事にした。

川越 『藤波すぶりっと』の冒頭にある「政治記者座談会のことです」。

武田 これは、お名前がわからないんですね「記者の名前は、A、B、C……となっている」。

藤波 わからんようにしてあるんだ。

武田 もちろん先生はご存知ですね。

藤波 保利茂も官房長官で新聞記者を大事にした。

川越 これは冊子の中に入れてさせていただいてよろしいですね。最初から最後まで入れてしまってもよろしいですか。

藤波 うん。

武田 これは座談会ですから、「座談会参加者に」載せますよという了解を取ったほうがいいかもしれませんね。

川越 これはどなたが発言されているかということはおわかりですか。伊藤 これは座談会をやってくれた人たちに、いちいち断わらないで冊子に入れて大丈夫ですか。

藤波 いい。

平松 実名をあげてやっていませんし、まとめ直したものですから、大丈夫だと思いますよ。

藤波 何冊いる？

武田 冊子に入れるんでしたら、一冊で結構です。

■政治家としての四十年を振り返って

④政治生活に悔いなし

伊藤 さて、どういうふうにしますか。

武田 一応お話をいただいたということですね。いつか来たら、藤波派をつくってやるつもりだった、ということですね。

伊藤 そこから先は言わないほうがいいな。それは挫折したわけだから。

藤波 そうだ。

伊藤 それについて、残念だ、とお考えでしょうね。

藤波 実力を発揮できんで、残念だ。

伊藤 これからの日本とか、これからの政治について、何かおっしゃることはございますか。

藤波 時代の風というものがある。それにこだわりすぎるといかん。何でも自分の目で確認して、いいとか悪いとか言うのならいいけれど。

視聴者参加と称しておるけれど、半分はいいが、半分はいかん。

朝日新聞の読者欄、みんなやっているけれど、半分はいいけれど、半分はいかん。なぜかという、新聞よりも上になる。

平松 新聞よりも、その意見が上になるといふことですね。

伊藤 だいたい私どもとしては、藤波先生がお話になりたいということをお伺ったような気がします。もしお元気なら、もっと突っ込んで、お話を伺いたいところなんです。

藤波 浜地文平さんと小泉太志命さんにはよく面倒を見てもらった。みんな年上の人ばかりだ。

伊藤 もうみんな亡くなっている。

藤波 亡くなっている。四元義隆も死んで、みんな死んだ。私は言うことを聞いて、一つ一つ先輩の恩に報いたい。

伊藤 だいたいのお話を伺ったし、藤波先生もだいぶお疲れのようだから、いちおうここで打ち切りにして、まとめるということにしたいと思います。弟さんのほうで前半のほうはだいぶ手直しをしてくださいましたので、だいたい出来上がりですね。今日の分をどういうふうにまとめるか考えなくてはなりません、十分に聴き取れなかったところもあるような気がします。

俊也 「孝生氏に」さっき、藤波派ができなかったことが残念や、と言った。政治生活を一所懸命やってきたな。自分が一所懸命やってきたことで、それに対する悔いはないということだ。何か悔いがあるか。

藤波 ない。

俊也 本当に、傍で見ても、一所懸命やってきたと思う。いろいろなことがあったと思いますけれど。

伊藤 いまの発言は入れてもいいですね。

俊也 私の言葉が入るんですか。

伊藤 入れてください。

俊也 その気持ちを私ははっきりと聞きたかったです。

伊藤 おそらく、ご自分でお話になりたいことはまだいろいろありになると思いますが、言葉が十分でない、非常に鬱屈した感じだと思えます。でもこれ以上責め立てるような感じになっても、ちょっと申し訳ないという気もします。この段階でまとめさせてください。私どもが藤波先生の事務所にあった資料を全部いただいておりますので、あれを整理した段階で、何かまとめていくのならまとめたいと思います。どれだけまとめたものがあるか、まだ開けて十分に検討してないのでわかりませんが、その段階でまた考えたいと思います。とりあえずは冊子をつくって残したいと考え

ておりますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございますました。

武田、川越 ありがとうございます。

川越 それで、冊子にするときに藤波先生のお名前に肩書きをつけてさせていただきます。

藤波 「藤波孝生」でええ。

伊藤 元官房長官。

藤波 いやいや。

武田 衆議院議員。

藤波 面白くない。

伊藤 それでは藤波孝生だけにしますか。何か冊子を持ってくればよかったですね。

川越 こういうイメージ「表紙のイメージの紙を示す」なんです、ここに「元官房長官」とお入れになったらいかかと思ひまして。

ふつう皆さん、閣僚を経験された方ですと、元何々大臣とお入れするんですが。

俊也 宮澤さんのものがあつたんじゃないですか。「川越氏、書類を探す」

武田 何がいいでしょうね。藤波先生は、「藤波官房長官！」でみんな覚えてるんですよ。

伊藤 藤波さんという、もう官房長官、となりますね。

武田 国会での呼び方が耳にこびりついています。

川越 「宮澤喜一オーラルヒストリー」の表紙のコピーを示しながら「宮澤さんですとこういう形で入れてもらっているんですよ。」

「ここで藤波氏がメモに「元内閣官房長官」と書く」

藤波 入れておいて。

川越 これでよろしいですか。

藤波 「内閣」を入れて。

川越 はい、「元内閣官房長官」といたします。

伊藤 あと写真もありますし、年譜もありますね。

川越 「略歴を示す」略歴はこういう形でおつくりしています。

武田 それで資料としてこれ「先ほどの冊子『藤波すぴりっ』」が入るんですか。

川越 資料と、あと「ふじなみレポート」で『藤の花』に載せていない四号分ぐらいを収録したいと思ひます。

伊藤 『藤の花』のあと、ずいぶんあるんじゃないの。

川越 『藤の花』は平成十四年一月までなんです。それで以降何号が発行されていますので、平松さんからいただいたんです。それら

を載せれば、『藤の花』以降も全部見られるようになるわけです。だから全部載せたほうがいいと思ひまして。

武田 これで終わります。「ふじなみレポート」最終号を指す」というのをいただきましたが、それが載っていますか。

川越 その、「長い間ありがとう」「ふじなみレポート」最終号の題名」というものです。「コピーを示す」。

平松 社長「俊也氏」に代読してもらったコメント「引退の弁」だけ探してきます。

川越 それも入れさせてもらいますので、データで送ってください。平松 はい。データであると思ひます。

伊藤 その引退の話は、僕らがやっている最中の話ですからね。始まったときは、まだやる、執行猶予が切れたら自民党に戻って、立

候補して、というお話でしたね。でもあれから急に悪くなられましたね。初めの頃はちょっと聞き取りにくいところもあったんですが、

だいたいわかりました。わからなくなったのは、つい最近のことですからね。

俊也 そうですね。去年の秋ぐらいから急激に、なりましたね。

伊藤 いや、今日の話聞いていて、「藤波先生ご自身が」もどか

しいだろうな、と思いましたね。ご自分でいいたいことがいっぱいあるんだろうと思うんだけど、それが言葉にできない。あんな苦しいことはないんじゃないかと思えます。聴きながら、こっちが苦しくなりました。

(終了)

藤波孝生 オーラルヒストリー

資料編

1. 新生クラブ発足メンバー一覧（第3回参照資料）
2. 衆議院議員在職25年表彰時の挨拶（平成3年10月1日表彰）
3. 引退声明（平成15年7月26日発表）
4. 「藤波すぴりっと」（平成15年7月26日発行）
「藤波番」記者たちによる座談会記録など
5. 「ふじなみレポート」第215号から218号（最終号）
第1号（昭和52年1月）から第214号（平成14年1月）までは
『藤の花』（東京美術 平成14年）に収録されている。
6. 藤波孝生オーラルヒストリー関連資料一覧

1. 新生クラブ発足メンバー一覧

役職等	氏名	当選回数	所属派閥
座長	藤波孝生	4	中曽根
事務局長	野田毅	2	中曽根
世話人	佐藤文生	4	中曽根
世話人	塩谷一夫	4	三木
世話人	渡部恒三	3	田中
世話人	石橋一弥	1	福田
衆議院	石井一	3	田中
衆議院	高島修	3	田中
衆議院	羽田孜	3	田中
衆議院	愛野興一郎	2	田中
衆議院	愛知和男	1	田中
衆議院	中村喜四郎	1	田中
衆議院	西田司	1	田中
衆議院	森喜朗	3	福田
衆議院	中島源太郎	2	福田
衆議院	井上裕	1	福田
衆議院	鹿野道彦	1	福田
衆議院	小島静馬	1	福田
衆議院	大石千八	2	中曽根
衆議院	向山一人	2	中曽根
衆議院	山崎拓	2	中曽根
衆議院	中西啓介	1	中曽根
衆議院	中渡秀央	1	中曽根
衆議院	水平豊彦	1	中曽根
衆議院	羽田野忠文	3	大平
衆議院	津島雄二	1	大平
衆議院	川田正則	1	三木
衆議院	北川石松	1	三木
衆議院	竹内黎一	5	無派閥
衆議院	檜橋進	2	無派閥
参議院	斎藤十朗	2	田中
参議院	亀井久興	1	田中
参議院	戸塚進也	1	田中
参議院	熊谷弘	1	福田
参議院	最上進	1	中曽根
参議院	秦野章夫	1	無派閥
参議院	後藤正夫	1	無派閥

橋本茂著『政治と鎮魂』（心泉社 2001年）より作成

2. 衆議院議員在職二十五年表彰時の挨拶

挨拶

衆議院議員 藤 波 孝 生

この度 院議をもって永年勤続議員として表彰を賜りましたことは、まことに身に余る光栄であり感謝にたえません。二十五年の永きにわたり本院に在職し、本日この榮譽に浴することが出来ましたが、ひとえに神仏の御加護の下、諸先輩、同僚議員各位の御指導と御鞭撻、郷土三重県第二区の選挙民の皆様及び全国の後援者の温かい御支援のおかげであり、ここに心から厚く御礼を申し上げます。

私は郷里で青年運動を進めました後、昭和三十八年四月に三十歳で三重県議会議員となり、浜地文平先生御勇退の後をうけて昭和四十二年一月、第三十一回総選挙に立候補し衆議院議員に初当選、今日まで九期連続して当選させて頂きました。永い歲月の間には順調に政治街道を進む日ばかりではなく、時に寒風吹き荒ぶ逆境の日もありましたが、大勢の皆様が終始変わらぬご理解をお寄せ下さり、私に大きな力をお与え下さいました。今日の日を迎えて感謝と感激でいっぱいであります。

初当選を致しました当時は佐藤内閣の初期であり、経済成長の道を進むなかで公害問題や大学紛争が深刻な影を投げかけ、このままでは国が亡んでしまうという思いでその対策に打ち込みました。以来、時代はいろいろ変遷をとげてきましたが、その時その時の課題に真剣に取り組み今日に至りました。国政の中枢で働く機会を与えられ、市場開放や行財政改革などに微力をつくしました。また、三重県の発展を願って渾身の努力を重ねてまいりました。しかしその成果について過ぎ来し方を振り返り、どれだけ足跡を残し得たか、至らざることはなかったかと反省致します時、まことに忸怩たるものがあります。

今日、世界は大きな転換期を迎えており、平和の維持、環境の保全など沢山の課題をかかえ、その解決が急がれています。近年、経済大国として重きをなすことになった日本が世界の中でどのように進んで行くべきか、国の未来を冷静に見つめ国家百年の大計を確立すべき秋であると信じます。

これを機に初心を忘れず更に気分を引きしめ、「至誠一貫」をモットーに全力を挙げて働いていく決意であります。どうかこれからも一層の御指導を賜りますよう伏してお願ひ申し上げます。本日はまことに有り難うございました。

3. 引退声明 平成十五年七月二十六日発表

本日は大勢の同士の皆様がお集まりを頂きまして真に有難うございました。ご遠方からも紀州の各地からも志摩の各地からも、また三重県の津や松阪からも東京からも名古屋からもお越しを頂いて厚くお礼を申し上げます。またご来賓の皆様方など多数お越しを頂きまして厚くお礼を申し上げます。

こういう時期の会合は、お一人おひとりのご意見をよく伺ってそれから私の意見をまとめてお話をするのがいいと思うのですけれども、その手続きを省いて率直に私が今の意見を申し上げますことをお許し頂きたいと思えます。一つの結論は次の選挙には立候補しないということになって引退を表明されてから、私の政治活動は始まったといっていると思うのですけれども、ちょうどそれから四十年になりました。特にここ二年くらい健康を害しまして会合などいぶん代理出席などで失礼を致しました。また藤波流の政治というのはどういふのかというと、この人が相手だと思ふとその人と一晩でも二晩でもその人のお話をよく伺って一体になって一つのことにぶつかっていくというのが藤波流でございます。それが出来なくなった。自分の健康がもたないものですから根気が続かなくなった。それでは真に皆様に申し訳ないという思いが一杯で、勇退を決意した次第であります。どうかお許しを頂きますようお願いを致します。

あとは誰を推薦するかという問題でございますが、一人の候補者は現在県会議長をやっておる中川正美君であろうと思えます。また一人の候補者は伊勢市出身で国土交通省の人事課長で大勢の家族を含めた何千人という人の運命を決め、今度自らも国土交通省航空局の監理部長になった三ツ矢憲生君がそうだと思います。また一人は度会郡選出の県会議員で今度自民党県連の幹事長をやっておる橋川壱也君もその一人だと思います。いま政治が非常に辛い状況にあって人材といえれば全部二世か親戚の者かという状況になっておる時期に大勢の候補者をもつということはとても嬉しいことです。しかし、今の世の中は悪すぎます。デフレ基調からなかなか脱却できず景気回復は程遠いという状況であります。また、世界一の治安大国といわれた日本の治安が紊乱し、教育はまさに荒廃して学校の先生がオロオロしている状態の中でどうやって子供たちの将来を見つめていくかというのは大きな問題でございます。医療福祉などもこのまま行けば一人ひとりの生命さえどうなるのかという状況にあります。地球の環境汚染は大きな問題でございます。そういう状態のときに、まさに一人ひとりの人間の危機、国家社会の危機、地球規模の大きな危機に瀕しておるときに、あれもやるこれもやるというのでは勤まらないと思うのです。そういう意味で一人ひとりの人間がそれぞれの道で全力をあげてぶつかっていく時にはじめて道は開かれると思うのです。中川君は議長として北川知事が引退をした後の野呂

知事を助けて県政の推進にあたるべきであります。また、三ツ矢君は国土交通省の大黒柱として成長しなければなりません。橋川君は愛される自民党になるためにもっともっと努力が必要だと思えます。みんながそれぞれの道で頑張っていてはじめて今日の危機が打開できると思っています。霧が晴れると思うのです。そのことを考えますときに、国会議員というのははじめに一生懸命にやれば必ず出来ると私は自信をもっています。そういう意味で、山本教和君というのはいい候補者だと思っております。私は山本君の真面目さ、一生懸命やる態度を大事にしたいと思っております。どうか心ある同士の皆様、ご心配を頂いておると思いますが山本教和君に対し暖かいご指導ご支援を賜りますように心からお願いを致します。東京の後援者の皆様方にも相談しました。そうしたら返ってくる言葉は「藤波さん長いことご苦労さん」でした。健康のことを皆様にはっきりと申し上げて皆様の得心がいったらどうかお暇を頂いて、いい後継者を育てるように努力してほしい、というお返事でした。全部選挙区の皆様にお任せするということでした。有り難いと思うのです。今日はどうぞそういう意味で藤波孝生にお許しを頂いて皆様方の大きなお力を次の時代に向かって新しく展開をしていくというお気持ちをお示し下さるよう心からお願いを申し上げます。どうぞよろしくお願いを致します。

藤波 すぴりっと



平成15年7月26日

「藤波代議士を語る」—— 政治記者座談会

292

藤波孝生代議士は、極めて稀有な政治家である。権力をめざし、隙あらば足を引っ張ろうという輩が大半を占める政界にあって、いつも変わらず恬淡として国政にいそしんだ。「静謐」という言葉びびったりの、清静しいたずまいが、触れ合った多くの人々を虜にした。労働大臣、内閣官房長官、自民党国会対策委員長という要職を務め、繁栄の一九八〇年代の一翼を担った政治的功績も、特筆に価する。とりわけ「藤波国策」は、そこに集まった自民党議員の顔ぶれといい、野党との間に培われた深い信頼関係といい、戦後政治史に残る国会対策委員会だった。

そうした激動の時代を、藤波代議士と共に走り抜けた「藤波番」の政治記者が、これまで活字にしなかった藤波代議士にまつわる秘話を語った。

◇ 忘れられない温かい励まし ◇

A 「藤波さんってどんな人」というところから始めたい。

D 息子が病気という事情で政治部を離れ、故郷に帰ることになった時、藤波さんは、私の説明を黙ってじっと聞いてくれ、最後にひと言、「やっとな、これで人間の藩らしに戻れるね」と励ましてくれた。当時は「売上税国会」や「ポスト中曽根」をめぐる政局の取材で、藤波番記者は私を含めて皆、夜討ち朝駆けの毎日だった。藤波さんは、あきれ顔でしばしば「君らの生活は、人間のそれではないな」と笑っていたものだ。帰郷して二年たったころ、藤波さんは、私の田舎まで、わざわざ懸問に向向いてくれた。久しぶりに一献傾けながら、夜遅くまで語った。その席で、藤波さんが「いま一番大事なのは地方だ。もう東京には帰ってくるな」と私を元気づけてくれたことが、今でも忘れられない。

E 私が最初に「すごい政治家だな」と感心したのは、藤波さんが座長を務めていた新生クラブの夏の合宿の時だった。那須の温泉で開いたこの合宿に、藤波さんがゲストとして招いたのは、なんと、総評事務局長の富塚三夫さんだった。このころから、藤波さんは五五年体制の限界を感じ、「与野党の壁を乗り越えて新たな政治勢力を結集しなければならぬ時が遠からずやってくる」と思っていた。富塚さんと呼んだのも、新たな時代に備えて野党や労働界と忌憚のない意見交換をできるようにしておこう、という狙いだった。派閥抗争に明け暮れていた

当時の自民党にあって、普通の政治家と違う物差しで国政を見ている人物がいることに感動したことを覚えていいる。

C 新生クラブは、派閥を超えた自民党の若手議員の政策グループだったけど、メンバーはすごかったね。早大雄弁会時代以来の仲間である渡部恒三衆院副議長や後に首相になった羽田孜、森喜朗、さらに加藤敏一、山崎拓、麻生太郎、鹿野道彦、熊谷弘、野田毅といった錚々たる顔ぶれだった。藤波議長がメンバーに示した政策の指針は「新自由主義」「新国際主義」「新地方主義」の三つ。今日の指針としても通用する。それだけ議長に先見性があったということだ。

B 私が藤波番になったのは、中曽根内閣の官房副長官と官房長官の時代だった。中曽根政権は、最大派閥の田中派などの支援で誕生した、党内基盤が極めて弱い政権だった。ところが、当の中曽根首相は、そんなことには一切構わず、いつ衆院を解散するかといった重要な問題でも、田中派の言うことを聞こうとしなかった。外交・安保政策では、世論を挑発するようなタカ派的言動を繰り返した。支持率は低下し、いつ内閣が倒れてもおかしくない状況が続いた。そんな中で、藤波さんは、愚痴をこぼすこともなく、中曽根政権に批判的な政治家や経済人、学者らを一人ひとり訪ねては、理解と支持を訴えた。見えないところで藤波さんが支えたからこそ、中曽根政権は5年間も続いたのだと思う。

A そう言えば、当時、藤波さんが「低姿勢は正姿勢」と呪文のように繰り返していたのを思い出すね。単に腰が低いというだけじゃなくて、ピンと筋の通っていたのは揺らがない、重心の低い姿勢、という意味だった。

E 藤波さんは、最初から「中曽根政治」を推進したというわけではなかった。「したか」と言われて久し、栗をむく」の中曽根さんと、「控えめに生きる幸せ 根深竹」の藤波さんでは、肌合いが違い過ぎる。しかし、日本の政治を築いていくには、中曽根さんの政治力を使うのが一番いい、と判断され、すでに大臣経験者だったにもかかわらず、格下の官房副長官を引き受けたのだと思う。

C 中曽根政権が発足した時の中曽根派総会の光景が忘れられない。やっと政権を獲得するのに派内からの入閣者は山中貞則さんと楢垣徳太郎さんの二人だけ。内閣の番頭役の官房長官まで他派に渡したとあって、不満が爆発した。野田毅さんなんかは「こんな内閣はつぶしてしまえ」とぶちまかった。それをなだめ、派内を収めたのは藤波さんだった。当時から大岡徹のすぐれた政治家だった。

C 政治記者として一番ありがたかったのは、藤波さんがミスリードをしなかったことだ。今でも感謝していることがある。一九八七年十月の中曽根首相の後

継指名の時、夕刊の締め切り間際に「安倍晋太郎氏を後継者首相に指名することで決まり」という情報が政界を駆け巡った。私が「間違いないんですか？」と尋ねると、藤波さんは「そんなことをいつているのは『聖味の夕食』です」と、きっぱり否定してくれた。おかげで誤報を免れた。

B 「口は堅いが、絶対には嘘をつかない」というのが藤波さんだったね。

◇ 筋を通した藤波国対 ◇

D 国会審議が円滑に進むかどうかは、司令塔である国対委員長力量にかかっている。長い間、国対委員長室に勤務していた自民党議員は、国対のメンバーのまとまり具合、野党との折衝能力など、どの点をとつても「藤波国対」が一番だったと高く評価しているよ。

A 国対副委員長だった糸山英太郎さんが毎日のように藤波さんに叱られていたことを思い出すな。糸山さんは社会党の担当だった。朝、自民党の方針を伝えるために社会党の国対室に向くと、あれこれと無理難題を押し付けられる。藤波さんは「そんな要求は受け入れられません」とはねつける。糸山さんは社会党と自民党の国対室の間を何度も往復した。最後に藤波さんは、「そんなみつともないことはできない」と社会党に言いなさい」と厳しく命じた。筋を曲げてはいけない、と。あれほど金儲けが上手な糸山さんが、政治のイロハを教えられている、という感じだった。

C その糸山さんは、心から藤波さんを尊敬していたよ。昨年6月に、東京・お台場の日航ホテルで、糸山さんの還暦のお祝い会があった。招かれた政治家は藤波さんと古賀誠さんの二人だけ。糸山さんは「私が政治家を辞める決心をしたのは『藤波総理大臣』が難しくなったからです」と語っていた。

B 藤波さんは、当時の竹下登幹事長、安倍晋太郎総務会長に非常に信頼されていた。中曽根政権の要人の配置図は、ひし形を思い浮かべれば分かりやすい。トップに中曽根さん、左右に竹下さんと安倍さん。それを下で支えているのが藤波さん。安倍さんは「安竹のあとには藤波時代だ」とよく言っていた。

E 「これが藤波政治か」と印象深かったのは、国対委員長時代に行った名古屋での講演だ。藤波さんはこんな話をした。「日本の進路をどう定めるか。世界第二の大國だといわれて背伸びしている間に、すいぶん世界から物笑いになっているような話があるのではないかと私は心配している。政治も経済も、学問、芸

術の分野もそうだ。ライオン、ガヤガヤと調子に乗って、ばか踊りしてはいけない。十年、二十年、三十年先をみて、日本の歩みをどう進めるのか、静かに議論する時代にきているのではないか」。こう語った後、藤波さんは「日本人は傲慢になってはいけない。自民党は謙実でなければいけない」と強調した。

A その講演は、私も聞いた。中曽根政治の絶頂期に、政権中枢にいる政治家がこういう時代認識を示したことに驚いた。新鮮でもあった。よく覚えていよう。

B 藤波さんは、細かい政策よりも、骨太の理念を示す政治家だ。それも、肩肘張って主張を押し通すのではなく、「こう思うが、みんなはどうですか」とあくまでも謙虚。だから「ナミさんの話を聞いてみよう」と同僚議員が集まるのだろうか。

D いやいや、謙虚だけではない。結構、したたかな面もあると思う。名古屋の講演だって、一面では、中曽根政治をばっさりと一刀両断に切り捨てているわけだからね。

E それはともかく、藤波さんが政権の歴にあつたら、バブル崩壊後の日本の景色は随分、変わっていたと思う。「小日本主義」の浸透で、品格ある、世界の尊敬を集める日本に生まれ変わっていたのではないか。

◇ 文人政治家 ◇

A 藤波さんは政界きつての文化人だ。とくに俳句の実力は追隨を許さない。予算委員会で見つづって腕組みしている時は、たいへい、俳句をつくっていた。「つまらない議論を聞いていると眠くなるから、眠気ざましに一つくっているんだ」とよく言っていた。

D 今も思い出す藤波さんの一句がある。売上税をめぐって与野党が激しい攻防を繰り返していた頃だった。車で神田川を渡ったあと、藤波さんは寒々と一足踏れず、神田川と詠んで、「今の心境です」と付け加えた。国対委員長も大変だったけど、それを追いかける番記者も大変だった。いつまでも忘れないのは、その俳句が、私たちの心境でもあったからだと思う。

B 文学、思想、絵画などにも造詣が深かった。中曽根首相による後継指名の約一カ月前のことだったと思う。自民党の国対委員長室にいたら、藤波さんから「ちよつと行ってみませんか」と声をかけられた。行く先も分からず、ともかく車に同乗した。着いたのは北の丸公園の東京国立近代美術館だった。ちよつと画

家の杉山寧（三島由紀夫の岳父）の大規模な個展が開かれていた。デビュー作の「機」やギリシヤ神話に題材をとった「エウロペ」など、絵は分からない私でも、宗教的なまでの奥の深さが伝わってきた。一人の政治家と過ごした時に、深い境地を味わうことができた、という思い出は、私の中でずっと生き続けている。

C 文化人だが、歌はうまくなかったね。ひところ「壺染桂」をよく歌っていたけど、実に下手だった。しかし、精一杯、まじめに歌っていて、「藤波さんらしいなあ」と思ったことを覚えている。

A いや、その後は、歌のレパートリーも結構広がったし、なかなかうたったんだよ。めったに歌わないけど。

C 藤波さんの奥様、邦江さんにもご迷惑をおかけした。藤波さんが九段の議員宿舎に住んでいたころのこと。奥様も交えて懇談しているうちに、酒が回ってきて、いつしか藤波さんの前で、私は奥様とダンスを踊ってしまった。すっかり酩酊し、ほとんど覚えていなかったが、翌朝、同席していた他社の記者から頼みを教えられ、大あわてで、クーキを手土産に謝罪に再訪した。しかし、不在だったため、やむなく廊下のドアに謝罪文を貼り付け、ドアのノブにクーキをぶら下げて帰宅した。その謝罪文が他社の記者の目に触れ、首相官邸クイズ中に知れ渡ってしまった。上司からは「貴様は何をしたんだ」と詰問され、顔から火の出るような思いをした。藤波さん、奥様、ごめんなさい。

A 最後に一言。政治記者の世界には、「政治家を深く知ろうと思うなら、秘書や後援者をよく観察することだ」という言い伝えがある。どんな人たちに支えられているかをみれば、政治家の本当の姿が浮かび上がってくる、ということだ。藤波さんには、地元はもとより、政官界、経済界、労働界、マスコミなどに多くの素晴らしい支援者がいる。その素晴らしい顔触れと、数の多さをみれば、藤波孝生という政治家が稀有な存在であることが改めて分かるのではないか。政治記者に、これほど長く慕われる政治家も、最近はいないことかない。

(2003年7月15日)

「藤波孝生語録」

藤波さんが内閣官房長官から自民党国対委員長を務めた二年余りの間に、新聞、放送記者などマスコミとの日々の接触の中で数々の「藤波語録」が生まれた。

いずれの言葉も「政治家・藤波孝生」はもちろん、「人間・藤波孝生」を知る格好の材料である。当時の藤波番記者が印象に残った言葉を集めて発言の背景や心境を解説した「藤波孝生語録」を紹介する。

一燈を提げて 暗夜を行くに
暗夜を憂ふるなかれ

只一燈を頼め

(佐藤 一斎「言志四録」の中の「言志晩録」より)

売上税が挫折、政府、自民党は出直し臨時国会でワル優改組に全力を挙げた。野党の足並みは売上税反対の時ほどではなかったにせよ、減税の上積み問題とも絡んで予断を許さぬ情勢になった。

そんな時、藤波さんが漏らしたのがこの言葉。「一燈」はいかようにも解釈できよう。具体的な何かを指すのではなく、自分が今まで信じてきたもの、これまで築いてきた人間関係、あるいは自らの生き様自体、とさまざま考えられる。自分が今置かれている状況がいかに苦しいものであっても、いたずらに悲観することなく、己が信ずる道を進む、という強い決意ではなかったらうか。

(注1) 佐藤一斎は江戸時代の儒者。一斎は「朱子学と陽明学を弁別するよりも、その折衷のなかに孔孟の精神をうかがうことを求めた」(日本思想大系・佐藤一斎、大塩中斎より)といわれる。一斎は「学に志すの士は当に己を頼むべし人の熱に因るなかれ」と説き、自己を信じ、自己を頼み、一人立つことを強く主張した。

(注2) 中曾根前首相が座禅を組んだ全生庵の開祖、山岡鉄舟は「看脚下」という言葉を使ったというが、これも「一燈を頼め」とおなじ意。

ひねもす走りおおせたる者

夜のやすきに

つくことよけれ

(古代ローマの哲学者 セネカ)

これも藤波さんがよく口にした言葉。「人はだれでもいろんな時に自分を支えてくれる言葉を持つのだろうが、私にとつてはこのセネカの言葉がそうだ」と藤波さん自身が語る。

戦後の国会史上で特筆される売上税国会を運営してきた責任者の一人として、

最大限に力を振りしほってみたが、野党から攻め立てられるだけでなく、党内からも突きあげられという四面楚歌の苦しい状況の中で、このセネカの言葉はさぞ藤波さんの励みとなり、慰めとなったのであろう。

300 祭り

自民党が61年7月の衆参同日選挙に圧勝した直後から、藤波さんは「今に300祭りかとはじまるよ」としばしば懸念を口にしました。

党内には「300議席あれば何でも出来る」との幻想が生まれると同時に、大きくならずたゆめの内部のきしみが始まる。しかも責任の所在がはつきりしない無責任体制である。その一方で、野党側は「教」の重圧の前にことさら行動が硬直していく。こうした藤波さんの予言はやがて、中曽根首相の「知的水準」発言や日韓関係に関する藤尾文相発言、さらに売上税をめぐる自民党内の混乱など次々と具体的事実で証明されることになったのである。

この野党の硬直姿勢に関連して「横しぱり」という藤波造語が生まれた。売上税国会での野党各党の「結束」「相互監視」ぶりを表現した言葉で、国会担当記者の慣用語となり、新聞用語としても定着した。

朝 朝 日出 東
夜 夜 月 沈 西
雲 収 山 骨 露
雨 過 四 山 低

朝朝 日は東より出て
夜夜 月は西に沈む
雲収まって 山骨露われ
雨過ぎて 四山低し
(道元「正法眼藏」より)

売上税の処理をめぐる衆院議長の間停が出された 62年4月23日の数日前、

国対番記者と藤波さんとの間でこんなやりとりがあった。

記者「売上税法案の見通しは？」

藤波「霧が晴れて山骨(さんごつ)が露われてきた」

記者「うまく行きそうですか」

藤波「山骨には花も咲いてきましたよ」

ここでのキーワード「山骨」は、「本当の姿」あるいは「事物の本質」とでもいおうか。霧がかかっているのに、この山はこうだと予断を持ったり、過大に評価することを戒める気持ちが込められていたようだ。

北原白秋に「バラの木に バラの花咲く。なにごとの不思議なけれど」という詩があり、藤波さんも愛唱しているが、ここにも「山骨」と相通するものがある。

いずれも藤波さんを理解するキーワードのようだ。

(注)「道元は禅の中で一番難しい」という藤波さんは、西谷啓治著「正法眼藏講話」(筑摩書房)を愛読書の一つにしている。同書の中では、「山骨」の詩について、この詩が道元の思想に深く結び付いたものであることが解説されている。

莫 妄 想

(鎌倉時代の禅僧の言葉)

藤波さんは「山骨」と対のようにしてこの言葉を採用した。野党の対応についても、自民党内の動きにしても、あるいは総執選をめぐる各派の動向にしても「まず実際の動きがどうか、じっくり見つめることが大切。自分で勝手に思い込んでいてはますます真実から離れてしまう」との戒めである。ともすれば自分で組み立てたシナリオ通りに事態を解釈しがちな記者への鋭い警告でもあった。

(注)蒙古襲来の際、時の鎌倉幕府執権・北条時宗は元の使いをことごとく藁の口で切り捨て、今後はわが国に一指も触れさせないという決意を示したといわれる。その時宗は禅僧の「莫妄想」という言葉を引き、蒙古を恐れることも、自らを過信することもなく事に当たられと部下に命じたという。

私はあなたの言うことに賛成はしないが、
あなたがそれを言う権利は
死んでも擁護しよう

(フランスの思想家、ヴォルテール)

売上税の処理をめぐる衆院議長の調停の結果生まれた与野党税制改革協議会は、共産党抜きでスタートすることになった。もっぱら野党内の事情によるものではあったが、共産党は自民党に対しても国対委員長会談で抗議の申し入れをした。この時、共産党の論客、正藤成二氏はこのヴォルテールの言葉を引いて自民党側の対応を迫ってきたのだが、藤波さんはさすがに「私もその言葉には賛成です」と賛意を示すと同時に、次のような自らの体験を付け加えたのであった。

かつて選挙区の三重二区内で、原簿の建設候補地となった南島町に住民の反対運動が起きた。現地に入った藤波さんが住民たちに言ったのは「私は原簿に賛成するが、あなた方が反対する権利はどんなことがあっても守る」だった。

ヴォルテールの言葉は、ある意味で「藤波精神」そのものであるとよいのではないだろうか。

(注)ヴォルテールの言葉をめぐって興味深い歴史のエピソードがある。第二次世界大戦が勃発し、世界中に硝烟が立ち籠めていた1940年。アメリカの自由主義的週刊誌「ネーション」が創刊75周年を迎え、その特別号に時のルーズベルト大統領は祝福の言葉を寄せた。「ネーション」がその長い歴史の中でしばしば断固として少数意見を代表してきたことに敬意を払い、ヴォルテールのこの言葉を同誌に捧げたのであった。

これに対し同誌の主筆フリーダ・カーチウエイはこう述べた。「少数意見の表明をかくも衷心から支持する人を大統領に持つことは幸せである。しかし大統領は、いまや議会や地方に強力な拠点を置いたグループの攻撃にさらされている。彼らは民主的な変革を大統領が行うための昔からの武器（もろもろの自由権）を廃止しようとしているのである。こうした大統領の努力に対しわがネーションはこれまで多年にわたって行ってきたように己のすべての力を集中して闘うであらう」

自分の帳尻を合わすことのみを
考えていると、
自分の帳尻が合わなくなる。
他人の帳尻を考えよ

(とある建設業者)

これは哲学者や思想家の言葉ではない。藤波さんに言わせれば「談合屋の親方」と謂う一市井人のものだ。ある会合で一緒にになり、この言葉に深い感銘を受けたという。時々ようど総裁選政局真っ只中であつた。利害得失の渦まく政局の中で、ともすると自分中心の打算的な行動が党内で自立したが、他者の立場も配慮することが長い目で見れば自らの利にもつながらるといふ知世訓である。

これはまた、国会運営にも通ずるようだ。与党の数が多ければ多いほど、野党の言い分に耳を傾けることによって議会政治は健全なものになる。「数の論理」は民主主義の基本であり、永遠の真理であることに疑いをいれることはないであろう。しかし、この論理が成り立つには、コンセンサス作りという合意の過程を経て初めて少数者の納得を得ることが出来るという一面を忘れてはならない。

300議席を背景に「強行出来なくて何のための与党か」という強硬論が党内に根強い中で、藤波さんは野党との話し合いを重視しようとしただけに、「談合の親方」の言葉が他人事とは思えなかつたのかも知れない。

ラクダが針の穴を通ろうとしたら、
やせるしかない

衆院の定数は正をめぐる衆院議長の調停が出た61年5月8日、「30日の週間期間設定」により「衆参同日選挙は不可能になった」との見方が一斉に報道された。

この日、藤波さんは「総理は打ちひしがれている」と野党幹部に語り、記者にもがつくりと肩を落としてみせた。その日の深夜、杉並の永福の自宅を訪れた記者にも「今、総理に会ってきたが、ダブル選をやりたくはいかいう迷いから完全に

ふっきれた目をしている。ここにある阿修羅のように澄んだ目をしていた」と、かたわらの阿修羅像のパネルを指したのである。

これには百戦錬磨であるはずの記者も「100%ダゲルはなくなった」と信じ込まざるを得なかった。当時、ダゲル選に反対した宣訳総務会長などは「これでダゲルはラクダが針の穴を通るより難しくなった」と表現したほどだ。

ところが結果は事実が示す通りである。ダゲル選が決まったあと、藤波さんはこの同日選政局で6キロやせたという類のこけた顔をさすって「いやあ、ラクダが針の穴を通るにはやせるしかないんですよ」とサラリといっただけなのである。藤波さんの「したたかさ」が出た一幕といえそうだ。

そして政界のはやり言葉となった「死んだぶり」という言葉を残すことになった。

聖跡のコジキ

自民党総裁選が大詰めを迎えた62年10月19日。政局の焦点は中曽根首相の後継指名がだれに下されるか、に収斂しようとしていた。それだけに首相の意中の人物はだれか、をめぐってさまざまな憶測が乱れ飛んだ。そんな中で血相を変えて「藤波さん、総理は安倍さんに決めているんじゃないのですか」と迫る記者に、「そんなことを言っているのは、ピラミッドの周りにいるコジキの話ですよ」と一喝した。

中曽根首相は一切、自らの意向を漏らしてはいない。「首相側近」と称して「意中の人は安倍」などと言っているのは、聖の言葉ではなく、聖跡の前で觀光客にモノやカネをねだっているコジキの言葉に過ぎない、という藤波さんにしてはめずらしく過激な発言であった。それだけに記者へのインパクトは強烈で、竹下指名に落ち着いたあと「藤波さんに助けられた」との感謝が相次いだのは言うまでもない。中曽根側近の神髄がいかに発揮された出来事であった。

国対委員長約二年の間にも、数々の名句が生まれた。伊勢俳壇、神風館 20 世孝堂宗匠の作品であると同時に、これらの句は政治家藤波孝生の自らへの励ましや慰めの言葉であった。

葉牡丹の 東西南北 洞深し

踏まれても 土はいからず 露のとう

黄水仙 与野党合意 少しづつ

万歳の 皇居をつつむ 若葉風

奔放に リスが飛び交い 巴里涼し

明易の 障子明けたり 孫生まる

石蓆の花 かがやき八法 成立す

深雪晴れ 心ひきしめ 歩き出す

寒々と 一日晴れず 神田川

議事堂へ ゆるやかな坂 春隣

雲動く 彼岸桜の 花の上

花いばら 静かに揺れて 会期閉づ

こうのとりの 夏日に对ひ 哀しまず

原爆忌 街の随所に 千羽鶴

秋蟬や 分厚き本を 卓上に

木斛を 植えて文化の 日なりけり

雁の 山並み遥か 任終わる

「藤波すびりっと」編集委員会

5. 「ふじなみレポート」第二一五号から二一八号（最終号）

① 第二一五号 平成十四年七月

夏のバラ

庭の向日葵がうなだれて見えます、猛暑の日々が続きますがお元気でいらっしやいましょうか。

四十二日間延長して、今日が国会の最終日です。内閣不信任案等の駆け引きがあつて、いよいよ夏に入ります。政治と金の問題についていろんな人が槍玉に上がり、いろんな人がまた議席を失うという結果になりました。しかし振り返ってみると与党も野党もそれぞれの犠牲者が出たにもかかわらず、どうも自民党がよくないという結果だけが残っているような気がします。85%の成立というけれども、重要法案と称するもので成立をみたのは郵政公社化関連四法案や医療保険改正法案だけで有事法制関連法案も個人情報保護法案も成立しなかったというところでありますから、国会対策としては与党のマイナスポイントだけが目についたという感じが致します。もう少し景気回復のメドが立つてくるといいのですけれども、デフレ対策にしても税制改革にしても思い切った景気対策にはならないというところに問題があるような気が致します。私はよく学校の先生と議論をするのですけれども、「もう少し景気をよくしないとだめだ」と言われます。それは子供たちを見た時に「こういう人になりたい」とか「こういう仕事をしたい」とか「こういうことが好きだ」とかいうふうに夢を描くということではなれないと思うのですけれども、これだけ景気が悪くって自殺する人が年間三万人におよび、リストラが普通になるという状況の中では「子供たちの夢が生まれてこない」という話をよく耳に致します。単に経済政策の失敗ということだけではなく、日本の国の将来を非常に暗くするものです。更に頑張ることが必要です。

暑い中どうぞお元気で過ごして下さい。

夏バラに触れて眠れぬ夜を過ごす

七月三十一日正午 議員会館の自室にて

藤波孝生記

師走の言葉 冬のことば に訂正

立冬が過ぎて急に寒くなってきました、お元気でいらっしゃいますか。

今、十二月十三日の会期末に向けて五十七日間の臨時国会の真っ最中です。北朝鮮問題、イラク問題など対外的な問題が多い国会になっています。テロに対しては厳格に対処すべきだと思いますが、どこまでもアメリカのブッシュ大統領についていくというのではよくない。日本は平和愛好国家であるということを踏まえて行動していくべきだと思います。国内的には不良債権処理が問題の中心になっていますが、参議院の本会議で青木さんがいみじくも言ったように「君子豹変す」ということにごだわらないで、小泉さんは思い切ったデフレ対策を講ずべきだと私は思います。

秋の行事を進めました。熊野朝の会（会長 森岡峯氏）では三浦朱門先生が「私の教育論」を、東京政研（代表 泰道正年氏）は読売の橋本五郎さんに来てもらってお話を聞く。また、十一月四日の伊勢政研（代表 菱田光三氏）は竹中平蔵金融・経済財政政策担当大臣が来られて、講演をしてくれました。またその間を縫って、十月二十七日には神風館十九世窓月の生誕百年、母まさの生誕九十七年のお祭りをやらせていただきました。十一月一日はしまなみ会。十一月五日には伊勢神宮別宮の倭姫宮の八十年記念の御祭りがあり、神宮の北白川大宮司さんなどと参列を致しました。十二月は一日にぎくろ会。また、勢和多気から伊勢までの高速道路の四車線化の竣工式、熊野尾鷲道路の起工式などが行われます。良い年をお元気で迎え下さい。ご多祥をお祈り致します。

冬菊の楚々たるさまを鑑とす

十一月十八日 議員会館の自室にて 藤波孝生記

③ 二二七号 平成十五年七月

あじさいの咲くとき

紫陽花の花が雨に濡れて美しく輝いています。その後は大変ご無沙汰を申し上げておりますが、お元気でいらっしゃいますか。

一月の初めに出發した通常国会は六月十八日の会期末までに、提出予定法案の半分くらいしか成立していないことやイラク復興支援法案などを成立させるために七月二十八日までの四十日間の延長を議決しました。

新年度の予算案を初め、個人情報保護法案や有事立法三法案など我が国の安全保障政策にとって意義深い国会となりました。「備えあれば憂いなし」と首相自身が言っておられるように他国が攻めて来ても、見ているだけでは独立国としてどうしようもありません。来たら撃つぞという姿勢を示すことが大事だと思います。しかし、もし自衛隊をイラクへ派遣することになった場合、出掛けた隊員の生命に関するような事態が起これば日本国内の反応は異様なものとなることは必至です。調子に乗らないようにすることが大事なのだと思えます。

七月十九日（土）、午後二時から伊勢市倉田山の皇學館大學講堂で、春秋講演会（入場無料）を開催致します。梅原猛さん、佐々淳行さん、三浦朱門さんに次ぐ講演で、元駐米大使の大河原良雄さんに『日本の外交』を論じてもらいます。日米の新時代、レーガン・中曽根のロン・ヤス関係を演出した当時の駐米大使です。今日の最も大事なテーマだと確信をしております。是非、ご都合をつけてお下さい。

日増しに暑くなりますが、呉々もお元気で御活躍下さい、御多祥をお祈り致します。

青蘆や清き流れの五十鈴川

七月三日正午 議員会館の自室にて 藤波孝生記

長い間有難う

暑さ寒さも彼岸までと申しますが残暑はどうなりますか、お元気でいらっしゃいますでしょうか。

先日は、朝の会（藤波会）の総会にご出席を頂き有難うございました。席上のコメントで申し上げましたように、私は昭和三十八年に三重県議會議員として出發しまして以来、ちょうど四十年、今年七十歳で古希を迎えましたので、今度の総選挙には立候補しないで引退し、後継者には山本教和君が最適であると考えて、推薦致しました。しかし、自民党三重県連の選考委員会は、中選挙区時代の私と田村元さんの立場を考え、三ツ矢憲生君（国土交通省航空局監理部長）を公認するように決定致しました。早速、山本君からは「折角藤波代議士が、後継者として自分をご推薦頂きながら、私の非力のために志と違う事になって真に申し訳ありません。引き続き力強く政治活動を続けてまいる所存です。」という申し出がありました。ひよっとすると私が最近健康を害していることが仇になって少し決定を急ぎすぎ、かえって山本君を傷つけてしまったのではないかとこの事を反省しています。どうぞ、今後とも私の一時代下の若い世代の代表として、山本君や三ツ矢君をよろしくご指導下さいますよう、お願い申し上げます。

政局は臨時国会召集から解散総選挙へと向かう予定です。私はちょうど四十年の政治生活の間、昭和四十二年に衆議院初当選を果たして以来、文教部会長として教育の刷新に取り組むまでが十年、その後大平内閣の労働大臣、中曽根内閣の官房副長官、官房長官、自民党国会対策委員長、中曽根派事務総長、自民党安全保障調査会長などに至る十五年、平成元年にリクルート事件で在宅起訴されてから十五年の時間を加味して来ました。人生の暑い日も寒い日も、皆様の温かいご理解と力強いご支援を頂く事が出来ました。無実であるにも関わらず有罪に決定した件の執行猶予四年がこの十月末日で切れますので一件落着、全く自由な立場になります。今後どうするかはまだ決めておりませんが、健康第一にして養生に努めます。本当に有難うございました。厚く厚く御礼申し上げます。

街中に盆剣る音や守武忌

九月二十四日正午 伊勢市曾祿の自宅にて 藤波孝生記

6. 藤波孝生氏オーラルヒストリー関連資料一覧

左記に掲げるものは、オーラルヒストリー速記録とともに保管している資料である。これらはオーラルヒストリーを進行する中で、藤波氏より提供されたもの【A】、またはインタビューが収集した資料【B】である。

- ① 「藤波孝生氏オーラルヒストリー参考資料——中曾根内閣時代——」【A】
- ・「中曾根康弘」(『自民党つぎのドン』毎日新聞社 昭和五十五年)
 - ・「藤波孝生」(同上)
 - ・藤波孝生「行革国会を振り返って」(『新政経』四 新政経研究会 昭和五十七年)
 - ・藤波孝生「本音の政治」を指す中曾根政権」(『月曜会レポート』一一〇〇 国民政治研究会 昭和五十七年)
 - ・「あまから問答」第四十一回 台本(テレビ朝日 昭和五十八年一月十四日録画)
 - ・「与野党連合『中曾根 併壇』内閣』の味方です」(座談会記録 出席者：中曾根康弘・佐々木良作・宇野宗佑・藤波孝生・伊藤郁男・大野雜草子 『正論』昭和五十七年十一月号)
 - ・「全力投球——藤波内閣官房長官」(藤波会発行 昭和五十九年)
 - ・「国会討論会『延長国会の焦点』」(NHK総合テレビ速記 昭和六十一年十一月三十日)
- ② 『労働行政執務資料』(労働大臣 藤波孝生) 【A】
- ③ 『労働大臣事務引継書』(昭和五十四年十一月九日) 【A】
- ④ 『政務次官引継事項』(昭和四十九年十一月 文部省) 【A】
- ⑤ 大平正芳記念館所蔵 藤波孝生氏インタビュー(昭和五十六年七月十五日 五十五分間 インタビュー不明) 【B】

本冊子は平成十四年十月六日の第一回から平成十六年十月七日の第十四回まで行われた藤波孝生氏のオーラルヒストリーの記録である。私はその前年来近代史料情報センターといったものを構想して、木田宏氏や中曽根元総理を通じて藤波氏にお目にかかったが、その後十四年に入って再度お目にかかりインタビューを申し入れ、ご了解を得たのは、八月十四日であった。

インタビューは有馬学・小池聖一・佐道明広・武田知己それに私、最後の方で川越美穂も加わった。また藤波氏の秘書の平松大輔氏が毎回参加して下さって、藤波氏の発言に適切なフォローをして下さった。最初は武田知己氏、川越美穂氏が略歴を作ってくれ、第四回目からは武田知己氏が毎回質問項目を作成して下さった。テープ起しは丹羽清隆氏が担当した。場所は政策研究大学院大学の虎ノ門の政策研究プロジェクトセンターの会議室、最後の一回のみは伊勢市の藤波邸で行い、その際には、奥様の邦江氏、弟君の俊也氏が参加して助けて下さった。

このオーラルヒストリーが開始されたとき、藤波氏はリクルート事件で有罪判決を受け、その執行猶予中であった。当初から悪かった糖尿病が回が進むに従って悪化され、平成十五年の執行猶予切れを前に行われた衆議院議員総選挙に不出馬を表明された。その後伊勢に引き込まれた事もあり、最終回を行うまで、約一年の間があいたが、体調の悪い中、最終回を行いきちんと締めを行って下さった。

第一回では、伊勢の神官を祖先とする和菓子屋の長男としてのお生まれから、中学での野球少年時代、また父の跡を引き継いだ俳人として、家督を継ぐ約束での早稲田大学入学、そして雄弁会入会、大学生活を終えて帰郷し和菓子屋を継ぎながら、一方で青年団運動をし、その間に結婚、県議会議員にトップ当選、一期の途中で弟の俊也氏に家業を継いで貰って、浜地文平引退の跡を受けて衆議院総選挙に出馬して当選、森清派（後園田派、中曽根派）に属して文教委員の一人（自民党の文教部会にも）として議員生活を始め、やがて親しくなる竹下登についてという所までをお話下さった。十一月十二日の第二回では、少年時代、大学時代の想い出を詳しく補足された後、新人代議士時代の神道政治連盟のこと、科学技術政務次官、本会議進行係、党政調会水産部会、文部政務次官のこと、「新風館」二十世宗匠を継承したこと、大平正芳に感銘を受けたこと、河野洋平氏と政治工学研究所を作ったこと、中曽根派のことなどを聞きした。

続く十二月十日の第三回では、私学助成の成立までの苦勞のこと、それを推進した文教族のこと、学校主任制度のこと、政

治工学研究所の中から河野洋平氏を中心に新自由クラブが結成されたがそれに参加しなかったこと、中曽根派内部のこと、新自由クラブ不参加の政治工学研究所参加者を中心に派閥横断の新生協議会―新生クラブを組織したこと、昭和五十二年から「ふじなみレポート」を月一回発行し始めたことなどをお話し下さった。平成十五年に入って、一月八日の第四回では、三木・福田内閣期のお話を、新生クラブのお話を中心に、党の近代化、派閥問題、ご自分の選挙基盤、新聞記者との関係、党県連、四六答申、大平・福田の対抗、大平内閣での政調副会長などについてお話を伺った。

二月二十一日の第五回では、引き続き新生クラブのこと、大平正芳、牛尾治朗との関係、都知事選で牛尾を担ごうとしたこと、ソ・中との関係、大平・福田四十日抗争の祭の中曽根派、昭和五十四年 第二次大平内閣での労働大臣に就任の事などのお話があった。四月八日の第六回では、労働大臣として労働組合の幹部をはじめ各方面に人間関係を拡大していったこと、その中での新聞記者との関係、シルバー人材センターを作ったこと、昭和五十五年総選挙最中に大平首相の急死で鈴木内閣が成立した際の状況や党の副幹事長としての行動、伊東外務大臣の辞職問題、中曽根行管庁長官の行革と土光氏のこと、憲法改正と靖国神社問題について、昭和五十六年中曽根売り込みの訪米についてお話し下さった。続く第七回（五月七日）では、冒頭に政策研究大学院大学（政策研究院）のこと、そして、副幹事長時代の行革問題から官僚主義のこと、更に藤波氏の中学校義務教育廃止論の提唱のこと、中曽根内閣樹立のための尽力、中曽根内閣の組閣と後藤田官房長官の下での官房副長官への就任、国会討論会への毎回出席、中曽根首相の訪米への随行の際のこと、その前の韓国訪問や中川一郎の自殺問題、安岡正篤との関係などを話して下さった。続く六月三日の第八回では、官房副長官の時代の「文化と教育に関する懇談会」（後の教育臨調に続く）を中心に総理大臣の私的諮問委員会のこと、田中元総理のロッキード判決をめぐる問題、行革審や国鉄民営化問題、中曽根総理とのASEAN訪問、続いてのウイリアムバーク・サミット、各国首脳の日、昭和五十八年十二月の総選挙、二階堂内閣論と第二次中曽根内閣の成立、そして官房長官への就任のことなどを話して下さった。

七月二日の第九回と八月五日の第十回では、官房長官時代のお話であった。副長官時代から五年間NHKの国会討論会に出席したこと、靖国神社参拜のこと、富塚氏との関係、中曽根総裁再選のことの他色々話題になったが、健康状態のこともあって、短いお答えが多かった。特に官房機密費問題などでは記憶が薄れて居られるのかとぼけて居られるのか禅問答のようになった。九月十八日の第十一回と十月十六日の第十二回は、大変にお元気で、第十一回では御自身の政治哲学についてのお話があり、この二回は官房長官時代から自民党国対委員長時代の諸問題（売上税、防衛費一％枠突破、中曽根首相のソ連行、アメリカでのサミットでの問題、貿易摩擦問題、教育改革、国鉄民営化、長寿社会対策、靖国神社参拜、天皇在位六十年式典、衆参同時選挙と中曽根総裁の任期一年延長、新自由クラブの解党、皇室問題懇話会など）についての質問にお答えいただいた。

十一月十二日の第十三回（この時は議員を辞められた後で、伊勢からおいで下さった）では、国対委員長時代の特に売上税

問題を中心に、派閥の世代交代、中曾根内閣から竹下内閣への移行、そして中曾根派の事務総長としての活動、安全保障調査会会長としての活動、そしてリクルート事件への連座についてお話を伺った。この回の終ったときに次回を十二月十八日と決めて、その日おいで下さったが、到底お話しをなされる状態ではないということで、延期とした。その後入院され、私としては、十三回までを纏めて冊子にするつもりでいた。しかし藤波氏はどうしても最終回を実現したいというお気持ちがあり、約一年後の平成十六年十月七日に伊勢のご自宅で行うことにした。その第十四回では、リクルート事件の公判のこと、政治家としての四十年を振り返っての感想などをお話し下さった。ただ声を出されるのも苦しいという状況で、お話しされたいことがあるのに十分にお話しにならないもどかしさを聞き手の方でも強く感じるという状態であった。聞き取りもかなり難しく、奥様、弟さん、そして平松氏の助けをかりてかろうじて録音、文字化することが出来た。とにかく予定されていた最終回を終えられたということで深くご安心の御様子であった。この間事情は、速記起し担当者が注記している。なおこの間、平成十五年七月に、有馬学、小池聖一、佐道明広、武田知己、川越美穂、石田雅春の諸氏と伊勢に伺い、事務所にあった検察から押収されて戻ってきた段ボール四十箱をお預かりし、その後自宅から押収されたもの約十箱、そして議員をお辞めになって議員会館を閉められたときに、そこにあった書類をお預かりして、現在それを整理中である。お話の内容を補充するものになると確信している。

苦しい中をお話し下さった藤波氏、一緒に聞き手になって下さった上記諸氏、速記起しのベテラン丹羽清隆氏に厚くお礼を申し上げる。また冊子化にあたって、川越美穂氏が担当して下さいました。そして元秘書の平松大輔氏が協力して下さいました。ご兩人に、さらに事務的に支えて下さった三條薫さん他事務局の皆さんにも感謝の意を表する次第である。

二〇〇五年一月三十一日

政策研究大学院大学教授

伊藤 隆

平成 16 年度 文部科学省研究費補助金〔特別推進研究 (COE)〕
研究成果報告書〔課題番号 12CE2002〕
発行：2005年 3 月 30日 《無断転載禁》

政策研究大学院大学 (政策研究院)
C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町 2-2
Tel : 03(3341)0458 Fax : (3341)0446